連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 13 No. 2

第50号

September 2022

対人援助学会

No.50　M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-016
障害者福祉援助論	千葉　晃央	017-020
臨床社会学の方法（38）	中村　正	021-029
人を育てる会社の社長が、今考えていること	団　遊	030-035
コミュニティの中で（1）	藤　信子	036-038
カウンセリングのお作法（32）	中島　弘美	039-041
エア絵本　－ビジュアル系子ども・家族の理解と支援－	岡田　隆介	042-051
晩年Ｄ・Ａ・Ｎ通信	団　士郎	052-069
社会的養護の新展開（19）	浦田　雅夫	070-071
幼稚園の現場から（50）	鶴谷　主一	072-076
福祉系対人援助職養成の現場から（50）	西川　友理	077-082
ああ、相談業務（10）	河岸　由里子	083-087
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	088-090
ドラマセラピーの実践・研究・手法（9）	尾上　明代	091-109
きもちは言葉をさがしている（47）	水野　スウ	110-115
路上生活者の個人史（5）	竹中　尚文	116-118
男は痛い！（44）	國友　万裕	119-125
役場の対人援助論（42）	岡崎　正明	126-128
臨床のきれはし（18）	浅田　英輔	129-131
発達検査と対人援助学（9）	大谷　多加志	132-135
対人援助点描（28）	小林　茂	136-137
講演会＆ライブな日々（32）	古川　秀明	138-141
立場が変わると何かが見える（2）	坂口　伊都	142-147
周辺からの記憶　－東日本大震災家族応援プロジェクト－（36）	村本　邦子	148-171
精神科医の思うこと（26）	松村　奈奈子	172-174
馬渡の眼	馬渡　徳子	175
東成区の昭和　やぶにらみ日記	柳　たかを	176-183
心理コーディネーターになるために	山下　桂永子	184-186
そうだ、猫に聞いてみよう（27）	小池　英梨子	187-194
先人の知恵から（37）	河岸　由里子	195-201
うたとかたりの対人援助学（23）	鵜野　祐介	202-205
ああ結婚（23）	黒田　長宏	206-208

PBL の風と土（22）	山口　洋典	209-214
接骨院に心理学を入れてみた（21）	寺田　弘志	215-221
現代社会を『関係性』という観点から考える（21）	三浦　恵子	222-226
保育と社会福祉を漫画で学ぶ（17）	迫　共	227-231
「余地」―相談業務を楽しむ方法―（20）	杉江　太朗	232-236
統合失調症を患う母とともに生きる子ども	松岡　園子	237-240
生体肝移植ドナーをめぐる物語（18）	一宮　茂子	241-249
こころ日記『ぼちぼち』partⅢ	脇野　千恵	250-251
フリースクールでの SW 実践を考える（4）	高名　祐美	252
原田牧場 Note（10）	原田　希	253-254
みちくさ言語療法（7）	工藤　芳幸	255-256
かけだ詩（10）	川畑　隆	257-261
応援、母ちゃん（10）	玉村　文	262-265
HITOKOMART（10）	篠原ユキオ	266-269
キャリアと文化の心理学（9）	土元　哲平	270-275
新潟水俣病概論Ⅱ（症候と認定基準の変遷）	本間　毅	276-296
川下の風景（7）	米津　達也	297-298
一語一絵（7）	畑中　美穂	299-301
福祉教育への挑戦（7）	高井　裕二	302-304
対人援助をリブートするこの一冊（7）	渡辺　修宏　他	305-309
島根の中山間地から Work as Life（6）	野中　浩一	310-314
かぞくのはなし（4）	きむらあきこ	315-316
連載 2 回目　ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（2）	高木　久美子	317-320
新連載　先生のための 16 のことば（1）	原田　孝	321-322
新連載　こかげのにちじょう（1）	鳴海　明敏	323-324
新連載　私はここにいる　−現象学としての書道−	櫻井　育子	325-326
対人援助学＆心理学の縦横無尽（34）最終回	サトウタツヤ	327-335
対人援助学マガジントークライブ報告＆読書会告知	編集部	336-337
編集後記	編集長＆編集員	338-339

ハチドリの器 33

見野 大介

Mino Daisuke





左上：削り仕上げ後の波紋長皿
左下：ロクロ成形した器たち
右上：施釉後の器たち
右下：素焼き後の器たち





第50号

執筆者@短信

櫻井　育子　新連載

「対人援助学マガジン」、とても大好きで読み続け、まさかまさか自分が連載を始められるとは思わず、嬉しくて小躍りして叫びながら走り出したい気持ちでいっぱいです。

書きたいことといろいろの中から、「書道」というテーマを選びました。「書道」が「対人援助」であること、「わたし」が「かかわる」ということ、などなど、ことばにできることやできないこと、まとめていけたらいいなあ、と思います。面白がっていただけたら幸いです。どうぞよろしくお願いします。

わたしはここにいる
P325～

原田　孝　新連載

対人援助学会には新参者です。宜しくお願いいたします。マガジンに連載をということで、考えてみましたが、教育畑出身ですので、先生方に役に立つお話にしました。

私自身、先生方の研修をする機会だが多く、その時によくお話していることをピックアップしてみます。どうぞ、お楽しみください。

先生のための 16 のことば
P３２１～

鳴海　明敏　新連載

県庁職員を定年退職した翌月から開設された、情緒障害児短期治療施設（現在は、児童心理治療施設）の園長を引き受けてから、13年目に入っています。その頃にも編集長から誘われたのですが、とても書き続ける自信もなく、そもそも新設施設の運営については、皆目見当もつかず、全く手探り状態だったこともあってお断りをしました。

先日、改めて誘われたのですが、今回はなんとか書き続けるという最低限の条件だけはクリヤできそうだという気になったので、お引き受けすることにました。

開設当初の、変な気負いはさすがになくなっているので、割とたんたんと書くことが出来そうな気がしたのです。

学園の各部屋には、それぞれ愛称がつけられています。職員室は「ほしぞら」、事務室は「あさひ」、医務室は「はるかぜ」、相談室は「こなゆき」という具合です。二階の子どもたちの居室には、オリオン、シリウス、タイタンなどの名前がついています。この施設の運営を決意し、施設を建て私を園長に呼んでくれた、前の理事長の夢や希望が込められているような気がしています。園長室は「こかげ」となっています。

ということでサブタイトルは「こかげのにちじょう」とします。園長室から見える子どもたちや職員の活動、児相などの関係機関についてのことなど、こんなことがあったあんなことがあったという、オチのない話を日記風に牛の涎のように書いていきたいと思っています。良かったらお付き合いください。

児童心理治療施設の園長室から
～こかげのにちじょう～
P３２３～



高木　久美子

前号で初投稿させていただき、おかげさまでうれしい反響がたくさんありました！投稿をきっかけに新たな協働の提案を受けたりして、ライフワークの意思疎通支援の活動に大きな展開を見ることができました。編集委員の方が考えてくださったタイトルロゴもとても素敵で気に入っています。ありがとうございます！

しかしその後の3ヶ月は、一生の内でこんなに早い3ヶ月は初めてというぐらい早く過ぎました。次号の締切がすぐ来るくるのですね。あらためて、50号となるこのマガジンに連載執筆を続けておられる方々の偉大さを想っております。がんばるぞー。

PS.今回の投稿に登場する友人、マギーのコンサートをプロデュース中です♪ご一緒しましょのホームページでご開催の案内中。お近くの方、ぜひ遊びにいらしてください！

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！
P317～

きむら　あきこ

この夏の出来事。

その1　約 30 年ぶりに、和太鼓をたたきました。三宅島太鼓という演目でした。とても楽しかったです。

その2　何年ぶりでしょうか。発熱しました。コロナ禍の発熱がいかに診察につながらないかを実感しました。

健康第一、静かな毎日がとても有難いことだと思っています。

かぞくのはなし
P315～

原田　希

あきらめていた光回線の敷設。コロナで急に増えたオンラインに対応すべく急転直下予算がついて、僻地の我が家もブロードバンドが整いました。こちらの原稿も、これまではタブレットでデータ量を気にしながら一枚ずつ送っていたのが、一瞬で複数枚ビュンと送れます。都会では当たり前のことが、我々には夢のようです。地域の仲間たちと、コロナの影響について語ることがありますが「考えてみればいいことばっかりだね、光はくるし、通常では参加できなかったライブや講習会もオンラインしてくれるし、お取り寄せもなんでも叶うしさ、最高！」という声多数です。田舎はいい所だけど、不便。という通説、皮肉にもコロナのおかげでなくなりつつあるようです。

原田牧場Note
P253～

野中　浩一

今回のテーマは「幕を閉じる」です。一方で生活上でも仕事上でも、幕を閉じられないことだらけだと気づかされます。会計事務所さんと契約しているクラウドの会計ソフト、電子機器会社さんと契約しているネットワークとセキュリティ、銀行さんと契約している振り込みシステムなど、サブスクの網の目に見事に組み込まれています。

シンプルに生活するために田舎に移住したつもりが、案外そうでもないという現状。けれども裏を返せば多くの人や会社に支えてもらいながら生活や仕事ができているということでもあり。繋がりとしがらみは表裏一体だなあと感じる今日この頃です。

「島根の中山間地から Work as Life」
P310～

畑中美穂

ある夕方、ツクツクボウシが鳴く練習をしていた。はじめ、「鳥の音（声、ではなく）かな？」と思ったほど。やっと、初めて声を出したぐらいの未熟さ。少し間を置いて、例のフレーズらしきものの初めから鳴く。と、そのうちに、拙いながらも「つく・つく、ほー」と鳴けるようになった。よかった。ヒトゴトながらも、ほっとしてその場を離れた。

夏の間、蝉の声はよく、瞑想のときのアンカーになる。朝はいつも決まった時間に一斉に鳴きはじめるので、自然に仕組まれた時計のようである。以前 Bali で滞在したヴィラのオーナーが、「夕方の 7 時 10 分前になったら鳴き始めるよ」と言っていたら本当にそのとおりだった。人には感知できない何かがあるのだろうか。その蝉の声も、間もなく聞こえなくなる。3 年ぶりの五山の送り火は美しかったと聞いた。今年の夏も、過ぎてゆくのだなぁ、と思う。

一語一絵
P299～

渡辺修宏

今回から第2章がはじまります。もしかしたらご批判やご叱責を賜ってしまうような内容かもしれませんが、そこはご一笑いただき、徒然なるままに（恥を）かきいそぐなりけり…。

対人援助実践をリブートする
この一冊
P305～

米津達也

ケアマネージャー受験対策講座、というやったこともないことに挑戦している。10 年振りぐらいにワークブックを開いて、日々資料作りに勤しむ。来年があれば、そっちの方が上手く喋れるだろうと思うが、熱量は今年の方が上だろうな、という熱い夏。

川下の風景
P297～

高井裕二

今年は大学も対面授業が再開され、大学生たちも友達と会えて嬉しそうです。オンラインでは教員と学生の雑談も生まれにくいですし、私としても学生との関係が作りやすく、対面授業がありがたいです。

そんな中、授業の休憩時間に大学生から「先生、若い頃はモテモテだったでしょうね」と言われました。恐らく褒めてくれたのでしょうが、「若い頃は」というフレーズから、私も大学を卒業して大分年数が経ったなぁとしみじみ思いました。

素敵な大人を目指して、これからも身だしなみ等整えていきたいと思います。

福祉教育への挑戦
P302～

本間　毅

心変わり

椿忠雄氏は、大正 10 年東京に生まれ、終戦の年に東京大学医学部を卒業した。亜急性脊髄視神経症、いわゆるスモン病の原因が、消化器疾患によく使われていた薬剤キノホルムであることを突き止めたことでも有名である。

昭和 40 年 1 月、椿がまだ東京大学助教授の頃、新潟大学に神経内科を開設する準備で訪れた際、脳外科の植木教授に入院患者の診断について相談されたことから、雪崩を打つようにさまざまな出来事が起こった。椿は、類い希な見識と高潔な人柄を併せ持ち、我らが齋藤恒も心服していた。海外のメチル水銀中毒症の報告に拘り、厳格な水俣病の診断と認定を続けていた熊本とは異なり、典型例ではなくとも、他の疾患を合併している患者でも水俣病を否定するものではないとして患者の発掘に努め、判定が難しい運動失調を客観的に評価する機器の開発にも取り組んだ。

しかし昭和 47 年を境に、椿ら「審査会」による水俣病の認定率が低下した。その理由を糺した齋藤に、それまで調査や補償の邪魔ばかりしていた国と昭和電工の支払い能力を危惧する椿は返答に窮し黙りこくってしまった。これを椿の変節、あるいは背信、さらに裏切りと呼ぶ人がいる。

金や名誉に心を動かされない、純粋で他者を思いやるものが、暗闇に灯りをともしてみたら、黒い服を頭から被り、うずくまって苦しむ人々がいる。せめて、温かい食べ物と柔らかな寝床だけでもと思い、灯りをあてるほど、さらに多くの人に気付く。こんなことなら灯りをともさなければよかった。「学生には人格の涵養が必要である」と説き、生涯努力を続けたファウスト椿は、自らにメフィストフェレスの刃を向けたのだろうか。

新潟水俣病概論　Ⅱ
（症候と認定基準の変遷）
P276～



土元　哲平

最近もっとも衝撃を受けたのは「塔本シスコ展」です。シスコさんの絵は、他のどんなカテゴリにも回収されないようなユニークさがある一方で、「芸術」であったこと、つまり、素朴な落書きなどとは質的に異なっていること、それが私にとっては大きな魅力でした。この経験を忘れないうちにと、今回執筆しましたので、ご笑覧いただけると幸いです。

キャリアと文化の心理学
P270～

玉村　文

毎日暑い日々が続いていますね。日傘デビューをしました。そう、子ども連れだと

抱っこをしたりベビーカーを使用していると日傘を持てないのです。一人で行動できるようになって、日傘が使えると感動でした。

50 号では、子どもとの日常を 4 コマで描いてみました。子どもが成長しコミュニケーションを取れるようになってくると、子どもとのやりとりが面白くて面白くて。なのに、どんどん忘れていくのです。記憶に定着するように、できるだけエピソードを話したりしているのですが、こうやって 4 コマや文章にしておくのが一番忘れないようです。

応援　母ちゃん！
P262～

川畑　隆

ずいぶん久しぶりの鳥羽の海。海辺の店で頼んだ海鮮丼の活きた車エビが、醤油をかけた途端に宙を飛んだ。「エビがぶっとんで、おじいちゃんもぶっとんで、イスもぶっとんだ」…小 1 の孫がおかしくてたまらない様子で繰り返す。

伊勢シーパラダイスはピカイチ。ふつうの水族館とは違って、あの大きな図体のセイウチの絨毯みたいな背中や、茹でる前のパスタみたいなヒゲに触ったし、カワウソと何度も握手した。孫に大うけだったのはドクターフィッシュ。並んで腹這いになって水槽に手を突っ込んでいると、確実に私の手にフィッシュは多く食いつく。そりゃ食べてくれる古い角質はおじいちゃんの手のほうに多いわけで、それでも孫は気に入ったみたい。「もう帰るよ」に「うん」と答えるのを決心するまで、何度手をつけたことか。

赤福本店では感染対策もありゆっくり座ることができた。古い座敷と川風と風鈴の音の真ん中で、懐かしい贅沢な時間を過ごせた。

そんなとってもよかった小旅行を演出してくれたのは、ほかに、プリプリの刺身のでかい鳥羽の「みなと食堂」、そしてなんといっても素敵な「ホテル アルティア 鳥羽」。

かけだ詩
P257～



高名祐美

昨日の夜、私が事務局を担っている自主勉強会の打ち合わせをオンライで行った。事務局担当は 5 名で、打ち合わせに入る前にひとりずつ近況報告をしてもらう。今回メンバーの口から多く出たのは「大変だ」という言葉。「とにかく大変で･･･」「大変なことになっている」「大変な毎日です」。病院勤務の MSW からは、退院支援がすすまないと。そこへ次々に新しい患者が入院されてくる。感染予防の観点から、在宅サービスの利用が制限される。施設入所や転院も制限されるために退院支援がすすまないと。個人病院に併設されている居宅のケアマネからは、「2 年ぶりの祭りのあとが大変でした。受診問い合わせの電話がなりやまなくて。ケアマネですけど、電話対応にまわっていました」と。「大変」はいつおさまるのだろう。自分にできることは何があるのだろう。メンバーの話を聴きながら思った。行動制限のない夏がもうすぐ終わろうとしている。

フリースクールでのSW実践を考える
P252

岡田隆介

事例検討の引っ張り過ぎという気がしないでもないが、「ビジュアル化」が目的ということで続けてみた。それにしてもイラストいじりの楽しいこと、もはや生きがいの一つになっている。
テーマを変えて、あと少し頑張ろう。

エア絵本
ビジュアル系子ども･家族の理解と支援
P42～

一宮　茂子

【中国の鬼城】

1990 年代末から 2000 年代にかけて改革開放後の高度経済成長により中国各地で地域開発が進みました。とくに住宅地開発は急拡大して高層住宅が続々と建てられ「史上最大のバブル」となりました。その後の地域開発が投資と運営事業の失敗により高層住宅が完成しないまま放置され、購入者が入居する前に鬼城（ゴーストタウン）になった地域が多く見られました。彼らの多くは農民工で、多額の借金を背負ったまま電気も水もない鬼城で暮らしています。今や経済大国となった中国は大都市で優雅に暮らす人たちがいる一方で、こんなにも惨めな生活をしている人たちがいて、経済格差の大きさにあらためて驚かされました。家の購入は一生に一度の大きな買い物です。私は参考図書を読み込みあらゆる準備をして実際に購入するまで 1 年くらいかかりました。当時の私は若くて気力も体力も資金力もありましたので購入できました。このような結果に今は感謝しています。

生体肝移植ドナーをめぐる物語
P241～

松岡　園子

今回のテーマは「手紙」でしたが、これまでの手紙の何がそんなに私の心を元気づけてくれたのだろうと、少し考察してみました。

大きく分けると「書いてくれた人から見た自分の姿」、もう1つは、「自分のしてきたことに対するその人の気持ち」の 2 つが言葉になったものを読んだ時、私の心は震えるのだと気づきました。

最近もらった手紙では、ダンスの先生からステージの後にもらったものがあります。先生は毎回ステージが終わるごとに、全員に手紙を書かれています。私は今年、仕事が忙しすぎて、夏のステージに向けての合同練習になかなか参加ができませんでした。それでも出たいと、動画を繰り返し見て、家で練習していることを、先生もメンバーも応援してくださっていました。ステージが終わってからの手紙には、「仕事が忙しい中の練習、大変でしたね。でもそのちゃんの頑張り、嬉しかったです」と書かれていました。この先生の「嬉しかった」にまた元気をもらいました。普段は意識することがありませんが、自分の姿やしてきたことが相手に映ったもの、それを言葉で返されると、心に響いたり、新たに気づくことがあるのだなと思います。

統合失調症を患う母とともに
生きる子ども
P237～

杉江　太朗

この前、ア●ゾンプライムに登録をしようとしたところ、通常の仕様ではなく、やたらとア●ゾンスチューデント（学生用）を勧められました。通常の仕様で登録が出来たらそれでよいですし、何なら学生でもなんでもありません。その変更方法がわからず、ネットで調べていると、購入履歴から学生と判断されている可能性が高いとのことでした。最近の購入履歴は、漫画に本に、浄水器のカートリッジ、そしてコーヒー、すごろく・・・とこれだけで学生と判断されることに疑問を抱きつつ、まぁグローブとバッドを買ったからと言ってプロ野球選手と判断されるわけもないだろうからとか、どうでも良いことを考えながら登録をしました。言い訳の方法とか国民の追求を逸らす方法とかいう本を買っていたら政治家とでも判断されたのでしょうか。謎は深まるばかり。

「余地」−相談業務を楽しむ方法−
P232～

浅田　英輔

今年の夏は雨がすごかった。「あっつーい！夏だなぁ！！」という日がとても少なかったように思う。久しぶりのねぶた祭りの間はなんとか持ちこたえたが、お盆前からず一っと雨である。大雨からの被害もすごかった。コロナの感染増加に大雨被害が重なり、大変である。4 月には鳥インフルだったし、行政はここ3年、「災害対応」ばかりやっている気がする。R3 採用の保健師さんなんて、コロナ対応が仕事だと思ってしまうのではないか。Covid−19 は、何がしたいのだろうか。次々に感染して、分身を増やしたいのか？増えて、変異して、広まって。種として（種とは言わないかもしれないが）生きながらえるのが目的なのだろうか。生きながらえるのに人を苦しめたら、排除されてしまうだろうに。人体に害を与えずにひっそり暮らした方が生存戦略としてはよいのではないだろうか。Covid よ、少し進化したまえ。

臨床のきれはし
P129～

三浦　恵子

当方は持病ゆえに装具をつけて活動しています。そうした装具を「弱者」「助けを求める者」の記号として解釈する立場に立つ人が一定数いることは了解していますし、それを巡る論争なども目にしたことがあります。

しかし私はあくまで療養の必要上医師の指示によりそれらを装着しているにすぎないのであり、実際にそれらの装具が生活の質を上げ公務に取り組む際の効率化につながっていることは否めないので、そうした議論とは距離を置きたいと考えていました。

しかし、今回思わぬ形で装具をつけることが他者にどういった印象を与えるのかと、私自身が受け止めてしまうような出来事があり、自分が自分の疾病や装具を着用することを受容できていないことに何よりも動揺しました。しかしその日の帰路、公共交通機関内で転倒しあわや事故になりかけたとき、差し伸べられた幾人もの手によって事故を免れるという出来事がありました。

「装具」という記号を巡り様々に考えさせられた一日でしたが、今は、差し伸べられた手の温もり、そしてそのリアリティを信じようと思っています。

コロナ禍の中、様々な立場の人が、互いのことを思いやりながら生活できればと強く願っています。

更生保護護官署職員
（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

現代社会を『関係性』という
観点から考える
P222～

迫　共

コロナの波をかいくぐり、7月に早めの夏休みを取って九州東側をめぐる旅行に行ってきました。広島⇒大分⇒宮崎⇒熊本⇒広島。新幹線が通っていないので不便ですが、特急電車と高速バスを使っての移動は面白かったです。

大分では別府の明礬温泉へ。露天風呂を独占して満喫しました。

宮崎では神社めぐりと高千穂峡へ。筋肉痛になりながら素晴らしい景色を堪能しました。

熊本では大雨の影響があり、早めに帰路につきましたが、熊本城と地酒の角打ちを楽しみました。

宮崎県立美術館のカフェを、就労支援 A 型事業所がされていました。手ごろなお値段でしっかりしたランチを頂けて大満足。公立施設のカフェ等はすべからく就労支援に委託すればいいと思った次第です。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ
P227～



黒田　長宏

Facebook とか、line 以来、アレクサとかも出てきたが、あれよあれよとパソコンからスマホからタブレットからと、衝撃的なインターネットの新しいのがどんどん出まくっていた時期より落ち着いてしまったかなと末端ユーザーとしては思っていたものの、仮想現実についてはあまり調べていなかったが、ふと、スマホをセットしてVR体験をするという物は数千円で購入できることにようやく気付いた。そしていくつかアプリを入れてやってみたが、絵ではあるが、海中を魚などが泳いでいるのが一番没入できた。時間や場所を忘れるというか勘違いする瞬間があったように思う。だが、（結）婚難救助隊（詳細はずうっと本文で訴え続けていること）としては、男性にとっては女性、女性にとっては男性が、例えば砂浜を水着で走り回ったり、それが絵だったり、ピンク色だったり紫色だったりするようなアプリがたくさんあるようだが、そうした仮想現実で満たされてしまっては、デーブ・スペクターさんならば、仮装現実とか言ってしまいそうな危うさを感ずる。恋は幻想で富士山も遠くから観ると美しいが近づくとゴミが散乱しているとかいないとか。田舎の道端も同様でどうしてクルマからこんなにも、ペットボトルやら空き缶やら投げ捨てていくのか、悲しくなるくらいである。おかげでゴミ拾い行事があるくらいだ。55歳になった私はいまだ富士山に登ったことはないが、登りたいとも思わない。登ろうと思えば仮想現実がある。アプリが無かった時代でも実は、一富士、二鷹、三なすびとかいう仮想があり、私には夢がある。私の人生に於いても女性とは夢だったのだ

ろうか。「徹子の部屋」で同い年の南野陽子ぜよが出てきて、55歳だからゴーゴーなんですよとか言って徹子さんにスルーされていたが、南野陽子くらいになると不満な人生ではなく頑張ってきたから、ゴーゴーなんて言えるのかも知れない。私にとっては加齢とは悲観に過ぎない。だが頑張ってきたところもあったとは思う。

https://konnankyuujotai.jimdofree.com/

あぁ結婚
P206～

尾上明代

昨日の真昼間、ヒヨドリと思われる鳥が、ベランダの物干し竿に停まっていた。ヒーヨヒーヨと鳴いて、よくその辺を飛んでいる鳥だが、そんなところにいること自体が初めてで、しかも私が近づいても飛び立つ気配がない。変だなとよく見ると、尾の部分がなくて、ケガしたか病気かわからないが、痛々しい姿である。そしてたくさんの糞をした。「大丈夫？」と話しかけると、私をじーっと見つめ返し、その子（全体の大きさや、顔の幼さ？が成鳥ではない感じ）の身体が、竿の上でゆらゆら揺れ出した。糞をたくさんして、ケガしてて、逃げないし、ふらふらしているので、もうすぐ死ぬのかと思って心配になった。もし助かる可能性があっても、この状態で今竿から落ちたら、それこそ死んでしまう。

私の目を見ていた目は、だんだん閉じられていく。死んじゃうの？それとも寝る気？どうしよう、近くの獣医さんに連れていって、治療してもらうとか？こんなに忙しいのに、そんな時間あるのか？！などと考えていると、あーらびっくり！絶対両親と思われるフルサイズのヒヨドリが、これまた驚くほど竿の近くに飛んできた。口には虫を加えている。親が子どもに何か言う（そのように思えた）と、死ぬ間際と思われた子どもが急に飛び立ったのだ。そして3羽で目の前の大きな木の中へ。親の声は、いつもと音程が違っていた。「だいじょうぶかー？？」って感じに聞こえた。鳥の声を分析してその「会話内容」を「証明」している京都大学の動物学者・鈴木俊貴さんの研究について聞かせていただいたことがあるが、まさに緊急事態の声ではないかと思った。でも、虫でも食べて栄養をつければ良くなるかもしれない。残暑が厳しく、その後、子どもはどうなったかはわからない。早い回復をお祈りしたい。

ドラマセラピーの実践・手法・研究
P91～

松村奈奈子

ここ数年、毎年夏には「子ども虐待医学会」に参加しています。精神科医は身体的虐待の緊急場面を診る事はほぼ無いので、救急現場で診断して通告する最前線の小児科医の発表を、いつも頭の下がる思いで聞いています。数年前に身体的虐待について学会主催の講習会で勉強した事があります。その時に聞いた、アメリカで子どもの虐待では有名な小児科医ヘンリー・ケンプの 60 年前の言葉が忘れられません。「虐待であるにも関わらず、判断を誤って保護せず生命を落としてしまった子どもに謝罪するくらいなら、虐待ではないのに間違って子どもを保護した時に、親に謝罪する方がまだいい」の言葉、いろんな意味で重いなと思います。

精神科医の思うこと
P172～



柳　たかを

家庭菜園始めました 僕の食べ物についての嗜好は、母親からの刷り込みが影響している。 本誌に漫画「やぶにらみ日記」を連載させていただいていますが、作品に我が母親も登場しま す。何しろ戦後の食糧難時代に 4 人の子ども達を食べさせるために市場（スーパーまだなかった）で、ダイコンをはじめとして野菜でもサカナでも売り子と交渉して少しでも大きいもの、量のある ものを安く手に入れることに知恵を絞る女性だった。 手を引かれてついて行く子どもの僕には、人混みの中で母親と売り子の怒鳴りあうような値切り交渉を聞くのはハラハラドキドキの経験だった。とにかく家族全員（6 人）が、お腹いっぱいになることを第一に考えてオカズは作られた。カレーで もすき焼きでも肉は安い並肉が定番。画家の父親は食は「量より良いものを少し」の人、タクア ンやキュウリ・茄子のぬか漬けがあれば茶漬けで満足出来る安上がりな苦労人なので、母の目標 は「余るぐらいタップリの副食」を子供たちの前に並べることに絞られた。 なので僕は大人になるまで食材にこだわった一品物の和食の贅沢をほとんど知らずに成長した。70 代の今、台所で自分のために野菜を刻んだりする機会もあるが、ほうれん草のお浸しやカツオ・昆布でダシをとって汁もの料理を作るなどは、よほど気が向かなければまずやらないし出来ない。

そんな僕が空き庭で家庭菜園を始めた。最初なのでジャガイモ・さつまいもから始めた。肥料も途中の世話もほぼ何もせずに収穫できると聞いたからだ。 スーパーに並ぶ野菜には大量の農薬が使われているらしい。虫が寄り付かない姿だけキレイな野菜をスーパーで買って帰りサラダにして生食しているのかもしれない。出来るだけ農薬を使わずに少ない肥料で野菜がどんな姿で育つのか知りたくなった、害虫に苦労するだろうけど自分でやればいろいろ気づきもあるに違いないし、育てたものを採って土を払いながら食べる面白さにも興味があります。

東成区の昭和　思い出ほろほろメモ
P176～

団遊

熱が出ました。

「そんなバカな」と思ったのですが、体温計をどの角度で見ても、「37．5」なのです。反対から読めば「5．73」なんですが、ときが時だけに、ふざけている場合でもなく、さっそく自主隔離です。

自宅の自室は小さく、寝室からマットレスを持ち込むと、部屋はほぼマットレスと化しました。しばらくして再度熱を測ると「37．9」。あがっています。しかし、何もしんどくはありません。喉も普通、咳は一度も出ない。そういえば、多少の頭痛はありました。

潜伏期間が長くて4～5日だというので、スケジュール帳で予定を振り返ると、直近から自宅、自宅、自宅、自宅、高島屋横浜

店で展覧会鑑賞、とあります。確かに自宅から出た覚えがほとんどありません。まさか高島屋？と思いましたが、一緒に行った家族は誰も発熱していません。

アレではない、と確信に近いものはあるのですが、それでも熱は「37．9」。思い込みで家族や近しい人を感染リスクに晒すわけにはいきません。ということで、発熱12時間記念に1回目の抗原検査をしました。結果は「陰性」。「だよねー」と思いながらも隔離を続け、2日目。朝の体温は「37．7」でした。そして徐々に身体の節々が痛くなってきました。こうなると「抗原検査は完璧ではないと聞くし…」などマイナス情報ばかりを思い出してしまいます。そこで、24時間記念に2回目の抗原検査をしました。「早すぎると反応が出ない」と何かで見たことがある気もしたので。結果は「陰性」。「だよね、だよねー」と思いながらも、やはり熱は「37．5」あたりを往復します。

3日後には出張もあります。バラすなら早めにと焦るも、全然熱がひきません。と思ったら夕方6時頃、遂に「36．9」に！「やったー」と全身で喜びをあらわし、お風呂に入り、「今日も早めに寝よう」とマットレス部屋で一息つくと、何やらまた熱っぽい気がしてきました。「おい、嘘だろ」と思いながら体温を測ると「37．7」。「なんやねん！」と叫んでいると1時間後には「38．7」になりました。「これはヤバイ」と思い、24時間体制の発熱外来を探して行くことに。ちなみに、全然しんどくはありません。結果、夜中の病棟で、36時間記念のPCR検査を受けました。恥ずかしかったのは、病院で熱を測ったら「36．8」だったこと。「さっき38．7だったんです！」と訴えるも、まあ、ないに越したことはないんだけど。

帰宅後、こっそりとマットレス部屋に戻り、ドキドキしながらも熟睡し迎えた朝、スマホを見るとショートメールが届いていました。発熱48時間記念で受け取ったPCR検査結果は「陰性」。はてさて、いったい何だったのでしょうか。

人を育てる会社の社長が
今考えていること
P30～

村本邦子

7 月、プロジェクトの仲間たちと『災厄を生きる−物語と土地の力　東日本大震災からコロナ禍まで』（村本編著、国書刊行会）を出版した。



ちょうど一年前にも『周辺からの記憶−3.11の証人となった十年』（国書刊行会）を出版したが、その時と比べ反応が鈍い。内容はすごく充実しているのだが、読みにくいからなのだろうか。戦争に、コロナに、災厄の最中を生きている現代の私たちにとって、生きた知恵がたくさん埋め込まれているから是非多くの人たちに読んで欲しいのだけど･･･。今回、私もついにコロナになったが、長くみなさんからたくさんの知恵を頂いてきたので、逞しく生き抜いた。本文後にオマケで体験記をつけたので、そちらもどうぞ。

周辺からの記憶　―東日本大震災
家族応援プロジェクト―
P148～

國友万裕

先日ある学生から突然メッセージが来ました。「男が痛い！」を読んで、先生とぜひ話をしたいと書かれていました。

この子だけではなくて、意外に「男は痛い！」は、僕の知らないところで色々な人から読まれています。何よりも無料で読めますし、僕がこれまで出した3冊の本よりも、むしろ認知度は高いようです。男のつぶやきみたいな連載なので、みんなそれほど真剣には考えずに読んでいるんだろうけど、ちょっとでも共感してくれる人がいるというのは嬉しいものです。

徐々に男性被害がわかってもらえる日が来ているのだとしたら嬉しいです。ぼくはずっと誰からも理解してもらえない孤独な人生でしたから。

男性運動にも関わったけど、ぼくとは真逆の問題を抱えた人ばかりだったので、決裂してしまい、今となってはトラウマです。男は一種類じゃない。「ガラスの天井」の上にいるのも男ばかりだけれど、「ガラスの地下室」にいるのも男ばかりです。

この頃のぼくは仕事とボクシングとわずかな友情の日々です。今年の夏は夏季講座も担当させてもらえましたし、ボクシング仲間とも楽しく、学生たちとも良好です。

日々の生活の中で、少しでも進歩があれば、俺はまだまだ生きていてもいいんだなあ、神様は俺にさせたいことがあるんだなあという気持ちになります。まだまだ天国に行くのは遠い先です。笑

男は痛い！
P119～

古川秀明

本当に久しぶりに講演会＆ライブを書かせて頂きました。何気ない毎日の風景が変わってしまい、寂しいという思いと、新しいやり方の模索と言う未来展望がないまぜになって、それでも元気に歌える幸せを感じています。人間の目が前に付いているのは、前に進むためだとか。その運命に従い、ますます前進しながら精進します。

講演会＆ライブな日々
P138～

西川友理

白鳳短期大学で保育者養成に、その他いくつかの場所で社会福祉士など福祉系専門職養成・および育成に携わっています。

コロナコロナと言いつつも、いろんな方法で工夫を考え出していく私たち。お付き合いさせていただいている社会福祉士の通信課程のスクーリングも、最近2～3 年ぶりに対面授業をするようになってきました。

先月実施したスクーリング、2 年目最終回のみなさんには、勉強してきたことの総まとめとして「今の社会で問題と感じる事を挙げる→データを集める→課題は何か話し合う→具体的な策を提案する」を、4時間のグループワークで実施いただいています。「介護分野の人材不足」「保育士の待遇の低さ」「世間一般の社会福祉の

イメージが“楽しくなさそう”すぎる」「介護支援専門員の専門性の格差」…皆さんの仕事で実際になんとかしたいと考えていることが根底にあるから、ワーク時間が進むにつれて、皆さんどんどんヒートアップしていきます。そしてそれらの課題に対する具体的なアイディアも、バラエティに富んでいます。「福祉のお仕事体験施設、福ッザニア（フッザニア）、通称“Fuzza”！」「自分に合った福祉施設からの逆スカウトも？！お仕事マッチングアプリ！」などなど、面白いものが沢山！

4 時間終わってみれば、「データって大事やねぇ…」「あと実体験ってやっぱ説得力あるよね…」という感想。現場の実践から、新しいアイディアは生まれてくるんだなぁと、毎回実感するワークです。

そしてワークの総仕上げ、今日から、今から、自分のつながりのなかで、出来ることを考える。SNS 一つで、社会が動く時代。

おおきな社会運動だって、まずは声を上げる 1 人から始まるのです。

数年ぶりに復活した対面授業で、面白く皆さんと議論をする中で、愉快に、わくわくと、現時点で取り組める方法が見えてきたりします。受講生の次の一歩の動きに繋がれ！と願いを込めて、毎回楽しく実施しています。

福祉系対人援助職養成の
現場から
P77～

坂口伊都

連載にも書きましたが、体調を崩してしまいました。クラクラする感じが続き、思うように身体を動かせません。今は、大丈夫になりました。児童養護施設の変則勤務の重労働さが身に染みてわかりました。体が動かないので、残念ですが辞職することにしました。久しぶりの無職です。はぁ～。

私が倒れるのを待っていたかのように息子がトラブルに巻き込まれて、家に戻ってくることになりました。盆も正月も戻って来なかった息子と働き続けて留守がちな母が、同時に家にいることになり、晩御飯を一緒に食べる日々に。これは珍事です。今は、息子の母をしろということなのだろうなと息子の世話を1か月間しようと決めました。「息子の母をした」と思えれば、死ぬときにいい気持ちで逝けるに違いありません。ちなみに息子は、これまでと違う土地の新居に引越しました。親子で新たなステージを迎えています。

家族と家族幻想
P142～

河岸由里子

【メキシコ料理】先日娘たちとメキシコ料理店に行った。メキシコ料理のルーツは約 6000 年前のアステカ族やマヤ族などの古代先住民族の料理を母体として発展し、約 500 年前にスペイン人が、豚肉を持ち込み、スペイン料理の影響を受け、更にアメリカの影響も受けて成立した料理だそうだ。トウモロコシ、インゲン豆、ひよこ豆などの穀物に多様な唐辛子を使い、辛みのきいた料理である。2010 年にユネスコに登録されている。暑い夏には最適だ。辛めの料理にはやはりアルコールが良く合



う。ビールはコロナ、そしてテキーラのカクテルを次々飲みながら、大量のコブサラダ、トルティーヤ、そして鳥と豚肉のバーベキュー等々。久しぶりに、これでもかというほど食べ、おなかが一杯になった。クミンが使われていると、アラビック料理とも似てくる。これは恐らくスペイン人が入ったときにアラブからもたらされたのではと思う。メキシコ料理は日本人にも合う。辛くするソースは6種類あり、グリーンハバネロ、レッドハバネロはじめ大辛、辛口、中辛などがあったが、使うまでもなく、ハラペーニョの辛さが程よかった。肉のバーベキューではパフォーマンスで、店員さんがテキーラをかけて火をつけてくれるのだが、ちょっと火が強すぎて、店員さんもう少しでやけどするところだった。（笑）

久しぶりの家族の時間であった。おいしかった！！

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

ああ、相談業務
P83～
先人の知恵から
P195～

岡崎正明

この夏のプライベートで心に残っていること。ひとつは家族で行った四国旅行。以前から乗りたかった最新フェリーも、道後温泉も、高知の日曜市も楽しかったが、一番の思い出は高知から松山に帰る道。ナビが恐ろしく狭い国道を案内し、ケータイの電波も 1 時間くらい入らないウネウネ山道を、冷や汗をかきながら運転した。このままポツンと一軒家にたどり着くのでは？と思うほどのルートで、家族には「ダイジョーブ！」と強気でいたが、内心ドキドキしていた。あのナビの言う事はもう聞かないようにしようと思う。

もうひとつは NHK の「ドキュメント 72 時間」の特番。珍しく夫婦でのんびりそれを観て、なんてことない会話をしたのがなんだか良かった。出てくるいろいろな人の、ちょっとだけ語られるエピソードから見えてくる人生模様。説明できないが、なんだかいいのだ。そんな話に勇気づけられたり、気づきをもらう。どこかでこれと似た感覚を感じたような…と振り返り。ふと、団さんの「木陰の物語」読後感に似てるなーと思った。ちなみに私のベスト1は、大阪西成の 24 時間食堂。

役場の対人援助論
P126～

大谷多加志

たぶん小学生高学年の頃、両親の実家がある鳥取への帰省の際に、少し足を伸ばして大山に向かった。頭上には停止したリフトが見える、冬はゲレンデであろう草の丘をひたすら登っていった記憶が残っています。だからたぶん 30 年ぶりに、息子を連れて大山を訪れてみました。最初に訪れた時とほとんど変わらない風景が懐かしいような、過疎が一層進んでいる鳥取県が危ぶまれるような、なんとも言えない気持ちになりました。

息子は息子で、特に面白がっている風もなかったのですが、夏休みの地理の宿題を済ませるために、何か旅先で立ち寄れる場所はないかと思案していました。何の

思い入れも無い土地なので、ネットで色々検索してもピンと来ない様子でしたが、道中でやたらとみかけた「むきばんだ遺跡」という看板に目を惹かれました。他にあてもないので向かってみたところ、弥生時代の集落の跡が見つかった史跡ということだったのですが、割と本気で再建した弥生時代の竪穴式住居や高床式倉庫が立ち並ぶ光景は、広大な敷地と他の客がゼロという状況も手伝ってちょっとしたタイムスリップ感がありました。

団遊さんの Note で知った「週末縄文人」の動画で、竪穴式住居を作る労力を目にしていたこともあり、集落の様子が一層壮大に感じられるとともに、弥生時代には伝来していた鉄器は、建築にも絶大な効果を発揮したのだろうなぁと思いを巡らせました。



発達検査と対人援助学
P132～

馬渡徳子

8 月 6 日は、高校卒業迄の私にとっては、祖父母と早朝の電車に乗って広島の原爆ドームにお祈りに行く日であった。

2014 年以降は、山口県の実家が床上浸水に遭った日ともなった。連れ合いが SNS をしているので、毎年その日に被災証明と損害保険申請の為に撮った写真がアップされてくるので、ふりかえっている。

今年のその日の石川県は、前々日の早朝より 28 年ぶりの大雨で、災害警戒アラームと自治体の災害放送に目が覚めた。町内の防災・消防団員登録をしている連れ合いは、当直明けから何度も 28 年前に氾濫した川を、仲間と監視・町内を巡視していた。

溝からあふれた雨水で道路は冠水したが、今回は 5～10 ㎝程で収まった。この家を建てた時に、九州出身の義父母の意見で「台風に備えて、①周りの家の平均より高くしたこと、②駐車場を道路から斜面にして、カーポートを大雪にも耐えるしっかりとしたものにした」ことが、今回も奏効した。改めて先人の経験知はすごいなと思った。

今回、全国ニュースの通り、小松と白山の山間部地域が大変な被害となった。猛暑とコロナ禍のさなかの復興作業に、心よりお見舞いを申し上げ、今の自分にできることをしたいと思う。

馬渡の眼
P175

団士郎

第 50 号、継続して13年目、一度も遅延、合併号はない。連載執筆者 50 人越え、50 冊目、以上はマガジンのことだが、それなら編集後記に書く。ここでは、自分がこれを続けてきたことが嬉しい。

大昔、小学校の通知表に、「閃きは良いが根気がない」と書かれたことが強く心に残ってしまった。そんな傾向はあったかもしれないが、顕著にそうだったとは思わない。

ただラベリングは自分の中で簡単には剥がせなかった。ずっと今に至るまで、それは意識にあった。そこに意地を張ったわけではないが、大人になった私は、何事も長続きする男になったと思う。

65年近くも経っているのに、こんなことを書いていることからもわかるように、「根気がない」と評されたことを、子どもながらに腹を立てていたのだ。いまだに独り言で、「私は根気のある方だと思うけど・・・」とつぶやいたりすることがある。

今ではあの一言が、私をなにかにつけて息長い大人にしてくれたと思って感謝している。よく言われるように、ほんの一言が誰かの人生を地獄にも花園にもする。口数の多い私は、誰かの人生に「根気がない！」と同類のことを言ったりしてはいないだろうかと、自身の記憶と裏表で思ったりする。

晩年 D･A･N 通信
P52～

鶴谷　圭一

マガジン本文にあるように 7 月にインドネシア教職員組合の Zoom 研修会にパネラーとして参加しました。聞いてはいたけど、時間のズレや通信状態の不具合などさほど気にしない様子で、時間は優に 1 時間半は延長して終了した。

研修の前には、頭にヴェールを巻いた何十人もの（おそらく選抜）インドネシアの先生方が画面に現れて国歌を合唱し、いろんな儀式がひとしきり行われて、お国柄だなあ、と感心していると、参加人数の数字がみるみる上がって、900･･･1K（1000 人以上）と増えていって、こんなのはじめてみた！いろいろと驚きの体験をさせてもらった。

6 月には、マレーシア大学の先生が来日した折に弊園によっていただき一日見学していただいた。アジア圏で、日本の小学校教育（科目以外の学級活動やお掃除など生活指導）が注目されており、関心が幼児にも向いてきたのだという。教育改革が進行しているようです。

原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
インスタ　haramachi.k
ツイッター　haramachikinder

幼稚園の現場から
P72～

水野スウ

2022 年真夏の一夜、「第 4 回対人援助学マガジン執筆者トークライブ」にお招きいただき、オンラインでお話しさせてもらいました。聞き手は、編集長の団さん、編集部と執筆者の方たち、マガジン読者さん、そして私の友人たち（が多かった！）。

トークは、私が団さんとどうやって出会い、なぜマガジンで連載することになったのか、というあたりから。対人援助学会のこともマガジンのこともまったく知らない友人たちに、この夜のトークはそれをはじめて知ってもらう、すごくいいチャンスでした。語りながら私自身のきもちもうれしかった。この企画のおかげで、マガジンが私にとって一体どういう意味を持っているのか、あらためて見つめなおし、考えることができたからです。編集部のみなさま、この度の貴重な機会、本当にありがとうございました。今号は、その夜話したことを中心に、新しく発見できたことも書き足してのトークライブ誌上リポートです。

＊

この秋は、憲法お話の出前ご注文が去年よりずっと多くなりました。ウクライナの

戦争は一向に終わる兆しが見えない。安倍元首相の銃撃事件のあと、これまで表に見えていなかったことが次から次へ、あふれだす情報は洪水のよう。その大波に流され呑み込まれぬよう、溺れぬよう、うんと心して、平和と憲法語りの秋の出前に向かいます。平らに話す平話と対話と平和が、ひとつながりであることを信じながら。

きもちは言葉をさがしている
P110～

脇野　千恵

今年の夏も広島へ出かけた。亡父親の郷里でもある。まず向かうのが、世界遺産の原爆ドーム。そして、資料館へ。猛暑だったが、若い人たちや家族連れが多かった。この資料館は、昔に比べると随分と様変わりしてしまった。良いか悪いかは別にして、被爆の様子がわかるリアルな物がそのまま展示されていたが、いつからかテーマに沿った展示となり、整然と演出された感がある。今年は、学徒動員で広島市内に集められていた児童生徒の被爆の記録だった。父親は原爆投下の当時招集されていて、九州の果てにいたそうだ。あと数日戦争が続いていたら、捨て石のように南方に送られていたと言っていた。軍隊の解散となり、郷里に立ち寄ろうとしたら、新型爆弾だからと降りることを許されなかったとか。仕方なく家族が待つ京都に戻ったそうだ。ここに来ると、父親がそんなことを言っていたなと思い出す。その当時も今日のように澄みわたっていただろう青い空。猛暑の中、橋を渡り、川を眺める。今年も広島に来られてよかった。

こころ日記「ぽちぽち」partⅡ
P250～

中村正

『どうして男はそうなんだろうか会議』（筑摩書房）が出版された。澁谷知美さんと清田隆之さんが 5 人の男性性ジェンダー研究者と対話して編集したものだ。私は「男性性と暴力―コミュニケーションに潜む加害と被害の両面から考える」というテーマで対話した。ひとりあたり 40 頁近いので結構なボリュームである。さらに、『現代思想』7 月号（青土社）は「加害を考える―臨床・司法・倫理」という特集で「加害行為研究の視界―加害性・暴力性・暴力の文化・マイクロアグレッション―」を寄稿した。この夏に刊行された直近のものなので宣伝。また、大学の演習が取材され、ゼミの学生たちが楽しそうにインタビューを受けた。「マッチョも学ぶ男性視点のジェンダー―立命館大学中村正ゼミ」というもの。

『朝日新聞』EduA 版（https://www.asahi.com/edua/article/14688276）。

これはフリーだ。ご笑覧を。男性と男性性研究はますます広がりを見せている。

臨床社会学の方法
P21～

千葉晃央

合間を縫って、秋田の竿燈（かんとう）祭りを観ました。小学生以来 40 年ぶりです。実家の町内「保戸野鉄砲町」からも竿燈が祭りに出ます。「福」があるようにの「おたふく」の意匠。



私が小さい頃は、バブリーな時代で、太鼓と囃子を載せる楽器隊？のトラックはもっと大きく、ド派手なイルミネーションの印象がありましたが、現在は軽トラがほとんど。そして、市内の各町単位でのエントリー。加えて、県庁、市役所の行政も、さらに企業も、大学も竿燈チームで参加という地域全体の大イベント。昼間は竿燈の技を競い合う競技会、頭で支えたり、腰で支えたり、肩で支えたりの妙技。夜は本番。終わってからは各ホームに戻って迎え竿燈。夜の 10 時ごろまで続く。これが数日間。

京都でもお神輿を担いだことがある。こうした伝統をベースにした地域のつながりについて、様々思うことがあった。NHKの「よみがえる新日本紀行」をよく見る。番組の内容は、当時、昭和の日本各地の風土や人々の営みを描いた「新日本紀行」の映像リマスターをして、その番組の舞台を現在再び訪ねた内容も合わせて放送している。ある回では、1970 年代、地域の祭りなども行う青年団のような組織の特集。それと同時に地元に居ても、地元に帰っても、そこには一切かかわらない若者たちがいて、そこはそこでフォークソングの集いで盛り上がるという様子が取り合上げていた。祭りという文化が持つ、価値観やつながり方、関係性については、「凝集性」もあるがその逆の働きがあることも考えざるを得ない。祭りは文化でもある。今回、そういった文化がその地域に与える影響はよくみえるなぁと感じられた。父母は東京、大阪にも住み、秋田にも住んだ。それぞれを知った上で、町内から竿燈は出るが賛助しているだけというスタンス。地域の歴史の色々なこと、そして現在の地域の置かれている状況が様々つながる経験となった 40 年ぶりの竿燈祭りの経験でした。一番好きなお祭りであることは揺るがないかな。

家族支援と対人援助　ちばっち
chibachi@f2.dion.ne.jp
090-9277-5049

障害者福祉援助論
P17～

篠原ユキオ

サンペさん追悼

ジャン・ジャック・サンペはフランスの漫画家である。僕が 20 代の頃から多大な影響を受けた憧れの人だ。

そのサンペ氏が 8 月 11 日に亡くなった。89歳だった。

彼の作品集は今も仕事場のすぐに手の届くところに何冊も並んでいる。Amazon の無かった当時は、なかなか手に入れるのは難しく、大阪駅前にあった旭屋書店でも小さなサイズのものをやっと見つける事ができる程度だった。

だから展覧会などで上京した時は必ず銀座 4 丁目にあったイエナという洋書店に行って、彼の本を探した。ハードカバーの豪華本はそれなりの値段がしたので帰りの財布には新幹線代しか残っていない事も多かったものだ。

日本のヒトコマ漫画家には無いお洒落な描線とユーモアセンスに魅了されてきた。

彼が雑誌『ニューヨーカー』に依頼されて描いた表紙絵の数々はニューヨークへの

憧れも呼び起こした。

その夜は世界中の漫画家たちのFacebookにはサンペ氏へのメッセージが次々とアップされていて世界中の漫画家に影響を与えた人であったことをあらためて感じたものだった。jyosi 忘れられない日となった。(合掌)



HITOKOMART
P266～

鵜野祐介

コロナワクチンの4回目接種を8月上旬に受けて以来ずっと副反応を患っています。微熱と倦怠感と食欲不振・・・、サザンの「夏をあきらめて」を思い浮かべていました。3日ほど前から少し良くなってきたと感じていますが、早く「美味い酒が呑みたい！」と思えるようになりたいものです。皆様もどうぞご自愛ください。

うたとかたりの対人援助学
P202～

山下桂永子

6 月末に 2 年半ぶりに旅に出ました。沖縄に 2 泊 3 日。いつもならレンタカーで移動するのですが、今回はモノレールとバスの旅でした。一日20キロ歩いて(方向音痴なのでそのうち 5 キロぐらいは道に迷っていました)見たいものを見て、食べたいものを食べて、両手いっぱいのお土産を買って帰ってきました。映画にも音楽にも疎くて、読書もこれといってたくさんは読まなくて、これまであまり自分には趣味がないように思っていたのですが、「あ、趣味旅行だった」と思い至りました。そして明日からまた少し旅に出ます。趣味のためなら頑張れるとよく言いますが、対人援助マガジンの原稿も旅のためなら締め切りの少し前に出せそうです。めったにないことです。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために
P184～

小林　茂

マガジンの投稿再開します！

勤務先の大学のキャンパス引越しや、幼稚園の建て替えの案件などがあり、連載をしばらくお休みさせていただきました。しかし、幼稚園の建て替えの案件は、えりも町の急激な少子化、新コロナやロシア＝ウクライナの戦争などの影響もあり建築資材が高騰したこと、認定こども園移行するにも新築に見合う補助金の助成も見込めないこともあり断念することになりました。

けれども、このままいつまでも連載のお休みを続けるわけにもいきません。連載、再開です。よろしくお願いいたします。

対人支援点描
P136～

中島弘美

対人援助学マガジンは第 50 号となった。ということは約 13 年執筆していることになる。毎回、締め切り日を守れるかなと思いながらも、なんとか途切れずに仕上げられた。次は 100 号を目指して、と言われると、そんな先まで書き続けられるかな？と思いつつ、もしも、このあと 12 年、合計 25 年続くのなら、素晴らしいことじゃないか～と思う。

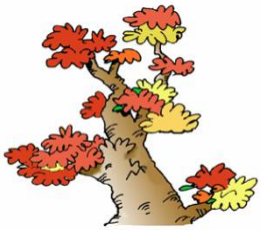
この文章を書いているいまも、コロナ感染の影響がある。相談に来られるクライエントさんや周りにいる人が次々に陽性や濃厚接触者になり、対面面接の予約変更の連絡が入る。また、学生さんたちの陽性で、対面授業も休講になった。第七波はこれまでで最も感染者が多く、その影響を実感している。このコロナ感染も 100 号を執筆しているころには、過去の話になっているのだろう。

カウンセリングのお作法
P39～

藤　信子

今年は、6 月から 7 月にかけて、蜩がよく鳴いていた。ちょっと早いんじゃないかと思うのは、私の経験では、蜩は夏休みの終盤、秋が近づいてきたときに鳴いていたような感じなのだ。夜明けや日暮れに、あの鳴き声を聞くと、夏が終わるという感じで、なんとなく身構える感じ。赤とんぼをみて、そうかと日々が過ぎていくのを感じたのも夏の終わり。しかし今年の夏は暑すぎる、早く秋になって欲しい。

コミュニティの中で
P



竹中　尚文

七月と八月は忙しかった。ご想像通り八月はお盆参りがあるから忙しい。私は全部の門徒さん(檀家といわず門徒という)にお参りするのではなく、希望のあるお宅だけにお参りをする。それでも全門徒さんの四分の一ほどの軒数である。他の多くは浄土真宗独特の行事である「報恩講」をお勤めする。私は祥月命日や法事以外で、少なくとも一年に一回は全門徒さんのお宅にお参りをしたいと思っている。そんなわけで、八月に入ると忙しくなる。忙しいが、それぞれのお宅でのんびりと話をして帰りたいと思っている。◆お盆参りで忙しいのは毎年のことだ。今年から、コンビニ収納というシステムを採用することにした。収納というのは「門徒会費」のことである。お寺を維持運営していくために会費を門徒さんたちに支払ってもらうのである。その意味で「護持費」と呼んでいるところもある。こうしてお寺が存続しているので浄土真宗では「住職のお寺ではない」という声も聞く。ウチのお寺は昨年度までゆうちょ銀行で会費を振り込んでもらっていた。ところが、今年一月から振込用紙と現金を持って行くと、手数料がかかるようになった。そんな事情で、コンビニで支払ってもらえるようにした。「した」といったが、七月から動き始めて、代行業者と契約を済ませて振込票を印刷発行するのに今も四苦八苦している。◆コンビニで何かの料金を支払うのは日常のことだ。先日もアメリカの通販業者で買い物をしたら、日本のコンビニエンスストアでの支払選択肢があった。近所のコンビニで現金支払いをすると、直ぐにアメリカから支払い確認済みのメール

が届いた。ほどなく商品が届いた。「便利になったなぁ」と思いながら、ずっと受け手の立場だった。それが振込票を発行する側に回るとは思いもしなかった。考えてみると、この一、二年で法事の状況も変わった。コロナ禍の状況で移動が困難な親戚の方にオンラインで繋いで法事を中継するという状況に何度か出くわした。このところ、テレビ画面で YouTube の番組を見ることが多くなった。既存のテレビ局の番組を見るより面白いと感じる番組も多い。近所のお兄ちゃんが面白い番組を作るものだと感心することも多い。一方でテレビ局の作る番組には膨大な時間とエネルギーをかけて作る番組もある。この状況は何十年も前から飲食店では通常のことだった。何十年も修行を重ねた調理人が作る料理も、数時間の研修を受けたアルバイト調理人の作る料理も同じように食べてきた。こんなことを半世紀も前に小田実氏が書いていたように記憶している。◆こんな時代の中で、私はそれぞれのお宅でのんびりと話して帰る坊さんでいたい。

宗教と人間
P116～

寺田　弘志

前号からゴルフの話が続きます。

渋野日向子選手がまた、ドキドキ・ハラハラさせてくれました。3年前、全英女子オープンで優勝した渋野選手。ここのところ予選落ちが続いて、渋野選手の善戦を予想する人は少なかったと思います。期待されすぎないのが良かったのか、全英オープンとの相性が良かったのか、初日単独首位、その後、順位を下げるも、最終ホールまで「もしや、もしや」と思わせる活躍でした。

日本人として初の2度目のメジャー制覇かと、ワクワクしながら深夜に応援していたのですが、惜しくも一打差でプレーオフを逃しました。

スポーツで勝ち続けるということは、とても難しいことです。周囲やマスコミからも期待されるし、取材や試合以外の仕事が増えて、練習時間も削られます。

私なんて、人に見られるだけでスイングが乱れるのに、たくさんの注目が集まるので、心が落ち着かなくなります。コースや天候も変化するので、プレイを修正しないといけませんが、うまく修正できるとは限りません。ですから、連勝ということはめったにできません。

ところが、連勝は難しいものだ思っていたところへ、ルーキーの岩井千怜選手が国内大会で2週連続勝利を収めました。初優勝して、次も優勝できた女子プロゴルファーは、過去にたった二人しかいないそうです。

17歳のJK馬場咲希選手が全米女子アマで、日本人として37年ぶりに優勝したというビッグニュースと、岩井選手の初優勝がたまたま重なりました。岩井選手に注目が集まらなかったということが幸いし、連勝できたということもあるかもしれません。

施術も似ています。一度施術がうまくいくと、別の人にも同じことを試そうとしてしまいます。たまたま原因や症状が似ているとうまくいくこともありますが、原因や症状は患者さんごとに違うので、同じ手はめったに通用しません。紹介で来られた新規の患者さんが、大幅な改善を期待して来院されることもありますが、期待されすぎると、施術がしづらくなります。

大きな期待をされている患者さんが来られたときは、「すぐには効果が現れないかもしれません」とか、「長くかかるかもしれません」とかお伝えして、ハードル（期待）を下げさせていただきます。できるだけ早く治っていただけるように最善は尽くしますが、期待に応えようとしすぎると、がんばりすぎてしまったり、解決の糸口を見つけられなくなったりします。

ゴルフで「ラインが見える」ということが言われます。ボールを入れるカップ（穴）の周りの、芝が短く刈り込まれたところをグリーンといいます。グリーンには、傾斜や凸凹があるので、ボールはまっすぐには転がりません。右や左に曲がったり、減速したり、加速したりします。グリーンの上で、カップに向かってボールの転がる道筋を「ライン」と呼びます。正確なラインがイメージできていれば、そのラインに向かってボールを打てば、きれいにカップインするわけです。ゴルフ初心者の私がグリーンの上に立っても、まったくラインが見えません。

しかし、施術がうまくいっているときの私には、問題が生じている筋肉や筋膜のラインがくっきりと見えています。

ゴルフも施術も、あまり期待されていなくて、ラインがよく見えるときに、うまくいくように感じます。

接骨院に心理学を入れてみた
P215～

山口洋典

「お盆にお父さん、帰ってきた？」先日、お盆明けに帰省した折、単刀直入に母から尋ねられました。母曰く、「丁寧な準備をして迎えたのだから、夢に出てきてくれてもいいのに」という前提での問いかけでした。「あまり夢は見ない方だし、そもそも供養の上での物語だから」と返したところ、「後ろ姿が似た人が夢に出てきた」と、長年連れ添った夫との突然の別れから癒されるには、まだまだ時間を必要とするのだ、ということを改めて実感する返答に触れました。

8 月の 3 日から 10 日には、岩手県大船渡市を訪れ、「盛町灯ろう七夕まつり」の運営をお手伝いさせていただきました。七夕飾りと言えば仙台七夕まつりが有名ですが、この地域でも先祖の慰霊の行事として約 400 年の歴史があり、110 年以上前からは絵灯籠による山車の運行による現在の形態になったと言われています。東日本大震災で大きな被害がもたらされた 2011 年にも「鎮魂と復興」を願って開催されたものの、新型コロナウイルス感染症の対策のため、3 年ぶりの実施となりました。現在をどう生きるか、ということについて、改めて不在のご先祖の存在も含め、丁寧に向き合っていきたい、と数々の場面で深く考える機会を得た 2022 年の夏となりました。

PBLの風と土
P209～



見野 大介

引っ越しも無事終わり、遅れを取り戻すために必死に仕事をこなす日々。前号の原稿を作成していた頃のカオスぶり、今思い出すだけでもゾッとする。新築することの大変さ、住居と工房を同時に引っ越すことの大変さ、ほんま色んな意味で勉強になりました。

ハチドリの器
P4

荒木晃子

今年の夏は暑かった。脱水症を伴う熱中症の診断を受け、7 月第 2 週、第 4 週の 2 度ダウン。8 月のお盆前まで点滴通院が続き、体調不良の日常を送っていた。お盆明けに何とか回復すると、今度は大切な友人たちがコロナに感染したとの連絡が入り、いざ、私の出番と気合が入る。どうやら大切な仲間を援助する余力は残っていたらしい。というか、誰かのために何かをしたいという思いが、私を励まし強めたくれたように思う。

この春、3 年間、研究プログラムで活動した他大学の研究者から受けた、通常では考えられない私への個人的な報復は、私の体に相当なダメージを与えたらしかった。彼女にとっては成功なのだろう。だが、私は彼女の研究者生命を案じ口を閉ざし、生きのびて、大切な友人を支援し、対人援助者としての日常を取り戻した。



お盆には、私に起きた出来事を、今は亡き父と母の仏前で語り、両親の娘であることを誇りに、今しばらく頑張ることができると確信した。関係したくない人・こと・ものとは、必要な距離を置く手法も体得済みだ。これからは、もう少し「選ぶ人生」を送ろうと決めた夏となった。

生殖医療と家族援助
P88～

工藤　芳幸

とうとう家族にコロナ陽性（軽症）が出て、私も濃厚接触者に。大阪在住で第 7 波に至るまで家族の誰も感染しなかったということの方が奇跡的かも知れません。たまたま夏休み中だったので、仕事などへの影響は最小限で済みましたが、きっと自分も発症するだろうと思って5日間を過ごしました（私は発症せずに済みました）。この制約も第 1 波の時だったらもっと強いものだったと思います。あの時は自宅勤務でかなり辛かったなあ・・・と思い出しました。ラジオをかけてまる 1 日部屋で PC に向かっている毎日。1 日中 PC に向かっているのはいつものことなのですが、同じことでも文脈や状況が違うと心身への負荷も変わるようです。この夏の自宅隔離期間は PC には触らず、ただただひたすら食事の用意をして過ごしました。

みちくさ言語療法
P255～

浦田雅夫

京都女子大学に異動し、研究室の窓からは京セラが。8 月末。稲盛和夫さんに訃報。人は必ず死ぬのだとあらためて実感。「君の思いは必ず実現する」という稲盛さんの子ども若者へ向けた著書を思い出す。強い思いは人を動かし、社会を動かす。あらためて強い思いを持って、自分のミッションである若者支援を行いたい。

社会的養護の新展開
P70～

小池英梨子

保護猫を飼っていると、なかなか人馴れしなかった子が急に雪解けのように触らせてくれるようになる日が来る。そして、その時の表情がとても良い。嬉しい。





そうだ、猫に聞いてみよう
P187～

サトウタツヤ

思うところあって、 50 号を区切りに『対人援助学マガジン』を卒業します。年 4 回設定された〆切のおかげで、その時どきに思うことやイベントの記録など、様々なことを書かせてもらえました。また、私の関連する院生や関係者たちにも本誌の魅力を伝え、何人かの方が執筆陣に加わってくれたこともありがたいことでした。

「思うところあって」というもったいぶった言い方をしましたが、還暦を迎えアタマが働くうちはエッセイではなく学術論文をギリギリ書くというところに力を注ぎたいということです。もちろん、私のことですから、またいつかふらっと戻って来るかもしれません。皆さん、ご愛読、ありがとうございました。お元気で！

対人援助学＆心理学の縦横無尽
P327～

祝「卒業」（編集長より）

障 害 者 福 祉 援 助 論

- これから現場に行くあなたに！ -

第８回

対話から信頼を

千葉 晃央

これから、現場に向かう方にお役に立つことができたらと始めた、この連載。8回目です。今回は、利用者の方との対話とその方法について取り上げます。今回も私風です。今回は私が実際に用いて、役に立ったものを紹介します。

あなたは、なぜそこにいるのか？！

なぜ、あなたがそこにいるのでしょうか？そう、あなたが援助職として現場にいる意味です。そこにいる意味は最も基本となることは「対話をする存在」であることです。対話には 2 つ条件があります。1 つ目は「相手」の存在。そして 2 つ目は「コミュニケーションを理解する」ことです。

対 話 の 条 件

1　　相手

2　　コミュニケーションを理解する

福祉の現場で出会う方は、話す相手がいるという環境が整うことが難しかった経緯を持つ、そんな方もおられます。自分の存在を他者から認めてもらって、時間を共にする。そんな経験がこれまで、もしくは今少ない方もおられます。

相手がいない場合どうなるでしょうか。「さみしいので、話をしませんか？」というようなストレートな表現が誰かにできればいいでしょう。しかし、多くの場合、それは難しい。こういった発言は基本的に発言時の安心が保障されてきた経験があ

ったり、こうした直接的な表現で誰かが近くに来てくれた経験があったりする方でしょう。

しかし、そういうめぐり合わせばかりではありません。そして、それは本人の責任でなく、社会がそれを生んでいるのです。「福祉」と略されることが多いですが、この領域は「社会福祉学」です。「社会」がついていることを忘れてはいけません。

やり取りがない瞬間はない？！

では、相手がいるという状況ができました。その次に大切になってくるのがコミュニケーションをとることができるという状況を作ることです。コミュニケーションはやり取りです。私たちは、やり取りを何もしていない瞬間はないと考えています。会話をしていなくてもコミュニケーションはあります。話さない、こちらも話さないというやり取り（コミュニケーション）です。かかわらないというかかわりをしているということです。「前に居る人はこういう感じの人かな、なら私もこういう態度をとったらいいかな」、「この人がつけているキーホルダーは私も持っているなぁ。話す機会があればそのことを言おうかな」…。こんな作用が常に起こっています。「この人の服がこれなら、私もそういう服着てきたらよかったなぁ」とかもありますね。

現場では、少し興奮されて、頭に血が上って、カッカしているのを、落ち着いてから話をするということもありますよね。その待つ時間は、そっとしておくというかかわりです。何もしていないのではありません。無策ではありません。この矛盾のような意味がまず分かることが専門職への一歩ではないでしょうか。

状況の変化を扱うことができるか？

では、実際の対話場面にうつっていきます。これからの支援を考えるためにも、また支援中の変化を把握するためにも、現在の状況を理解することが大切なことの一つです。そこには、利用者さん自身の自己理解と、支援者からみた他者による理解があります。その誤差が少ないに越したことはありません。そこで使うのがスケーリングクェスチョンです。

初回なら「今の状況は、通常を 50 にしたらいくつぐらい？」とか、「元気な時を 100 とすると何点ぐらい？」とこうして数値を用いて状況の変化を明確にします。数字が苦手な時はどうしましょう？手と手を広げて「このぐらい？」とききます。そして（広げた幅を広くして）「それともこんなに大きい感じ？」（次ページ参照）。また、2 回目以降なら「前回はこのぐらいだったけど、今日はこのぐらい？」と手の幅を小さくしたり、大きくしたり。そんな使い方もあります。前回スケーリングクェスチョンを用いていなくても「前を 50 としたら今日はそれより上？下？」と聞くこともできます。「はい」か「いいえ」でこたえられる（これをクロードクエスチョンといいます）ので「上？」と聞いたら「うん」とうなずくか、「違う！」と首を横に振るか。こたえやすい投げかけです。発話がまだ少ない場面でも使えます。

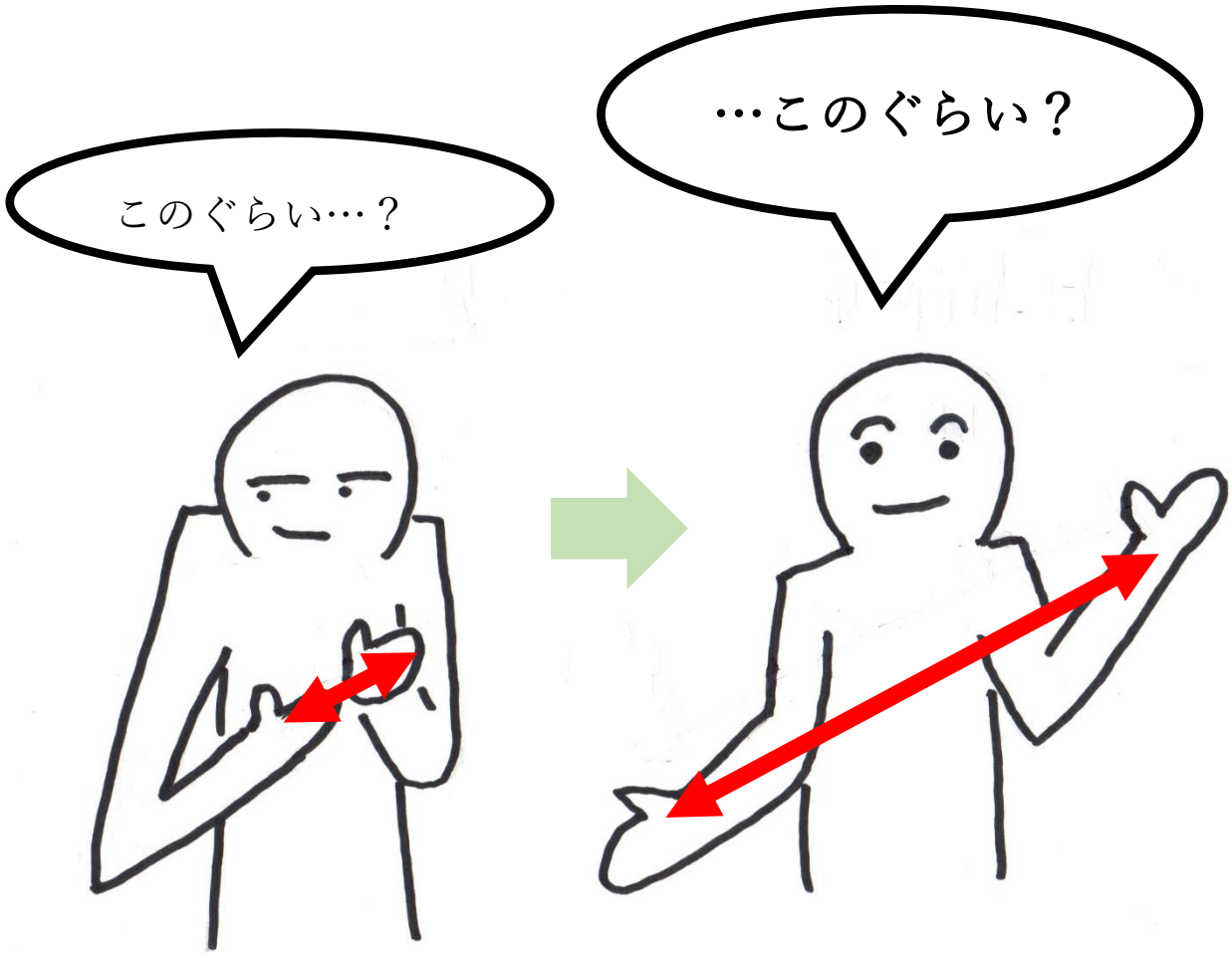
スケールクェスチョンを用いて、増減があった時には、その理由をきくといいでしょう。何が分岐点になっているのか？です。「こういう時はこうなる」という法則が見えることにつながる可能性もあります。次回もその出来事がありそうなら、そのあとに起こることの予想もつきます。予想がつくだけでも人は楽になります。予想の範疇であれば、想定内のことになります。こうして自分を知り、コントロールできている自分を取り戻していく契機にもなります。

これらは社会福祉士の養成などではソーシャルワークの解決志向アプローチで紹介されるものです。解決に向けてのプロセスで、今どういう状況にあるのか？が明確になることがポイントになっています。利用者さんの見方と支援者側の見方をすり合わせていく作業は、支援の中で常に行われることの一つです。このズレがないようにしておかないと、「ここではこうしておいたらいい」というような現実と乖離した、支援が繰り返される可能性もあります。

いなくても作用し続ける取り組みは？

支援者はいつもかかわっているわけではありません。実際に会っている時もあれば、そうでない時もある。会っていない時間の方が圧倒的に長いのです。では、その時間、支援者は無力なのでしょうか？いやいや、そうではありません。いくつか用いられている方法を紹介します。

賞状や認定証を渡す方法もあります。やり遂げたことへの評価を、賞状や認定証などで表すのです。それを家の目に付くところにあるとリマインダー機能もあります。「あの時頑張ったな」「それを知ってくれている人がいるな」と思う。そうすることで、自己を信頼し、他者を信頼し、社会や未来に期待してもいいかも？！と思う。そんなことを醸成する作用も期待して用いられています。「これをがんばったんだからこういうことはやめておこう」「またこのときのように頑張ろう」など、心



のブレーキやモチベーションにもなります。私の知っている人は子どもがもらった賞状を必ず自宅に飾っている人がいます。子どもを認めていること、子どもが自慢であること、子ども自身も頑張ってきて、それを見て知っている人がここにいる！ということを顕在化させます。心の安定感を生むためにも機能します。

ある作業をしている福祉事業所では皆勤賞を渡しています。また、1 年間がんばりました証明書を出しているところもあります。それを利用者さんは持って帰って、自宅の壁や冷蔵庫に貼っているのです。目に入る場所にあることで「これすごかったね！また頑張ろうね！」という陽性感情をともなうコミュニケーションの契機として複数回機能します。いい紙で、紙のふちに金色で模様がある、自分の名前がある賞状は、うれしいものです。また、福祉のところで出会う方々は人生でなかなか賞状をもらう機会が少ない方もおられます。だからこそ、その効果も大きい時もあります。事実は終わると風化したり、人は忘れたりします。後になってもその効力を作用させる、リマインドですね。

似たものには、手紙を書くことも用いられたりしています。それも開封を本人に限定にして、秘密を共有する仲間としての親密性形成を期待することもあります。また、手紙を渡して、開封時期を指定して、それでもはやく手紙を開けることも予言したかのような文面にしておくという手法もあります。支援者の専門性への信頼にもつながります。

こうした作用や、影響が継続するような方法はソーシャルワークのナラティブアプローチといわれるところで整理されています。人生は物語です。そのドラマ性を一緒に見出し、そのドラマを共有する関係になる、そのプロセスを共有するというのが支援者の役割でもあります。

次回も対話をテーマに書きたいと思います。

BACK ISSUES

「障害者福祉援助論」

1～8 連載中！

対人援助学マガジン 43～49

2020 年 12 月～2022 年 9 月

「援助職の未来 1～2」

対人援助学マガジン 41～42 号

2020 年 6 月～2020 年 9 月

「1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 1～40」

対人援助学マガジン 1 号～40 号

2010 年 6 月～2020 年 3 月

「対談企画 教育と福祉の連携を模索する」

対人援助学マガジン 16 号

2014 年 3 月

「障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会」

対人援助学マガジン 6 号

2011 年 9 月

臨床社会学の方法

(38) 暴力・性暴力の連続体

中村 正

1. 社会病理の把握の仕方

今号は「臨床社会学の方法(36)暴力の文化−Micro Action for Violence-Free プロジェクト構想−」(『対人援助学マガジン』第12巻第4号・通巻第48号)の続編である。そこでは暴力の文化、構造的暴力について検討をくわえた。それらと関連する概念である。

今回紹介する暴力連続体の概念は、まず性暴力の連続体として提起され、定着してきた。私がこの概念に出会ったきっかけは、ハラスメント研修の内容を思案している時である。通例の研修は、当該組織のハラスメント防止規程に則して、定義、事例などを中心に説明をしていくことが多い。そうなるとどうしても研修を受けている側には「べからず集」的な内容に聞こえるのではないかと感じていた。そうなると研修は半ば義務的なものとして参加者には映るし、本当に聞いて欲しい人は参加しないか、心ここにあらずの体で参加しているか、逆に講師の話を批判的に聞いていることも推測できる。また、組織の管理者は、ハラスメント事件があるたびに「啓発に努めます」と言葉を結んで謝罪をして研修を依頼してくる。法人経営に関係していた際、私もそうした経験がある。事件の当事者は何らかの懲戒などを受けるが、半ば受動的に研修会をすることになる多くの構成員に対して性悪説のようにして「ハラスメントするな」という研修は受けている側からしてもあまりよろしくない。制度や法律の知識のアップデートや事例の紹介などは最低限のこととして必要だが、全体としては失礼な研修にならないようにすべきであろう。こうした反省もあり、組織としての研修を意義あるものにするには、ハラスメントについての基本的な考え方の話をすべきではないだろうかと考えてきた。それはやはり暴力論を基礎にすべきだろうと考えてきた。ようするに「ハラスメントは暴力である」というアプローチである。その際、暴力の文化、構造的暴力、そして今回紹介する暴力・性暴力の連続体の概念を用いることにしている。

何らかの問題の連続性において社会病理を把握する視点は、もちろん性暴力だけではなく、各種の暴力にも応用していくことができる。本連載で常に取り上げているように、いじりといじめ、しつけや叱責と体罰・虐待、夫婦間葛藤・喧嘩とDVなどが典型である。地続きなのだ。さらに抽象化すれば、冗談と攻撃、揶揄と賞賛も、話題によってはマイクロアグレッションとなる

場合もあり、暴力連続体のどこかにプロットされる。例えば、セクシャル・ジョークとセクシュアル・ハラスメントは連続しているといえばわかりやすいだろうか。

社会病理や社会問題には境目のはっきりしない事態が多い。たとえば、冗談として意図して話される嘲笑のもつ破壊力、いじり行為があいまいであるが故に効果をもつ場面、叱る必要のある子どもの行為（しつけること）に力ずくで対応することの発達への影響、強引な愛情表出とストーキングや圧力、介護の場面に表現される介助者の陰性感情など、たくさん思い浮かぶ。発話であれ行為であれ、関係性の様態如何では暴力性を帯びる。

しかし暴力や力で押しつけることは多い。それを暴力かそうでないかと二元的に把握するのではなく、こうした行為の連続体のなかで把握し、そこには非対称関係性というコンテキストがあり、脆弱さが構成されていくと考えてみる。そうすれば、被害を感受する側の主観的な被傷性次元だけにとどめ置かない問題の理解が可能となる。

2. 性暴力の連続体のなかでハラスメントを位置付ける

性暴力連続体の考え方は、ジャルナ・ハマー、メアリー・メイナード編・堤かなめ監訳『ジェンダーと暴力―イギリスにおける社会学的研究』（明石書店、2001＝1987 Women, violence and social control Hanmer, Jalna.,Maynard, Mary,）に収められたリズ・ケリーの「性暴力の連続体」（第４章）で紹介された。

この論文と書物は、多くの異なった、性にまつわる問題行動の個々の特性ではなく全体としての過程において性暴力問題を把握しようとするものだ。その全体とは、男性が女性を支配・統制するために様々の形態の虐待、強制、力を用いることを意味する。一連の過程において個々の行動を位置づけることをとおして女性が経験する虐待、強制、力の範囲を記述し名付けることを可能にしようという試みである。その差異に性とジェンダーにかかる圧力が大きく、それは単なる暴力というだけではなく性暴力・ジェンダー暴力として発現するという。セクシュアル・ハラスメントのような所与のカテゴリーも、暴行やレイプと規定されるような行為だけではなく眼差し、身振り、言葉も含んでいるものとして動態をとらえるべきだという。セクシュアル・ハラスメントが「ちょっとしたおふざけ」「ただのジョーク」と見られるように、男性からは「軽いものではないか」と受け入れられる行動として定義されがちで、法律上の犯罪とは定義されない領域にある問題行動が数多く存在している。

ケリーはいくつかの先行研究を紹介している。特定の形態の性暴力と、より一般的で日常的な男性の行動面を結びつける行動についての研究である。異性間性交にはしばしば力 forceと強制が存在するとして研究を整序している。よりありふれた葛藤や微細な諍いのような相互行為とDV、父子のふれ合いやグルーミング行為とインセスト、セクシュアル・ハラスメントの局面がいかに関連しているのかが共有されてきた。

しかし、男性の典型的行動によって侵害されたり脅されていると感じている女性は、

どのように、なぜ、男性の典型的行動が常軌を逸した行動のように感じるのか明らかにするすべをもっていないとして性暴力連続体の概念を提起している。個々の行動をとりだしてハラスメントかどうかというよりも性暴力連続体という概念を置いて考えるということはこれに言葉を与えていくものだ。

性行為に応じるようにという圧力を感じたことはあるか、家族の中で性的なメッセージに感づいたことがあるか、子ども時代のネガティブな性的経験をなんであれ憶えているかについてのインタビュー調査を実施してこの論文を考察している。まとめたものは下図を参照のこと。

多くの男性が、DVに共通する統制の諸形態（物に対する暴力を含む感情の爆発、感情の撤退、不在、女性の社会的接触を規制すること、女性の家事のやり方に口をだすこと）を使っているが、身体的な暴力は使っていないことも明らかになった(96頁)。

インセストも「父親から性的なメッセージを受け取った体験」として応答している（96頁）。女性の異性愛間性行為の経験は合意かレイプかではなく、圧力による選択から力による強制までの連続体上に存在することが調査から明らかにされている（96頁）。性行為の圧力、強制的性行為、レイプが、互いに少しずつ重なりあっている（96頁）。

換言すると、「快楽と危険が相互排他的に対立するのではなく、経験の連続体の中で、それぞれ望むものと望まないものの極である」ことを示していると分析している（97頁）。

（女性も男性も同じように望む）合意による性行為から、（女性が男性に申し訳ないとかノーと言うのに罪悪感を持つという理由で行う）利他的性行為、（しない方がするよりも悪い結果をもたらすという理由で行う）従順的性行為、レイプまでの連続体であるという（97頁）。性行為の圧力は、男女間だけではなく日常行動に含まれている。合意に基づく性行為とレイプの間に明確な区別があるのではなく、圧力(pressure)、脅し(threat)、強制（coercion）、力づく（force）の諸相があり、それらが連続体を成していると分析している（103頁）。

この論文は20年以上も前のものなので、SNSはまだないこともあり対象設定は当時のものである。そして女性と男性という二項対立的な立論となっていることには留意しつつも、暴力連続体という把握は重視したい。

・性暴力体験の構成（同論文より引用）

表４—１　女性の性暴力経験

性暴力の形態	女性の実数	%
セクシュアル・ハラスメント	56	93
性的暴行	54	90
性行為の圧力	50	83
性的虐待	43	72
いたずら電話（回答者37人中）	25	68
強制的性行為	38	63
ドメスティック・バイオレンス*	32	53
露出被害	30	50
レイプ*	30	50
インセスト*	13	22

*この三つのカテゴリーには、これらの暴力を経験しているという理由で、最初に自発的に調査に参加してくれた女性たちの数が含まれている。

3. そして加害の連続体は？

ケリーの論文は加害者にも同様のことが指摘できるとして終わっている。この論文が収録されている書物全体が女性への暴力を主題にしているので男性は加害者とされている。しかし実態は、男性同士の暴力、インターセクショナリティのなかでの暴力、LGBTQと暴力などがあり、それらは対象にしていないこともあり現代化すべきだろう。さらに暴力連続体・性暴力連続体の議論を継続するために加害連続体の議論が必要だろう。今後はそれこそが記述されるべきである。性暴力加害連続体・暴力加害連続体といえるだろう。

男性が加害者になることが多いが、男性同士の暴力もあり、男性の被害者もいるが、男性性ジェンダー作用により不可視化されている。

性暴力については積年の諸課題があり、2017年の刑法改正で強制性交等罪に変更されたときにようやく一部着手されることになった。もちろん、女性による男性への、女性同士の性加害もありうる。加害者は多様に存在している。しかし被害者が人生の諸相において体験する被害の頻度、深刻さ、傷と同じように加害性が認知され、言語化されているわけではない。認知的不正義が長く支配しているのでそれを問題だと定義することからしてそもそも非対称なのだ。

ジェンダーの暴力としての性暴力は、構造的暴力を背景にして存在している。それを暴力連続体と一般化できる。本連載でも指摘をしてきた「暴力のピラミッド、マイクロアグレッションの体系、ストーカー行為の自然史的過程、シスジェンダー男性の異性愛行動」などの概念も暴力連続体としての位置づけをすべきだろう。日常生活や日常行動に埋め込まれている、相互的ではない一方的な性愛行動のなかにあるものが暴力連続体のある局面を構成する。萌芽的な暴力性と感受されることがあるだろうし、主観的な認知の幅も広くなる。

性暴力連続体については、現代日本社会をもとにした調査の報告書がある。齋藤梓・大竹裕子編著『性暴力被害の実際−被害はどのように起き、どう回復するのか』（金剛出版、2022年）である。この研究は望まない性交を経験した当事者へのインタビュー調査（31名の協力者）をもとにして加害行為の動態が分析されている。紹介しておきたい。

本書では調査をもとにして、①罠にかける加害者（エントラップメント）、②地位・関係性を利用した性暴力（社会的抗拒不能）、③対等な関係での罠（モノ化されることの傷つき）、④子ども時代における家庭内の性暴力（行為を確認できないあいだに進むプロセス）として類型化している。

この調査は、2017年の刑法改正の議論で積み残し課題の重要性を明確にし、さらに加害の連続体を把握する際にも有益である。なかでも不同意性交として性犯罪を定義することについて刑法改正議論では合意が得られなかった。「不同意性交は当事者の主観であるため、立証することが難しい」「暴行脅迫がなければ、それが犯罪であったという証拠になるものがない」と意見がでていたことが紹介されている法務省の審議の経過のまとめが公開されている（法務省 https://www.moj.go.jp/shingi1/shingikai_seihan.html）。

意見の違いがあり、2017年改正では、加害者からの暴力や脅迫さえあればそれをもって被害者からの同意がないことが明確になるとされ、従来通りとなり、不同意性交罪として定義することは先送りされた。＃MeToo運動やそれを受けたフラワーデモなどとは異なる次元で、法律論としての合意がなかった。こうした経過もあり、さらに議論を深めていくためにこの調査は同意のない性交のプロセスを整序している。奇襲型、飲酒・薬物使用を伴う型、性虐待型、エントラップ型に類型化している。逃げられない状況に追い込まれて罠にはめるという型が多いという。

例えば、アンケートに回答を求めるという会話から始まり、それに応答していく過程で、当事者の個人情報を引き出し、力関係の上下をつくりだし、権威的な話し方で追い込み、逃げられないようにし、最後は力づくで暗い路地に連れ込んで性暴力を加えるというケースが紹介されている。こんな声が紹介されている。「僕はマスコミ関係だから（知り合いに）その大学の子いっぱいいるよ。君の大学のサークルでも教えているしね。（有名な）サークルとかで（教えているんだ）、僕とか言ってきて」と罠にかけていく事例が紹介されている(43頁)。」

会社や友人など知っている者同士だとエントラップも仕掛けやすい。加害者が当事者よりも地位が高い場合、とくに当事者が加害者を上司として信頼している場合に罠が仕掛けられやすい事例が報告されている。出張で女性同士の相部屋となり、男性上司が飲酒した状態でその女性と連れだって部屋に押しかけ、被害者とされていく過程が克明に証言されている（45頁）。部屋に入れたことや明確な拒否の態度を示さなかったことを悔いることもあり、知り合い、同僚や上司の場合の不同意の意思表明の困難さが浮かぶ。

また、知人から電話で呼び出され仕方なく家に行き、望まない性交をされた事例がある。家族ぐるみの仲でもあり、悩みを相談していていたこともあり、恩も感じていたために強く拒否ができなかったという。お茶を飲むだけだと食い下がれたこともあり、しぶしぶ家にいった結果としての不同意性交となった（46−47頁）。

さらに地位・関係性を利用した性暴力は、職場の上司、職場の先輩、大学のサークルの先輩、小学校のときの教師、大学・大学院の教員が加害者だったという（58頁）。

加害と被害の動態について、調査では体験を5つのフェイズに分けて分析している。フェイズⅠ（性暴力被害が発生する前の加害者と被害者の関係）、フェイズⅡ（性暴力被害が発生する前段における加害者の動き）、フェイズⅢ（性暴力被害の発生）、フェイズⅣ（性暴力被害が発生したあとに見られる加害者の動き）、フェイズⅤ（被害者による性暴力被害の自覚と告発である）(57頁）である。

性暴力連続体の視点からはフェイズⅡを予兆としてみることができる。セクシュアル・ハラスメントやモラルハラスメントがすでに展開されている。たとえば、職場の上司からは指導のための上司との会話中に繰り返し性的な話を振られたと語る。指導の会話のために冗談として性的な話題が用いられている。小学生の頃、体操着の食い込み軟膏を塗る必要があるという理由から始まる身体接触が性暴力への過程だったと

語る被害者もいる。他にも体型のことを言う、飲酒させる、密室をつくることもあったという。「予兆的行動をとるのであり、その延長線上に性暴力加害が発生する」と考察している（61頁）。

フェイズⅣ「性暴力被害が発生したあとにおける加害の動き」も加害連続体の把握に重要だ。この調査から三つのパターンを指摘している。①「恋愛感情・好意の表明」、②「指導者としての義務」、③「被害者への心理的依存」である。

①は加害ではなく恋愛と好意にもとづくものだという正当化だ。「ずっと好きだったんだ」などが発言される。

②は「身体の関係によって心の傷が癒やされる必要があると」と言ったと語る。

③は「寂しい気持ちはお前のせいだ」といわれたという。被害者も①を一時的に受容してしまったこと、②は自己責任化も生起したこと、自己否定は性的に見られていたことや閉じ込められた感じとか一緒に罪人になったようだとの声が紹介されている。心身の不調もおきるという（65-66頁）。

さらに最初の4つの類型のなかの「対等な関係での罠−モノ化されることの傷つき」をみておこう。友人・知人、恋人、元恋人などいっけんすると対等にみえる関係が対象とされている。「事前に性的な誘いを繰り返し受けており、断り切れない状況に追いやられていた」ケース、友人として普通に遊びの誘いを受けた状況、飲酒をしている状況のケースなどが指摘されている。いずれも「望まない性交」となり、その経過では「モノのように扱われた」「抵抗したが相手はやめなかった」と感じており、「意思を無視される体験」として語る（71頁）。

ケリーの論文から30年後、現代日本における性暴力被害の調査から性暴力連続体の様相が浮かびあがる。この調査では性暴力連続体という言葉は使っていないが、プロセス分析をしているので基本的な現実分析としては重なることが多い。

4. ピックアップ・アーティストや恋愛工学

現代社会で性暴力連続体を考える際に無視できないのはSNSを利用した相互行為である。また、性に関わる現代風俗文化も連続体の一環を構成している。ポルノグラフィーの表象文化も加味して考えるべきで、幅広い問題が相互に関係して連続体を成している。ここではピックアップ・アーティストについて紹介しておきたい。これは比較的新しい言葉である。いわゆる「ナンパ師」のことを意味する。繁華街、街頭、飲食店などで女性を口説き、最後はセックスに持ち込むこと意図したアプローチである。これをピックアップ（お持ち帰り）と言い、そのための対人関係や心理操作的な技術を駆使する男性を指してピックアップ・アーティストということがある。

八田真行「凶悪犯罪続発！アメリカを蝕む「非モテの過激化」という大問題−テロにも発展、その名は「インセル」」と題したネット記事がある（『現代ビジネス』2018年07月01日。(https://gendai.media/articles/-/56258?imp=0)

インセルとピックアップ・アーティストは、強烈な女性嫌悪（ミソジニー）という共通点がある。インセルはともかくピックアップ・アーティストは女好きなのではないかと思う向きもあるだろうが、

筆者がピックアップ・アーティストに関する文章や掲示板などの書き込みを読んで思うのは、そもそもピックアップ・アーティストの多くにとって、女性と楽しくお付き合いすることが目的ではないということだ。口説きを「ゲーム」と称していることからも分かるように、心理テクニックやら何やらを駆使し、相手を意のままに操って見下す、それによって自信を回復する、というところに主眼があり、女性にはスタンプカードに押されたスタンプ程度の意味しかない。先の言い草をまねて言えば、世の中の女性は軽薄で愚かなので、自分程度の男でも、ピックアップ・アートに操られて引っかかるのだ、という根深い蔑視が潜んでいる。自分程度の、というのがポイントで、「自分を入れるようなクラブには入りたくない」という有名な警句があるが、ピックアップ・アーティストもインセル同様、自己嫌悪から自由ではないのである。

さらに同様の観点からの別の記事がある。コラムニストの勝部元気による「「恋愛工学」に危機感を持つべきだ–大学生を性暴力に走らせ得る」という記事がある（2016年12月21日）
https://www.excite.co.jp/news/article/E1482310187071/

「恋愛工学」は、簡単に言えば、男性がより多くの女性とより早く性行為を持つことをゲーム化し、そのテクニックをマニュアル化したものであり、作家の藤沢数希氏が提唱しています。恋愛工学はそのようなゲームを「自己啓発化」させたことで、コンプレックスを抱く男性の心理を掴み、インターネット上で拡散され、そのメソッドを実践する「恋愛工学生」と呼ばれる人たちを多数生み出してきました。「恋愛」という名称がついていますが、そこに一般的な「恋」も無ければ「愛」も無く、実態は「セックスゲーム」の方法論です。その一方で、性暴力やデートDVやモラハラ（＝モラルハラスメント）を推奨しているようなメソッドや、いかに女性を支配するか、または女性を支配しやすい状況に持って行くかという視点に立脚したメソッドも散見されるため、女性向けウェブメディアを中心にこれまで様々な批判記事が展開されてきました。ミソジニー（女性嫌悪）の男性が嫌悪感を女性にぶつけるために恋愛工学に陶酔しているケースも多く、彼らの一部が犯罪レベルの行為をネットで投稿することもあり、常に物議を醸していました。加害者を暴力行為に導いた可能性のあるものの一つとして恋愛工学の問題ネットやサブカルコンテンツを中心に今どのような「危険思想」が存在し、それのどこがどのように問題なのか。それに染まらないためにはどのようなリテラシーを身に着ければ良いのか。そういう「加害者予防教育」が絶対的に不足しています。一刻も早く大学や、それに至るまでの教育課程でもしっかりと予防啓発教育を実施するべきでしょう。

現代風俗現象の指摘なので学術的というよりも現実を照らし出している。恋愛工学やピックアップアーティストという言い方の妥当性は別として、性暴力連続体のなかにプロットされるべき現象である。危険と快楽の歓楽の文化、ゲームのような性愛の駆け引き、社会的排除・孤立とも関わる都市文化の動態などが性暴力連続体のすそ野を広くしていることは確かである。

5. 関係のなかでの力の行使

本連載でも同じようなことを記したことがある。「臨床社会学の方法(34) 関係の非対称性と権力の勾配–「俺のとっている講義

が休講になったのでこれから会いたい」とラインで言われた女子学生と考えたこと–」である（『対人援助学マガジン』第12巻第2号,通巻第46号,2021年9月)。

これはデートバイオレンスの予兆的現象を考察したものである。そこでも指摘しているが、恋愛時代の愛情は駆け引きでもある。容易にコントロール行動へと変化する。恋人同士は愛情でしか結びつかない関係だ。婚姻が家族制度に依ることに比べると自由な関係性である。愛がむき出しになるともいえようか。赤裸々な欲望の発現の相互行為となる。関係性は見えないものであり、当たり前のようにして、なかば無意識にやり過ごされていく。しかしその人の「やり方（日常的実践）」に関係性は埋め込まれている。恋愛にはコントロール行動となりうる執着心、嫉妬心等の情動が含まれる。それが昂じていくと社会病理となる。「ストーカー行為の自然史」の端緒といえるものが含まれる（「ストーカー行為の自然史―関係についての非対称な認識の展開過程」ロバート・M・エマーソン／ケリー・O・フェリス／キャロル・B・ガードナー/渡會知子訳、『新版 構築主義の社会学 –実在論争を超えて』平英美・中河伸俊編、世界思想社、2006年）。これも以前に紹介したが暴力連続体と関連するので紹介しておきたい。

この経過はこうである。1990年代、カリフォルニア州で反ストーキング法が成立した。「女性の問題として、すなわち、典型的には男性が以前の配偶者や恋人に対して行う、広く見られる深刻な暴力の前段階として」捉えられるようになっていった。ストーキングとして同定される形式は、一緒になって新しい関係を形成していく過程、今ある関係を解消したりそこから出ていったりする過程というごくありふれた普通の関係においてちょっとした不具合や食い違いから発生すると指摘している。この研究は、プロセスがあり、愛情の表現からはじまる自然史があるとして特徴を描いている。「日常的な追いかけ（付け回すこと）」が基本となる。受け取る電話の頻度が多くなる、贈り物が豪華になる、家や職場に定期的に姿を見せる、自分の家族や友人のネットワークに侵入される等が指摘されている。そしてエスカレートする一方の付け回しとなる。「脅威にさらされているという認識は深まり」「絶望的な性質を帯びる」ようになる。さらに「復讐への転回」の段階になる。追いかける側は「敵意や嫉妬、仕返しをするという脅迫の表現を、愛と関係の要求に混ぜ合わせるようになる」と分析している。ストーキング行為のプロセスについて事例をもとに指摘し、これを「ストーキングの自然史的過程」と呼んだ。この自然な流れのようにみえることが暴力連続体を構成している。

6. 連続体は愛情と暴力を同居させる–啓発と予防・防止–

今後は、性暴力・暴力の加害連続体はどのように構成されているのかの考察が課題だ。ここで紹介してきたように、被害体験をもとにした性暴力連続体は記述されている。当然のことながら加害の連続体があるはずなので記述をしていきたい。他の課題との関連では、戦時性暴力、災害時性暴力、ポルノグラフィー等の性表現・表象との関連などもある。

また、2017年の刑法改正での積み残し課題がある。不同意性交の概念が未成立で、暴行・脅迫がないと性犯罪が成立せず、性交同意年齢が13歳と極端に低い等の課題である。また日本社会は加害者の目線で性暴力が定義されているので、実態としての性暴力連続体は被害の側からの提起にならざるを得ない。暴力連続体を認識させない規範的な障害物があるといえる。これは認知的不正義として指摘してきたことである。これらをまとめると「加害は不連続」なのだ。支配的な男性性作用ともいえるし、同時に男性の性被害の隠蔽化もおこる。これを乗り越えるためには法的な加害の定義の再構成をめざすべきだが、社会意識の変革も前後する。

暴力と性暴力が連続していることは、畢竟、愛情と暴力が同居することを意味している。そのことを示す秀逸な福岡県のDV啓発ポスターを紹介しておこう。「愛情がずれただけ？いいえ、それは暴力です。」というものだ。記号や表象のパワーを感じる。暴力連続体のさらにすそ野部分が的確に表現されている。愛情の錯誤への気づきを促すものだ。男性用と女性用があり、LGBTQにも配慮した相談情報が記載されている。

また、統計的研究によるエビデンスをもとにした加害行為の研究の蓄積もある。順序構造分析などの成果がデートバイオレンスに応用されている研究など紹介したいが紙幅の関係で次回以降としたい。



DV相談窓口周知ステッカー（女性トイレ用） 福岡県



DV相談窓口周知ステッカー（男性トイレ用） 福岡県

なかむらただし
立命館大学/社会病理学・臨床社会学

2022年8月31日受理

人を育てる会社の社長が
今考えていること
vol.14

会社で挑戦してきた記憶を、国会図書館に残すということ

アソブロックの社長を退任して約1年が経過した。退任した狙い通りになっていることもあれば、そうでないこともある。退任したことで自分自身が気付けたこともあるし、新しいことを始めたい気持ちも湧いてくる。

でもその前に、やっておかなければならないと思っていることがあった。それが、アソブロックの20年の挑戦を振り返ることだ。特定の事業やサービスを持たず、「人が育つ場所」として会社を運営する。その実験的な営みが、何を生み、どんな問題にぶち当たったのか。「会社とは何か？」という根源的な問いに、メンバー全員で向き合ってきた会社だからこそ、現時点までに感じたこと、学んだことを書き記しておきたいと思ったのだ。なんといっても、継続することをヨシとせず、毎年「来年も会社を続けるのか？」から全員で議論をしてきた会社である。結果的に20年続いたわけだが、代替わりをした今、来年なくなっても、それこそ「アソブロックらしいな」で終わりである。

それはそれでいいのだが、このままなくなると、ここまでの過程もきれいさっぱりなくなってしまう。その点だけはつまらないと思うし、検証結果を自分たちだけのものにしておくのも勿体ない。いつの日か、自分たちの挑戦を参考にしたいと思う人が出てこないとも限らない。

そう考えると、数十年後に美しく美化された思い出として語るだけでなく、できるだけ生っぽさが残るタイミングで、末永く残る形でまとめておきたいと考えた。例えメンバーが全員、行方知れずになったとしても、資料として残り続けるものにしたい。と考える

と、書籍にして国会図書館に所蔵しておいてもらうのが一番だ（ISBN コードが付いた書籍は基本的にすべて国会図書館に納本され、国民共有の文化的資産として永く保存。日本国民の知的活動の記録として後世に継承される）。そう考えて、単行本を作ることにした。幸いなことに、ぼくは自分で出版社を持っている。

＊＊＊

最初に決めたのは、タイトル。「アソブロックとは何だったのか？」とすることにした。こんな風に書くと「会社が無くなった」みたいに感じる人もいるかもしれないが、明らかにひと時代が終わったとはいえるので、そこは気にしないことにした。そして、可能であれば、20 年間の社員全員に寄稿してもらいたいと思った。

この寄稿依頼にも狙いがあって、できればぼくは全員に自分の口から「辞めました」と言いたかった。けれども、15 年前に辞めた社員に「実はこの度辞めました」というだけの連絡をしても「こちらは忘れていますけど」と言われるのが関の山だ。「どれだけ自分のことを愛されていると思っていますねん」と軽蔑されかねない。

軽蔑されるくらいは、それが積み重ねてきた歴史がもたらす事実なのならば甘んじて受け入れるべきなのだが、自分可愛さゆえに、避けられるものなら避けたい。と言う時に、「良かったら寄稿してくれないか？」という依頼があれば、わざわざぼくが連絡する理由になると思ったのだ。

かくして名簿を洗い出し、昔のメンバーも含めて、一人ひとりに連絡を試みていった。最初から本にするつもりだったのだけれど、そういう風に言うと緊張しちゃうだろうと思ったので、「メッセージ集を作りたい」という理由にして「良いことを書いてくれということでも、団さんにメッセージを書いてほしいということでもなく、あなたにとって『アソブロックとは何だったのか？』を素直に書いてほしい。あなたにとって、アソブロック在社中は苦しい時代であったなら、是非そのような内容を素直に書いてほしい」と頼んだ。

しかし、探しても探しても行方が分からないメンバーも複数いて、ツイッターやインスタでアカウント検索し、フォロー後に投稿をしばらく読み続け、多分そうだろうと思ったら恐る恐る DM する、みたいなこともやってみた。それでも全員分は集まらなくて、結局寄稿してもらっていないメンバーには申し訳ない気持ちになるのだが、やれるだけのことはやったのでヨシとした。

かくして完成した「アソブロックとは何だったのか？」は9月末に発売になる。発売後、最初にしたいことは、もちろん国会図書館に納本に行くことだ。

もし興味があれば、ぜひお買い求めいただきたいのだけれど、せっかくなので、ぼくのパートである「団遊の証言」の一部をここに掲載しておきたいと思う。続きが読みたければご購入ください、という、よくある「ちょい見せ」になるのだけれど、どうぞご勘弁ください。

＊＊＊

団遊の証言
（在社期間：２００３年５月～現在）

特別に何がしたかった訳でもないが、2003年5月、27歳のときに私はアソブロックという会社を作った。

その前はというと、大学を卒業してから、フリーのライターをして、誘われるままに先輩の会社に参加して24歳で取締役になった。会社とは何か？などという問いが当時の私に立つわけもなく、売上、利益、オモロいことを、ただただ追求していた。

先輩の力もあり大阪の小さな編集会社はやがて東京大阪体制になり、東京支社長のような形で上京し、人数もオフィスもどんどん大きくなっていった。

いつかは！と、半ば目標のようになっていた出版社の立ち上げも成し遂げ、処女出版本が書店に並び、わずか3年で何かやり切ったような気持ちになった。

それならばまたイチから自分の城を、と取締役を退任し立ち上げたのがアソブロックだった。

やりたい事はさしてなかったが、やりたくないことは明確にあって、それは、これまでの繋がりで来る仕事は引き受けない、ということだった。

延長戦みたいになるのがイヤだったし、前の会社の仕事を横取りするような形になるのも嫌だったからだ。

それまでの人脈には頼らないと決めたので、創業直後はとにかく暇だった。

流れるようにやってきたアルバイトの女の子と 2 人で毎日暇を持て余した。

仕事もないのになぜ人を雇ったのかと聞かれることもあったが、彼女がいることで自分との約束を守れたことは大きかった。言っていることとやっている事が違う、という体たらくを見せる訳には行かないという小さな意地が発動し、窮地を見かねた知り合いからの仕事依頼も断り続けることができた。

持て余し続けた暇もやがて持てる程度の暇になり、はじめての方からの相談が来るようになった。新しい人からの依頼は断らない、の精神で仕事を積み重ねていくと、どんどん忙しくなり、一人またひとりと、オフィスにメンバーが増えていった。

仕事がもらえるのが嬉しかった。
気が付けば相変わらず、売上、利益、オモロいことを追求していた。

そんな毎日の中で、周囲にも煽てられ、いつか上場したいと思うようになった。経営者たるものそこを目指すのが当然だというような言われ方もしたし、カッコ良くも感じた。

相変わらず、誰かの影響をモロに受けて自分のしたいことを決めていた。

潮目が変わったのは、設立から 4 年ほど経過した頃だった。

運転資金の借り入れが増え、遂にお給料を出せなくなった。それまでの私は、メンバーに給料を遅延なく支払うことが経営者の最低で最高のノルマだと思っていた。

決して給料を払っているのだから何をさせてもいいと思っていた訳ではないが、一方で、給料払っているんだから頼んだことは内容によらずやってもらわないと、と考えている面もあった。

メンバーと私をつなぐ最優先事項は給料だと信じていた。給料を上げることで絆は強くなるとも思っていた。

その給料が払えないのである。終わったと思った。自分自身を情けないと感じたし、自己破産をしたら海外に行けなくなるのか、などと浅はかな知識で未来を悲嘆した。

何度考えても無いものはないので「ありません」「払えません」と言うしかない。まずは中核メンバーの二人を呼び出し、当時オフィスにしていた南青山にある古い一軒家の和室で事情を伝え、次の仕事を探してほしいと頼んだ。

ところがそこで私にとって想定外のことが起きた。「給料はいらないからもう少し頑張ってみましょう」と二人が言い出したのだ。

以降、長く経営を共にすることになる二人からだったが、当時の私の常識からは考えられない申し出だった。私が逆の立場ならすぐに辞めるという確信があった。

給料が払えないのは1カ月や2カ月の話ではない。情緒的な判断で発言しているなら撤回したほうがいいと伝えたが「多少は貯金もあるし、ホンマに無理なら全然辞めるから」と押し切られ、私はその発言に甘えた。

そこではじめて、私の中に問いが生まれた。「会社とは何なのか」という問いである。

繰り返しになるが、それまでの私にとって会社とメンバーをつなぐものは給料だった。しかし、私の力不足が原因で給料を介さない会社が期せずして生まれた。決して誇れることではないが、内省を促すには十分だった。

毎月稼いだお金を借入の返済に回す中で、無料もしくは薄給で一緒してくれるメンバーをガッカリさせることだけはしてはならないという思いが日に日に強くなった。

私は一度自己破産を覚悟した身だから、どうなってもよい。ただ、当時のメンバーが人生を振り返った時に、この時を「時間の無駄だった」と思うようなことにはしたくないと思った。

まず着手したのは、やりたい仕事とやりたくない仕事を振り分けて、やりたくない仕事を返すことだった。

給料も満足に払えないのにやりたくない仕事をしてもらうのは流石にあり得ないと思った。

売上、利益率が二大指標だった考えを否定し、やりたいかどうかのみにフォーカスして仕事を仕分けた。すると社内の空気が少し変わっていくのが分かった。自己破産を覚悟した頃の社内は、クライアントへの文句や愚痴がはびこる状況で、正直なところ、私もそこから逃れたくて外回りをしている感があった。やがてやりたい気持ちは相手にも伝わり、素直なやりたいは新たな仕事を生むことを知った。

支払を完全に止めた二人への報酬も少しずつ払うことができるようになり、借入も少しずつだが、確実に減っていった。

やがて借入返済の目処がたち、ひとまず経済不安から脱すると、多少なりとも出始めた利益を、共に乗り越えたメンバーのために使いたいと考えた。せめてもの罪滅ぼしである。

例えばちょっといい店にみんなで食べに行くとか、社内備品をより使いやすいものにするとか、椅子を変えるとか、社員旅行に行くとか、現金を支給するとか。

これらはやっている方には一定の満足感があった。でも、それが本当に正しい恩返しなのかという疑問もあった。かけられる予算は微々たるものだし、普通の会社なら福利厚生として当然整備されていることを矮小化した真似事に過ぎないからだ。単なる自己満足に過ぎないのではないかという気持ちは拭えなかった。

一方で、その少し前から他社よりヘッドハントされるメンバーがで始めていた。「満足に給料も出ない中で大変だろうし、よかったらうちで働かないか？」と言った具合である。

引き抜いてやろうというつもりはなく、あまりの気の毒さに「助けられることがあれば」と、そんな気持ちからの申し出だったと後々聞いた。窮地は外にも漏れ出ていた。＜単行本につづく＞

文／だん・あそぶ（団遊ヨノナカ編集舎　主宰）　https://www.danasobu.net/
「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な会社の経営に携わる一方で、贈与型社会の実現に向けたプロジェクトに取り組む。元は雑誌の編集者。21 年 9 月に第一線を退いたが、アソブロック株式会社で貫いた独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され全国でワークショップや講演も行っている。
団遊の組織論；https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/
団遊の採用論；https://job.cinra.net/special/asoblock/
仕事を辞めたくなったときに；https://goo.gl/bFQdpC

コミュニティの中で

（1）

藤　信子

望月の提唱した対人援助の３つの機能のうちの援護（advocacy）について考える時、コミュニティの中で、精神病への理解を深めるにはどのような関係を作れるのだろうか、と考えてみようと思う。コミュニティの中でという言い方は、私自身いろいろなコミュニティに属しているので、ちょっとわかりづらい言い方に聞こえるかもしれない。言い換えれば、大学という資源にいる人間が、地域社会の他の資源で、関係を作るというイメージである。

上記のようなコミュニティでの活動に関しては、立命館大学の心理教育相談センターの実習で、10 年以上にわたりデイケアセンターに出かけて、高齢者と交流したことは、以前に書いた。そこでここでは、コミュニティ活動の関係者との接点について思い返してみようと思う。10 年以上前になるが、京都市のＡ区の「A 区に暮らす、精神に障害のある人たちを地域ぐるみで応援し、社会参加や社会復帰ができるようにと設立された」ネットワークで、講演をしたことがある。これはＡ区の作業所に勤務する応用人間科学研究科の修了生の PSW のＢさんの紹介で、「妄想」に関する話をして欲しい、ということだった。思えば立命館の応用人間科学研究科（当時）にいた時は、社会人の大学院生からのこのようなコミュニティの資源を紹介されることがあった。このような社会人の大学院生から受けるビビッドな知識には学ぶことが多かった。

その頃、看護大学の学生に精神科看護の一コマで、チームで働く心理士について話していた英国のガレティとヘムズレイ（１９９４/２００６）の「妄想はどのようにして立ち上がるのか」をもとにして話すことにした。

妄想は、普通の思考とは全くかけ離れた異常な思考であり、他の人には理解しがたいものだと考えている看護学生を見ていて、コミュニティの人も、そのように考えている可能性があるだろうと思ったからである。そこでガレティ達の「ビーズ玉課題」を実際に体験することを通して、妄想は理解できない異常な思考ではなく、私たちの体験の延長線上にある思考だということを考えてもらおうと思った。

まず、妄想を持つことは、こころの安定を得ようとする働きであることを説明する。その後「ビーズ玉課題」を体験する。

「ビーズ玉課題」

それぞれビーズ玉が 100 個ずつ入った２つの瓶があります（絵を提示）

A の瓶：８５個の赤、１５個の緑のビーズ玉

B の瓶：８５個の緑、１５個の赤のビーズ玉

絵を見せた後で、ついたてで隠し、ビーズ玉を１個ずつ取り出し、参加者に A あるいは B のどちらかの瓶から取り出したと考えるかを聞く。大体 3 個目くらいから、A あるいは B の瓶だという声が上がるが、5-6 個目になってもまだ慎重に考えている人もいる。結果は、「参加者が A あるいは B を決定するのは、何個目のビーズ玉を取り出した時か」（取り出し個数）を見る。

ガレティ達の結果では、妄想を持った人たち：1.22 個（これは最初のビーズ玉と 1.22 個、合計 2.22 個を見て、A か B を決定したということ）。健常な人達：2.60 個。これによると妄想を持った人たちは、決定までの「取り出し個数」が少ない。健常な人たちに比べると半数以下である。ほとんどの患者は、2 個目のビーズ玉を見た時点で、どちらかを決定してしまったということで、性急な判断をしていると言える。この現象を「結論へと性急に飛躍してしまう傾向」とガレティ達は名付けた。この「結論へと性急に飛躍する思考」は、不安が強いときには、妄想を持った人ではなくても、多くの人が体験している「幽霊の正体見たり枯れ尾花」とかの説明をすると分かってもらいやすい。

妄想に関しては、主催者から参加者に地域の長寿クラブの方とかもおられるので、高齢者の妄想についても話すようにとのことだったので、以下のような特徴があることを話した。高齢者の妄想は、背景に喪失-自分の役割、権利、財産などを失う危機感があることが多いようである。

例）

嫉妬妄想：自分自身に目を向けてほしい、見捨てないで欲しいという不安感の存在、相手への執拗なしがみつく気持ちがこのような妄想となって表現される。

物とられ妄想：認知症において記憶障害によって物を置いた場所を忘れることで、誰かに物を盗られたと信じ込む妄想。認知障害のない場合もある。近所に触れ回った

り、警察に届けるなどの行動を伴うこともある。その場合、犯人は家人、ヘルパーや近隣の人などの身近な対象に向けられることが多い。

人物誤認：夫はこんな人ではない、もっと若い、夫を探しに行かなければ・・と出かける行動など。

このような例を話すと、参加者の高齢の方は「えーそういうことが起こるんか」「ちょっと大変やな」と自分や家族、知り合いなどをイメージされ、周りの人と話される。ビーズ玉課題に関しては、講義が終わった後に、「私は、確かに結論へと性急に飛躍する思考があるんです」と、自分のこととして話し始める方もいて、参加者の体験を考える場にもなったかと思い出す。

妄想から教えられることは、・心配、不安を受け止めてもらえる関係を持つこと、・日常のいくつかの楽しみがあること、などが大事だと思っていることも話した。

このネットワークには、A 区の医療関係、公共施設、社会福祉協議会、民生児童委員会、地域女性会、訪問看護ステーション、精神障碍者作業所などが構成団体となっているそうだ。講演会が開催されたのが、平日の午後だったので、私の印象では、参加者は作業所に通所している方、民生委員、女性会の方々などが多かったようだ。今思えば、こういう講演を契機に、もう少し少人数でよいから、「心の健康」について、自分のこと、家族のことだけでなく、皆で少しずつ話し合える機会があったら良いなと思う。既に実施しているところもあるかもしれないが、障がいの当事者、家族だけでなく、近隣住民とコミュニティの中で、話すことで理解しあえることがあるのではないだろうか、と思い返している。それが「心配・不安を受け止めてもらえる関係」を作る端緒になるのだと思う。

文献：

Garety, P.A. and Hemsley, D.(1994) Delusions: investigations into the psychology of delusional reasoning. Oxford University Press(P.ガレティ、D．ヘムズレイ（1994）丹野義彦監訳（2006）妄想はどのように立ち上がるのか．ミネルヴァ書房

カウンセリングのお作法　第 32 回

CON

Counseling Office Nakajima

カウンセリングオフィス中島　中島(水鳥)弘美

家族面接初回の相互交渉段階と目標設定段階

前回は家族面接初回の問題確認段階について話しました。

今回は、「相互交渉段階」「目標設定段階」について話します。

家族が話し合いながら、今後の方向性をイメージできる流れをつくる

家族が抱えている困りごとの事実を確認する段階から、これからどのような方向に進むことを望んでいるのかを確認する段階です。

目標設定は、実際の面接場面では、家族での話し合いがスムーズに進まないことが多くあります。それは、なんでこんなことになってしまったのか、誰の対応が正しくないのかといったこれまでの出来事についての原因追及が繰り返されるからです。学校関係者や医療関係者等の対応が適切でなかった、などと語られることもよくみられる光景です。

それぞれの意見を尊重しつつ、方向性を統一する

「これからどうなったらいいと思いますか？お母さんは？お父さんは？」

などと、カウンセラーは家族それぞれの望みについて問いかけます。

この段階の話し合いで、カウンセラーは少々エネルギーが必要になる場合があります。

これからについての話をしているうちに、ふと以前の出来事を思い出して語りだし、次の段階に進めないのです。軌道修正をしながら、

「そのようなことがなくなったとして、これから、新しくどうなっていったらよいとお考えですか？」

と、仕切り直しをします。

目標として「元気になってほしい」「落ち着いて生活できればうれしい」などが語られるとします。抽象的な表現が多いため、元気になるため、落ち着くためには具体的に何が大切なのか、これからどうなる必要があるのか、さらに詳しく意見を出してもらい、どのような行動が始まると、希望するイメージにつながるのかを家族で描いてもらいます。

カウンセラーは意見を述べず、家族の意見をまとめる

その場面で大切なポイントは、カウンセラーは目標設定に関しては述べず、家族がいろいろな思いや考えを出して、具体的な方向を作り出せるように支援します。

例をあげて考えてみましょう。

子どもさんが長期に欠席している状態で、相談に来られた場合です。そのとき、再び学校に行くことができるようになるなどの目標をカウンセラーが決めつけないことです。たとえ、紹介者から再登校できることを望んでいるとの情報が事前にあったとしても、何よりも家族の話をききます。あくまでも主役はご家族で、今後どうなりたいか、家族が作り上げる目標設定です。

一般的には、多くの家族が学校に行けるようになったらいいと考えることが推測されますが、すべての家族が希望するとは限りません。たとえば、いまは学校についてのことは考えず、とにかく△△になってほしい、あるいは、みんながカリカリしないように過ごしたい、朝起きられるようにするのが大切とか、家族がお互いの意見を出していきます。家族のひとりひとりの考えを受けとめながら、今後についてより具体化する手伝いをカウンセラーがします。

この場面で、子どもさんから学校はもう無理とか、学校に行きたいけれど行けないから、〇〇したいなどの思いが語られることもあります。子どもさんの心情を改めて知り、それぞれどうお考えになりますか、どう感じますかと、家族に再び問いかけます。

巻き込まれず、家族が家族の思いを行動に移す

カウンセラーは家族のうちの、だれかだけの味方にならず、また、だれかの意見に反論することもなく、家族が同じ方向を進んでいくことができるようにします。ときに、親御さんから

「先生、やっぱり学校に行かないうちの子どもになんとか言ってやってください」

とか、

「〇〇の対応が甘いので、それを改善する方法を教えてください」

と、カウンセラーに要求されることもありますが、そのような依頼に対応せず、中立の態度をとり目標づくりをこころがけます。

こうやって、ご家族がなんとかしようとおもって、初回面接に来所されているこの思いこそ改善のきっかけになるので、その強みやリソースをよりよい変化につなげることができるようにシフトします。

目標設定段階のさらなるポイント

「もしも、今よりも少しだけ落ち着いたとしたら、子どもさんのどんな様子からそれがわかりますか？」

という質問つまり、ともに生活している家族だからこそわかる質問をすることで、どのようなささやかな差異を見逃さないようにするべきなのか、具体性を明確にします。

「ここしばらくの間にそのような様子に似たときはありませんでしたか？」

と、解決につながるような家族の行動や状況、何よりも今後に関心が向いていくような流れを作り出します。

新しい視点が持てる

最近ほんの少しでも調子がよかったことがあるとしたら、よりその行動を明確化し、そのことをさらにどのよう膨らませていくと良いのか、今後より安定できるときのヒントとして、新しい視点を家族自身が持てるようにします。

つまり、目標設定をしつつ、改善につなげる新しい視点を持ちつつ、すでに改善できているところを膨らますという見通しがつけられるようにしていきます。

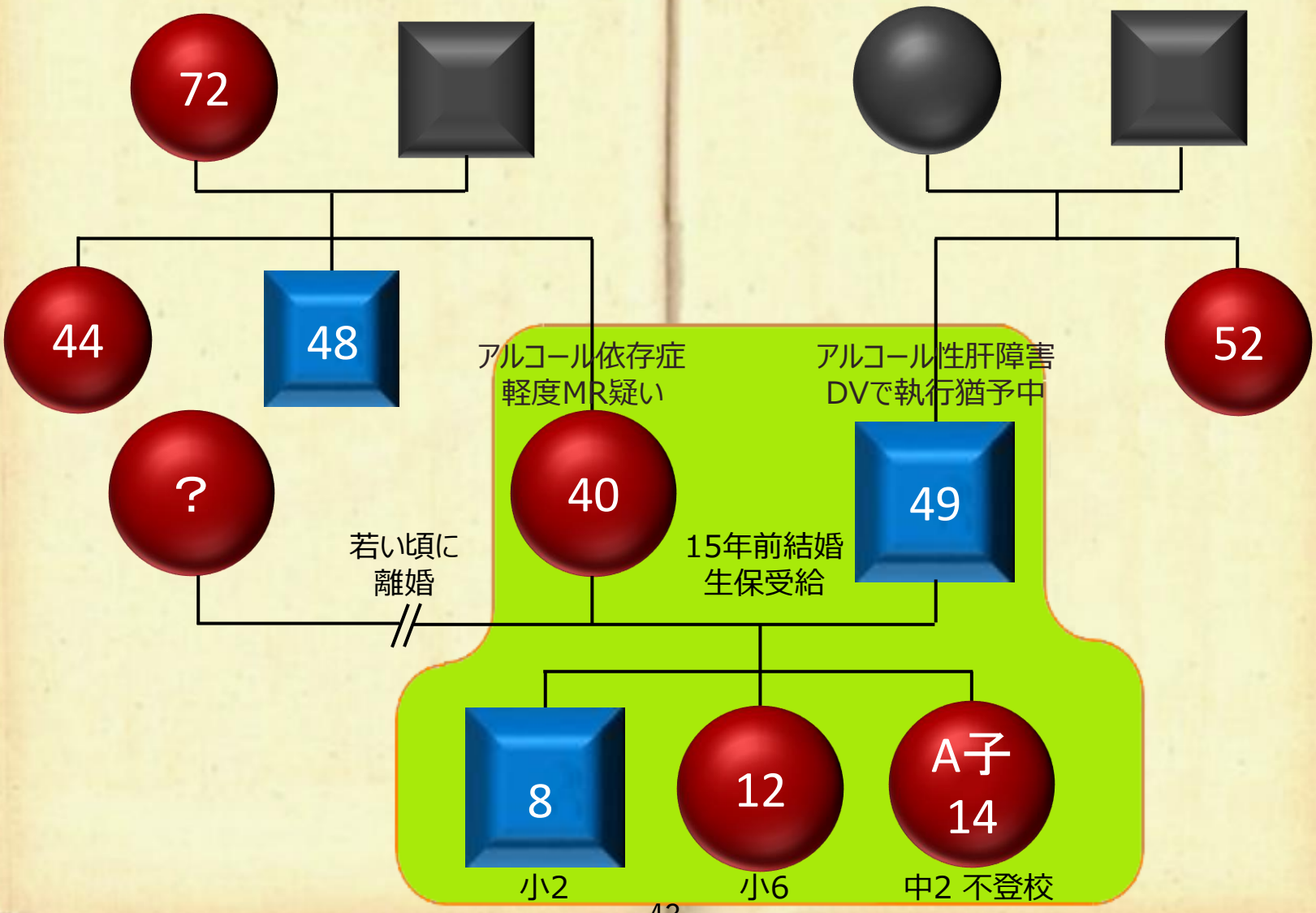
ビジュアル系
子ども・家族の
理解と支援

十六　仮想事例検討会 まとめ
～相互作用をイラストで～

※　間隔があいているので、事例を再掲します。



註：事例検討のために作成された家族です。



両親について

母親は、三人兄弟の末っ子。幼少時に父親が死去し、その後、生保受給。高校を中退し、様々なアルバイトした。25歳の頃、友人の紹介で働いていた飲み屋で現在の夫と知り合う。三人目が生まれ、手が回らなくなるにつれて酒量が増えた。最近は昼ごろに起きることも多く、家事も滞りがち。軽度の知的障害が疑われている。母方兄、姉はそれぞれ結婚しており、ほとんど行き来はない。

父親は、若い頃に離婚歴のある建具師。結婚後、妻と飲酒することが習慣化し、アルコール性肝障害になる。現在は断酒している。半年前、酔った妻への暴言・暴力と止める子どもたちを突きとばしたことで逮捕・起訴され執行猶予中。

母親はよく離婚を口にするが、一人で子どもを育てる自信がなく具体的に動くことはない。父親も、自分がいなければ子どもたちが困るからと離婚は考えていない。

子どもたちについて

長女は、中学2年。小学校時代は、担任から食事・洗濯・宿題等のサポートを受けて登校していた。成績も悪くはなく、いじめもあって休入ると学校の配慮はなかった。中学に む日が増えていった。現在は週1～2回、昼ごろにふれあい教室をのぞく。家事や妹たちの世話が行き届かない母親を嫌う。父親が家事をするときは、すすんで手伝っている。

小6次女・小2長男（いずれも怠学傾向）は、身なり・宿題・登校など、父親に強く言われるとしぶしぶ従う。両親が口論すると必ず母親をかばう。2人とも通常学級で低学力、学校は様々な配慮をしている。

今回の経緯

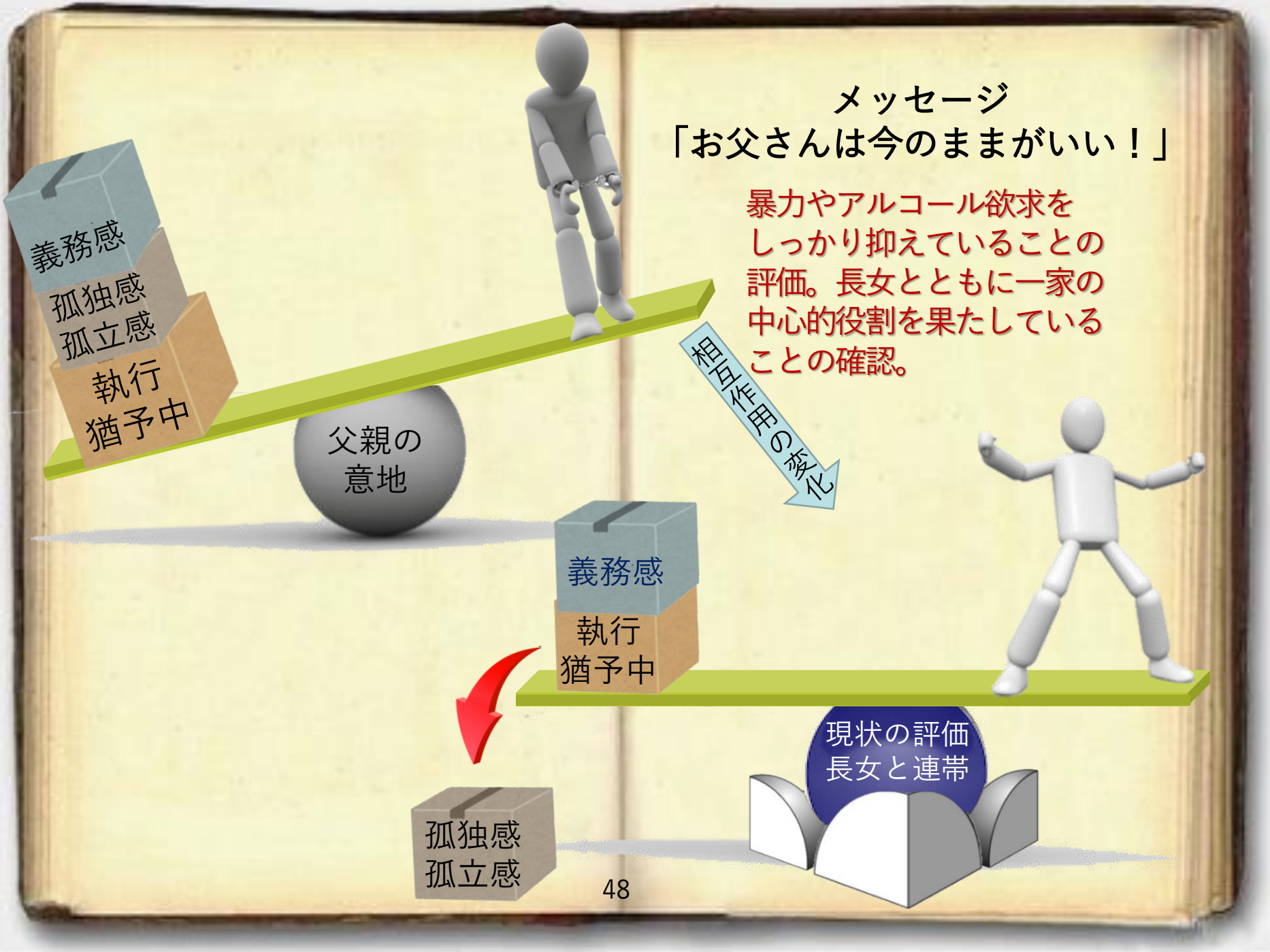
母親の飲酒を父親が叱っているとき、長女が「いい加減にしてよ！」と言い、それに父親が「学校を休むやつが偉そうに言うな」と怒鳴った。父親の態度に驚いた長女は、発作的にリストカットをして家を出た。しばらくして近くの交番に行き、家に帰りたくない、生きていても仕方がないと訴えて児相で保護された。

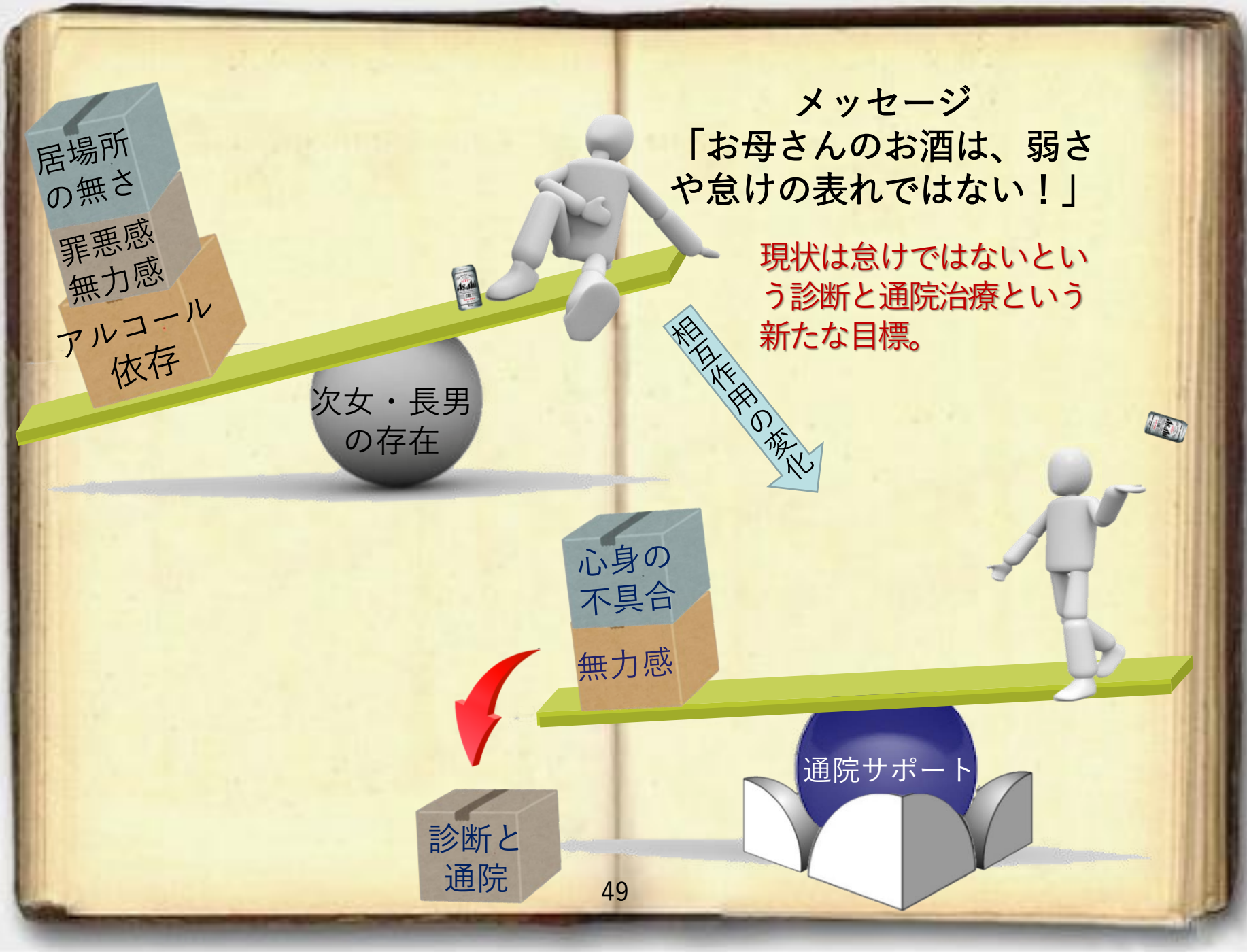
母親は、児相に呼び出されて事情を聞かれたうえに長女からは帰宅を拒まれ、飲酒に歯止めがきかなくなった。激高した父親が手を上げそうになり、心配した次女が児相に電話。結局、子ども全員の一時保護となる。

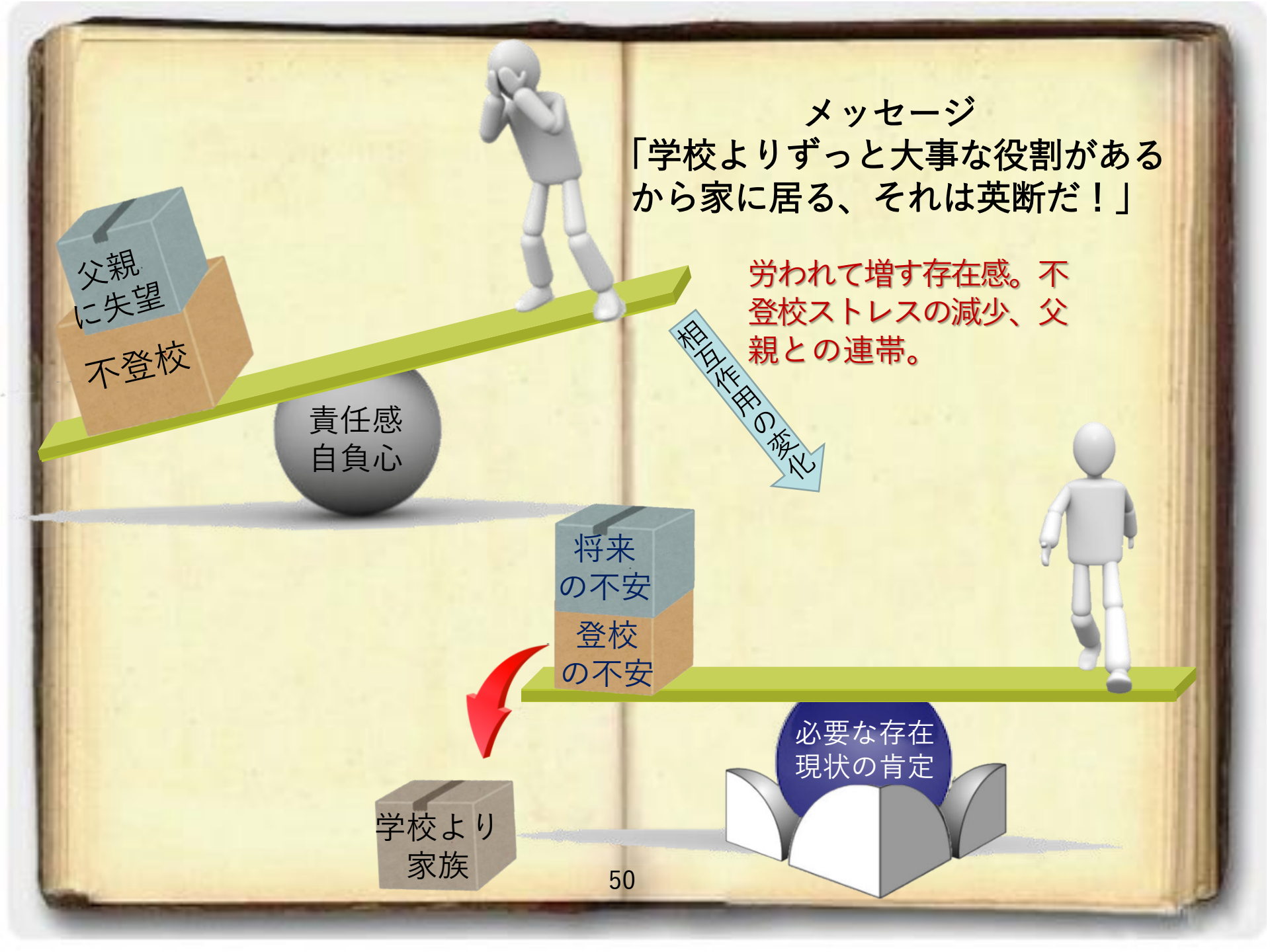
話し合いの結果、母は断酒のために通院する、父親は暴言を控えると約束。次女・長男は家庭引き取りとなった。長女は迷ったあげく父親の提案を受け入れ、保護所で今後のことを考えることになった。

「ビジュアル」系というタイトルですので、前回までのディスカッションをふまえ、家族の相互作用の変化を図に表してみました。
　イラストはフリー素材から選んで微調整し、好き勝手に組み合わせています。



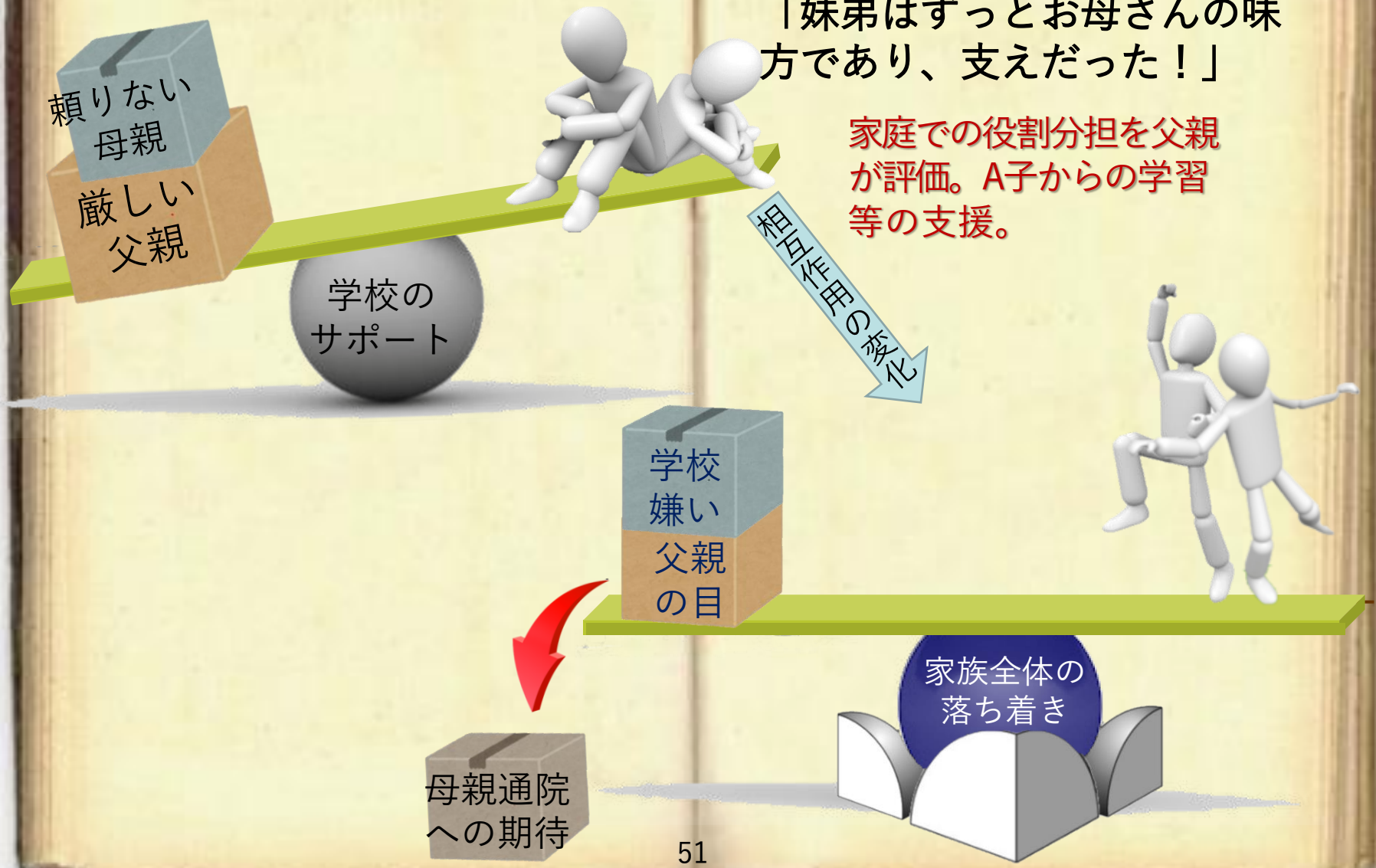

メッセージ
「お父さんは今のままがいい！」
暴力やアルコール欲求を
しっかり抑えていることの
評価。長女とともに一家の
中心的役割を果たしている
ことの確認。
義務感
孤独感
孤立感
執行
猶予中
父親の
意地
相互作用の変化
義務感
執行
猶予中
孤独感
孤立感
現状の評価
長女と連帯


メッセージ
「お母さんのお酒は、弱さや怠けの表れではない！」
現状は怠けではないという診断と通院治療という新たな目標。
居場所の無さ
罪悪感
無力感
アルコール依存
次女・長男の存在
相互作用の変化
心身の不具合
無力感
通院サポート
診断と通院


メッセージ
「学校よりずっと大事な役割があるから家に居る、それは英断だ！」
父親に失望
不登校
責任感
自負心
労われて増す存在感。不登校ストレスの減少、父親との連帯。
相互作用の変化
将来の不安
登校の不安
必要な存在
現状の肯定
学校より家族

メッセージ
「妹弟はずっとお母さんの味方であり、支えだった！」

家庭での役割分担を父親が評価。A子からの学習等の支援。



晩年
D・A・N 通信

No. 1 2022.05.20～

団 士郎

仕事場D・A・N

D・A・N通信をご存じない方も多い事と思うので、まずその歴史を述べる。次頁の新聞記事は１９９１年（３１年前）の産経新聞。このタイトルで日誌コラムを１８回連載したものの第一回目だ。この二年ほど前、つまり 1989 年から「D・A・N 通信」と称するミニコミ通信をほぼ月刊で、最初は８０人、この時点では２００人に郵送していた。年賀状以上に手間のかかるものを、毎月切手を貼って出していたわけだから、相当に思いがあったのだろう。私は日常の個人的気づきをダラダラ書き知らせるのが好きなのだ。それを手にした新聞記者が、これを連載してみないかと言ってくれた。マンガはすでに連載していたが、文章をと言われたのは初めてだった。この第一期郵送版「D・A・N 通信」は、いつだったか記憶にないがだんだん多忙になり、やがて終えた。

第二期は「仕事場 D・A・N 通信」として 2001 年に復活した。京都駅前ルネッサンス・ビルで「よみうり文化センター」のプログラムの一つとして「団士郎トーク・ライヴ」を継続開催することになり、参加者に領収書代わりに A5 版冊子（下部写真）としてお渡しすることにした。これは 37 回、5 年余で終了した。

その後、2011 年 2 月から、日録ツイッター（基本的に同時・同文で、時に少々の書き加えも含め Facebook と併用）を１１年余（ツイート数８０００通）、現在も継続しているが、それまでの D・A・N 通信と比べれば、手間は何ほどのこともない。

そして今回、第三期を「晩年 D・A・N 通信」として 2022 年 5 月 20 日（７５歳になった日）を起点にスタートすることにした。ＳＮＳ掲載文を文字制限を外し、日付も抜いて、自在に書き膨らましてゆこうという企画である。一癖ある老人の日常や頭の中に、少しでも興味があればご覧いただきたい。



D・A・N 通信

団 士郎

'91/11/2の

気まぐれが続ける秘訣

★月★日　ミニコミ個人ペーパー「D・A・N通信」を出しはじめて二年たった。友人、知人に向けて八十部から始めたものが、15号の現在では二百部に拡大している。読者の中には未知の人も多くなった。読者の友人とか、たまたま見せてもらったとか、そんな理由で発信を依頼してこられる。

気が向いたら送ることにしているが、購読料や切手を送ってこられる方があるのには困ってしまう。こちらとしては気まぐれに面倒くさいことをやっているにすぎない。だから、逆に言うならきちんと送る義務もない。私の場合、これが続ける秘訣だと思っている。

面白いもので、こうして発行していると、全国あちこちからポツポツとミニコミ誌（紙）が届く。同じようなことをしている人がたくさんあるのだ。

★月★日　通信はA3の紙を変則的四つ折りにして、定形郵便物の最大封書サイズにする。三カ所をシールで止めて、あて名と切手をはって出している。この紙の選択がけっこう面白い。

いままで別に紙の種類などに関心があったわけではない。はじめは画材店、そして紙屋さんにでかけるようになった。よく行くのは京都・寺町の紙司柿本。コピー印刷の用紙の条件は、厚すぎないこと（はがき程度の厚さまで）と、表面にでこぼこがないことである。店に行くといろんな紙がおいてある。本の表紙で見たことがあるものやカタログなどによく使われているものなどもあって、それぞれの紙の持つ雰囲気で選んでいるのがよくわかる。

通信の場合、どんなものでもかまわないから、毎回違った紙にすることを心掛けている。これまでは「パラダイス」「アンドレ」「新草木染」といった名称の紙を使った。それぞれに数種類の色違いがあるから、季節に合わせたり切手に合わせたりして楽しんでいる。

（漫画家、児童相談所員）



2022/05/20　75 歳になった

昨日のぼむ（1970年から50年以上、月例会を実施している8人の漫画グループ）集会で、6月1日から大阪・梅田の商業ビル NU 茶屋町で一ヶ月、ウクライナ平和漫画展をやる話を聞いた。

今月（五月）開催中の京都マンガミュージアム展では叶わなかった私の掛軸展示ができるようなので、仕事場に戻って夜中、出品候補作をブラッシュアップして、今朝、業者（京都・す屋吉）に至急製作を打診。受けてもらえるとのことで、これが75歳になった朝、スタートの仕事になった。

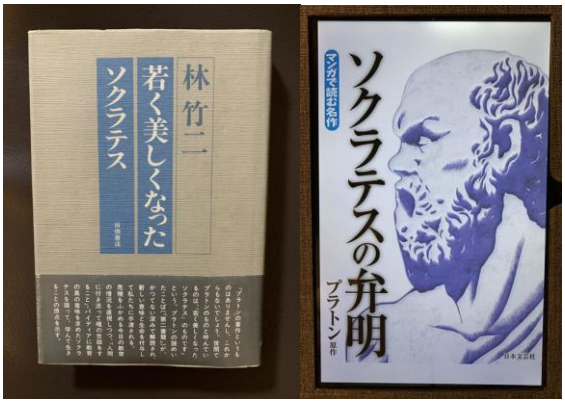
この展覧会は開催中に NHK の全国ニュースに取り上げられ、ビル管理側から18日間の展示延長提案があって、二か月近く開催された。そして篠原ユキオ（ぼむ中心メンバー）のつながりで鳥取県事業として、七月には鳥取市、倉吉市、米子市で10日ずつの巡回展覧会が実施された。



▲月▲日

どこかに引っかかってはいたが、私の人生において手を出したいと思ったことのないジャンル「哲学」。一昨日、突然、古書で買って放ってあったこれに手がのびた。湊川高校定時制で林竹二氏が行った公開授業記録の章から読み始めたら面白い。

そこに書かれた「ソクラテスの弁明」のことが知りたくて、こちらはコミックス版を kindle で。ソクラテスにつっこみを入れながら楽しむ。読み方は自由だからね。



▲月▲日

昨日実施したWSの世話役友人に案内されて、札幌から夕張市へドライヴ。新緑の山、草原を快適に走る。小高い場所には残雪もあってさすが北海道。

炭鉱博物館を見て、胆振東部地震被災の厚真町被災地も通る。小山があちこちで土砂崩れの跡を残している。恐竜の化石の出た町や、牧場の競走馬を眺めて空港に。





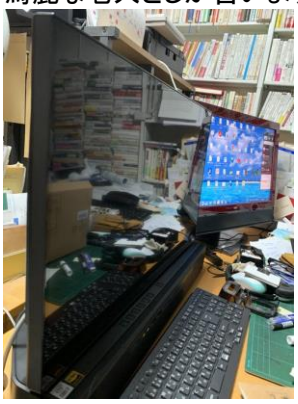
▲月▲日

対人援助学マガジン第49号の締切日。続々と原稿が届く。

いよいよ昨年末から寝かせたままだった新しいデスクトップ PC を開封。机に2つ並べて使えば良いという発想をアドバイスされるまで、新旧の入替が億劫でズルズル、新古品化してしまっていた。

性能はだいぶ違うのにまだ古いのを使ってしまうだろうなの予感あり。

近年ますますの事だが、新しい道具をAmazonで購入しておいて、開封、セッティングが億劫で仕方がない。その結果、段ボールのままのものが増える。馬鹿な老人としか言いようがない。



▲月▲日

立命館大学院で一コマだけの授業。人が撮ってくれた写真を見ながら、太ったなぁと思う。人生で太ったなんて感覚はごく近年のこと。

まぁ、負担になるほどの体重ではないから、腹が出たなぁなんて感想でお茶を濁しているが格好が悪

い。少しは食べるのを控えるとか、エクササイズするとか。でも、目標達成まで生きてないかもしれないしなぁ。



▲月▲日

気になるのに長い間、仕事場に放置していた使わなくなったパソコンやプリンター、コンポ等十台余を廃棄業者に持って帰ってもらった(有料)。その関係であちこちに少しスペースが生まれた。結局は本を詰めてしまうのだろうが、仕事場の贅肉が少しとれた。

今の仕事場 D･A･N は2LDK と一人事務所としてはゆとりがある。10年足らず前、同じフロアの部屋(1LDK)から10メートルほど引っ越したのだ。

当初はゆっくりしていたが、すぐ物の山になってしまって、今では窮屈なところも。そこからこれだけの物を運び出してもらったというわけだ。



そんなすがすがしい気分の中、間抜け老人の典型のようなことやってしまった。ホームページで連載中のコラム「私的埋蔵文化財」の原稿を先取りして 5 回分ほど書き進めていた。データを失くしてはいけないのでUSBのバックアップを取ろうとして、作業中データを消してしまったらしい。復旧させる元気が出てこない。しばし休載か。



この落胆の数時間後、「アア、ヤッチマッター」と思ったのが早合点だったことが判明。よく調べてから判断しろ！

失敗を嫌がる余り、ろくに探しもしないで諦めて嘆くのは、懸命に探しても見つからない未来を想像して、それを嫌がる弱い防衛だ。

▲月▲日

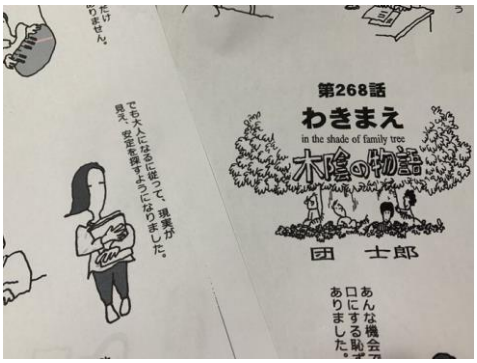
対人援助学マガジン編集作業の隙間。先週土曜日、東宝シネマズ二条で観るのは止めておこうと決めたのに、結局、movix 京都に観に行ってしまった。長男がSNSで面白かったと書いていたのだ。

第一作と同じで、わかったような話なのにハラハラ楽しい。パンフは売り切れ。映画ってこういう楽しさの事でもある。



▲月▲日

週末出かけるので、今日中に送っておきたい「木陰の物語」新作、第 268 話目を完成。毎月 4 ページだから22年以上 1072 頁。全くよく描いてきたもんだ。ここからまた新しい本「家族の練習問題/第９巻」が今年中に出版予定。楽しみは尽きない。



▲月▲日

高知家族理解ワークショップを、懐かしさ満タンの施設で。木の香りのするいい感じの建物。二年四ヶ月ぶりの開催だが、この間、参加者の立場の変化もいろいろ。変わらないものはない世界で、コロナ禍やウクライナ問題の余波を受けつつ、みんな生きている。



▲月▲日



朝日新聞の朝刊にこの記事が掲載された。鷲田清一さんの本はいくつか読んでいる、好きな文章を書く哲学者だ。2011.3.11 をきっかけに、無料配布し続けた文庫本が、どこかから届いたのだろう。

この物語は「家族の練習問題」第二巻に収録。youtube で「団士郎　花嫁」で検索すると、このリミテッド・アニメーション動画（4分）がみられる。

▲月▲日

昔からこういう物が好きだ。最近、あるきっかけで興味を持ったのは「円筒分水槽」。知らなかった。

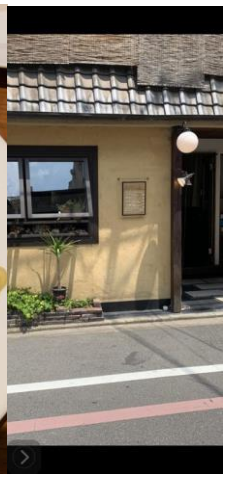
水が湧き出て、絶えることのない時間が刻まれているのを見ているのが好きだ。原体験は隧道に多量の水が呑み込まれていく琵琶湖疏水。明治時代の産業遺産だ。そのすぐ側で育った。



▲月▲日

ストレッチに行った後、珍しく肉が食べたくなった。最近、ビーフを美味しいと思えなくなっていたので、鶏、豚が多かったのだ。和食の野菜ばかり食べていることも多い。そこで通りすがりの知らない店を見つけてランチ。シンプルで清潔な新しい店。美味しく食べられた。開店三ヶ月目とか。また行こう。





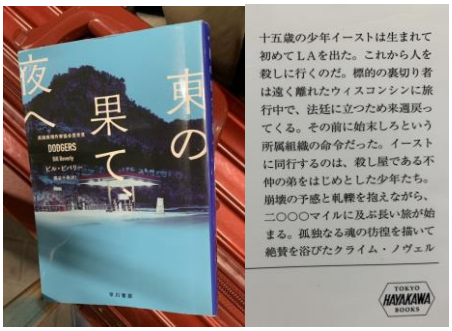
▲月▲日

青森県弘前市で家族理解ワークショップ。十八

人の参加で五人が初参加。二十年以上通い続けている地域。継続がもたらす物が大きい事を感じる。昨日、空港からの道中、田舎館村の植えたばかりの田圃アートを。ぼんやりモナリザが見えた。



ここ二週間ほどの間、併読していた小説を、遠征の間に読了。アメリカ大陸を長距離、車で旅する物語。足跡を残さないために飛行機は使わない。カードも使わない。車で、現金精算で殺人目的の旅を続ける。小説感がとても良いし、「東の果て、夜へ」という邦題もいい。



▲月▲日

かなりのシャツ好きだ。呆れるくらいの数、クローゼットに並んでいる。だが、中でも好きなものに偏って着ているとよれる。

これも延々と愛用してきた一枚だが、いよいよ裾がほつれてきた。もう外へは着て行けない。だから一人暮らしの自宅で着ている。十年程前にLL bean京都？北大路店で買ったものだ。



▲月▲日

仕事場から十分ほどのところが京都御苑。薄曇りの20℃ほどの中、5000歩ほどの散歩に出かけた。ノートPCを開けるところがあったらと思っていたら、こんな屋外テーブルが。ここでしばし、今夜のトークライブの仕上げにかかる。風が気持ちいい。一人で上手に遊ぶもんだ。



▲月▲日

対人援助学マガジン49号がアップした。拡散希望。一人でも多くの方に、関心のある記事を届けたいので、どうぞよろしく。



▲月▲日

明日の浜松家族理解WSのため、前日入り。世話人とこれを。鰻はなぜか子どもの頃から大好物。よく、京都・江戸川に両親と妹の四人で、食事しに行ったからかなぁ。





▲月▲日
アナログ人間だから web 発行の対人援助学マガジンをプリント製本する。それを移動中にパラパラ読む。面白い記事が多いと思うのは自分が編集長だからだけではないと思う。なかなか読み切れるボリュームではないが、試しにご覧ください。
年4回、遅れることなく発行を支える執筆者の誠実さが読み取れます。



▲月▲日
先日観たのを思い出して、第一作目のこれを久々に夜中に再見した。トムクルーズは若いが、トニースコット監督が作ったこれ。新作「トップガン・マーベリック」を観てすぐなのに、古い感じがどこにもない。カッコいいだけの映画だが、IMAX の大画面で新作の方を再見したくなった。



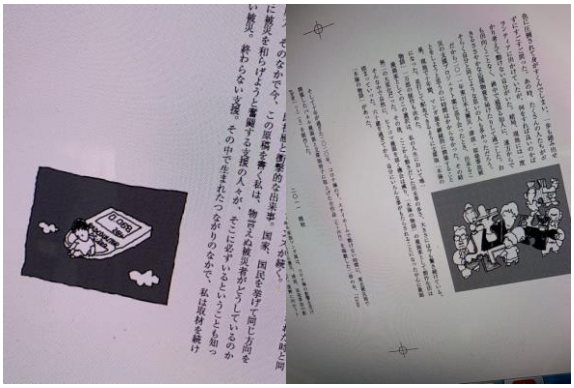
▲月▲日
思い立ったが吉日だ！IMAX シアターでも大スクリーンの劇場を検索してみたら、万博記念公園前の劇場が関西一らしい。大阪での用件の前に足を伸ばしてみたら、月曜の昼前なのに結構な人出。同じようなことを考える人も多いのか。
IMAX シアターは海外も含めてあちこちで訪れたが、最近は小さめのスクリーンのもあって期待外れ。昔、天保山のサントリーミュージアムにあったIMAX劇場は、見上げて、見下ろすような大画面だった。



▲月▲日
見たいものがあって、仕事場への道中、京都漫画ミュージアムに回り道。ところが火水が休館日だと。ミュージアムの休みは普通月曜だろうと思い込んでいて、調べなかったのが悪いんだけど。ならば髪でも切ろうと電話すると一時間後の予約に。それでこんな景色のスタバで来月の新作木陰の物語を思案している。コーヒーフラペチーノ・ワンショット追加で。



▲月▲日
まもなく刊行される「災厄を生きる一物語と土地の力　東日本大震災からコロナ禍まで」のイラスト配置の最終校正を済ませた。なかなか興味深い記述が多いと思う。ぜひ、Amazon などでご購入下さい。国書刊行会　刊　予定価格 2400+税。
しかし本の売れない時代で、初刷り数も驚くほど少ない。



▲月▲日

先日、休館日だったマンガミュージアムに出かける予定をしているが、何だ33度ってこの気温。「谷口ジロー展」を覗くつもりだったが、ちょっとひるんでしまうな。

この展覧会、東京・世田谷美術館でやっていた時、出張の足を延ばすつもりでいた。ところが京都巡回展があるのを知って、それならと他の何かを見たのだったが、何だったか？

で、谷口ジロー展だが、マンガ原画展ってあんまり心惹かれないのだけれど、来てみるとそうなのか…と思うことがある。頑張ってマンガ描こうと思えたのも収穫。

このミュージアム、こんな時期でも人出が多い。若者がたくさんいるのが、新聞社等の企画もの美術館との差だな。





▲月▲日

新幹線京都駅でタイミングが合うと必ず松葉のにしんそば。京都人の好みのようで、エッ、蕎麦に魚？と言われたこともある。我が家の年越し蕎麦もずっとにしんそばだった。

で、今から九州に向けて出張。明日の八女WSの前ノリ。



▲月▲日

福岡県八女で4回目のWS。前回は二年前、コロナ禍はいろいろ変則を作り出してきた。無事、五時間プログラムを終えて帰路に。これで続いていた毎週末の遠征は一区切り。さくら車中の読書など楽しもう。



▲月▲日

今日は家で休日気味の仕事。最近、youtube でこればかり何度も聞いている。イーグルスの「ホテルカリフォルニア」には懐かしい思い出がある。

そして、na Relo サウンドは大瀧詠一にもオールディーズにもピッタリ。福岡のグループらしいが、ライヴが観られたら楽しいだろうなぁ。



【70's】[歌詞付]...
na Relo 洋楽チャン...
48万 回視聴・3 週間前

▲月▲日
毎月の木陰の物語新作を、スタバで一気に下書き完了。今回はちょっと違ったテイストのものにさせてもらう。
ランチは山科の無印良品で。食後、来年作りたい本の文章を書き足す。この後、仕事場に行って、夜はペン入れの予定。

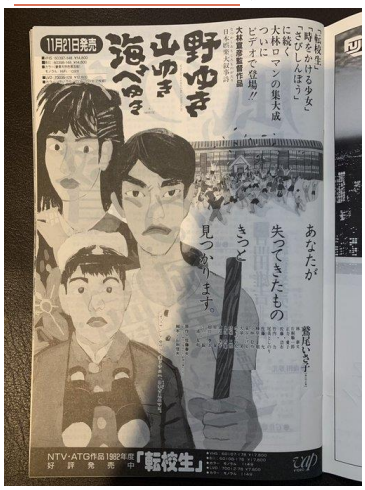



いったいそれが何なのか、どうしたら発生するのか、さっぱり分からない。とにかくたまにしか来ない大波が今日の午後訪れた。
その結果、新作の下書き後、新しい話を二作、完成できた。こんな日は格別うれしい。コンスタントにこういう波が来てくれないものか。

▲月▲日
現在、大阪と鳥取で平和漫画展を開催中だが、京都ではこの漫画展が始まる。三か所で同時期に出品しているのは初めてかな？
京都・河原町三条角の画廊での開催。掛け軸を一作品出す。通りかかったら覗いてみてください。



▲月▲日
週末はダラダラと Netflix。今朝の大雨のせいで身動きならず、午前の予定が狂ってしまった。その結果、珍しい来客を自宅に迎えることになり、結果的に楽しく歓談した休日だった。
士郎さん.com のホームページ連載コラムが一年の半分を越して第 27 回目。今シリーズはずっと映画に紐づいた事を書いている。映画評論など出来ない。映画がもたらした記憶の話だ。
www.shiro-san.com



▲月▲日
KDDI の大々的接続不具合ニュースは私には関係ないと思っていた。いくつか連絡や返信があって良さそうなものが無反応で、多少の見込み外れな事柄も起きたのだが、接続トラブルと関連づけていなかった。
今頃になって、繋がらなかったと複数の連絡があった。そうか、先方の通信会社は AU かもしれない。こちらだけの話ではないのか。



▲月▲日
　東日本大震災　被災地訪問十余年とは、どんな事をもたらしたのか。今も継続開催中の東北・木陰の物語マンガ展とは何だったのか。それが今の私に植え付けたものとは。
　そんな事を私の章では書きました。7 月 23 日発行予定。Amazon で予約できます。



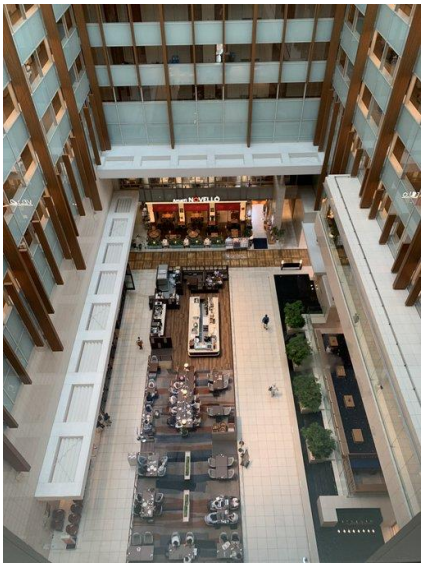
▲月▲日
　日本漫画家協会・関西ブロック展で、ギャラリー当番担当日。昼頃から漫画家・高月紘さんとおしゃべり。五十年も前、ぼむが活動し始めた頃、すでに自作漫画集を発行していた人で、廃棄物問題の専門家。京都大学名誉教授でハイムーンのペンネームの「ゴミック」の作者。
　細く長くの50年近いお知り合いだが、その間には、KBS 京都ラジオでレギュラー番組をしていたある日、今日のお客様は誰でしょう？とアナウンサーに言われて、「はぁ」と首をかしげていたら、登場したのが高月さんというサプライズがあった。



▲月▲日
　家族の練習問題第九巻の候補作とコラムが送られてきた。はじめにと後書きを作成し、最終提案をまとめて編集者に返す。いよいよ九巻目になるのかとしみじみ思う。
　2006 年に第一巻が出てから十六年。ここまで続けられたのは、買って下さる読者のおかげだと感謝。そして完成しましたら又、宜しく。



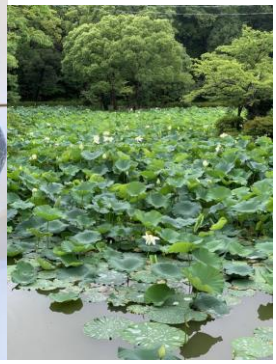
▲月▲日
　久しぶりにこんな高いところから街を眺めている。東京での仕事の前日、新横浜に来た。
　今から娘と食事。本当は孫も一緒で久々の対面だったが、体調不良。それならキャンセルでよかったのだが、夫が「みているから、お父さんに会っておいで」と言ってくれたそうだ。



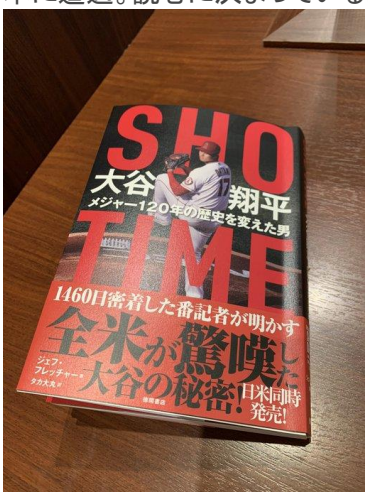
▲月▲日
　渋谷の音楽スタジオを借りて、去年に続いて出前講座用の DVD 第二弾の収録。
　完成したものを貸し出し、世話人に立候補してくれる人にあちこちで講座を開いてもらう、話し合い用素材。
zoom とも違って、収録はリズムが微妙。私しか気づかないことらしいが、ライヴとの差は大きい気がする。

後日、手の込んだ編集のデモを見せてもらったが、よく出来ている。まさにプロの仕事だった。

▲月▲日
六十年以上ぶりの鎌倉に、長男一家のお宅訪問。みんなに会えて楽しくご飯を食べた。四月に二人で旅をした中三の孫と再会。なんかいい感じだった。
夕刻から滋賀で仕事なので、ホテル近くの鶴岡八幡宮だけに立ち寄り、大きなハスの花を見て、参道の店で朝取れ生シラス丼を食べて帰路に。

▲月▲日
今夜から zoom 講座の第 4 シリーズ（全6回）がスタート。準備も整い、それまでにストレッチに行って、映画を一本観ようと出かけた。
その道中の書店で、こんなウキウキものエンタメ本に遭遇。読むに決まっている。楽しい。

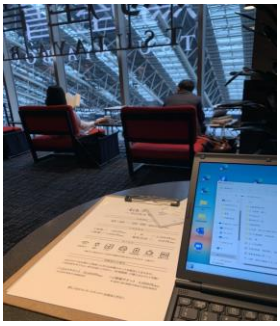


映画「エルヴィス」。私の思春期に少し上世代のスーパースターだったから、世界的にはヒットでも日本では誰が観るかなと心配する。
平日 2 回上映が京都の劇場の現実。そこそこ人は入っている。前半、メチャメチャ面白かった。2 時間 39 分は少々長いから後半少しね。バズ・ラーマン監督のミュージカルは好みだから良いけど。



▲月▲日
仕事も結婚生活もスタートさせた五十年前の福知山。すっかり様変わりした場所で専門領域公務員が圧倒的多数参加のトークライヴ、三時間。快調に話せた。
終了後、旧知の友人二人と懐かしい場所「かき末」で食事しながら歓談。ここに川崎二三彦が加わったメンバーで、「四人囃子」というミニコミ誌を結構長く出していた。その後特急あさしおで帰路に。

▲月▲日
大阪梅田での漫画展が好評の会期延長で昨日終わったので、朝から撤収作業に。壁面に貼り付けた作品は剥がすのに一苦労。疲れてしまった。
夜は立命館茨木で東北プロジェクトの例会なのでそれまでの間、前にも一度利用した TSUTAYA 梅田店の中のここで二時間仕事を。フリードリンク付きで 1000 円。



▲月▲日

出張仕事の移動新幹線は EX アプリで、在来線は e5489で。宿泊の段取りは楽天トラベル。出先からの移動や、目的地への経路選択は駅すぱあとと、すっかりアプリに頼り切りになってしまっている。便利だし、変更も自在だが、自分の中から移動のマネージメント力が落ちていくのが実感される。

コロナの感染拡大ニュースを受けて、土曜日の金沢での石川家族理解 WS が延期になった。今までで一番直前の中止決定。参加予定者の不安や、立場上の判断など、いろんな心配を皆が抱えることになる。それなら延期もやむなし。またの機会を待つことに。JRのチケット払い戻しに行かなきゃ。



▲月▲日

立命館大学大学院の人間科学研究科で夏季と冬期二日間ずつの WS を継続している。



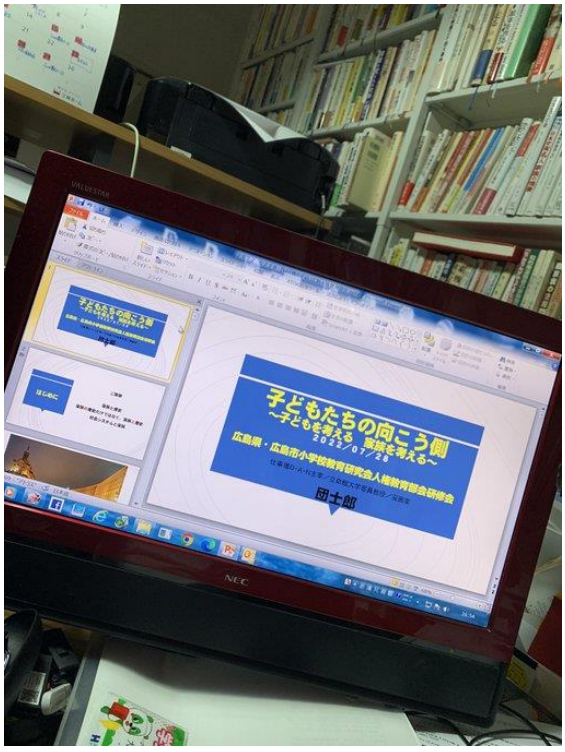
茨木キャンパスに行った後、母校春日丘高校前を、何十年ぶり？に通った。すっかり様子が変わっているような、面影があるような。あの頃、今日、こんな立場で校門前を歩くことになるなんて想像もできなかった。

校門前には古い苦い記憶がある。あるとき、ここに教職員労働組合の立て看板が出ていて、中身は忘れたがすごく嫌な感じがした。若くて保守的だったのだろう。それを破り捨てた。その後、どうなったのかの記憶がないのだが、そんな高校生だった。15 歳から 17 歳頃、ここが全てで、先のことなど何も見えなかった。

▲月▲日

明日の広島講演用パワポを構成中。コロナ禍で延期、中止もある中、ここは実施される。スケジュールを見ると、今七波？は予定通り開催のものが圧倒的に多い。

一方、身近な友人は家庭内感染だと聞く。用心はするが、結果は支配できないということ。どこまで続くぬかるみぞ。



▲月▲日

毎年依頼されて描いている家族心理学会年報の表紙が、今年も出来上がった。発売はまだ先だが、今年の本はこんな顔をしている。

テーマに関心のある方は覚えておいて手に取ってみて下さい。



▲月▲日

広島へ。近年の JR、様々な事情による遅延や運休対応に、とにかく要所まで早めに着いておくようにしている。そして新幹線京都駅待合室で読書。

いい頃にホームに上がって、「あっバラ寿司買いたい」と思った。エスカレーターで下りて目当てのものを探してウロウロ。発見、購入、ホームに。

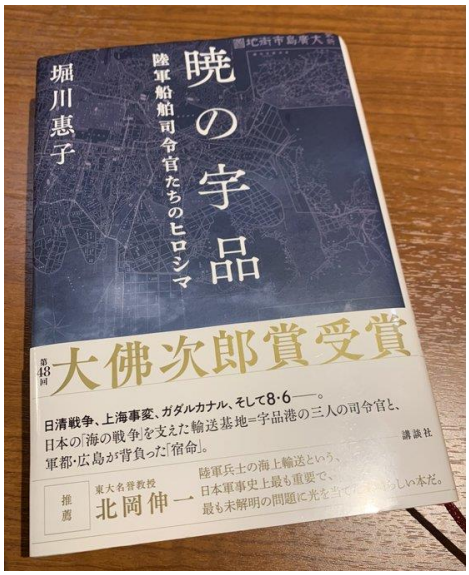
電光表示をみると、11:08 東京行と出ている。アレレ？反対ホームだ。大慌てで駆け降りて、駆け上る。11:07 広島行、入線中、焦った。

そしてこの最終末部分を広島行きの車中で読んでいる。この本は「ファミリー・ヒストリー」を一緒に探索してきた次男が発見して薦めてくれたもの。

ここに登場する三人の陸軍船舶司令官の先輩に当たる、二代目司令官だった人物が私の母方祖父なのだ。

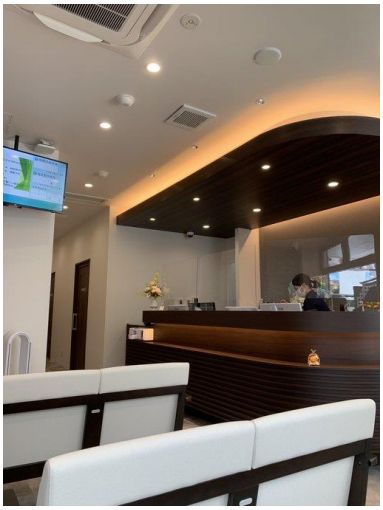
大正末期に退役して予備役になった祖父の軍人人生を、登場人物たちと重ねながら読んだ。祖父の兵籍簿にはウラジオ着任などの文言があったが、宇品を本部として兵站の仕事をしていたことが読み取れる。

昭和の登場人物たちは皆、物資輸送の観点から、だんだん勝ち目のなくなっていく戦争を見つめていたのだ。



▲月▲日

恒例の人間ドックに大腸カメラを追加したバージョンを初めて、京都の内視鏡クリニックで受けた。前日からの絶食プラスの準備には参った。映画「ミクロの決死圏」みたいな映像を見せられながら話を聞いた。大きな心配はなく、出来ることはしておきましょうの結果。



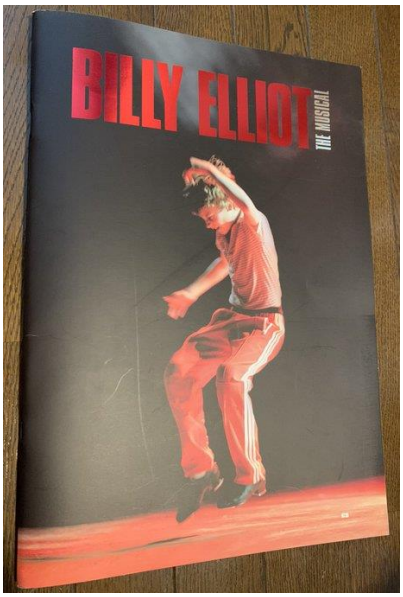
▲月▲日

話はわかってるでしょ。いつも同じ、なんて思うのに観てしまう。IMAX で 3D。好きだねぇ。

でも不思議なことに今回、やたら第一作を観た頃を思い出した。1990 年、初めて再生恐竜を見上げる、あの驚きのシーンから 30 年。この作品の歴史も見てきたんだなぁとしみじみ。



▲月▲日
　映画、舞台にまつわる記憶を、パンフレット片手に一年間、ホームページに連載している。
　先々と書き溜めているから、書けなくてとばすことはない。ところが書いてあるのに、管理人に送信を忘れるのだ。それを何度も繰り返す。今朝も督促を受けた。今週はこれです。

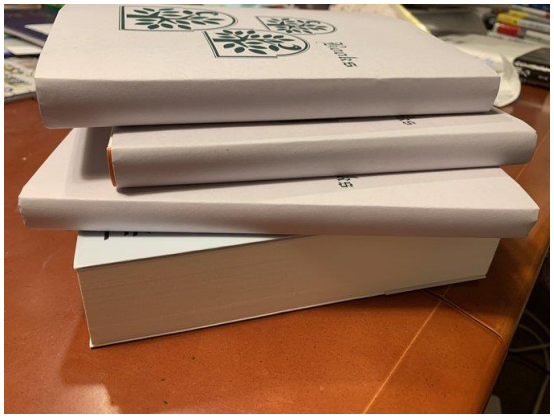


▲月▲日
　酷暑だしコロナ禍だし。基本的に仕事場か家に居て、外出しない日も多くなる。そんな中でも果敢に計画を実行するところはある。その心意気は好きなので、やると言われたら出かける。

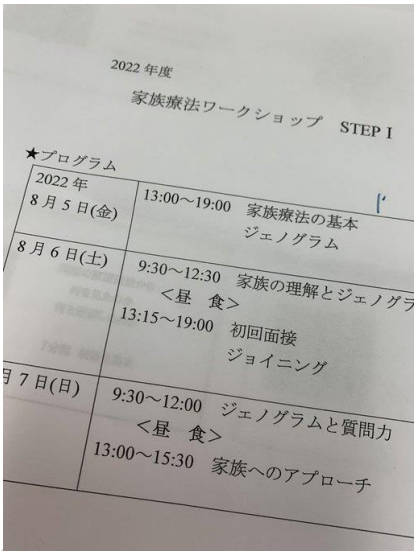
今日は地元、滋賀県愛荘町に講演に。学校の先生たち対象の研修。皆さんが予想していた話じゃなかったかも。



▲月▲日
　今読んでいる短編集がめちゃ面白い。今村翔吾の勢いがいい。本購入が加速して一度に三冊。仕事場に来たら Amazon からもう一冊届いていた。出かけなければならないところは行くが、そうでなければ読書の夏で部屋にいるかなぁ。
　最近、遅ればせながら Netflix のリアリティ・ショーにはまっていて、結構あれこれみている。



▲月▲日
　コロナ禍をかいくぐって家族療法ワークショップ step1 が無事開催できた。人数制限をかけて結果、二十二人でのスタートになった。
用心深く慎重になら不開講が無難だ。でもそれを続けているのも、その間にも加齢していくのが気になる歳頃の我が身にはつまらない。参加者には楽しんで欲しい。



2022 年度

家族療法ワークショップ　STEP I

★プログラム

2022 年 8 月 5 日(金)	13:00～19:00　家族療法の基本 ジェノグラム
8 月 6 日(土)	9:30～12:30　家族の理解とジェノグラ <昼　食> 13:15～19:00　初回面接 ジョイニング
7 日(日)	9:30～12:00　ジェノグラムと質問力 <昼　食> 13:00～15:30　家族へのアプローチ



▲月▲日

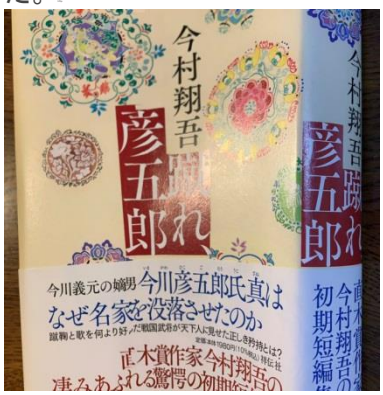
WS　第二日。初回家族面接のロールプレイ実施中。この後は 3 グループに分かれて、家族づくりと、お互い役割を交互に面接実施体験か 19 時まで。



▲月▲日

三日間の WS を終えた月曜日。休日にはならないが、自宅で今週の予定の準備と連載コラムの書き溜め。早目に用意するので、のらなくなったら気を散らして、ビデオを見ても、読書しても、支障はない。

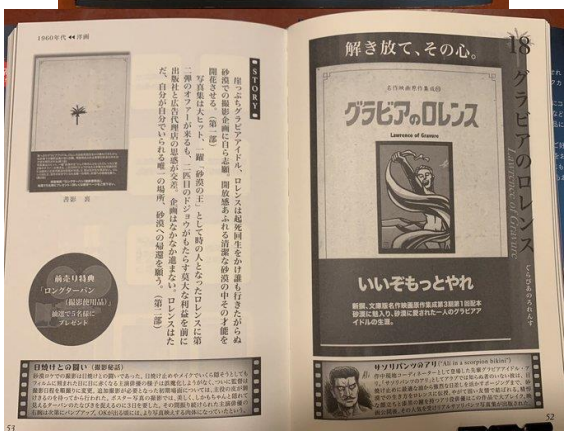
「蹴れ、彦五郎」は、やはり今年一番の短編集だった。



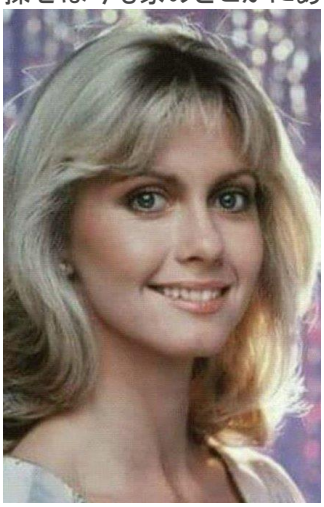
▲月▲日

だいぶ以前に、注文していたのを忘れていた。封を開けてみて「羊たちの親睦」の駄洒落に笑った。最初から終わりまでこのペースである。思わず声が出てしまったり、苦笑いもたっぷり。中味はない。

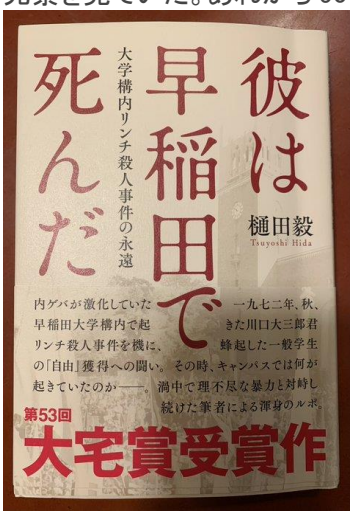




▲月▲日
大昔、大阪フェスティバルホールのコンサートにドキドキしながら出かけた歌手、オリビア・ニュートン・ジョンが亡くなった。滅多に外タレ公演など行かなかったのに。大ヒット曲も良かったけれど、カントリーソングの LP があって、それがとても好きだった。探せば今も家のどこかにあるかなぁ。



▲月▲日
手にした 200 頁足らずの恋愛小説が、中小企業の社長の自慢話の聞き書きのようで、読後感最悪だった。そこで買ってあったこれに手が伸びた。ちょうど同時代、同志社大学のキャンパスで同じような光景を見ていた。あれから 50 年も経ったのだなぁ。



▲月▲日
去年に続いて、シーズン 2 を、やることになった。学校教育相談誌連載を読んでくださる読者に向けた、「先生のための、団士郎さんと家族を学ぼう」案内をぜひご覧ください。



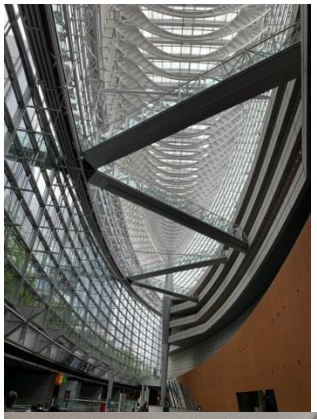
▲月▲日
二年前、今日が特別な日になった。妻が亡くなったのだ。
有難いことに私は元気に過ごさせて貰っている。これは亡妻始め、子ども達や、身近な友人、知人の方達の支えのおかげだということは十分理解している。
相変わらずバタバタした日々を楽しく生きていられることに感謝だ。
祥月命日、合掌。



▲月▲日
　台風の影響で遅れ気味の新幹線車内にいる。今のところ 2,30 分の遅れで動いている。
予定より大幅に早い時刻の自由席に乗ったので、二年半ぶりの東京 WS には間に合うだろう。
でもコロナ禍と台風のお盆の時期に、参加者はたどり着けるのかな？



▲月▲日
　東京国際フォーラムは、会場として便利だし、値段も公設だから、それほど高くないらしい。
こんな条件下でも、十三人が集まって、いろいろやっている。





▲月▲日
　丸の内 oazo の丸善で、この本に目が止まったことで、対人援助学マガジンの新連載構想がはっきりした。早速、店内 cafe で読みながら、前文を書いた。
久々に DAN 通信を再開する。第三シリーズになる。
シンボルスカの前作「終わりと始まり」もネット注文。



▲月▲日

ストレッチ後、久しぶりにトレイントレインでランチ。タリーズで明日夜の zoom 講座②の準備をほぼ仕上げる。上映時刻を確認しておいた movix 京都でこれを。169 分と長い映画でトイレに一度立った。面白そうな話の気がして、これはビンゴの予定だったが、それほどでもなかった。タイトルは原題ではない英語で、これは「ストーリー・オブ・マイ・ライフ」のダジャレかよと思ったのだが、その先入観が抜けなかった

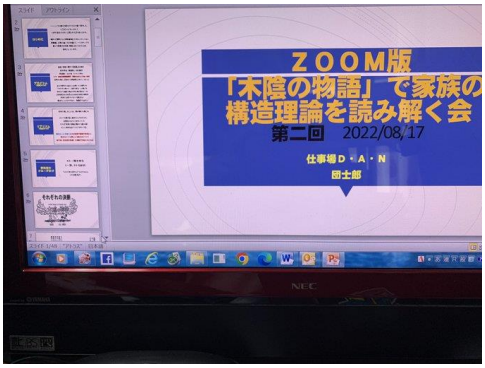
行きつけのお惣菜屋で夕飯を見繕って仕事場に戻る。大文字送り火は避けて、対人マガジンの原稿を書く。



▲月▲日

夜 20 時から二時間、zoom 版事例検討プログラムの私風展開を考えた新シリーズの 2 回目を終えた。zoom の利便性、参加者の時間、経済、体力負担の軽減と、中身の充実、満足度を試行錯誤している。

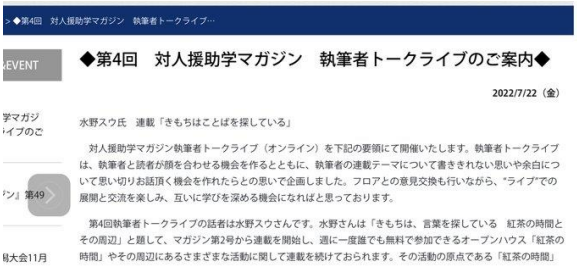
何より面白かったと言ってもらいたい欲が強い。面白ければ良いと思っているので、ヨロシク。



▲月▲日

今夜は zoom でこの集まりがあった。水野スウさんのお話に、スウさん縁の方がたくさん参加して下さって大盛況だった。

マガジンとの関わり、自分の本の出版や、ほめことばのシャワー、そして出前憲法講座の話。
承知していたいろんな事の隙間が埋まる話があった。
豊かな時を過ごせた。



社会的養護の新展開 19

―稲盛和夫氏と社会的養護―

浦田 雅夫

京都女子大学

2022 年 8 月末、京セラ名誉会長である稲盛和夫氏、ご逝去の報に接した。

「一代で京セラを世界企業にした」「NTT の独占下の通信業界で KDDI を創業した」「盛和塾を開き、経営哲学、フィロソフィーを説いた」そして、「日本航空を再建した」などが新聞、ニュースで大きく報道された。一方で、社会福祉事業家としての側面はあまり多く報じられていないが、とりわけ社会的養護の分野においての貢献は大きい。

私は、稲盛和夫理事長（当時）のもと、京都府精華町に建設された児童養護施設・乳児院京都大和（だいわ）の家の草創期に初代施設長西川満氏とともに関わらせていただいた。稲盛氏がどのような経緯で社会的養護に関わられるようになったのかは神田（2012）が詳しく述べている。

さて、講演も含め、何度か直接、稲盛氏のお話を聞く機会があったが特に印象に残っている話がある。

ある北国の湖の畔で、毎年、飛来する渡り鳥の群れに餌を与える老人の話である。ある年、老人は餌付けに来なかった。その年はひどい寒波で湖は凍結した年であった。もはや自力で餌をとることのできない渡り鳥たちは餓死せざるを得なかったというのである。

私なりに児童養護の場におきかえ考えるならば、その子どもの状態や特性、ニーズを把握し、しっかりとアセスメントした上で、いま何をしなければならないかということを中長期的な視点ももって行うということだろ。支援者の一時的な感情による行為は、かえって子どもを無力化させてしまうこともある。

「周囲に感謝の心をもつこと」「感謝は幸運を呼び込む」ということもいつも説かれた。

これも私なりに考えるならば、本来、基本的信頼感を形成する親子関係において深い傷つきや不信を持ち、家庭や地域、社会に対する反感も強い社会的養護を必要とする子どもたちが、「周囲に

感謝の心をもつこと」ほど難しいことはないと思う。感謝どころではなく、不平不満にあふれている者も少なくないからだ。しかし、だからこそ、彼らが自然に感謝の気持ちを持てるような関わりが職員には求められるということだろう。

稲盛氏は児童養護施設・乳児院運営のため 2003 年に社会福祉法人 盛和福祉会を設立されたが、同年、公益財団法人 稲盛福祉財団も設立され、児童養護施設の運営開始と連動するように、児童養護施設や里親による代替的養育、措置を終えた若者の自立を支える「生活自立支援金」制度を創設している。この制度は若者が措置解除後、一定期間月々の支援金を受けるだけではなく、財団の職員が定期的に本人、施設から直接、間接に現況報告を受ける仕組みで、若者の退所後の困難や生活ニーズを把握する機会にもなっている。

養育の場を運営するとともに、出た後の困難まで思い至る背景に、稲盛氏自身の若いときの苦労や周囲からのサポートがあったものと思われる。

2019 年末に解散された「盛和塾」からは、総額 6 億円近い寄付を中央共同募金会に行い、赤い羽根福祉基金「盛和塾 社会人定着応援プログラム」が展開されているところである。

感謝の気持ちを持てなかった子どもたちが、ありがとうと自分で感じることができる社会をめざしたいものです。

合掌

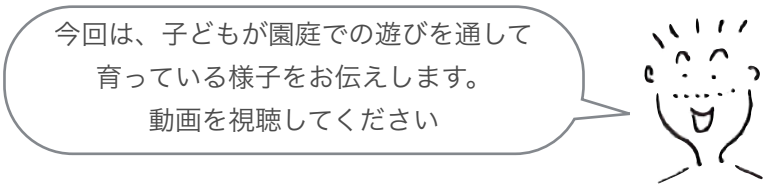
参考
神田嘉延「稲盛和夫と児童福祉 ： 京都の大和の家を中心として」鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要 4 巻 2012 年

https://www.akaihane.or.jp/seiwajyuku-2/



研究室からみえる京セラ本社

50・子どもが育つ園庭 その１



原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

今回のテーマのきっかけは、ちょっと長いんで飛ばして読んで頂いても結構ですが(^_^;)こういうことです。

↓

昔の同僚（鈴木さん）が大学教員をしていて、アジアの幼児教育の振興にボランティアで協力しているというので、僕も微力ながら協力する機会を得ました。

どんな内容かというと、「アジアの幼児教育は、いままでの教え込み型から遊び型へと変換しようとしているため、あそびを通して子どもたちの発達を促す日本型教育への関心が高まっているので日本の幼稚園の紹介をしてほしい。」ということでした。

７月のオンライン研修会に向けて「日本の幼稚園の紹介」というテーマをもらって思案していましたが、日本の幼稚園といっても千差万別、いろんなタイプがありすぎて「これがスタンダードです！」というのは難しい･･･という思いにぶち当たりました。

そこで、「あそび」にフォーカスを当てて紹介してみようということで、子どもたちの遊んでいる様子を動画で撮影して、通訳を介して解説しながら視聴してもらいました。

動画を作ってみて、**改めて園庭遊びの環境の大切さを再認識しました**ので、研修会で使ったものですが、少し手直ししてマガジンでも紹介します。



インドネシア教職員組合　第３回国際研修フライヤー

聞きかじったところでは、インドネシアの幼児教育と日本の状況はかなり違っていて、まずは経済状況で、インドネシアで幼稚園に通える子どもたちは、ある程度経済的に余裕のある家庭の子どもだそうです。教員の評価制度、カリキュラムの考え方もずいぶん違います。「あそびを通して教育する」という概念がまだ浸透しておらず、「あそびを教え込む」みたいな感覚もあり、動画を見て刺激を受けたり、危険では無いのか？という質問も活発に受けました。

しかし、あそびを通して子どもを成長させるんだ！切り替えていくんだ！という意欲は高く、私たちがのほほんと旧態依然の保育をしていると、追い越されそうなほどの強い意欲を感じました。

インドネシア幼稚園教職員組合 概要

・インドネシア幼稚園教職員組合の正式名称は、Ikatan Guru Taman Kanak-Kanak Indonesia （IGTKI:イージーテーカーイー）です。
・IGTKIはインドネシアの国立幼稚園と私立幼稚園の教職員及び退職者、保育研究者、中央及び地方政府の保育関係者が所属する組合です。
・高い人間性と専門性を有する組合員による宗教的・文化的多様性を相互に尊重した組織運営を使命としています。
・組合員の地位向上と親睦、研修実施による保育の質的向上を主目的に活動し、事務局は東ジャカルタにあります。
・加盟園はインドネシア全34州に及び、2021年7月31日現在の加盟園数は204,531園、組合員数289,000名です。
・保育関係者のみの組合としてはインドネシアで最も長い歴史を有する保育関係団体であり、インドネシアがオランダから独立した1945年8月17日の約5年後の1950年5月22日に設立されました。今回の国際研修には1000名が参加予定です。
・インドネシアは経済、教育、文化の地域間格差が大きく、交通費の経費負担なく受講ができるオンライン研修は、とくに僻地の保育関係者とって恩恵が大きいものとなっています。

園庭あそび『木登り』

　原町幼稚園には木登りできる木が何本かありますが、いちばん大きく登りやすいのはメタセコイヤの大木です。
　この木には「力のある子は登っていい」というルールがあります。下に踏み台を置いてもダメ、大人が手伝ってもダメ、禁止です。園のシンボル的な木で、子ども自身の身体能力・危機管理能力の集大成ともいえるのが、この木のてっぺんまで登ることです。

　自分の力で身体を引き上げられる力を持っている子どもは、木の上でも自分の安全を確保できると信じています。ちなみに、メタセコイヤの枝は互い違いに密集しているので、まんがいち滑ってもどこかに引っかかることができ（その時に“力”を持っているかどうかが大事になってきます）、枝が無いエリアの下にはネットを張ってあります。更に、木の根元にはゴムチップのクッション材を敷いてありますが、落下した子どもは今のところいません。年長の何人かがてっぺんを制覇し、憧れを持った子どもたちが日々精進？しながらてっぺんを目指しています。











動画が再生されないときはURLをブラウザーにコピーして下さい→　https://youtu.be/fkmgr7Q4eU4



あそび『ブランコ』





子どもたちに「幼稚園でいちばん好きなものは？」と聞くと「ブランコ！」という答えが多いんですよ(^o^)/

新園舎が建つ前は、ブランコは２基あって、計８人が同時に乗れたのですが、今は４人分しかありません。以前、１基はフラットな場所に設置してあったので、飛び降りや靴飛ばしなども良くやっていたのですが、今残っている１基は、50センチほどの高台に設置してあるため飛び降りする子どもはほぼいなくなりました。

高台に設置してあるメリットは、衝突事故の軽減にあります。前から来る子どもの高さよりもブランコが高いため、年齢の低い乳児が近づいてきても、坂を上るスピードが遅くなることで、乗っている子どもが危険を回避しやすくなることと、近づいてもブランコのほうが高いので衝突する率が低くなることです。柵を設けるよりも安全です。ちなみにブランコの後方は生垣があって後ろからブランコに近づくことはできなくしてあります。

二人乗りや後ろのり、鎖をねじって短くして（座面を高くして）乗ったり、ブランコからブランコへ渡ったりいろんな工夫をして子どもたちは楽しんでいます。交代して欲しいときは、前に立って「だーれかだーれか代わって～」と待ちます。保育者の補助を得たりして「○回こいでからね」などと言いつつ、なんとなくうまく交代しています。

動画が再生されないときはURLをブラウザーにコピーして下さい→https://youtu.be/mx-Of3eMVyI



園庭というのは、保育者のねらいや目標を設定した保育計画の外側にあって、子どもたちが自由に遊びながら、周りの子どもとイレギュラーに関わったり、異年齢で関わったりしながら、それぞれ経験を重ねたり自分の思いを育む場所だなあ、と感じます。

それだけに、園庭は重要な子どもたちの成長・発達の場だととらえ、固定遊具や道具を配置して遊んでいる子どもたちの育ちを促す“大きな仕掛け”を保育者は考えて環境を整えることが必要不可欠だと思います。





原町幼稚園　園長　鶴谷主一（61歳）　ＨＰ：http://www.haramachi-ki.ed.jp/

＊-＊

「幼稚園の現場から」ラインナップ

第１号　エピソード（2010.06）
第２号　園児募集の時期（2010.10）
第３号　幼保一体化第（2010.12）
第４号　障害児の入園について（2011.03）
第５号　幼稚園の求活（2011.06）
第６号　幼稚園の夏休み（2011.09）
第７号　怪我の対応（2011.12）
第８号　どうする保護者会？（2012.03）
第９号　おやこんぼ（2012.06）
第10号　これは、いじめ？（2012.09）
第11号　イブニング保育（2012.12）
第12号　ことばのカリキュラム（2013.03）
第13号　日除けの作り方（2013.06）
第14号　避難訓練（2013.09）
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について（2014.03）
第17号　自由参観（2014.06）
第18号　保護者アナログゲーム大会（2014.09）
第19号　こんな誕生会はいかが？（2014.12）
第20号　ＩＴと幼児教育（2015.03）
第21号　楽しく運動能力アップ（2015.06）
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く（2015.12）2019
第24号　お話あそび会その１（発表会の意味）
第25号　お話あそび会その２（取り組み実践）
第26号　お話あそび会その３（保護者へ伝える）
第27号　おもちゃのかえっこ（2016.12）
第28号　月刊園便り「はらっぱ」（2017.03）
第29号　石ころギャラリー（2017.06）
第30号　幼稚園の音楽教育（その1・発表会）2017.09
第31号　幼稚園の音楽教育
（その2・こどものうた）2017.12
第32号　幼稚園の音楽教育
（その3・コード奏法）2018.03
第33号　〔休載〕（2018.06）
第34号　働き方改革・一つの指針（2018.09）
第35号　働き方改革って難しい（201812）
第36号　満3歳児保育について（2019.03）
第37号　満3歳児保育・その２（2019.06）
第38号　プールができなくなる！？（2019.09）
第39号　跳び箱（2019.12）
第40号　幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉
（2020.03）
第41号　コロナ休園（2020.06）
第42号　コロナ休園から再開へ（2020.09）
第43号　ティーチャーチェンジ（2020.12）
第44号　除菌あれこれやってみた（2021.03）
第45号　マスクと表情（2021.06）
第46号　感染予防と情報発信（2021.09）
第47号　親子ソーラン節（2021.12）
第48号　親子コンサート（2022.03）
第49号　うんちでたー！（2022.06）
第50号　子どもが育つ園庭・その1（2022.09）

▶気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.jp

福祉系

対人援助職養成の

現場から⑤⓪

西川 友理

2020 年度の実習先確保について

2019 年末、中国で報告された原因不明の肺炎が新型コロナウィルス感染症と名付けられ、2020 年の２月～3 月頃には日本でも生活に大きな影響が出てきました。職場も学校も、どのような対応をすればいいかわからず、とにかく手探りで右往左往。保育所や福祉施設も出入りの人を制限することが増えました。利用者や入所者と、その家族との面会・外泊も、かなり制限されました。

そんな中で、養成校から実習生を受け入れてほしい、と言われても、現場としては、施設内の衛生環境を守るために、出来れば受け入れたくないというところも多くありました。

ですから、2020 年度の実習先確保は、どの養成校も苦労をしました。多くの実習先が「このような状況なので、実習の受け入れはしばらく見送らせてください」とおっしゃいます。それは意地悪でもなんでもなく、施設の入所者・利用者の健康を守らなければならない、さらには万が一施設内で感染症が流行った時に、実習生に感染させるなどということが起こってはいけない、という安全管理上、当然の判断をされたということです。利用者の方と実習生、お互いのことを思って、苦渋の決断で「本当にごめんなさい…！」と言って断ってこられたところも少なくはありませんでした。

また、この考え方は養成校の方にもありました。厚生労働省からは、「新型コロナウィルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」という通知がでまし

た。
　これを見ると「…実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない…」とあります。
「そりゃもちろん、学生に現場を見てきてほしいけど、養成校として、現場に迷惑をかけることは絶対に出来ないよ！」
　そういった考えから、早々に学内実習のプログラムを作成し、養成校が自ら、学内演習に切り替えたというケースも見られました。

　ところが、その影響は半年も経てば思わぬ形でやってきました。10 月～12 月頃、コロナを理由に、実習を断った実習先の多くが
「実習生に声をかけることも出来なかった。就職フェアも取りやめになった。人材確保に向けての動きが何も出来ていないのです…人材確保が出来ません。だれか、うちに就職したいという学生はいませんか？」
とおっしゃり、時には毎日のようにそのような園や施設からの電話を受けるようになりました。
　そうか、実習って現場の人材確保にこんなに大きな影響を与えるものなのか…。園や施設、さらには養成校も、この事態を重く受け止めました。

2022 年度の実習先確保について

　そんな 2020 年度を経て、2021 年度、そして 2022 年度。いわゆる「新しい生活様式」を併用しながら、実習も何とか実施出来、就職フェアもオンライン開催やハイブリッド開催が行われるようになっています。もちろん感染症対策には細心の配慮を持って、万が一感染者が出た場合の対応も、大体のセオリーが出来てきました。

学生による実習依頼電話

　実習をする際、どの現場で実習をさせていただくか。これは、学生が自分で実習したい現場に連絡をとって開拓していく場合と、学校が契約している実習先に養成校が学生を配属する場合があります。以下は、実習先を自分で開拓することになっている、ある保育士養成校で、2022 年に見聞きした話です。
　どの学生も、実習をお願いする電話はとても緊張します。携帯電話が普及した昨今、大人の人に公の電話をかけること自体が、ほぼ人生で初めてという学生も珍しくありません。緊張しすぎて半泣きの学生もいます。
「断られたり、叱られたりしたら、どうしたらいいのかわかんないです…めっちゃメンタルやられる…！」
「大丈夫、どうしても事情があってムリ、という所はそんなにないから」
「いやもう、電話すること自体が怖くて怖くて！！」
「うん、あのね、学生が自分で開拓する養成校もあるってことは、園側も知っているから、普通に礼儀正しくさえしていれば…。そうね、まるであなたが 3 歳の頃に初めて電話した、田舎のおばあちゃんくらいの、おおらかーな気持ちで、先方は見守ってく

ださるから。」
と滅茶苦茶な取り乱し方をする学生に、滅茶苦茶な励まし方をして電話を促します。

そして、当然ながら怖いことなどまずめったに起こらず、
「せんせーい、受け入れてもらえました！」
「向こうの人、めっちゃ優しかった！」
とケロッとして報告してきます。そうでしょうそうでしょう、よかったよかった。

なにせ保育や幼児教育の現場は、あと数年は人材不足が続くと言われています（逆にあと数年で状況は変わると言われていますが、これについてはまたの機会にお伝えしたいと思います）。実習が就職に強く結びつくということを思い知らされた私達です。何か先方に事情がない限り（そして過去にその養成校に大きな落ち度がない限り）そうそう実習を断られることはない、というのは予想がつきます。

なかなか実習先が見つからない！

ところが、このご時勢でもなかなか実習先が確保できない学生がいます。
「その時期、実習生はたくさん受け入れてしまっているから、もう受け付けていないと言われました」
「検討します、と言われて 1 週間待ったのですが、やはり難しいと言われました」
「今はコロナの影響もあって、実習生を受け入れてないと言われました」
しょんぼり落ち込む学生の肩をたたき、よし次！頑張ろう！と励まします。緊張する依頼電話にも慣れてきたころ、3 か所目、4 か所目でやっと実習先を確保できてうれしそうな学生たち。それらは、どんな学生でしょう。

実は、男子学生なのです。

もちろん、男子学生でも１回目の依頼で受け入れてもらえることもあれば、女子学生が断られることも１回や２回はあります。断られた園の中には、本当に実習生が沢山いるので、この時期はやめてほしい、という園もあります。しかし、3 園、4 園に断られた学生を見ると、見事に男子学生がそろっています。こうなると、
「…男子学生は、就職に繋がらないと思ってるんじゃないの…？」
「…男子を就職させる気がない園は、実習させる気もないんじゃないの…？」
「…というか、男子の就職って、いまだに拒否されるものなの‥‥？」
と、邪推とは思いながらも邪推してしまいます。学生自身も、肩を落とします。
「やっぱり男子って、保育現場ではなかなか受け入れてもらえないんですかね…」

「やっぱり男子って

受け入れてもらえないんですか？」

という話を、現場の男性保育士にしてみました。
「いや〜〜〜わかる！俺もそうだったもん」
「でも、僕が務めているところはそんなことないよ、法人内に男子会があるもの」
「男子会、すごい！あ、でも俺のところも

めっちゃ働きやすいし、男子の実習生もたまに来ますよ」

それを聞いて私は思わず、うちの男子学生、あなたの所で実習させて！と予約をしてしまいたくなります。

男性保育者が

働きやすい現場、働きにくい現場

ちょうど２年前、対人援助学マガジンの42号に、現場の男性保育士が、性別役割分業にとらわれる保育現場の中で、生きづらさを感じていることについて書きました。令和二年度の保育現場での男性比率は約4%。保育現場では超少数派の男性保育士です。

しかし、２年前の記事にも書きましたが、上記のように男性保育士が働きやすい園と、働きにくい園があり、その差が広がっているように感じています。

こんなに男女格差について言及されている社会において、性別役割分業が根強く残る現場もあるということです。ではその両者の違いはどこにあるのでしょうか。

それは、実際に男性保育者を受け入れた園と受け入れていない園ではないかと感じています。

過去の研究から

2000年頃の研究で、男性保育者が実際にいる園よりいない園の保護者のほうが「ダイナミックな遊びや工作などを男性ならではの役割を男性保育者に期待する」という傾向があり、さらには「乳児保育には男性保育者には適さないと考える」という傾向があるという指摘がありました。同じ研究で、男性保育者がいる園の保護者の方が「男性の保育者の存在に肯定的」といった結果が出ています[1)]。つまり、実際に男性保育者に接した保護者の方が、性別役割分業にとらわれずに男性保育者を認識しやすい傾向にあるということです。これは保護者だけでなく、男性保育者と働く同僚の女性保育者の中にもそのような傾向が見られます。同じ頃の研究で、男性保育者と働いた経験のある女性保育者の方が、経験のない女性保育者よりも男性保育者の低年齢児担当を積極的に認めているという研究があるのです[2)]。

21世紀に入った前後、性別役割分業に基づく考え方はまだまだ色濃くのこっているものの、少しずつ、性別にとらわれない「保育者としての資質」そのものを問う傾向が出てきたのではないかと考えられます。

それから20年が経過しましたが、先述したように、男性保育者は全保育者のうちのまだ4%に過ぎません。現在においても男性保育者を受け入れたことがない園もまだまだあります。男性保育者を受け入れたことがある園とない園とでは、その格差がどんどん広がっているのではないかと考えられます。

さらに、一歩踏み込んだ研究が。

さらに近年の研究では、また面白い傾向

があります。

20 年ほど前の男性保育者に関する研究では、最終的に性別役割分業にとらわれず、「その人そのもの」「保育者としての専門性そのもの」が大切、という結論になるものが多かったのですが、近年の論文の中には、「そもそも、男性保育者って女性保育者とどう違うの？」という「違い」に着目したものが見られるのです。それらはいずれも「男性性にのみ着目することの危険性（男性に対する性別役割の押し付け等）」を認識し、それについての配慮を踏まえた上で、男性保育者による保育の特徴について示した研究論文となっています。

例えば山中らの 2021 年の研究では、鬼ごっこにおいて、女性保育者よりも男性保育者の方が実際の運動量は少ないにもかかわらず、男児の活動を促進していたという結果を提示しています。平たく言うと、男性保育者相手の鬼ごっこの場合、男性保育者が走り回っていなくても、そこにいるだけで、女性保育者の時よりも、男の子がはしゃぎまわることが多い、ということです[3)]。

中澤らは、男性保育者は女性保育者よりもユーモア行動を多く用い,特に攻撃的なユーモアを身体的に表出することが多かったとしています。そのユーモア行動は、幼児が失敗をしたり、困ってしまったりというネガティブな事象が起こった時に、それらの軽減・解決を促進するために用いられていることを見出しました[4)]。

また、これらの論文にはもう一つ特徴があります。昔の男性保育者についての研究の多くは「どう思うか」「どう感じるか」「どうあってほしいか」という「意識」を調べたものが多かったのですが、近年の研究では実際に数量的なものの計測、保育場面で実際に起こった事例など「事実」や「数値」等をもとにした研究したものが散見されるようになっているのです。これは単純に男性保育者が保育現場に一定数増加したことで、実際の行動や事実をデータとして量的に把握することが可能になったためではないかと考えられます。

性別に関わらず一律に保育者の専門性を大切にすることは、一見とてもいいことのように思いますが、男性保育者に対して無意識な同化型差別（同じ保育士なんだから、性別に関わらずに女の人と同じようにやってよ！というような差別）を引き起こすという可能性も考えられます。それを考えれば、むしろ男性と女性の違いについて、データを事実として明確に把握することで、お互いの特徴が明確になり、それぞれ良いところを生かし、より豊かな保育現場を構築できるともいえるかと思います。

そして、性的少数者もいます。

もう一つ、私が注目していることがあります。性的少数者の学生です。学年で１人や２人くらいは性的少数者の学生がいるということは、どの養成校でももうほとんど当たり前になっています。統計的に考えてみれば、各地の幼稚園や保育園、様々な社会福祉の場にも、性的少数者の人がいるのが普通です。

実習生や勤務者だけではありません。岡山大学大学院で行われた性同一性障害の患者を対象とした調査では、性同一性障害の約 56.6%の人が、性別違和感を持ち始めた

時期が小学校入学前であると答えています[5)]。

保育における男性性がどうだ女性性がこうだという議論をするその先に、性的少数者の子どもと職員に対して、園がどういう姿勢でいるのかということも話題に上がります。

保育現場におけるジェンダー

5～6年ほど前、『幼児の性自認』という本が出版され、保育業界ではちょっとした話題になりました[6)]。幼児の現場は特に性別による区別がない、と考えられていたのですが、この本は幼児教育や保育の現場で子どもたちが自分の性自認（自分は男の子である、女の子である、という認識をもつこと）を形成するにあたり、様々に影響を与える事象があることを明らかにしたものです。

ひなまつりやこどもの日など、日本の伝統行事はジェンダーに関わるものも多くあります。子どもたちに文化を伝えるのもまた、保育の場の大事な役割です。では、さてジェンダーの視点から見た時に、何をどのように伝えていく工夫が必要でしょうか。そのような配慮は不要なのでしょうか。

ジェンダーに関する話は、保育現場の子どもと職員に直結する話です。現場にいる保育者がどう考え、どう振るまい、どのように周囲とコミュニケーションをとるのか、普段のかかわりが子どもたちに直接影響します。

「性の話は　生の話」という言葉があります。保育現場におけるジェンダーのあり方については、養成校の教員として、今後もお付き合いしていきたい、学生と共に考えていきたいトピックなのです。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

１）鈴木弘光・斎藤政子・木下博美「男性保育者に対する調査研究（3）保護者を対象とした意識調査から」『湘北紀要』21 巻, pp.35-45, 湖北短期大学　2000 年
２）中田 奈月「男性保育士による低年齢児保育の困難」
『保育士養成研究』第 21 巻 pp.19-27
全国保育士養成協議会『保育士養成研究』編集委員会 編　2003 年
３）山中拓真　本多舞「男性保育者は幼児をより活動的にするのか？～保育者と幼児の性別の組み合わせが幼児の身体活動に与える効果の検証」『保育学研究』 59 巻 1 号, pp.45-56, 2021 年　日本保育学会
４）中澤潤　中道圭人　永井保「男性保育者のユーモア行動に関する仮説の生成と検証千葉大学教育学部研究紀要 55 巻
pp.71-77
千葉大学教育学部　2007 年
５）中塚幹也「性同一性障害と思春期　（第 31 回小児保健セミナー　思春期と性の問題をめぐって）」『小児保健研究』75 巻 2 号
pp154-160　2016 年
６）大滝世津子『幼児の性自認―幼稚園児はどうやって性別に出会うのか』みらい
2016 年

ああ、相談業務

～恵（仮名）さんの話～

10

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

いろいろなケースの相談に乗ってきた。虐待ケースや、家族の精神疾患、発達の問題、金銭問題、DV などなど。そのような中、離婚だけではなく、家族がバラバラになったり、子どもがなくなってしまったりするケースほどつらいことはない。今回はそんなケースのお話をしてみようと思う。

家　族

筆者が出会った時の恵さん家族は、母親である恵さん、父親、長男、長女の４人家族であった。その後次女が生まれ、５人家族になる。出会った頃は、父母は４０代半ば、長男が６歳、長女が３歳であった。

相談の始まり

この家族は、いくつもの問題を抱えていて、最初の関わりは、長女の発達の問題であった。前回でも伝えたように、発達相談室に移ってからは、発達の相談が主になり、それに付随して家族の問題にかかわるようになっていった。

長女は、１歳半検診時に、保健師の方で発達が気になり、発達相談につなげようとしたが拒否され、２歳時点での再検査も拒否されていた。保健師からは何とか３歳児検診で発達相談につなげたいが、恵さんが中々気難しいのでどうなるかわからないとの話を聞いていた。

相談経過

３歳児検診で長女は案の定、落ち着きのなさや言語理解の低さでひっかかり、保健師があの手この手で何とか説得して発達相談に回してくれた。保健師の努力にも脱帽であるが、恵さんも１歳半の時点から言われていたことが気になったのか、しぶしぶ発達相談に回ることになった。

恵さんは、相談に乗り気ではなかったので、最初からとても不機嫌で、開口一番「この子は特に問題があると思っていない。どこを見て問題があると言われるのかわからない。」と半ば喧嘩腰で

あった。

こういうことはよくある。「家では特に困ることはないが、広い場所に来ておだった（興奮した）だけだ！」「このくらいの子はこんなものだ。上の子はもっと動きも多かったのにひっかからなかった。なんでこの子が引っかかるんだ！」などなど、最初にいろいろおっしゃる。親の気持ちになれば、当然である。子どもの発達に問題があると言われるのは、不安を煽るし、それだけではなく母親の育て方が悪いと言われているように感じてしまうのだ。子育てのほぼすべてが母親任せであることが多いので、子どもの問題はすべて母親の責任であるという風潮は今でもある。そんな母親の気持ちを受け止め、なだめるところから相談が始まる。

恵さんのイライラした感じが収まるまで話を聴きながら、恵さんが二人の子育てをいかに頑張ってきたかということをこちらからお伝えし、その大変さを共有し認める。そんな中で、父親の協力がないことの不満などがたくさん出てくることも多い。その不満を共有し、一通り文句を聴く。そんなことをしているうちに少しずつ落ち着いてくる。そして、長女の良いところ、かわいいと思うところなどを聞いてから、ちょっと気になるところなどを引き出していくのだ。

「そうですよね。お二人目だし、そんなに子育てに不安はないでしょうね。お子さんの良いところもわかっていらっしゃるし、素敵ですね。ただ、検診の場所では、落ち着かないお子さんも多くて、中々しっかりお子さんの様子を確認できないことも多いのです。それで、この静かな場所で、もう少し詳しく見て、お子さんの得意なところや苦手なところがわかると、お母様もより関わりやすくなるのかなと思うのですが・・・。」などと説明し、何とか発達検査をすることに同意をしてもらった。

長女はとても元気で明るくて、活発なのだが、反面落ち着きがなく、気が散りやすいところは特性として出ていて、更に、表出言語や理解は若干遅めと出た。発達年齢で言えば、一年くらいの遅れで、母子通園につなぎたいところだが、当時母子通園もいっぱいで、中々繋げられない状況であった。また、今何とか発達検査をさせてもらったところですぐに母子通園の話は拒否感が強そうだったので、３か月後の再検ということで、遊びながら関係性と発達確認をしていこうということにした。恵さんとの関係性もある程度作れたようで、再検については快く了解してくれた。

こうして、恵さんとの関係が始まった。３か月後の再検には、長女と二人で時間に遅れることもなく来てくれて、長女は指導員と遊び、恵さんは筆者といろいろなことを話すという形で、その後も３か月ごとの相談を繰り返していった。

恵さんからは、父親は働いてはいるが、お酒の問題とお金の使い方の問題があり、しょっちゅう大喧嘩になる事、家計の足しにと内職（飛行機で使うイヤホンの耳あての部分の交換）を家でしているが、子どもたちが邪魔をするのではかどらないこと、時々すべてが嫌になって上の子にあたってしまうことなどが語られた。かかわりが難しいと保健師からは聞いていたが、人とのかかわりが下手なために人間関係が少なく、孤立している母親であることが分かった。ただし一度関係ができると、何でも、あけすけに話をしてくれることも分かった。ストレスを長男にぶつけないようにすること、父親のお酒の問題は、病院受診がよいと思うし、喧嘩は子どもたちの前でしないようになど、様々な助言も聞いてくれるようになっていた。長男にあたってしまうということもあって、その旨、家庭児童相談室の方には情報提供をしていた。長男も、話を聴いていると、やや自閉傾向が入っていそうな感じで、こだわりが強いために手を焼いているとの話もあり、検査を一度受けると良いねと話していたが、児童精神科は予約がいっぱいで中々入れず、半年待ちの状況であった。

長女は、その後、母子通園に無事繋がり、更に数か月後に児童精神科を受診できて、ＡＤＨＤと軽度精神発達遅滞の診断が下りた。診断が下りたことで、恵さんも納得し、療育手帳を取って、今後も支援を受けていくこととなり、筆者の役割は

終わるかと思ったが、そんな矢先に、長男への虐待で通報されるということが起こった。長男が小学校１年生、夏休み前ごろのことである。頬にうっすら痣を作って来たと学校から通報があった。

恵さんから叩かれたと訴えたとのことで、児童相談所が介入する話となった。

児童相談所は恵さんや父親と面談をし、暴力では解決しないことなど説明したが、二人とも、長男が何度も同じことを繰り返し、注意しても聞かなかったから躾だと主張した。二人とも、子どもの頃、殴られたり叩かれたりして育っていたので、口で言ってわからない場合は殴ったり叩いたりしてわからせるという躾け方しか知らないのである。こういう家庭は当時も、今も沢山ある。虐待で通告される親の多くがこういう育ち方をしている。それでも児童相談所の福祉司が何とか説明して、今はそういう躾が認められないことを納得してもらった。この際丁度よいからということで、児童相談所で長男の発達検査と医師の診断も受け、広汎性発達障害（現神経発達症群の自閉スペクトラム症）ということが分かった。この診断結果に恵さんも父親も納得したが、関わり方についての相談は、家庭児童相談室ではなく、発達相談室で筆者が受けることになった。

発達相談室は就学前の子どもの相談を受けるところだが、長女の相談もあるし、母親との関係性が築けているからということでこういう話になり、恵さんとは、月１回程度、定期的に相談を進めていった。

相談を続ける中で、やはり父親への不満が毎回酷く、話し合いもうまくできない様子で、長男の発達の問題から、どうも父親も同じ障害を持っているのではと恵さんは考えだした。そう思うのであれば、そういう人への対応の仕方を考えなければねということで、いろいろ策を練って、父親とうまく繋がれるように支援していった。筆者からすれば、父親の問題もあるかもしれないが、むしろ恵さんの方が、自閉スペクトラム症ではないかと思われるような、こだわりの強さ、融通の利かなさ、一方的なコミュニケーションなど特性が見られたのだが、恵さんがそう思い込んでいるのであれば、それに乗っかりながらも夫婦関係をよくしていくことが、子どもたちのためにも良いと考えて、わかりやすい言葉がけ、目に見える形の活用、恵さんからの感謝の言葉がけなど、いくつか実践してもらっているうちに、夫婦関係が良くなり、第３子の妊娠という運びになった。高齢出産ではあるし、予期せぬ妊娠ではあったが、父母ともに子の誕生を楽しみにしていた。この間、長男への虐待もなく、長男と恵さんの関係も以前よりずっと良くなって、長男も勉強ができるので、認められることも多く、表情も良くなったと学校から報告が来るようになった。発達支援ファイルを作成し、学校で特別支援対象児として、普通学級の中で支援を受けながらという状況で安定していた。

全体的に落ち着いて、良い状態になったし、第３子の妊娠でつわりが酷かったのもあって、月１回の相談が、少し間を開けても特に問題なく過ぎていくようになり、その年の１２月でいったん終了となった。

今度生まれてくる子にも発達の問題がある可能性は高いので、また関わるであろうとは想定していたが、恵さんとのかかわりは違う形で訪れた。

翌年の５月に第３子が誕生したが、その子は無脳症であった。無脳症では、７５％が死産、生まれたとしても１週間以内に亡くなることがほとんどといわれている。折角生まれた赤ちゃんがこのような障害を持って生まれたことで、恵さんはさぞや気落ちしているのではと思い、退院後お見舞いもかねて家庭訪問をした。赤ちゃんは、ベビーベッドで寝ていた。いろいろな装置に繋がってはいるが、顔だけ見ると穏やかであった。頭は帽子ですっぽり隠れていたが、脳がないであろうことは感じられた。ご両親は無脳症であることを途中で知ったが中絶はせず、産むことを選択した。

恵さんにお話を聴くと、生まれてすぐ検査をして、脳幹の部分が無脳症としては発達していたので、いましばらくは生きていられると医師に言われたそうだ。どのくらい生きられるかは医師にも

わからないそうで、必要な装置をリースして、自宅療養にしたとのことだった。医師の説明を受けて、無脳症であることはショックだったが、でも生きている間、しっかり面倒を見たいという恵さんの思いは強く、たくましく感じた。いずれ訪れる死を覚悟しながら育てることは猶更辛いだろうにと思った。

父親はどう思っているのかと聞くと、「怖がって触りもしない。」という。もともと、長男や長女についてもあまり関わらなかった人である。まして、見た目にもわかる障害を持って生まれたので、「余りのことに、ショックが強くて受け入れられないのではないか」と伝えながら、「少しずつでも慣れて、抱っこできると良いね」などと話していた。

赤ちゃんは脳以外の内臓は問題なかったので、体は成長していった。もちろん最初のうちは、呼吸が止まったりすることもあって、一秒たりとも目を離せず、必死の看病が続いた。しかし日を追うごとに少しずつ状態が安定していった。１週間が過ぎ、１か月が過ぎても、生き続けた。アメリカでは１歳まで生き続けた例もあると聞く。脳のどの部分がどれだけ欠損しているかも影響しているのだろう。脳幹がある程度機能していたので、順調そうに育ち、３か月を過ぎた。その間、重度身体障碍の診断を受けて医療補助など受けられるものすべてを、そして母子通園の訪問リハビリも受けながら、奇跡的に生き続けた。

長女は保育園に上がり、長男も学校で支援を受けながら順調にやれていることもあって、相談は終了していたが、時々恵さんから電話があったり、こちらから電話をしたりして、少し話すくらいの状態が続いた。その都度、恵さんを労い、長男や父親への対応のアイデアを出していった。

恵さんが、次女のことに必死になるため、長男と長女の状態が徐々に悪くなった。もともと不器用さがある恵さんである。三人三様に問題を抱えているのに、それぞれに対応することが難しくなったのだ。長女は母子通園から保育園に入園し、父親が、朝夕の送り迎えを担うことになった。愛情不足もあり、乱暴になったり、落ち着かない日々が続き、園から恵さんに連絡が来ることも増えた。連絡をもらっても、恵さんに何かできる可能性は低い。動けないのが現状である。家庭児童相談室とも連携しながら、恵さん家族の支援をどうしていくか、要保護児童連絡協議会を開催して、情報共有し、それぞれの機関で支えていくことを再確認した。次女の看病の疲れやストレスもある中、非協力的な父親に対し、イライラが爆発することも増え、喧嘩がまた激しくなっていった。そしてやがて、長男にも再び当たるようになったのである。

学校や園は長男や長女のフォローを中心に行ってもらい、母親のストレス発散という形では、家庭児童相談室も相談を受けるようにして、みんなで支援していった。

そんな日々が続いたある日、次女が亡くなった。想定していたとは言え、５か月であった。恵さんは、頑張っていた分ショックも大きいのではと心配していたが、弔問に伺ったときは思ったより元気だった。亡くなったことは残念だが、５か月も生きられたのは恵さんの頑張りのおかげである、何かあればいつでも相談に乗ることを伝えて失礼した。その時は父親も家にいて、二人で出迎えてくれ、また見送ってくれた。

それから数年間は、時々恵さんから電話が来て、最近の様子などを話したりしていた。恵さんは家庭児童相談室にも時々行っては、父親や子どもたちの愚痴をこぼしていたという。

その後筆者は退職し、個人の相談室を開設したので、その旨連絡を入れた。恵さんは、離婚を考えているが、子どもたちがもう少し大きくなったらと話していた。家庭児童相談室からは、長男への虐待で、その後一回通報があったが、それ以降は落ち着いていると聞いていた。

しばらくしたある日、長男から電話があった。恵さんから怒鳴られたりすることが多く辛いというのだ。長男には相談室の電話番号を教えていたので、それを見ての電話だった。一度おいでと誘って相談室に来てもらった。今どうしているの

かと聞くと、高校に通いながら飲食店の食器洗いのバイトをしているという。頑張っていることを認め、恵さんと少し距離を取るようにしながら、父親と話してみてはというと、父親は恵さんと関わりたくないらしく、何か言うと逃げるとのこと。夫婦げんかもちょくちょくあるそうだ。学校とバイトで家にいる時間は少ないだろうから、恵さんと関わる時間を極力減らすことと、あまり酷ければ児童相談所に相談できることも伝えた。高校を出たらどうするつもりか聞くと、自立したいので働くとのこと。しっかり育ってくれたことを喜びながら、あと少しの辛抱だから、一緒に頑張ろう。何かあればすぐ言ってねと伝えて別れた。

そのすぐ後に、恵さんから電話が来て、「長男が相談に行ったんでしょ？彼から聞いた。」と言ってきた。内容については伝えられないことを伝え、最近の様子を聞くと、「夫婦関係が最悪で、会話もないのでもう疲れたから離婚しようと思う」と言ってきた。子どもたちはどうするのかと聞くと、「もう大きくなったから父親に任せようと思う。一人になりたい」と。「それも一つの選択かもしれない。決めるのは恵さんだけど、一人になってどうするの？」と聞くと、「自分自身も精神科を受診し、発達の問題と鬱があるみたいだから、引っ越して生活保護もらって生活しようと思う」とのこと。どういう選択になるにしろ、恵さんが元気でいられることも大事だろう。そう思って、よく考えて決めてほしいと伝えて電話を切った。

しばらくして、恵さんが離婚し、一人で引っ越して他市で生活を始めたことを知った。長男と長女は父親と三人暮らしになった。父親と子どもたちは比較的距離感が程よく、ぶつかることも少なかった。離婚したことで父親もお酒をあまり飲まなくなり、子どもたちと平和に暮らしていった。

長男は発達の問題を抱えながらも、高校卒業後専門学校を経て、IT 関係の仕事に就いた。長女は、高等支援学校に入学。高校時代に少し精神的に不安定になり、相談室に来室したこともあったが、卒業後は福祉の支援を受けながら、就職、それぞれ自立していった。

まとめ

本ケースも、前回同様、長きにわたって関わったケースである。

家族支援という考え方のもと、頑張っていても、家族がバラバラになってしまうことを止められないことも多い。夫婦の問題はいつも、双方が意地の張り合いをするために壊れてしまうように思う。どちらかが折れればよいと言われても、自分が折れるのは嫌だとなる。それでは関係性が良くなる訳もない。ましてや双方に発達特性が見られると、更に関係調整が難しくなる。

子ども二人の発達の問題を抱えながらも、頑張っていた母親にとって、三番目の子の喪失は、思ったより感情の表出がなかったが、それがそもそも発達特性によるものなのだろう。いずれ死を迎えるであろう子を育てることの辛さは、耐えがたい。恵さんはそうした自分の気持ちをうまく表現できなかっただけなのかもしれない。

本来であれば、子どもを亡くした気持ちに寄り添い、服喪の間、支えていくのが相談員としての仕事である。夫婦で仲が良ければお互いに支えあうことになるのだが、本ケースの場合はそういう状況になかった。孤立しがちな母親の支援は、拒否にあうことも多く中々難しい。保健師など、支援に携わった人たちは、口をそろえて、頑固で我が強く面倒な人と恵さんを評価していたが、人格的な問題を抱えているからと言って困った人ではなく、困っている人との視点に立てば、関係性は必ず築いていけると思う。

無脳症というめったに出会わない症例についても知ることとなり、勉強にもなったケースであった。

対人援助学マガジン第 50 号

生殖医療と家族援助

～いま、不妊治療の保険適用で起きていること～

荒木晃子

医療現場で

前号で、2022 年 4 月から不妊治療（人工授精・体外受精・顕微授精）の保険適用が始まったことを報告した（不妊治療の保険適用（mhlw.go.jp））。

昨年、保険適用が決まって以降、生殖医療の現場では、通院する患者カップルへの説明と対応、レセプトの作成ほか、厚生労働省の指導に沿った施策が講じられてきた。ここ数年、国内の医療現場ではコロナ感染対策を余儀なくされた状況下でもあり、どの生殖医療施設も一時期（又は現在も）その準備に追われたであろう。

保険適用の実施にあたり、事前に厚生労働省のホームページ上で、①体外受精などの基本治療は全て保険適用される、②年齢・回数の要件（体外受精）は助成金と同じ（助成金に関しては各自治体毎の取り決め）、③窓口での負担額は治療費の 3 割、と掲示され、その内容には誰でもアクセスし、確認することが可能である（③の治療費とは保険診療の治療費。保険適用外の治療費用は含まない）。国内の生殖医療関連施設には、保険適用に関する医療者向けの詳細な説明書が配布され、医療業務と並行して内容に沿った書類や説明書等の変更手続きが進められている。

国内の生殖医療現場では、施設システムのうち、こと患者対応に関する厳格な取り決めは定められておらず、現在までは大学病院、総合病院、或いは個人病院の施設長により独自の患者対応システムが制定されていた。インターネット上にある各施設のホームページを確認しても、またカウンセリングでクライアントから伺う様々な医療施設の患者対応の具体的な内容も、それぞれにオリジナリティがあり、患者が通院する施設を選ぶ際の選択肢の条件のひとつになっていたことは確かである。今回の保険適用に関しても、民間医療施設のなかには、保険適用外の診療を中心に進める旨、事前に通達している施設もある。それらは保険適用を採用した施設と一線を画した不妊治療の診療体系を維持すると想定されるため、受診の際には患者側の事前確認が必要となることに注意を払うことを推奨したい。

当事者に

不妊当事者にも、保険適用がスタートしたことで生殖医療施設の初診時に起きた幾つかの変化がある。

ひとつに、従来の初診患者の平均年齢層に加え、初診時の患者の年齢層が二分化されたことである。近年、女性の晩婚化が進み、国内の医療現場では不妊治療

の初診女性の年齢が 20 代後半から 30 代に移行し高齢化が顕著であるといわれていた。反して、今回の不妊治療の保険適用により、初診時の女性患者の年齢が若年化したという各地の医療者の声を耳にする機会が増えた。不妊治療の保険適用により安易に不妊治療を利用する当事者が増えることを案じていた不妊当事者支援団体の懸念とも一致する現象である。保険が適用されたことで、これまで高額といわれていた不妊治療費が安価に利用可能になったという認識が当事者に生じ、これまで選択肢になかった不妊治療が若年層のカップルにとって「早期に子どもを授かるための朗報」となっているのではないかと推察する。

確かに、医学的には 30 代前半までの女性の妊娠率は高く、医療者にとっても該当施設の妊娠率の向上、患者を円滑に治療成果に導くためなどに、初診患者の若年傾向は歓迎したい変化と理解できる。同様に、当事者にとっては、不妊に苦しむ時間を経ずにカップルのライフプランに沿った計画的な家族形成ができるとの認識が生じる可能性も否めない。その際、「不妊治療すれば必ず妊娠できる＝子どもを授かることができる」とは限らないことに留意する必要がある。たとえ、カップルが互いに子どもとの家族形成を願っても容易には叶わないと感じても、それを不妊（現象）と捉え、不妊治療で解決（妊娠・出産）できるなどと誤った判断をすべきではない。今回、不妊治療が保険適用になり、治療の入り口に辿り着きやすくはなったが、従来の生殖医療技術とそのシステムに大きな変化は生じていない。不妊治療の何を目的に、どんな治療をどこまでするかは、カップルの意思と決断で進めることに変わりはない。単に、「子どもが欲しいから」という受診の根拠は、若年層のカップルにふさわしいとはいいがたい。まずは妊娠する女性自身の体の状態を知るため、自然妊娠の可能性を探り、生殖医療施設で様々な精密検査を受けることを推奨したい。

妊娠を前提とした精密検査は、ブライダルチェックとしても機能する。一般にブライダルチェックといえば、結婚を間近に控えた女性特有の検査と捉えがちだが、視点を変え、カップルで受ければ、自然に妊娠・出産を望むカップルの、子どもとの家族形成のための精密検査ともなり得る。自然妊娠・出産を望むカップルに有用な精密検査の機能、医療技術が生殖医療施設にはあり、その診断能力を医療者は備えている。そのための医療施設を検討する際には、まず、治療を前提とせず自然生殖のための精密検査の希望を叶える医療施設か否かを確認することが重要である。おそらく施設長または担当医師の判断によるであろう。この点も、どの生殖医療施設を選択するかの重要な判断材料になると考える。

次に、初診時の患者に起きた変化のふたつに、パートナーの一方、または双方が 40 代のカップルの受診がある。

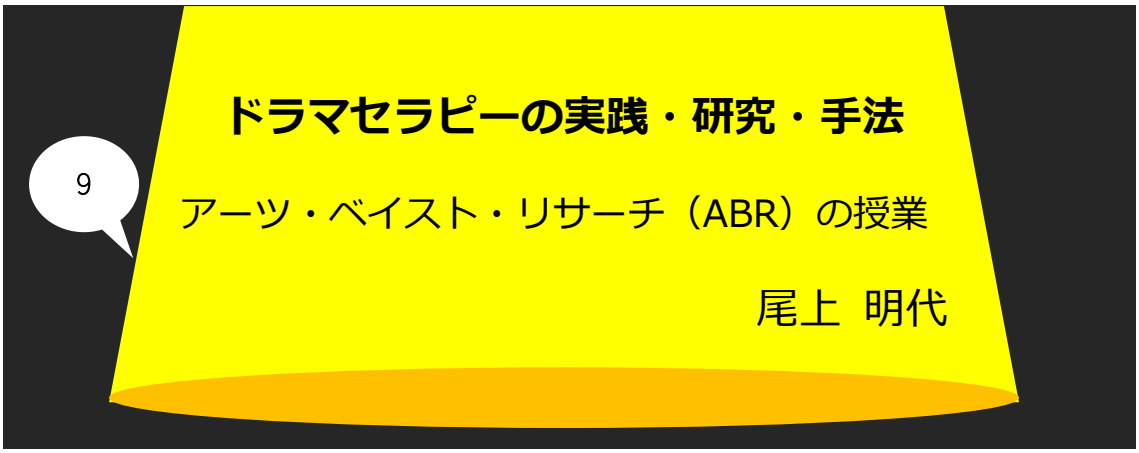
厚生労働省の保険適用に際して、「治療開始時において女性の年齢が 43 歳未満であること」と、女性の対象年齢を明記している。見方を変えれば、43 歳未満であれば不妊治療で妊娠・出産が可能なのだ、と捉えられる可能性もある。実際に

相談業務では、結婚後、数年が経過した40代前後のカップルの受診、30代に経済的な理由で不妊治療を断念したカップルが40代を目前に治療を再開したい、といった相談事例に遭遇している。一般の認識とは異なり、一律に（公に）年令制限が緩和された（公言された）ことで、女性の妊娠・出産の可能性が広がったことを、筆者は歓迎するひとりではある。しかし、本来、年齢にかかわらず不妊治療すれば妊娠・出産が必ず叶うわけではなく、ましてや40代を迎えた女性の卵子や生殖機能の低下は疑う余地もない。当然ながら若年層に可能な自然妊娠の可能性は限りなく低く、不妊治療の医療手段は、時間をかけず体外受精・顕微授精など高度生殖医療に頼らざるを得ない現実がある。おそらく初診時の検査でその事実が判明するであろうことから、その後は迷い悩む時間の猶予も限られることが想定される。

「1子ごとに、40歳未満は胚移植6回まで、40歳以上43歳未満は胚移植3回まで」との保険適用の条件以前に、当事者は自身に残された限りある妊娠の可能性に直面し、その現実を受け入れ悩む時間が残されていない中で治療の決断をしなければならない。その間にも、採卵のためのホルモン注射、投薬、点鼻薬の接種を、悩みつつも受け入れざるを得なくなるであろう。それは皮肉にも、事前検査で判明した、自己卵での妊娠が可能と判断された喜ばしい結果であり、その後に施術される採卵のための準備に必要な治療プログラムなのである。女性は限られた時間に、その準備、日常を調整したうえで決断し痛みを受け入れることになる。同時にパートナーは自己卵子で妊娠を目指す女性を支える役目を果たさなければならない。患者カップルに残された時間は限りあるため、時間・気持ちの猶予が二人に与えられることは難しいと医療者であればだれでもが想定できる。

あらたに‥

自己卵子・自己精子による妊娠・出産を目指す40代の初診患者カップルに起きるであろう筆者の懸念は以上である。しかし、自己卵子・自己精子による妊娠・出産が困難と判断された場合は、更なる次の課題と問題が生じることを忘れてはならない。次号では、この「次の課題と問題」が生じるケースと、事実婚カップルに不妊治療が解放されたことで起きたことを取り上げたい。　（次号に続く）



今年度、春学期に立命館大学人間科学研究科で、新しい科目を担当した。芸術活動を研究プロセスに組み込み、その芸術を通して探究する研究法である ABR＝Arts-Based Research（アーツ・ベイスト・リサーチ）を学ぶ授業である。1993年、スタンフォード大学の Elliot W. Eisner により提唱され始めた Arts-Based Research は、クリエイティブ・アーツ・セラピー（創造的芸術療法）や質的研究法の発展等から大きな影響を受け、日本においても近年発展しつつある研究法である。この研究法を理解するには、クリエイティブ・アーツ・セラピーの「体験的」理解が欠かせない。ゆえに、この授業では研究法の一つを座学で学ぶというだけではなく、自分や他者、また興味のある対象を「アーティスティックに」探索することの意味と重要性を理解してもらうことを目指そうと考えた。「芸術」（アート）を広い意味でとらえ、言葉だけに頼らない・身体(体感)から探索を行う・右脳的資源に働きかける等の体験をしてもらうために、多くのゲスト講師（ABR のアプローチの一つ・アートグラフィーの日本における第一人者・笠原広一さん、ミュージックセラピストの高田由利子さん、アートセラピストの倉石聡子さん、ダンスセラピストの神宮京子さん、そして、研究科の修了生・尾上都さんと張秋陽さん）を招き、多様な講義やワークショップをしていただいた。私も講義の他にドラマセラピーのワークショップを何回か実施したが、ふだんの授業ではあまりしない、ドラマ以外のモダリティーを組み合わせたワークショップを体験してもらった。そしてその意義と手応えを改めて感じることができた。15 回の授業を終えて、院生たちの人間理解の視点が増えて、新たな世界が開けたのではないかと考えている。

そこで今号では、この授業について紹介する。しかし、一回の原稿では全部を書きれないので、研究科修了生　（今回のゲストスピーカーの一人）の体験事例と、何人かの「期末レポート」を提示したいと思う。

The Story Within　（仮訳：うちにひそむ物語り）

受講生たちがさまざまな芸術に触れ、そしてそれらを使った表現に慣れた最終段階で、The Story Within というワークを、この授業用にアレンジして実施した。これは、私の友人である Yehudit Silverman というカナダのドラマセラピスト/ダンスムーブメントセラピストが開発した手法で、ごく簡単に説明すると、各参加者が、今の自分を表現していると思われる、おとぎ話や昔話の登場人物を選定し、その人物のお面を制作、それを使ってドラマをするというものである。このような活動を体験したことのない方は、おとぎ話の人物になるとか、お面を作るなどと聞いただけでは、それにどれほどの意味があるのか、と思われるかもしれない。初回からの丁寧な授業プロセスを深めたのちに実施することが必須であるが、そのようなタイミングで、参加者のレディネスが熟したときに行なうと、このワークは真価を発揮し、本人が思いもよらない深い気づきや新たな変容が訪れることがよくある。The Story Within は素晴らしい「実績」をもつ手法で、世界中のドラマセラピストたちに実践されているものの一つである。

一寸法師

では、受講生の一人 A さんの体験を、彼女からいただいた自主的なレポートの内容をもとに紹介する。

A さんは「一寸法師」を選んだ。作ったお面をかぶるとなぜか彼女はドキドキした。「小さい世界」から「大きい世界」に放り出された感覚で、誰かと交流したい気持ちがしたそうだ。A さんは自分の「ドキドキ」を次のように考察した。

一寸法師というキャラクター(お面)が私の身体を借りて、初めて身体を持った存在になった瞬間だと考えられます。最初、私自身、「なぜこんなにドキドキするのか？」と違和感を持ちましたがそれは私ではなく「一寸法師」が感じている感情だと気がつきました。それは、例えるなら赤ちゃんが生まれて初めて「世界」と出会う感覚のようです。記憶にはないその感覚をお面の小さくあいた「目」からまわりを見ることで追体験したような感覚が残っています。それが好奇心と不安が入り交じったドキドキ感だったのだとあとから納得しました。

Finding the Moment

「お伽草子」に書かれた「一寸法師」は、次のようなお話である。一寸法師は、京の都へ侍の修行に出た。門をたたいたお大臣の娘であるお姫様に気に入られ、ある日、清水寺参りに行くお供を仰せつかる。その道すがら、鬼がお姫様をさらおうとするが、鬼に飲み込まれた一寸法師が針で応戦し、鬼を追い払った。あとには「打出の小槌」が残された。そして一寸法師が「打出の小槌」を振って、自分自身が大きくなり、お姫様と結ばれて末長く幸せに暮らした。

ところが授業で A さんが演じた一寸法師は自分で小槌を振らずに、それをお姫様に差し出したのだ。「これは、お姫様がお使いください」と。

The Story Within には、物語の中で自分が一番強く心が動かされた「瞬間」の場面を見つける Finding the Moment というプロセスがある。「なぜそこなのか」などと頭で分析せずに、自分の直観を信じて選び、演じてみることが重要である。A さんにとってのその瞬間は、この小槌を差し出す場面であった。私が、必要があれば原作を変更しても良いと伝えてあったので、彼女はオリジナルな筋書きに変えたのだ。

ワークショップの次の段階では、ペアを組んだ相手にその場面を演じてもらって、今度はそれを本人が客観的に見る。A さんの相手は一寸法師になり、ひざまずいて打出の小槌を差し出すところを演じた。それを見た A さんは、一寸法師の「混じり気のない純粋さ」を感じ、お姫様がこのあと「思いがけない行動」をとることが理解できたと言う。それは、お姫様が小槌を振るという展開だった。そしてお姫様が願ったのは、自分も一寸法師のように小さくなることだった。相手（のサイズ）に合わせるという行為の視点から見ると、二人が同じ大きさであれば一緒に大きくなっても小さくなっても良いのかもしれない。だが二人が世の中の多くの人と違うサイズで生きていく選択を A さんがしたのは興味深い。

授業後、A さんはさらにその続きを創作し、私に自主的なレポートを提出した。それは以下のような物語だった。

その後、二人はお椀の船にお箸の櫂で鴨川や保津川、淀川沿いの村々を訪れ、困り事を解決していった。やがて、そのような一寸法師を慕うものたちが、次々と仲間に加わり、小さなお椀が筏のように連なった「お伽草子船団」と呼ばれるようになった。退治された鬼たちも一員になっていた。一寸法師は（内面が）成長した姿を見てもらうために、おじいさんとおばあさんが住んでいる「住吉の津」(実在した昔の港、現在の大阪にある住吉大社)に凱旋した。おじいさんとおばあ

さんは小さいながらも、たくましく成長した一寸法師の姿を見て、たいそう喜んだ。そして、無事帰還したことの感謝を込めて、住吉大社の神様に「芝居」を奉納した。演目は「一寸法師の冒険」。経験したことを語るのではなく「劇」で披露したのである。観客は大いに喜び、それぞれがお話を持ち帰り、まわりに伝えた。伝え聞いた人々により、内容がアレンジされて、今でも日本各地に残る「一寸法師伝説」のもととなった。

私は A さんのアイディア溢れる新バージョンの一寸法師に大変興味をそそられた。何と小さな人たちは、二人だけではなかったのだ。その人たちが二人に加わり、さらには敵であった鬼たちも加わり世直しをする。そしてなぜか唐突に住吉大社が出てきてそこに凱旋するというのである。一寸法師の冒険「劇」を奉納したというのもユニークだ。経験したことを「劇」というアートにして上演することで提示したのは、まさに「ABR」であったと言える！

A さんの想像力と創造力に感心していると、さらにびっくりする報告が待っていた。彼女がこの後、何気なくネットで住吉大社の関連サイトを開いてみると、何と一寸法師のお椀と櫂が奉られている場所が住吉大社にあると書かれていたというのである！さらに詳しく調べた A さんは、一寸法師伝説が住吉大社に伝わっているとの事実（奈良女子大学教授の大谷俊太さんが、住吉大社が実施している市民向け教養講座で、2008 年 7 月に、「一寸法師と住吉」というタイトルで講演した内容）にたどり着いたそうで、ご本人もその「偶然」に驚いていた。

実は、A さんは住吉大社の近くで生まれ、子どもの頃までそこに住んでいた。大社は彼女にとっての「氏神様」だという。後日、彼女が住吉大社に確認すると、「一寸法師のお椀」が住吉大社に奉納されたのは 2002 年とのこと。住吉大社が一寸法師のゆかりの地であるとの言い伝えは、地元の人にもあまり知られていないことから、大社側も説明のパネルを設置したりして周知してもらうよう努力されている。つまり、彼女が子どものころは、もちろんお椀もパネルもなかったわけで、何も知らない A さんの創作ドラマは、完全に「偶然の一致」だったことになる。

今号では、共時性を論じる予定はないので、心の深いところに触れる芸術を使った活動の結果として、このようなことが起きることもある、という記述にとどめておこう。これまで私は、ドラマセラピーの授業やセラピーセッションで、このような共時的なできごとがときたま起きるのを体験している。「偶然」と見るか、意義のあるプロセスと解釈するかがポイントである。

いずれにしても、この一連の一寸法師のワークから A さんが得たインスピレーションは「セルフ・コンパッション」と「進取の精神」だったと聞いた。スム

ーズに出来た即興オリジナルストーリーの完成後、A さんに「なぜ、一寸法師は打ち出の小槌を自分のために使わなかったのだろう」という疑問、言い換えれば「私はなぜ一寸法師に打ち出の小槌を使わせなかったのか」という自身への問いかけが湧いた。そこで彼女が改めて感じたのは、「セルフ・コンパッション」（自分への慈しみを意味し、他者を思いやるように自分自身を大切に思うこと、ネガティブな状況でも前向きな気持ちを持ち続ける心持、心理状況）だった。

そして、ワークショップ後に「一寸法師」の話の来歴を調べる過程で初めて知った言葉が「進取の精神」（従来の習わしにとらわれることなく、積極的に新しい物事に取り組んでいこうという気質や性格を指す言い回し）だった。

一寸法師は、生まれ育った土地を後にして自ら「修行に出る」決意をして出航します。持っているのは、お椀と櫂のみ。不安もあっただろうに、一歩を踏み出し、知恵と勇気でいろんな困難を乗り越えて旅を続けます。そこから「進取の精神」の強いエネルギーを受け取りました。

また、（私のストーリーの中での）彼は、自分が小さいことをネガティブにとらえることなく、かといって「立身出世してやろう」と考える野心家でもなく、自然体で、ありのままの自分を受け入れて「肯定」しています。これが「セルフ・コンパッション」です。ですので鬼退治をした後、鬼が忘れていった打ち出の小槌を使って自分が大きくなるという展開は「ありえない」と思いました。そんなことをすると「一寸法師」という存在自体を否定してしまうと考えたからです。「彼」は今のままでよいと考えていたと思います。そして小槌を差し出されたお姫様の気持ちになると、お姫様もきっと「勇気をもって」（進取の精神で）自分を小さく変身させて、今までの世界から新しい世界へ踏み出したのかな、何を願ってもよかったのにこの選択をしたのだなと推測しました。

一寸法師のそのような振る舞いが、かえって他のもの達の関心を引き、「一寸法師」の秘密を知りたくて、自らも小さいサイズに変身するという展開が成り立ちます。小さいお椀が集まって「軍団」になって凱旋する場面が気に入っています。

この二つのインスピレーションは A さんの実人生にも影響を与えた。ちょうど A さんにとって、とてもハードルが高いことにチャレンジするかどうか、〆切間際で迷っていた時期だったそうだ。「一寸法師」のワークに背中を押され、進取の精神とセルフ・コンパッションのおかげで、最初の一歩を踏み出したという報告を受けた。

その翌日、A さんは、さっそく授業で制作したお面をもち、数年ぶりに住吉大社にお参りに行って「一寸法師」に対面して来た。

「一寸法師」は、私の「土台」にアプローチしたと言えます。言い換えると「スピリチュアルな部分」にアクセスしました。今回、私が住吉大社を訪れたのは、表面上は一寸法師のお椀がきっかけでしたが、私にとっての「土台」を再確認するためだったのかなと思いました。久しぶりに訪れた境内では、樹齢八百年～千年という大きな楠木が鬱蒼と茂り、暑い夏の日差しを遮り、影を作ってくれていました。何かほっとした、深呼吸したくなる時間でした。

物語の登場人物を演じると自分の人生とは違う体験ができる。しかし、このワークを開発したSilvermanは、その一方で、「物語はふだんアクセスできない自分の中の隠された自分と繋がることができる。それは、私たちが行く必要のあるところへ連れて行ってくれる。」と述べている。そして、必要に応じてオルタナティブな物語を創り、新しく演じ、または生き直すこともできるのだ。

Aさんは、神社のお椀と櫂の前に自身のお面を置いて記念写真を撮影し、私に送って下さった。これで、一連のワークが自分の中で完結したと述べている。



ABR の授業では、多くのワークショップと講義を組み合わせることにより、受講生にさまざまな体験をもたらした。A さんの体験事例は、そのほんの一つである。他にも自分自身の新たな発見や、積年の課題の解決に繋がった人など、さまざまなことが引き起こされた報告を受けた。そのようなことが起きた理由として考えられるのは、授業内で実施したワークショップのセラピューティックな効果、そして各院生が取り組んだアートによって心身の動きを伴うプロセスが、自らを変身・転身させるダイナミズムを生み出したからだと思われる。アートを使った探究が、いかに人の心の深いところに働きかけるかを表していると言える。



受講生の最終レポートから

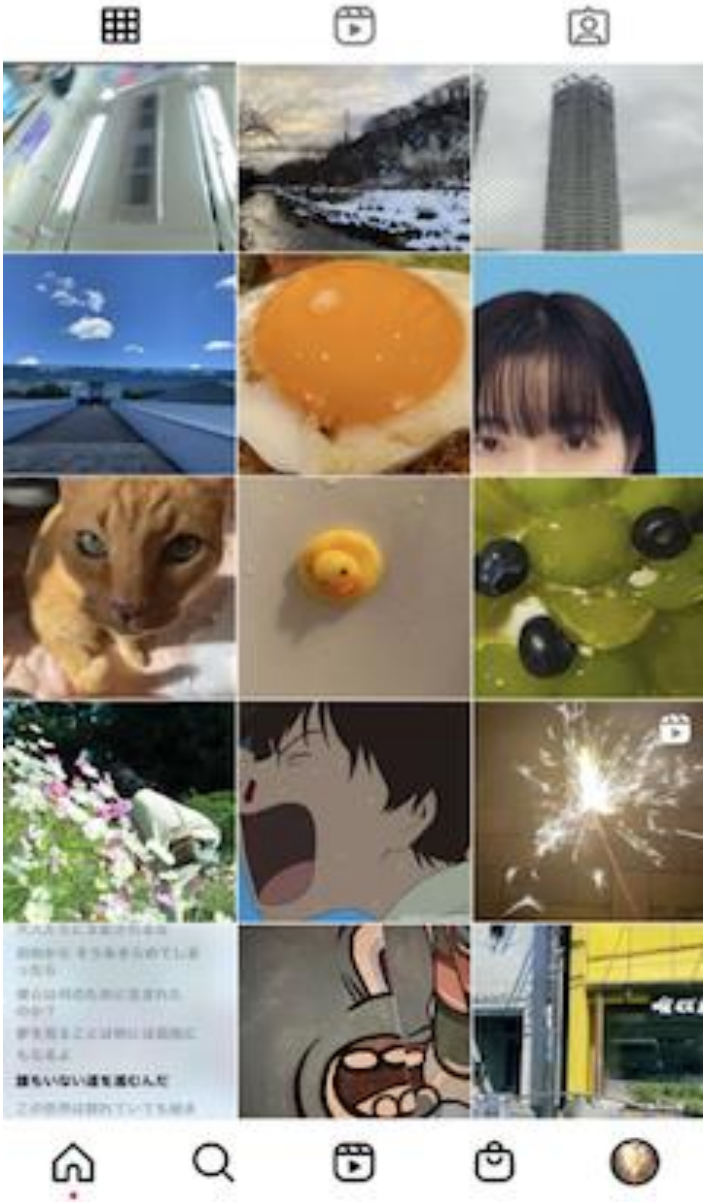
アートによる考察を、探索、研究と表現に使うことが ABR の主眼点である。授業では、考えたり感じたことを、芸術的な表現で発表するということを何度も実施した。その授業の期末課題を考えたとき、普通に「記述」してもらうレポートにするなら、この授業の主旨に合っていないと考えた。そこで、学んだこと、発見したこと、感じたことを表現する手段として写真を撮り、それにタイトルやキャプション、さらに短い解説を書くという形にすることで少しでもアーティスティックなレポートにしてもらうことにした。そして、受講生たちの了承を得て、その写真作品をオンラインで全員が鑑賞できるように設定した。

予想通り、各自が違った視点と感性による写真表現の数々を提出してくれて圧巻であった。教員としては、「普通の」レポート課題にしなくて本当に良かったと実感している。学んだことや探索したことを芸術にしてアウトプットすることは、まさに ABR の実践そのものである。表現形態を写真にしなければならないため、受講生たちは自分が提出したいイメージを選ぼうとするプロセスを経る。そしてその事自体がさらなる考察をもたらしている。アートとしてのイメージ、その表題と解説の提示によって、一つの学びの体験が重なりつつも広がりの異なった representation として現われてきている。

この原稿に、了承の得られた院生の写真作品と、その解説を短く編集したものを提示させていただく。(順不同)

1. 「私的歩行記２０２１」

「本文を書くことがメインで、写真はインスタグラムのシステム上必要なので写真フォルダーから目についたものを適当に使用する。しかし、おまけの写真こそが 2022 の私に訴えかけてくることに気づく。
笠原広一先生の東京ウォーキング。
自分が感じてはいても言葉ではうまく捉えられない感覚や違和感をとりあえず形にしてみること、それを試してみることで見えてくる私がいる。
私の備忘録は東京ウォーキングなのかもしれない。」



2. 「空を泳ぐ魚」



「この写真を選んだ理由について、まず、私はこの授業を通して、様々な芸術表現方法を体験しました。これにより、私は言語以外の多様な表現方法があることを改めて認識しました。この写真では普段と違う方法で魚を見ることで、『多様性』を表していると思います。人との交流は言葉だけではなく、情報が様々な形式で存在しているので、様々な視点を持つことが理解を深めることに役立つと考えられます。

この水族館での写真は、普通の水族館のように明るい照明とわかりやすい説明がないですが、天井の影から魚の存在を感じられて、それに、魚と水、自然と人間の関係もこれを通して思考できると思います。これがこの写真を選んだもう一つの理由です。

この授業を通して、私は芸術表現の力を意識しました。」

３.「ペルソナ　―　新たな自分の発見と創造　―」



「現代社会の中で生活すると、様々な情報があふれ、私たちは昔の人より多くの知識を得て、それを活用し、よりよく生活をしていると思っている。しかし、本来の自分を封じ込めて生きていたり、つかんでいるはずの自分自身の正体も実は分からず、他者の真意がどこにあるのかつかめずに、もどかしさを抱えながら生きている人々がいる。本当に私たちは自分らしくのびのびと生を謳歌しているだろうか。今を精一杯生きているだろうか。そのような事を ABR は私に問うてきた。

今回作成した「桃太郎」のお面は、私を元気づけた。何でも前向きにぐいぐい進む力をくれるような気分だった。まるで、きびだんごを分けてもらって力を得たような感じだ。仲間を得る喜び、一人ではなくみんなで1つの目標を目指すことの心強さ。迎え撃つ強敵や難題もやっつけてしまえそうな気になるのが不思議だ。そんな体験を、あんな短時間でこんなに簡単に「お面」-メタファー-と言い換えても良いのかもしれないが-を使ってできてしまう ABR の力は『本当にすごい！』と感じた。」

4.「偶然の産物」

「私がなぜこの写真を選んだのかというと、『偶然の産物』の大きさに感銘を受けているからです。

私はこの授業を受講したことをラッキーだと思っています。なぜなら今までに経験したことのないこと体験させていただいたからです。この授業は第１回目からインパクト絶大でした。偶然先輩に尾上先生の授業をおすすめしてもらい、偶然この授業と他の授業が被っておらず受講登録することができ、偶然集まったこのメンバーで 15 回の授業を終えました。

この写真は偶然雨が降り、偶然虹が出たという、偶然の産物です。そもそもレポートが無ければ大学に来ていませんし、この部屋でなければ窓が無く見れなかったかもしれません。

偶然の産物はとても大きくて、とても貴重で、世界を変えてくれます。

この授業も私を変えてくれました。

偶然の出会いに感謝しています。」



５.「寄せ植え　-様々な草花が大きく育つことを楽しみにしています-」



「自宅の玄関先に夏の草花を寄せ植えてみました。
この授業を受け、様々な芸術を通して自分や他者、また興味のある対象を『アーティスティックに』探索することの意味と重要性を理解することができたと思います。
　表現には非言語としてのコミュニケーションがあることは認識していたものの、この授業を通して感じたことは体感で感じること、そして右脳に働きかけることで言葉では伝えきれない内面を伝えることができたり、感じたりできたりすることを実感として体験させていただくことができました。」

6.「まど」



「窓の外に立っている木が授業を受けていたときの私自身。照らしてくれている陽光が ABR の授業。スクリーンカーテンに写っている影が授業により浮かび上がらせていただけた私の中の多様な側面、室内から見て窓の内側の下に映っている木の影が、この授業で他の学生さんたちの多様な表現などからも学び得た気づきや自己探求により得られたもの。部屋の中からそれらを見ているのが現在の私自身。木の陰たちは多様な形で私に取り込まれ私の一部となる。今後はその時々によって様々な様相に変化するこの映し出された影を、吸収して生かしながら自己探求や学びを続けていきたい。」

7.「融合」

「この写真 1 枚に、青空、飛行機雲、夕焼け、担当の光が反射した雲、夕焼けの上の入道雲、左奥の山には雨が降っている、何層にも重なる雲、薄い雲や大きな塊になっている雲、上空へと伸びあがるような雲…様々な空の状況があります。

今回授業で学んだ ABR の芸術形態は多種多様でした。この写真と同じように、青空の上にいろんな雲の要素があり、形も色も様々に表現されていて、自己主張するわけではなく、それぞれがお互いの存在を認めあい、お互いを尊重しているところが芸術の多様性と同じように感じました。

また、今回一緒にこの授業を受講した院生たちも同じように、個性豊かで、国籍も性別も年齢も学年も背景も受講した目的も様々で、自己主張するわけではなくお互いを尊重しながら、尾上先生という空の中で、授業を受けることができたことも、この写真と同じように感じました。」



8.「ENCOUNTER　出会い」--アーティスティック＆ドラマティック－



身を乗り出す「太陽の塔」（大阪市中之島美術館）

「Encounter、artistic, dramatic は、人とアートが出会う場である美術館が持つエッセンスであり、また今回の講義の中で発せられた言葉でもある。
今回の講義全体を貫くイメージは、『出会い ENCOUNTER』である。
人と人、人とアート、アートとアート、現在と過去、個人的経験と社会的経験、もう一人の自分との出会いなど、さまざまなものがアーティスティックに遭遇し、交差し共有された時間と空間であった。ABR の概念をまさに ABR 的アプローチを用いて探索した時間でもある。」

９.「Try～新たな一歩　想像と創造～」

「バジルの変身」





いくつかの事実とイメージが私の中でつながっていき「バジルソース」へのトライとなりました。

　今回の授業で、私が感じたことは「Try」でした。ABR に関する様々なことをあの授業に盛り込み、どんなふうに、受講者が感じたり新しい気付きを得たりするのか、尾上先生の Try を感じてきました。そして自分自身にとっても、ABR をどう捉えるのか、今まで触れてきたことでも新しい視点から見たり感じたりすることでどう変わる可能性があるのか、やはりこれも Try でした。今まで、目の前にあったけれども全く活用できていなかったバジルを、思い立ってソースにしようとした時、これも想像からの創造であり、私にとっては一つの Try だと感じました

10.「過去への影響」



「自分は人前で発表するということがとても苦手である。このことはどれだけ発表のために準備してもあまり変わることがなかった。

しかし現在は少し異なっている。発表に向かう意識がネガティブではなくフラット、ポジティブですらあるかもしれない。

アートの効果をどう定義するのかはつかめていないが、感覚としての変化は明らかに生じている。これまでのアプローチとは大きく異なっていて、かつその効果も大きなもののよう感じる。演じるということの影響力なのだろう。

そのなかでこの写真はまさに「発表にものすごく緊張している自分」である。学部 3 回生の時にシンポジウムで発表したときのことである。50 人ほどの参加者、使用言語は英語、日本側の学生代表。様々な要素が絡み合っている。とにかく緊張したことだけを覚えているし、その感覚はこの 2 年ほど、変化していなかったように感じる。しかしながら今、少し変化している。楽しかった要素に目が向くようになってきている。過去の記憶の捉えなおしが起こっているのである。

おそらくこれからも緊張する場面では緊張するだろう。しかしその緊張の質はこれまでと大きく異なっている気がする。そしてそのことは過去の私の経験にまで影響を及ぼしている。」

１１.「過去・現在・未来をつなぐ物語」

「車窓から見る淀川」



電車に揺られながら窓の外を流れていく景色を眺める。
淀川にかかる鉄橋の上を電車は走って行く。
ふと、亡き母のことを思い出す。
母は 1945 年の大阪大空襲を体験していた。
子どもの頃に何度も何度も聞かされた、戦争の話。

「母の描いた油絵」



もっと母の話を聞いておけばよかった。

その人の語りは、その人の人生の物語。
その人が何を語ったか、どう語ったか。
対話というかたちで語り手と聞き手とが物語を紡いでいく。
その人の声、抑揚、そして語っている時の表情、言葉の間（ま）、さまざまなディティールが合わさってたったひとつの布が織り上げられていくようだ。
わたしが研究テーマにしている「ライフストーリー」は、かたちのない芸術のひとつと言えるのではないだろうか。
書き留めれば「記録」として残るが、その場で紡がれた即興性、その時の空気感は、その時だけで消えていき、二度と同じものは再現できない。「作品」ではないからだ。意図しての語りではないにもかかわらず、聞き手の心の中に残る。年月が経ってもこうして思い出すことができる。
「語り」は、過去と現在を結ぶ。そして、未来へもつながっていく。ある意味、永遠と言える。ライフストーリー研究、子どもたちのナラティブのアドボケイター、それが今のわたしの ABR だと考える。

１２．「野に咲く花(と半ズボンの女の子)」



「ABR、そしてドラマセラピーに触れることにより、自分に起こったことは、イメージする力が向上したこと。さらに、『こうしたイメージには、自己理解や他者理解など、探求への鍵が隠されている』ことに気づけたこと。妄想、大いに結構!!ということで、これからも心置きなく、妄想に励みたいと思います。」

画像イメージと解説に現われた大きな特徴は、受講者全員が、授業から触発された、時空を超えた空想の世界を表すために、写真としての映像を切り取り、それを切り取ることでさらに空想が拡大する、という相乗効果を上げながら、考察を進めていることだ。

同じ 15 回の授業を受けても、一人一人にとって、そこでの学びが違うことは当然である。しかし写真表現として可視化されるととても興味深く感じる。ここで紹介したレポートは一部であるが、並べてみると展覧会のようだ。

私にとって、新しい試みの授業であったが、シラバスを作る段階からワクワクが止まらなかった。ABR は「リサーチ」なので、もちろん研究であるが、同時に実践でもある。研究者自身の芸術的探索と、協働する人たちが必要だ。そういう意味においても、授業は ABR そのものであったと振り返る。今後、ABR という研究法を採用する予定がない人も、自分を含めた人間というものをより豊かに深く探究する際に、この授業で体験したことを少しだけでも活かしていただければ嬉しい。受講生たちの協力により、今年度の記録の一部として、ここに残すことができた。受講生の皆さんに感謝致します。

文献：
Barone, T. & Eisner, E.W. (2012). arts based research, SAGE
Silverman, Y. (2020). The Story Within, Jessica Kingsley

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第47話

水野　スウ

真夏の夜のトークライブ

2022年8月の一夜、「第4回対人援助学マガジン執筆者トークライブ」にお招きいただき、オンラインでお話しさせてもらいました。聞き手は、編集長の団士郎さん以外ははじめてお顔を知るマガジン編集部と執筆者の方たち、マガジンの読者さん、そして私の友人たちです。

日頃マガジンを読んでいない友人も多く参加していたので、トークの最初は、私と団さんがどうして出会い、なぜマガジンで連載することになったのか、とりわけ丁寧に語り始めました。この日のトークが、対人援助学マガジンについて知ってもらうまたとないチャンスに思えて。今号はその夜話したことを中心に、トークライブ誌上リポートです。

「学ぶ会」のちらし

2004年6月、そのころ毎週のように「紅茶の時間」に来ていたお母さんから手渡された一枚のちらし「石川・家族面接を学ぶ会」が、団さんを知るきっかけでした。彼女には家にひきこもりの息子さんがいて、おそらく県の家族相談会かどこかに出かけた折、ちらしを見つけたのでしょう。

当時の紅茶にはなぜか、ひきこもりの若者を持つお母さんたちがよく来ていて、私はそんな彼女たちと、コミュニケーションを練習するための場「ともの時間」を、紅茶と別枠ですでにはじめていた頃でした。心理学や面接についてほとんど何も知らない私が、紅茶を続ける中で新しいことを学ぶ必要・必然に迫られていた時期と、団さんを知ったタイミングとが、ちょうど重なっていたのです。

はじめての団さん勉強会の印象、今もよく覚えています。大学院の教授、とお聞きしてたのに、そこに現れたのはアロハシャツを着て、早口のかすれ声の関西弁で、「それ、おかしいやろ！ちゃうやろ！」と自分の弾丸トークに自分でツッコミ入れながらしゃべる、不思議なおっちゃん。まるで、吉本のひとか！と思った、その人が団さんでした。

最初は圧倒されてびっくり、だけどアップテンポの話がすごくおもしろく、気づかされること多々。

勉強会では団さんが、さまざまな問題を抱えた家族の事例について語るのだけど、この家族の中の誰々が悪いといった犯人さがしをしない、家族全体をシステムとしてとらえる、その見方がとても鋭く、的確でした。

その日の参加者は対人援助の仕事をしている人がほとんど。でも、初対面の人たちとも一緒にワークをしたことで距離が近づいたし、何より、団さんからもっと学びたいと思えて、まったく専門家じゃない私が、その勉強会に続けて通うようになりました。

ナンパ？みたいな声かけ

そんな初対面の日から6年経った勉強会の帰り道、団さんから、スウさんもちょっと書いてみない？と声をかけられたのが、マガジンに連載を書くはじまりです。まるで、ね、ちょっとお茶してかない？と街で声かけられたみたいな（ナンパか！笑）気軽さにつられて、私も深く考える間なしに、あ、はい、って即答してた。そんなこんなで、12年前のマガジン第2号から連載をはじめることに。

連載タイトルは、その数年前に出した本、『きもちは、言葉をさがしている』からとって、サブタイトルに「〜〜紅茶の時間とその周辺」を加えました。このタイトルにしておいて正解！　題名の幅広さに助けられ、毎回のテーマは、紅茶の内と外で起きる出来事、紅茶に来るいろんな人との物語、東京調布のクッキングハウスに通って学んだこと、コミュニケーションの練習のこと、そして、憲法のお話の出前にいくようになってからはそこで語ったこと、社会のこと、時には家族の物語などなど、なんでも書きたいことを書き綴って今に至ります。それは同時に、私という一市民のしていること／してきたことの、社会とのつながりアーカイブ、歴史メモでもありました。

マガジンでの連載を土台にして、この12年間で2冊の憲法ブックを含む6冊もの本を出してきたこと、今更ながら驚きです。それができたのは、マガジンがなんでも書ける場所としてずっと存在してくれたから。それって憲法的にいうと、21条の「集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する」を、対人援助学マガジンがまさに地でいってるということ。何より、私の表現の自由がこのマガジンで確保されていると信じられることは、今のこの時代になんと大きな安心と自由だろうってつくづく感じます。もちろん紅茶の時間という場も、人々が自由に集まれる場所を毎週つくっているから、集うこと、グループつくることの自由を実践してる、ってことになるわけですけども。

いつでも誰でもどこからでも

マガジンは今号でちょうど50号、執筆者はその前号ですでに50人越え。目次を一読するだけで、書き手は対人援助職にとどまらない、なんて多様性豊かな表現の場だろう、とすぐにわかります。

3ヶ月に一度更新されるweb上のこのマガジンは、誰でもいつでも世界のどこからでも、そのバックナンバー含めて、すべて無料で読むことができます。こういうマガジンのスタイルとあり方が、今すぐにでなくても、いつか誰かの助けになるかもしれない、そう考えてこのシステムを12年も前に考え出した団さんってやっぱりすごいな。長く続けてくる中で、当初のマガジンにはなかったあらたな意味がいくつも書き加えられてきたのだろうな、とも思います。

同じことが紅茶にも言えます。特別に何かをしている場所ではまったくないし、最初の頃と比べたら今は全然はやってないけど、39年前から毎週、わが家を開け続ける中で、紅茶の意味や枠が広がり、場の力が年々、紅茶の空間に貯えられていってることを感じています。ごくプライベートなきもちも、社会についても、政治や憲法についても、同じように平らに語れる場が今の紅茶で、それは子育て井戸端時代の紅茶からしたら考えられないほどの、内的発展です。こんなに長く続けられるなんて思いもしなかった。毎週誰かしらが来てくれるからこそ、続けてこれた紅茶です。

3年前からのコロナ下、紅茶は、はやってないのをいいことに一度もお休みせずに開けてきました。そして、誰も来ない週がはじめて3回続いた時、あ！

と気がついた。ただ器だけあってもそれは紅茶じゃない。そこに誰かがやってきて、ひととひとが対面で出会い、言葉を交わし、笑い声だの涙だのその時々のきもちを分けあいっこする——そんな中味があってはじめて、紅茶の時間という場になりうるんだった。コロナのおかげで感じることのできた、紅茶の普遍の定義です。

タイトル考、あらためて

連載のタイトルにもなっている「きもちは、言葉をさがしている」という言葉についても、この夜あらためて考えながら語りました。

どんな人もその時々の自分のきもちにぴったりとあう言葉を、ほんとは必死に、真剣に、探してるんだと思う。胸の内側でまだぐちゃぐちゃだったりグルグルしてる時って、自分のきもちなのに自分じゃわからないってこと、そういう時、いっぱいある。

そんな人が目の前にあらわれたとき、私のできることは、ここではきもちを話し（＝放し）てもだいじょぶなんだ、とその人が思えるように、その人のきもちが言葉を見つけやすいように、安心できるおざぶとんを用意することかな、と思っています。

そのことにはっきりと気づいたのは、今から20年以上も前、その頃よく紅茶に来ていたある男の子と共有した、とくべつな時間のおかげです。

その日の彼はいつもと違って、何かまだ話したいことがありそうな顔、だけど他の人のいる紅茶だとそれはむずかしいんだろな、そんな空気を感じて、めずらしくこちらから延長紅茶を提案したのでした。

夕ご飯もおわり、もうすっかり夜になって。そのあたりから少しずつ、彼が汗をたらしたらし、つっかえつっかえ、きもちと言葉の間を行ったり来たりしながら、3〜4時間もかかって話したかったきもちを言い終えた——放し終えた——時の安堵感、緊張がほーっとほどけていった瞬間を、私は今もはっきりと覚えています。

その時ともに過ごした時間と、彼がものすごく真剣に、自分のきもちにあった言葉を誠実に探し続ける表情から、「きもちは、言葉をさがしている」というフレーズがおりてきて、それをその後書いた本のタイトルにし、さらにこの言葉の普遍性を感じて、マガジン連載にも同じタイトルをつけたのでした。

紅茶で大事にしていること

彼とこの時間を過ごしたときには、まだはっきりとは気づいていなかったけど、言葉を探す／言葉にするという作業のずっと手前に、本当はもっと大切にされなきゃいけないことがあったのだ、とその後の紅茶でだんだんわかってきました。

きもち、感情って、誰のでも簡単に、ほっといても自然に、育つものじゃないのかもしれない。いつも自分のきもちにふたをする環境の中にいたら、感情だってきっと育っていきにくかろう、それを言葉化するなんてことは、さらにもっとむずかしいことだよね。感じていいんだ、きもち出してもいいんだ、そう思える環境や安心が必要なんだ。だけど、それがどれだけの子のまわりに確保されているだろうか。そんなことへも、だいぶたってからやっと思いを向けられるようになったのです。

紅茶がはやってないせいもあるのでしょう、心が元気な人だけじゃなく、しんどい人も苦しい人も、少なからずこの場にやってきます。目の前のそんな一人ひとりをどうしたら大切にできるだろうと考え続けて、私がしているのはとてもシンプルなこと。

その人が胸のうちを話したいのであれば、基本的に私はきく人になります。できるだけ、耳へんに十四の心、と書く「聴く」の方できく。さえぎらず、横取りせず、早とちりせず、ああせいこうせい言わず。相手が話すことに夢中になりすぎて、聴いてるこちらがわけわかんなくなる時は、問いを投げたり、交通整理したり、「聴く」を「訊く」に切り替えながらききます。

大切にしているもう一つは、その人のいいところを見つけたら言葉にしてすぐに伝えること。ほめる、とはちょっと違います。その人のまっすぐさ、正直なとこ、おもしろいところ、自然体なところ、ユニークな発想、ていねいで細やかなところ、etc、私

が口にするのはたいていが、その人の持っている、beのいいところです。

なぜbeかというと、今の社会って、出した結果、成果、といったdoの価値観だけでその人のすべてが評価されてるように思えてならないからです。人ってそんなふうに、外から目に見えて数値化できるdoだけでできてるわけじゃない。だけど認められるのは表面の見えるとこだけ。その土台に、見えなくても確かにあるその人のbeは、ひどくないがしろにされている気がしてなりません。

はやらない紅茶でゆっくり話を聴きながら見えてくる、その人のbeのいいところを、私はできるだけその人にじかに伝えたい。そう思うきもちの元には、私が15歳の時にある人からしてもらった、とても大事な経験があります。銀座にある画材店のおじちゃんが、よくお店に通ってくる高校一年生の私を、ある日まじまじと見て、「スウや、お前さんは、おもしろいなあ〜！！」と言ってくれたのです、心底そう思っている口調で。

その頃の私は、学校でいつも「水野さんって変わってる」とか「水野さんって、ちょっと変」と言われることが多い女の子でした。だけど、そんな私のことを、おじちゃんは、おもしろい、と言ってくれた。この時に感じた、一人の大人からまるごとのbeで自分を認めてもらえたことのうれしさは、半世紀以上たった今もあざやかに思い出せます。

どんなひとも、自分を身の丈に認めてほしいと願って生きている。身の丈以上を求められるのはしんどいし、その逆の、見下されることはすごく悲しい。「きもちは、言葉をさがしている」の男の子も、当時、まわりからの過大な評価と自分とのギャップがとてもしんどそうだった。以上でもなく、以下でもなく、身の丈、が大事。

あの時おじちゃんは、私のちょうど身の丈をそのまんま肯定して、言葉でちゃんと手渡してくれました。おじちゃんがそう言ってくれるのなら、ほかの人とはちょっと違う感じ方をする私のその部分こそ、もしかすると私のいいとこなのかもしれない、って思えるようになった。その違う部分、私なりの感性が、今では私が私であることの誇りです。

私が紅茶でずっと大切に思い、してきたこと、それってもしかしたら、あの時のおじちゃんが少女の私にしてくれたことを、知らず知らずのうちに紅茶で出会う人たちに返してきた、ってことなのかもしれませんね。

けんぽう語り

トークでは、①にマガジン、②に紅茶、③で憲法と平和を語る、のつもりだったけど、②まで話し終えたところで1時間ちょっと。参加者さんたちとのきもちキャッチボールもしたいので、平和や憲法についてくわしくは話せなさそう。なのでさくさくっと、だけど外せないところだけはちゃんと伝えよう、そう思って話しはじめたパート③の憲法と平和。

憲法のおはなし出前でいつも一番に心がけるのは、聞いた人にとって少しでも憲法が身近になるように、願わくは、憲法って自分のことだったんだね！と感じてもらえるように話すこと。何より、上から目線でなしに、平らに話すこと。

私のけんぽう語りがそれまでと大きくかわったのは、2009年に娘が憲法13条をやさしい日本語に訳してくれたことがきっかけです。

「すべて国民は、個人として尊重される」ではじまる13条の条文を、彼女はこんなふうに訳しました。

「私は ほかの誰ともとりかえがきかない
私は 幸せを追い求めていい
私は　私を大切と思っていい
あなたも　あなたを大切と思っていい
その大切さは　行ったり来たり
でないと 平和は成り立たない」



戦争中、一人ひとりのいのちは、国にとってつごうよくとりかえのきく、まるで部品のように扱われていました。扱われるだけじゃなく、教育によって、一人ひとりがそう思い込まされてもいました。自分らしく生きることは許されず、国の言う通りにいのちを差し出した。13条はそれを180度ひっくり返したのです。一人ひとり、どのいのちもほかの誰と

だってとりかえることなんてできない。私もあなたも自分を大切に思い、自分らしく生きていいんだよ。13条は、それを許して認めてくれてるだけじゃなく、そういう個としての自分を持って生きなさい、と求めてもいる。そういう人たちで国がつくられていないと、国が間違った方向に暴走した時、誰にもそれを止められないのだから。

娘が訳した13条とその解釈は、私にとって新鮮な驚きでした。それまでは9条を中心に語ってきたけど、それ以後、私の憲法語りは13条のドアから入っていくように。すると、憲法って9条だけでできてるんじゃなかったんだね！　13条にそんな意味があること全然知らなかった、13条に自分を重ねて涙が出ました、などなど、聞いた人たちの感想や反応が明らかにそれまでと違ってきて。伝えたいことが伝わっている、そんな手応えを感じながら語れるようになっていったのです。

リーさんの13条

ウクライナにロシア軍の侵攻が始まった時、これまでと同じような、13条を中心にした憲法の語り方でいいのだろうか、実は悩みました。戦争という国の一大事に、個人の尊重とか権利とかって場合じゃない、と言われそうで。それでもしつこく考えることをやめないでいたら、いや、むしろ逆でしょ、今あらためて13条をとらえ直すことが必要で大切なんだ、と思えてきたのです。

そんな時、思いうかんだある人の名前、バーバラ・リーさん。9.11同時多発テロの起きたわずか3日後、アメリカ議会で「テロを起こした組織や国家に対して、大統領が武力行使することを認める決議」が出されたのだけど、その時ただ一人反対したのが下院議員のリーさんでした。

自分の国があぶない、と思った時、あっという間に国と自分が一つになる性質が人間にはあるのでしょう。アメリカ中が星条旗一色に染まり、報復だ、対テロ戦争だ、の声があふれる中、武力行使の決議に反対したリーさんへのバッシングは、一体どれほど激しかったことか。それでも、リーさんは自分の国がこれから起こすだろう暴力の連鎖をなんとかとめたくて、まわりに流されずに自分の意思を貫きました（現実にはその決議を根拠にひと月後、アメリカはアフガニスタンを爆撃、2003年イラク戦争、それがまたあらたなテロリストを生みだすことに）。

これって私の目からは、リーさんがすんごく踏ん張って、彼女が個人としての彼女であり続けた＝彼女の13条をしたことのように思えます。まわりがどんどんかわって全体が一つになっていく時、それに呑み込まれない自分でいられるだろうか。リーさんのとった行動は、13条を生きることの厳しさを突きつけているけど、自分をとりまく世界がかわっていった時に、「今はもうこんな世界になっちゃったから、平和のためには戦争もしかたないよね」という私になっていいのかどうか、そう問われているようにも思ったのです。

個人、といえば、自民党が2012年に出した党としての改憲草案では、今の13条「国民は、すべて個人として尊重される」が、「全て国民は、人として尊重される」に変えられているのがとても気になります。このような状況になったことでなおいっそう、「個人」から「個」をなくすことの意図が、私には大きな違いに思えてならないのです。

戦争になったら、でなくて

ウクライナでの戦闘が続く中で、日本が攻められたらどうしよう、戦争こわいから防衛費もっとふやさないと、敵を攻撃する能力だって持たないと、と言う声が私の身近なところからも聞こえてきます。そう思いたくなる不安、大きなものに守ってもらいたいきもち、どちらもわかる。だけどいったん戦争になったら、それを終わらせるのがどれだけ難しいことか、もっとはっきりわかる。なので、戦争になったら、でなくて、どうしたら戦争をはじめさせないですむか、戦争になる前にできることはないのか、そっちの矢印から考えて私は行動したいです。

防衛費をこれまでの２倍にふやすことも、核の共有も、9条に自衛隊を書き込むことも、どれも周りの国々を刺激して挑発すること、平和から遠ざかる

こと。大きく勇ましい言葉に対しては、より慎重でありたいです。「この国を守る！」と国のリーダーがいう時、そこに一人ひとりのいのち、私のいのちは本当に含まれているのだろうか。

戦争をはじめさせないために普段からできること、いっぱいあると思います。小さな平和のひとかけらとしての私が私であることをやめないこと。全体に呑み込まれない私であり続けること。戦争につながりそうな火種をみつけたらそのつど意思表示する、といったことごと。

話している途中から、憲法を語る時間が長くとれなくても今夜はきっとだいじょうぶ、と思えました。なぜなら私自身、憲法を知る前に、紅茶をしてきて気づかされたもっと大切なことがあって、その大切なことが実は憲法の理念につながっていたと、徐々にわかってきていたからです。それはたとえば、一人ひとりをどうしたら大切にできるかを考えたことであったり、きもちは言葉をさがしているということだったり、ひとはdoだけでできてるんじゃない、その土台にはbeがある、だったり、その人を聴くことだったり、身の丈で認める／認められるだったり、と。

トーク②の紅茶で語ったことは、私なりの13条の実践でもあったこと、今夜聴いている人にはきっとわかっていただけるだろう、そんな予感を持ちながら話し続けられたことが本当にうれしかったです。

きもちキャッチボールの最後に

いよいよ夜もふけてきて、残り30分はみなさんとのクロストーク。マガジン編集長の団さん、団さんの息子の遊さん、編集部の大谷さん、千葉さん、チャットの書き込みや手をあげての感想や質問。zoom空間の中ではあったけど、みなさんとキャッチボールできたのを感じたよ。

オンライントークの最後の最後に、Tくんにも少し話をしてもらいました。「きもちは、言葉をさがしている」というフレーズを私に思いつかせてくれた、あの彼が、この夜のトークライブに参加していたのです。あの時から20年あまりの時がすぎ、今の彼は40代、一人の女の子のお父さんであり、社会的養護の子たちと関わる仕事についています。急に名前を呼んであてたけどこころよく受けてくれて、彼自身の言葉でその時のことやきもちを語ってくれた。おかげで、「きもちは、言葉をさがしている」の意味がもっと深くなって、この夜のトークの最後にふさわしい、びっくりプレゼントになったんじゃないでしょうか。私にはもちろん、きっと聞いてた方たちにとっても。

この夜は、紅茶の時間の小さなエピソードや憲法のこともいっぱい語ったけど、それを書いたら長くなりすぎるし、そもそもそういうことをずっとマガジン連載で書いてきたので、その話は一期一夜の語りに参加してくださった方たちの胸にとどめることにしましょう。

あらためてマガジンのこと

これを機にマガジンのこと、紅茶のこと、もっと知りたいと思われたら、今から5年前のマガジン30号発刊記念号に、それまで20回以上の連載を続けている人たちの原稿が一挙掲載されているので、どうぞそれをご覧になってみてくださいな。先ごろその30号で私の連載を読み返したら、紅茶を始めた頃のこと、その様子、その後のこともかなりこまめに書いていました。団さんの連載もほかの方たちの連載もすべてここから読むことができます。
https://www.humanservices.jp/magazine/number30-special

マガジン連載を土台にして書いた本たちの紹介は、娘のウエブサイトにくわしく。その他の紅茶の本たちのことも。
https://maiworks.cart.fc2.com

最後に、対人援助学マガジンさん、夏の夜のトークライブを企画してくださって本当にありがとうございました。そしてご参加のみなさまにも夜遅くまでのおつきあいに、感謝の拍手を、パチパチパチパチッ！と。

2022/8/27

路上生活者の個人史

第５回

竹中尚文

今回、聞き取りに応じてくれたのはタナカ氏(仮名)である。タナカ氏は初めて見る顔だった。私がタナカ氏の顔を覚えていなかったのではなく、彼は初めてここに来たのだった。ここに来ると稲荷寿司や生活必需品がもらえると聞いて来たそうだ。ホームレスの多くの人たちは、支援者の様子を窺っている。何回も顔を合わせる内に少しずつ言葉を交わすようになる。タナカ氏の場合は異例だった。いきなりインタビューに応じてくれた。そして、自分の匿名性をどうやって保つかを納得して、インタビューを受けてくれた。一ヶ月後の食糧支援には来なかった。他のホームレスの人によれば、数日後に他の支援団体によってホテルに短期間滞在させてもらってから、就職の支援をうけたらしい。彼が淀川の橋の下で寝たのは数日だという。短い方がいいに決まっている。私も話を聞きながら、そんなに長くここにはいないだろうという気がしていた。

タナカ氏(仮名)1992 年生まれ。

大阪の中之島で生まれました。もうすぐ 30 歳です。19 歳で大学に入るまで大阪の中之島ですごしました。そうですね、大学は一浪して入学したので、19 歳まで実家で育ちました。大学は、九州大学の医学部です。そうですね夢をもって、勉強をしました。

夢ですか？　命あるものに興味がありました。命は人間だけでなく、動物にも命があります。それを区別して細分化することで、命を見ていないように感じていました。人だけとか、特定の病気だけを診ることでそこにある命の存在を忘れているように見えました。自分はそこにある命を診ていきたいと思っていました。中学生の頃、祖父母が牧場をしていました。そこで、動物に病気が発生して全頭処分になりました。家畜の命はいともたやすく「処分」されるのです。そのことがとても悲しく悔しかったです。

大学は卒業していません。4 回生の

時に挫折をして、大学を辞めてしまいました。中退した理由は、「金と酒と女」です。僕はダメな人間だったのです。僕は小学校の頃から、みんなが外で遊ぶというときに教室に一人残っている子どもでした。みんなが何かをするときに、自分だけは一人で閉じこもっているような子どもでした。そんな少年のまま、大学生になってしまいました。そんな自分に嫌気がさして、はじけてみたら身を持ち崩してしまいました。解剖の時の「臭い」はずっと鼻の奥に残っているのです。えっ？女？ ずいぶんと入れ込みました。そして「別れ」もひどかった。ずっと立ち直れなかったですよ。そんな時にちょうどよかったのが酒です。お酒に入れ込んで、気が付いたらお金で身動きできないようになっていました。

学生ではどうにもならない額の借金を作ってしまいましたので、大学を辞めて実家に帰りました。働いて借金返済をしました。どんな仕事かって、言えないような仕事でした。3年ほど過ぎた頃に、警察のやっかいになりました。裁判官に諭されて、二度とこの世界に戻らないと決心をしました。

実家に帰ったら、鍵が変わっていました。あれ？と思って、電話をしたら番号が変わっていました。ウチは母親と二人だったのです。私は母親に捨てられたと思いました。

ウチは母子家庭といいながらも、密な親子関係を感じてはいませんでした。子どもの頃に何かを買ってほしいとせがむと、買ってはくれるのです。買ってから「これはおまえに対する投資だから、いつかちゃんと返せよ」といいました。塾や他の衣類なんかもそうでした。小学校から帰ってくると、千円札が置いてあるのです。それを握って、コンビニに行くのが日課でした。中学生になると、母親が彼氏を作っているのを見るのです。ウチから飲み屋街が近いのであちこちの飲み屋に行きました。「母親を迎えに来ました」といって、あちこち馴染みの店を回りました。僕も同じですが、母親は酒癖が悪いのですよ。そして、大学入試に失敗して浪人をし

たときに、母親に言われました。
「おまえは失敗作だから、大学卒業までは面倒を見てやる。それ以後は、おまえにかかった費用をしっかり返済しろ。それ以上の関係はないものと思え」
と。

家族に対する思いですか？それは、ありましたね。自分が父親になったら、絶対に一人親にさせないと思いました。何かあっても、陰の部分を背負いながら何とか生きていくという家族観が理想でした。でもね、大学の頃に読んだもので、不幸な家族で育った人間は幸せな家族をつくれる確率が低いと知りました。その時、自分は親父になれないのだなと思いました。親父になってはいけないと思いました。

20 代前半はいろんなことがありましたけど、自分の人生をリセットしなければならないなと思うようになりました。そんな思いがわいてきた頃に、友だちが声をかけてくれたのです。料理店を始めるからといって、住む所もあるというのでそこで働くことにしました。寮に入って 2 日目にその友だちが消えました。住まいを追い出されて、千円あまりしかありませんでした。川西だったのですが、もっと都心に行かないと何ともならないと思って歩いてきました。とりあえず、その先の淀川大橋の下で腰をおろして、ここの炊き出しを聞きました。

【記録者】彼は再び支援の場に来ることはなかった。改めて考えてみると、人間が生活する上で必要な要素と考えられているのが「衣食住」である。この「住」を失った状態をホームレスというのであって、同時に「衣」も「食」も厳しい状態になる。最近のウクライナの状態をみても、本人の意図とは無関係に「衣食住」を失う。ホームレスの状態を自己責任と言い放つ人の傲慢さを認識したい。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第44回

『PLAN75』

１．ホモソーシャルなつながり

教え子が京都に店を出すことになった。その子は体育会の野球部だった子で、彼の友達のアメフト部だった子と一緒に店を出すというのだ。彼とは卒業後もインスタで繋がっていたのだが、つい最近までは企業の営業をしていた。この春、そこを退職して、京都でカフェバーをオープンである。

まず、オープン当初に店に行った。京都の中心地に近いところで、1 階の広い場所だ。これだと家賃も相当かかるだろうと思ったものだった。「実は会社では暇だったんです。ちょうどコロナだったから、営業も zoom でしかできなくて・・・」と彼は話してくれた。暇で給料をもらえるんだったら、むしろラッキーという気もするのだが、今の子は自分の好きなことをしたいという気持ちの方が強いらしい。まだ成功するかどうかあてもないお店だが、とりあえず、自分の好きなことをしているという感触はあるみたいだった。

彼と二人で一緒に写真を撮ってインスタにあげたが、その日はそれで終わりだった。食べるものはあまりおいてない。これから広げることを考えているみたいだが、今はアイスクリームやスナックぐらいしかない。夜の営業がメインなので昼は大してお客は来ないのだそうだ。

実はその子よりも、彼と野球部の同期のある男の子と仲が良かったのだ。彼はよく喋る子であああいう子が一人いると授業がやりやすい。しかも、ただうるさいというのではなく周りを楽しくするようなことを言ってくれるので、他の学生たちも、俺と彼のやりとりが面白いと言っているくらいだった。

店を出した彼の話だと、その面白い彼は、東京で就職した後、結婚して、今は地方にいるとのことだ。野球部の連中ともそれほどやりとりはないらしい。たまに電話で話す程度だと言っていた。

2 回目に行ったのはその数週間後、同じ野球部の別の元教え子からラインが来て、「一緒に行きま

しょうよ」と誘われたのだった。彼は京都在住なので、暇な時にはしょっちゅうそのお店に行っているらしい。

昼なので、またお茶だけで過ごすことになる。せっかく、その子と一緒に行くのに 15 分くらいで帰るのは味気ない。でも、「そんな長い時間、俺が若い人たちと時間過ごせるかね？」というと、「過ごせますよ（笑）」と返事が来た。それで日曜日の昼にお店に出かけたのだった。

その日も、店は彼の友達が集う程度だった。店を出した野球部の子と誘ってくれた野球部の子、そしてアメフトの子、この時初対面だったのは同じくアメフト部だった彼の友達、そして、彼らの友達の女の子。6 人だった。確かに時間はすんなり過ぎていった。自分の子供くらいの歳の子たちなのに、それほど疲れることもなく、取り止めのない話が続いた。

考えてみると俺は体育系の子とばかり繋がっている。普段やりとりする大親友の先生は別として、それ以外は一人残らず、体育系のマッチョな男たちだ。

俺は本来体育会的な性格の男だったのかもしれない。しかし、運動神経がなかったため、体育系のグループには入れなかった。そのことは俺の人生にずっと影を落としてきた。彼らと話をしながら、なんとなく寂しい気持ちが浮かんできたものだ。

彼らは今 30 の手前である。今の若い人の場合は、30 代半ばまではモラトリアム期間。自由に自分の好きなことをしようと思っている子が多いのだそうだ。何度も会社や仕事を変えたりもしている。俺なんかの目から見れば、それだけ転々としたら将来にマイナスなのでは？とも思うのだが、その考え方自体が古いのだ。

俺たちの頃は、出世を念頭に置いて若い日々を過ごしていた。したがって、ずっと同じところに止まらなければ出世コースから外れる、年功序列から外れる、そういう価値観にとらわれていた。

しかし、今は違っている。ある先生の話だと、今の若者は、「生まれた時から不況。節約は当然。高望みもしない優しい世代」なのだそうである。

それはある面いい傾向なのだろう。

俺はそんな生き方していて、子供ができたときに大学までやることができるの？と問いたくもなるが、今は共働きが当たり前。しかも、この頃はなんかかんか奨学金があって、お金のない家庭の子でも、無理すれば、下宿して私立の大学に通うことができるらしいのである。

世の中、いい方に変わっている。そもそも大学なんて、アメリカは昔から年の入ったおじさんやおばさんもたくさん学んでいた。全体の 4 割くらいは 25 歳以上だと聞いたことがある。日本はいつまで経ってもそうなっていかない。そういう社会が間違っているのだ。

人生 100 年時代。焦って生きるには長過ぎる。長距離をゆっくりと生きていくのがこれから若い子の生き方なのだろう。

２．　女は怖い！

8 月のある日。

ある男性とその日は会食だった。その人は 30 代で、今は尊敬される仕事をなさっているのだが、かつては引きこもりだったとおっしゃっていて、俺と話が合うかと思って、俺の方が誘ったのだった。

場所は、河原町近くのイタリアンレストラン。ここはジムで知り合った人がやっているお店で前から来たいと思っていたお店だった。

「僕は今でも引きこもりなんですよ」と彼は言った。今でもそれほど積極的に誰かと付き合うタイプではないみたいだ。

俺は、彼に俺の不登校体験を話した。俺たちの頃は、不登校の走りだったから、周りがどう対応していいかがわからなくて、火に油を注ぐような対応をされることもたびたびだったのだと・・・。

彼は俺より 20 以上若いので、さすがにそれはなかったみたいだ。

「僕は別に引きこもりが悪いとは思っていない

し、恥ずかしいこととも思ったことがないんです」と話してくれた。

彼は俺と同じで、中学くらいから引きこもっていき、高校には行かず、高校卒業認定試験を経て大学に行っている。俺たちの頃の大検である。その意味で俺と彼は一つ穴の狢だ。これまで俺の周りで大検や高卒認定試験で大学に行った人は、10年くらい前に東京に移って行った、京大卒のマッチョくんと、近くのカフェでずっとバイトをしていた、立命館大学中退のお兄さん、2 人だけである。

皆それぞれ俺より若い。不登校がだいぶ市民権を得てきてからの人たちなので、俺ほどひどい思いはしていない。またこの 2 人は不登校とは言えない。マッチョくんは今もう 40 代のはずだが、彼は自分から学校をやめるタイプだ。過激で行動力のある彼のことだから、こんな高校だったら俺の方がやめてやるというところだったのだろう。カフェのお兄さんももう 30 代の半ばのはずだが、ワイルド系で、アメリカの高校に行っていたため、帰国後、高卒認定試験を受けることになったと言っていた。

今回の彼は、正真正銘の引きこもりだが、のんびりした、マイペースタイプ。

だけど、俺の頃はそうはいかなかったんだよ。大検とか不登校とかが市民権を得ていない時代だったから、近所に出ることもできず、近所の人たちからは白眼視され続ける日々。高校の先生たちもどうやって対処していいかがわからない。何よりも恐怖だったのは、不登校になって間もない頃、クラスの女の子たちが一団となって俺の家にやってきたことだった。クラスのリーダー的存在の女の子が吉永小百合タイプの子で、彼女が「みんなでいってあげようよ」と音頭をとったのだろう。

男の子たちは、他人事はどうでもいい。俺が学校に来なくても気にならない。俺は高校には 3 日くらいしか行っていないので、みんな俺のことを何も知らないのだ。だけど女性はというと往々にしてそういうことをしてしまうのだ。女子は連続体をつくる。好きで連続体を作る子ばかりではないのだが、女性の場合はみんなに合わせなかったら、自分がいじめられる。もちろん、その時の彼女たちは善意である。しかし、中学の頃に女の子たちの集団的いじめにあって、女性恐怖症に落ちいっていた俺には、あれは悪夢のような恐怖だった。

あの時、お金は一円もないのに、裏口から逃げ出し、タクシーでおばあちゃんの家に向かった。怖かった。おばあちゃんがいてくれて、お金は払ってくれた。怖い、怖い、女の子の集団は怖い！あの時の動悸は今でもおぼえている。

その後、3 年間地獄を這い回る日々が続いた。18の時にやっと塾に通えるようになり、そして大学に入った。大学に入ったら入ったで、英文科だから女の子ばかり。またも女の子たちの陰口や悪口に悩まされる日々だった。当時は俺のことを好きになってくれた女の子もいたが、彼女からの執拗な口説きにも恐怖を感じていた。俺は女性が怖くて、付き合える状態ではなかったのである。

「そういう図式を気にするところが、國友さんが真面目なところなんですよ」と彼からは言われた。

彼は不登校であっても、世間の常識に外れていても、男の規範に外れていても、気にしない、そういう人なのだ。

だけど、あんだけ連続的に女の人からトラウマを負わされるとなったら女は怖いという図式は生まれてくる。

「俺はこれまで色々な大学で教えてきたけど、自分の行っていた大学ではまだ一度も教えたことないんだよ。まだトラウマなんだよ（笑）」と俺は彼に話した。

「俺としては大学の頃は必死だった。高校に行かなかったから、大学は石に齧りついてでも卒業しなくては！と思っていた。女性への偏見も無くそうと思っていだ。だけど、裏目に出るようなことばかりが起きて行った。そして卒業間際になって、ゼミの先生からのアカハラ。他の大学の大学院に入ってからは少し上向きになっていったけど、

大学まではどん底だったんだよ。」

本当に大学の頃は、なぜここまで悪いことが続くのかと思うくらいだった。正確には小学校の高学年くらいから俺の人生は次々に試練とトラブルに巻き込まれて行ったのだった。人間の人生はドラマだ。不運が続く時期は本当にあるのだ。当時、幸運の神様は俺に完全に背を向けていた。

そして、俺の不運にはいつだってジェンダーと女性が絡むのだ。

彼と食事をする数日前、思いもかけないトラブルが起きた。Facebook で繋がっていたある女性から突然、友達を切られたのだ。俺がコメントした内容が、彼女のツボを刺激してしまったみたいだった。彼女はその前日まで、いいね！をたくさん入れてくれる人だったので、あまりのあっけない友達解除に俺はショックを受けた。

どこがどうまずかったのか？自分でもわからない。そのことを行きつけのカフェの女性に話すと、「たまたまその時の機嫌が悪かったんじゃないの」と言われた。そうなのだろう。それほど深い意味があったわけではなくて、成り行きで解除されてしまったのだ。深く取ることはないか。

Amazon で見てみると、姫野友美の『女はなぜ突然怒り出すのか?』など、女はそういうものだというようなタイトルの本は何冊も出ている。それが女の本質なのだと割り切らなきゃいけないんだろうけど、俺は過去のトラウマがあるから割り切ることができない。女性への恐怖がますます増幅されていく。

俺の女性嫌いは固着している。もう 60 だし、このまま生きるしかないのだろうが、今でも俺はそういう自分を不完全に感じているのだった。

3. 孤独なお盆

8 月 13 日、お盆モードになった。周りは 13 日から 16 日までが連休という人が多く、インスタグラムを見ていても、一気に旅行の写真が増えた。

実は今年の夏休みは元教え子たちに遊んでもらうことを期待していた。実際、9 年くらい前に教えていた男の子は、また一緒にプールに行くことを承諾してくれていた。彼とプールに行ったのはもう 6 年くらい前だ。彼は水泳部で、真面目ないい子なので、俺のような先生にも殊勝につきあってくれるのだった。

ところが、13 日になっても彼からは連絡が来ない。彼は結婚間近の彼女もいると聞いているので、おそらく彼女とのデートに忙しいのかもしれない。

また福井県に住む先生のところにも遊びに行きたいと思っていた。その先生には長年お世話になってきたのだが、定年退職なさって今は 75 歳のはずだ。しかし、まだ元気で、京都に来られた時には会っていた。

福井は 10 年以上前に一度行ったことがあって、その時にソースカツ丼を食べ損ったのがものすごい心残り。 1 度食べてみたいと思っていたのだ。

その先生にもラインしたのだが、それほどいい返事が返ってこない。どうやらあまり乗り気ではないみたいだ。もう 75 歳だし、ゆっくりしたいのかもしれない。あるいは夏休みで、孫がたくさんいるから孫の世話で忙しいのか。とりあえず、あまりしつこくいうのは不愉快だろうと思ったので、連絡しないことに決めた。

そのほかにもインスタでつながっているかつての教え子はたくさんいる。「また、会いたい。会いに来てください」と俺が誘えば、「是非是非、また会いたいです」と返事が来るのだが、結局、言うだけで、皆来ないのだ。皆社会人になってしまっているし、お盆休みは里帰りや小旅行などで過ごしているのだろう。またそのうち気が向いたらつきあってくれるだろうから、あまりしつこく言わないほうがいい。

友達は俺の人生にやってきては去っていく。人生、そんなものなのだ。

俺の方も、この頃はたくさん友達がいすぎるのはしんどいという気持ちにもなっている。俺は元々が引きこもりだったため、その分の余白を埋めようと、40 代くらいの頃は交際範囲を大きく広

げたが、60 近くになってくると人付き合いも程々にしなければ、体力がもたなくなってくるのである。映画も昔だったら毎日のように見に行っていたが、今は毎日だと体力がもたない。昔だったらどれだけ仕事が忙しくてもレイトショーに行っていたが、もうレイトショーなんて久しく行っていない。次の日の仕事に差し支えると思ってしまうのだった。

このところ年のことばかり考える。もうすぐ 60 だ。顔を見ても白髪が増えて、おじいさん顔になってきたと我ながら思う。今は人生 100 年時代だけれど、60 代ぐらいになってくると徐々に死ぬ人も出てくる。ガンなどの病気にもなりやすくなる。俺の人生いつまであるのか。

このところ残尿感がある。トイレに頻繁に行きたくなる。でも行っても出ない。そういう状況が続いている。これはおそらく老化なのだろう。

８月になって、ミニドッグにも入った。まだ結果は出ていないのだが、なんと身長が 1 センチ縮んでしまった。もちろん、その時の髪の毛の状態や姿勢で 1 センチくらいは前後するだろうから、そこまで真剣に考えることはないのかもしれないが、ショックだった。

俺が 10 年ほど前までやりとりのあった男性運動系の男性は俺より 10 歳年上だが、最近になって癌と診断されて、すぐに亡くなると言うことはないにしても、すでに転移しているらしくて危ない状態らしい。あれだけ健康自慢で健康第一の生活をしてきた人なのに、人間癌になるときはなるのだ。

それにしてもこの人は変わっていない。俺がこの人と決裂して、もう 10 年以上経つが、彼のブログを呼んでいると考え方は全く変わっていない。どれだけ痛い目にあっても、人間は変わらないのだなあと感慨すら覚える。

先日、電車の駅で誰かが大きな声で喧嘩していて、フッと見たら、8 年ほど前に喧嘩別れした女性だった。彼女も年齢的には俺より 10 歳くらい上で、これまでも様々なところでトラブってきた人だが、やはり変わっていない。

このお二人と限ったものではない。あの当時出会って、決裂した人たちは、ほとんどその後も同じ人生を繰り返している。同じ歌を歌い続けている。人間、基本は変わらないというのは本当である。

俺だって変わっていない。変わりたいと思いつつ、変えられない部分は、宿命なのだろう。そう考えるしかないのだ。

４．「死」が近づいてくる。

歳をとるにつれて、何よりも「死」を身近に感じるようになってきている。

俺のおじさんたちは一人残らず亡くなった。おばさんたちはまだ生きてはいるが、だいぶ頭がボケてきている。母は元気だが、母もいつまで元気でいれるかわからない。もう 84 歳なのだ。

これから一人ずつ、身近な親戚や友人が亡くなっていくだろう。先日もお世話になった先生が 79 歳で亡くなったと聞いた。今は 80 歳前に死ぬと若いと思ってしまう。昔は、平均寿命は 70 ぐらいだったのに。

俺の知り合いの先生は、人生 100 年と言うのは政府が年金給付を遅らせるためのプロパガンダだと言う人もいる。けれど、俺の周りは確実に 90 以上まで生きる人が増えている。おばさんたちは皆 80 歳過ぎているし、先日亡くなったおじさんも 90 過ぎていた。

俺はいつまで生きるのか。

この頃、つくづく体力や気力が衰えてきたとは感じる。40 代の頃までは仕事をこなした上に、学会や勉強会に出かけ、スポーツクラブにも通っていた。映画も今よりたくさん観ていた。ところが今は、ボクシングジムに週 1 回通うのがやっとだ。映画も、この頃は配信で見ることが多いせいもあって、途中で見るのをやめてしまう。

まだ仕事を減らすわけには行かないし、仕事を減らしたら、余計にしんどくなるだろう。俺は暇

をつぶす、ぼーっとする、遊ぶということができない状態になってしまっている。いつだって、家に帰ると頭は冴えているのだが、何をしていいのかわからない。スポーツクラブに行くのもしんどい。映画に行くのもしんどい。早くに寝てしまう。しかし、寝るとすぐ目が覚める。これも年のせいで、たくさん寝なくても大丈夫な体の状態になってしまっている。

一方で、起きているのもしんどいのだ。もっと頭を遊ばせる習慣をつけなくてはならないのだ。自分で言うのもなんだけど、俺は 30 代くらいからフル回転で頑張ってきたので、遊べなくなってしまっているのだ。

それが疲労の原因になってしまっている。

先日、久しぶりにオイルマッサージを受けた。俺のところに毎週きてくれるマッサージの人がお盆休みで、どうしてもマッサージを受けたくなって、久々に昔行っていたところへ行ってみた。

そこは 10 年以上前からたまに行っていたところでそうそう通い詰めていたわけではない。だけど、そのお店の女性は俺のことを本当によく覚えてくれていて、昔に比べると痩せましたねと言ってくれた。あの当時の俺、何キロくらいだっただろうか。俺は痩せている時と太っている時でアップダウンがあるので、いつだったのか思い出せない。

ここのお店の特徴は、至れりつくせり、丁寧にやってくれるところである。きめ細やかなマッサージというところなのだろう。

ここは従業員の人は女性ばかりだが、こういうのを女性的というのだろうか。最初にお茶を出してくれて、終わるとお茶とちょっとした和菓子が出る。オイルマッサージの時はオイルがつかないために使い捨ての紙ショーツを用意してくれている。

男の人がやっているところのような荒削りな味わいではないのだ。

ただ、俺は、女性的・男性的という言い方は極力避けたいと思っている。それを言ってしまうと、かつての俺のように辛くなる人がでてくるからだ。男という枠にハマらない人・女という枠にハマらない人には、これくらい嫌な言い方はないのだ。

『キレる女　懲りない男』という本をマーケットプレイスで買った。なかなか面白い考察があるなあと思いつつ、ページをめくっていた。

ところがだ。本の途中のところで、レディファーストを肯定するような一節があって、そこで俺はキレてしまい、読むのをやめてしまった。

彼女がいうには、男性は機械的にしているだけのことであっても、レディファーストをしてもらえると女性はとても嬉しい、男女平等の名の下に廃れさせるには惜しい習慣であるとのことである。

しかし、この考えは明らかに彼女のご都合主義だ。それをいうんだったら、男だって女の人に気を遣ってもらえれば嬉しいことはたくさんある。ところが、それを大っぴらに言ってしまうと、「女性差別だ」とフェミニストたちからお叱りを受ける。

俺の知り合いの女性はフェミニスト的な女性で、SNS に多少でも女性差別を匂わせるようなことを書くと厳しいコメントを入れて、正そうとしてくる。その一方で、自分は平気で男を批判するようなことを書くのだから、腹が立ってくるのだが、炎上になるのが怖いから、俺の方は何も言わない。

世の中は、まだまだ「男性差別」を理解していない。レディファーストは、「女性の方が弱き性」であるという考えが前提にある。女性よりも強い男性はいいだろうが、女性よりも弱く、スポーツもできず、能力のない男性からしてみれば、プレッシャーとなる。自己価値を落とすことになる。

俺は弱い男であるが故に馬鹿にされ、踏み付けにされた少年時代を送った。それで心が壊れて、今でもその後遺症に苦しんでいる。俺はまだ男になった気持ちではないのだった。

あー、また昔と同じことの繰り返しを書いている。また、昔のトラウマが蘇ってきた。
俺はこの問題に目覚めるのが早過ぎた。いつまでたっても社会は俺の考えを理解してくれない。も

ういい加減、諦めざるを得ないことなのだけど。

痛恨の思いを抱えたまま、俺は一生を終えるのだろうか？

５.『PLAN 75』（早川知恵監督・2022）

先日、安いからと思って手相を見てもらったら、65 歳くらいでちょっと体調に危険が訪れるかもと言われた。それを乗り越えれば長生きできるそうだ。ちょっとギクッときた。俺は親父が 65 歳で亡くなっているのだが、65 歳で死ぬのは今の世の中ではあまりにも早い。しかし、安倍さんもお父さんと同じ歳で死んだし、竹内結子さんもお母さんと同じ歳で死んだ。俺もひょっとして、65 歳で死ぬ運命なのだろうか。そうなるとあと 7 年しかない。さあ、どうしよう？？？ 友人にそれを話すと「占いなんて真剣に気にしなくても」と言われた。確かにそうなのだろうが、俺は気になる性格なのだ。

俺の母は 60 過ぎてから始めた仕事がうまく行って、世界中を回った。70 代くらいまではバリバリに仕事していたが、80 過ぎてからは流石に仕事を減らして、今は長年乗っていた車も廃車し、弟の料理をつくるのを生きがいにしている。弟と二人暮らしなのだ。若い頃は苦労の多い人だったが、幸せな晩年である。今でも友達がたくさんいて寂しいお婆さんではないのだ。

俺は死ぬ時はアメリカで死にたいという気持ちもある。俺の人生はアメリカ、アメリカだったのだ。それを母に話すと、アメリカで死んだりしたら、誰もお墓参りしてくれなくなる。「私がある程度のお金は残すから、それで年に１回くらいアメリカに旅行すればいいじゃないの」と言われた。母は俺の老後や死んだ後のことも考えてくれているのだ。俺はどっちみち、日本で死んでも、お墓参りに来てくれる人なんていない。そんな人が欲しいとも思わない。俺は今洗礼に向けて勉強中だ。洗礼は天国へのパスポートと言われる。洗礼を受けて、神様のもとへとやすらかに旅立つのだ。

『プラン 75』は、75 歳を過ぎれば、自分の生死を決められるという発想を前提にしたドラマである。前回の連載にも書いたが、健康年齢は 72 歳くらいだと聞いているので、75 くらいで死ぬのが一番理想的なのかもしれない。

何よりもこの映画で身につまされたのは、倍賞千恵子扮する老女が若い女の子に遊んでもらおうとする場面である。オレオレ詐欺が問題になっているが、歳をとると若い子に遊んでもらえるのは本当に嬉しい。つい甘い言葉にのせられてしまう。

俺もこの原稿を書きながら、誰かかつての教え子が連絡してこないかなあと心のどこかで願っている。彼らとたまに会って食事をすることが、今の俺の最高の幸せの瞬間なのだ。

だけど彼らからしてみれば、俺なんか単なる爺さん。気が向けば遊んでくれるけど、積極的に遊ぼうとは思わないだろう。まして、今はお盆だ。里帰りもあるし、友達とのバカンスを楽しんでもいる。誰が俺なんかとつきあおうとするだろうか？

これから 10 年、20 年経てば、ますます歳をとり、構ってくれる若い子は減っていく。

これからの老後を考えなくてはならない。とりあえず、75 歳までは若々しい人もいるから、それを目標にしよう。75 で死ぬのではなく、75 まではせめて若く！それが俺にとってのプラン 75 である。

役場の対人援助論

（４２）

岡崎　正明

（広島市）

自分と相手と世界のとらえ方

ボーっと生きてます

先日なんとなくテレビを見ていると、永遠に５歳の女の子が大人に疑問をぶつけては答えられないと罵るという某人気番組で、「なぜ惑星というのか？」というテーマをしていた。

天文学のことはほとんど分からない私でも、「惑星」が地球とか火星とか金星とかを指す言葉で、恒星（太陽みたいに自ら燃えて光っている星）の周りを規則正しくぐるぐる回ってる（いわゆる公転している）星のことを意味するくらいは知っているが、言われてみれば確かになぜ「惑星」と書くのか。その理由はさっぱり見当もつかなかった。

番組の解説によれば、昔の天文学者たちはいく日も星を観察する中で、オリオン座やカシオペア座など、通常の星々が決まった季節・日時に決まった動きをする（それらは恒星で自らが動いているのではなく、地球の自転や公転で動いて見える）のに対し、火星や金星は右へ行ったり左へ行ったり、一見不規則にフラフラと動いて見えることから「惑う星」＝「惑星」と名付けたとのことだった。

ちなみにその名づけの際、東京大学は「惑星」を推したのに対し、京都大学は「遊星」を推して長年議論になったとのエピソードが語られており、「遊星のほうがなんとなく楽しそうな雰囲気でいいな」と感じた（どうでもいい個人の感想だが）。

この手の雑学は日常の中で次第に忘れていくのが常なのだが、この惑星のことについてはなんだか心に残った。

児童虐待や家族問題が今の私の仕事の中心だが、そうした渦中の家族について知ろうとするとき、私たち支援者はなんとなく無意識に物語の聞き手のように、小説を読む読者のように、己のポジションを位置づけているような気がする。

例えば 18 歳で A 男を出産したこの母親は、20 歳で夫の DV で離婚して隣接市に引っ越し、生活保護を受けている。不眠や不安から複数の精神科受診を繰り返し、薬物を多量に摂取してしまう。A 男は保育園に通うが、休みがちで 5 歳だがオムツがとれていないー。

こんな話を聞くと支援者側は、それぞれが得てきた経験や価値観を使って家族をイメージし、「こういうお母さんってこんな感じかな？」「こんな人ってこんなパターン多いよなー」と客観的に理解を進めようとする。そしてこの状況のリスクや、逆に強みについてあれこれ考え、どんな支援があればいいのか？に思考を発展させる。

その見立てやアセスメントがどれだけ的を得ているかはともかく、考え方の流れは多くの支援者が同じようなものであろうし、それに異議を唱えるつもりもない。
ただ一点だけ気をつけたいと思うのは、私たちは本当にまっさらな聞き手なのか？中立な読者なのか？ということである。

本当に地球は動いてる？

星の話に戻るが、昔の人類は地球が動いている（公転している）ことを自覚できていなかった。ガリレオの「それでも地球は動いている」は有名な言葉だ。さらにそれより昔の人々は、地球が丸いことも自覚できていなかった。
私はそれをバカにする気になれない。教科書で習ったから分かったつもりでいるものの、私は自分の人生の中で地球が公転・自転しているのを真に実感できたことなどない。「丸いところに住んでてどうして落ちないの？」とこどもに問われても、うまく説明ができる自信もない。

私の実感はといえば、毎日決まったあたりから太陽が昇り、そしていつも決まった方角に沈んでいく。動いているのは太陽や月で、私が住む大地は不動。これが正直な体感である。おそらく世間も似たようなもので、だから土地のことを不動産と呼ぶのだろう。

昔の天文学者は火星が右往左往するのを見て「惑星だ！」と名付けた。なるほどという感じだが、実はおのれ（地球）も同じように動いていることが分かっていなかった。火星から言わせれば「お前もやんけ！」とツッコまれるところだ。
同じように私たち支援者も、自分もそれなりに偏った物語を生きている主人公である前提を忘れがちで、相手を見て「変な動き」「乱暴だ」「非常識だ」と決めつけていやしないだろうか。

以前フィリピン人家族の小学生のこどもが、親から耳にピアスの穴を開けられたとのことで、「これって虐待でしょうか？」と関係者から聞かれたことがある。また何かの本で読んだが、欧米でアジア系住民が鍼や灸治療をこどもにしたところ、虐待ではないのか？との問題が生じた例があったようだ。
文化・習慣の違いは外国とだけでなく、地域でも、さらに言えば家ごとでも様々で、それを一方的に「変！」ということの危険性を、私は常に頭に入れておきたいと思っている。もちろん「叩いて躾けるのがうちの文化だ！」なんて明らかに法律や人権に違反する

ことを容認する気はないけれど。
セーフかアウトかを、中立でない私がジャッジすることの危うさを自覚しつつ、重要なのはそのことで、こどもなど弱い立場の人に実害やしわ寄せがきてやしないか？「基本的人権の尊重」という憲法で約束されたことが守られているか？だと思っている。

お互いさまで、歪んでいる

先日、小学５年生の我が娘と「外国の人（おそらく欧米系）が挨拶でキスやハグをするのはいいけど、どうして日本人が触ったり抱き着いたらセクハラなのか？」という話になり。娘も「外国人だったらされてもいい気けど、日本人だったら嫌よ！」と述べていた。しかし言った先から「同じ人間なのになんでかね？」と親子で首をかしげたのだった。考えたら確かに変な話だが、そこには大事なのは起きた事実だけでなく、動機や目的、意識、文化の違いといった、目に見えない要素が複雑に絡み合っているということだろう。やっぱり私たちは偏り・歪んでいると思った。

だから大事なのは「偏見をなくす」ことではなく、「自分には偏見がある」ことを自覚する。色付きの眼鏡で世界を見ている前提に立つ。まずはそういうことなのだと思う。私たちは誰からも中立な、神様みたいな存在にはなれないのだ。

自分もグルグル回る地球から見て「火星は惑って動いてるから惑星な！」ではなく、教科書の絵図のように太陽系を俯瞰して眺める視座に立つ。絶景を見渡すドローンのような視点を意識する。その大切さを改めて感じる。「ああ、俺もアイツもみんな動いてるじゃん」という境地に至ることは、システム論にも通じる発想だと思う。

そんな他者と自分の捉え方が大切なのは、なにも支援者・当事者間だけの話ではないだろう。
例えば児相と警察・学校などの関係機関同士の間だったり、さらに言えば同じ児相という組織内でも、違う部署になれば「どうしてこんな風に動いてくれないんだ」「〇〇はすぐこんなこと言うから困る」なんてことが起きるのは、よく聞く話だ。

おそらくこれは対人援助の分野に限ったことではなく、どこの世界でも日々起きている理解不足やすれ違いで。ひょっとしたらこんなことが積み重なって、人は対立や紛争や、最終的には戦争に向かってしまうのかもしれない。規模や深度は違うけれど、構造は同じような気がしている。

私たちは似たもの同士だけど、永遠に分かり合えない他人同士。そんな百人百様が肩寄せ合って暮らすのがこの世界で。そこにはどうしても無理解や誤解、偏見や諍いが避けられない。そういう運命なのだろう。
でもそれは遡って考えると、命が同一コピーをひたすら生み出す単細胞分裂から、違う個体が結びつくことで新たな変化を生むことにした、生存戦略の結果なわけで。
私たちはひとつになれない寂しさや諍いと引き換えに、他者という隣人を得ることで、ここまで途切れることなく命をつなぎ、世界をこんなにも深く多様に味わえるようになったのだとも思う。

臨床のきれはし

Sheet 18

浅田 英輔

Useless & Efficiency

○無駄キライ

私は基本的に無駄がきらいだ。効率的なのが大好き。パソコンで同じ作業を繰り返すことになんの意味も感じられない（関数でもマクロでも組めばいい）し、項数の多い計算を電卓でやっている人の意味がわからない。コームインだからかな？周りは電卓使う人が多い。エクセルで打てば間違いも見えるのに、なぜ電卓を使うのだろうか。もちろん、パッと電卓を出して計算したほうが早い場合はそうする。あくまでも効率重視である。

ちょっと前だが、毎月送られてくる数字を確認してオカネを請求するという仕事があった。項目数は多いし、計算するところも多いので、前任者からは、「２，３時間かかる」と言われていたし、実際そのくらいかかった。金額が大きいし、大事な仕事とは思うが、しょせんはただの計算である。毎月この苦痛を味わうのは耐え難い。なので、送られてきた数字を無心で打ち込めば、全部計算結果が出るようにエクセルで計算式を入れてやったら、20 分で終わるようになった。

コームインの仕事はこんなことが山ほどある。さっさと効率化してしまいたい。コームインに限らず、仕事の中には無駄がたくさんある。会議なんかもそうだ。話し合う必要がないならそもそもやらなきゃいいし、このご時世だからこそ情報伝達なら「書面開催」でもいいわけだし、オンラインでもいい。書面開催っていいよね。会場費もかからないし、時間調整もいらないし、出欠確認もしなくていい。質問があったらどうすんだ？って、オメーはメールアドレス持ってねえのかよ。キーボード打てよ。主催者も参加者も無駄だなぁって思っている会議ほど世の中に不要なものはないのではないだろうか。

意味のない無駄を減らすと、仕事がどれほどやりやすくなるのかと思う。

→なくしたい無駄

○無駄スキ

私は、無駄なことが大好きだ。通勤は国道をまっすぐ行ったほうが速いとわかっているのだが、こちゃこちゃした道を行ったり、新しい道を開拓したり、せっかく見つけたのだから通勤にも使おうとかしている。急がない帰り道ならなおさらで、わざわざ八甲田を回って帰ったこともある。いやこれは無駄ではないな！

飲み会も好きである。気を使わないメンツで、ダラダラとバカな話で盛り上がり、次の日は「何を話したか覚えてないけど、楽しか

ったーー」となることもしばしばである。「覚えてないけど財布の中身は結構減ってるな」ということもある。「楽しかった」ことは大事だが、生産性は皆無である。これも無駄ではないかも！

休みの日に何もないと、スマホをいじってマンガを見て「えっもう午前が終わる！？」となることもしょっちゅうである。それでいて昼メシを食うと今度は眠くなって昼寝をしたりする。まったく無駄な時間の使い方をしている。

→あってもよい無駄

この２つの無駄の違いは何なのだろうかと思う。

１　内発的無駄、外発的無駄

違いのひとつは、「やらせられる無駄」はイヤだということ。意味があるように思えないが仕事だからやらなければならないとか、よく知らないけどえらい先生の顔を立てるためにやらなければならないとか、そういうのはたぶん誰でも嫌なんじゃないかと思う。おそらく、それを「やれ」と指示する人も、無駄だと思っている可能性が高い。たまに「いわれたことをやるということが仕事というものだ」というおかしな考えを持っている人がいて、そういう人は、無駄だとか意味があることだとか考えないようだ。「仕事だからやる。無駄か無駄じゃないかは考えない」というタイプ。仕事楽しくないだろうなと思うけど。

話がそれたが。

無駄だと思う作業を指示されてやる、ということは「なくしたい無駄」といえるだろう。「あってもよい無駄」は、言われてやることではない。自分が選んでやることばかりだ。

もしかして、「自分は飲み会なんか行きたくないし、そこに参加する人はほぼキライだけど、仕事みたいなもんだから、行かないと都合が悪い」なんていう飲み会があるなら、それはその人にとってはやらされ感のある、なくしたい無駄に含まれるだろう。参加費もあればなおさら、時間とお金の無駄遣いでしかないだろう。

２　意味のある無駄、意味のない無駄

もうひとつは、その無駄で得られるものがあるかどうかである。「ダラダラ過ごす休日」は、何よりも休息が得られるし、「人生にはダラダラ過ごす時間が大事だ」なんて言説もある。いろいろとアクティビティに身を投じる、いわゆる「充実した休日」も楽しいが、たまにダラダラしないと疲れちゃうのである。たくさんなくてもいいけど、少しはあったほうがいい無駄は確かにある。

なくしたい無駄からは、得られるものはほぼない。「無駄な作業でも得られることがあるだろう」といったりもするが、そりゃ「理不尽に耐える我慢づよさ」なんかは得られるかもしれない。でも、それって必要？理不尽には「理不尽だ！」といえばいいし、避けられない理不尽は、能力があろうがなかろうが、耐えなければならない。無駄な仕事に対して「これは無駄だから、やり方を変えよう」と言えたほうが、会社にも社会にも貢献的なのではないだろうか。これからは働く手数は減るしかないのだから、いらないことはやめようぜ。そこに無理やり意味を見出す必要はない。

たまに、「無駄だとわかっているけど、無駄でどうでもいいことを繰り返しているだけで給料もらえるならいいじゃないか」という人もいる。別に生産性や効率性を突き詰めな

くたっていいんだけど、「無駄なこととわかっていてそれをして過ごす人生」なんて楽しいのか？当人がいいならいいけど。私はいやだ。

Useless & Efficiency

少し話はかわるが、「無駄なわけではないが、面白いとは言いにくい仕事」というのもあるだろう。これは「無駄・無駄じゃない」の議論の対象ではないが、仕事を面白くするのも、「自分からやる」「意味のあるものにする」ということが関係ありそうである。最初にあげた計算を自動化した話だが、自動化した後はその仕事は楽しいものになっていた。「もうちょっと改良できるのではないか」「そもそもの数字を入力する手間をなくすことはできないか」など考えていたのである。紙で送られてくるものをスキャンしてOCRすれば、数字の入力も不要なのでは！？と考えたが、OCRの精度はそこまで高くなかった。そして私がその仕事を離れたあとで、送られてくるものがデータになった。くやしい。

それはそれとして、ここでひとつのコラムをかけるくらいのネタになっているという点も素晴らしい。「いつも手計算する無駄を省いたら、面白くない仕事がちょっと面白くなって、かかる時間も短縮された」なんて、最高だよね。無駄を省くのは、楽しいことかもしれない。

無駄とはなんだろうか。「やらされ感のある時間」といえるだろうか。やらされてるときは楽しくない。楽しめていない時間は「好きな時間」ではない。楽しい時間を増やしたい。たぶん、そのほうがいい人生なんじゃないかな。

効率を求めすぎることは、必ずしもいいことではないかもしれない。もしそれが楽しさにつながりそうなら、ちょっと効率を求めてみるのもいいかもしれない。

最近とても好きなマンガの一つに、ヤマシタトモコさんの「違国日記」がある。登場人物のマキオちゃんとジュノさんは、ともに作家である。作家にも当然苦悩があり、「働きたくねえな！」と言い合う場面がある。「働きたくない」も本心なんだろうけど、お互い気合入れて仕事していると理解している同志だからこそ、思いが含まれた「働きたくねえな！」なんだよなぁと思った。「働きたくねえけど、お互い、気合入れてやるか！」なんだよなあ。愚痴をいうにもかっこよさは大事だ。かっこいい同志である。



違国日記©ヤマシタトモコ/祥伝社フィールコミックス

発達検査と対人援助学

⑨ ヒドゥンカリキュラム

大谷多加志

2022年5月に開催された対人援助学マガジン読書会の中で「ヒドゥンカリキュラム」という言葉を耳にした。“隠されたカリキュラム”や“潜在的カリキュラム”と訳され、学習指導要領のように明文化されているものではないけれど、教育過程の中で、意識や価値観などが、よくも悪くも学習者に伝わっていくことを指します。

読書会でのやりとりの中でこの言葉が登場したのは、「大人や教員の失敗談に、学生は食いついて関心を示す」という話の流れからでした。考えてみると、専門職養成の現場は、既に専門職である者が（資格という、ある種のお墨付きを得ている者）、その専門職を目指す初学者に対して教える、という形になっています。教える側は、無自覚的にでも「既にできる人」として学生の前に立つことになるため、“できなさ”や“失敗”を語ることは抑制されてしまいます。とは言え、語られないだけで、失敗は何事にもつきものですし、失敗から学ぶべきことは多くあります。

この読書会のあと、ある授業で自身の失敗談について、どういう状況で、どういう判断をして、どういう行動を取って、どういう結果になって、どう立て直そうとして、最終的に立て直せず終わった…という経過を自分の心情とともにこと細かく説明してみたところ、いつもとは違い、何かに引きつけられるように話に聞き入ってくれました。もちろん「人の失敗に安堵する」というやや後ろ向きな動機づけも少しはあるかもしれません。とは言え、やはり失敗について語ることには意味がありそうです。

そこで、今回は発達検査を用いた相談場面での失敗や、検査者の不安・焦りなどのネガティブな感情を取り上げてみようと思います。

【パターン 1】不安



① 検査開始前

さすがに初心者の頃ほどではありませんが、相変わらず検査開始前は少しだけ緊張しています。「検査ができないことは必ずあ

るから。相手があることなので、絶対はないから」と学生に伝えていても、自分自身も「検査不能」という事態にはやっぱり怖さが残っていて。“どんな子が来るのかな”という未知への不安と、“導入で何かやらかしてしまわないかな”という自分自身への不安の両方が薄っすらと漂っています。

② 報告書作成やフィードバック

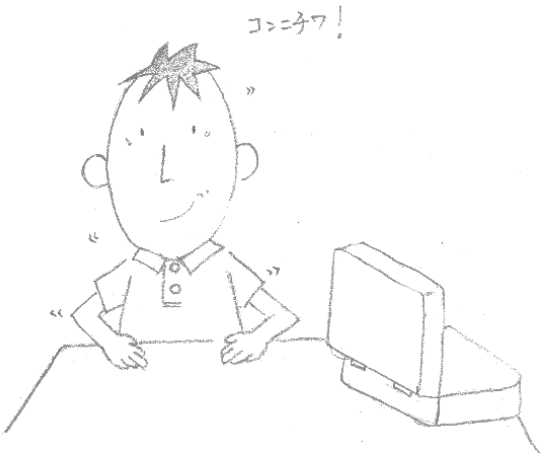
検査報告書については「主要ないくつかの要点に絞って伝えること」が推奨されていたりします。報告の内容が多岐にわたると、一見詳しく書かれていて良いような気がしますが、“結局何が言いたいのか”、“結局どういう子なのか”がぼやけてしまうからです。

一方で、自身のことを振り返ると、どちらかというと伝えたいポイントは 2-3 個しか見つけられない、という場合が多いです。別に意識的に抑えているわけではなく、シンプルにそんなにたくさん出てこないのです。つまり、「相手（保護者や関係者）がリアクションやコメントを返してくれなかったら、報告があっという間に終わってしまう」という状況であるわけで、1、2 発の弾丸しか持たずに大激戦の戦場の赴くような、なんとも言えない心細さがあります。

冷静に考えれば、検査を実施したからといってその子のことが全てわかったわけではないのですから、検査者としての意見や感じたこと、仮説などを丁寧に伝えながら、それを聞いてどう思うか、検査場面以外での姿はどうか、など互いの話をすり合わせていけばよいのです。“何か言わないと…！”という不安から、あまりよく考えずに“それは本当に自分の意見か？”と思うようなことを口走ってしまい、そこからどんどん泥沼にはまってしまったこともあります。

一度持ってしまった不安感は、検査を始めるまで消えないような気がします。消そうと思っても消えないので、「そうなんだね！今日は不安なんだね！」と少し自分を他人事の目で眺めつつ、自分の感情の手綱を手放さないように心がける、という対応が精一杯であるように感じています。

【パターン2】緊張



① 事前情報

検査の前に、どの程度の事前情報があるかは、相談の現場によって異なります。個人的にはある方が良いとも、無い方が良いとも思っていないのですが、事前情報が先入観や緊張につながるケースもあります。

“前回は検査不能でした”、“園では多動傾向、衝動性が高く、保育士の指示にはほとんど応じない”、“興味の偏りが強く、関心のないものには目を向けない”など、検査者への警告かなと思うような記述が列挙されている事前情報を見ると、“無事に検査はとれるのか”という不安と、“でも、心理士さんは上手に対応されるから大丈夫ですよね？”と試されているような感覚を（勝手に）覚え

て、緊張感が高まります。

② 関係者の思惑

これも事前情報の一種かもしれませんが、検査に関する関係者のニーズが事前に伝わってくると、その内容によって妙な緊張が生じます。例えば、数値的に厳しい結果が出ると予測していて、その結果を持って保護者を説得してほしい…！という圧を感じるようなケースもあります。

これは私だけかもしれませんが、露骨な意図を感じてしまうと、なぜか「そう動いてなるものか！」という、普段は出てこない反骨心（？）みたいなものが動いてしまって、結局“思惑に沿いたくない！”という形で思惑に巻き込まれてしまいます。できるだけフラットな気持ちで検査に臨める方が、自分の場合は先入観が生じなくていいなぁと思うのですが、一度生まれた思い込みや緊張は、残念ながら忘れようとすればするほど意識にのぼってきます。

基本的に「緊張」がプラスに作用することはあまり無いなぁと感じています。でも「緊張」も不安と同じで、消そうと思っても消えないですよね…。

【パターン 3】焦り



① 用具が見つからない

検査用具の収納の仕方は大体決めているので、普段自分が使っている検査用具を使う分には、用具を探すのに手間取ることはあまりないです。しかし、他の検査者が使った後や、初めて訪れた相談機関では、収納の仕方が自分と全然違っていて必要な検査用具を探し出せない、ということが生じます。

“使いそうな検査用具がどこに収納してあるか、事前に確認しておくのが普通でしょ”という至極もっともなご指摘がありそうですが、時に注意力不足や想像力不足で、“あ、この課題もやらなきゃだった…！”、“まさかこの課題までやらないといけない状況になるとは…！”ということも起こります。

一度だけですが、10 個あるはずの積木がどうしても 1 個だけ見当たらず、ある課題の時にどうしても積木が 1 つ足りないという事態が生じました。焦りに焦って、その時にひねり出した対応は、同じ色と大きさの「おもり」を使って検査者用の見本を作り、子どもには積木を使ってもらうという、今考えてもちょっと謎な対応でした。子どもは全然気にせず見本と同じものを作ってくれましたが、焦った時の判断は正直危険でいっぱいです。

ちなみに、見つからなかった積木は、直前に検査を行った別の子どもさんが、こっそり部屋の片隅に隠していたのでした。

② 次の課題に迷う

ある程度経験を積むと、“この検査課題を通過（または不通過）したなら、次はこれだな…”とほぼ自動的に頭に思い浮かびます。ただ、時々その自動思考が停止することがあります。子どもの気持ちが崩れて、“立て

直しを図るために次はどの課題が適切か…？”と戦略的に立ち止まって検討するという場合もありますが、特に理由もないのに思考が停まってしまうこともあります。

焦るのは後者の方です。運転をしている時にふと、“どちらがウインカーでどちらがワイパーだったかな？”と考えてしまった時のように、当たり前のことがふとした瞬間にわからなくなってしまうと、迷子になった子どものように焦りと不安が吹きだしてきます。特にきっかけがなく起こるのが困るところです。

対応としては、子どものタイプにもよりますが、あまり待ち時間が長くなると子どもの集中も切れてしまうので、早めに何かとりあえず思いついた項目をやってみて、その反応を見て次の課題を考える…というルートに乗せ直すことが多いように思います。

③ 子どもの気持ちが切れそうな気配…

検査時間が30分、40分を超えてくると、子どもの気持ちも少しずつ落ち着かなくなってきます。そんな時には検査用紙を確認して、最低限あとどの辺りの課題はやっておかないといけないか…を探り、その中での優先順位を考えていきます。

・必ずやっておく必要あり（必須）
・なるべくやっておきたい（推奨）
・できればやっておきたい（可能であれば）

の整理もしますが、加えて、「必須」の中でもさらに最優先のものから順序立てをします。例えば、「達成できそうかどうかの判断がつかず、かつ通過／不通過によってさらに実施しないといけない項目が出てくるもの」は最優先にあたります。一方で「プロフィールライン確定のために実施する必要はあるが、これまでの検査中の様子からおおよそ通過／不通過の見込みがたつもの」は、これと比べたら少しだけ後回しにできそうな気がします。別にこれが正解とか、明確な基準があるわけではありませんが、少なくともここまでやっておけば報告書作成やフィードバックでも困りはしない、というところまで進めることを考えて、優先順位を決めていったりします。

書き終えてみても、今回の内容に何か意味があるのか、書き手としてはまったく手応えがないのですが、授業での失敗談が何かのとっかかりになったように、これらのエピソードが誰かが何かを考えるきっかけになるのであれば幸いです。

対人支援点描（28）

「補完心理療法としてのヨーガ考」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

はじめに

本務の業務と並行して、外勤先の精神科クリニックの仕事をしている。そのクリニックでの業務で思わされたことは、北海道という土地柄か札幌市にあるクリニックに帯広市や旭川市といった遠方から通院している患者が多いということだった。その患者のなかにもカウンセリングを希望し、ドクターからの要請を受けて担当する方がいる。なかにはトラウマのセラピーということで EMDR（Eye Movement Desensitization and Reprocessing：眼球運動による脱感作と再処理法）を希望される方もいる。しかし、通常の EMDR の手続きをしようにも、月１回のみの通院という事情で行き詰まることが多い。私自身の経験や技量のなさということもあるが、時にはキャンセルされて２か月後に患者の方がやってくることも珍しくはない。これは患者の方が悪いわけではなく、安定してセラピーを続けられない不安定な状態こそがトラウマの影響であると感じている。ただ通院するにも遠方ということもあり、「また来週」と簡単に通えないこともあいまって２か月後になったりするわけである。

そのようななかで考えるようになったのは、通院できなくても自宅でできる補完心理療法の可能性であった。クリニックでセラピーを受ける機会が損なわれても、自宅で補うことができるならば、北海道という地理的条件であったとしても患者の利益につながるのではないかと考えたのだった。

こうして辿り着いたものがヨーガであった。なぜヨーガなのかというと、私には少なくとも３つの理由があった。一つは、認知行動療法の文脈でマインドフルネスという発想と実践が注目されてきたことがある。もう一つはトラウマのセラピーの文脈で後述するトラウマ・センシティブ・ヨーガという実践がなされており、それを紹介した翻訳書も出版されていたことがある。最期の一つは偶然であるが、クリニックのデイケアでヨーガのプログラムがあり、インストラクターもいたので身近なところから始められる条件があった。他にも、患者が取り組みやすく、飽きずに継続しやすいものであることが求められた。

１．ヨーガの学びを始める

こうしてヨーガが補完心理療法として活用できないかという模索を始めたのであるが、私自身はヨーガの専門家ではない。そのため、まず私自身がヨーガに取り組むことから始めようと考えるに至った。だが、日常の

業務の多忙さの事情もあったのだが、何よりも、ここでも新コロナ・ウイルスの影響が祟ったのであった。どこのヨーガ教室も活動休止状態となっていた。結局、学ぶ機会を失われたまま 1 年が過ぎてしまった。しかし、2021 年度に外勤先のヨーガ・インストラクターを招き、ヨーガの効果研究を兼ねて、自らもヨーガに取り組み始めるようになった。この時は、まだ知識の上でもヨーガについて学ぶことなく、当時進めていたトラウマ・センシティブ・ヨーガの翻訳作業と並行して理解を深めようとしていた。良くも悪くも、先入観なくヨーガの実践を始めることができたといえる。

取り組んでみた実感としては、体の動きと呼吸の関係に注目するようになった。実は、私自身、呼吸が上手ではない。やや肥満気味で、イビキをかきやすく、鼻の空気の通りが悪く口呼吸をしていることを自覚していた。この傾向を思い返せば母親譲りの特徴かもしれない。そのような私がヨーガをすることで、体を伸ばし、開けるときに適切に空気を吸い、縮めて脱力するようなときに適切に肺から空気を出すことができていないことに気づかされるようになった。こうして、人間の体にある合理的な動きに合わせて、体の動作と呼吸が伴っていない状態であることに気づかされたのである。また、それと同時にヨーガをすることで体の動きと呼吸を一致させることによる心理的な心地よさを感じたのであった。

２．ヨーガ療法と出会う

だが、私が感じたヨーガをすることで得た感覚は、私の場合の話であって一般的にも言えることなのか。また単なる心地よい感覚はヨーガでなくても得られるものであるので、これがどうして補完心理療法になるといえるのか。補完心理療法になるとしても、どのような仕組みと機序により、セラピーとしての効果に結びつくのか。さまざまな疑問が生じる。そんなこともあり、CiNii などで論文を検索したが、効果研究の論文が見うけられても、ヨーガの何がどのように心理的影響を与えるから効果があるという検討をした論文を見つけることができなかった。これであれば、ヨーガでなくてもジョギングやストレッチ体操の効果研究と大差ないといえる。

やはり、ヨーガそのものの歴史的背景や哲学、発想というところから学ぶことをしないと、ヨーガの実践と心理療法との間の橋渡しが十分にできないのではないかと思わされた。また、CiNii を検索する過程で知ったことだが、日本ヨーガ療法学会という学会があり、活動していることを知ることになった。ところがその学会の学会誌の論文が会員限定であるのか、どのような論文が掲載されているのか知ることができなかった。そのため、同学会に問い合わせをしたのだが、ヨーガ療法士・ヨーガ教師の資格を有するか、同養成講座受講をしなければ学会誌が読めないということであった。そして、Zoom を活用した養成講座のお誘いをいただくことになったのであった。急ではあったが、そのお誘いを受け、ヨーガ（ヨーガ療法）の学びも開始したのだった。

まとめ

今回、文章にした話題は、現在の私のヨーガの取り組みの経過を伝えたに過ぎない。長い前書きのようなものであるといえる。今後は、順次、ヨーガについて知りえたことをできるだけまとめていきながら一連の連載のテーマとして扱っていきたいと考えている。

講演会＆ライブな日々㉜

古川　秀明

『２年ぶりの講演会＆ライブ』

東山区社会福祉協議会
第７２回社会を明るくする運動　東山地区大会

なんと２年ぶりの講演会＆ライブです。

３年前に企画されていたのですが、コロナの為に２年連続お流れになりました。

今回は対面で思う存分歌えます。

あ～、以前は当たり前にできていたことができなくなり、それができるようになるだけでこんなに幸せな気分になるものなのか・・・。

よ～し、全力で講演会をやり、全力で歌おう。

機材を点検するのも２年ぶり。

ギターの電池も替えて、各種シールド、スピーカー、ミキサーのチェック。

う～ん、どれもご機嫌に作動してくれる。

気のせいか、２年前よりも性能が UP したようにも感じられるぞ。
何を歌おうか。

歌いたい歌は腐るほどあって、２年間で腐ってしまって、もうドロドロのチーズみたいになっている。

まぁいいや、とにかく外せない定番の歌を歌おう。

そんな風にわくわくしていると、主催者様からメール。

感染状況が悪化しているので、対面の人数を半数に減らし、オンライン配信とのハイブリッド方式に変更になるとの連絡。

う〜む、仕方ないな。

中止になるよりマシと思おう。

そうこうしているうちに、また主催者様からメール。

感染状況がもっと悪化してきたので、DVD 録画にして参加希望者に配りたいとのこと。

つまり、会場で私が講演して歌うところを DVD に録画して、それを配るということ。

う〜ん、完全無観客試合みたいなもんやな。

ライブは観客がいないと淋しいからなぁ。

録画やと、どうしても会場の空気が伝わらないからなぁ。

けど、まぁ中止よりいいか・・・。

というわけで講演会＆ライブ決行しました。

会場にはカメラスタッフと主催者関係の人を合わせて８人。

よし、この人たちのために演奏しよう。

な〜に、若い頃はライブハウスでお客さん１人とか、お客はライブハウスのマスターだけとか、いっぱい経験しているから、８人もいたら上等だ！

そしてそして、いざ幕が上がると、この８人の人たちが凄く盛り上げてくださった。

しかもみなさん、決して若くはないのですが、熱気だけはティーンエイジャーにも負けないくらいでした。

なんか、こじんまりした町内の演芸会みたいで、おもしろかった。
後日、こんな感想を頂きました。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊私の想像していた通りのライブで、私たちの要望を豊富なご経験と、それを音楽で表現される才能とが相まって毎回、新しい発見をさせていただき、考えさせられるライブであったことを大変嬉しく思いました。

＊1時間と限られた時間でしたが、結婚により家族というものが生まれて子供の誕生、その後の人生の節目による変化を母親、父親のそれぞれの視点で考えさせられる講演とコンサートでした。

＊お疲れ様です。私が保護司になって最初のイベントが古川さんのライブでした。前回とは違う歌とお話で楽しく聴かせて頂きました。
今日のメンバーだけで聴くのは勿体なく、近い時期に是非再演して欲しいと思います。ありがとうございました🌼🌼

＊古川先生の講演期待通りですごくよかったです！
「コロナ禍での家族との向き合い方」がテーマでしたが、普遍的な家族の関係、付き合い方を歌に乗せて問いかけられて、自ら考えさせられました。

＊古川さんのステージが聴衆のリアクションを前提にした構成なので、運営スタッフのみでやりにくかったであろうと申し訳なく感じるところです。
同時にライブ感がどこまで DVD で伝わるのか気がかりなところでもあります。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊



２年ぶりの講演会＆ライブ、幸せでした。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

また講演会＆ライブでお会いしましょう。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

立場が変わると何が見える



～その2　ペット　～



坂口　伊都

はじめに

　このところの空模様は、予測不能。天気予報では雨と出ているのに、ここは晴れてたり、天気予報のアプリを見るたびに天気の表示が変わる。晴れているのに雨が降り出し、狐の嫁入りにしては泣き過ぎだろうというぐらいの大雨。最近の空模様は、女心よりも複雑だ。コロナ感染の拡大も大きなうねりになっていますが、皆さまお元気でしょうか。

　今は回復していますが、私が体調を崩してしまいました。天井や壁が回って見えたり、頭の中が揺れている感じが続き、動いたら少し休んで頭のくらくらを落ち着かせないと動けなくなりました。87歳の母の買い物につきあっている間、私の方がへばって座り込み、生き生きと物色している母の姿を眺めていて、どっちが老婆なのかわかりません。自分の身体が 90 歳ぐらいになってしまいました。

　身体が弱ると思考も高齢化するようで、ボロボロと抜け落ちる記憶、それに自分でも感心する程の失敗の連続です。この前も、シャンプー後にコンディショナーをつけると、何故かまた泡が立ちます。終えられないシャンプー状態に、しばしフリーズ。確か詰め替えを手にシャンプーとコンディショナーを間違わないように確認して入れたはずですが、間違って妻変えてしまったとしか考えられません。心身が急速に老化しているようです。身体を壊すと、このような状態になるのだと知りました。

　身体を壊したのは、児童養護施設業務に体力的についていけなかったことが理由です。50を過ぎてから、早出、日勤、遅出、宿直の変則勤務は私には荷重だったようです。残念ですが、辞職しました。今まで児童養護施設の暮らしを見聞きしていましたが、実際に体験すると、どこにもない独特な世界が広がっていることがわかりました。言葉で表現することは難しいですが、子どもと一緒に生活をする部分とそこにいない時間が職員にはあり、自分がいない時間に起きたことを想像してみても臨場感を持てず、今からまた生活を共にする、コマ切れになった日々を過ごすことの大変さを知りました。生活と業務、関係性、体力、気力といろいろな事柄が複雑に絡み合っている場所で、この業務を続けている職員の方々を尊敬します。

仕事に慣れることで必死になっていた頃、我が家の猫との別れがありました。いつもニャーと鳴く子が鳴かなくなり、息が荒かったので、動物病院に連れていくと胸に水が溜まっていました。その水を抜いて、検査をすると「悪性リンパ腫」でした。寝耳に水で、そんな大病を言われる心の準備などなく、何を言われたのか理解できず、混乱しました。病名に自分の耳を疑い、まだ4歳の猫と結びつきません。猫の命が危ないってということを信じたくありませんが、待ったなしの状況で、決断をしなければならならなくなりました。平和な猫との生活に突如、稲妻が走った家族の話を書いていきたいと思います。どうぞ、最後までおつきあいください。

ペットは家族

我が家には、10歳を超えた老犬2匹と猫から目線の小池さんとの縁で、やってきた保護猫2匹がいます。娘が高校生の時に真剣な顔で、気になる保護猫がいるから引き取りたいと何度も諦めないので、1匹だけならと渋々了承したことが始まりです。トライアルのためにその 1 匹を迎えに行くと、子猫が2匹ゲージに入っています。「きょうだい猫で、保護されたからずっと一緒にいて仲良しなんですよ」と紹介され、これで1匹だけ連れ帰ったら、私達、鬼のようだと、諦めモードで2匹連れ帰りましたが、小さく鳴き声をあげる子猫の愛くるしいこと。すぐに家族全員がワクワク気分に変わっていました。

「名前どうする？」とこの子達との未来に思いを馳せます。娘が引き取りたいと言っていた雄ネコは「サン」、一緒にいた雌ネコを「キノ」と名づけました。

サンは甘えん坊で、警戒心がまるで見えず、誰が来ても近づき、撫でられたら喉を鳴らして、猫初心者を虜にするプロです。一方、キノは用心深くて、何かあるとすぐに隠れてしまい、なかなか見つけられません。たぶん、キノの方が猫っぽいのでしょう。対照的な2匹ですが、キノはサンが人に甘えている姿を見て、気を許すように変わってきました。今では、名前を呼ぶと上機嫌でニャーと鳴きながらトコトコとやってきて、甘え、後をつけてきて撫でてとおねだりするようになっています。猫は、自分が愛されるに相応しい存在だと心得て、全く疑わないのだと感心します。

犬も猫も、それぞれ性格が違って、人間のようで面白いです。一匹ずつ、おはようと撫で、鳴き声の返事をし、食事をあげ、ペットトイレの掃除をしていると、猫や犬の方も「家族の一員」だと認識しているように見えます。メダカも水槽に近づくと、私の方に向きを変えて、ご飯が欲しいアピールをしてきます。言葉を話さない動物も、一緒に暮らしていると訴えたいことが伝わってきます。



娘は、自分を猫たちの母親だと言い、犬とは姉妹の関係だと言っています。だから、猫は私にとっての初孫になるそうです。その娘も大学生となり、大学2年の前期までは、コロナの影響

でオンライン授業で家に受けていましたが、2年生の後半からは下宿生活となり、娘が不在になると猫たちは、じぃじとばぁばを下僕にして暮らすようになりました。サンは夫、キノは私のベッドで過ごすようになりました。

いつもと変わらない日常、サンが今日も夫のベッドの上で寝ています。でも、何か元気がない？呼吸が苦しそう？と思っていたら、夫も同じように感じていたので、娘とも相談して動物病院に連れていきました。「どうしたのかな？すぐに元気になるよね」と思っていたら、入院と言われてしまいました。検査結果は悪性リンパ腫、青天の霹靂。年齢的に考えても犬が先に逝き、猫との生活になるのだろうと疑いもせず過ごしていた絵が、ガタガタと崩れていきます。サンはまだ4歳なのに、命の危機に直面。目の前の大きな岩に太刀打ちできない気分です。

友人に相談すると、「猫の寿命を尊重すべきだと思う」と言われ、祖母には「猫にそんなお金かけられないでしょう」と言われました。娘は「できる限りのことをしたい」と言い、夫は「サンだけそれをするのか？」と尋ねてきました。我が家には犬 2 匹、猫 1 匹がいます。他の子にも、同じ事がこの先できるのかと投げかけます。私は、サンができるだけ苦しまない方法をしてやりたいと感じました。

家族としては、サンにできる限りのことをしてやりたいという気持ちはありますが、簡単なことではないことも想像がつきます。治療をするにしても、しないにしても、辛い気持ちが残ります。もし私が悪性リンパ腫になったら、どうして欲しいと考えるだろう。サンに尋ねても、語ってくれません。何を選択しても家族のエゴになるような気がして、もやもやしたものが取れない感覚を覚えました。

覚悟を決める

まずは、医者の話を聞いてから判断をしようとなりました。

「胸の水はたまり続けるので、水を抜かなければ一月程で死に至るでしょう。その度に水を抜くとなっても、それを繰り返す体力がどれぐらい持つかわからないし、その度に費用は発生します。週 1 回で半年間、抗がん剤治療を投与する治療法が、サンちゃんにも負担が少ない方法だと思います。」

抗がん剤治療は、朝病院に連れていき、夕方に引き取りに行くという形です。費用も、かなりの額でした。抗がん剤が効きやすい部位で、4 歳とまだ若いことを考えると、抗がん剤投与を勧めると説明されました。もちろん、抗がん剤治療をしたら必ず良くなるとは言えないし、余命がどれぐらい延びるかはわからないとも言われました。医者の立場としては、命を救う方法を求め、全責任を背負えるわけではありません。ご家族で相談して決めてくださいと言ってくれますが、抗がん剤治療の選択肢が大きくなっています。抗がん剤治療を勧められながら、それは医師の立場としたら、サンの命を救う道を突っ走る発言になるよなとも感じます。

また、娘と夫と私で話し合いです。
娘「できる限りのことをしてあげたい、バイトも増やす」
私「費用の事よりも、週 1 回半年間、私たちはサンを連れて通うことができるかどうか考えてみる方が先決でしょう」
娘「自分は下宿で、主になって動けないから、お願いすることになると思う。だから、父と母で決めて」

それは違う。何か納得できない。

私「サンの親はあなたなら、私達に判断を委ねるのはおかしいと思う。抗がん剤治療を始めるにしてもいつからならできそうか、あなた自身がとの程度動いていく覚悟があるのか、覚悟があっても半年通うことが可能なのかどうかを自分で考えて判断をして、治療するかしないかを決めて。私たちは、あなたが決めたことを全力で手助けする」

と告げて話し合いは終わりました。

それから娘には、いろいろな人の意見を聞けるようにしました。必ず同じ曜日に抗がん剤を打たないとならないのか、多少の前後は何とかなるのか、質問も一緒に考えました。基本はサンの体調が一番とのことでしたが、接種日が前後するぐらいは何とかなりそうでした。
時は止まってくれませんが、幸い水を抜いてからのサンは、元気に過ごせていました。このまま元気になるのではないかと思うほどでした。
娘と何曜日になら連れていけそうか、何回もシュミレーションして、抗がん剤治療に踏み切ることに決めました。娘は、下宿から家に頻繁に戻ってきて、大変だったと思います。どこまで続けられるか未知数でしたが、やれるところまでやってみようと走り出しました。

お別れ

サンを連れて動物病院へ行きました。1 回目の抗がん剤を打って2～3 日様子見で入院です。1 回目の抗がん剤治療で、サンの数値はよくなりませんでした。食欲もなく、呼吸も苦しそうなので酸素が濃い部屋に入って、入院が延びました。そして、次の 1 週間を待たずに 2 回目の接種をすることになりました。その説明を受けた時、サンに面会することができました。管を舐めないようにするため、首にエリザベスカラーという輪をつけられていました。食欲がないので、身体がやせ細ってガリガリです。



「サンちゃん」と呼びかけるとニャーと応えます。馴染みのある声だとわかっている様子です。サンは、撫でてと身体を私の方に寄せてきますが、ガラス越しで触れません。手を伸ばしてみても、ガラスの感触だけが伝わってきます。

2 回目の抗がん剤は効いたようで、数値が良くなりましたと報告がありましたが、食欲がないのは相変わらずです。やっと退院になりましたが、薬の数が多いのに驚きました。1 種類の薬でも、苦労してあげていたので、弱っている状態でこの量を飲ませられる気がしません。

家に帰ってきて、父のベッドや娘の部屋に行ったり来たりしていました。感染症の心配があるから、隔離をして欲しいと言われていたので、どの場所がいいのかなと様子を見ていると、父の部屋で寝始めました。そこに餌、水、トイレを置くと、いつもと違う設えで、自由に家の中を動けないことが、サンは嫌がっているように見えました。サンの姿は、前回帰ってきた時とは違い、元気がなく、痛々しくて、食べ物をあげようとしても顔を背けて食べようとしてくれません。薬が入っているから食べないのかなと、そのままチュールを口元に持ってきても顔をそむけます。

キノは、サンが帰ってきた時に近づいてきましたが、その後はサンのそばに行こうとしません。以前は、2 匹が一緒にいることも多かったのですが、サンは近づいていく元気もなく、キノは警戒しています。キノには、サンとわからないのでしょうか。その 2 匹の様子を見ていると、寂しい気持ちになりました。

その後サンは、吐いて、失禁して、ますます弱っていきます。その姿を見ているだけでも辛いです。娘にも調子が良くないことを伝え、できるだけ早く家に来るように伝えました。娘は、医師に電話をし、薬を飲ませることと食べさせること、どちらを優先させたらいいかを尋ねていました。治療の方針を決める時は、人任せにしていましたが、目の前で苦しんでいるサンを見て、必死になって動いていました。ここまで積極的に動くことに驚きです。

しかし、その努力も虚しく、娘が帰ってきたことを確かめたかのように、娘と夫に看取られ息をひきとりました。私は仕事で立ち会えませんでしたが、サンは娘のことを待っていたようです。私は、冷たくなったサンにお別れを言いました。娘と夫が、サンをきれいに洗ってくれました。苦しそうな顔をしています。キノにサンを見せると、シャーっと威嚇を始め、逃げていきます。キノが知っているサンは、そこにはいなかったのでしょう。

亡くなったことを動物病院に知らせると、後日、お花が届きました。

「サンちゃんもご家族も最期までがんばって頂きました。心よりご冥福をお祈りいたします」



とメッセージが添えられていました。治療を始めてから、あっという間に逝ってしまった。何とか、サンの命を守りたいという気持ちが伝わってくる担当医でした。

娘は、ポロポロと涙をこぼしています。「できる限りのことはしたよね」と娘を慰めました。私は、娘の涙を見ていました。私も、悲しいし、寂しいし、まだ 4 歳だったのにという気持ちと、これがサンの寿命なのだろうという思いが私の中に同居しています。

サンが亡くなって、数日後夫が、

「いつもサンがベッドで寝ていたから、いなくなって寂しいな。また、保護ネコ引き取ろうか」

と言い出しました。

夫からそんな言葉が出るなんて意表を突かれました。犬を飼いたいと言った時も、保護ネコを引き取ろうと言った時も最期まで渋い顔をしていた人だったからです。早速、娘に報告をしました。それで娘が喜ぶかなと思って伝えたのですが、猛反対されました。怒りすら感じました。サンが亡くなったことの整理をする時間が必要で、下宿で離れて暮らしているから余計に寂しくなるのでしょう。

キノは、サンがいなくなったことをどう感じているのでしょうか。いつものように名前を呼べば、ニャーと鳴きながらトコトコやってきて甘えてきます。甘えることが、増えたような気もしますが、サンちゃんを探している様子は感じません。それが何となく寂しく感じます。



周辺からの記憶 36

東日本・家族応援プロジェクト 2020 in 多賀城

村本邦子（立命館大学）

東日本家族応援プロジェクトも 11 年で一区切りとなり、2022 年からは、福島に焦点をあてたプログラム「東日本・家族応援プロジェクト＋」を継続することになった。8 月 29 日から 9 月 4 日まで、白河市立図書館「りぷらん」で漫画展、9 月 4 日に漫画トークと遊びのひろばを開催する。

他方、多賀城では、地元に自主的な実行委員会が発足し、プロジェクトを継続してくれることになった。そこで、福島に入る前に、私たちは、主催ではなく協力団体として、多賀城のプロジェクトに顔を出す。地元主導のプロジェクトとして受け継いでもらえたことは、本当にありがたい。



現実には、いろいろと思わぬハプニングもあり、開催までにずいぶんご苦労をかけたようだが、今回は、多賀城で最初の年にプロジェクトをやった多賀城市立文化センターが会場となる。

この原稿を書いている時点で、着々と準備が整い、漫画展がスタートしたところだ。この原稿が発行される頃には、無事、終了しているはずだ。

2 年前、継続のためにみんなで語り合ったことを今回振り返りながら、それが着実に実現している喜びをかみしめている。震災をきっかけとした幸せなご縁に感謝である。

準備

10 年目となる「東日本・家族応援プロジェクト in 多賀城・石巻」も、コロナウイルスの影響を受け、リモートで開催、最終年は来年度に持ち越すことになった。むつプロジェクトのリモート開催が予想以上にうまくいったので、今回も同様のやり方で、院生とともに企画準備委員会を立ち上げて準備した。

先立って、9 月 21 日（月）13 時～14 時半、「むつプロジェクト報告と石巻・多賀城プロジェクト紹介」を ZOOM で開催した。これは例年の研究会にあたる。8 月に実施したむつプロジェクトの報告と、多賀城・石巻プロジェクト 9 年の紹介を行い、メンバーでの共有を行った。

10 月 3 日(土)午前　DMAT 隊員が再び臨地に立ち知り得たこと

10 月 3 日（土）10 時-12 時は、「災害直後の応急体制に携わった経験から今思うこと　~DMAT 隊員と被災者・行政が見た多賀城」として、 増尾佳苗さん（大津赤十字病院 DMAT 隊員・災害看護）が「災害救護者が再び臨地に立ち知り得たこと」、丸山隆さん（多賀城市建設部都市計画課次長・課長）が「被災者の目・行政の目で見た東日本大震災の記憶」を語ってくれた。私たちのプロジェクトが初めて被災地に入ったのは発災から半年後であり、多賀城に入ったのは 1 年半後だった。被災直後の多賀城はどんな様子だったのか、あらためて理解したいと思った。

DMAT とは、災害派遣医療チーム（Disaster Medical Assistance Team）のことである。1995 年 1 月 17 日に起きた阪神・淡路大震災で、初期医療体制に遅れがあり、もしも平時の救急医療レベルの医療が提供されていれば、救命できた命が 500 名はあったとされた。これを教訓に、行政機関、消防、警察、自衛隊と連携しながら、救助活動と並行し、医師が災害現場で医療を行う必要性があると認識されるようになった。

最初は東京 DMAT として始まり、2005 年、厚生労働省により日本 DMAT が発足した。医師、看護師、事務職員、パラメディカルから構成され、災害拠点病院から選出されて訓練を受け、試験に受かれば隊員となる。隊員となった後も、5 年ごとに研修と試験を受け、現在、9 千人の隊員がいるという。大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期（おおむね 48 時間以内）に出動する。

増尾さんのチームは、医師 2 名、看護師 3 名、事務職 3 名の計 8 名で編成され、病院の救急車両 2 台で、3 月 13 日 15 時 50 分に出発した。出動先は決まっておらず、ただ「北へ向かえ」と言われていた。増尾さんは原発災害の訓練も受けていたので、とりあえず線量計を積み、福島原発の状況を把握しながら、風上にあたる日本海側のルートを選択し、移動中は車両の外気を遮断して走行し、一晩かけて移動した。

3 月 14 日の 13 時半、大船渡津波、福島第 3 原発爆発の連絡を受け、多賀城の霞目駐屯地に到着した。夜中で真っ暗だったの

で、何も見えない。ただ海のにおいがしていた。



15 日から活動開始。先に着いていた高松赤十字病院看護班に合流し、石巻市民病院のヘリコプターで運ばれてくる被災者の治療と受け入れ病院の選定、病院までの搬送支援を行った。百名ほどの患者受入れを東北大学病院がほとんど一手に引き受けていた。その次の受け入れ先は石巻市民病院だったが、よくもそんなに多くの患者の受入れができるなと驚いた。その夜、研修で知り合った成田赤十字病院の DMAT 隊員から「こんな状態だよ」とメールが来て、石巻日赤の外来ロビーの写真が貼られていた。こんな状態でよく受入れができるなとさらに驚いたが、とにかく屋根のあるところへと患者を送り続けた。

2 日目、パタリと被災者が運ばれてこなくなった。わずか 4 人。救護スタッフが 50 人近くいるのに、このままここにいていいのかと疑問に思った。前日対応した人たちの話では、海岸沿いの町は壊滅的な被害を受け、沢山の人が津波に流されてしまったということだった。「急に誰も運ばれてこないのはおかしい。地域に巡回診療した方がいい。待っていられない」と思った。災害対策本部に報告し、巡回診療の許可を得た。二次災害に巻き込まれる可能性もあるため、隊員 3 人で行くことにした。外は驚くような惨状だった。車を前進させるのも困難な状況だった。上からぶら下がっていた車がドンと落ちるようなこともあった。人っ子一人いない。耳を澄ましても、風の音以外、何も聞こえない状況が続いた。初めて人を見たのは、マックスバリューの前に整然と列を作って並んでいる人々だった。避難所を探そうと、カーナビを頼りに小学校を目指した。

道中、報道されていた多賀城体育館の前を通ると、国境なき医師団や他の救護班の車両があり、報道されているところは大丈夫だと判断し、救援車両が停車していない小さな小学校（蒲町小学校）を見つけた。地域の方々で運営がなされ、壁にはすでに組織図が貼られていたのには驚いた。地域の人々は助け合っていた。二時間ほど診療活動をし、霞目駐屯地の近くの小学校に行った。

体育館には 300 人前後の避難者がいて、体育館内は暗く、湿った床に濡れた毛布が置いてあり、布でくるまれた赤ちゃんが寝ていた。少数で沢山の方々を診ることは難しいと判断し、トリアージュを行った。この地域の訪問看護をしているという若い女性が声をかけ、手伝ってくれて助かった。活動を終え、こんな状況を駐屯地の人たちはまったく知らないので、写真を持ち帰って報告した。

その日は、夜間対応はないと自衛隊から

巡回診療内容	霞目駐屯地¹¤Ａ小学校､Ｂ小学校体育館避難所	多賀城市内Ｃ小学校体育館避難所
避難者数	Ａ60名　Ｂ300名 教室にも多数、プライバシーの確保できず	400名程度 プライバシーの確保できず
ライフライン	すべて寸断	電気不通、水道１回日給水車巡回
食糧･物資	毛布、衛生用品の不足、 水500ml１本、クッキー （３日間の食糧） 十分な食糧、物資配給はなし	3/15：おにぎり１個、パン１個、ヨーグルト個 3/16：栄養補助食品１個、飲物１本、コッペパン1/5個 配給時期にムラがあり困っている。
暖房設備	なし　湿った床に直接毛布がひかれていた状態 非常に寒い	石油ストーブ6つ、灯油に限りあり。非常に寒い。床にダンボールがひかれており、その上に毛布がひかれていた。
医療班診療	地震発生後４日目で初めての診療、避難所から宮城県に何度も要請しているが来ない。	町内の開業医が１回診察、継続的な診察はなし。そのため被災者の不安感が強い。
診療患者数	９名	５２名

連絡があり、待機している医療テントの隣にある暖房付きの自衛隊のテントで数時間仮眠させてもらえることになった。被災者搬送用の担架の上ではあるが、久しぶりに足を延ばして眠れると安堵したのも束の間、震度 5 強の余震があった。地域の二次災害のことも気になり、あまり眠れず夜明けに医療テントに戻ると、医療テントが雪と地震で倒壊していた。テントの中の医療用機材も倒れており、いつものようにここに寝ていたら危なかったと震え上がった。

活動３日目、巡回診療を行ってから帰還したいと､災害対策本部の許可を得た。カーナビとラジオを頼りに、救援の来ていない地域の学校や体育館を探し、多賀城小学校にたどり着いた。400 人以上避難者がいて、救援物資が発災後１回しか届いておらず,各家族にマリービスケットの袋が一つずつだけだった。慢性疾患の人たちの薬もなく、濡れたままの衣服で赤ちゃんを抱いているお母さんたちがいた。「本当に、何ということだろう」と思った。被災した開業医が聴診器だけを持って回っていた。後に、多賀城で丸山さんが「とにかくできることをする」という言葉を聞いたが、まったくそのとおりに現地の方々がそれぞれにできることをしていた。

石巻市民病院に寄ってから帰りたかったが､道路が寸断されていたため､諦め帰還した。大学院で斎藤清二先生から､「思い出せるなら、被災者の語りを書き出してみたらいい」と教わり、書き出したものを紹介する。

・A さん「春休みで帰ってきていた大学生の息子が 1 階にいた。何度も携帯にかけているが、消息がわからない。自分は必死に屋根にしがみついていたが、シューっという音とともに潮が引いてね、すごい勢いでおじいちゃんや赤ちゃんや子どもが流されていくのを見てしまった。どうすることもできなくて、ただ叫んでいた。なんで自分が助かったのだろう、死ねばよかった。」

この方は乳がんの末期で、最期を一緒に過ごそうと、東京にいた大学生の息子が家に帰ってきたところだった。

・B さん「地域の訪問看護をしていますが、自宅も、いつも訪問している家も流されてしまって･･･。自分は無事ですが、みなさんの消息がわからないんです。私は避難している場合ではないと思いますが、どうしようもなくて･･･。せめて何か手伝わせてください。」

自分の担当していた患者がここにいるというので、その方に会いたくてやってきたのだと言う。B さんには小さな赤ちゃんがいることを後で知った。

・C さん「入院してたら病院ごと波かぶって･･･。砂だらけで濡れてて寒い。とにかく寒い。3 日間でおにぎり 1 個、水はおちょこ 1 杯。助かった方がつらい。」

・D ちゃん「家の前で遊んでいたら津波がくるって誰かが叫んでいた。お母さんと友達と一緒に走った、走った･･･。でもね、全速力で走っても、膝のところまで波がくる。怖かったけど、とにかく全速力で走った。津波に勝ったよ。」

お父さんは行方不明で、お母さんが泣いておられた。「膝より上に来たら津波に襲われるから、膝より下で逃げ切りなさい」と常日頃から言われていたそうだ。

・E さん(自治会長)「4 日経つけど物資も救護もこない、自分たちだけで残った家から持ち寄って炊き出ししている。前に訓練しといてよかった。自分がしっかりしないと、この地区はもたねえ。来てくれてありがとう。次はいつ来てくれる？」

この方は、組織図をつくった人だったが、「次はいつ来てくれる？」という言葉にやられてしまった。一緒に行った A 隊員はこの言葉が頭の中でこだまして抜けないという。「とにかく今を何とかしなければ」という状況で動いており、組織化されていないなかだったので、次にどこかが来るという保証もなく、「この状況を災害対策本部に伝えます。必ず次の隊員に来て欲しいと伝えます」としか言えなかった。

帰還すると、こちらはいつもと変わらない日常で、普通に仕事をしていたが、活動中出会った人々のことが気になって仕方なく、夜は、被災地で活動している夢ばかり見た。夜寝ると、まだ多賀城にいて、朝目が覚めると、「ああ、戻っていた」と思う。自分自身もバランスを崩して、仕事に集中しないとやってられないという感じだったが、共に活動した A 隊員の様子がおかしい。「仕事をやめて多賀城に戻りたい」とひたすら訴える。戻って活動を続けることは悪いことではないと思うが、彼は、眠っておらず、尋常でない顔をしていた。何度も話し、「少し体験をまとめてごらん」

と課題を出した。自分もしんどかったが、彼ほどストレートな反応はなく、「どうしてなんだろう」ともやもやしていた。そんな時、書店で『臨地の対人援助学』と出会い、大学院に行ってみることにした。そして、このプロジェクトに参加した。

もちろん多賀城を希望し、その歴史・文化を学んだ。あらためて被害状況を実感し、他の被災地と比べて考えてみた。多賀城では行政が体育館を回っていて、行政の批判をする人が一人もいなかったことが印象に残っている。フィールドワークでは、NPO「タガの柵」によるガイドツアーに参加し、街を歩きながら、被災前後の写真を見ながら話を聞き、各所に残る津波の爪痕や末の松山などの史跡を見て回った。津波被害の地は新たな新興住宅へと変化していた。また、被災者が一息つける場にとカフェを開店したコトリコーヒーにも行った。皆、口を揃えて「今ここでできることをやる」と言っていた。

プログラムを通じて丸山さんと出会い、「今できることをやる」に加え、「公僕は寝食を忘れて市民に尽くすはダメです」という言葉を聞いた。自分たちはそれだったが、本当にそれではいかなかったと思った。依頼、DMAT の研修では、必ずそれを伝えている。

再び臨地に立ち、当時不思議に思った謎が解けていった。なぜマックスバリューに人が並んでいたのかは、コトリコーヒーのオーナーが教えてくれた。仮再開で、「お米を売ります」とアナウンスがあったのだそうだ。「被災者が弱者ではない」という言葉には衝撃を受けた。最初は受け留めきれなかった。

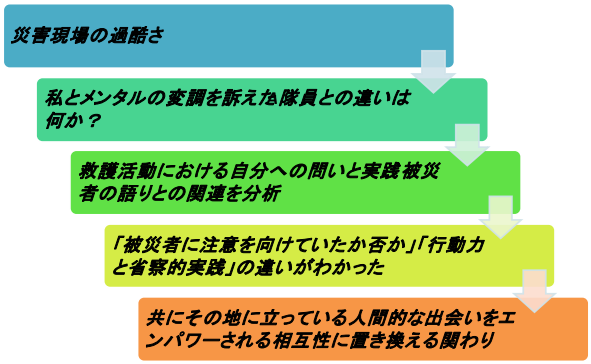
8 年間のつながりから地域に根差してきたプロジェクトに院生が参加することで、対人援助職としての価値・姿勢を一から問い直す機会を得た。その地に立ち、生き抜くための知恵・気概からパワーをもらった。当時自分たちが見ていたものに対し、新たな気づきを得ることで、新たな物語の再生となった。現場で見つめて、感じて、考えたことを今までの経験と融合させて語り直すことが証人となることの意味だと思う。気づけていない大切なことがまだたくさんあると確信し、修論に取り組んだ。



当時の状況を振り替えるために、増尾さん自身もゼミの仲間にインタビューしてもらい、また、あらためて A 隊員にインタビューして、一緒に振り返ることもした。そこで明らかになったことは、凄惨な被災の状況で、自分のことに眼が向いたままだと、パニックになったままだが、そこで被災者に注意を向けることができれば、その人の力が感じられ、それにこちらが支えられる形

で、必要なことが見えてくる。人間的な出会いを相互にエンパワーされる関係にすることがポイントだった。あらためて、この言葉が『臨地の対人援助学』にあったことを認識した。被災者は弱者ではないのである。

プロジェクトの学びを論文へ



増尾さんの話を聞きながら、あらためて災害直後の様子に震える思いがした。そんななかを生き延びてきた多賀城の人々に敬意を禁じ得ない。また、そんななかにリスク覚悟で救援活動に駆け付け、混沌としたなかで、ありとあらゆる工夫を重ねながら被災者との出会いを成し遂げてきた救援者たちにも深く頭が下がる。中長期支援からは見えない光景だった。

被災者の目・行政の目で見た東日本大震災の記憶

次の話題提供は、丸山隆さん（多賀城市建設部都市計画課次長・課長）による「被災者の目・行政の目で見た東日本大震災の記憶」である。今後の災害においてとても参考になる内容なので、詳しく紹介したいと思う。

丸山さんは、多賀城市立図書館の館長をしていた時、このプロジェクトに出会い、たった１回だけのプロジェクトではなく、十年の継続的な絆プロジェクトであることに感動し、受け入れを即決したという。以来、十年に渡る交流を続けてきた。

被災者目線での震災記憶

あの日は中学生の長女の卒業式だったので、１日休暇を取っていた。午前中に式が終わり、午後から高齢の母親を連れて、ホームセンターで買い物をしていた。午後２時 46 分、その瞬間が突然やってきた。過去にも宮城県沖地震や宮城北部地震など大きな地震を経験していたので、多少の揺れでは驚かない免疫がついていたが、あの日の揺れは、かつて経験した地震の揺れとは比べ物にならないほどの大きなものだった。揺れ始めて、数十秒で店内の照明が全て落ち、一斉に店内のお客や従業員が外に出ると、さらに強い揺れが襲い、１分経っても揺れは収まらず、２分経っても揺れ続け、「いったいいつ収まるんだ！」と心の中で叫んでいた。

阪神淡路大震災はマグニチュード７で 15 秒間の揺れ、東日本大震災はマグニチュード９で３分間に渡る揺れだった。

やっと揺れが収まったと安堵したのも束の間、瞬時に津波が来ると思った。しかし、その時のイメージは、１ｍか２ｍ程度で川の水位が少し高くなるくらいかなというものだった。これまで何十回となく津波警報が出たが、いつも数十センチ程度だった。

揺れが収まり、父親が１人、川沿いの自宅に残っていたので、余震が何度も続く

中、母親と一緒に実家へと車を走らせた。その間、ラジオでは「岩手県大船渡市に大津波が押し寄せ、壊滅的な状況です」と聞き、不安がよぎった。「もう仙台新港に津波が到達していい時間ですが」という言葉を聞き、緊張しながら海に近い実家へ逆走した。

実家に着くと、父親は裏の高台に地域の人たちと避難したと玄関にメモ書きがあり、すぐに母親と一緒に高台へと登った。あの日、朝は晴れていたが、曇って雨が降り、やがて雨は雪へと変わった。30 分ほどすると満水の川の水が海へと引き始め、川底まで見えた。その後、第１波、第２波と津波が遡上し始めた。

あっという間に堤防からあふれ始め、接岸していたたくさんのボートが上流へと流れていき、橋の欄干にぶつかり、バリバリと音を鳴らしながら壊れていった。また、対岸の石油コンビナート基地から、タンクローリーが堤防を越えて、実家の目の前に流れ着いた。さらに、いつも通っていた生活道路から、家が流れてきた。自分の車も、津波でどこかに流れていき、高台の周辺は水深２ｍほどの津波で、陸の孤島になった。津波が引く夕方までの４時間ほど、吹雪の中に立ったままだった。

夕方、がれきの間を通り抜け、近くの５階建てのホテルに避難したが、地域は停電で真っ暗闇。しかも数分ごとに起きる余震で、眠れない不安な夜を迎えた。21 時頃、暗闇の世界だった窓の外が、急に明るくなった。窓を開けると、川向いの石油コンビナート基地の石油タンクが爆発し炎上していた。隣接してガスタンクもあったので危機感を感じたが、自衛隊が救援に駆け付け、隊舎に二次避難させてもらった。人は人生の中で経験したことのない光景を眼にしたとき、悲しみとか怒りという感情を越え、その光景を受け入れることができなくなるものだ。

3.11 は東北の者にとって絶対に忘れられない日となった。大地震、大津波、原発事故。映像として、活字として、あふれるほどの記録が残され、全世界に報道された。２日間、自衛隊に世話になり、３日目の朝、歩いて塩釜の自宅に戻った。ここまでが、被災者目線の震災記憶である。

避難所での対応、行政目線、教訓

３日目の夜から、300 名近い人が避難した中学校体育館の避難所で、班長として約１か月、被災者の対応をした。震災の日の午前、体育館では卒業式があったので、壁には紅白幕が掲げられたままで、椅子が隅に置かれていた。

２日間着任していた職員に状況を聞いたところ、ほとんど寝ていない、食べていない状況であることがわかった。「このままでは職員全員が同時に倒れてしまう。何とかしなければ」と思った。さらには、最初 200 名程度の避難者数だったものが、追加で 100 名受け入れることになった。

１週間過ぎると物資は徐々に増えていったが、最初の１週間は、なかなか物資が届かず、１日におにぎり２個だけとか、パン１個程度しか配布できなかった。災害対策本部から細かな指示は一切なく、あるのは、医療派遣、食料到着時間、会議の連絡のみ。いつ寝て、いつ食べて、いつ休むの

か、避難所運営の方法については全て現場で自分が判断するしかなかった。

避難所で最初にしたことは、職員に食べさせることと寝かせることだった。2日遅れで着任したことから気づいたことだった。市職員と全国自治体からの派遣職員は、過酷な労働環境にいた。先が見えない、終りのない24時間対応で、数百人の世話と避難所運営のために、毎日3～4時間しか寝ていなかった。また、食料物資は被災者のために届けられたものだからと、最初の頃は罪悪感からか、職員は積極的に食べようとしなかった。さらに、避難所では被災者が寝れずに起きているので、職員はその世話のために寝てはいけないという意識が強く、皆で動き、皆で疲れていた。皆で同時期に倒れてもおかしくない状況だった。

まず、「我々は被災者のために動いている。食べて、寝なければ、倒れてしまう。被災者のために働ける体力を保たなければならない。いっぱい食べてしっかり寝る。それは悪いことではない」と意識改革を行った。食料は被災者から離れた調理室に搬入し、職員には腹いっぱい食べさせた。休憩や就寝の時は、被災者と同じ講堂内の本部席脇だったが、それでは落ち着かないし、職員が休んでいる姿はあまり見せられないと思い、体育館ステージ裏に専用の寝床を確保し、交代で5時間は休ませた。

当初、体育館内は被災者で溢れ、通路がなく、人と人との間を行き来する乱雑な状態だったが、途中で被災者を100名追加で受入れることになり、一晩考えて交通整理を行うことにした。

① 全員に「すみません。今から新たな被災者の方を受け入れします。このままでは入らないので、一度立って頂き、協力をお願いします」と説明し、体育館内を整理した。椅子で外周通路、テープで中通路、横通路等を作り、夜間でも自由に安全に行き来できるように通路を作った。
② 学校長と交渉し、ペット同伴の被災者専用の教室を確保した。
③ 学校長と交渉し、インフルエンザに感染した家族を隔離する教室を確保した。
④体育館の床は冷えすぎるので、 高齢者を武道場の畳の部屋に移動させた。
⑤自宅に避難している在宅避難者と避難所のトイレ用の水を確保するため、プールの出入りを開放した。
⑥ 余震が続き、照明の真下が危険なので、人が入らないよう危険サークルを設けた。

困ったこと

・高齢者のトイレ問題。学校のトイレ、仮設トイレはほとんどが和式トイレで、足腰が悪い高齢者は、座るのが大変だった。和式を洋式のように使える機材の調達が難しかった。
・日赤毛布1枚ではだめ。5枚程度必要だった。寒さで体育館の床は、物凄く冷える。毛布の銀紙袋を足に巻いてもらった。自衛隊からの毛布が人数以上届き、複数枚配布でき助かった。
・電気、ガス、水道、店舗、ガソリンすべての機能が停止。支援物資の届かない在宅避難者も大変だった。食料を譲ってほしいと来られたが、人数分ぎりぎりしか避難所に届かなくて、渡すことが出来なかった。

後半は余っている時には、そっと差し上げた。
・消費期限ぎりぎりの食糧が届く。パン、おにぎり、飲み物。温かな物が提供できない。地元区長が自分の畑の野菜等を持ってきて、集会所のガスボンベや鍋を搬入し、炊き出しを毎日してくれ、大変助かった。

被災者への対応の工夫

避難所開設時は、物資搬入、トイレ掃除、食料配布は、すべて職員と区長の有志で行った。大変な思いをした被災者という観点から何もさせなかった。しかし、被災者の一日は、寝て、食べて、掃除に行き、休み、寝るの繰り返しで、避難所内のことは何もせず、職員の負担はかなりのものだった。そこで、被災者の意識改革をしようと、連帯感を作る行動を起こした。

・ 通路を作り、３班に区切れたので、動ける人には作業を手伝ってもらった。
・食料や物資の搬入、受け渡し、トイレの清掃を当番制にした。
・何もさせないのではなく、協力をもらう。自分は被災者だからではなく、そのような中でも人のために動く、尽くす喜びを持ってもらうという啓発を行った。
・ 真冬で夜寒くて眠れず、毎晩ストーブの周りに十人位ずつ椅子席で暖をとる人たちがいた。深夜の０時とか１時、２時に巡回しながら、ストーブ懇談会で毎晩、被災者と語り合った。職員の立場、同じ被災者の一人として避難者の半分以上の人と話ができ、沢山の辛い思いを聞き、共感することができた。
・ 各地から支援物資が届いた夜の夕食前に、ステージからマイクで紹介するようにした。「今日、配布したバナナは、避難している方の息子さんが東京の築地から避難者の皆さんの分もと届けてくれたものです」「今日は、遠く青森からマイクロバスに乗って、野球少年たちが衣類をたくさん届けてくれました」など、全国からの応援が伝わるようにした。シーンとしていた会場に、感謝の拍手が響いた。

また、いろいろな人がいるので、困ることもあった。
・ 避難生活に慣れてくると、自宅から電気ポットや電気製品を持ってきて、体育館内のドラムに繋ぐので、体育館のブレーカーが何度も落ちた。「次、ブレーカーが落ちたら電源を入れませんよ」と呼びかけても、十分後にまた落ちた。仕方がないので、すべての持ち込み電気製品を撤去するまで、電源を入れなかった。以来、ブレーカーは落ちなくなった。
・避難者同士で喧嘩が始まった。すぐ仲裁に入り、「そんなに嫌ならどちらか避難所から出てください。それが嫌なら端と端の一番遠いところに移動してください！」と厳しく諭した。最終的に、両者素直に応じてくれた。
・ ある時期から、５名くらい近隣の中高生が１週間位、配膳の手伝いに自主的に来てくれた。お礼に余ったおにぎりやパンをあげていたら、「なんであげるんだ！被災者に届いたものだろう！」と怒鳴った人がいた。悲しくなったが、「あなたたちのために、真心で手伝ってくれているんだから」と伝え、渡すことをやめなかった。

このように、時には厳しく出来たのも、同じ被災者として語り合い、職員として理解してくれたからだと思う。

避難所の振り返り

・東日本大震災は冬場の災害。同じやり方は、夏の災害には使えない。
・全国から届いた食料は、寒かったので車庫や外のテントに大量に保管できた。気温が高いと、すぐに腐敗し、保存できない。おにぎり等は、消費期限が当日限りのものが多かった。
・地震だけなら局地的だが、津波被害は何十万人という広域被害になり、対応が変わる。ピンポイントの対応ができない。
・避難者には避難所避難と在宅避難があり、物資の確保は在宅避難者のほうが厳しい。
・被災して一番大変なのは水の確保とトイレの対応。
・電気、ガス、水道遮断によるガソリン・灯油の燃料確保。
・避難所の灯油は、近隣に自衛隊があって協力を得られたので、助かった。そうでなければ、燃料確保はかなり厳しい状況となった。
・自分たちは被災者の世話で精いっぱいで、子どもたちの存在への気づきが足りなかった。そんな時、図書館に勤務する職員が、段ボール箱に 30 冊ほどの絵本等を持ってきてくれ、対策本部のテーブル脇に置いてくれた。子どもたちが本を手にし、笑顔になった表情が忘れられない。本の力を感じ、子どもの目線に欠けた避難所運営をしていたことを深く反省した。以後、本部のテーブルに子どもたちが喜ぶ菓子を置いたり、本部テントに届く物資から、子どもたちが喜ぶ菓子を確保し配布した。

震災を経験し今、思うこと

震災翌月の 4 月 7 日、長野県から 1 週間応援に来てくれた県職員に御礼のメールを送った。その時の気持ちが、被災者として、職員として、自分の思いを素直に表していると、丸山さんは最後に紹介してくれた。

たった数分間の揺れが、何十年もかけて築き上げてきた電気、ガス、水道、交通網といったライフラインをズタズタにしました。

「破壊は一瞬！建設は死闘！」と言いますが、災害は容赦なく人の命を奪い、人の心を傷つけ、人の心をズタズタにします！

しかし、災害を受けた方々は、たくさんの方々からの支援と励ましを受けて、前に向かって頑張ろう！と心の復興から、まず立ち上がります！

私は今回、被災者として、又、被災者のお世話係として、両翼の立場を経験しました。震災の体験者となり、震災の生き証人となりました。

人生の中で、災害に会わないことに、こしたことはありませんが、1 ヶ月が過ぎようとしている今、振り返って思うことは、何百人という方々との出会い、語り合い、励まし、感謝の連続だったということです！

たくさんの方々との出会いの中から、「ありがとう！」「感謝！」を学ばせて頂きました！

おかしなことを書きますが、私は全く疲れておりません！確かに肉体的な疲労の蓄積は多少ありますが、心はとても充実し、元

気です！

なぜなら、「悲惨」という言葉を上回る「感謝の出会い」があったからです！

九州から２日間かけて炊き出しに来て頂いたり、北海道苫小牧市からフェリーに乗り、車で炊き出しに駆けつけて下さいました！

又、遠く尾瀬の地から早朝出発し、ガソリン事情が悪い中で、ポリタンク３缶にガソリンを入れて、衣類や食料を積み込み運んでくれた老夫婦の方がおりました。

さらに、青森から少年野球チームのメンバーがマイクロバスで衣類を持ってきてくれました。更に、東京からも衣類関係の同業者に声掛けをし、高級な衣類をたくさん持ってきてくれた若手メンバーがおりました。

両手を握って感謝し、車が見えなくなるまで両手を振って見送りました。そして、できる限り個人的に感謝のメール、感謝の電話をさせて頂きました！

何かをしなければと思うことはできても、直ぐに行動に転じて遠くから来ていただくことは、本当に尊いことです！だから来て頂いた皆さんに、本当に宮城を支援してよかったと、強く心に刻んで欲しかったし、それは次への力になると思ったからです！

又、被災者のご親戚の方が我々の支援に感謝され、秋田県からは漬物が、山形県からは避難所で不足していた大根などの野菜が、東京からは避難所で生活する祖母を訪ね、避難所の皆さんにたくさんのバナナが届けられました。

そして先週からは、愛知県、岐阜県、秋田県職員の皆さんが先陣を切って復興支援に来て頂き、新たな出会いを積み重ねることになりました。

限られた時間の中での、一瞬の出会いかもしれませんが、私の今後の人生の中では、皆さんとの出会い、笑顔、言葉は生涯忘れることはありません！

今日は移動日となり、帰路に着かれることになりますが、次に来られる機会があれば、どうか東北の良いところも堪能して頂ければと思っております！

昨夜、炊き出しの方々と素晴らしい語らいの場が持てて、本当によかったですね。炊き出しの皆さんのご苦労が、本当に報われた最高の励ましだったと思います！ありがとうございます！

間もなく体育館に行きますが、今日は避難所統合に向けた班長会があり、ゆっくり時間がとれるかわかりませんので、メールで気持ちを送らせて頂きました！

最後に、本当にありがとうございました！復興までにはかなりの時間を要すると思いますが、必ず元気な東北、強い多賀城を築き上げ、支援して頂いた皆さんに感謝の恩返しをして参ります。丸山

これが十年経った今も、変わらない自分の思いである。被災者は弱者ではなく、震災を乗り越えたのだから本当は強いんだと、東北人の一人としてあの経験を活かしながら、これからも頑張っていきたい。

十年経過して懸念すること

・津波や地震の痕跡がなく、実感できない。

・宮城の小学生は、大震災を知らない世代。東日本大震災は、関東大震災と同じ歴史の教科書の史実となっている。

・市職員の半数以上が、災害対応未経験世代になりつつある。
・備蓄等の意識、防災マップ等は作成されたが、使いこなせるか不安。

丸山さんの話から、被災者であるというご自身の経験に軸足を置きつつ、システム全体を視野に入れ、暖かくかつ公正な心で避難所運営のリーダーシップを取り、どんなにか大変だったであろうに、増尾さんが「他の市町村と比べ、多賀城では行政批判がなかった」と驚いた理由は、行政が大きな被災を免れ機能できたからということ以上に大きな意味があったのではないかと思う。丸山さんの「生き証人」としての証言には、今後も語り継いでいくべき重要な教訓が満ち溢れている。私たちのプロジェクトに対しても、いつも暖かく対応してくださっていることの根底にある丸山さんの人としての姿勢をあらためて感じ入ったお話だった。

10 月 3 日(土)午後　ミニシンポジウム「復興を支える民話の力」

13 時-15 時は、 民話とともに東日本大震災を乗り越えた人々の声と思いをつなぎ合わせ、全国に発信してこられたみやぎ民話の会の方々と共に、復興を支える民話の力について考えようと、ミニシンポジウム「復興を支える民話の力」を開催した。まず、鵜野祐介さん（立命館大学）が「不条理に向き合う民話の伝承と再創造」について話した後、島津信子さん（みやぎ民話の会代表）が「復興と民話：みやぎ民話の会の活動を通して考える」、加藤恵子さん（みやぎ民話の会会員）による宮城の民話語りの後、休憩をはさんで村本が「対人援助学からみた復興と民話」について話した。

不条理に向き合う民話の伝承と再創造

鵜野さんは、まず、物語とは何か、5 人の視点ということで、片岡輝（語り手たちの会代表)、庄司アイ（やまもと民話の会代表)、小野和子（みやぎ民話の会顧問)、ディビッド・ヒューム（18 世紀に活躍したスコットランドの哲学者)、ハンス・ブルーメンベルク（20 世紀半ばに活躍したのドイツの哲学者）の物語についての言葉を紹介した。

片岡は、「語りによって、物語に描かれた多様な人生を追体験し、生きる知恵、人生の喜怒哀楽、挫折と成功、慰めと励ましなど、生を豊かにするものを分かち合い、学び合うと同時に、人と人との間に橋をかける役割がある」と言い、庄司は「民話のひとつひとつに根拠がある」、小野は「血の吹き上がる現実に支えられて、そこに物語は呼吸して生き続けてきたのだという実感が、私にはある」と言った。

ヒュームは、「すべてのことは謎であり、不可解であり、解き難い神秘である。」（不条理に遭遇したとき、その恐怖から逃れるために、また一縷の希望を与えてくれることを願って、人間は神を誕生させ、神に祈ったと理解できるのではないか)、ブルーメンベルクは「物語が語られるのは、何かを追い払うためである。放射線、原子、ウィルス、遺伝子のような不可視なものをどれほど知っていようとも、恐怖はなくならない。その漠然たるものに名

前をつけることが世界と交わる最初の効果的な方法である。命名し名前を使えば、そこで初めて漠然たるものについて物語を語り得るようになる」と言った。つまり、不条理に向き合い、これに抗する術（アート）として神を創造したところから、物語の創造と伝承が生まれた。これが語りの発生であると言えるのではないか。

東日本大震災後に、日本民話の会（2017）『東日本大震災―記憶と伝承』、第七回みやぎ民話の学校実行委員会（2011）『3.11 大地震大津波を語り継ぐためにー声なきものの声を聴き形なきものの形を刻む』、KHB 東日本放送(2012)『3.11 を語り継ぐー民話の語り手たちの大震災』（DVD)、やまもと民話の会（2013）『巨大津波―語り継ぐ-小さな町を呑みこんだ』、多賀城民話の会（2012）『忘れまい大震災』、石井正巳・やまもと民話の会（2019）『復興と民話の力―ことばでつなぐ心』など多くの記録集が生まれた。

コロナ禍の下、SNS 上に拡散される無数の物語は、不可視なものに対する恐怖を追い払い、不条理な出来事に対する怒りを発散させるためのものではないか、これは分断にもつながっている。これに対して、縁あって誰かとつながり、今ここに生きていることの確認が必要なのではないか。その意味において、「つながりの物語」としての民話を語り聞くこと、新しい民話を紡ぎ出すことが大事なのではないか。これらが With コロナ時代に求められているということだった。

復興と民話：みやぎ民話の会の活動を通して考える

島津さんからは、みやぎ民話の会の紹介があった。ずいぶん前から、その土地に足を運び、物語を聞いてきた。山、海、風を感じながら、そこで生きてきた人々の話をそこで聞くことに意味があった。自分たちは、それを採訪と呼んできた。そうやって聞かせてもらったお話を文字にして、自分たちで語ってみたりもしてきた。1975 年に会を発足し、45 年の間、試行錯誤してきた。

1985 年頃、宮城県の依頼で、県内全市町村を訪ね歩き、民話の伝承の状況を 3 年間にわたって調査した。2,513 話集めて、そのなかから 500 話強の話しか載せられなかった。一人で 100 話、200 話、多い方では 300 話も語る人がいた。それぞれの生き方も素晴らしい。そのなかで、ナガウラセイキさんは、300 話語った。20 年経って 90 歳になった時、ナガウラさんにもう一度語り直してもらったところ、ほとんど変わることのないお話を語ってくれた。おばあさんから聞いた話をそのままに伝承してきた。それを 3 冊にまとめた。

年を追うごとに伝承の語り手と会うことが難しくなってきたので、一堂に会して皆さんに聞いてもらおうと、みやぎ民話の学校を開くようになった。2〜3 年おきに進めてきたが、6 回までやって、7 回目を迎えようとする時に、東日本大震災が起こった。いったんはキャンセルにするなど紆余曲折があった。小野和子さんが「今開かなくてどうするの。震災をテーマに」と言ったが、会員は「それどころではないのではないの」「もう少し時間が経ってからでい

いのではないの」と悩んだ。迷った末、8月に南三陸で開催することにした。会場のホテルはまだ避難所になっていて、道路もズタズタだった。水が出るようになったのは、ようやくイベント日だった。

200名の参加者が全国から集まり、被災された6名が体験を語ってくれた。驚いたのは、その語り口が民話そのものだったことだ。会場の人も涙を流しながら聞いた。何もできないが、聞くことはできる。語った人も聴く人の真剣なまなざしに力をもらったと言ってくれた。そうして、鵜野先生が紹介してくれた冊子や映像記録ができた。第8回民話の学校を丸森で開催、この時は第7回では取り上げることのできなかった福島や放射能のテーマも取り上げた。双葉や飯舘村からも参加して、語ってくれた方々があった。

アイさんは震災前から津波の民話を話していたが、自分たちに実感が足りなかったのではないかと思う。船越地蔵の民話で、海からずいぶん離れた山の麓に地蔵森というのがある。山の向こうが丸森で、丸森でもその話は残っていた。先人は地名や語りで自分たちの体験を残してきた。その時のご縁で、鵜野先生や村本先生、多賀城民話の会の方たちともつながった。

被災直後、民話で少しでも楽しんでもらえたらと避難所を回ると、お話よりおみやげのタケノコの煮物の方が喜ばれたが、1年経つと、「屁っこき嫁ご」に大笑いして、こんなに笑ったのは久しぶりだと喜ばれた。震災後7年目には、こちらの方が話を聞かせてもらって回った。私にはまだ7年。10年でも同じ思いだろう。復興の成果はあがったと思うが、それぞれ高齢になり、災害復興住宅に入るとひと安心ではなくて、孤独。十年ひと区切りと言ってしまうが、区切りをつけるのはこちらであって、さ中にある人にはまだまだ続く。

震災をきっかけに新しい出会いがあり、仙台メディアテークとのご縁から、イベントや声の図書室プロジェクトが立ち上がった。小野和子さんの聞く姿を捉えた「歌う人」という映画も生まれた。ひとつの民話を取り上げて、そのおもしろさを語り合う民話遊話座も定例で開催している。「浜の民話」のイベントでは、震災前の浜の様子を思い浮かべてもらう。その他、東北歴史博物館とのつながりや、さまざまな民話の会との交流も深まった。飯館に戻った人へのインタビューの映像も撮った。まだまだやり足りないこともあるが、とにかく記録に残す、その時でなければできないことをしていきたい。

丸森は去年の台風19号で大被害を受け、山も川も田んぼもズタズタになった。「まさかここで」と誰でも思ったが、やはり、そこにも伝承は残っていた。阿武隈川が逆流し、山崩れの後、昔の人は災害の跡を残そうとした。「まさか」ということはなく、「どこにでもあったること」として民話は語ってくれている。

今回の震災を語り継ぐために、新しい民話が生まれるのだろうか。直接出会って語りを聞くことが重要。コロナ禍が終われば そんな場も作りたい。

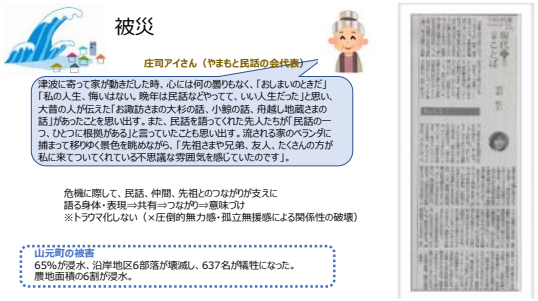
島津さんの話の後、加藤恵子さんが宮城県の昔話「笠をかぶせたお地蔵さんのお礼」を語ってくれた。ナガウラさんの姪にあたる伊藤まさこさんによるお話だそう

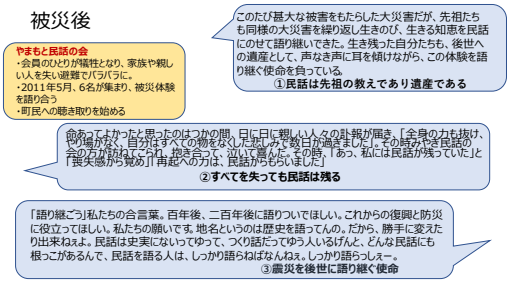
だ。教科書の笠こ地蔵とは少し違うが、たった 2 人寄り添って家で過ごす姿が暖かくて、コロナ禍の今、語りたいなと思った。

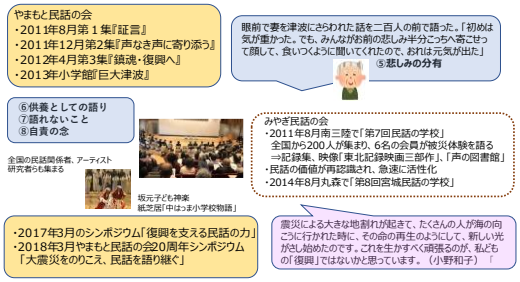
対人援助学からみた復興と民話

村本は山元民話の会のことを紹介した。これまでも紹介してきた話なので、ここに資料を載せることで報告に代えたい。なお、ここに紹介した内容には、村本個人でなく、研究会の仲間たちと一緒に調べたことも含まれている。









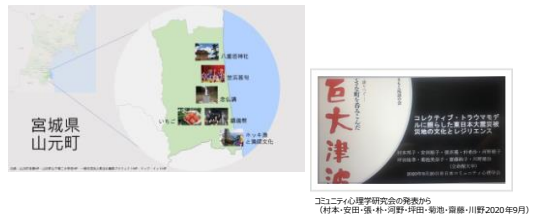
はじめに

- 東日本家族応援プロジェクトを立ち上げ、2011年11月3日遠野文化フォーラムで遠野物語99話と出会う
- 2014年8月第8回みやぎ民話の学校に参加
- 2014年10月より毎年、多賀城民話の会やみやぎ民話の会のプログラム協力頂いている
- 研究会、民話ゆうわ座、2017年3月やまもと町フォーラム、2018年3月やまもと民話の会 20周年記念シンポジウムなどの参加

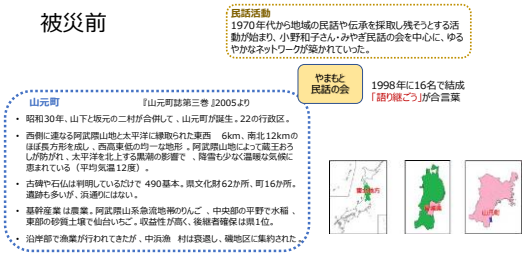
民話活動がどのように復興を支えてきたのか？

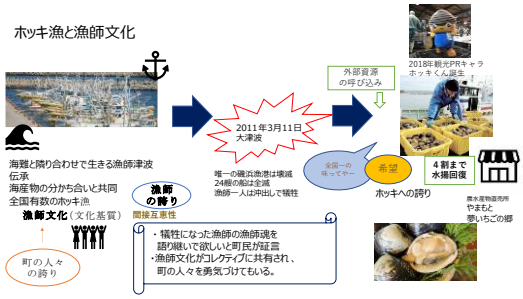
①民話の会のナラティブ分析
②山元町のサブシステムの分析

●第七回みやぎ民話の学校実行委員会編 2012）
『2011.3.11大地震大津波を語り継ぐために』宮城民話の会
●石井正己・やまもと民話の会編(2019)『復興と民話』三弥井書店
●やまもと民話の会 (2013) 『巨大津波』 小学館



コミュニティ心理学研究会の発表から
（村本・安田・張・朴・河野・坪田・菊池・齋藤・川野2020年9月）





- 昔から盛んだった漁業は磯浜漁港のみに縮小されたが1988年ごろより「資源管理型漁業」という稀な方法で漁師たちが協力し合い、全国有数のホッキ貝産地となり、毎年ホッキ祭りには県内外からたくさんの人々が集まっていた。漁師は海鷲とともに生き、山元町の沿岸部は津波常習地であることから、津波の体験を教訓や碑の形で語り継いできた。漁師文化は町の人々の誇りでもあった。文化基質

  漁師さん達が命がけで海に出ていく姿や、浜で暮らす人達から、いつも感動をもらって （p241）

- 震災で磯浜漁港は壊滅的被害を受け24隻の船は全滅、漁出した漁師人は犠牲に在った。瓦礫が海底に散乱しホッキ漁も出来ないなか、漁師たちは、ホッキ貝に復興の希望を託し、瓦礫撤去作業に精を出す。

  全国一の味ってやー。ホッキ、流れねぇと俺ぁ思ってる。底にもぐってると思う （p93）

  行政だけをあてにしないで、「自分達でやろう！」って、みんなでがんばってますから （p332）。

- 「漁師」という文化を軸に次世代へもつながり、コミュニティに属する人々を勇気づけている。

  夫は亡くなりました。夫は船と最後まで一緒で、ロープで体をぐるぐる巻きつけて　!!・・長男はあれ以来「海は恐い」って、父の時間すらはいる気っておりました。ところが、最近に至って、「父ちゃんのような漁師になる」と言ってくれたんです。真剣に考えていたんですね。それで、今注海の五歳片付けの人夫に出てます。　…夫の思志を継いでくれると云ってもらったことがうれしいです （p247）

  ぜひ、ぜひ、義一さんのことを、語りついでほしい （p243）

⇒その後、それまでも関わりのあった東北大学からの支援も呼び込み、「噴流式漁法」を導入することで2018年より漁は再開、2019年には震災前の4割までで大幅げを回復した。ただし100人近くいた漁師は20人に減った。漁協（山元漁協は2007年の合併により宮城県漁協山元支部になった）が外部資源を呼び込む文化装置としても機能している。

念仏講



- 仙台藩政下、慶弔や親睦と相互補助、集落の秩序維持のために、契約講が置かれた。契約講には付随的に念仏講があり、女性が集まって念仏を唱える。戸花地区でも、葬儀や彼岸の際に、大きな数珠を一同で順々に回しながら、独特の節回しで念仏を唱えてきた。
- 津波で戸花の集落で残ったの2軒、念仏堂も数珠も流失した講成員3人が時折寄り合い、昼食をともに近況報告し励まし合 会をやっていたが、遠く避難し丸にも及び、7~8人が集うようになった
- 津波から半年後、流失し数珠が3総本寺に預けられていたこと伽かり、構成員で数珠を清めた。12月半ばと、住民に呼びかけ、犠牲になった方々を偲び、集落の真ん中の田んぼで、念仏講を行った。

  安らかに成仏して下さい、そして残された私たちの心の安楽も願いました。終わった時、皆さんの安堵した姿も感動でした。

  これは河北新報に大きく取り上げられた***何よりの供養になった。***

- そこは第１種危険地域に指定され、そこに暮らすご仏念仏講の存続も難しくなったが、「戸花山のふもと」を東北お遍路・巡礼ポイントに応募した。

  記憶を取り戻して、心に反するよう、どう御霊をお慰めするか、どう物語るか…これからのことをどこに仕舞うのか…つまり、奉納できれほど嬉うのです。亡くなられた方への答りをい、生を頂いた者の答る辺がほしいのです。

⇒2014年、県内外の寝金援助によって、戸花山のふもとに観音が建立さ(文化産物）。これが東北お遍路の巡礼地に選ばれ、祈りの場となっているこの地区の文化産物である念仏講は形としては消滅してしまったが、念仏講や数珠といった文化装置を通じて、鎮魂と復興にむけたプロセスに導かれている。

八重垣神社（お天王さん）



- 807年、海岸近くに創建された八重垣神社は、海を司るスサノオノミコトを祀り、「お天王さん」と親しまれてきた。笠浜甚句にも歌われ、民話も数多く残されている。300年前から、お天王さん祭りが行われ、人々はそれを楽しみに仕事に励んだという。青祭りには花火の打ち上げや演芸大会、本祭りには剣道・柔道も奉納試合と神輿渡御。文化基質
- 津波で神社は全て流された。

  とにかく社殿地だけでもきれいにしたい。 （p216）

  宮司や有志が瓦礫の撤去を始めると、いつの間にか、瓦のさい銭箱もどきが置かれ、瓦礫の中、お参りの人が日に日に増えていった。

  こんな時こそ、手を合わせる対象、祈りの空間が必要なのだ （p217）

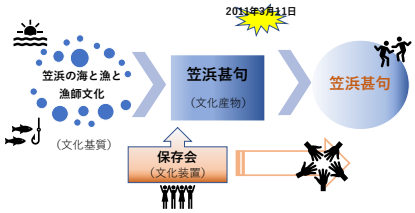
  宮司は神社庁や東京の神社の支援を得て、仮の社を設置した。

- 多くの人の力で、瓦礫撤去や除草も進み7月31日には例祭神事を執り行なった。危険区域ということで、宮司と役員だけで行う予定だったが、30名ほどの氏子崇敬者が駆けつけた。八重垣神社という文化装置を軸に、宮司や氏子たちが主体的に動き、外部者ともつながりながら、震災の年に例祭神事を行なうことができた。

  もしかすると、千年前の大きな災害の後に、その鎮めとして祀られたのかもしれません。それから長いながい時間をかけてこの神様は清められ、多くの人々が祈りを捧げ、人々と共に時を経てきました。神社がこの地を護れるということは、そういった人々との良い歴史をも失ってしまうことになるのではないでしょうか？沿岸の風落が無くなるのであれば他のこと、神社は捨さねばならないと思います。そこに、神と共に生きた私たちの記憶を残すためにも・・。（p218）

⇒2012年6月植樹祭、7月お天王さん祭り復活。海に入った後の神輿が仮設住宅を回った。新聞などで報じられ、多くの支援を得て、2017年八重垣神社は再建された。

漁師文化と笠浜甚句



笠浜甚句は漁師文化のなかから生まれた無形文化財であり、保存会によって唄と踊りが伝承されていたが、道具や衣装をすべて流され、会は休止する。しかし、人が集まれば、自然と話題に上り、手踊りする人もある。それでも、再開は困難である。

- 笠浜甚句は、船を出してホッキをとっていたことに由来漕磨の騒ぎ唄で、無形文化財であった。海と漁師文化（文化基質）の生活の中から生まれた文化産物である。農協婦人部が保存会（文化装置）を作り、歌と踊りを文化祭で披露していた。
- 資料も道具も衣装もすべて津波で流され、保存会は休会となるが、何かの折に顔を突き合わせるなかで細々と、笠浜甚句のことが語りだされるようになる。漁・漁師文化がしむ笠浜甚句の記憶にすこしずつ近づこうとする志向性・潜在性、共同想起的になされる身体性を伴う記憶の語りが紡がれる。しかし、そこには蹟藤が見られる。

  笠浜甚句がなくなるのはさみしい。昔は、寄り合いがあれば、誰でも唄って踊ったね。東北博覧会の大きな舞台でも踊ったね。地区の運動会にも揃って踊ったね。敬老会にも、町の文化祭にも踊ったね。…などと手振りをなさる方々もあって「踊ってみましょうか。」「踊ってみてください。」と、声が出た時、年配の方がポツンと、「踊りも津波に流さったー」って、ことになりました。 （p.223-224）

⇒2012年7月時点で、笠浜甚句保存会の活動は再開していなOGを中心に復活させようという動きはあったが、それぞれの生活に余裕がなく、切り出すタイミングすら難しいようである2014年1月、笠浜地区に住んでいた人々に呼びかけがあり、休止していた笠浜甚句保存会が再開された。2018年の祭りで披露されている。

鎮魂祭　花火大会



- 坂元地区には四季折々の自然風景があり、川で魚を捕ったり、冬は田んぼでスケートをしたり、春はゴザを持って行ってまるごとをしたりする四季折々の自然の風景、その自然と共に生きるその地域の生活や遊びがあった。お盆の灯篭流し、祭り、花火大会などが賑やかに行われていた。文化基質
- 坂元地区はとくに津波被害の大きかったところだった、「どらごえサークル」や「松葉塾」などのネットワークがあり、人々を支える場となっていた。

  夏も終わるころ、私の背中を押してくれたのが、元職場の先輩や友人でした。以前入っていた「どらごえサークル」にさそってもらいました。"歌などうたっていいんだろうか"という思いはあったのですが、サークルのみなさんに歌かく迎え入れて頂き、しっかりとうたってもらいました。心から感謝しています。

  ある日、「どらごえサークル」の会長の吉田和子さんから一枚のビラを頂きました。「鎮魂祭り」と大きく印刷してあり、その上に「坂元☆ダイスキ」と。うれしくなりました。私の故郷、私も大好き！ （p.314-315）

- 2011年11月5日、地域住民有志（吉田和子実行委員長）によって鎮魂祭が開催され、坂元中学校校庭でお焚き上げが行われた。

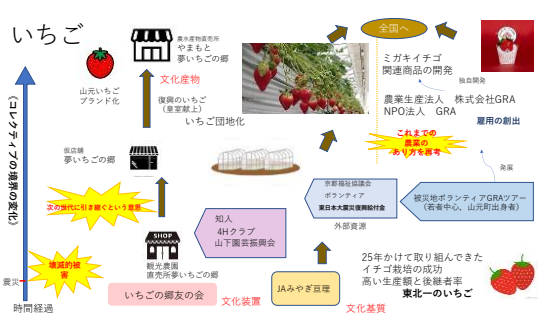
  二十数名のお坊さんが一斉にお経を唱える中、火柱から白い煙が生き物のようなって天に向かっていきました。赤い炎は、怒り、悲しみを呑み込んで空へと火の粉を巻き上げていきました。 （p317）

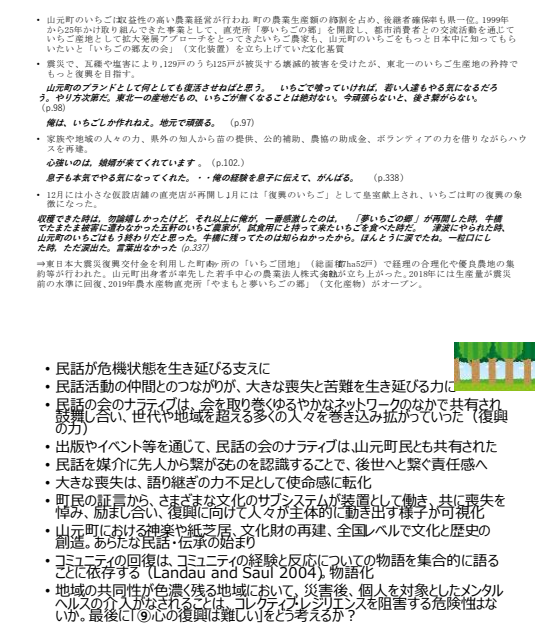
- お焚き上げの後、中浜神楽、坂元おけさ、合唱など子どもたちの出し物が披露され、亡くなった同級生たち**思**-の**いを込めたメッセージ**ともに花火が打ち上げられた

  大人たち以上に大変な体験をしただろうに、まさしくこの子どもたちは坂元の宝物、坂元の人たちが宝物である子どもたちに、郷土芸能を大事に伝えてくれたことに感動しました。風雷紅打奏の元気の良い太鼓の演奏の後、いよいよ花火が始まりました。 （p.318）

⇒「さかもと大好き鎮魂祭」は、2012年11月17日に第二回目が開催され、200人が集まり、2013年10月26日に第三回目が開催され、収めとされた。なお、「どらごえサークル」は、世代を超えた地域の交流の場と1975年より現在まで活動している。震災後、「黄色いハンカチ」「この町で」2曲が作られ、様々なイベントで披露している

いちご







ディスカッション

それぞれの話題提供の後、ディスカッションを行った。

島津さん：アイさんは、被災後しばらく連絡がとれず、生きているのかどうかさえわからず、皆で心配していた。ようやく探し当て、会えた時、興奮状態で、「あら、アイさんって、こんなによくしゃべる人だったかしら」というくらい、いつになく饒舌に語り続けた。

5月頃から被災体験を記録しようと、紙も鉛筆もないようななかで、町民一人一人を訪ね歩き、一緒に涙を流しながら、町の人々の体験をまとめていった。冊子にしようと一生懸命取り組んでいたが、1年ぐらいして、冊子ができると、「落ち着かないんだよ。涙が出てくるんだよ」と電話してくる。会のメンバーとお地蔵さんを作ろうと決めて、いったんは落ち着いたが、お地蔵さんも観音様もできて、よかったなと思っていると、また少し経つと、落ち着かなくなってくる。

求められればどんな所にでも行って、ご自分の体験を語られた。「同じ過ちを繰り返してはいけない。自分たちの体験を防災に役立てて欲しい」との一心で応じていたと思う。その波が収まると、また苦しくなる。そういったことを何度も何度も繰り返して、自分で出かけられないと、「しゃべりたくなった」と電話がある。一緒に助かった犬と散歩していると、涙が出てくるという。そんなことが何度も何度もあり、十年繰り返してきた。あんなに語ることのできるアイさんですら、そんなふうに、波が押し寄せては引き、引いてはまた押し寄せてくる。民話など、発信手段のない人はどうだろうか。「十年ひと区切り」と外からは言うけれど、とても十年で終わりにできないと思う。

村本：鵜野さんの話を聞いて、阪神淡路大震災の時のことを思い出した。毎週、避難所の子ども遊びボランティアに通っていた。ある時、学校にあがらない小さい男の子が、怪獣の絵を描いた。「うぁー、大きな怪獣だね！」と言うと、「ボクね、ずっと考えてたんだ。どうして地震になったんだろうって。そしてわかったんだよ。地面

の下で、怪獣が大きな尻尾でドンってしたんだ」。理不尽なことが起きた時、人はそれを理解可能な物語にしようとして、神話が生まれてきたんだと感動した。

島津さんのお話にあった 300 話も語る人、すごいなと驚く。お話が頭ではなく、体に刻み込まれている。自転車に乗るように体に型が刻み込まれ、そこにのせて体験を語られたのではないか。被災体験を語られた 6 名のみなさんの語りも、ユーモラスな雰囲気を残し、民話として新たな語りができていた。民話の力はすごいと思う。それを、また若い人たちが受け継いで、別の形にのせていく。語り手だけでなく、聴き手である小野さんの姿も撮らなければという若い人の感性。ポストモダンというのか、物語は、聴き手と語り手の間に生まれていくという発想である。

最後にアイさんのこと。心理の専門家だったら、「トラウマによる過覚醒状態だから、そんなことはやめなさい」と言って、アイさんのやろうとしたことを止めたかもしれないと思う。でも、自分を鼓舞して頑張って、落ち込む、伝える、を繰り返された。その全部がアイさんの大切な人生。そこから波動が生まれ、目に見える大きな動きにつながっていく。専門家は、個人の病理として見ていくことで、そんな大きな集合体のうねりの可能性をつぶしていくのかもしれないと思った。

その一方で、山元町の記録にも含まれている PTSD になった人。アイさんのインタビューをしていた時に、たまたま隣の机におられた男性のことを思い出す。その方は、家を流され、家族全員亡くされた。復興住宅で引きこもっている男性たちは、子どもをうるさがって苦情を言う。そういうのが嫌で、自分は毎日 1 万歩歩いて、ここにきて、新聞を読むのだとおっしゃっていた。

どうしても、こぼれてしまう人たちがいる。遠野物語 99 話の福二は、今で言う PTSD だったと言った人がいたが、喪失から抜けられないまま、あの世とこの世を彷徨っている。それでも、そんな人の存在も排除するでなく、含み込んでいくのが民話の力ではないか。山元町の記録のタイトルにもあるように、声にならないもの、形なきもの、沈黙など、語り得ないものをも含み込んで結び付けていく力を秘めていると思う。

場と空気を共有しながら人と人とが向き合えることは何物にも代え難いが、コロナ禍でこういう形であれ、民話の会のみなさんとつながれるのはありがたい。プロジェクトでも工夫していきたい。

島津さん：若い世代が、小野さんはじめ宮城民話の会に共感し、関心を持ってくれた。遊話座や小野さんの講演を聞いて、民話の持つ力の深さに気づくからだと思う。今や採訪ができず、語れる人もない現状だが、仮設住宅でも傾聴ボランティアがいて、聞くだけでなく、自分も学ぶことがたくさんあると感じている人がいると思う。そういう中から民話に興味持つ人が増えてくれるといい。45 年やってきて、この十年、ようやくその本当の面白さに気づいた。ある程度やってみないとわからない。是非若い人たちに関わって欲しい。

鵜野さん：今年の 2 月のシンポジウムは、

瀬尾夏美さんに来てもらったが、アーティストとしてのベースに民話や物語がある。陸前高田の人たちと触れ合うなかで物語が立ち上がっていき、それを表現する。映画活動の濱口さんも。これまでの民話のイメージとは違う新しい発想で、頼もしい。

島津さん：メディアテークを通じて出会った瀬尾さんと一緒に話を聞いていると、話の受けとめ方が違うと思う。とてもセンスが良くて、聴き取り方がすごい。そして、それを表現する。感心させられる。濱口さんの感性もすごい。自分たちは学校の教員で、学生時代から同じような形でやってきたが、違う分野や新しい人が入ることで、民話の深さや面白さも変わってくる。若い人たちの感性に期待したい。小野和子さんはそこについていける若いセンスを持っている。今年は月例会が 3 回しか開けていない。民話の学校を 8 回までやってきて、第 9 回をどうしたらいいのか。今できることをやっていかなければと模索中である。

加藤さん：震災で小野さんやアイさんが「民話に力がある」と言ったが、自分は、「えっ、そうなの!?」というところから始めて、今は、テープや DVD を文字化しながら、お話と向き合っている毎日。これを残す意味を考えると、今の人だけでなく、20 年、30 年後にも伝えていく。文字で記録することの大切さを感じる。十年後に読み返すと、また違って感じられるだろう。心の復興は 10 年や 20 年でできるものではない。一生のものだと思う。

村本：小野さんは、敗戦後、墨塗り教科書に何も信じられなくなったという。権威や権力というものを。大人になって、民話を聴き、人々の生活に根差した民話の中にこそ信じられるものがあると採訪を続けられた。小野さんは、敗戦で失ったものを、民話活動を通じて取り戻していかれたのだと思った。加藤さんのおっしゃる「心の復興は一生のもの」、まったくそのとおりなのだと思う。

10/04(日)13:00～14:00　支援者交流会と振り返り

3 日（土）の 15 時半～16 時半は、増田梨花さんの司会のもと、阿部浩さん（ライオンズクラブ国際協会石巻中央ライオンズクラブ会長）が、石巻の復興についてお話しくださった。現在、復興が進み、建物がどんどん建っていくものの、「心の復興」は進んでいないという。とくに大川小学校の話は辛く、とくに学校関係にある院生たちが振り返りで繰り返し言及していた。物語は目線によって異なる紬となる。4 日（日）午前は、いつものように、団士郎漫画トークだった。来年度展示予定の「アースカラー」と「ソロ泊」が紹介された。リピーターの人たちは、毎年、団さんの漫画やトークを楽しみにしていた。

4 日午後の支援者交流会は、院生たちの自己紹介やプロジェクトに参加しての思いから始まった。村本は、2 週間前にオープンしたての伝承館に行ってきた経験を共有した。現地の方々からは、オンラインででも顔を見ることができて懐かしく嬉しいという声が次々とあがった。

十年経つところでの伝承の課題や、記録を映像や文字で残すことの意義が語られた。今、被災地では伝承に意識が向いている。十年で区切りをつけるのでなく、荒浜小学校や気仙沼の高校のように、忘れないということに社会的意識が向かっている。しかし、丸山さんによれば、多賀城では、今や津波があったことがわからない。十年経つと、小学生たちは誰一人津波を経験しておらず、実感できない世代である。市役所の職員も、半数が震災対応していない若手に変わった。世代交代のなかで、継承は難しいが、好奇心で聞いてもらえると、東北人はたくさん話す。逆に聞いてもらわないと、寡黙で何も話さない。だから、こうやって聞いてもらえることを嬉しく思っている。絆とはずっとつながり続けることだと実感し、そんな大切なことを教えてくれたのがこのプロジェクトだったという言葉を頂いた。

「自分の中で変わったことは、かつては海が好きだったのに、今では海があると不安がよぎる。どっちに逃げるかを常に考える。山に行くと安心する」という丸山さんの言葉に、あらためて震災のぬぐい難い記憶を実感させられた。映像については何度も振り返ってきたので平気で、振り返りの機会を作ってもらって、感謝しているということだった。記憶すること、忘却することの力を思った。

黒川さんは、公民館でやった最初のことを思い出すという。9 年間通ってもらって、たくさんの思い出がある。団先生の話を毎回職員と聞かせてもらって、アプローチの言葉に人間力を感じる。上から目線でなく、それぞれの力を引き出すところがすごく勉強になる。鵜野先生には遊びをやってもらって、毎日子どもたちとお手玉をやっている。頭にちょんと載せて、「今年もお米がたくさんとれますように」とお辞儀する遊びは、小さい子も大喜び。昔の遊びはいいなと思う。

小野さんは、今年、図書館の展示とイベント担当として関わってくれた。図書館でも、震災の伝承はミッションなので、何ができるのか考えたい。今回の展示もアンケートを見て、毎年楽しみに見てもらっていることがうかがえる。図書館では、3 月に震災関連の展示をしている。昨年は多賀城市の俳人のタカノムツオさんの作品の展示と震災にまつわる俳句作品の展示を行った。

今後について、丸山さんから、図書館を CCC に受け継ぐときに、「このプロジェクトは必ず続けてをやって欲しい」と引継ぎをしたことが紹介され、「団先生がお元気である限り続けてやって欲しい。図書館の誇りでもある。現地での展示とリモートでの語り合いでもいいかもしれない。リモートは近い感じがしていいなと感じている。これならば、毎年 2 回とかでもできるかも。こうして互いに元気な姿を見せあうだけでもいい。コロナで残念だったが、新しい形を試して可能性が開けた。」と、今後の継続についても、前向きな意見を頂いた。

黒川先生からも、今年はコロナがあり、9 月 11 日に爆弾予告があったりで、入園式など行事もできなかった。できたとしても行事も分けてやっているとのこと。子ど

もたちの園生活にも変化があった。保育が必要な人たちなので、小中高と違い、基本的にみな通っていた。コロナは大変だが、リモートは気軽にできる。参加しやすいし、みなさんにも負担少ないのかなと思うので、是非リモートででも続けられたらと賛同の声があがった。

加藤さんは、民話の活動にもリモートを利用できるのではないかと早速、島津さんと話したという。コロナで、民話ゆうわ座もできないままだったが、小野先生にもリモートで来てもらって話すのもいいなと思った。リモートなら、語り手の映像をあらかじめ見てもらって語り合うこともできる。12 時間分の DVD を作ったので、たとえば、ある部分を見てもらって語り合うなどもできるのではないか。あらためてリモートのすごさを感じる。若い方の話、映像でしか見れない語りを見てもらって、おもしろさを実感してもらう。復興の心の病についても、簡単には解決しないが、先人の苦労と、そこでうまれた不思議な経験を共有することで、映像など見ながら小野さんの話を聞くなどできるのではないか、そういう可能性について考え始めているということだった。

このプロジェクトを続けてきた人々が、オンラインという形であれ、再会をどれほど喜び、そこから互いに力を得ているかが画面からあふれ出て、初参加の院生たちは、感じるものが大きかったようだった。「継続の力を感じた」、「コロナだからできることのアイディアが拡がっていくのがすごい」、「どんな時も繋がり続けることがすごい」、「それがこのプロジェクトそのものだったんだな」、「民話がとてもよかった。次はじかに聞いてみたい」などの声があがった。

私たちの方でも、「国府多賀城で、図書館が文化の中心になってつなげていってもらえないか」、「多賀城民話の会も冊子をまとめているから、多賀城版の DVD を作るのもいいのではないか」、「お手玉遊びに地元の大学生などに入ってもらえないか」、「伝承を前向きに明るいものにしたとき、こぼれていく人たちがいる。素材を出すだけではだめで、一緒に分かち持つことが大事なのではないか。これをご縁に多賀城がそういう役割を果たせるといい」などさまざまなアイディアが湧いた。現実の体制や連携について踏み込んで話す中で、大きな壁も感じたが、ブレーンストーミング的にいろいろなアイディアが出てくることはいい。

団さんは、コロナで時間があったからできたこととして、十年の漫画をまとめた冊子『Complete』を作成したことを紹介した。「ネガティブだけ、ポジディブだけというのはない」という言葉から、加藤さんの、「今回、思いがけず参加できたのはコロナのおかげ。毎年、民話の例会と重なって、漫画トークに参加できなかったが、コロナで 1 週ずれたことで参加できた。ゆうわ座のことも考えられるし、プラス思考でいこうと力をもらった」という言葉が続いた。

丸山さんからは、「やめる決断は即決できるが、コロナでもやろうと決めた村本先生。絆応援プロジェクトはコロナにも勝てるんだ！」との心強い言葉をもらったが、

私の頭のなかには、やめるという選択肢はなく、どういう形で続けられるかという問いがあるだけだった。1990 年に大阪に立ち上げた女性ラフサイクル研究所は今年 30 周年を迎えたが、長く続けることで初めて見えてくるものがある。続けることで得られるものの大きさは十二分に知っている。ただし、今回のプロジェクトについては、一方的なラブコールだけではできなかった。だからこそ、私たちからのラブコールにレスポンスがあり、ここまで継続が実現されてきたことが本当に嬉しい。

現地の方からは、「ZOOM での交流会では、お一人お一人から、現在の職・活動・研究に基づく思い・意見を聞かせていただき、大変勉強になりました。学生さんの質問内容や交流後の感想も聞けて新鮮でした。これまで積み重ねられたつながりの上に立ってこそ見えてくる思いや見方について、一方、新しく入って来た方がもつ関心や疑問について、世代や様々な立場の方がこのプロジェクトに参加して率直に意見交換できることは、今後も是非続けていただきたいと思います。企画・運営に携わってくださった皆様、本当に有難うございました。」との感想も頂いた。

現地に行ってみなさんに直接お会いできないのはとても残念だが、このような形でもつながることのできるのはありがたい。慣れない環境のなかで、快くご協力頂いた現地のみなさまに心から感謝したい。

リモートならではの良さも感じている。第一に、院生たちに、すべてのプロジェクトに関わってもらうことができる。そのために、チームを組み、担当者に土地の状況やプロジェクトのこれまでを綿密に調べて事前調査の報告をしてもらう。毎年やっていることではあるけれど、さらに時間をかけ、入念な準備をしている。いつもは担当地以外は間接的な報告だけを聞いていたものが、直接現地の方とつながることで、コミットメントが高まり、土地への思いも強くなる。

第二に、修了生たちを招いてつなぐことができる。今回、増尾佳苗さんに D-MAT 隊員としての多賀城体験、プロジェクトとの出会い、大学院入学、プロジェクトメンバーとしての多賀城体験、救援活動についての研究と修論作成、現在と順を追って体験を共有をしてもらったことは、現役院生に大きな刺激となっただけでなく、私たち教員にとっても、違った視点から被災地とプロジェクトを考える貴重な機会となった。現地の方々にもなにがしか新たな視野をもたらしてくれたように思う。

第三に、ほんの少しだが、ふだんは同席しない各地のみなさんをつなぐことができたこと。とくにみやぎ民話の会の加藤恵子さんには、プログラム全体に関わって頂き、さらに 12 月の福島のプログラムの案まで頂き、感謝している。今後は、さらに現地をつなぐという試みを意識的に作ってみようと思うようになった。

今年、このように新しい形でプロジェクト継続を模索するなかで、十年プロジェクト終了後のつながり方についても少しずつイメージが拡がりつつある。最終年である来年、そしてその後についてもクリエイティブに試行錯誤しながら新たな道を探っていきたい。

オマケ　コロナになって（2022 年 8 月 29 日）

ついにコロナになった。他の人はどうなのか聞いたことがないからわからないが、この 2 年半、自分の健康状態に注意を払う習慣がつき、かすかに喉がおかしいとか、軽く頭痛がするとか、前ならまったく気にしなかった体の小さな変化に敏感になった。そうすると、完璧に大丈夫という時と、1/100 の揺らぎ的な微細な違和感（それまでならまったく気にしていないレベルの）を持っている時がある。そういう時は密かにドキドキしながら、いつもより注意しつつ、普通の生活をする。何度もそういうことはあったが、いつもそこからとくに具合が悪くなることもなく、1 週間以内には消え去った。今回もそんな感じで、先に夫がたまに小さな咳をするようになり、私の喉にもごく軽い違和感があり、お互いいつもに増して体に注意を向けていたが、特別しんどいわけでもなければ熱もないしで、普通に数日過ぎた。

ある日、車で遠方に出かけて帰った夜、「少し疲れたよね」とお互い感じたが、翌朝もとくに熱はなく、家でゆっくり過ごしていたところ、昼前、まず夫の熱が 37 度を越えた。「咳、喉の違和感、発熱」と並ぶと「ちょっとヤバイかな」と、すぐにかかりつけ医に電話して検査してもらった。二人ともあっさり陽性で、自宅療養となり、薬をもらって帰った。その時点で、私の方には熱もなかったが、夜から熱があがった。翌日、保健所から電話があり、ヒアリングの結果、思ったより早く療養期間が明けることがわかった。私にとっては、東北のプロジェクトに間に合うかどうかが重要な問題だったので、一日でも早く明けてくれることはありがたかった。ネット情報では、体調に異変を感じた日をゼロ日として、そこから十日数えるとあり、特別しんどくもないけれど喉に違和感を感じた日から数えていいのか、それとも実際にしんどさを感じた日から数えなければいけないのか不確かだったが、保健所の人に確認すると、小さくても違和感を感じた日から数えていいということだった。いつもより敏感になっていたことが良かったのだろうし、ある意味、その分、対処が早かったと言えるかもしれない。

実は、今回、たまたま父の一周忌で実家に帰っていて、レンタカーを借り、帰りの飛行機も予約してあった。保健所のヒアリングを経て帰る日を決めることができたので（もちろん回復が順調であることが前提であるが）、レンタカーを割引価格で延長してもらい、飛行機は陽性証明と療養終了照明を出せば無料で変更ができることがわかり、すぐに手配した。3 日ほどは辛かったが、熱もそれほど上がらず、何より味覚も食欲もあって、ありがたいことに回復は順調だった。高齢で持病ありの夫の方も同様で、安堵している。昨年、父が亡くなった日、夫が大怪我をして、結局、4 ヶ月半ほど夫はこちらで療養したので、地元にかかりつけ医があったことも幸運だったと思う。何がどう転ぶかわからないものだ。夏休みの帰省中で仕事は最低ラインにしてあったし、ほぼすべてオンラインで可能だったので、何とか穴をあけることなくやりこなすことができた。

帰ったらすぐにプロジェクトで東北遠征となる。療養期間が明けてからも、無理をせず後遺症に注意せよということなので、引き続き気をつけよう。

精神科医の思うこと㉖

思い出のカフェ3つ

松村　奈奈子

私と旦那、２人ともお酒を飲まないので、その代わりの趣味のひとつが「カフェめぐり」。近所でも旅に出ても、いろんなカフェを訪ねるのが楽しみです。

昔はふと目に留まったカフェに入る時「美味しいのかしら、美味しくないのかしら‥」「ボッたくられたりしないかしら」と、入るのをためらったりすることもありました。もちろん賛否両論はあると思いますが、スマホを持ってからは目に留まったカフェをちょっと検索して、コメントやメニューをチェックして気軽にチャレンジできることが増えました。そこで先日、キョーレツに思い出に残るカフェに出会ったので、そのお店を含めて、今回のテーマは「思い出のカフェ３つ」

キョーレツなカフェに出会ったのはコロナ第７波がくるちょっと前、山陰地方の波音しか聞こえない、たった１２０軒の小さな漁村に泊った時です。漁村に入る狭い道にひっそりと「カフェの駐車場」の看板がありました。さっそく行ってみようと、宿からもらった村の散策マップを見ましたが載っていません。こういう時、とりあえずスマホで検索。さすがネット社会、こんな村のカフェでも行った人のコメントと地図がでてきました。美味しい珈琲のようなのでスマホに案内されるまま、村の小道を入り奥に進みます。するとそこには、小さな看板が掛かった普通の民家があらわれました。なかなか人を寄せ付けない外観です。「こんにちは」とドアを開けると、人を拒む様な店構えとは裏腹に、気さくなマスターが優しくカウンターに招き入れます。中は落ち着いたカフェ風で、マスターは白シャツに黒ジャケットでキメています。むむっ、あの外観なのに人懐こいマスター、このギャップは何なんだ？と謎に包まれていると、珈琲の準備が始まりました。その時、店の空気は一変し、マスターはドリップに命を懸けんばかりに集中します。私たちが声を出すのも躊躇うくらい、凛とした時が流れました。珈琲を入れ終わると、「こんなんですけど、人は好きなんですよ」と再びマスターは人懐っこく私た

ちに話しかけます。

その夜、あまりにも不思議なマスターが気になって検索すると、どうも東京の下町で繁盛店をたたんで、この村に来たようです。我々はすっかりマスターに魅了されたので、翌日もお店を訪ねました。素直にネットで東京から来た事を知ってしまったと伝え、小さな漁村に辿り着くまでの話を聞きました。東京でメディアに取り上げられた事をきっかけに、自分のスタイルで珈琲を提供できなくなった事が小さな村に来た理由のひとつという風に、マスターは語ります。いろいろ悩んだ末に、今は“食べログ”はもちろん情報誌や村のマップにさえ掲載を拒んでいるといいます。それでも、我々が検索してたどり着けたので、村を訪れた人や情報の隙間をすり抜けたお客さんを受け入れているようです。２日とも訪ねた時には、お客は我々だけでした。思わず「生活できてるの？」と聞くと「できるわけないじゃないですか、スーパーでバイトしてます」と答え、さらに「この村で骨をうずめるの？」「そのつもりです」とマスターは笑って話します。自分の珈琲を提供するスタイルにこだわり、漁村に暮らし、それを生活の糧にはしない、なかなかキョーレツな生き方です。東京から昔のお客さんが訪ねてくるといいます。その魅力、わかる気がします。雑談の中で、私と同じ大阪の街で育ち、高校の後輩だった事がわかり、より愛しい気持ちになりました。私たちもまたいつか、マスターに会いに行きたいなと思いました。

もうひとつの忘れられないカフェは、四国の瀬戸内海が見下ろせる小さな町の絶景の丘の上にありました。丘の上の展望台に行った帰り道、ふと小さなカフェが目にとまりました。週末しか営業していないと看板にあり、既に中にお客さんが美味しそうに珈琲を飲んでいます。引き込まれるようにお店に入ると、小さなカフェですがお店の半分は、写真などの作品が展示されているギャラリーでした。初老の女性が暖かく迎え入れ、「よかったら、作品も見ていってくださいね」と話します。珈琲を頂いた後ギャラリーを見ると、プロっぽくない芸術作品と若い女性の作家の写真がありました。作家さんはこのカフェとどんなご縁があるのかな？と不思議に思いながら見させて頂きました。この店もまた、カフェとしての経営でお店を続けているのではなく、何か思いを持っているお店のような印象を受けました。お店は繁盛していて、ほどなくお店を後にしたのですが、どうも気になってまた検索してしまいました。そこには、他のお客さんが聞いたこんな内容が書かれていました。初老の女性は、事故で娘を亡くし、ギャラリーの作品は娘さんの作品であること、娘さんを思う友人たちが、気楽に来てもらえるようにカフェを始めたと。そうか、亡くなった娘を思う母親のカフェだったのかと、こういう思い方もあるのかぁと思いました。と同時に、初老の女性の悲しみを思うと涙がじわっと出てきました。

そして最後に、私が一番印象に残っているカフェは、ドライブ旅の途中に出会った森

の中のカフェです。お店に入ってすぐ「あれっ」と驚きました、奥で調理をしている女性は数年前に転勤するまで診ていた昔の患者さんによく似ています。

ところで、私は自分の患者さんに、病院以外で出会ったときは自分から声をかけない様にしています。患者さんの中には、精神科に通院していたり、通院していたという事を、周囲に隠しているケースもあるからです。だからちょっぴり、避けてしまう事もあります。

なので、この時もお店には別に女性スタッフもいたので、女性に背を向けて座り、視線を合わさない様にしていました。美味しい珈琲を頂きながら、診察していた時の事を思い出します。夫からの DV 被害の女性でした。小さい子供を抱えて、どう別居し、離婚していくか一緒に考えました。DV 被害女性の典型で、女性自身の父母はたよりになりませんでした。まずは女性自身が仕事を始め、女性友達を作り、仲間に相談して、仲間の力をかりて別居したところで、私は転勤で別の病院に行くことになりました。とても聡明で魅力的な女性で、「いつかお菓子作りの勉強をして、お店を持つのが夢です」と話していたのを思い出しました。そうか、本当に頑張ってお店を持ったんだーと、よかったなぁと嬉しい気持ちでいっぱいになりました。

帰りも顔を合わすのをさけて支払いは旦那にまかせて、先に私は店をでました。車で待っていると旦那が走ってきて「奈奈子先生のご主人さんですか？って聞かれたよ。お話したいって」と言います。後ろから、女性も走ってきます。「なんで声かけてくれないんですか？」「スタッフの方がおられたので」「あれは娘ですよ」と笑って話します。そうか、娘さんかー大きくなったなぁ、親子関係もいい感じなのかーとさらに嬉しくなります。私の転勤後、お菓子の勉強をして、縁あって出資者に巡り合い、お店を開店させたと言います。精神科の通院はとっくに終了して「今は幸せです」と女性はいいます。この言葉、精神科医が一番聞きたい言葉です。帰りの車の中で、頑張ってきた女性を思うと、じわっと涙が出ました。うーん、この仕事をしてきてよかったなぁと思わせてくれたカフェでの再会でした。

カフェだけでなく、人はいろんな思いで職業選択や行動を始めたりしますよね。居酒屋でもオーナーの思いのこもったお店もよく見かけます。ただ、お店を経営ではなく、何か自分を納得させるために続けているお店にあうと、その思いをいっそう知りたくなります。私の好奇心を満たす、ワガママな思いなんですけどね。そして、スマホのおかげで、カフェ巡りは簡単になった一方で、スマホの情報で簡単に繁盛したりする社会に抗うマスターに出会ったりすると、悩ましいです。でもいい出会いが多いので、好きなカフェ巡り、スマホを使って今後も続けるつもりです。

今回はただ、思い出に残るカフェをいろいろ思いながら書いてみました。

馬渡の眼 9

「見方が変わると、味方に変わる」

馬渡 徳子

コロナ禍も 2 年半年を経過。6 年目を迎えた「無料塾寺子屋えがお・子ども食堂」は、地域の様々な方々の参画が得られようになり、ますますもってごちゃまぜ感が満載の地域のおもろい場所になっている。

5 月の運営会議で、「コロナ禍をともに生きるお互いを、労い合う企画を夏休み前に出来たらい良いね」と、7 月頭に友人の心療内科医師をお迎えして、「セルフメンタルヘルスとピアサポート」についてのワークショップを行った。

講師は、石川県内において「少数派の疾患や他者にはわかりづらい障がいともに生きる人々のピアサポートグループ活動」支援実績のある方で、様々な業種や役割をもつ「支援者支援」においても、事例検討会や抄読会などを通じて支援実績のある方だ。

その時のキーワードが、今回のテーマ「見方が変わると、味方に変わる」である。

椅子のみでの円陣で、気分調べから始まるこのような形式が初めての方々は、緊張の面持ちが伺えたが、マガジン執筆者のお一人である水野スウさんとの共催で 15 年目を迎えた「松浦幸子さんの SST」を、この場所で経験している金沢大学の学生さん達が、場を和やかにしてくれた。

家庭でも学校でも職場でもないこの無料塾寺子屋えがお・子ども食堂が、自分にとってまた子どもたちにとって、どのような場所になっているのか、率直に語り合うことにつながった。

「自分は、支援される側・もてなされる側が、いつの間にか運営する側にもなっていて、これが良かったとの感想を新たな手段に変えてくれて嬉しかった。」

「ここは安心して空気が吸える。」

「タイミングよく、気づきを率直に伝え合う場面が多くて、居心地がいい。」

「会場にいろんな部屋があり、どこでどんな風に過ごすかを自分で決められる。」

「創設当初から、元職を活かして何かお役に立てたらと思って参加してきたが、様々な人生を歩まれる多様な価値観をもつ人々に出逢って、実は元気になったのは自分の方。地域の人々を誘いたい。」

「自分を緩めている。」

「人は見かけじゃないな。」等々

このワークショップで励まされた私たちは、子ども世代に感染者が拡大する予兆が見られたことで、「この夏休みは、これまでとは様相が違うね」と話し合い、ずっと躊躇していた新たな形での広報に挑戦をした。

この作業は、外国留学から帰国した高校生と、その親で学習支援担当の方が取り組んでいる。

SNS の力は、予想外の反響で「公式インスタグラム」を観ての新規利用者が増えた。コロナ禍の様相が変化した時期、2020 年から宅配機能ももっていることが奏効したし、新たな飲食店からの支援依頼にもつながり、空き調理時間を日用品のリユースにつなげることもできた。

正に「見方が変わると、味方に変わる」を実感している。

https://www.instagram.com/terakoyaegao4/

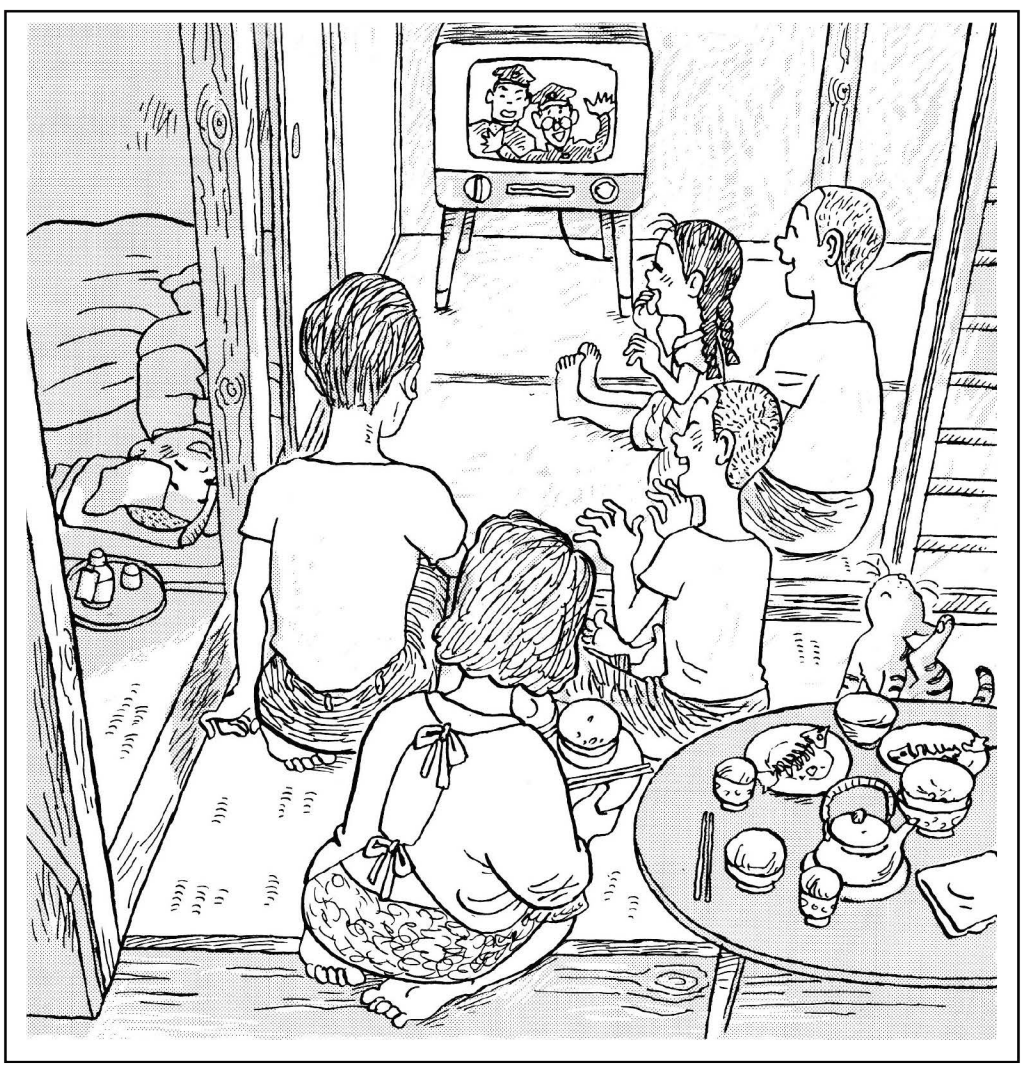
公式インスタグラムです。

東成区の昭和やぶにらみ日記

絵と文・柳たかを

復帰の試練

昭和 30 年頃、戦後焼跡から立ちあがろうともがいていた日本、その日の食べ物を手に入れることに精一杯で、父親のような日本画家に画商から注文などあるはずもない飢えた時代でした。



肺炎の高熱で起きることもできないなか、テレビのお笑い番組の声だけ聞いて笑っている僕

しかし日本の木造家屋には襖絵や床の間の掛け軸、玄関に置かれる衝立など、表具師の手で家具と一体化された日本画は調度品として使われたので異常な時代でないかぎり、日本人の生活には欠かせない生活芸術でした。

そんな日本画家に憧れて田舎から大阪に出て来て修行した父が戦争で約 10 年間筆を折り、家族を食べさせる為のアルバイト & 職人仕事に汗を流し続けた。

戦後生まれのベビーブーム世代の子供達が使う学用品にワンポイントのカットイラストを大量に絵付けする内職仕事。

おかげで日々の飢えから解放されたものの「自分の進むべき道はこんな道ではない」という葛藤・あせりは抱えたまま。

とそんな頃、父が戦前所属していた青龍社 [代表・川端竜子] が活動を再開したとのニュースを仲間の先生から聞かされる。

日本画家として活動していくためには、青龍社に応募出品者として受け入れられ、且つ同展覧会に作品応募して入選しなければならない。

作品製作途中には事前審査で竜子代表に何度か下絵を提出して製作のアドバイスをいただかねばならない。OK の許可をもらって描き進めた渾身の完成作品 (完成画は 300 号サイズ) が残念にも落選することもありえる、厳しい戦いだ。

父はこの復帰チャンスにしがみついて賭けた。するとその製作時に僕が肺炎にかかって死線をさまよってしまった。

超えるべき (試練) があったとすれば、まさに父にとってこの数ヶ月間がそうだった。

やぶにらみ日記 （501）

東成区の昭和

（43）写生



やぶにらみ日記 （502）

東成区の昭和

（44）写生



やぶにらみ日記 （503）

東成区の昭和

（45）写生



やぶにらみ日記 （504）

東成区の昭和

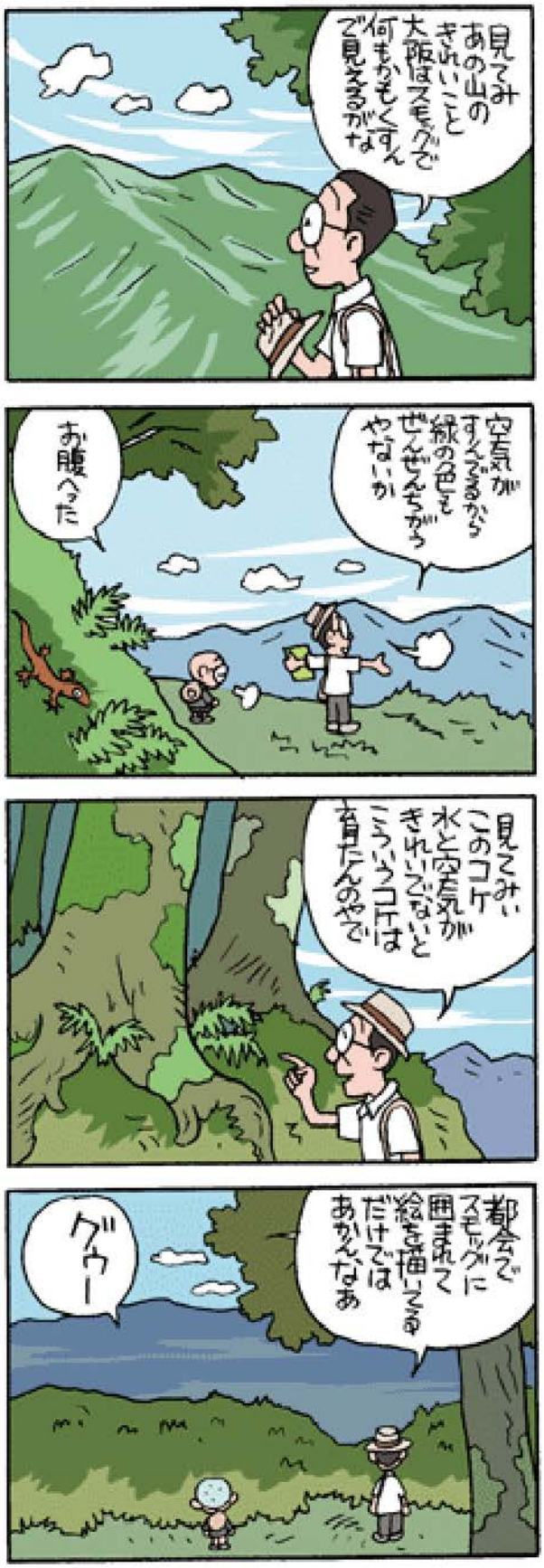
（46）写生



やぶにらみ日記 （505）

東成区の昭和

（47）写生



やぶにらみ日記 （506）

東成区の昭和

（48）写生



やぶにらみ日記 （507）

東成区の昭和

（49）写生



やぶにらみ日記 （508）

東成区の昭和

（50）写生



（51）写生


ただ形を写すだけなら図鑑で見たらええ


けどナマの生きる力は図鑑ではわからん


現実の木は闘いながら生きてるから見に来る価値があるのや


木てたたらうてるのん？
そうや

（52）写生


他の木よりも少しでも太陽の光を受けられるように枝の伸び方はみな微妙にちがう


人の顔がちがうように根のはり方もみなそれぞれちがう


生きる力のあらわれかたというのは一つとしてええかげんなものはない


それは闘いの姿そのものや

やぶにらみ日記 (511)

東成区の昭和

(53) 写生









やぶにらみ日記 (512)

東成区の昭和

(54) 写生









やぶにらみ日記 （513）

東成区の沼和

（55）写生



やぶにらみ日記 （514）

東成区の沼和

（56）写生



心理コーディネーターになるために
Vol.8

山下桂永子

☆月末統計



数ヶ月に一度、事務の A さんがいつもどおりのエレガントな笑顔で言う。「山下先生、今忙しい？来月議会があるので、統計をそろそろ。。。」

「あー！そうだすみませんすみません！やりますやります。ちなみにいつまでとかありますかねぇ。。。？」と笑顔でごまかしながら伺うように聞く私。A さんは「そうですねえ。指導主事の B 先生からは来月議会があるから〇日までに欲しいと言われていて、私としては△日までに打ち込み終えたいので、山下先生は数が多いから、できれば◇日には欲しいですね」と笑顔を崩さず、大変優しく具体的に指示をくださる。そして締め切りが近づいてくると、A さんは私以外の相談員に、そっと「山下先生、やっぱりお忙しいかしら？」と伝える。私以外の相談員は、「ほら、山下先生、統計そろそろやらないと。A さんが困るでしょ。ここ私も面接空いてるからやりましょ！」と手取り足取り宿題を見るお母さんのように私の統計を手伝ってくださるのである。A さんと働くようになって７年目ぐらいだと思うが、A さんはすっかり私の動かし方を心得ておられる。

☆教育相談の数値化

ここで言う「統計」というのは、「教育相談月末統計」の略である。教育センターに相談に来られる保護者や児童生徒ごとに相談回数をカウントして、相談員が月末ごとに提出することになっている。

「月末ごとに提出することになっている」のだが、私は未提出常習犯である。夏休みの宿題は始業式前日にするタイプである。対人援助マガジンは締切日に提出するタイプである。さっさとすればいいものを、数字を扱う作業は苦手なこともあり、手をつけるのが遅いのは私が悪い。しかしなかなか出さないからと言って、ぎりぎりでいいと思っているわけではないし、統計も宿題も軽んじているわけではない。

正直言えば、心理指導員になるまでは、予算を取るのに大事なんだろうなというぐらいは思っていたのだが、正直そこまで大事なものとは思っていなかった。一人ひとりの相談内容を「不登校」「発達」などグループ分けすることに不全感を感じたり、数値化することに

味気なさを感じていたりもした。「これ、状態としては不登校だけど、あれも、これも関係あるし、分類できないなあ」「面接回数が多けりゃいいってもんじゃないでしょ」などと思っていた。

しかし、心理指導員になって 1 年経ったころに、相談員の予算大幅削減という事態になり、「教育相談統計」は、大事なんてもんじゃない、教育相談について理解をしてもらうためにはなくてはならないツールの一つなのだと気づいた。

もちろん教育相談の予算を確保するために議会に提出する、ということはあるが、数を多く出せばいいというものではなく、それ以上に、教育センターでの教育相談の業務内容を説明するときに、数字があるとイメージしてもらいやすいのだなと少しずつわかってきたからである。



☆数値化がイメージにつながる

不登校の子どもと話をしていて、「朝起きられへんからずっと学校行ってないねん」と言われたりする。＜毎日何時に起きてんの？＞＜ずっとっていつから学校行けてないの？最後に行ったんいつ？＞などもう少し詳しく聞くと、午後まで寝ていることは少なかったり、週 2 は放課後に学校に行っていたりする。詳しく数字として聞くと、実際はどんな生活をしているのかのイメージがわきやすい。

抽象的な指示では、不安になりやすい子に「～時～分までは、学校のことについてお話をして、～時～分まではトランプをして遊ぼう」「コップに高さ 5 センチまで水をいれて」など伝えるとスムーズに動けたりすることもある。

教育相談が、誰が何をどのようにしているのかという部分はどうしても可視化できないし、説明もあいまいで抽象的になりやすい。しかし具体的に数字で聞いたり伝えたりするとイメージを共有しやすい。それは、中で何をどのようにしているのか、目には見えにくい教育相談を説明するにも有効なのではないかと思う。

☆A さんからの気づき

それに気づかせて下さったのが事務の A さんだった。A さんと一緒に働くようになって今で 7 年目ぐらいだが、A さんはよく私に質問や提案をしてくださる。「山下先生、先日買ってほしいと言っていたあのおもちゃ、どんなふうに使うの？予備もいるんじゃない？いくつかカタログを見ていたら、こっちが色も豊富にそろっているの、どうかしら？」「検査用紙って高いのねえ！いつぐらいの時期にどれぐらいいるの？消耗品より先にこっちを買っておいたほうがいい？検査は面談より時間がかかって、そのあと親御さんに結果を返したり、学校とお話をするとかあるんだから、ちゃんと面談とは別に回数をカウントすべきだと思う。統計のここに欄を作ってみたんだけど、どうかしら？」など今や、私が思い至らない予算や統計の部分に気づいてくださったり、相談員が快適に活動できるように日々

気を配ってくださっている。

A さんもきっと最初は上から数字を出せと言われて、相談員から集めた数字を打ち込んで表にしていただけだったり、教育相談の予算で買ってほしいという物をそのまま買っていただけだったと思う。

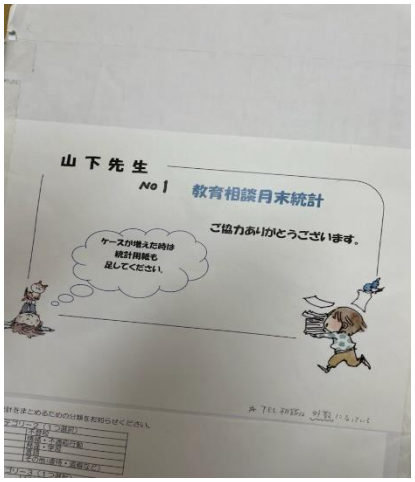


しかし、統計やお金など数字を扱う一方で、プレイルームからもれ聞こえる子どもの声、通ってくる親子の様子、相談員たちの動きなど見ながら、教育相談に興味を持って下さるようになったのだと思う。

そして改めて教育相談に関する数字を見たとき、明らかに A さんの中で教育相談に対する評価は変化した。それもとても好意的に。これは A さんに限らず、同じ教育センターで働く指導主事にも言えることで、教育相談を見ながら教育相談に関する数字に触れることで、教育相談やその予算に興味を持って、疑問があれば私に聞くことで、数字とそれが表す意味をつなぎ合わせていき、イメージが深まっていく。

相談に来られる一人あたりは１ヶ月に数回程度であっても、教育相談全体の数字にすれば、ここ数年、年間ののべ相談件数は 3000 を超える。少なくとも 3000 回以上、誰かが学校生活や家庭生活の中で、困ることがあり、学校では相談、あるいは対応できない事象があって、教育センターで相談されているのである。その数字と実際を見て理解はより深まっていく。

そんな A さんの教育相談への理解と愛は時に心理士よりも鋭くて深い。「この関わり方は、心理的にちゃんと援助になっているのだろうか」と日々迷いながら、他の相談員たちと協力してなんとかかんとか教育相談を行う私のバックには、そんな教育相談への理解が深いＡさんや指導主事、その他心理士ではない多くの方々がついていて、日々温かく見守り、支えて下さっている。





あなたにオススメ「女ふたり、暮らしています。」

2021 年の夏ごろ、Amazon でいつものように猫缶などを購入していたら、あなたにオススメの欄に「女ふたり、暮らしています」という本が出てきた。それまではオススメされるものと言えば、キャットフードやペットシーツと購入履歴に沿ったものばかりだったのに、突然の本。なぜ？と思って見てみると本の帯には「シングルでも結婚でもない、女 2 猫 4 の愉快な生活」と書かれている。なるほど、猫に関する商品の閲覧が高く、女性である、という項目で出てきたのだろう。ちょっと気になり、まんまんと購入する。なぜなら、その時の生活形態がまさに帯と同じ状態だったから――――。



本が届いて読んでみると、『これまでは女と男という原子の固い結合だけが家族の基本だった時代から、多様な形の「分子家族」が生まれていくのではないか。その中で自分たちは W_2C_4（女 2 猫 4）という分子構造でとても安定しているのだ。』という前書きがあり、シングル同士の同居という選択を選んだ 2 名の著者の日々の暮らしがエッセイとしてまとめられている。個人的に自分の生活と被るところが多く、とても面白かったので、今回のマガジンでは、本の雰囲気をパクリつつ、今の生活スタイルを書いてみたいと思う。王道的ではない暮らし方にもメリットや安定性があるんだということを知っていただければ幸いです。

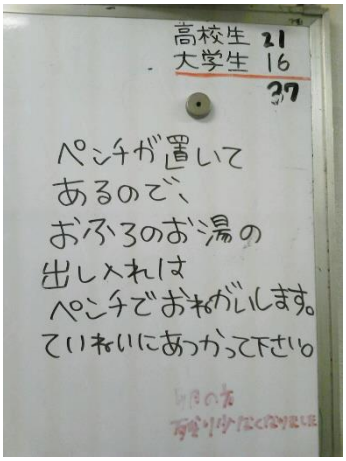
今の私の生活は W_2C_{11}。女 2 人猫 1 1 匹。
正確に言うと、飼い猫 5 匹、里親募集中の保護猫 4 匹、ご飯を食べに通ってくるノラ猫 2 匹の生活である。

※今回のマガジンは、ただのエッセイです。

紹介：「女ふたり、暮らしています」2021,キム ハナ/ファン ソヌ,CCC メディアハウス

境界線のゆるさ・共同？協働？生活

元々、子どもの頃から境界線が緩いタイプだったと思う。他人の領域に立ち入ることも、自分の領域に入ってこられることも気軽で、他人の迷惑ということをさほど気にせず、気軽に友達の家で晩御飯を食べさせてもらったり、そのまま泊まっていったりすることもよくあった。地元静岡を離れて進学した大阪の大学では、バスケ部の寮生活だったので、３人部屋か２人部屋だった。完全に一人の時間というものはトイレ以外なく、同期や先輩後輩とワイワイする日もあれば、特に会話はないけれど同じ空間で何かしている、という共同生活を４年間送った。人によるとは思うが、私の場合狭すぎる共同生活は、空間を時間で区切って複数人でシェアするものではなく、生活そのものをいかに人と重ねて効率よく、楽をしながら豊にしていくかにかけていた。例えば、洗濯。寮生 35 名くらいに対して洗濯機が６台だったので、１台の洗濯機に５人が割り当てられていた。使う順番は先輩後輩に関係なく、完全に早い物勝ちで、帰宅するとまず食堂に行き、帰宅の挨拶をしながら、晩御飯を食べている中に自分の洗濯機班の人が居るか確認し、順番予約をする。「ただいま帰りました。〇〇さん寮番ありがとうございました。△△さん洗濯機、次お願いします！」が全寮生共通の挨拶だった。「ＯＫ！」と返事がくることもあれば、「次は××だよ」と言われ、部屋やミーティングルームに××さんを探しに行く、ということもある。19 時や 20 時に帰宅して洗濯機が５番目になってしまうと寝る時間が遅くなるので、この洗濯機争奪戦は毎日静かな戦いとして繰り広げられていた。１台の洗濯機を時間を区切って５人でシェアするのはいかにも共同生活である。一方で、私は体も小さいし、マネージャー業メインだったので洗濯物の量も少ない。自分ひとりで洗濯機を回すのはもったいないし、めんどくさい。でも毎日洗濯はしたい。そこで、同期のイサに「洗濯一緒に回さない？洗剤は交互に買うことにして、イサの方が洗濯物の量多いから若干お得じゃない？洗濯機の順番待ち２人で協力した方が早い順番を取りやすいし、他の人的にも５人から実質４人に変わるからメリットがあるし。」と提案した。イサはそれいいやん！と提案に乗ってくれ、洗濯協働利用がスタートした。初めは洗濯を交互に回すという話だったはずだが、結局イサの方が洗濯物が多いことや、洗濯ができなかった時に翌日受けるダメージがでかいことから、いつのまにか毎日イサが洗濯を回すときに一緒に小池の洗濯もしている。という状態になっていた。それでも、イサは順番待ち争奪戦が有利だし、洗剤代が浮くからと、機嫌よく私の洗濯を４年間回し続けてくれた。これにより洗濯の煩わしさや手間から完全に解放された。35 名ほどの寮生活も、振り返ると、自分の物や空間をなるべく死守しようとする人、なるべく人と共有して楽しもうとする人、なるべく人に寄生して得しようとする人、色んな生活スタイルがあったと思う。



大学院に進学して初めての一人暮らしを経験したのだが、プライベート空間最高！と感じていたのは最初の数か月だけで、一人ぼっちの空間は逆に集中できず、課題や研究は消灯ギリギリまで大学の研究室でしたり、ファミレスでやったりした。どうぶつ基金に就職してからも、一人職場だったので、出勤して電話では毎日色んな人とやり取りをするものの、面と向かっての会話はゼロの日がほとんどで、人としゃべりたいがあまり休みの日にバスケットボールショップでバイトをしていた。たぶん私はあまり一人暮らしに向いていない。

４匹目の猫？居候生活のはじまり。

どうぶつ基金の仕事をやめ、ノラ猫生活と称してフリーターをしつつ猫に関する相談に乗ったり手伝ったりしている模索期間の中で、ある地域に住むノラ猫７匹の TNR をすることになった。７匹となると頭数も多く捕獲や病院に搬送するのも大変なので、北摂 TNR サポートのらねこさんの手術室の捕獲送迎サービスを依頼することにした。なんと、距離計算の出張交通費のみで、不妊手術の為であれば何匹でも無料で捕獲してくれるという破格のサービスだった（※今は捕獲料がかかる）。その捕獲送迎を依頼したことをきっかけに、のらねこさんの手術室さんとの繋がりができ、病院の経営メンバーである秋本さんと安田さんが飲み誘ってくれた。何をしゃべったかはほとんど覚えていが、すごく楽しくて、もっと喋りたいけど解散の時間が迫っているという中で「１週間泊めてくれるなら、１週間病院タダで手伝いますよ！」という発言が私から飛び出した。それに間髪入れずに「いいっすね！」と秋本さんが返し、2017 年 1 月 21 日～28 日まで、住み込みで病院のお手伝いをすることになった。

中高生の頃、地元では有名なＮＨＫの特集や新聞にも頻繁に登場する動物保護施設があり、２年ほどボランティアとして休みの日に通うことを続けていた。３年目くらいで初めてバックヤードと呼ばれる裏側のシェルターを見せてもらったことがあった。筆舌に尽くしがたい劣悪な飼育環境で、強いショックを受けた。いくら有名でも、テレビに出ていても、ＮＰＯ法人でも、実際に自分の目で見ずに信用することはできないんだと思うきっかけになったエピソードだ。実際に見ると言っても、１時間程度の見学ツアーって本当に何も分からないと思う。限られている時間の中で、しかも特に信頼関係もない中で、見学者に見せられる範囲が限られるのは無理もない。軽く見学した程度で、相手を知った気持ちになるのは浅はかだ。そんな昔からの想いが私の中にくすぶっていて、お酒の力も加わって、腹の中から出



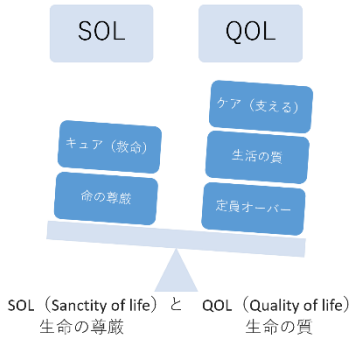
てきた提案が「１週間泊めてくれるなら、１週間病院タダで手伝いますよ！」だったと思う。快諾してくれた秋本さんのノリの良さに感謝だ。

当時、のらねこさんの手術室は、共同代表の秋本さんと安田さん、捕獲送迎スタッフの植田さん、獣医師の村上先生の４人しかおらず、８坪の小さい貸店舗で営業していた。秋本さんの家に泊まり込み、早朝の捕獲から病院内の掃除や入院の猫さんたちのお世話、機具洗いなど初めの３日ほどはただただ受け身に日々の仕事を覚えながら手伝わせてもらった。後半にさしかかってくると、少しずつ病院の大変そうなところが見えてきた。領収書兼明細書がすべて手書きだった為、精算にかなり時間を取られていたこと、毎月の手術頭数計算が手計算になっていること。他には、日々の予約管理がすべて病院の手書き台帳に集約されており、捕獲送迎に出ながら電話を受けている秋本さんの車には、予約台帳に書くための付箋が十何枚も張り付けられている状態だったこと。アナログなために膨大な時間が取られてしまっている部分を簡単なIT化をするお手伝いであれば、力になれそうだと思った。そこで、後半は領収書のエクセルテンプレートを作成したり、オンラインで日々のスケジュールを各スタッフが管理編集できるものを作ったりさせてもらった。

寝泊りさせてもらっていた秋本家は、一人暮らしにしては広く（かつては彼氏と同棲していたが、別れてかも仕事が忙しすぎて引越しをする余裕が無く、今の広い家に住み続けている状態だったらしい)、飼い猫が３匹いた。その中のワープさんという女子は、秋本さんが他の猫の臭いが強くついている物を持って帰ってくると、マーキングのごとく、それにおしっこをする、という異物に厳しいタイプだった。実際、初日は朝、足元が冷たい・・と思って起きると布団の足元におしっこをされていた。少しずつワープさんとの距離も縮まり、数日後はお腹の辺り、そして最後には布団で寝ていたら顔面におしっこをされて飛び起きる、という夜をハイライトに、ワープさんにとって“異物”から“知っている臭いの人間”に昇格したのか、おしっこされなくなった。それどころか、夜は布団で添い寝してくれるようになった。実家暮らし頃は当たり前のように、夜はかならず猫が布団に入ってきてくれて一緒に寝ていた。柔らかくて暖かい猫に触れながら眠ることはこの上ない幸せで、それを思い出し涙が出そうだった。



秋本さんとの個人的なやり取りでは、移動中の車の中や、帰宅して就寝するまでの間中、ずっと喋っていた。自分の動物観、人生観、趣味や猫に人生をささげたいと思うきっかけになったエピソードなど、色んなことを喋りつくしても、１週間経って感じたことは「もっと喋りたい」だった。同じように猫の活動をしている人でも、SOL（命の尊厳）とQOL（生活の質）のバランス感覚は人それぞれである。これがなかなか同じ感覚の人には



出会えないのだが、これまで自分が出会った活動家の中で、秋本さんは一番近いような気がした。

１週間が終わっても、もっと住み続けたいと思った私は「猫のお世話もするし、猫の遊び相手にもなります。自炊レベルなら料理もします。掃除は苦手ですが、４匹目の猫を飼ってみるのはいかがでしょうか？」という売り込みで、居候生活延長の交渉を行った。これまた「いいっすね！」と軽くＯＫを出してくれた秋本さん。居候先ゲット。西宮市にあった自分の６畳一間のマンションと秋本家の２拠点生活が数か月続いた頃には、居心地が良すぎて９８％秋本家に住んでいるようになっていた。そうなると、自分の家の空家賃を払い続けているのも勿体ないので「あの、自分の家引き払ってもいいですかね？」と聞いたところ「うん」とあっさり返ってきたので、１年目には完全な居候に進化し、気づけば３年も続いていた。



それぞれの得意と不得意

私は物を散らかすことが得意で、掃除や整理整頓が苦手だ。自慢じゃないが、その辺に散らかっている物を辿ってもらったら、コナン君じゃなくてもその日１日、私が家で何をしていたか推理することができると思う。掃除とは皆嫌いだけど理性で頑張っているものだと思っていた。しかし、秋本さんと暮らしてみて、散らかっているものを何もなかったかのように収納すること、料理でダメージを受けたシンクをまるで新品のごとく磨きあげることに快感を覚えるタイプの人が存在するのだという事を知った。趣味は断捨離、家の中に生活感を出したくないという。家なのに。私がカップラーメンを食べようと思い、ラーメンの蓋を止める付属のテープをキッチンのカウンターに貼ってお湯を注ぎ、振り返ってテープを貼ろうとしたらもう捨てられている、という事は日常茶飯事だ。一方で、食にはあまりこだわりが無く、コンビニの唐揚げとか、自炊をしてもソーセージと練り製品しか入っていない鍋とかなかなかワイルドな食生活をしていたので、薄味派で割と野菜が好きな私が料理を担当するようになっていった。

散らかすことと、ご飯を作ることは私の担当で、片づけることと、食べることが秋本さんの担当、猫は２人で最大限可愛がる。という絶妙な分担が自然とできていった。性格が真逆なおかげで奇跡的に合っていた私たちは、喧嘩をすることもなく確実に生活の質が上

がった感覚を持ちながら日々暮らしていた。

飼い猫の QOL を考える

居候生活の 3 年間で、大ケガや病気が原因でノラ猫生活には戻すことができないうえに、里親譲渡も難しい子が 2 匹仲間に加わり飼い猫は 5 匹になった。私の母親は、DV 被害者の支援をする活発な活動家だった。大人になった今では、母親の活動は社会的意義が大きく、多くの女性や子どもの為に多くの時間を使っている素晴らしいものだと思う。ただ、子どもだった自分からすると、自分の家のことは後回しで、他人のお世話ばかりしている母。というように、寂しい気持ちから反抗的な気持ちを持つことも多くあった。経済的に恵まれていても、愛情をもらっていても、子どもにとっては家が世界であり、他の子どもたちの境遇と比較して、自分がいかに恵まれているのか理解するのは難しかった。家をあけがちな活動家の子どもの寂しさを知っている自分にとって、自分の飼い猫ができたら、なにより優先して飼い猫を大切にしたいという気持ちが強くあった。猫からしたら、飼い主の活動の社会的意義もクソもなく、飼われている室内の空間と飼い主だけが世界だ。飼い猫すら幸せにできない人がノラ猫の幸せを作れるわけがないと思っていた。
飼い猫の QOL を考える―。

それなりに広い家、室内で育てる猫草。もっと自由空間をと、大きなキャットタワーを手作りした。休みの日には猫感謝デーを設定し、おいしいおやつを用意したり、オモチャで遊びまくったり・・悪くはない環境だと思うものの、もっと猫の生活の質を上げられないものか、と常々話し合っていた。実家が田舎な私も秋本さんも、子どもの頃は外中自由な飼い方をしていた。木に登り、虫を追いかけ、草を食べる。土の上でゴロゴロして、たまに喧嘩をして帰ってきては甘えん坊になる・・そんな猫の生き生きした姿をどうしても忘れられず、できれば「外で遊ばせてあげたい・・」という願いが日に日に膨れ上がっていった。ただ、マンションの 2 階から猫を外に出すことは危険すぎるし、実家のような田舎ならまだしも、普通の街中で外中自由飼育をすることは確実に猫の寿命を縮めてしまうことになる。飼い猫の命に責任を持ちつつも、外に出してあげられる環境、つまりキャットランを作れる広い庭付きの田舎の家に引っ越したい！ということで、物件探しが始まった。



物件探し

物件探しは予想以上に大変った。不動産屋さんに行っても、「お二人の関係は？」と聞かれ、「今のところ人生のよきパートナーです」みたいに答えてみても「あーシェアハウス可物件でしぼらないとですねぇ」というような回答になる。シェアハウスとか同棲カップルとかそんな気軽な雰囲気のカテゴライズをされることに腹立たしく感じ、猫と自分たちの今後の人生の為に大きな決断をしたいと腹をくくっている私たちの覚悟を伝えたくても、担当者には届かないようだった。大手はダメだと、家の近くにあったとても小さな不動産屋さんに行ってみることにした。予約なしの訪問だったが、「どんな条件の家に住みたいんですか？」とゆるく対応してくれた。「職場から車で３０分圏内で、庭があって、猫の５匹飼ってよくて、ＤＩＹとか好きにさせてもらえて、できれば平屋で、賃貸がいいです。」というと「そんな物件ないよ。でももしも条件に合うような物件が入ったら連絡しますね」と一応連絡先を聞いてくれた。そんな物件ないよと即答され落ち込んで帰宅した私たちだったが、翌日に不動産屋さんから「ありましたわ！平屋じゃないんですけどね」と電話がかかってきた。「平屋じゃなくても全然いいです！！」とさっそく次の休みに物件を見に行くことにした。これ以上進んで大丈夫なのか不安になる道を進んだ行き止まりにその家はあった。正面はうっそうと茂る木々で日陰がちなのか、苔むした雰囲気でまるで森の中の家という感じ。裏庭は車を１０台は軽く停められるくらい広く、一面に菜の花が咲いていた。大阪万博の前に建てられた物件で、今の法律の耐震基準に合うかどうかの記録がかない為、違法物件というくくりになってしまうらしく、ずっと売りに出ていても買い手がつかなかったそうだ。今回の私たちの提案を聞いて、不動産屋さんが大家さんに賃貸で貸してみてはどうかと提案してくれたらしい。物件に一目惚れし、契約を進めることになった。２５年以上空き家だった為、下水をつなげるところから工事が必要だった。下水や床と屋根といった最低限のところは大家さんが改修してくださり、それ以外のリノベーションはこちらで費用を負担すること、家賃は月々６万円ということで交渉がまとまった。リノベーションは２人の貯金を使いきるほどの人生で一番大きな買い物になった。後から変わったことだが、大家さんも、不動産屋さんも、リフォーム会社さんもノラ猫にご飯をあげたり、TNR をしたりしており、この物件きっかけで大家さん宅にご飯を食べに通っているノラ猫７匹と、不動産屋さん宅に通っているノラ猫１匹 TNR を手伝った。リノベーションは大きな買い物で不安もあったが、関係者が全員が猫好きだということが分かり、これは猫神様の采配だから大丈夫だと安心できた。



契約から約半年後に家のリノベーションが完成し、念願の引っ越し。予算の関係でものすごく広いわけではないが、念願のキャットランも完成した。約３メートルのフェンスの上部 80cm はアクリル板を張って登れないようにしている。猫たちを外で遊ばせてあげられる喜びを噛みしめている。広い縁側と大きな窓があるので、外を眺めているのも楽しそうだ。２階建ての物件だったので、２階の１室を保護猫部屋にすることができ、活動の幅も広がった。





お互いの親もこの強固になった協働生活を喜んでくれており、何か仕送りの物資が届く時はいつも２人分入っている。でも結婚関係のように相手の親へお礼や気遣いはいらないので、秋本さんが親と電話している時に「美味しかったですー！！」と明るく感謝を伝えれば十分だ。現状２人とも自営業のような形なので、あまり不便などは無いが、もし自分が事故や病気になって大手術が必要になったら、田舎から両親を呼び出すよりも、付き添いや意思決定の代行はできれば秋本さんにしてもらいたいと思う。ただ、今の日本では私たちの関係は「知人」や「友人」の域を出ないことを少し不安に思う。「女ふたり、暮らしています」の著者は、本の締めに“婚姻や血縁によって結ばれている伝統的な家族の形に合わない家族の形がきっと増えることだろう。―中略―　個人が喜んで誰かの福祉になるためには、法と制度の助けが必要だ。以前とは違う多様な形の家族が、より強く結ばれ、もっと健康になれば、その集合体である社会の幸福度も高まるだろう。”と結んでいる。本当にそうだと私も思う。

今は飼い猫が５匹と、里親募集中の保護猫が４匹、ご飯を食べに通ってくるノラ猫が２匹、合計１１匹と秋本・小池で一緒に暮らしている。Ｗ２Ｃ11 が今の私の大切な家族だ。

おわり



小池英梨子
ねこから目線。～保護猫とノラ猫専門のお手伝い屋さん～　代表
NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク
「人もねこも一緒に支援プロジェクト」　プロジェクト代表
ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com

先人の知恵から
37

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

「さ」行がもう終わるところまで来た。やっと三分の一くらいか？少しずつスピードアップを目指そうと思ってはいるが中々思うようには進まない。先に掲載したものと同じような内容にならないように、チェックをするのがだんだん大変になってきた。それでも最後まで何とか頑張ろう。

今回は「せ」のところから以下の８つ。

- **尺蠖の屈するは伸びんがため**
- **切磋琢磨**
- **節制は最良の薬**
- **雪中の松柏**
- **せつない時は親**
- **窃鉄の疑い**
- **背に腹はかえられぬ**
- **狭き門より入れ**

＜尺蠖の屈するは伸びんがため＞

将来大きく飛躍するためには、しばらく我慢して時機を待つことも必要であるということ。尺取り虫が体を縮めるのは、次に体を大きく伸ばして前進しようとするためであるという意から。思うようにいかなかったり、他に後れを取ったりして自信を失っているものを励ます場合などに言う。尺蠖＝尺取り虫。「しゃっかく」とも読む。

出典　易経

尺取り虫は例としてわかりやすい。縮んで伸びてを繰り返して前に進む。時には立った状態でどちらに行くか迷っているように見えるときもある。人の成長、発展を見ていると、尺取り虫と重なることが多い。

兎角親というものは、子どもに多くを期待し、焦りやすい。ちょっとでも滞っているとすぐはっぱをかける。しかし、子どもには

子どものペースがある。身長が伸びる時も、少し横に太ってからずんと伸びる子も多い。一人ひとり伸びる時期、伸び方は異なる。勉強などについても同様。中々点数が上がらない時があって、そこであきらめずに努力を続けていると、突然ぐんと伸びる時がある。その時を待つことも大事。大きくジャンプするためには大きく縮んで、飛び上がるのと同じである。時代は変わっても、親にかける言葉は変わらない。焦りがちな保護者にこの言葉を伝えることが多い。

＜切磋琢磨（せっさたくま）＞

学問・道徳・技芸などを磨き上げること。また、仲間同士が互いに励まし合い、競い合って向上をはかる事。切磋＝玉や石、骨などを切って、やすりなどで磨くこと。琢磨＝玉などを細工して研ぎ磨くこと。

出典　詩経

この言葉は有名で、努力する必要がある場面では、教師や指導者がよく使う。この言葉は、「よく学び、頑張れ！」という意味だけではなく、仲間同士が互いに励まし合うという意味がある。競い合って向上をはかる事という意味もある。その意味を忘れがちで、ついつい「努力」「頑張る」ことばかりに使われる。励まし合う仲間の大切さ、一人だけで孤独に頑張るのではなく、仲間と一緒に、支えあい、認め合いながら向上することが大切である。仲間がいることで、より視野も広がり、様々な視点から物事をとらえられることにもつながる。一人で頑張っているだけでは限界があるのだ。仲間と話しながら、互いに高めあうことが、より大きな成長に繋がる。子どもたちに、仲間を作ることの大切さを伝えるためにこの諺を使っている。

＜節制（せっせい）は最良の薬＞

日頃から体のためによくないと思うことを謹んで、健康に気を配り日々を暮らすのに勝る健康法はないということ。英語の諺が語源。

この諺は、外国から輸入された格言である。日本人は全体に薬を飲みすぎる傾向にあるといわれている。体を健康に保つためには、できるだけ薬を使わずに、日ごろから調子を整えることが大事である。体の様子に気を配り、脳に騙されずに体の様子に従って、休養を取ったり、食を制限したりすることで、健康体を維持できる。しかし、多くの人は、体のことを無視して、「まだ大丈夫」「まだ頑張れる」と無理をし、相当悪くなってから病院に行くため、結局薬の世話になっている。

鬱で相談にいらっしゃる方など、ほとんどがこのタイプである。まじめで頑張り屋さんだからこそ、体は悲鳴を上げているのに、無視して頑張って、中等度以上の鬱の状態でカウンセリングに来談される。

子どもたちにも同じことが言える。おなかが痛くなったり、頭が痛くなったりしていても、市販の薬を使ってごまかしていれば、悪化する。学校不適応を起こして、この症状が出ているのなら、休むことが第一である。休んで元気になる事のほうが、無理し

て学校に行って悪化させるより良いのだということを、保護者にわかってもらうと、子どもたちは大抵元気になる。頑張ればなんとかなるというのは昭和に育った人たちには通じるが、平成以降に育っている若者たちにはあまり通じないということも、我々支援者は知っていなければならない。

何事も、頑張りすぎはよくない。「過ぎたるは及ばざるが如し」の諺と一緒に使うことが多いように思う。

英語では・・・

Temperance is the best physic.

＜雪中の松柏（せっちゅう　しょうはく）＞

節操が極めて堅いこと。また、人の値打ちは困難に出会ってはじめてわかるたとえ。松や柏は常緑樹で、寒い雪の中でも葉の色を変えないことから。

出典　謝枋得（しゃほうとく）

子育て中の保護者にとって、日々、困難の連続という方も多い。子どもたちの反応に右往左往してしまう。子どもたち自身が、いろいろな刺激や出来事の中で、右往左往しているのに、保護者も一緒に動揺していては、収まるものも収まらない。

動揺している保護者の面談の際に、この言葉を出して説明している。「どんと構える」ことの大切さを。世の中、大抵のことは「何とかなる」のだ。

＜せつない時は親＞

苦しくなったとき、頼りにするのはやはり親であるということ。また、苦境に立った時、親を口実に使って逃れること。

親子関係が悪いという保護者にちょくちょく出会う。保護者自身、自分の親との関係が悪いことも多い。子どものことで相談にいらしていても、「今思えばあれは虐待だった」とか「自分は愛されていなかった。」「姉や兄との比較がひどく、扱いも違った」等々、自分の親への恨みつらみを話し出す。親との関係は悪くても、お産扱いでとりあえず実家に里帰りした方もいるし、全くかかわりのない方もいる。親を憎み、排除し、断絶している人もいるが、心の奥底では、親を求めているのがわかる。

親と改めて対峙する方もいるが、親は歳をとって、今更過去のことを言われても覚えてもいないし、喧嘩になってしまうこともある。ただ、自分の思いを吐き出すことで、うまく処理ができる場合もあるし、孫の出産を機に、関係性が修復するケースもある。

たとえ虐待した親であっても、親は親。子どもにとって、どんな親でも、親である以上、関係性を完全に断つことは難しい。辛い時に、話を聞いてくれるだけでも親はありがたい存在なのである。ただ、聞いてくれればよいのに、「もっと頑張れ」「だらしがない」と非難するようでは、愚痴もこぼせなくなり、若い母親たちが追い込まれてしまう。そういう時は「近くの他人」のほうがよほど頼りになるが、心の奥底では、やはり、親を求めているのだということを、親たちに知ってほしい。

＜窃鈇（せつぶ）の疑い＞

何の証拠もなく人を疑うこと。何事も疑いだすときりがないことのたとえ。

出典　列子

最近は SNS での誹謗中傷が兎角問題になりやすいが、それゆえに、子どもたちは余計過敏になっていて、ちょっとしたことでも、「嫌われたのではないか？」「この言葉は私を非難しているのではないか？」などと不安が増大してしまう。ひとたび、マイナスにとらえると、次から次へとマイナスな要素を探し出すのは得意な様子で、際限がない。「思えばあの時のあの言葉も、私のことが嫌いだから言ったのだ」と過去のことまで穿り出して、探し出す。そんな時にこの言葉を伝える。今のあなたの状態はこれであると。

信じて裏切られて傷つくのが怖いからと、人を信じない子も増えている。人間傷つかなければ大きくも強くもなれない。傷つくことを恐れていてはいけない。「人を信じて、裏切られて、自分だけが傷つくことで済むならそれでよい。」と思えると、強くなる。人を疑って孤立するより、人を信じて、人の中にいるほうが、人の信じ方も学べるし、自分の守り方も学べるのにと思う。

過敏な現代の子どもたちにこの言葉を送りたい。

＜背に腹はかえられぬ＞

大切なことのためには、ほかのことが犠牲になるのもやむを得ないというたとえ。また、「背」を他者に、「腹」を自分自身として、切羽詰まっては、どうにも他を顧みる暇がないことのたとえにも使われる。同じ身体の一部でも、大事な内蔵の入っている腹を、背中を守るために犠牲にすることはできないの意から。「背中に腹はかえられぬ」ともいう。

出典　いろはがるた（江戸）

何が今大切かと問うと、うまく答えられない人が多い。あれもこれも大切で、どれも捨てられないのである。別に捨てろというわけではなく、何を第一に考えるかということを問うているのである。

例えば子どもが不登校になると、保護者は焦って、何とか学校に行かせたいと思ってしまう。学校に行ってくれればそれで良いのか？学校に行くことは、子どもの命を守る事よりも大事だろうか？

子どもは、なぜ学校にいけないかをうまく説明できないために、ただの「わがまま」、とか「根性なし」などと思われて、引きずられ、無理やり車に乗せられて学校までくるものの、頑として車から降りないなどということは、ごく普通の光景になっている。

学校に行かないことで困るのは、本人自身であるが、保護者の面子の問題のほうが大きいのではと思う。子どもが不登校になるのは、親の育て方の問題だと思っているから、余計に子どもを無理にでも学校に行かせようとするのだろう。

確かに、子どもたちもわがままにはなっているかもしれない。しかしそれは、世の中全体、社会全体が、子どもに甘くなっているからでもある。

自分の家だけの問題ではない。

大切なのは、子どもの命である。子どもが

自殺してしまうこの時代、学ぶことは後からでもできるが、命は一つしかない。生きること、生きていること、生きていけること、そこを第一に考えていくと、不登校など大した問題ではなくなる。

平和な時代、平和な国で生活しているからこそ、学校のことが問題になるが、ウクライナのように、生きるか死ぬかの世界にいる人にとって、学校に行くことなど３の次の問題なのだ。

英語では・・・

Better the purse starve than the body.（胃の腑が空になるよりも、財布が空になるほうがよい。）

＜狭き門より入れ＞

ことをなすのに楽な方法をとるよりは、難しい苦しい方法をとるのが自分を鍛え上げるのによいということ。

出典　「新約聖書」また遺伝第７章

前述の通り、日本は平和で、命の危険に脅かされることは少ない。もっとも今はコロナの問題はあるが、それも軽症で済む人が多いので、そこまでの問題でもないかもしれない。早く飲み薬ができてほしいものだ。

話が逸れたが、子どもたちが二言目には、「めんどい」ということに危惧を覚えているのは筆者だけであろうか？

小さい時から、車での送り迎え、好き嫌いは言い放題、何でも欲しいものを与えられてきた子どもたちが多い中、面倒なことをコツコツと頑張ることが苦手になっているように感じる。

楽を覚えてしまうと、苦しいことはどうしても苦手で避けるようになる。だからこそ、小さいうちは、面倒なことをコツコツさせることが大切である。それを、タブレットを使い、インターネットで調べ、あっという間に物事を調べられるような時代になってしまうと、国語辞典を端から引いたり、中々答がみつけられずに、図書室に行って調べたりという、面倒なことをしなくなる。

便利さというのは、大人のために必要なものであるが、子どもには不便さが必要に思っている。そんなことから、この言葉を、保護者たちに伝えている。以前にも同様の言葉を載せているが、いろいろな言葉があるのでここでも載せさせてもらった。世界共通の言葉でもあるから。

英語では・・・

Enter by the narrow gate.（狭き門より入れ）

出典説明

易経・・十二編・

周代の占いの書。儒教の五経の一つ。経文とその解説書の「十翼（じゅうよく）」を合わせて十二編より成る。陰と陽を組み合わせて八卦、これを重ねた六十四卦によって、自然と人間の変化の法則を説いた書で、中国の哲学思想のもとになった。作者として、周の文王（ぶんおう）、周公（しゅうこう）、孔子があげられるが確かではない。

詩経・・・

中国最古の詩集。五経の一つ。孔子が約三千の古詩の中から選んで成立したと言われるが未詳。紀元前十世紀から前六世紀ごろまでの詩三百十一編（内六編は題名のみ）を収録。風（国風ともいう。民謡）・雅（宮廷の祝宴歌）・頌（祖先を祭る歌）の三部構成。

儒教の教典。『論語』『孟子』『大学』とともに

いろはがるた・・・

「いろはがるた」は江戸時代後期に始まったといわれ、いろは四十七字に「京」の字を加えた四十八字を頭にして諺の内容を絵解きした絵札の，計九十六枚を一組として遊戯にしたもの。主に子どもが正月に遊ぶ。

各地で内容が異なっていることがある。今回出した「す」のカルタは京都のもので、江戸では「粋は身を食う」、大阪や名古屋では「墨に染まれば黒くなる」となっている。

謝枋得・・・

1226 年～1289 年は、中国南宋末期の政治家・学者。字は君直。号は畳山。諡は文節。信州弋陽県の出身。中国南宋の政治家・学者。

人柄は豪壮にして博覧強記で直言を好み、常に古今の国家存亡について論じた。宝祐４年（1256 年）に進士に及第し、撫州司戸参軍に任命されたがすぐに辞任し、呉潜に従って民兵を集め信州を守る。宝祐５年（1257 年）に賈似道を誹謗した罪で興国軍に左遷された。徳祐元年（1275 年）にモンゴル軍が南下すると長江沿岸の防備を任され、南宋を守るために奮闘したが大勢を覆すことができず、国の滅亡を見ることとなる。姓を変えて諸国を遍歴し、売卜（占い）を業としながら、弟子が多くなったので閩中に住居を定め、元のクビライの旨を受けて程鉅夫から招かれたが自分が「亡国の大夫」であるとして拒絶。至元25年(1288年）第５回目の人材招致があり、魏天祐に強要され燕京に赴く。死を覚悟した謝枋得は妻子知友に七言律詩を示し、道中から絶食し翌年４月に燕京到着直後に没する。絶食死であった。

以下詩の前文。

雪中松柏愈青青　雪中の松柏は愈（いよいよ）青青

扶植綱常在此行　綱常を扶けて植(た)てるは此の行（たび）に在り

天下久無襲勝潔　天下久しく 襲勝の潔なし

人間何獨伯夷清　人間何ぞ独り伯夷のみ清からん

義高便覺生堪捨　義は高く便(すなわ)ち覚ゆ 生の捨つるに堪えんと

禮重方知死甚輕　礼は重く方に知る 死の甚だ軽きを

南八男兒終不屈　南八は男児にして 終に屈せず

皇天上帝眼分明　皇天上帝 眼は分明

困難な環境にも耐えていける節度をもとう。人のふみおこなうべき道徳をしっかりと打

ちたてるのは、今回の旅路（の目的で）ある。
世の中では、ずっと龔勝（きょうしょう）のような潔さは、無かった。
この世で、どうして伯夷だけが清らかなのだろうか。他に人材はないのか。
義とは、高いものであって、「生」を捨ててもよいと、自覚している。
南斉雲は男の中の男で、最後まで屈服しなかった。
天にいます天帝のまなこは、はっきりとあきらかに見抜いておられる。（以上「詩詞世界」より）

列子（れつし）・・・八巻

中国、戦国時代の思想家。名は禦寇（ぎょこう）。老子よりあと、荘子より前の時代の道家といわれ、虚の道を得た哲人と伝えられるが不詳。『列子』八巻の著者とされるが異説も多い。

新約聖書・・・

期限世紀から２世紀にかけてキリスト教徒たちによって書かれた文書。「旧約聖書」と並ぶキリスト教の正典。また、イスラム教でもイエス（イーサー）を予言者の一人として認めることから、その一部が啓典とされている。「新約聖書」には２７の書が含まれる。キリストが生まれる前までを旧約聖書、イエス生誕後を新約聖書がまとめている。マタイによる福音書、マルコによる福音書、ルカによる福音書、ヨハネによる福音書がある。

うたとかたりの対人援助学

第 23 回「ユニバーサルデザインとしてのうたとかたり」

鵜野　祐介

1．私にとっての対人援助学

対人援助学会の HP には次のように記されている。「対人援助学（Science for Human Services ）とは、これまでの学問領域を超えて、広く『人を助ける』という実践的行為について、その作業を当事者の決定を軸に過不足なく行うための方法を考える新しい領域です」。分かるような、分からないような定義だ。

大学院生だった 1980 年代後半以来、子どもの遊びや口承文芸（口伝えのうたやかたり）の調査研究を行ってきたが、これを「対人援助学」という観点から考えてみるという発想は、2013 年 4 月に立命館大学に赴任し、「対人援助学の創造」をポリシーとして掲げる大学院応用人間科学研究科の配属となるまで、私の中に全くなかった。

「対人援助」という言葉は「似非（えせ）ヒューマニズム」や「偽善」などのマイナスイメージとも結びつきかねない、なかなか厄介な言葉だ。また、2013 年 4 月と言えば、東日本大震災の 2 年後であり、被災地支援、復興支援といった「支援」が一種の流行語になっていた頃である。時流に乗らないことをモットーとしてきた私にとって、時流に乗ることそのものとも思える「対人援助学の創造」にどう関わっていくべきか、見通しの立たないままの出発だった。

しかし、文学研究科に移るまでの３年間にこの研究科で出会った院生たちとの対話や交流の中で、私にとっての対人援助学のイメージが具体化していった。看護師、介護士、学校教師、スクールカウンセラー、僧侶……、様々な「対人援助」の現場体験を持つ院生たちがいた。そして、彼ら／彼女たちがうたやかたりに何らかの力があると実感していた。それは何だろうと一緒に考えていくことになった。

また、大学時代の同級生・村本邦子さんがこの研究科で教えており、東日本・家族応援プロジェクトのリーダーとして活動していることを知り、これに参加して毎年秋に現地へ足を運び、うたやかたりの活動をしていったことも大きかった。

今、私が考えている「うたとかたりの対人援助学」を一言でいえば、うたやかたりによって、人と人のこころがつながるという現象を、できるかぎりその現場に立ち会って確認し、そのメカニズム（仕組み）を解明しようとすることである。では、人と人のこころがつながることを容易にするための条件とは何だろうか。この時、思い浮かぶのが「ユニバーサルデザイン」という発想である。

2．ユニバーサルデザインとは何か

「ユニバーサルデザイン[略号UD]」という言葉は、アメリカの建築家で、ポリオによる障がいのため酸素ボンベを携帯し車椅子生活を送っていたロナルド・メイス氏によって、1974 年にはじめて提唱されたとされる（ばばこういち他『UD革命　思いやりの復権』リベルタ出版 2008 年 72 頁）。

停電、災害、怪我などによって、誰もが障がいを持つ状況に陥る可能性はある。したがって製品や建物や空間のデザインをする場合にはあらかじめ障がいを持つ状況を想定しながら利用しやすいデザイン、「ユ

ニバーサルなデザイン」を行うよう心がけるべきだ、こうメイス氏は提言した。

それまで用いられていた「バリアフリー」という言葉が、モノや建物が持っていたバリアをなくすために、既成のモノや設備の一部を障がい者や高齢者のために改良するという考え方を表すのに対して、高齢者も子どもも障がい者も、できるだけ多くの人びとが使えるようにあらかじめ想定してデザインするという考え方が、「ユニバーサルデザイン」である。

メイス氏が発表した「UD七原則」、①公平性…誰もが公平に利用できる、②自由度…使ううえで柔軟性に富む、③単純性…簡単で直感的に利用できる、④情報理解性…必要な情報が簡単に理解できる、⑤安全性…単純なミスが危険につながらない、⑥省体力性…身体的な負担が少ない、⑦空間確保性…接近して使える寸法や空間になっている、これらは世界中のさまざまな企業や組織に規定されたUD原則の下敷きになっているという（同 74 頁）。

日本におけるUDは、1990 年代の半ば、当時の三重県知事・北川正恭氏によって、県民の参加と相互の対話を旨とする「デモクラシー」の核心となる思想として紹介され、その後、改革派の自治体や新たな市場創出を目標とする企業の間で急速に広がったとされる（同 9 - 11 頁）。ばばこういち氏は、北川氏の考えに依拠しつつ、UDを単なるデザインの方法論としてではなく、「対話と参加」「相手の立場で考える」「思いやり」「損を担う」「協調」といった理念を内包する「思想」として捉えるべきだと提案する。ばば氏に倣い、この小文でも、年齢・性・障がいの有無・民族や国籍などによる違いを超えて通用する「ユニバーサル（普遍的）」なデザインを考案し普及させようとする発想そのものが、人びとの生き方を変え、心豊かな社会を築いていくという、「思想としてのUD」の立場から、うたやかたりについて考えてみたい。

3．UD七原則からみた子どものうたとかたり

ユニバーサルデザインという観点から眺めてみると、子どものうたには、前節で紹介したメイス氏のUD七原則がよくあてはまることが分る。①公平性…子どもも大人も公平に利用できる。②自由度…気分や状況に応じて、どんなふうに歌っても構わない。柔軟性に富んでいる。③単純性…メロディも歌詞も比較的単純なので、誰でも簡単に歌うことができる。④情報理解性…子どもでも意味が分る言葉が用いられているため、その内容を理解しやすい（但し、もっと深い別の意味が隠されている場合もある）。⑤安全性…たとえ暴力的な恐ろしい内容が歌われていても、歌い手や聞き手の身は安全である。⑥省体力性…うたを歌うことも聞くことも、本人が体力の消耗、つまり体を動かして歌ったり聞いたりすることを望まなければ、身体的な負担は少なくてできる。⑦空間確保性…歌い手と聞き手の間の距離は、すぐそばでも少し離れていても構わない。

また、この七原則は、子どもたちに向けて語られる、昔話をはじめとするおはなしにもあてはまると言っていいだろう。絵本や紙芝居、テレビやビデオ、タブレット端末のような、伝達の媒体となるハードウェア（道具）は必要ない。声（身体）さえあればいいのである（ろう者にとっては手話が〈声〉となる）。

2007 年に「日本語り手の会」の招きで来日し、全国各地で語りのコンサートを行った英国スコットランドのストーリーテラー、デイビッド・キャンベル氏は、コンサートの最初に次のような「なぞなぞ」を出していた。「**これは決してこわれたりすりへったりしません／なくなってしまうこともありません／自分でずっと持っておくこともできるし／誰かにあげることもできるけど／誰かにあげた後もまだ持っていられます／人にあげればあげるほど／もっといいものになっていき／人にあげなければ何の意味もないもの、なあんだ？**」、答えは「**おはなし（ストーリー）**」。

こうして、子どものうたやおはなし（かたり）は、UDとしての必要条件を満たしていると言えるが、それだけでは十分ではない。つまり、便利さや使いやすさだけではその商品や施設を進んで使おうとする人はいないのと同様に、内容が理解できるというだけでは誰も見向きもしないであろう。進んで「歌いたい」「聴きたい」と思わせる魅力が、そのうたやかたりの中身として詰まっていることが求められる。

見方を変えれば、うたやかたりの行われる状況、聞き手の年齢や健康の状態、季節や時間帯、人数などに

よって、その状況にふさわしいうたやかたりが選ばれるべきであるということであり、実際そのように行われてきた。つまり、「子どものうたやかたりがユニバーサルデザインを備えている」とは、ある特定のうたやかたりが、誰にもいつでもどこでも喜んで受け入れられるという意味ではなく、一期一会のその場にふさわしいうたやかたりが、歌い手／語り手と聞き手の共同作業によって発見され、再創造されるという意味だと理解されるべきだろう。

4. 言霊（ことだま）と歌霊（うただま）

今日の日本において、「おはなし会」や「昔話を語る会」といえば、もっぱら子ども向けのもの、せいぜい観光客の大人たちを対象とするもののように思われているが、つい数十年前まではそうではなかった。出産の前後、産婦や新生児に産婆が語って聞かせるおはなしや、通夜の席で夜通し語られるおはなしもあった（野村敬子『語りの廻廊　聴き耳の五十年』瑞木書房2008年216-217頁）。

また戦国時代には、合戦前夜、武将や兵士たちにおはなしを聞かせる「御伽衆（おとぎしゅう）」と呼ばれる人びとがいたことが知られている。つまり、「おはなし（かたり）」とは決して子どものためだけのものではなかったのであり、人生の大きな節目、いのちにかかわる大切な局面において体験されるものだったのである。それはおそらく、言葉にたましいが宿っており、おはなしを語る人のたましいが、言葉のたましいにのり移り、聞く人のたましいに呼びかけ、想いが届けられるという、「言霊（ことだま）」の観念に基づく「魂呼（たまよ）ばい」のかたりとして伝承された習俗であるに違いない。

「うた」もまた、誕生・結婚・死（葬礼）など、人生の重要な局面において演じられてきた。例えば、酒井正子氏が長年にわたって調査してこられた奄美・沖縄の「哭きうた文化」はその典型例であろう。与那国島では子守唄とよく似たメロディで弔い唄が歌われたという（酒井正子『奄美・沖縄　哭きうたの民族誌』小学館2005年204頁）。子守唄は、あちらの世界（冥界）からこちらの世界（顕界）へ来たばかりの新生児のたましいや、死ぬほどの痛みを経験した産婦のたましいに向けて歌われる。一方、弔い唄は顕界から冥界へ移ったばかりのたましいに向けて歌われる唄であって、二つの世界の〈あわい〉にあるたましいに対して呼びかける唄と言う意味で両者は共通する。

そしてここには、歌い手のたましいが、うたのたましいにのり移って、聞き手のたましいに呼びかけるという考えが見られる。このような「うたのたましい」を小島美子氏は「歌霊（うただま）」と呼んだ。「どうやら歌には何か力があると私たちは感じている。その力を私は歌霊と名づけてみたい。日本では古くから言霊ということばがあってその存在が信じられてきた。しかしその言霊も歌う形になったとき、より大きな効果が発揮されることも事実であろう」（小島美子『音楽からみた日本人』NHK出版1997年、25頁）。

ところで注目すべきは、「言霊」や「歌霊」が宿る器となるのが「声」であるという点だろう。体の中から発せられる息によって生まれる「声」の持つ力が、うたやおはなしに、たましいやいのちを宿らせる。その理由について、竹内敏晴氏は次のように述べている。

「イキ（息）は生きると同根のことばだ。同じように、息と『生き』が同じことばである民族は世界に数多い。ヤマトコトバのイノチの『イ』は息、『チ』は勢いのことだから、息を吐く力、ひいては、話すことばに力が、勢いがなくなるということは、生命の力の衰えを意味するのだ」（竹内敏晴『声が生まれる　聞く力・話す力』中公新書2007年、26頁）。

こうして、声の文化としてとらえ直すことによって、うたやかたりは、高齢者も子どもも、障がいや心身の病を抱えた人も含めた、あらゆる人びとに「生きる力」を与える「ユニバーサルデザインを備えた文化」として位置づけられるのである。

5. 父への詫び状

ところで、私がうたやかたりを、UDを備えた無形文化財として捉え直すに至ったきっかけは、2011年に亡くなった父のことだった。生まれ育った田舎町で長年小学校教師を務めた父は、定年後間もない65歳の時に脳梗塞に倒れた。幸い一命は取り留めたものの、右半身マヒと重い言語障害が残った。容体が安定すると、早速、父は言語機能回復訓練に取り組んだ。

今から30年程前の当時、読み書き能力の回復訓練

のための特別なテキストはなかった。父は小学校一年の国語教科書を最初から音読し、左手でノートに書き取る作業を始めた。どういういきさつで小学一年生の教科書を用いることになったのか、今ではよく覚えていないが、おそらく父の発病後、英国での留学生活を中断して母と共に付き添っていた私が、元小学校教師の父に相応しい教材と思いついたことではなかったろうか。

父は一生懸命にリハビリに取り組んだ。左手で鉛筆を握って、大きなマス目のノートに、一年生の国語の文章を写し取りながら、私や母がこれを読み上げる後に続けて音読する。この単純作業に根気強く取り組む父の姿勢には、本当に頭の下がる思いだった。

けれどもやがて、「ああっ」とため息をつき、鉛筆を放り出すようになった。そして、目に見える回復が実感できなくなったせいか、ため息をつく頻度はだんだん多くなっていき、半年が経った頃にはもう、教科書に向かうことはなくなった。以来、脳梗塞の再発によって亡くなるまでの 20 年間、父の読み書き能力はほとんど回復せず仕舞だった。但し、父の読み書き能力が回復しなかったことと、リハビリ教材として小学一年生の教科書を使ったこととを関連付けるという発想は、私の中には一切なかった。

ところが、最初に述べたように、2013 年４月に「対人援助学の創造」をポリシーとして掲げる応用人間科学研究科の配属となり、昔話の人間形成論的な意味や対人援助学的な機能について考えようとする「人間形成学特論」という科目を担当した際、最初の年の受講生の一人（元小学校教師の 60 代男性）が、初回授業の自己紹介で「ユニバーサルデザインについて研究したい」と発言されたのを聞いて、父のリハビリ失敗のことが蘇ってきたのである。

もしも自分が父の立場だったらどうだろう。小学一年生用の文章を繰り返し音読しノートに書きつける作業は、最初のうちこそ、子どもの頃や教師時代を懐かしみながらできるかもしれないが、すぐにそんな気持ちは吹き飛んでしまうのではないか。おそらく、大人が声に出して読んでも、また書き写しても味わい深いような内容ではなかっただろうから。

あの時、童謡集や子どもにも大人にも味わえるように再話された昔話集を使っていたら、もっと楽しく作業に取り組めたはずだ。父が倒れた時、私はすでに口承文芸（うたやかたりの文芸）の調査研究を手掛けていたにもかかわらず、このことに思い至らなかった。それに対する自責の念が、亡き父への詫び状としてこの小文を綴らせることになった気がしている。

６．家族で歌った小学校校歌

最後に、父と口承文芸にまつわるもう一つのエピソードを書き添えておく。言葉を書いたり読んだりする能力はほとんど回復しなかった父であったが、うたを歌うことはできた。中でも父が一番しっかりとした声で歌えたのは、父が小学生として、また教師として、足かけ 20 年近く通った地元の水田小学校の校歌だった。「**桜よ春は向山（むこうやま）　夏は蛍の水田川（みすたがわ）　紅葉の秋をよもやまに　冬は吹雪でふりうずむ**」。

ちなみに、母もこの小学校で教師として 6 年間を過ごし、2 人の姉や私もやはり 6 年間同じ校歌を歌ってきた。父が病に倒れた後、家族が集まった時にふとこの校歌を歌った。すると普段はおうむ返しの言葉以外にはほとんど話せない父が、スラスラと歌えたのである。本当に驚き、皆で喜んだ。「うたの力」を実感した瞬間だった。

子どもの頃に繰り返し歌い、語り、聴いた、うたやかたりという「声の文化」は、生涯にわたってその人を励まし、慰め、癒してくれる力を持っている。そしてまた「声の文化」は、年齢の違いや国籍・民族の違い、障がいや病気の有無を超えて、あらゆる人びとの心に届く力を持っている。ユニバーサルデザインとしての機能を備えたうたやかたりの可能性をもっともっと広げていくために、これからもさまざまな職種や分野の人たちと手を携えて、少しずつでも前に進んでいきたい。そう期している。

（＊本稿は、2014 年 7 月刊行の『子どもの文化 2014 年7＋8月号』（子どもの文化研究所）所収の拙稿「ユニバーサルデザインとしてのうた・語り」に大幅な加筆修正を行ったものである。なお、近年「インクルーシブデザイン」という言葉も用いられるようになったことを断っておく。）

あぁ、結婚！

―婚活日記―

第23回

黒田長宏

＜2022年5月12日＞

　49回原稿を提出する。今回は50回ということなら、結婚を達成できれば良いのだが。

＜5月30日＞

　某マッチングアプリの写真から自己紹介文からリニューアルした。

＜6月8日＞

　マッチングアプリで、52歳の人がいいね！をくれたが、実子にこだわってしまう自分は、申し訳ないがそのままブロックした。これが一番優しい方法だろう。40歳の人が、いいね！に応じてくれたら速攻でブロックになってしまった。何がいけなかったのだろう。もう疲弊している私。

＜7月3日＞

　あまりにも変化がない。マッチングアプリも日常生活でも変化がない。結婚に向けての変化が出せない。だから書くことがない。これは逆に難しさを物語っている。結婚難に陥っている人の難しさを。

＜7月29日＞

　某マッチングアプリも相変わらずなんにもないけど何か書かねばと思っていたら、上場企業勤務だという女性が「は？」「勝手に送ってこないでください」と書いてきてブロックしてきた。上場企業で怒りっぽくなってしまった女性なのだろうと思った。かわいそうに。だいたい、勝手に送ってくるなというと、どう送ればいいのかさっぱりわからない。

＜8月3日＞

　今回も締め切りを25日近くまで伸ばしたとしても奇跡的な結婚には至らないだろうと思うし、近々、集落総出のお墓掃除や勤務先の都合があり、4回めの新型コロナワクチンの接種は初めてモデルナのワクチンなのでどうなのかとか、細かいところはいろいろあるので、それが済んでから原稿を提出しようかとも

思ったが、結婚難問題とは関連があるかというと自信がない。しかし継続は力なりというのに、休みの日は必ず、某マッチングアプリの応募の追加とYouTubeのアップはしてきている。それなのにいつまで続くのかはコロナ禍同様、結婚難もわからない。ただ一般に多様性や自由などといって肯定的に安心させようとしているようだが、ライフサイクルとでもいうように、やはり何事にも旬というものはあり、年齢が20代や30代なら55歳の今よりももっと結婚の可能性は高く、多様性も自由もあったものではないと思っている。自由や多様性で得をするのは若い男女のイケメンや美人であろう。しかしこれはこの日記に書いていたと思っていたが、書いていなかったので。

この間にTBSの『報道特集』で、精子を例えば女性同士のカップルにSNSから無償や有償で多目的トイレなどで会って渡して、実際に子供が産まれているという報道には衝撃を受けた。国家がはっきり認めている産婦人科などでは、プライバシーの厳格化などから精子提供は営業的に成り立たなくなり名前だけになっていると報道していたと思うが、SNSなどから個人的に妊娠しづらい夫婦などへ無償や有償で個人取引して、出産に至った事例もあり、それらはたしか違法とも言えないのは法整備がしっかりなされていないのではないかと思うが、私自身の問題から照らすと、私は55歳にもなってしまったが、実の子がこの世にいて欲しいとすると普通の方法では15歳は若い女性に協力してもらわねばならないのだろうが、某マッチングアプリにしても、15歳差の人に承諾を得るのは至難の業である。金持ちならきっと別腹なのだろうが。報道特集では記者が、精子提供者に、「無責任ではないのか」と詰め寄っていたが、自分の父母に遺伝子の流れを断ち切りたくないという思いがあるならば、精子提供という方法でも、それは可能なのかも知れないとも思ってしまったりする。産婦人科がプライバシーで提供者が不足するのは、例えば、産まれた子が大きくなると、遺産分割などで出てきて、難しい側面が出てくるかも知れないなどと説明が必要になったのも要因の一つだと言っていた気がする。日本では違法なのだろうが、世界規模では違法にされていない国もあるだろうことに「代理母」という方法もあるのかも知れない。ある人は、老後のお茶のみ友達みたいな女性でも、既に子供が産めないような年齢の人でも見つければという声も聞いた。確かに子供の頃はかなり年配だと思った年齢の女性が、俗に「美魔女」と言われるように、美しさを維持している女性は多い。某マッチングアプリでみると、30代以上にもなると、大企業勤務者などだろうか、500万円以上の収入なんて女性がいて、容姿もかなりの美人だったりする。

詐欺のケースは別にせよ、ならばどうしてそんなに有利な立場にいるのに、某マッチングアプリで異性探しなどするんじゃい。と悲しくなってしまう。書こうと思えば、一気にこんなに書いてしまうものの、いくら某マッチングアプリなどしても、効果が出ないと、書く気が失せる。変化がない。これで、女性のほうは、たくさんの応募をありがとう。だけど返事が遅くなってしまいます。なんてプロフィール欄に書いている人が何人もいる。ではなぜ私にはそういうことが起きないのか。こういうところでも、男女平等、人間平等なんて一のは嘘っぱちだとわかる。そして都合の悪いことを書くと、反モラルだと言われて思考は淘汰されてしまう。

表現は抑えねばならない。ただ、自分自身でインターネット上にアップするところでは、ある程度、本来の仏さんになられたであろうから、瀬戸内寂聴への反抗心を、同じ宗徒のはしくれとして文句を言ったとしても、なんの訂正も受けないし、かといって、反応もない。AKBとかBTSだと怒られるのだろうか。そうしたYouTube の切実な結婚難に陥っている社会状況をなんとか改善してくださいという訴えを続けて続けて現在のところ、登録者は132人となっている。感謝合掌である。

〔PBLの風と土　第22回〕

大学と地域が共に見上げる北極星として

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1年目は現地報告を中心に、連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、連載5年目には米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題しています。

1. 国際学会での研究者の息継ぎ

コロナ禍の長期化により、オンラインでのコミュニケーションの機会が格段に増えた一方、対面の場は圧倒的に減っている。ただ、圧倒的に減っている、という表現に象徴されるように、少なくとも2022年の夏の段階では、対面での学びの場が根本的に無くなっている状況にはない。万全の感染対策を行いつつ、この2年あまりの経験を踏まえ、最適な方法と内容が選択されるようになっている。2020年度当初には「学びを止めるな」の掛け声が響いていたことが懐かしい。

「3年ぶりの」という枕詞でいくつかの対面の場に向き合うことの多い2022年度であるが、国際的なネットワーキングについては、まだまだオンラインで展開される傾向にある。今後、コロナ禍が収束かつ終息へと向かったとしても、知的な交流を濃密に行うには、多様な人々が密となることによってもたらされると考えるか、それとも物理的な距離の移動を伴わずにオンラインで参加機会を創出する方が合理的と考えるか、主催者側の趣向が大きく反映しそうである。一方、オンラインでの交流の場がコロナ禍となる以前に比べれば、主催する側も参加する側も心理的な抵抗が薄く、かつ、手軽に設定できるということも相まって、オンラインでのシンポジウムやワークショップが幅広く実施されるようになってきた。

そうした中、本連載でも第14回（2020年9月）などで取り上げてきたPBLの国際学会「PAN-PBL」（Association of Problem-Based Learning and Active Learning Methodologies）による隔年での定例会議は、いち早くオンラインに切り替えて展開されてきたものの、2022年度の国際会議（PBL2022）は開催直前になって中止との案内がなされた。2021年12月24日には開催テーマと招聘ゲストおよび一般発表申込みのデッドラインなどが示され、4月26日には早期申込（Early-bird discount）の締切が5月15日に迫っているとのリマインダーが届くなど、開催に向けての準備が着実に進められていたにもかかわらず、である。

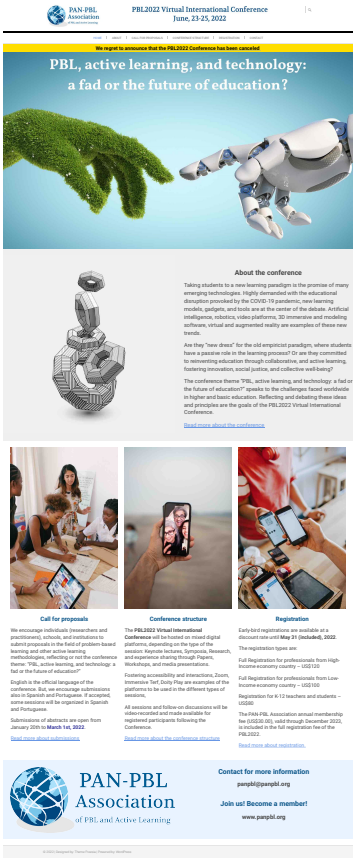


図1：PANPBL2022の開催案内（中止案内が1行追加）

思い当たるところとしては、参加費の払い込みでのシステム上のトラブルなどにより、運営体制がままならなくなったのではないか、ということが予想される。というのも、今回は一般発表はせず、本連載に反映する情報収集のためにと、5月中旬に案内に基づいて参加手続きを行おうとしたものの、運営事務局があるブラジルで用いられているイベント管理システム「doity」において、日本の住所やクレジットカードでは認証が通らなかったためである。

国際学会への参加は、筆者らによる実践的研究の発表の機会とすると共に、特に理論的観点で幅広い情報収集の機会となっており、研究者が過呼吸にも呼吸困難にもならないようにする息継ぎの場になっていた。実際、PAN-PBLについて言えば、本連載の第4回では米国・サンタクララ大学でのPBL2018で発表した「はしごモデル」を、連載第5回・第6回・第7回・第8回ではPBL2018の参加を通じて得たアイルランドで刊行された著作の解題を、第18回ではCOVID-19によりPBL2020が1年順延となってPBL2021としてメタバースのサービス「Gather Town」で開催されたポスターセッションでの発表内容を紹介してきた。PBL2022のテーマは「PBL, active learning, and technology: a fad or the future of education?（PBLとアクティブラーニングとテクノロジー：一時の流行か、教育の未来か？）」であったことから、開催の運びとなっていればまた、本連載で紹介する事柄もあったものの、それは構わなくなった。そこで、前回の結語に触れたとおり、参加型学習を通じて関係者が目指すものは何かについて、過去の国際学会の参加経験を振り返りながら、述べていくこととしよう。

2. それぞれが目指す「北極星」

私事で恐縮だが、筆者にとって国際学会への参加は、博士論文の提出を通じて学位を取得を取得するための必須通過点として指導教員から示されたことが契機となっている。最初の英語発表は2003年に第5回アジア社会心理学会（Asian Association of Social Psychology）で大阪大学の渥美公秀先生との共同でポスター発表で、そこから国際学会での発表に備えて国内学会でも英語で発表することが促された。そして修了後も研究室との交流が続いたことで、先輩・後輩が発表する学会にはエントリーをすることとし、ニュージーランド、マレーシア、インド、カナダと、学術面はもとより人生の上でも多彩な経験を重ねることができた。別の言い方をすれば、国際学会への参加は研究室コミュニティを維持・発展するという側面があった。

その後、国際学会への参加が自らの研究コミュニティの拡張を図る機会への転機となったのが2015年10月にボストンで開催されたIARSLCE（国際サービスラーニング・地域貢献学会）への参加であった。参加へのきっかけは、同僚の河井亨先生（当時は教育開発推進機構講師、現在はスポーツ健康科学部准教授）のお誘いで共同研究者として2015年3月に発表にエントリーをしたことだった。この年の発表には筆者もまた筆頭発表者としてエントリーしたものの、理論的観点が不十分という理由で5月の時点で不採択の通知が届いた[1]。そこで、改めてどのような理論や方法をもとにして実践的研究を展開できるかを精査する必要があることを再確認し、2015年6月15日の立命館大学ボランティア・サービスラーニング（VSL）研究会における前出の河井先生による話題提供の際に素朴に尋ねたところ「Learning through Critical Reflection」という教員用のサービス・ラーニングの指導書（図2）や、改めてIARSLCEという研究コミュニティの有り様を知った、という具合である。



図2：河井亨先生が持参したAshとClaytonによる指導書

2015年11月16日から18日にかけてボストンのマリオットホテルで開催されたIARSLCEでは、予想を超えて理論的、方法論的な情報収集だけでなく、キーパーソンとの出会いの機会ともなった。中でも、インディアナ大学-パデュー

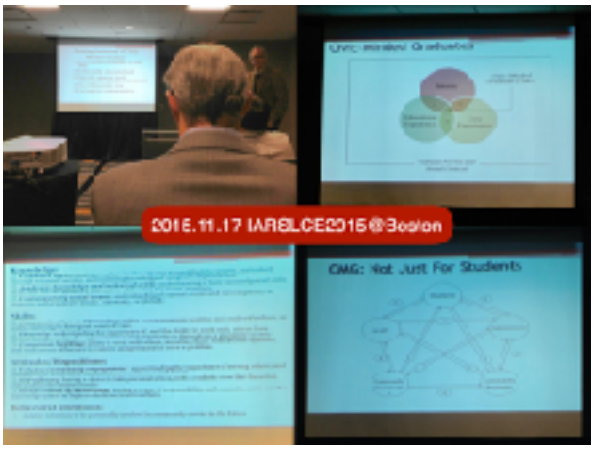


図3：IARSLCE2015でのIUPUIのチームによる研究発表

大学インディアナポリス校（IUPUI）のロバート・ブリングル先生との出会いは、その後の筆者の研究に大きな影響を与えた。何より、本連載で繰り返し述べてきたSOFARモデルこそ、IUPUIのサービスラーニングセンターの実践的研究を通じて生み出された概念である。そして、教育実践としては一定の歴史と経験を有する立命館大学におけるサービス・ラーニングの水準を理論的・方法論的に向上を図るべく、2016年度にはJR西日本あんしん社会財団の助成でIUPUIのロバート・ブリングル先生を招聘し、2017年2月4日に公開研究会「大学におけるサービスラーニングと地域貢献 - 米国・日本の事例をもとに -」を開催した。

前置きが長くなったが、本連載で取り上げてきたSOFARモデル（Bringle et al., 2009）は、IARSLCE2015での発表に基づけば、図3にあるとおり、CMG（Civic-Minded Graduate）と呼ばれる、公共心にあふれた、地域に貢献する卒業生を輩出するための実践的研究の成果として導出されたものである。そして、その概念を解説した2011年の論文（Steinberg & Bringle, 2011）のサブタイトルにもあるとおり、CMGこそが「北極星（A North Star）のように」、大学生が卒業までに目指すべき姿として提示されている。ここで着目したいのが定冠詞が「a」である、という点である。言うまでも無く、実際の北極星は1つしかないことから「The North Star」と示すことができるものの、学生それぞれが各々にとっての目指すべき方向を探っていく必要があることを提示していると捉えられる。

3. ベン図の重なりで読み解く学習傾向

SOFARモデルがサービス・ラーニングに対する理論的かつ実践的なツールとして活用できるものであることは既に本連載を通じて提示してきているが、SOFARモデルも今回紹介するCMGも、それらのモデルの導出は複数の実証的な研究が背景となっている。SOFARモデルにおいては本連載の第20回でも紹介したTRES（変革的関係評価尺度）が用いられ、実際のIUPUIの教育実践を事例に量的・質的な研究の組み合わせによる混合研究が展開されてきた。SteinbergとBringle（2011）によれば、CMGでは量的研究として尺度式アンケートによる自己分析、質的研究として記述式アンケートと評価指標の提示、そして同じく質的研究として対面式インタビューと評価指標の提示、これら3つの混合研究によって、最終的に図4に示すCMGの枠組みが定まったという[2]。IUPUIにおいて、こうした評価、またいわゆる検定や測定への関心が高いのは、長らくサービスラーニングセンター長を務めてきたブリングル先生が心理学を専門としていることが背景にある。実際、前掲の3つの方法によって「各測定方法の心理測定学的特性が証明（provide evidence of the psychometric properties of each measurement procedure）」と、いわゆる仮説検証型の研究スタイルとして、つまりは実証的研究としての姿勢を読み取ることができる。

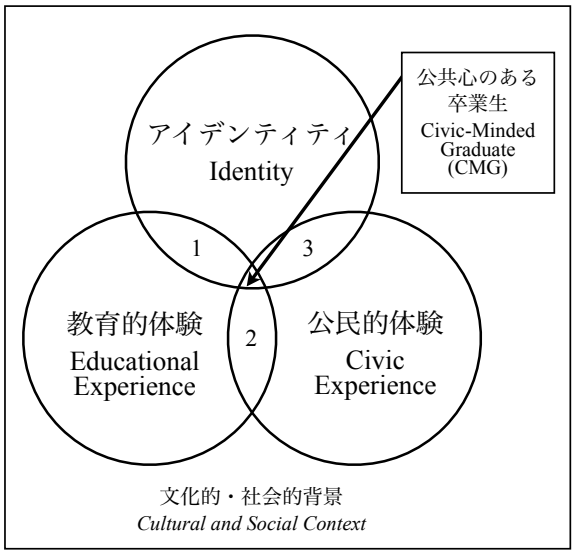


図4：IUPUI Civic-Minded Graduateモデル
（Steinberg & Bringle, 2011, p.20、筆者訳）

ここで図4で概念化されているCMGを構成する要素を確認しておくことにしよう。原著では「CMGの概念的な枠組みは、以下の3つの次元を統合したもの（The conceptual framework for the CMG represents the integration of the following three dimensions）」（Steinberg & Bringle, 2011, p.20）と示されている。ここでは日本語での通りの良さを重視し、「dimension」を「側面」として訳出して紹介する。その上で、3つの側面の個別の要素について確認していく。

「アイデンティティ」
この側面は、一人ひとりの自己理解、自己認識、自己概念を象徴するものである。この特性で、価値観や責務などを含めた個人としての自分自身を知ることができる。

「教育的体験」
この側面は、公式および非公式な教育を通じて得た教育的体験、学問的知識、および技術的スキルを象徴するものである。この特性は、大学でのカリキュラムや正課併行型のプログラムの経験、およびキャリア形成の準備や専門職に就く前の活動（インターンシップなど）で得られるものである。

「公民的体験」
この側面は、人が地域社会に積極的に関与する方法に象徴されるものである。権利擁護活動、地域社会での奉仕活動、リーダーシップ、市民団体への参加、政治参画、ボランティア活動、および投票などが含まれる。

この3つの側面が図4のベン図で示されることにより、3つの円（側面）の統合度合いによって、CMGの特性が高い学生として位置づけられる。具体的には図4では矢印で図示されている3つが重なっている部分こそ「北極星」として模範となりうる学生とされ、「社会の問題に対処できるキャリアや職業に従事するための能力を高めるための勉強に専念している（dedicated to pursuing studies to increase their capacity to engage in a career or profession that can address issues in society）」（Steinberg & Bringle, 2011, p.21）状態にあると示している。また、図4からは少なくとも2つの側面が重なっている領域があることに注意を向ける。具体的には(1)アイデンティティと教育的体験を有する学生は「自らの学びが現在や将来のアイデンティティを形成すると考えていない、単に授業を受けるだけ、場当たり的に教育活動に参加している」状態にあり、「このような学生のアイデンティティは市民的責任感とは無縁であり、市民活動をしていても教育体験と融合していない」と指摘する。続いて(2)教育的体験と公民的体験を有する学生は「地域に根ざした研究、長期休暇中[3]の奉仕活動、インターン、地域社会での応用学習、サービスラーニングコースなどに参加し、積極的に関わることで学ぶことに挑戦してきた」場合に見られ、「教育活動を通じて地域社会と関わる頻度が低く、在学中に単発的な地域活動しかしていない」と指摘する。そして、(3)アイデンティティと公共的経験を有する学生は「市民としての態度、コミットメント、価値観、気質が地域社会への積極的な参加によってもたらされ、それらがアイデンティティにうまく統合されている」ものの「積極的に参加している活動が大学での教育経験とは無関係で、コミュニティとの関わりを頻繁には持たず、人間としての自分、コミュニティの一員としての自分という感覚への影響がもたらされていない」と指摘する。なお、図4CMGのベン図が四角型の外枠で囲まれているのは「学生が特定の文化的規範と社会的文脈の中に位置していることを示すため（students are situated within a particular set of cultural norms and social context）」であるという[4]。ここで浮上する問いは、このように地域社会の文化的・社会的な文脈に身を置く中で、いかにして学生はサービス・ラーニングという教育法を通じてCGMの3つの側面で習熟した学習者となるか、である。

逆説的な言い方となるが、CGMの概念においては3つのベン図が重ならない学生には、前掲のアンケート調査、記述式調査、インタビュー調査などを通じて、学習成果が向上するよう働きかけていく、というのがIUPUIにおいて教育実践と実践的研究の相乗効果をもたらす工夫と見立てることができる。その際、アンケート調査の設問として埋め込まれているのが、大学側が

学習者に求める素養となっている点に着目したい。具体的には、表1のとおり、知識（Knowledge）とスキル（Skills）と心構え（Dispositions）の3つのカテゴリーに分けられた10に及ぶコア要素（core element）が挙げられている[5]。ここではそれらの詳述は行わないが、少なくとも学習者への内省を促すことにより、他者に対して謙虚かつ丁寧に省察的実践者として振る舞うことが期待されていることがわかる。

4. ベン図の重なりで読み解く学習傾向

今回はPBLに関する国際学会の突然の中止に相まみえることとなり、改めて筆者の国際学会での経験を振り返り、サービス・ラーニングの教育実践に対する実践的研究を深めていく際に触れたCMGの概念について解題することとした。阪神・淡路大震災を契機としてボランティアの大衆化に触れ、その後のNPO法を通じてボランティア活動や市民公益活動の日常化に触れてきたこともあり、サービス・ラーニングという教育法を知ったときには新鮮な感動を覚えた。今回、改めてCMGという観点から、自らの教育実践を振り返ることで、2000年頃に新たな言葉に触れることで覚えたその新鮮な感動が、いつしか経験が蓄積されていく中で、制度化への過度な対応を急ぎ、結果として学習者の教育的体験を疎外させてしまう方向へと舵取りをしていなかったか、内省を重ねたところである。実践が先にあり、言葉が後からついてきたゆえの反動なのかもしれないが、新たな言葉を得ることによって実践の意味を探究する姿勢を忘れてはならないことを肝に銘じておきたい。

ちなみにCMGの構築にあたっては、膨大な文献レビューがなされている。一つひとつの文献を解題するだけでも多くの学びがあることは言うまでもない。今回、結びにあたって、Steinbergと Bringle（2011）の冒頭部分で、CMGの構築にあたり、大きな背景として述べているBoyer（1994）の指摘を確認しておこう。ちなみに著者はカーネギー財団で長く高等教育に関する政策提言に従事したことで知られている人物である。

> まず、教授陣の優先順位を再評価し、学問に広範かつより有効な意味を持たせよう。最近刊行されたカーネギー財団の報告書「学問再考（Scholarship Reconsidered）」において、我々は知識を発見する学問を推進するだけでなく、知識を統合し、知識を伝達し、専門的なサービスを通じて知識を応用する学問を称賛する、学問の新しいパラダイムを提案した。＜中略＞
>
> 次に、学術界が地域社会の関心事にさらに敏感になるには、大学という組織自体が模倣的でなく、より創造的になる必要がある。もちろん、卓越した研究機関も必要である。また、教育を優先する大学も必要だ。しかし、専門的なサービスを中心的な使命として定める機関も必要なのである。そのような大学の目標は、その

表1：IUPUIのCivic-Minded Graduateでの10のコア要素（Steinberg & Bringle, 2011, p.22より筆者作成）

クラスター (cluster)	領域 (domein)	評価観点
知識 (Knowledge)	ボランティアの機会 (Volunteer Opportunities)	NPOの知識も含め、特にボランティア活動を通じて社会に貢献する方法について理解している。
	学問的知識と技術 (Academic Knowledge and Technical Skills)	少なくとも一つの学問分野の知識とスキルが、社会の問題に取り組む上でどのように関連するかについて理解している。
	現代の社会問題 (Contemporary Social Issues)	現代社会で起きている出来事や、地域、国、または世界における課題の複雑さを理解している。
スキル (Skills)	コミュニケーションとリスニング (Communication and Listening)	他者とコミュニケーションをとる能力（書面および口頭）、および多様な視点に耳を傾けることができる。
	多様性 (Diversity)	多様な背景を持つ他者の重要性を理解し、共に活動ことができる。また、多元的な社会における多様性を理解し、感受性を高めることができる。
	合意形成 (Consensus-Building)	多様な意見を持つ他者と協力し、違いを超えて合意や問題解決に取り組むことができる。
心構え (Dispositions)	コミュニティへの参加の重視 (Valuing Community Engagement)	他者に奉仕することの重要性を理解し、社会問題に取り組むためにコミュニティに積極的に関与している。
	自己効力感 (Self-Efficacy)	個人的な行動を起こそうとする意欲を持ち、その行動が望ましい結果を生むと現実的に考えている。
	知識の社会的信頼 (Social Trustee of Knowledge)	高等教育で得た知識を他者のために役立てようという責任感や責務を感じている。
	行動の意志 (Behavioral Intentions)	将来、社会奉仕に個人的に関与する意志を表明している。

ような大学の目標は、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの歴史学と教育学の教授であるエレン・コンドリフ・ラーゲマンが雄弁に述べたように、「実在する人々や現実の地域社会における日々の小さな問題に知識を密接に関連づけること」となろう。

今回、CMGの概念を紹介するにあたり、図4では「Civic Experience」を「公共的体験」と訳出した。当然ながら、これには市民的体験、あるいは市民活動的体験、などの語も当てることができる。しかし、このBoyer（1994）の指摘、さらにはCMGにおいて(1)～(3)の領域で示される、ベン図の2つの側面の重なりのみに留まる学生の傾向を改めて向けたことで、「公共」という語の方が望ましい、と捉えたためである。そこには、かつて筆者が土木工学を専攻していたこと、そして土木工学の英訳がcivil engineeringとされることを知ったときの小さな違和感と、その後の納得とが重なり合った上での判断であることを紹介しておきたい。

表2にはcivilとcivicの語用上での整理と区別を示した。これは2012年度の立命館大学の教養教育改革を経て、サービスラーニングセンターが開講する科目の1つが「地域活性化ボランティア」から「シチズンシップ・スタディーズI」へ

表2：civilとcivicの語用上での整理と区別（筆者作成）

	civil	*civic*
意義	みんなの中の一人が	一人ひとりみんなが
志向	利害の調整	価値の創出
立場	私民	公民
事例	*civil war* (南北戦争) *civil minimum*(生活環境水準)	*civic pride* (市民の自負と愛着) *civic activity* (市民活動)

と変更になったことを受講生らに解説する際に作成・使用してきたものである。この着想の背景には、恩師である渥美公秀先生が、大阪大学の障害学生支援の目指すべき姿を検討する際「everyone」ではなく「every-one」を重視した、という観点に学んだものである。ここに、前回の結語で触れた今回のテーマとした「参加型学習を通じて関係者が目指すものは何か」の手がかりとして、現場の体験と体験の蓄積による経験からの過度な実践知におごってはならない、という点であり、と同時に、次回以降ではかねてより関心を向けている「体験の言語化」をCMGと関連づけて再検討してみたい。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

Boyer, E. L. (1994, March 9). Creating the new American college. Chronicle of Higher Education, A48.

Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. 2009. Partnerships in service learning and civic engagement.: A Journal of Service Learning & Civic Engagement, 1(1), 1-20.

Bringle, R. G., & Steinberg, K. S. 2010. Educating for informed community involvement. American Journal of Community Psychology, 46, 428-441.

Steinberg, K., Hatcher, J. A., & Bringle, R. G. 2011. Civic-minded graduate: A north star. Michigan Journal of Community Service Learning, 18(1), 19-33.

【注】

1　改めて当時を振り返るなら、それまでの学会発表では運営側による査読が行われるとしても、それはある種の形式的なものではないか、と高をくくっていた部分もあった。しかし、発表のアブストラクトに対し、2名から丁寧な査読コメントを添えて不採択通知が届いたのである。とりわけ査読者1の「does not provide as much information about what theories and methods have informed learning outcomes and programatic assessment」には、率直に自らの研究力のなさを再確認し、査読者2の「recommend reevaluating its placement for this conference」には、そもそも一度、IARSLCEという場に足を運んでみなければならない、という思いを駆り立てるものとなった。なお、これらのコメントはいずれも抜粋である。

2　3つの評価方法にかかわるツールは、IUPUIのサービスラーニングセンターが提供する研究資料のページで全て公開されている。リンク先は https://scholarworks.iupui.edu/handle/1805/2667 である。

3 原文は「alternative brake」である。日本の大学では馴染みがなく、長期休暇中の活動の一環という文脈のもと訳出した。

4　ここでいう文化的・社会的文脈とは、「学生が他の学生、家族、大学関係者、地域社会の人々と交流し、関わりを持ち、これらの人々すべてが、学生に影響を与え、また学生から影響を受ける」ことを指している。

5 これらの10のコア要素にまとめられることの妥当性については、BringleとSteinberg（2010）で詳しく検討されている。



ストレッチング＆コントラクティング

ＪＲ茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

（今回、心理ネタありません）

「家でストレッチングとか、マッサージとか、やっておいたらいいですか？」

こんな質問を受けることがよくあります。

「縮みすぎたところに、ストレッチングやマッサージをするのは問題ありませんが、伸びすぎているところにストレッチングやマッサージをすると悪化します」

「縮みすぎたところでも、ストレッチやマッサージをしすぎると傷めることがあります」

「体を傷めたときは、まず安静にしてください」

「痛くない姿勢で、痛くない方へさすってもらうなら、失敗することは少ないですよ」

だいたいはこのようなことをお答えしています。

ストレッチングという言葉は、１９６０年代のアメリカで、スポーツや医療の分野において使われ始めました。
いまや日本でも、広く知られる外来語として、すっかり定着しています。

筋肉などの軟部組織を伸ばし、筋肉の柔軟性を高めるとともに、血流を良くしたり、体のゆがみを直したりするのに用いられます。

ケガをしたときにはストレッチングはするなと言われることもあります。
これは、半分は正解ですが、半分は不正解です。

ケガの場合、筋肉や腱、靭帯などが伸びすぎたり、断裂していたりすることが多く、そのようなところをさらにストレッチすると、ケガを悪化させるおそれがあります。
伸びすぎたり、断裂していたりするところをストレッチングしてはいけないという意味では正解です。

体のどこかが伸びると、どこかが縮みます。どこかが縮むと、どこかが伸びます。これは動物が動くために必然のことです。

体のどこかが伸びすぎると、どこかが縮みすぎます。どこかが縮みすぎると、どこかが伸びすぎます。ケガをしたときには、このようなことが起きています。

ケガをしたときには、傷めたところのすべてが伸びすぎているわけではありません。

縮みすぎたところが見つかるケースも多々あります。

縮みすぎたところを放置しておくと、痛みがなかなか引かなかったり、中にはだんだんひどくなったりすることもあります。

縮みすぎたところはさらに縮もうとし、伸びすぎたところは収縮力（筋緊張）が低下するのでさらに伸びすぎていきます。

後から痛みが出てきたり、ひどくなったりするのは、このような場合です。

ですから、たとえケガだとしても、縮みすぎたところをストレッチングしてあげると、痛みが減ったり、回復が早まったりします。

もちろん、伸びすぎたところを縮めて元に戻すのも良いことです。

縮めることを英語ではコントラクティングと言います。

縮みすぎたところをストレッチングすれば、伸びすぎたところがひとりでに元に戻ることも少なくありません。

これは受動的なコントラクティング（パッシブ・コントラクティング）です。

一方、伸びすぎたところに直接はたらきかけて縮めることもできます。

ストレッチングとは反対の動作をし、伸びすぎた部分を縮めることもできます。

伸びすぎたところを縮めるようにさするのも良いでしょう。

痛くない方へ、あるいは、抵抗のない方へ、膨らんでいる側から窪んでいる方へ、さすります。

縮める姿勢・肢位にしながらさすると、よりしっかり縮めることもできます。

縮めるのをやめると再び伸びすぎてしまうような場合は、テーピングや装具によって縮めた状態をキープすることもできます。

これらは能動的なコントラクティング（アクティブ・コントラクティング）です。

伸びすぎたところは、縮めてあげることで機能が回復しやすくなり、痛みなどもとれやすくなります。

一瞬で回復するものから、数分かかったり、数時間かかったり、数日かかったりと、回復に要する期間にバラつきがあります。

軽症のものほど短時間で回復し、重症のものほど長い時間が必要になります。

私たち人間は、加齢とともに、筋肉をはじめ、体の組織がだんだん固くなっていきます。

ですから日常的にはストレッチングだけおこなっておけば十分だと思います。

どこかを伸ばすとどこかが縮むので、ストレッチングをすれば、ほぼ同時に受動的なコントラクティングもおこなわれています。

しかし、医療の現場では、受動的なコントラクティングに加えて能動的なコントラクティングを活用することで、より患者さんの回復を早めることができます。

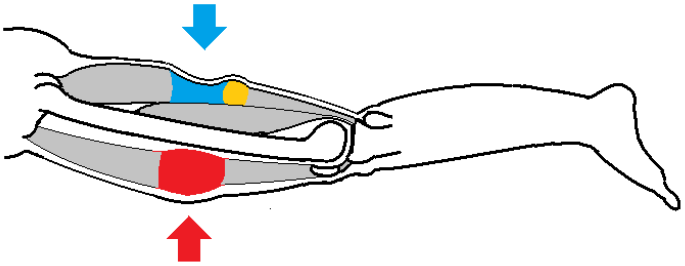
どこが縮みすぎて、どこが伸びすぎているのかわからないという声もよく耳にします。
そんなときは寺田接骨院にお越しください。

次のページに、一例として、大腿二頭筋のコントラクティングを紹介します。

大腿二頭筋のコントラクティング

太ももの裏にある大腿二頭筋は、もっとも肉離れを起こす筋肉と言われています。

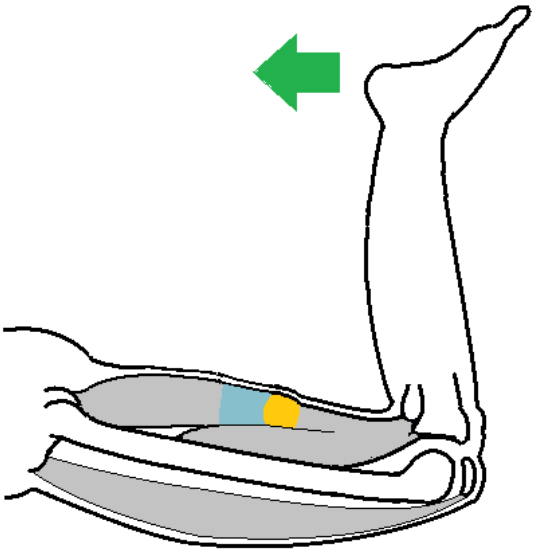
下の図は、うつぶせで、外から見た左脚です。
大腿二頭筋の中間付近の伸びすぎた部分を青色で表しています。



太ももの前面の大腿直筋に縮みすぎて太くなったところができています。（赤い部分）

伸びすぎた部分のひざ側に、もりあがった黄色い部分がありますが、これは縮みすぎた部分です。
伸びすぎた筋肉の中に、縮みすぎた部分ができることもよくあります。

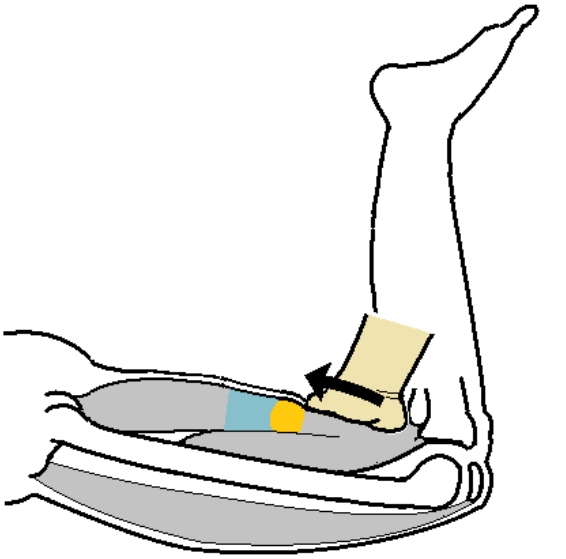
膝を曲げることで、大腿直筋をストレッチングします。
まず、赤い部分が伸びて、縮みすぎたところが正常な長さにもどります。

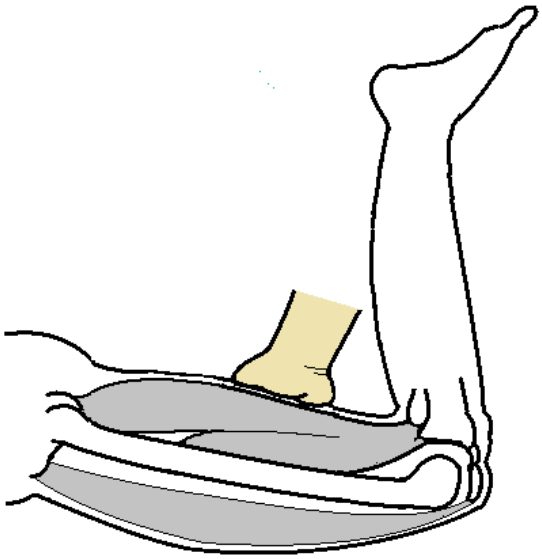


同時に、伸びすぎた部分が縮められます。これはパッシブ・コントラクティングです。

ただ、パッシブ・コントラクティングでは、黄色の部分の縮みすぎが解消しないので、青い部分を完全に縮めることができません。

そこで、縮んでいる側から伸びすぎている側へ、手でさすります。すると、黄色の部分が伸び、伸びすぎた部分が縮んで元の状態にもどります。
これはアクティブ・コントラクティングです。





肉離れの図解は下記ページをご覧ください。
https://efficie.com/index1-7-2.html

黄色い部分をサポーターやテープで圧迫したり、青色の部分に縦にテーピングをしたりすることも、有効なコントラクティングになります。

【追記】
コントラクティングという言葉は、スポーツや医療の分野でも、まだ、ほとんど使われていないと思います。

あまりに使われていないので英語として正しいのか不安になりました。

大学時代にお世話になったジョン・ボチャラリ先生に、英語でストレッチングの反対語はコントラクティングでいいのですかとたずねてみました。

先生はニューヨーク生まれのネイティブ・スピーカーです。

上智大学に留学され、日本語が堪能で、日本人より日本文化にくわしく、初めて受けた講義の題材は、武士道について著した江戸時代の書物『葉隠』でした。

とても気さくな先生で、気がつけば、悩み事を相談したり、ご自宅におじゃましたりしていました。

臨床心理学を専攻していたのに、比較文化の先生に悩み事を相談していたのは変な話ですが、きっとボチャラリ先生のお人柄に惹かれたのだと思います。

あれから４０年、先生は東京大学名誉教授となられました。元一学生の久しぶりの質問にお返事をくださるか心配でした。

でもほどなくして「stretching の反対語は contracting だと思います」というメッセージを返してくださいました。

ボチャラリ先生がおっしゃるなら、筋肉などを縮めるのは「コントラクティング」で間違いありません。

自信をもって、この言葉をお伝えしたいです。

ではまた。

現代社会を『関係性』という観点から考える

㉑　Society から Home へ　矮小化していく社会

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

連載 14 では**『「開く」ことと「閉じる」こと』**について書かせていただきました。その後、連載 15 では**『つながりが支えるこころ』**と題して、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となってしまい社会的孤立に至り、心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継いで、**『「見える」ことと「見えない」こと』**という切り口から、現代社会を関係性という観点から考えてきました。それを受けて連載 17 では、これまで述べてきたことを踏まえ、**「地域社会」との「関わり方」を考える**というタイトルで、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。つまり、**「地域社会」で生きるということ**、について考えてきたともいえます。また、現代社会においては、(望まない)「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあります。例えば家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。これに関しては連載 19 で**「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということ**というタイトルで問題提起をさせていただきました。連載 19 回で**「自分は誰かとつながっている」という感覚**を持つために私が必要だと痛感している**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**について述べさせていただきました。連載 20 では、**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**というタイトルで、コロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について述べさせていただきました。

今回は、一冊の本との出会いをきっかけに、**Society から Home へ　矮小化していく社会**について考えてみたいと思います。非常に粗削りなものであり、学術的な論考とは程遠いものなのですが、私自身はこのことを継続的に考えていきたいと思っていますので、今回はあくまでそのアウトラインについて述べさせていただきたいと思います。

1　一冊の本との出会い『司法の場における法と信頼との相互補完的関係（著者井上眞理子先生)』

おそらく御縁がなければ触れることがなかったであろう一冊です。私自身は刑事政策に関する法や制度に関しては業務の必要上学んでいますが、法学は大学の一般

教養どまり、特に民法に関しては、いまだに苦手意識がかなり強いと考えています。ただ、私の臨床実践における主たる着眼点「現在社会における関係性」を考えていうえで、「信義則」や「信頼」（必ずし精緻な定義に基づくものだけではなく、大まかに理解されてきたものでもよろしいかと思います）が、この期に及んで大きく変容してきているのではないのかという実感（これはもはや危機感に近いといっても過言ではありません）があります。私が所属する職能団体「日本精神保健福祉士協会」分野別プロジェクト「貧困問題」（協会 HP で公開されており誰でも閲読できます。）では、「信頼の貧困」をテーマにした大阪市立大学野村恭代先生の論文に触れて感銘を受けましたが、単に貧困とはモノやカネばかりではないのだということを、刑事政策や生活困窮者支援における処遇場面を見て実感することも少なくありません。

2「信義則」について

「信義則」としてまず想起されるのは民法の下記の規定でしょう。

（基本原則）下線部は筆者が付したもの

第一条　私権は、公共の福祉に適合しなければならない。

2　権利の行使及び義務の履行は、信義に従い誠実に行わなければならない。

3　権利の濫用は、これを許さない。

人は契約等特別な場面はおくとして、日常生活を営む際に何かをする時に「これは法律に抵触するか」ということを一つ一つ吟味しながら自身の行動を決定しているわけではむろんありません。しかし、社会における「ルール」といったものについては、無用なトラブル回避のためという消極的理由であっても、それを遵守しようと考えてきたといえるのではないでしょうか。そして、現代社会における様々なルールの根底にあるのは、上記「信義則」であったといえるのではないでしょうか。

ただ、その一方で、各地を異動（転勤）して私が感じたことではありますが、集落共同体や分家・本家関係における紐帯が密な地域では、様々な問題解決システムとして、「役所の窓口に相談に行くこと」などフォーマルな手段を選択することはかなり敷居が高く、「本家に伺いを立てる」といったインフォーマルな形を選択することがいまだ残っている場合もあると思います。その場合は、その地で長年培われた対人関係やイエ同士の関係性の中で、その土地に応じた様々な行動指針などが醸成されてくるのだと考えます。

ただ、民法に記され、様々な機会に使用される言葉でもある「信義」「誠実」という言葉の「重み」とでもいうべきものが、現代社会における関係性において変容してきていると私は考えています。

その結果の一つが、「（自分や自分の家族の）権利の行使のためにはあらゆる手段を行使しても当然」という考え方や行動に対し、周囲が抑制的に動くのではなく、「パニック買い」等のように行動の連鎖を招くようになっていることだと感じています。その行動容態の 1 つを切り取って、●●ハラスメント、モンスター●●という言葉も次々と生まれています。

コロナ禍初期、店舗ではマスク等の欠品は日常的なものでした。客がスタッフに欠品を責めて在庫を出せと詰め寄る光景もまた珍しいものではありませんでした。仙台で偶然乗車したタクシーの運転手さんが、「東日本大震災の時の方が、まだみんな互いのことを気に掛け合っていた」「不便な生活だったけれど、全国からの支援に対

する感謝の気持ちがあった」と話しておられたのが印象に残っています。

資格を取得し意欲に満ちて薬局で働き始めた若者が、こうした客との交渉に日々疲弊していってしまい、ついに離職したということも私の身近で起きました。医療従事者やエッセンシャルワーカーに対して、感謝を率直に表す人もいる反面、感染を恐れ露骨に差別的な態度をとる人の存在も耳にしました。ごく普通のおじさん、おばさんだった彼らが突然当時の言葉の「自衛警察」と化していることへの戸惑いは、他に例えるものがない違和感でした。ともかくも、コロナ禍は人間の負の感情、特に不安感を吐露することに対する躊躇を奪ってしまったと感じています。

しかし、「自分だけ」「自分の家族だけ」が何とかなればよいという心的傾向は、コロナ禍以前からあったのではないでしょうか。たとえば、交通事故後の様々な保険処理において、加害者側の保険会社が被害者や遺族に対し苛烈な交渉を行い、その結果被害者等の感情が著しく損なわれる事例を、私は業務上（更生保護における恩赦など）で少なからず体験をしました。そして、この件について、被害者団体（あすの会）から監督官庁に対し、そうしたことがなされないよう申入れがなされたという報道にも昨今接しています（毎日新聞その他）。

コロナ禍当初「ステイホーム」が、「新しい生活様式」を表すものというよりは「新しい流行語」のように盛んに叫ばれましたが、「ステイホーム」という言葉自体が、帰る家のない人々や家庭に居場所がない人々のことを配慮の外に置いた、排他的なものではなかったのではないでしょうか。少なくとも、困窮ゆえに犯罪や非行に及んだ人の処遇を日常的に行い、社会的養護やホームレス支援の端に加わっている私にはそう感じられました。

そして、ようやく今回のテーマにたどり着くわけですが、「社会」というものが、限りなく矮小化し、ついには「私」や「私の家族」だけとなってしまうのではないか（むろん様々なシステム～行政など～としての社会は残っても、人々が口にする「社会」の意味合いが小さくなるという意味においてですが）、とも感じるようになりました。

3　揺らぐ「社会に対する信頼」？

刑事政策から年金制度に至るまで様々な制度が円滑に運営されるためには、緻密な制度設計や運営する側の態勢はもとより、人々の「社会に対する信頼」が必要不可欠です。そしてそれはつまるところ、その執行や運営、公平性への信頼であるといえるでしょう。

社会関係司法（ソーシャル・キャピタル）の研究などで著名なパットナムは、信頼を「社会的信頼」と表現し、それは、市民あるいは人間にとって社会が公正で援助的であると「見なされる」信念であるとしました（芝内康文訳『孤独なボウリング　米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房 2006）。一方、日本においては、山岸俊男が述べるように「安心」と「信頼」を区別することで「信頼」について説明している（山岸俊男『信頼の構造～こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会 1998 年）。安心も信頼も人々の心理をリスク管理者の「ひどいことをしないだろうという期待」と「任せておこうという方向」に導く心理的要素であるという共通性がありますが、発生の仕方は下記のように大きく異なっていると言われています。

安心：リスク管理者がだましたりすると、リスク管理者自身の不利益になると住民が見なすことにより生じるもの。
信頼：住民がリスク管理者の自己利益に対する評価を行うこと以外の要素に基づく「意図の期待」のことを示すものであるとしている。

つまり、信頼とは不確実性があるにも関わらず、それでも何かを他者に委任しようとする理的状態であるといえるとされています（注：社会関係資本～いえる、まで日本精神保健福祉士協会 HP「貧困問題」野村恭代氏の論文から引用）。

私は現代日本における関係性において、社会に対する信頼が大きく揺らぎながら、その一方で根拠のないネット上の論理が独り歩きする傾向に危惧感を覚えている者の一人です。刑事政策分野でも、90 歳代（本件で負傷）の被疑者が逮捕されない理由として「元高級官僚だから」「上級国民への忖度」とまことしやかに語られていましたが、彼の身柄を拘束することに伴う法執行側の負担やリスクなどを考えると、やむをえない判断ではなかったかと思います。

「年金制度は将来破綻するので保険料を支払わないで貯金する」という言説も頻繁に耳にするものですが、「年金制度は世代間扶養」という基本的事項を踏まえていない議論も多数見受けられます。しかしこうした言説に根拠を確かめることなく人が同調する背景には、社会に対する信頼の低下、不公平感の強さがあるのではないでしょうか。しかも現在日本では、社会や社会制度に対する不信や不満を制度の改変に向けて動くのではなく、自分や自分の家族といったごく狭い範囲（これが現在の関係性における「社会」と各自が定義している）を守れればそれでよしとする方向、換言すれば自分や家族を安全なカプセルに収め「閉じていく」傾向があるのではないでしょうか。こうなるとむしろ「社会に対する信頼」が揺らいでいるというよりも「社会」の概念自体が極端に矮小化しているという懸念をぬぐえない。

「私」「私の家族」という「狭い社会」だけで通じる「常識」は、実は単なるマイナールールに過ぎないはずですが、それを基準に物事を判断し行動するとき、「信義則」という概念はおそらく置き去りにされてしまうだろうではいでしょうか。

4「信頼」という概念

「信頼」についても、その概念自体が揺らいでいるのではないでしょうか。「信頼」は、対人援助の場面における援助望希性を考える際の課題として扱われる場面が多かったのではないでしょうか。生活困窮者支援等の場面で、明らかに支援が必要な状況にあるのに、当事者本人に介入を拒まれる場面は少なくなくありません。「差し伸べられた手をつかんでよいのか」という不安が当事者側にあることについては、社会に対する信頼という観点から熟慮が必要であるし、支援者側自身が当事者側に安心できる雰囲気や環境を与えているのかどうかという振り返りも必要ではないでしょうか。「信頼」は短期間では醸成できません。原家族で適切ではない養育を受けていたりすると、訓練された支援者が介入しても当該支援者との関係構築には時間を要するともいわれており、私も臨床でそれを実感してきました。

5　その一方で増えている特殊詐欺という現状

「自分だけ」「自分の家族だけ」が大事という気持ちが強くなると、目の前に支援

を必要としている人がいても目に入らなくなってしまいます。また、「自分の家族」を質にとられるような犯罪（代表的なものが特殊詐欺）が急増している背景には、何度か述べたように「社会」という概念が矮小化しているがゆえに、自分にとって社会の全てである家族に危機が迫っていると感じると冷静な判断ができなくなってしまう所以ではないでしょうか。

また、「特別に金員を受給できる」といった給付金詐欺の被害増加の背景には、現代社会における関係性において、「社会は自分を守ってくれない」「せめてお金だけでも蓄えておかねば」という心理があると私は考えます。

６　Society から Home へ　矮小化していく社会

「社会」という概念は、どんどん矮小化し、もはや Society から Home と同義になってしまうのでないかというのは杞憂でしょうか。「だって家族から当たり前」という理論で縛る家族関係のいびつさは本編で何度も述べましたが、それは子どもを社会的存在だと認めず、自分だけのルールが通じるホームに囲い込むことの病理性は、親子関係だけではなく、社会の存在をも危うくしていくのではないかと考えています。

執筆者近況

当方は持病ゆえに装具をつけて活動しています。そうした装具を「弱者」「助けを求める者」の記号として解釈する立場に立つ人が一定数いることは了解していますし、それを巡る論争なども目にしたことがあります。

しかし私はあくまで療養の必要上医師の指示によりそれらを装着しているにすぎないのであり、実際にそれらの装具が生活の質を上げ公務に取り組む際の効率化につながっていることは否めないので、そうした議論とは距離を置きたいと考えていました。

しかし、今回思わぬ形で装具をつけることが他者にどういった印象を与えるのかと、私自身が受け止めてしまうような出来事があり、自分が自分の疾病や装具を着用することを受容できていないことに何よりも動揺しました。しかしその日の帰路、公共交通機関内で転倒しあわや事故になりかけたとき、差し伸べられた幾人もの手によって事故を免れるという出来事がありました。

「装具」という記号を巡り様々に考えさせられた一日でしたが、今は、差し伸べられた手の温もり、そしてそのリアリティを信じようと思っています。

コロナ禍の中、様々な立場の人が、互いのことを思いやりながら生活できればと強く願っています。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

迫　共（比治山大学）

⑰ 『母がしんどい』・『しんどい母から逃げる!!』

家庭や子育てと社会福祉を考える際、「毒親」という言葉はひとつのキーワードになります。「毒になる親」という概念はスーザン・フォワードの『毒になる親』（1999）に登場するものです。

「子どもに対するネガティブな行動パターンが執拗に継続し、それが子どもの人生を支配するようになってしまう親」（強調は原文による）というのが定義ですが、これだけだと多くの人が「自分も毒親？」と感じてしまうでしょう。フォワードは、「この世に完全な親などというものは存在しない」といいます。「時には大声を張り上げてしまうこともある」し、「時には子供をコントロールし過ぎることもある」し、「怒ってお尻を叩くこともあるかもしれない」という普通の親の姿を「毒になる」とは言いません。

毒親の多くは子どもに対して過干渉で、過剰にコントロールしようとする親であり、しばしば第三者からは過保護とも見られます。その他にも、子どもに関心を示さずネグレクトをする親や、性的なものを含んだ様々な虐待を行う親などが毒親に該当します。

今回紹介する田房永子さんの『母がしんどい』(2012) と『しんどい母から逃げる!!』(2018) には、典型的な過干渉な毒親の姿と、その支配からの逃げ方が描かれています。

田房さんは毒親家庭で育てられた「毒親育ち」の当事者として、いくつもの漫画作品を書いています。『母がしんどい』は毒親育ちであることを公言したはじめての作品。感情の起伏が激しく、娘であるエイコを振り回す母親の姿が強烈なエピソードで表現されています。

前触れもなく突然ピアノ教室に連れていかれたエイコ。母は「いいところ」に行くとしか言っていません。ピアノ教室につくと先生が「エイコちゃんよろしくね～」と笑顔で迎えます。

エイコが混乱して「ここどこ？」「ピアノって何？」と聞くと「先生困ってるでしょー」と母親。エイコが「やだもん、帰る」と言うと母親は鬼の形相でエイコを睨みつけて従わせます。(『母がしんどい』「突然始まる習い事　そしてお年玉が……」pp.16-17)

母親はエイコの意思を考えていません。それどころか、母親は母親自身の意思とは違う意思をエイコが持っていると認識できず、認めることもできません。

母親はまるで自分の一部であるようにエイコを扱います。エイコが独自の意思で生きようとすると「わがまま」「聞き分けがない」「ダメな子」というメッセージを浴びせます。

16 歳になったエイコはアルバイトをはじめ、自分でためたお金でクリスマスにスキー旅行に行こうとしています。友達や学校の先生も一緒です。

母親はバイト先のコンビニ前の道路が狭いことから「車が突っ込んできそう」「危ない」「お金あげるからバイトやめて」と言います。

母親の言葉を聞き流して旅行の準備をするエイコに、母親は突然、「2 学期の成績が悪かったからスキー旅行は禁止」と言い放ち、学校に電話して「うちは行きませんのでキャンセルで！」と宣言してしまいます。でも本当は、ペナルティの約束などしていなかったのです。

「お母さん、さすがにそれはかわいそうです」と先生がいさめても母親は聞く耳を持ちません。「自分がルール」と言わんばかりの母親に、先生が完敗。

自宅でクリスマスを過ごすことになり、落ち込むエイコ。母は「もうクヨクヨしないで、お母さんと楽しも？」と告げ、エイコがバイトに行こうとすると「今日こそ、やめますっていうんだよー」と笑顔で追い打ちをかけます。

気力を奪われたエイコはバイトを辞めてしまいます。クリスマスにも浮かない顔をしていると「もう、いい加減キゲンなおしなさいよ!!」と母親が怒り出します。(『母がしんどい』「初めてのアルバイト 初めてのスキー」pp.44-45)

エイコの母親は、エイコが自分自身の楽しさややりがいを見つけると、それを取り上げ、自分のもとから巣立たないようにコントロールしているようです。それによってエイコの気分は沈むのですが、母親は「自分のせい」とは考えません。母親の目からは、親に反抗して従わない、エイコの方が悪いと映っているようです。

毒親によるコントロールが解けるきっかけは人によって様々ですが、友達や恋人との人間関係から「うちの家庭はヘンだ」と気づく場合や、結婚や妊娠、出産、子育てがきっかけになる場合があります。違う家庭で育ったパートナーと結婚して一緒に生活すると、「自分の家庭はヘンだった」という気づきに達するケースが多いようです。特に女性にとっては出産と子育ては自分自身の育ちを振り返り、捉えなおす大きなチャンスになります。

「100%親のせいってわけじゃないけど納得できない！」というモヤモヤした思いを、「親のせいにするなんてみっともない」と心の筋肉で閉じ込めている状態は「トイレをガマンして他のことにうまく集中できない状態」に似ています。「納得できない！」を溜め込むとおかしな感じに外にモレそうに…。エイコは親に従わない人を批判したり、自分自身の小さな失敗をものすごい勢いで自分に対して責めたりという状態になっていました。その限界が 29 歳の時に。「私ってそんなに悪いのか？」「悪くないと思う」…。

「『納得できない！』があるってこと自体が、私の問題だったんだ」と気づいた瞬間にビッグバンが起こり、「納得できない！」を爆発させる排出期に入ります。

エイコは「いったん親のせいにしてみる」ことを選択します。「いまだに納得できない出来事」から「本当は親が悪かったんだ」ということを差し引いて、「私は悪くなかった」という思いを体と心に残す作業を行います。そして、親のせいにしちゃったことを反省したくなったら、後々反省すればいいのです。(『しんどい母から逃げる!!』「はじめに」「＃1　『いったん親のせいにする』のススメ」pp.2-19)。

「いい年をして親のせいにするなんて、みっともない」という気持ちは、常識的な大人としては大切です。しかし毒親育ちの人は、「いい年をするまで親のせいにすることすらできなかった」人たちなのです。自分の課題と親の課題を切り分け、親のものは親に返して、自分の責任の範囲を明確にする作業が必要です。これは親に対して直接、過去の納得できない出来事の不満をぶつけてみる、ということではありません。むしろ、それはしない方がいい場合が多いです。親は子どもからぶつけられても受け取らないことが多いからです。子どもは期待が裏切られ、さらに傷つきを深めてしまいます。親の代わりにカウンセラーに言うとか、紙に書くなどでよいのです。ある程度安全な方法で適切に吐き出すことを繰り返すと、事態が明確になり、整理が進みます。

エイコは妊娠し「お母さんみたいにはなりたくない」という思いを新たにします。そして、「お母さんが責任持って自分の意見を言ってるところ、見たことがない」と気づきます。お母さんが「独り」でいるところを見たことがないのです。エイコは、「お母さんは本当は弱い人間だ」と気づき、無重力で逆さになっているような感覚に陥ります。世界がひっくり返り、何を基準にして、どう生きていったらいいのか分からなくなります。

お母さんは自分が不安になるとき、その思いを自分で持っていられなくて他人にまき散らし、押し付けていたのです。「私が納得できなかったお母さんの言動、ほぼ全部、お母さんの不安のまき散らしだったんだ」。(『しんどい母から逃げる!!』「＃5　ビッグバンする 5 秒前」「＃6　ビッグバン起こる！」「＃7　不安を『まき散らさない』ということ」pp.50-79 より要約)

『母がしんどい』と『しんどい母から逃げる!!』には共通したエピソードがいくつか登場します。発表時期が早い『母がしんどい』では、エピソードの強烈さが目立ちます。一方、『しんどい母から逃げる!!』はハウツー本的な性格が強く、エピソードから距離が取れるようになったことが感じ取れます。6 年を経て田房さん自身の理解が深まったのではないでしょうか。

ある問題を継続的に扱い続けるには力が必要です。毒親育ちの当事者が発信し続ける根底には、毒親本人や問題に気づいてくれなかった周囲への怒りがあると考えられます。怒りのパワーが続いている間は、扱い続けても苦になりません。それどころか発信することが癒しになり、自己を振り返ることにもなります。また、同様に苦しんでいる人たちや支援者も、回復のプロセスを見せてもらえるので周りのメリットも大きいです。やがて、同じ問題を扱い続けることに「飽きる」ということが起こります。「もういい」と。それが「やめどき」なのだと考えます。

毒親や虐待、貧困などの問題を扱うと、似た問題に苦しんでいたはずの当事者が「私のところはまだマシな方で…」と言い出すことがあります。でも本当にそうでしょうか。メディアに紹介されるケースは、事件に繋がったものや、刺激的で極端なものが少なくありません。たしかに、それらに比べたら「まだマシ」かもしれませんが、目立たないけれども酷い状況で過ごしていた人たちが、相談支援の現場には多くやってきます。筆者の身近なカウンセラーは、「その状況をまだマシだと思えるのは、あなたが努力してきた結果ではないですか」と伝えると言っていました。大きな努力をして、ようやく一般的な家庭生活に近づけられたのではないかと。

さて、貧困問題に「絶対的貧困」と「相対的貧困」の概念があります。最低限の生存を維持することが困難な状態である「絶対的貧困」に対して、「相対的貧困」は国や地域の文化や生活の水準と比較して困窮する状態を言います。正確には「世帯の所得が、その国や地域の等価可処分所得の中央値の半分に満たない状態」を指します。子どもが家計を支えるため、毎日のようにアルバイトをして、学業がおぼつかないなどの状態は「相対的貧困」に該当すると考えられます。

毒親や虐待にも、「絶対的なもの」と「相対的なもの」がありそうです。誰が見ても問題と思われるような「絶対的な毒親」ばかりが問題なのではありません。「まだマシ」とされがちな、目立たない「相対的な毒親」の被害者は、誰にも見つけてもらえず支援の手が届かない可能性があります。保育や社会福祉を学ぶ私たちは、このような「相対的な課題」を抱えて生活する人がいることを意識しておく必要があると思うのです。

紹介作品：

田房永子（2012）『母がしんどい』KADOKAWA 中経

田房永子（2018）『しんどい母から逃げる!!』小学館

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

参考文献：スーザン・フォワード(玉置悟訳 1999)『毒になる親』毎日新聞社

『余地』 ～相談業務を楽しむ方法 19～

＜自宅療養＞

杉江　太朗

～発覚～

A の家族が発熱した。その家族は数日前に新型コロナウイルスのワクチンを接種しており、最初はその副反応だと思っていた。しかし、数日たっても熱が下がらず、A 自身も喉に違和感を持つようになった。ワクチンを接種した病院に電話をするが中々繋がらない。かけ続けてようやく繋がったと思ったら、「副反応です」との一点張り。家族内に症状が出ている人間がいることを伝えるが、「副反応です」「様子を見て下さい」との対応。とはいっても A の家族は 39 度台の熱が数日続いている。どこかで検査をしてもらえないかと思い別の病院にも連絡。いくつかには断られたが、運よく繋がった病院が親切で、事情もわかってくれて、検査をしてくれることになった。〇時に車で来てください、駐車場についたら電話連絡を、先生の空いた時間で検査をしますとのこと。A 自身、発熱はしていなかったが、同時に A の検査もしてくれるとのことになった。

A 自身も検査を受けることになったので、その時点ではクーラーで喉を痛めたかな？程度の症状ではあったが、もし陽性であったらと考えると出勤するわけにはいかず、当日に予定されていたどうしてもキャンセルできない会議については、オンラインで実施出来るように調整をした。

A は、予約時間になったので病院に向かった。駐車場は、１台分のスペースしかなく、同様に検査待ちと思われる方が車内で待機しているようだった。A は、駐車場から病院に連絡をするが、中々連絡は繋がらない。発熱をしたとの連絡が入り続けているのであろうか。ようやく繋がり、しばらく待機するように指示を受け、車内で待機をする。

１ 時間ほどして、ようやく検査を受けられることになり、予約時点では PCR 検査を実施するとの話であったが、待っている間に抗原検査キットが届いたらしく、即日結果が出るからとのことで、抗原検査を実施することになった。

医師は A の鼻奥に細長い綿棒をぶっ刺した。A は、鼻がもげるかと思った。

そしてしばらく時間を置いて、医師が戻ってきた。結果は「陽性」であった。

検査費用は公費負担となり、病院の初診料のみ支払う。（1 人 3 千円程度）思っていたよりもあっさりと陽性と言われたことに A は拍子抜けした。もっとたいそうな告知場面があると思っていたのである。しかし医師にとっては日常なのであろう。A は、医師から薬が必要かと聞かれたので、処方をお願いした。事務的に医師から処方箋を受け取り、3 日後くらいには保健所から連絡が入るからと言われ、A は病院をあとにした。

～自宅療養の準備～

陽性と言われたことにより、10 日間の A の自宅療養が決まった。A はまず、職場に連絡をした。自身のスケジュールを伝え、こちらでキャンセルができる予定、対応をお願いする予定を分けて伝えた。A の職場には、通信用の携帯や Wi−Fi が用意されていたが、A の手元にはない。職場に取りに行くわけにもいかないため、外の自転車のカゴに置いてもらうように依頼をして、誰もいない隙を狙って回収をした。A は、まるで違法な取引をしているかのような気分になった。

そして医師からもらった処方薬を受け取らなければいけない。普段利用している薬局に連絡をして事情を伝えたところ、処方箋を FAX して欲しいとのことで、病院に FAX をした。すぐに薬の準備が可能であること、またお会計についても知らせてくれたため、お釣りが出ないように小銭を準備して、駐車場で落ち合うことになった。駐車場から連絡をすると、すぐに薬剤師が薬をもって登場。お金は、割りばしの先についた空き缶にいれ、直接手が触れることはない。薬も少しだけ開けた窓に滑り込ませるように入れてくれ、受け取ることができた。

あとは、飲食物の確保である。冷蔵庫に買い置きはあったので、しばらく対応出来たとしても、10 日間は持たない。いざというときに伝えなければいけないため、近所のスーパーのネットスーパーに登録をした。どうやら注文をしたとしてもすぐに届くわけではなく、2 日程度時間が必要であることがわかった。

そして A は、この 10 日間、間違いなく暇になると思い、動画配信サイトのサブスクにも登録した。

～体調の変化～

A は、過去にワクチンを 3 回接種していた。またテレビなどでは無症状の人も多いなどと報じられていることもあり、A もこのまま大した症状もなく過ごせるのではないかと淡い期待をした。しかしそれが間違いであると気付くのに時間は必要なかった。

検査をしたその日の夜中、A は悪寒を感じて目が覚めた。さっそく発熱し始めたようである。体温計は 39 度台を示しており、身体が熱いにもかかわらず、汗をまったくかかず、身体はさらさらして

いる。解熱鎮痛剤を飲むと、1 時間程度で解熱し、途端に汗だくになる。体温調整機能がコントロールできない状況であった。

3 日程度は、上記のような状態が続いたため、A はその間、ヒートテックを着て、寝るときには羽毛布団を使用し、頭には氷枕を置いて過ごした。（ちなみに真夏の話。）

3 日程度経って、A は、薬を飲まずとも熱が一定キープできるようになった。しかし、次は喉の痛みが強くなり、水分を泣きながら飲むという状態に。その状態はすぐに解消したが、そこから自宅療養が空けるまでは咳と痰が止まらなかった。A は過去にも咳が止まらず、病院受診したら、肺炎になっていたということがあった。今回は肺炎には至らなかったが、呼吸器系への影響が大きいと感じた。

～社会制度の中における A～

A は比較的症状が軽い状況で病院に繋がっている。今回、検査をした病院以外にも、まず家族がワクチンを接種した病院、普段利用している病院にも連絡をしたが、「副反応です」「今日の分の検査は予約が終わりました」と言われ受診することが出来なかった。報じられている感染者数以上に発熱者はいると思われ、検査を希望する人が殺到しているのであろう。A は比較的若く、自発的に行動することが出来たが、これがもし、単身の高齢者などであったりすれば、車での移動もままならず、検査に繋がることが容易ではなかったかもしれない。検査についても車があることを前提に話が進んでいくため、車を持たない世帯の方は、受診をするだけでも様々な弊害があったと思う。炎天下で椅子に座って待つことも現実的ではない。

また発熱した後であれば、体力的に受診することさえ難しかったかもしれない。比較的元気なうちに受診が出来たことは運が良かったのであろう。

保健所から A への連絡は自宅療養 3 日目の午前中にかかってきた。テレビのニュースによると、1 日数千人という新規感染者が出ているようである。そこに 1 件ずつかけているとしたら、3 日目でも早いほうだったかもしれない。またその連絡の 2 日後に、各種案内が速達で届いた。その封書は手書きで書かれており、新規感染者すべてに送付しているとすれば、すごい手間暇である。

食料支援の案内は、その封書に同封されていたが、申し込みはオンラインで行い申請した 3 日後に届くとのことであった。保健所の方からは、申請をしない人が多いので、是非申請をして欲しいと言われたが、保健所からの連絡が 3 日目、その時点で申請をしたとしても届くのが 6 日目とすれば、確かに申請をしない方もいるかもしれないと思った。（ちなみにこの原稿を書いているのが A の自宅療養

８日目だが、まだ届いていない）

ちなみに、自宅療養期間は、入院と同様の扱いになるようで、契約している医療保険によっては、入院一時金などの対象になるとのことであったが、療養期間を証明する書類もネット上で申請するようだが、そのサイトが止まっているとのことであった。（おそらくパンク）

～孤立を防ぐ～

A のように自宅療養を余儀なくされた方は援助者、被援助者ともに多いはずである。またこの先、A のように自宅療養しなければいけない状況になる方も出てくることだろう。

今までも SNS などで陽性者がどういった生活をしているのか、何に困るのかなど知ったつもりではいたが、いざ A のような話を聞いていると、症状が人それぞれであるだけではなく、そのことに対する社会の動きが地域によっても様々であることがわかる。また、A のように、ネットの配達や宅配などを駆使すれば、なんとか外に出ずに生活は出来るだろうが、そもそもネットがなかったり、車がなかったりするとそうはいかなくなる。また単身で暮らしている方が、数日分の食料を貯めこんでいるとも思えない。

A の症状を聞く限り、ただの風邪とは思えない。またインフルエンザとも違う。風邪にせよ、インフルエンザにせよ、特効薬や抗生剤が処方され、回復への見通しが持ちやすい。新型コロナウイルスについては、確かに無症状の方もいるのかもしれないが、A の場合はそうではなかったし、なんといっても治療薬は処方されない。A の若さでこれだけ体力を奪われるとすれば、基礎疾患があったり、高齢であったりしたらどうなっていたのであろうか。

A が感染したことを巡って、今の社会システムの中で、新型コロナウイルスの及ぼす生活への影響の一部を知ることが出来た。発熱外来、検査、自宅療養、保健所からの連絡という流れは、今の社会の中ではワンセットになっている。その枠組みが、この先もずっとそのままかはわからない。とにかくその流れの渦中にいる方に関わる場合は、その地域の社会資源を知り、想像力を働かせながら関わる必要があるだろう。自宅療養という生活は、社会に出られない生活とも言えるが、逆に社会が関われなくなる生活とも言える。如何にして孤立を防ぐか、如何にして異変をキャッチできるか、そのあたりの視点が求められていると感じた。

～あると便利なもの～

小銭／お互いお金のやり取りは避けたい。お釣りなしで支払い出来るように。自販機でも使った。

ゴム手袋／飲み物が足りないときに徒歩圏内の自動販売機を使う際、直接触れないように。あとは、病院で支払うときに

も使用。
解熱鎮痛剤／ロキ〇ニンが良く効いた。
でも胃があれた。
スポーツドリンク／結構飲みます。
氷枕／すぐにぬるくなるので、いくつかある方が良いかと。
レトルト食品／作る元気がないかもしれない。
アイスクリーム／熱が冷めるし、甘いものが欲しくなるかも。
ゼリー／食欲がなくても食べられるように。
紙皿／洗う元気がないかもしれない。
野菜ジュース／気休めの栄養のため。
水筒／枕元に持っていきやすいし、ぬるくなりにくい。

♪♪♪♪♪♪♪♪

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編⑤～

素直な言葉

♪♪♪

松岡園子

いつもの物語はまだ続きますが、これまでの連載を読み返していて、どうしても皆様に紹介したいと思うものがありました。今号ではそのご紹介をさせていただきます。

これまでのゆりの物語に登場した人物には、モデルになっている実在の方がいらっしゃいます。その方々の存在は、一緒に過ごした時から数十年も経っているのに、1つの物語にしたいと思うほど私の印象に残っているのだと思います。

なぜ、それほど印象に残っているのだろうと考えてみたのですが、私はその方々から当時手紙をもらっており、それを何度も読み返す機会があったことが1つの要因かなと感じました。

お互いの状況が変わり、会うことがなくなっても、手紙に書かれた言葉はその時の自分の感情、情熱、また書いてくれた人の目に映っていた自分の姿を思い起こさせてくれます。

手紙はそうして生き続けています。

いまの時代は、手紙を書くよりもLINEやメール、SNSでの言葉のやり取りが主流となっています。ゆりが当時の状況のまま、今、12歳だったら、発達している情報ネットワークを使って、何か別の展開を起こしたのだろうか？　などと考えることがあります。

でもやはり手紙に関しては、画面を通して見る言葉と、便せんに書かれた直筆の言葉とでは、そこから感じる重みが全く違うように感じます。ここでは、生きた文字のまま載せることができず、活字に変換した言葉となってしまうことが残念ですが、直筆の文字は、時が経ってもその人を表し続けているものだと思います。

では、ご紹介していきます。

まずは、対人援助学マガジン第33号・1回目連載「1993年のカーネーション～12歳～」に登場していた、ゆりの転校先、奈良の中学校でのクラスメイト、千紗ちゃん（仮名）からの手紙です。

これを書いてくれた千紗ちゃんは、当時のゆりと同じ、12 歳で中学 1 年生の少女です。手紙は、照れくさくて面と向かっては伝えきれないことでも、ストレートに伝えることができる道具だと思います。自分のレパートリーの中にはなかった表現・視点を千紗ちゃんの手紙から感じさせられます。

神戸の家で一緒に暮らしていた祖父に次いで祖母が亡くなった頃から、独り言を話し、何もできなくなってしまった母・夏子とゆりのふたり暮らしを心配した親戚が、ゆりと夏子を奈良の家に引き取りました。

その後ゆりは、奈良の児童養護施設へ入所……となるのですが、その児童養護施設から通うことになった奈良の中学校でのクラスメイトが千紗ちゃんです。「施設ではなく、母と一緒に暮らしたい、神戸に戻りたい」というゆりの思いを応援してくれた千紗ちゃんが、ゆりが母と神戸に戻る前日、奈良の中学校での最後の日にくれた手紙です。

（こちらの）中学からいっちゃうんだねぇ。ああ、ああ、さみしいよう～。あんさんがいっぱい休むようになってからは、「いつかは、やめちゃうんちゃうか！」とは思っていたけど……。私は悪人なので、「吉田さん（ゆりの名字）がいっちゃいませんように」とおがんでいた。でも、いっちゃうようになったのは、神さんが、「そのほうがいいんちゃう？」と思ったからかなぁ、私はよくわからないような。

あんさんがいっちゃっても、わたしは吉田ゆりという人が捨てられません。いつもにこにこ笑っていて、明るくて、やさしくて。見ていても、気持ちがいいなあと思うような、すごくいい子だからです。だから、ゆりは、どこへ行っても、きっとうまくやっていけると思います。（後略）

離れるのはさみしいけれど、相手の意志を尊重して応援してくれる、そのような姿に、12 歳の少女ではなく大人の心遣いを感じます。

次は、対人援助学マガジン第 45 号・第 13 回目連載「春の風～後編～」に登場していた、影山さん（仮名）です。

影山さんは、ゆりが中学卒業後に就職した給食会社からの派遣先に委託業者として出入りしていた、清掃員の 60 代ぐらいの女性です。派遣された製菓会社の社員食堂での賄いを 1 人で任されたゆりを、見守り、手伝ってくれた影山さん。ゆりはこの後、製菓会社の派遣勤務から本社勤務へ戻ることになりますが、この手紙はその前の日にもらったものです。

お別れですね。淋しいね。あっと言う間に 4 カ月余り過ぎました。早かったですね。本当に良くがんばりました，ほめて上げたいです。自分自身もほめて下さい。胸をはって。大勢の社員の方々にも祝福され、愛され、喜んでもらいましたね。私も色々と出しゃばり、お邪魔虫をしましたね。悪く思わないで下さい。（中略）沢山の人から真心を戴き惜しまれて去

って行くお姉ちゃんは、誰よりも幸せ者だと思います。感謝をして下さい。

お味噌汁やうどんも只ではなくて，お金をもらって商売をしたんだから大したもんです。素晴らしいことをしたんだから，自信を持って生きて行ってください。まだ若い 15 才 16 才で，誰よりも先に大切なことを学んだことに対し，幸あれと大きな声で叫んであげたいです。お姉ちゃん自身にとって収穫です。（後略）

新しく任された仕事をこなすことに必死な姿を見かねてか、自分の仕事の範囲外なのに、洗い物や後片づけを何も言わずに手伝ってくれていた影山さん。ここでの仕事は自分 1 人の力でできたことではないのに、自分のしてきたことの意味を言葉にしてもらったことで、自信を持つことができました。

最後は、対人援助学マガジン第 47 号・連載 15 回目「未来へ〜16 歳〜」に登場していた、美保ちゃん（仮名）からの手紙です。美保ちゃんは、ゆりが定時制高校で同じクラスになった、1 つ年上のお姉さんです。茶髪にピアス、お化粧も綺麗にしていて、最初、顔を合わせた時はヤンキーっぽく見えました。休み時間も自分のクラスにおらず、いつも上の学年の人たちと一緒にいるので、近寄りがたく感じていましたが、ある時、話してみると優しいお姉さんでした。

自分の境遇を明るく語り、前向きに生きている美保ちゃんの姿に触れて、「美保ちゃんになら、自分の家のことを話しても、わかってもらえそうだ」と確信しました。美保ちゃんからは、2 回手紙をもらいました。仕事上の悩みを打ち明けた次の日にもらった手紙、卒業式の時にもらった手紙です。卒業式にもらったものは、物語の中のゆりがまだ卒業式を迎えていないため、割愛させていただいている部分があります。

ゆりちゃんは、誰よりも努力家で、人を想いやる心を持っている人だと、あたしは思う。そんな性格が、ゆりちゃんの顔に表れてると思う。ゆりちゃんは、すごくおだやかで優しい顔してるよ。

これから社会に出ていく中で、今まで以上にもっともっと、苦しい事やつらい事、悲しい事もあると思う。悩む日もあると思う。だけど、そんな経験を、自分の大切な宝にして誇りにして、もっともっと強い人になっていって欲しいです。あたしはいつまでも夜は続かないと思う。どんなに暗い深い夜でも、必ず明るい朝は来るから。問題を 1 つ超えるたびにゆりちゃんは今以上に輝けるし、きれいにもなれる。

苦労を重ねた人ほど幸せになれるねん、必ず。あたしはいつもそう思ってるよ。

こんな言葉を人にかけることができるなんて……強い人だと圧倒された覚えがあります。美保ちゃんが発する言葉だからこそ、まっすぐ心に入ってきました。

どの手紙も、何度読み返しても、心が震えます。私は、これらの手紙の言葉を何度も読み

返しましたし、そのたびに心が励まされました。もらったその時とは状況が変わっていても、読むたびに新鮮さ、純粋さを感じます。

手紙は、紙とペンがあれば書くことのできる簡単な伝達方法ですが、手紙に書く内容は誰かに教えてもらう性質のものでもなく、その人の心から出た、素直な言葉だと思います。他の誰でもない、「あなた」だけに贈る、素直な言葉、それが一番伝わりやすい、大切にされる「言葉」なのではないかと思います。

第１８回　「生体肝移植ドナーをめぐる物語」

――きょうだい間移植(2)　夫婦愛と姉弟愛の差異による家族変容――

一宮茂子

１．　はじめに

本稿は前回に引き続き同じ事例を分析して紹介いたします。この事例は弟から姉へのきょうだい間移植ですが、ふたりとも結婚して子どもをもつ生殖家族です。ドナーとレシピエントは同意のうえ相互に納得して移植手術を受けました。しかし弟は姉のドナーになることを独断したため、その時点から夫婦関係に亀裂が生じました。弟の妻は家族にとって重要な決断であるにもかかわらず「蚊帳の外」におかれて内情が分からず疎外感を抱いたのです。妻の立場なら誰でも同じ感情を抱くだろうと推察します。移植は成功してドナーもレシピエントも健康を取り戻しました。しかしドナー夫婦の関係性の亀裂は、移植後数年以上経過しても心の奥深いところでは禍根を残した状態が続いています。

２．　事例紹介

前回と同じ事例ですが、今回も提示しておきます。

弟である宏さん（仮名：30 歳代）は血液型が B 型であり、妻と幼児 2 人の 4 人家族で、関東地方に居住しています。姉（40 歳代）は血液型が B 型であり、夫と思春期の子ども 3 人の 5 人家族で、九州地方に居住しています。この当時、両親は健在で四国地方に居住しています。このように移植にかかわる家族や親族はそれぞれが遠方に住んでいたのです。

姉は肝臓がんで手術を受けたのですが、その後に再発して余命が今年いっぱい（9 ヶ月）と告知を受けたため、死の恐怖と不安をかかえひとり苦悩していました。その影響で姉夫婦も家族も関係性が悪化し、思春期の 3 人の子どもたちは荒んでいきました。宏さんは遠方に居住していたこともあり、このような姉家族の状況をまったく知らなかったのです。

姉の再手術予定の話がでたとき宏さんは姉家族を訪問して、その家族変容を目の当たりにして驚いています。宏さんは、姉家族を立て直して元に戻す責任を感じて自ら申し出たのが生体肝移植ドナーでした。姉の夫は A 型のため血液型不適合となり当時の医療水準では移植できなかったのです。その後、姉弟間移植の話はトントン拍子に進みましたが、宏さんは妻に「姉のドナーになる」ことを独断したうえで、その結果しか伝えませんでした。宏さんは、妻は姉のドナーになることに反対できないと考えていたのです。なぜなら

ば余命告知を受けた姉の救命には、移植しか選択肢がなかったからです。そのためドナーを独断した宏さん夫婦間に軋轢が生じ、移植後も長年にわたって修復困難な関係性が続くことになりました。

３．　ドナー手術の受けとめ方

宏さんは健康体であり、これまで入院治療や手術を受けた経験はありません。ドナー手術のため関西地方のＹ大学病院でインフォームド・コンセントを受けてドナーとして入院するのですが、それまでに医療関係者である姉の夫から移植にかんする文献をもらって読んだり、ビデオを見たりして自分なりに移植情報を収集していました。その時の入院にたいする受けとめ方は「風邪引いたから注射１本打ってもらう」という軽い気持ちであり、ドナー手術にたいしてはＹ大学病院へ「行って、切って、開けて帰ってくる」という簡単な受けとめ方だったのです。それには当時の時代背景として「ドナーの死亡例はゼロ」という実績があったため、ドナー手術の成功率は高いという意味づけになっていたと思います。日本のドナー死亡例は 2003 年に 1 事例ありました［西河内ほか 2004］。しかし宏さんがドナー手術を受けた時点ではドナーの死亡例はありませんでした。

さらにドナーが提供する肝臓は、小さい小児の場合は肝臓全体の約 4 分の 1 にあたる左葉の外側区域を、大きい小児に移植する場合は肝臓全体の約 3 分の 1 にあたる左葉を、成人に移植する場合は肝臓全体の約 3 分の 2 にあたる右葉を切除して移植するとされています［一宮 2018］。この規定に基づいて宏さんは姉に肝臓の一部を提供するため肝臓全体の約 3 分の 2 にあたる右葉を切除して移植することになりました。

正常な肝臓は一部を切除しても生体の求めに応じて再生し、十分になれば再生が止まるという臓器特異性があります。したがって、その一部をとり出して人に移植すれば生着した肝臓は、数週間から数ヶ月で必要に応じて増殖再生し、その人の成長とともに発育していきます。もちろん提供者の肝臓はほぼ以前の大きさまで再生します［笠原ほか 2002］。

４．　ドタキャンになった移植術

宏さんは生来から心臓の持病がありました。しかし今まで日常生活に支障をきたしたことはありませんでした。もちろん入院や手術も受けたことはありませんでした。宏さん自身が、自分の身体は「健康体」であると自信をもっていたのです。宏さんは移植術が延期になったことにショックを受けたのですが、それ以上に自分自身の身体が再検査を必要とするほどに「健康体ではなかった」ことのほうがショックであったろうと推察されました。また姉の立ち位置から見ると、再発した肝臓がんの新たな治療法としての生体肝移植治療に当然期待していたと思われるため、誰よりも姉自身が移植術を受けられなくなることを恐れていたと思われます。

生体肝移植ではドナー手術の安全性の保証と将来の生活に支障がないことが最も重要と

されています［江川 2010］。当時の姉の体調は、劇症肝炎患者(1)のように時間的制限のなかで移植を必要としていませんでした。そのため宏さんの再検査に時間を割くことができました。その結果、宏さんは生来から心臓の左右の心室の間に穴が開いている病気（心室中隔欠損）のため、そこから血液が逆流して体がむくんでいたことがわかったのです。

肝臓がんが再発した姉にたいして、宏さんは自分がドナーになることで根治できるという希望を与えていたのですが、この時点では立場が逆転しました。ドナー手術に不安材料は禁物です。即刻、翌日の手術はキャンセルとなりました。

この時点で姉は勿論のこと宏さんは移植手術が可能なのかと不安だったと思われます。しかし、宏さんは医師の説明を受けて以下のように前向きに捉えていたのです。

> 宏さん：「いっぱい考えたんだけど恐怖心はなかった…とにかく…（手術を）やれるようにしないといけない。（浮腫をとるため利尿剤の）ラシックス（を）飲んでおしっこ（を）いっぱい出す。（そうすれば浮腫が軽減して）心臓をちっちゃくする（ことができる)」

こうして宏さんは体の浮腫をとるため利尿剤の内服療法により体調を整えることができたのです。その結果、突然の手術延期から 1 週間後に移植術が行われる予定となりました。誰しも手術が一旦延期になると不安や恐怖心が大きくなるのが通常です。しかし、宏さんは全く意に介さず冷静に考えていたのです。その後の宏さんは 1 週間薬物療法による治療を受けてドナー手術が可能となりました。Y 大学病院では手術前日に麻酔科外来を受診して麻酔科医師の診察を受けるようにルチーン化されています。宏さんは今回も前回と同様に麻酔科受診を受けることになりました。

５．　万が一のための遺書

通常、全身麻酔で手術を受ける患者は手術前日に麻酔科医師による診察を受け、全身管理のための最終チェックがおこなわれます。宏さんは今回の入院で、これまで全く自覚しなかった持病があり、そのため前回は手術が突然中止になりました。宏さんは仕切り直しとなった翌日の手術を控えてやはり不安を感じていたのです。その思いは麻酔科医師に対して、手術による自らの安全確認としての質問となりました。以下はそのときの麻酔科医師の返事と、そのときに宏さんが感じた語りです。

> 宏さん：「医師に『大丈夫ですよね』と聞いたら（医師は）『あなたは心臓の持病を持っている…ことが分かったので…100％（安全）とはもう言い難いです』と言われたとき…『そうですか。けど、同意書にはサインします』といってサインした。その晩は考えました…万が一ってあるんだなって。で、お袋と義理の兄貴

(1) 劇症肝炎とは、急性肝炎のなかでもとくに重症のもので、高度の肝機能不全と意識障害または肝性昏睡を特徴とします。肝移植の対象疾患であり早急に治療しないと死亡します。

> と嫁さんに（遺書を書いた)。嫁さんには『万が一のときには離婚してくれ』って…お袋には…『嫁さんのやりたいようにやらせてやってくれ』と…義理の兄貴には『ありがとう』って書いた…それでその晩はやっぱり眠れなかったんです」

何の手術であっても 100%安全な手術はありえません。宏さんは姉を救命するためにドナーとなりましたが、このドナー手術によって最悪の事態になれば自分は死ぬかもしれない。全身麻酔がかかったあと覚醒しないかもしれない。「100%（安全）とはもう言い難い」と断言した麻酔科医師の言葉を聴いて、宏さんは死もあり得ると覚悟したうえで、それでも姉のためのドナー手術を上記のような思いで受けとめていたのです。これは姉にたいする弟の愛情が後押ししている語りだと思われました。

私が臨床現場に携わっていたとき移植手術が成功するのか否か、その不確実性に宏さんと同じような思いで手術前日に遺書を書いた患者を知っています。その事例は対人援助マガジン第 40 号で紹介しましたように妻から夫への夫婦間移植であり、当時はまだ成功率の低かった血液型不適合移植でした。この夫婦は 30%の成功率に賭けた移植だったのです。通常遺書は自筆で書くものですが、この事例では、自分たち夫婦のことと、夫婦それぞれの高齢の両親にあてて、夫も妻もそれぞれがパソコンに遺書を打ち込んで保存しているそうです。そして時々その遺書を読み返すことがあるとも語っていました［一宮 2020]。

遺書は自分の意思を誰かに伝えるための私的文書であり、書式や内容に法的な制約や効力は一切ないと言われています。また個人的なメッセージであり財産分与などに言及することはないとも言われています。従って以下に述べる宏さんの手紙は「遺書」と言えます。

宏さんが最悪の事態をイメージしたとき、やはり一番に脳裏に浮かんだのは妻と幼児 2 人の自分の家族でした。そしてこれ以上、妻や子どもを巻き添えにしないためにも「離婚」というキーワードで妻が「やりたいように」できる手段を自ら書き記して妻と母親に手紙を書いたのです。さらに宏さんがドナーになることで姉が救命できるということと、そのような段取りを整えてくれた義兄に対する感謝の念を「ありがとう」という言葉に凝縮して手紙を書いています。これらの手紙は手術当日の手術室入り口で本人が家族へ手渡したそうです。

６．　愛情の計算

それらとは別に宏さんは姉にたいして以下のような愛情のこもった手紙を手術前日の夜に手渡しています。

> 「姉貴へ。ようやく明日になりましたが、私はこの決断に満足しています。昨年から 1 年あまり私は姉貴が悩んでいる間、近くにいることができなく、つらい思いをしていました。がしかし、明日からは私が一番姉貴の近くに居ることができると思うと、嬉しさでいっぱいです。これからはみんなでポジティブに考え、一

歩ずつ前進していこうネ。今回の件で私は本当にすばらしいことを学びました。すべての人に感謝しています。では、お互い頑張って、目が覚めたらおいしいものを食べる話でもしましょう。姉ちゃん、ありがとう！」

愛情は計算できるようなものではないと分かっていますが、このような内容の手紙を読むと、姉のそばに居ることが弟である宏さんの愛情表現のひとつであるということ。そして姉のそばに居るということは、宏さんの肝臓の一部が姉の肝臓と入れ替えられて姉の体内に植えられるという大きな犠牲をともなうものであること。さらにそれは姉の命を救うという尊い行為としておこなわれているということ。このようなことが、姉弟がそれぞれ結婚して家族を作った後も、姉弟間の愛情は薄れるどころか、ますます強く大きくなる事例として今でも鮮明な記憶として残っています。

宏さんの愛情は、妻にも姉にたいしてもうかがえますが、その愛情の計算はどのようにすれば他者に理解されるのでしょうか。自分の職業経験から言えることは、ドナーという自己犠牲のうえに、自分の肝臓の一部が姉の体内に移植されるという負担をになうことで、これからは物理的距離がどんなに遠くてもずっと姉の近くに居てやれるという語りから、夫婦愛よりも姉弟愛が大きくて深くて強くて濃ゆくてドラマティックで誰でも容易にまねができないように感じます。

７．　手術後の感動

通常ドナーは、手術後は手術室から一般病棟の個室に収容されます。しかし宏さんの場合は大事をとって集中治療室（以下、ICU）で一晩経過観察することになりました。一方、レシピエントは、手術後は ICU に 3～4 泊の期間、収容されます。レシピエントである姉は 4 泊 5 日の予定で ICU に収容されました。

宏さん：「ICU から病棟へ帰るときに…A 教授が来てくれて…『あっちにね、お姉さんが寝てんだから、そっちを通ってお姉さんに顔を見せてあげて帰りなさい』って（言ってくれて）すごい嬉しかったんですよ」

姉を救命するために自らドナーとなり、ICU で一晩すごした宏さんはやはり姉の術後が気がかりであったようです。ちょうど ICU に居合わせた A 教授の助言で姉と弟はベッドごと対面することができました。双方とも麻酔からさめていてお互いに元気であることを自ら確認する機会を与えられたのです。宏さんは A 教授の細やかな気遣いに感動していました。

宏さん：「手術するまでは健康体で、なにもないわけでしょ。やっぱりすごい手術したんだなぁって…ICU から病棟に帰ったときに（漫画の）キカイダーのように（体の）いろんなところからチューブが出てるわけじゃないですか。結構、感

動しましたね。チューブの数を見て」

通常ドナーの術後は以下のものが装着されています。酸素マスクをつけ、背中の腰のあたりに痛み止めの硬膜外麻酔チューブ(2)がはいり、鼻から胃の中へは胃管チューブ、腕には点滴の管と血圧測定用の管、膀胱に尿管チューブ、腹部内には排液用のチューブと胆汁漏れ予防のチューブ、胸には心臓図の電極、指先には呼吸状態や脈拍数をみるパルスオキシメーター(3)、両足には血栓予防のシューズなどです。そして宏さんはじめ多くのドナーは、これらが日ごとに除去されていくのが目に見えるため、ドナーも家族も病状の回復過程を経験することができます。

成人の場合の生体肝移植は右葉の肝臓切除となりけっこう大きな逆 T 字型の傷跡となります。宏さんはその傷跡を見て「三ツ矢サイダー」のマークとか「ベンツマーク」といって笑っていました。またその傷跡はホッチキスのような金属で丁寧に縫合されていて、その数は「92 くらい」であったこと、さらに体から出ているチューブの本数をみて、大変な手術を受けたのだと改めて認識し、無事に移植がおこなえたことに達成感を感じていたのです。宏さんの術後経過は、一時、傷の再縫合を必要としたものの順調であり、移植後 2 週間で退院となりました。なおドタキャンの手術もあったため入院期間は 3 週間でした。

８．　ドナー家族の変容

姉弟間の生体肝移植は成功して、術後も順調に経過しました。姉は元気になって姉家族は元の生活を取りもどすことができました。遠く離れて住んでいる両親も安心して実家に帰りました。宏さんの姉家族を元に戻す責務は達成されたのです。そして、両親、姉弟の情緒的な絆は以前にまして深まりました。ではドナーである宏さん家族の関係性はどうでしょうか。

> 宏さん：「うちの嫁さんは今でも『私は思い出したくない』って言ってますね。だからもう家ではそういう（移植の）話はしない。嫁さんにとっては、子どもがちっちゃかったし、それ（ドナーになること）を勝手に自分で決めた…結論、結果しか言わなかった。…だからそういう意味では結構…離れましたよ。あのショックで。そんなことは当然あるべきことだと分かっていたし、どうしようもないです」

姉の救命と姉家族を立てなおすために、当時はまだ再発した肝細胞がんに一般的ではなかった生体肝移植という治療法を選択するにあたって、宏さんは医療関係者である義兄と相談しながら治療法を決断しました。

---

(2) 背骨の腰あたりからチューブを挿入し鎮痛薬を持続的に注入して術後の傷みを和らげます。

(3) パルスオキシメーター（英：pulse oximeter）とは、皮膚を通して動脈血酸素飽和度（Sp02）と脈拍数を測定するための装置です。

成人間の生体肝移植においてドナーは肝臓の 3 分の 2 にあたる右葉切除という大きな手術侵襲を受けます。宏さんが移植をおこなった当時は、国内でドナーの死亡は報告されていませんでした。しかし最悪の事態も考えられました(4)。またドナーの入院期間は約二週間ですが体力が回復するまで約 3 ヶ月ほどの休職が必要です。さらに、これほどの負担を担っても移植の成否は不確実なのです。それでも宏さんはこうしたことを承知の上でドナーになりました。

宏さんが「姉のドナーになる」という重要な決断を妻には「結論、結果しか言わなかった」のは何故でしょうか。本来なら結論にいたるその過程こそ、宏さん夫婦にとっては重要であり、夫婦間で共有しておくべきことであったはずです。その理由として次のようなことが考えられました。それは、姉が肝細胞がん術後に再発し家出をしたこと、姉家族が崩壊寸前であったこと、家の長男であり弟である宏さん自身が姉家族を立て直す義務感を感じていたこと、崩壊寸前の姉家族を立て直せるのは宏さんしかいないと自覚していたこと、姉は余命 9 ヶ月と宣告されていたこと、姉を救命するには生体肝移植以外に治療法がなかったことなどがあり、こういった重大で早急な対応が次々と宏さんの眼前に表れたこと。また生体肝移植ドナーについて妻と話し合ったとしても妻は「納得しない性格だ」と思いこんでいたこと、さらに妻は「たとえ反対したくても反対できない」と宏さん自身が思っていたことなどから、宏さんは決断までの過程を妻と共有できるほど心を配る余裕すらなかったのではないかと推察されました。

生体腎移植はたとえ移植を延期しても人工透析という代替療法があります。結婚して子どもがいるきょうだい間の生体腎移植の場合には、ドナー配偶者に強い抵抗または否定感情があり、移植に不賛成や明確な反対の場合が多いと報告されています［春木 2008］。しかし生体肝移植では代替療法がなく移植に反対すれば姉の「死」は確実です。したがって妻の立場からすれば、「向こうにも夫がいるのに、なんであなたがドナーになるのよ」と反対の意思表示はしたくてもできなかったと思われます。いやそれよりも姉の夫は血液型不適合移植となり、当時の医療水準ではどの病院もまだ行っていなかったのです。

姉家族を立て直すほどのリーダーシップをもつ宏さんは、これまでも自分自身の家族を姉家族と同様に護り育んできたにちがいありません。しかし今回は自分たち家族よりも姉家族が想像もしなかったほどに崩壊寸前であったことから、宏さんの立場からすれば姉家族を優先して行動せざるをえなかったと思われます。

妻のたち位置から見ると、ドナー手術は100%安全とはいえず、最悪の事態も予想され、幼子2人をかかえて自分たち家族の将来が不安であったと思われます。また夫がこのような妻の思いに気づかずに、「結論、結果しか言わな」い夫の愛情を天秤にかけると、姉や姉家族に対する愛情の比重が、自分たち家族にたいする愛情よりも極めて重いと感じられ、妻は妻の立場で孤独のうちに苦悩していたと思われます。それは数年経たインタビュー時点でも、移植の話はお互いにアンタッチャブルな話となってしまったことからも頷けます。

(4) 2003 年には国内で初めてドナーが死亡しました［日本肝移植研究会ドナー安全対策委員会 2004］。

宏さん自身はこのようになってしまった家族関係を「どうしようもない」と受けとめ、数年経たインタビュー時点でも忍耐強い精神力で対応していたのです。姉を助けるために自らドナーとなり、姉家族の生活を立てなおすことができたにもかかわらず、その結果が自分たち家族に軋轢を生じさせることになってしまったのです。このように生体肝移植はドナー家族の力学に影響を及ぼし予想外の結果をもたらす側面をもっていることがわかりました。

９．　妻に対する負債感の埋め合わせ

生体肝移植は宏さんにドナーの負担を背負わせ、夫婦関係に軋轢をもたらしました。宏さんは夫であり父親であり一家の長男なのです。本来なら遠く離れて住んでいる田舎の両親も気がかりなはずです。移植後の家族変容について宏さんは以下のように語っています。

> 宏さん：「…ただ『一番大事なことを決めるのに何故（妻の私に）相談してくれなかったの？』というのはありますね。…相談の結果、これはまたいろいろあったんですけどね。親父とお袋のこと考えるとですね。ま、飛行機に乗って帰ればすぐ帰れますからって思いましたけど。（実家には）もう帰んないですね。で（こちらに）家も建てましたしね二世帯分。…マスオさん状態で（暮らしています)」

もし姉が生体肝移植をするために「誰がドナーになるのか」と親族に相談したと仮定して、誰が候補者として選ばれたのだろう。ドナーの負担は非常に大きい。これは周知の事実です。しかし何といっても万が一の責任を考えると、やはり近親の誰かがこの犠牲と負担を引き受けざるをえなくなります［一宮 2018］。

姉が移植術を受けた当時、Y大学病院の倫理的条件でドナーとなりえたのは血族三親等と配偶者です。この条件に照らしあわせて姉のドナーを選択したと仮定すると、対象となるのは一親等の両親と子どもたち、二親等の弟、配偶者である義兄となります。三親等のおじおばは宏さんの語りに登場せず、甥姪はいません。子どもたちは未成年で適応外、両親も年齢的に適応外となります。宏さんの立場からドナー候補者として義兄を見た場合、すでに夫婦関係が壊れている状態で義兄から「誰がドナーになるのかなんて…絶対言えなかった」ことと血液型が不適合であったため結局、ドナー候補者は宏さんになってしまう状況でした。しかしその結論にいたる過程で、宏さんがもっと気遣わなければならなかった人は、家族にとって重大なことを「相談しなかった妻」だったのです。

宏さんが言うところの「これはまたいろいろあった」結果のひとつとして、従来住んでいた夫婦と子どもという核家族形態から、二世帯住宅を新築して妻の母方居住の二世帯同居、直系三世代同居として住むことになりました。その結果を宏さん自身の立ち位置から見ると、長谷川町子の国民的漫画である「サザエさん」の夫、「マスオさん状態」で暮ら

しているという語りから、やはり妻に対する負債意識は持っていて、その思いの埋め合わせが家族形態変容につながったように思います。

１０． おわりに

宏さんの移植前、移植後、Y大学病院と縁が切れて数年経たインタビュー時点の語りから、移植によってその後のドナーや家族の生き方が変化したこと、移植によってドナーやレシピエントだけでなく家族全員が巻きこまれ家族ダイナミクスが生じたこと、さらに移植による影響は数年以上にわたって続いておりドナー当事者や家族はその家族環境の中で「生の営み」を継続している現実がありました。

生体肝移植は術後にこそドナー当事者や家族に大きな感情的負担、家族関係上の軋轢、深い苦悩、葛藤をもたらしうるものとして存在していました。ドナー当事者が周囲に対して自責や負債を感じ、逆にドナー周囲の人がドナーに対して葛藤や軋轢を感じてしまう、そういうことさえも引きおこす問題を抱えていたのです。

このように生体肝移植自体はドナーにとって一回性の話ですが、本人や家族においては、その後もずっと引きずっていく非常に大きな社会的な問題となっていたといえます。

１１． 文献

江川裕人，2010，「日本の移植医療の現状」『新潟青陵学会誌』2(1): 47-50.

春木繁一，2008，『腎移植をめぐる兄弟姉妹　精神科医が語る生体腎移植の家族』日本医学館.

一宮茂子，2018,「生体肝移植ドナーをめぐる物語」対人援助マガジン第33号: 343-355（https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol33/55.pdf, 2022.8.23確認）.

一宮茂子，2020,「生体肝移植ドナーをめぐる物語──戦地に赴く兵士のような覚悟で臨んだ血液型不適合移植」対人援助マガジン第 40 号: 237-251（https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol40/45.pdf, 2022.8.22 確認）.

笠原群生・木内哲也・田中紘一，2002,「わが国における肝移植の現況」『消化器外科』25(3): 277-282.

日本肝移植研究会ドナー安全対策委員会，2004，「生体肝移植ドナーが肝不全に陥った事例の検証と再発防止への提言」『移植』39(1): 47-55.

西河内靖泰・池谷健・本田勝紀ほか，2004,「生体肝移植をすすめる患者・市民の立場からみた「京大病院生体肝移植ドナー死亡事例」の問題点と課題を考える」『移植』39: 278.

こころ日記「ぼちぼち」その③

「家族」を考える

「家族」の勉強を始めて長くなる。教員を続ける中で、自己覚知など援助職としてのスキルを身につけたいと、京都国際社会福祉センターに随分と通った。そんな時センターの講座で出会ったのが「家族療法」だった。心理にはあまり興味はなかったが、家族が持つパワーや社会システムの中の家族の姿など、飽きることなく学び続けられている。今までも子どもたちの家族のことを語ってきたが、少し自分の家族ことも…と思う。

ステップファミリー

振り返れば、長い間思春期の子どもたちと暮らしてきたなと思う。中学校現場から退いた今も、学校に行けない子どもたちとの時間を過ごす。

人生の大きな節目である「思春期」。改めて考えると、からだも心も子どもから大人に変化していく人生の中での大イベントだ。中学１年から卒業までの３年間の子どもの成長ぶりには、目を見張るものがある。その姿を見るのが何よりの楽しみだった。善いにつけ悪いにつけ、色々な思春期のあり方を間近で見ることもできた。

どんな人も、必ず通る道。大人たちは、何もなかったような顔をしているが、人それぞれ家族の中の思春期にまつわるエピソードがきっとあったはずだ。

＊

担任をしていると、ステップファミリーに出会うことがよくあった。

再婚家庭などは昔からあるし、珍しくもないが、最近は、多くなっていると思う。

子どもが小さい時に離婚した父親、母親は、シングルマザーあるいはシングルファーザーとして頑張っている。しかし、人は色々な関係性の中で生きている。好きな人ができれば一緒に暮らしたいとも思う。

思春期にある子どもたちは、今まで母親だった父親だった人が恋愛をし、新しいパートナーと生活をすることに、たいてい戸惑いと不安を感じる。

＊

マリヤは、中学１年まで小学６年の弟と母親との暮らしをしていた。父親と母親は、マリヤが低学年のころに離婚をしていた。母親は、パートをしながら２人の子育てに奮闘していたが、職場で知り合った１５歳年下の男性と再婚をし、まもなく妹が生まれた。

マリヤは人との関りが苦手で、学校生活では目立たない生徒だった。絵を描くことが好きで、美術部では積極的に活動していた。しかし、新しい父親との生活が始まったと同時に、少しずつ学校を休むようになっていった。

２０代の義父は、夜遅くまでゲームをしていたりテレビを見ていたりと、マリヤは毎日その音に悩まされていた。しかも夜中の赤ん坊の泣き声にはイライラした。

狭いアパートでは、弟との相部屋でもあり、プライバシーが守られる環境ではなかった。

学校を休む理由は、頭痛と耳鳴りだった。放課後登校をしたときの面談で、彼女はポツリポツリと自身のことを話してくれた。

将来は漫画家になりたいこと。高校に行ったら、母親を助けるためにアルバイトをしたいなど。家族のことについては、弟が万引きをし始めたことを心配そうに話し

た。義父とのエピソードはなかったが、妹のことを「全然かわいくなんかない。ホンマうるさいねん」と呟く…。今の彼女の環境を変える手立ては見つからないが、担任に話すことで、気持ちが楽になればと思う日々だった。

母親は、新しいパートナーとの関係を気遣い、マリヤと向き合うことを避けている様子だった。マリヤの症状は、病院に連れていくも良くはならなかった。心配だった弟は、近所に迷惑をかける事件を起こすようになり、母親は弟への対応に追われるようになっていった。

今の生活を維持させるには、黙って今の環境を受け入れるしかなかったし、自分の思いを母親にぶつけることはできなかったのだろう。彼女の心は、内へ内へと沈んでいったように見えた。

マリヤは３年生になり、少しずつ進路に目を向けるようになり、どうにか通信制の高校に入ることができた。その後のマリヤのことはわからないが、自立への道を歩いているだろうかと思う。

わたしの場合

私の母は、５人の娘がいる父と結婚した。やがて兄が生まれ、３年後の父５３歳、母３５歳の時に私が生まれた。今でいうステップファミリーである。

小さい時は、家にはたくさんの大人がいて、しかもよくしゃべる人たちばかりだったように思う。大きくなってようやく家族の関係が理解できたのを覚えている。

父は先妻と離婚したあと、子育てや家事に困り、早々と母と再婚したのだろう（私の想像だが…）。母と上の義姉たちとは年が近く、私が生まれたときは、３番目の義姉まではすでに結婚をしていて家にはいなかった。実家に残っていた妹たちのことを随分と心配していたと思う。４、５番目の義姉たちは、まだ高校生か中学生だったはず…。

今、その当時の義姉たちのことを思うときがある。



兄は、父親にとっては６番目にして初めての男の子。とても喜んだらしいが、次に生まれた私が女の子だったので、さぞかしがっかりしたことだろう。私の名前は、父の知人がつけたらしく、その人が書き記した姓名判断の紙が、父の死後見つかった。

新しい母親が産んだ幼い子が二人。さぞや騒々しかっただろう。病弱だった兄は、いつも入退院を繰り返していたし、生まれたての私の世話はどうなっていたのかと思いめぐらすが、聞かされていたのは、義姉たちが世話をしてくれたとのことだった。

思春期だった義姉たちは、自由に自分の楽しいこともしたかっただろうに…。いまでいうヤングケアラーか？幼子の面倒はさぞかし辛かっただろうし、嫌だっただろう。



義姉のこんなエピソードがある。

５番目の義姉が、修学旅行に出かけたときのこと。実母が末っ子である義姉に一目会いたいと、宿泊先に駆けつけた。実母は、不憫に思ったのか、ちょっとした品を色々と持たせてくれた。しかし、父親から実母と面会したことを咎められると思い、泣きながらそのすべてを捨てて帰ったそうだ。

いつどこで誰から聞いたのか覚えていないが、その光景を思い浮かべると、今なら義姉の心情を想像できる。

義姉は、そうすることで家族のバランスを保とうとしたのかもしれない。

つづく

フリースクールでの SW 実践を考える④

高名　祐美

学校が休みのときはフリースクールもお休みとなる。現在、フリースクールは夏休み中。一方で、併設されている学童を利用している子どもたちは、朝から通ってくる。今回は学童の子どもたちに焦点をあててみる。

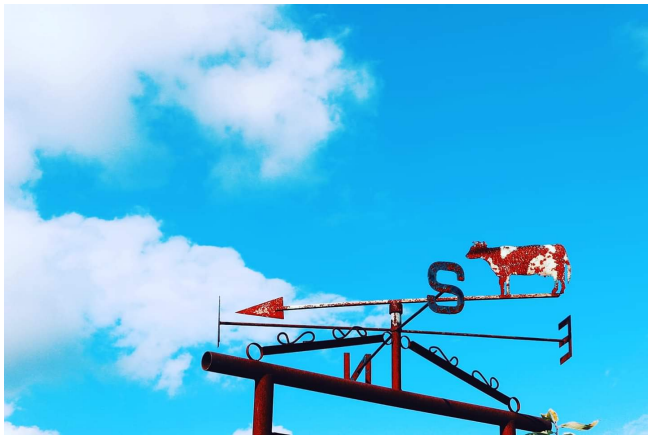
私の勤務する学童は、現在５名の子どもたちが利用している。小学校３年生の女子が４名、小学校１年生の男子１名である。夏休み中のスケジュールは、あらかじめ 1 週間単位で管理者とスタッフ、子どもたちで相談して決める。

「行動制限のない夏」。２年間中止されてきた地域の祭りは再開されたりしているが、コロナ感染の拡大はいまだとどまっていない。そのため、学童での行事はできる限り縮小し、室内で過ごす時間が多くなる。また「一緒にクッキング」などの時間も多くとれない状況にある。登校日はオンラインだったり、子どもたちが楽しみにしている学校でのプール日も数日・短時間しか利用できない。家族との旅行もやはり制限しているようだ。「楽しい夏休み」にはならない長期の休み。そんな日々の学童での時間をどう過ごすかがに頭を悩ます。

朝は学習の時間と決めているが、なかなか集中できない。静かに取り組む時間は、ほんの短時間である。学習の時間が終わると、遊びの時間になる。何をして遊ぶかをみんなで話し合うが、なかなか決まらない。Ａちゃんは勝負事が嫌い。勝ち負けが生じるゲームやトランプは「やらない」ときっぱり。Ｂちゃんは鬼ごっこで鬼になることが続くと、泣きべそをかいて遊びが中断される。みんなから「また泣いている」とよく言われている。Ｃちゃんは自分ひとりで漫画を読んで、みんなとの遊びからすぐにはなれる。漫画を読み始めると他の人の声が耳にはいらないようだ。Ｄちゃんは「つまらない！」と叫ぶ。みんなが一致して仲良く遊ぶ時間も短時間である。一日は長く、取り組めそうなことを考えて提案するが、かえってくる言葉は「やだ！」「やらない！」「おもしろくない！」。

じゃあ、どうするの？と思うが、そのうちなんだかんだいいながら、遊びをみつけてわいわいやっている。子どもたちの世界は理解しがたいが、ケガすることなく過ごしてくれればよいと傍観する。あまりこちらから口出し・手出ししないほうがよいのだと私は考えて見守ることにしている。

学童の子どもは声が大きく、自己主張が激しい。フリースクールに通ってくる子どもはあまり大きな声を出さない。主張も少ないように感じる。エネルギー量の違いを感じている。



原田牧場 Note

page10

農家のお金事情、給与編。昔は収入が多くなかったので、台所を任されている母さんが家計費を預かりその中からお小遣い程度をお嫁さんがもらっていたところが多かったようです。里帰りする時は飛行機代をもらいお土産をもたされて帰る、ひと昔前の光景に思いますが、今も個々の台所事情により、変わっていない家もあるかもです。

牛の頭数が増えてからは専従者給与が一般的になり、我が家も夫（個人事業主）以外はお給料制です。大阪の友人からは「家の仕事ってお給料じゃないんでしょ。働いた分もらえてないのでは？」と心配されましたが、働いた分をきっちりもらっています。保険や携帯代、帰省の交通費も自分で支払っているし、車も自分で購入。大阪時代とほぼ同じ様にやりくりしています。ショッピングやグルメ、習い事や旅行に使っていたお金は、田舎では使うところがなく貯まる一方で嬉しいような悲しいような。給料日のワクワクは昔ほどないですが、頑張った毎日を、ひと月に一回振り返る給料日に変わりはありません。生き物商売は気がかりの連続で気を抜けることはないので、今月も無事おさまったなと一瞬の区切りとしています。昔と違うのは、お給料の金額を見る時に牛さんのことを思います。現在、1キロ100円前後で取引されている生乳何キロ分に当たるなぁ。（何かを買う時、この生乳価格を物差しにする酪農家あるある）　命に感謝する気持ち、経営（牛の体調）が安定するように意識もでき、また緊張感ある毎日に繋がります。

ニュースになっているとおり、酪農家にはまだまだ苦しい状況が続きそうす。コロナで乳製品の需要落ち込み、戦争で餌や飼料や燃料が高騰、国と乳業メーカーが決めた生産目標を大きく上回る増産で（大規模化経営する農家に助成金を出して推進したのも国だからね！）余剰が発生し、生産抑制を強いられているのに、海外の乳製品の輸入は進めている…　個人では状況を良く出来る手立てが無く、お給料が出ない日も来るかもしれません。　が、とにかく節約とこれまでの蓄えでやりくりして、牛さんにはちゃんと食べさせたいと思います。

それぞれの農家の台所事情によりけり、と書きましたが、嫁ぐ前にその事情を知るのは難しく、来てみてびっくり！が普通にあります。いつでも助け合える家族経営の良さはわかってはいるものの、仕事が片寄っている気がする、お金のことはどうも言いづらい、よその経営を知らないので、我が家ルールが時代に合っているのか？判断しづらい、という場合に家族経営協定があります。

関係機関の第三者が立ち合って、将来の目標、役割分担、就業条件を家族全員で話し合う機会です。特に、お嫁さんが家族に加わった時や、後継者が学校を卒業して家業に戻ってきた時、うちの現状を確認すると同時に、今まで以上に意欲やりがいを持てる形態をみんなで考えることができます。昔は父さん一人がやっていた経営に、全員が参画することが大事です。家族のチームワークが整えられ最大限に発揮されれば怖いもの無し、家業がとてつもなく魅力的に感じられてくるでしょう。

誰も知り合いのいない土地で、家族だけの仕事で、なんか怖いな、感じた記憶が私にもあります。時が止まったルール、しょうがないと口癖のように言うだけ。閉ざされた空間の中で自分だけが違和感を感じていた時、こんな制度があるよ、と関係機関が説明に来てくれ、外部と繋がる窓があった！と安堵しました。　協定を文章化したり調印式までやらずとも、家族内で話のきっかけになればいいのです。

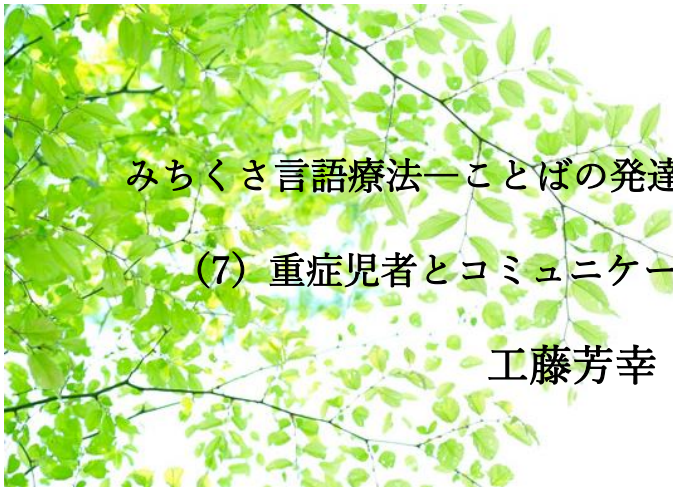
さて、牧場の父さん母さんが若い時代はどのような賃金制だったのか？　聞いてみました。家業は仕事というより生活だったのでお駄賃程度だったよ、空いている時間に林業の手伝いに行ったり、さけます孵化場の卵の選別に行ったりしてお金を貯めて、欲しかった腕時計を買ったよ。親父は外で働くのは嫌がったけどね、とのこと。生きていくのにやっとの生活の中でも自分の力で手に入れた欲しいもの。どんなに嬉しかったか想像しながら話に聞き入ってしまいました。

ちなみに、わが家の搾乳アルバイトは時間給1200円（朝5時～と夕方16時～それぞれ2時間半ずつ）。昼間は別の仕事をするダブルワーク可能。私も昼間は地域のローカルデザインの作業をしていたりします。　JA北海道ではパラレルノーカーと呼んで推進中。興味のある方はぜひどうぞ。



筆者　　原田　希　ハラダノゾミ

1973年　大阪府吹田市生まれ
2006年　酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ移住　自身も酪農家に
2017年　北海道農業士に認定
　　北海道指導農業士の夫とともに、
　　新規就農者の支援や女性農業者向けの勉強会のお世話係を担当



みちくさ言語療法―ことばの発達と障害の臨床より―

（7）重症児者とコミュニケーション（その 3）

工藤芳幸

イニシャルケースのＨさん

遷延性意識障害の H さん（まだ若い女性だった）と関わり出したことを前回の最後に述べた。私にとって H さんが ST としての「イニシャルケース」だと思っている。他にも担当していた方たちがいたが、全て前任者からの引き継ぎで、ゼロからの新規で担当したのが H さんだったからだ。H さんの状態はかなり重い。ほとんどどこも動かすことができず、覚醒状態も不安定な H さんの〈コミュニケーションの窓口〉を探し出すことに取り組み始めた。

目の動きも含め、体の動きが出てこないことには自発的に何らかのアクションを起こすことが難しい。OT（作業療法士）や PT（理学療法士）の訓練場面にも同席させてもらい、触れ方や座位姿勢の補助の仕方、体の前で固く握り込んでしまっている上肢を開く方法などを教わった。体全体が固まった状態では動きを出すためのあそびがない。また、何かに向かって活動するためには座位や側臥位（横向きに寝た姿勢）など、周囲の環境からの情報を得やすい姿勢が重要である。ST の養成課程ではこうした体への働きかけについて深く学ぶことがない。現場で他職種から指導を受けて、体のことも少しずつ学びながら、H さんが能動的に外の世界に働きかけるきっかけを作っていくことを目指した。最初の頃は、姿勢づくりばかりをしていたので、見た目は OT や PT のように見えたかも知れないが、やはり時間をかけて筋肉のリラクゼーションをしてからの方が、声かけに対してちょっとした動きを見せてくれることもあった。

スイッチ操作による伝達の試み

「不快」と取れるような表情は見せてくれるようになったが、目的がある行動、再現性がある行為はなかなか見られなかった。しかし、当初に比べると僅かだが眼球や手指、頸部の動きが見られるようになった。

私は H さんの動きを拾ってスイッチ操作によって外界に働きかけることができないだろうか？と考えた。先述した AAC（Augmentative and Alternative Communication ；拡大代替コミュニケーション）と呼ばれているものの 1 つである。

少し解説すると、AAC とは、音声言語に代わる、あるいはそれを広げる伝達手段の総称で、サインやさまざまなシンボル絵記号、文字を打つと音声化する機器やアプリなどが含まれる。大きく分けるとノンテク、ローテク、ハイテクに分類される。今でこそ、iPad などの機器に対応したさまざまなアプリが開発されているが、当時はまだまだ高額な PC ソフト

やAACに特化した機器が必要だった。Hさんにはまずはスイッチを押すと音声が出る、というシンプルなものを試みた。H さんの僅かな動きを拾って、能動的な発信や選択ができるような機会を作りたかったのである。スイッチを押して音が出る、という因果関係を理解できているのかどうか、それも確かめようもないが、まずは押す動作を促すことに取り組んだ。

1年ほど経ったある日、車椅子に座った状態でいつものように上肢のリラクゼーションをした後、ゆっくりと首を振るように顔を横に向ける動きが出た。「これは…もしかすると…」。スイッチを顎のあたりにあてがってみると、カチカチと繰り返しスイッチを押してくれた。初めて志向性が具体的に見えてきたようだった。

異動のため私と H さんの関わりはここまでだ。振り返ると、Hさんのニードやディマンドを十分に捉えていたのか疑問であり、反省ばかりである。この時は少しでも伝達手段を得てもらうことにばかり注力していたように思う。AACの試行自体が間違いではないとしても。

わかろうとすること、わからないこと

児童指導員からSTと、比較的障害が重い方との関わりから福祉や医療の世界に入った私だったが、援助者としての浅はかさが露わになったのが、「超重症児」と呼ばれる、人工呼吸管理などの医療的ケアが必要な子どもとその親との関わりだった。

ある時、まだだいぶ小さく、重い障害を持った子どもを抱え、大きな不安を抱えた母親から「どう介助してあげたら良いのか・・・」と問われた。その時私は鼓動が早まり、体を緊張させ、思わず「PT さんや OT さんたちもいるのでまた相談してみましょうね」と答えたのである。身体のことはPTが専門です、は、間違いではないかも知れないが、重い障害がある子どもを前にした母親の不安を受け止めること、向き合うことから私は逃げたのである。私は自分がこうした場面で硬直してしまうこと、浅はかな助言をしてしまうことを知った。

振り返ってみると、当時の私はSTとして何とか役割を果たさなくては…ということにばかり注意が向いていたのだと思う。児童指導員を始めた頃と同じ状態に陥っていた。比較的若いセラピストにはこのような時期があるかも知れない。リハビリ職は機能障害のセラピーをする立場なだけにそれを抜きにした専門性はなく、技術の向上は必須である。ただ、それを身につけることにばかり注意が向いたときに見ているのは自分であって相手ではない。そして相手の機能ばかり見てしまい、対話的な関係から離れてしまう。STなのに皮肉なことだ。

ぐるっと1周回ってびわこ学園の岡崎英彦先生の「本人さんはどう思てはんのやろ」に立ち戻る。重症児のコミュニケーションを考える上で、当人が何をどのように認識し、理解し、感じているかを確かめて想像しようとする営みがないと、「自己」選択を援助しているとは言えないだろう。当然これは簡単なことではない。簡単なことであれば「本人さんはどう思てはんのやろ」ということばが残ってはいないだろうし、その後の臨床で簡単にこれを実現できたこともない。さらに言えば、重い障害がなかったとしても、他者のことは基本的にわからない。わからないが、わかりたいと願い、理解の輪郭を作っていくために少しでも重なる部分や通じる道筋を見つけていく。原則的に人との関係も、コミュニケーションの援助も、そのようなものではないかと思っている。

かけだ詩⑩

そだちと臨床研究会
川畑（かわばた）　隆（たかし）

らせん状の階段

辛口と書いてあっても甘すぎる
そこで日本酒度は頼りになる
プラス十二度
たしかに辛い　でも
この辛さは焼酎に近づきすぎた

淡麗もいいけど
もうちょっと芳醇さもほしいかな
純米が感じはよいけど
そうじゃなくてもいいか
三十年ぶりかなあ『鬼ころし』

またやってるよ　次にいかないね
六十代はもっと落ち着いてるかと思いきや
寄り道や迷い道は途切れない
もしかしてらせん状の階段？
いや階段だったらまだいいんだけど

心理学

心理の学　いや心の理学じゃないのか
高校生のもつイメージは大学に入って裏切られた

「欲求不満になると攻撃的になる」なんて当たり前
実証主義が現代心理学だと言ったって足踏み感半端ない

心理学じゃなくて　臨床心理学だ
ゴールに見える立札が十八歳の幼子に進路を示した

「早生まれの子は〇〇の発達が遅れる」式の学術情報
世の親を不安にさせる心理学はやめてと発言したら睨まれた

エビデンス・ベイストの重要性が注目され始めた頃
実験主義の友人の私に対する勝ち誇りに見えた底の浅さ

心理学とか臨床心理学とか　ナニナニ学じゃなくてと
児童相談の現場は長い時間をかけて教えてくれた

そして大学の教員になり　専門は臨床心理学？
いや　児童福祉や教育分野等における対人援助

エビデンス・ベイスト…証拠にもとづいてものを言おうという主張

ズムズム

頬っぺた　ちょっとフックラしはって
いきなりですが　ルッキズムやな
ポンキッキみたいで　おもろいな
なんやソレ　ッキだけやないかい

ますます　お元気そうでって
年寄りやから言うてたら　エイジズムやで
元気やって　ほめてんねんで
若者やったら　そう言うてほめへんやろ

レイシズムいうたら　人種差別や
セクシィズムは　性差別やなあ
エゴイズムやったら　前から知ってるけどな
ナショナリズムも　よう言うやないか

それからセクショナリズム　とかな
サディズム　マゾヒズムはどうや
でも最近　主義より差別のほうが
ピンとくるイズムが　増えてきてへん？

リズムとか　プリズムとかな
どこが　主義やねん差別やねん
ズームインとか　ズーム会議とか
ウーって伸びてきてるがな　大丈夫かオイ

でもなんか　ズムズムズムズムしてきたわ
それを言うなら　ムズムズやろ
今日はよいお天気で　って挨拶して
オレ　大丈夫やろか

更新

痛ければ痛くなくなるように
喧嘩をすれば仲直りしたくなるように
心地好さを求めて生きている日々

相手から負け続けて
嫌な思いを繰り返してきた人は
そんな思いをもうしたくない
でもそこから
なかなか抜け出せない

生きていくために心を立て直し
今度は自分が勝とうとする
でも相手も負けたくないから
その作戦はなかなかうまくいかない
心地好さは手に入らない

勝ち負けにこだわらず
相手と一緒にいて
心地好い思いになれることは
たくさんあるのに

勝ち負けに敏感な人と話すには
主導権のことを考えてみたらいい
どう打ち負かすかではなく
勝ち負け路線には乗らない方向に
会話の主導権をこちらに移していく知恵
まずは負けるが勝ちもその入り口

相手からそんなふうに主導権をとられ
心地好い思いをするとしたら
それは負け続けてきた人の新しい体験
根強い伝説は
ほんの少しずつでも
書き換えられるかもしれない

B型

五歳の孫娘の血液型がわかった
おう　B型か！
私とおんなじじゃないか

気は小さいけど大胆
真面目なのに不真面目
おとなしいがうるさい

気楽そうで気にする
几帳面だけど面倒くさがり
細かいわりに大雑把

自分で思っている私の特徴
面白いじゃないか
性格のオンパレード

心理学の教員やってるアンタが
血液型性格分析？
何をやってるんだ！

べつにB型の性格をあげてるわけじゃない
一緒なんだって　嬉しいじゃない
突っ込まないで許してよ

同型

自閉的特徴の強そうな女の子

二年生ぐらいだろうか
人とはすれ違うくらいの関わり合い
それでも　見ている
そうか私は初めて見るおじいちゃん

私も見る
一度見られたから　また見る
見るからまた見られる
見られるから手を振る
手を振っている私を長く見ている

彼女が来る　近づいては離れる
私のマスクの上の目が瞬きの連続で迎える
彼女が触る　触られるから触る
彼女が座りに来る　椅子になる
椅子に背をのせ　彼女は壁をのぼる

見ると見られるとは同じ動き
同じ動きは彼女から仕掛けたもの
仕掛けたことによる同じ動きは
彼女と連動するつながった世界
手ごたえは彼女にも私にも

こだわりといわれる反復行為も
自分の外から受け取る手ごたえが養分
未統制にみえる身体の動きも
ひとりでその場にいようとする努力
そんな連想がとびかう

みんなでダンスの時間
彼女は輪から外れてはいても
確実にリズムに乗っているように見える
近づいては離れていたもう一人の男の子
彼のダンスの時間はどんなだったろう

保育と心理

保育は関わる　心理は眺める
保育は子育て　心理は理解

保育は仕切る　心理は仕切られる
保育は教える　心理は教わる

保育は導く　心理は放っておく
保育は保護　心理は体験

保育は現実　心理はその一歩手前
保育は適応　心理は充足

保育と心理　目線は一緒じゃない
でもこれまで　ずっと一緒にいる

保育と心理　退け合わないのは

二つの目線を　みんな持っているから

諍（いさか）い

干渉するなという干渉
支配するなという支配
そんなことに気づいてハッとする
争うなと自分に言い聞かせるか
でも伝えたいことは熱をもっている

干渉しないなんてことがあるか
支配しなかったことがあるか
現実は目の前で渦巻いている
言葉がその渦に吸い込まれる
概念はそこに整然と並んではいない

争ったことをしばらく後悔する
しかしそのあと景色が違ってきた
より現実をそしてより相手を
わかろうとしている自分がいる
争ってよかった

命

兵隊さんも死んだらあかん
兵隊さんは死ぬこともあるしと
言うたらあかん
兵隊さんも死んだらあかん

そりゃ一般市民や子どもは
絶対死んだらあかん
でもおんなじように
兵隊さんも死んだらあかん

義務やとか望んだからとか
それが仕事やから言うて
さもあたりまえかのように
兵隊さんも死んだらあかん

死んだ兵士何百人とかいうて
名前ものうて
壊された街や建物とおんなじように
兵隊さんも死んだらあかん

⑩了　二〇二二年五月三十日

応援、母ちゃん！

－子育てしながら働く母親たちのリアル－

10

たまむら　ふみ

玉村　文

１．　はじめに

2022 年４月に育休明けで仕事復帰をしました。2022 年４月で１歳になる長女は、３歳の長男とともに保育園に通うようになり、平日の日中はそれぞれで過ごすようになりました。子どもたちは個別性を伴いながらも成長しています。その様子を記憶しておきたいのに、日々の生活に追われて写真を整理したりマメにできていません。この対人援助学マガジンの連載は、年４回の発行に合わせて、子どもたちとの思い出を記録化することに役立っています。

２．育休明け職場復帰

育休からの復帰は２回目ということもあって、焦らずにいこう、でもできることは全部取り組むというスタンスでいると、１回目の育休復帰のときよりも早く仕事に没入しました。その結果、気づけば業務量を調整しないと時短勤務の枠組みで収まらないことになっていました。

子育てと仕事を両立するということは、子どもの体調などで急に仕事をお休みする可能性があるという前提で仕事をすることになります。そのため、仕事を前倒しで進めていきます。子どもが２人になり、急に休む可能性も２倍になると思っていたことも、仕事を前倒しで進めていた理由です。しかしながら、蓋を開けてみると、子どもたちは今のところ元気であまり休むこともなく、

仕事を調整しないといけないという事態にはまだ陥っていません。結果的に、自分の想像以上に、業務を進められ、役割を担えたことになります。



3．モチベーションを高く保つために

子どもが生まれる前まで、わたしはたくさんの業務が割り振られたり、役割を担えること、同僚から頼りにされることが嬉しいと思っていました。それが適正量を超えている、例えば時間内に終わらず残業したり休みの日を仕事に使うという場合でも、モチベーションは高く保たれていました。一方で、子育てとの両立が前提となると、時間内に終わらない業務量を抱えることは、モチベーションを下げてしまうことを体感しました。そこで、上司に業務分担で負担が多いことを伝えることができました。そしてすぐに業務量の割り振りの修正が入りました。業務量が減ったことで、休憩を取ったり、同僚とのコミュニケーションや関係者との情報交換などに時間を使えるようになりました。

仕事量が多くてもモチベーションが保たれていた時代と変わらないのは、業務を自分でコントロールしている感覚がもてていることが、わたしのモチベーション維持に役立っているということです。子育てでは、自己コントロールが効かないことも多いです。こちらの思惑や計画とは関係なく、子どもたちは自分の要求を出してきます。それに合わせて動くように、逆にコントロールされている感覚をもつこともあります。

また、子どもの生活リズムを守り、質の良い食事を提供したとしても、子どもの体調を完全にコントロールすることはできません。では子育てにはモチベーションがないのかと問われると、そんなことはなくて、子育てとはそういうものと受け止め、毎日格闘しています。子育てをしているからこそ、業務量や業務内容をコントロールできることは、モチベーションの維持や向上につながっていることを感じています。

４．地域コミュニティに参画したい

わたしは私達家族が住んでいる自治体の「子ども子育て会議」に、市民公募委員として参画しています。市が行っている子育てにかかわる事業への評価や、事業自体に意見を伝えることが役割です。任期は２年で、もうすぐ任期が終わる時期です。

なぜこのような活動を始めようと思ったのかというと、子育てを始めてみると住んでいる地域のことをもっと知りたい、地域の役割をより担っていきたいと思ったからです。これまでは意識することがなかった地域との関わりが、子育てをして初めて場や人と出会うという経験をしました。民生児童委員さんが運営している居場所に出入りしたり、地域子育て支援拠点を利用することもあります。そのなかで、この地域で子育てをして助けられていることを実感し、それを次の世代にも返していきたいと思ったのです。たまたま、市の広報誌を読んでいて、「子ども子育て会議」の委員募集がありそれに応募しました。その後、市の担当部署の方と面接をし、市民公募委員として委嘱されました。

年に３回ある会議は、コロナ禍で書面開催になったこともありましたが、対面で実施できたときは、司会の方の采配も上手なので、参加した委員全員が発言することができ、意見を伝え合う場になっていました。副委員長からは、「あなたたち子育ての当事者が発信することが大事だから」と背中を押してもらい、子育て経験を通しての困りごとや施策に反映してほしい意見を伝えたりしています。

例えば、雨の日に遊べる場所の確保はされているのに、夏の猛暑や冬場に子どもと遊べる場所の確保という視点が抜けている点を指摘したことがあります。この夏の災害級の暑さのなか、子どもをどこで遊ばせるのかは大きな困りごとです。地域子育て支援拠点もありますが、そこは圧倒的に０才児が多く、走り回る幼児を連れて行くと、赤ちゃんを踏んづけてしまうのではないかと躊躇を感じる環境です。地域子育て支援拠点の位置づけとしては、生まれてから就学前まで利用できることになっています。しかしながら、０才児の利用が圧倒的に多いのです。そこに走り回る幼児を連れて行くことに躊躇するという経験は、ママ友との間でも共有されていました。連れて行ってはいけないと思っていた、と話すママ友もいました。夏冬は行ける場所がなく、毎週末近所のイオンで遊ばせてるというママ友も。地域子育て支援拠点では、狭い空間のなかで赤ちゃんと幼児との棲み分けが難しいという問題もあります。幼児用の別の拠点が本当に必要なのかという意見もあると思います。どのような形で子どもたちが遊べ

る場所を確保できるのか、今後見守り続けいきたいと思っています。このように、実際の経験やママ友と共通して困っていることを意見として発信しています。

意見を伝えるだけでなかなか反映されないだろうという意見もあると思いますし、わたしもそう思っていました。しかしながら、ある事業の名称変更を提案したところ、次の会議では名称の修正が入っており、意見が反映されるという経験もしました。

委員になってみて、子育て支援にかかわる行政施策が一覧で知れること、その背景や課題点、将来の展望にまで触れられることは、発見や気付きも多いです。例えば、幼稚園の需給調整の問題が話されており、保育園と比べて幼稚園の定員割れが顕著になっており、集団教育に支障が出ていること、公教育としての役割についても話されており、保育園しか経験していないわたしには、視野を広げること、問題は地続きであることを実感させられました。それらがどんな問題やテーマに発展していくのか、と想像力を働かせる機会になっています。

５.「いま」だけでなく

「未来」を大事にしたい

業務量の調整をしてもらいながらではありますが、仕事と子育てとの両立をはかっています。どちらも精一杯やって力及ばずのことも多いですし、至らないこともあります。「いま」で手一杯ではあるのに、それでも、仕事と子育てだけではなく、地域コミュニティに参画し、未来を考えるような機会を大事にしています。わたしにとって、「今日」を無事に乗り切れることと同じくらい、「未来」のことを考えてより良い段取りを組んでいくことは重要なようです。育休から職場復帰をしても、それが変わらなかったことは発見でした。きっと、子育て渦中は近視眼的になりがちなわたしゆえ、視野を狭めないための一種の自己防衛なのかもしれません。

HITOKOMART No.10

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長



多くの家庭でも同じだと思うがわが家の納戸には二人の娘たちが子どもの頃のおもちゃやぬいぐるみが大量に詰まっている。７４歳になる私の物は少ないがいくつかの品物は古い荷物の中から時折現れて、昔の記憶を甦らせてくれる。

中には私や家内が子供の頃に使っていたボードゲームもいくつか混ざっていて、それらは今も私と孫のコミュニケーションツールとして活用している。先日は亡くなった家内が小学生時代に使っていた小さなルーレットの箱の裏に、当時のクラス名と名前の手書きの文字を見つけて、小学3年生の家内の遊ぶ姿を思い浮かべていた。

子供の頃のおもちゃ箱は幼い日に連れ戻してくれるタイムマシンである。

糸を張る

象を測る



毎日の入浴時にヘルスメーターに乗るのがクセになった。
最近のものはいろんな機能が付いていて、体脂肪率や骨密度など細かいデーターを表示してくれるので面白い。
体重はあまり気にはしていないのだが、一つ楽しみにしているのが『身体年齢』という項目だ。
娘に言わせると、あれは誰でも大抵低めに表示されるという事だが現在はずっと61歳表示が続いていて、ひと回り以上若く表示されるのはやはり嬉しいものだ。
そこでちょっと欲を出して50才台を目標にしているのだがこれがなかなか高い壁になっている。
すぐに手が届きそうな目標は継続の条件だという事を実感している。

音楽を観る



昔ながらのレコードがちょっとしたブームのようだ。
レコードを手にとって、盤面に針を下す作業も若い世代には新鮮に感じる要素のようで、一時は入手困難だったレコード針もアマゾンで簡単に手に入る。
針がレコードの溝を走る度に盤も針も磨耗して行くから、音の劣化という面ではデジタルには敵わない。
しかし音の柔らかさとか暖かさがアナログレコードの魅力なのだという。
私自身は音に対してそれほどのこだわりは無いのだが、ビジュアルとしてのレコードには思い入れがあって、魅力的なレコードジャケットのデザインには若い頃から多大なる影響を受けたものだった。
今はそれが無いのが淋しい。
音楽を目でも楽しめた時代だった。

レコードを歌う



オオサンショウウオと『だるまさんがころんだ』をする

『だるまさんがころんだ』は関東の言い方。関西では『ぼん（坊）さんが屁をこいた』である。

いかにも関西と関東の気質の違いがはっきりと出ている。

この遊びは日本だけかと思っていたのだが調べてみると、いろいろな言い方の違いはあるものの、ほぼ同じパターンの遊びが世界中にあるらしい。

アメリカでは『Red light Green Light』と言うのだそうだ。どうやら信号と同じで青の時は動いて、赤になったら止まれということなのだろう。

ちなみにイギリスでは無言のままで、オニは突然振り返るという方法らしい。

道具は何もなくても誰でも参加できるこの遊びは万国共通なのだという事がわかった。

私は若い頃、某マンガ週刊誌で4コマ漫画を連載していた時期がある。

あとにも先にも人生で一度だけ、飛び込みで東京の出版社に原稿の持ち込みをした事があるのだが、持ち込みの原稿が足らず、新幹線の中でも描いていた思い出がある。

当時対応してくれた編集者との出会いも運が良かったのだがすぐに次の週から連載をもらうことができた。

最初の2回は時代劇4コマだったのだが編集部の注文で3週目からは子どもを主人公にした生活4コママンガを書くことになった。そのタイトルが『だるまさんがころんだ』であった。

そんなわけで、関西人の私だが坊さんよりだるまさんに愛着があるのである。



龍を飛ばす

透明人間になれたら

もしも透明人間になったら、と考えた事は誰もが一度はあるだろう。
ちょっとしたイタズラや普通では入り込めない場所に侵入する事など、子どもの頃はそれを想像するだけで一人で豊かな時間を過ごせたものだ。
小説や映画の中でもたびたび登場するが、透明人間になるパターンは2つである。
特殊な薬を飲んだり注射する方法と透明になる服を着る方法だ。
しかしどちらも欠点があって、薬の場合は身体が透明になっても衣服はそのままのなで裸でないといけない。
夏場ならまだしも、寒い季節は耐えられないし肌を守る物がないのだから大変だ。虫にも刺され放題だ。
おまけに薬の副作用も気になる。
透明になる服の場合は手や顔を含めて全身を覆い尽すのはなかなか辛そうだし、入れ墨は勿論の事、ちょっとした汚れでもとても目立つ。
そして当然の事ながら、街中では人も車も避けてはくれない。
そんな風にいろいろ考えていくと、透明であることのメリットはほとんど無いという結論にたどり着く。
何物にも制約されずに自由に生きるという事が実はとても不自由であるという現実社会とよく似ている。

ビジュアル・ナラティブの可能性：「塔本シスコ展」と「ふるさと絵屏風」を中心に

土元哲平

2022 年 8 月に、筆者はビジュアル・ナラティブに関心を持つ研究者とともに、滋賀県内の地域づくりや芸術活動について学ぶ「ビジュアル・ナラティブ合宿研修」に参加した。本稿では、「塔本シスコ展」と「ふるさと絵屏風」の 2 つを中心に取り上げ、これらとビジュアル・ナラティブとの接点について考えたい。

ビジュアル・ナラティブとは

ビジュアル・ナラティブは「視覚イメージによって語る行為、あるいは視覚イメージとことばによって語る行為」(やまだ, 2018a, p.262)である。やまだ (2018a)によれば、ビジュアルは、身体感覚に近いイメージを伝えることができるのに加え、それ自体が特有の「テクスト」であり、独特の「経験の組織化のしかた」「語り方」「コミュニケーション方法」をもつ。狭義の言語を用いたナラティブは、語り手の視点や価値観の影響を受けやすいのに対し、ビジュアルでの語りは、1 つのビジュアルの中で「異なるパースペクティヴから見た見方を一画面に同時共存させたり、異なる時間の出来事を一画面に描いたりする」(やまだ, 2017, p.14)ことが可能であるため、読み手による解釈の自由度が高く、様々な視点から物語をイマジネーションできるという特徴を持つ。従来の物語が時間の経過を前提としているのに対して、複数の時間、世界が同時に存在することを許容するという点が、ビジュアル・ナラティブの革新的な点の一つである。例えば、ヒエロニムス・ボスの三連祭壇画（トリプティーク）である『快楽の園』を例にとると（図 1）、3 枚の絵それぞれに異なる世界が描かれているだけでなく、1 枚 1 枚の絵にも、さまざまな時空間が同時共存している。この絵画の鑑賞者は、絵のどの部分からでも絵を解釈したり、物語を生み出すことが可能である。



図 1　The Garden of Earthly Delights in the Museo del Prado in Madrid, c. 1495–1505, attributed to Hieronymus Bosch (1490-1500) Public domain (https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/6/6d/The_Garden_of_Earthly_Delights_by_Bosch_High_Resolution.jpg)

以下では、「ビジュアル・ナラティブ合宿研修」の中でも、「塔本シスコ展」と、「ふるさと絵屏風」の見学を取り上げ、それらとビジュアル・ナラティブとの接点について考えたい。

塔本シスコ展

第 1 に、滋賀県立美術館で開催されていた「塔本シスコ展」（会期：2022 年 7 月 9 日～9 月 4 日）（https://www.shigamuseum.jp/exhibitions/4046/）での経験について述べたい。筆者自身、塔本シスコ（以下、シスコさん）の名前は知っていたものの、実際に絵を目にするのは初めてであった。シスコさんの絵を見て、まるで生き物のような桜島の姿をはじめ、1 枚 1 枚の絵に圧倒された。以下、箇条書き的であるが、ビジュアル・ナラティブとのつながりについて考えた点を記述する。

① シスコさんの絵をいくつも鑑賞して感じたことは、1 人の個人の絵であって、一見ユニークな絵でも、何らかの一般性が見られることである。シスコさんの絵は、1 つ 1 つが特徴的であるが、どれを見てもシスコさんの絵だとわかる。さらに、絵における余白の使い方や曲線などは、「自由に描いた」ように見えて、どこかモデルのようなものがあるように感じる。それは、シスコさん自身が、植物や風景の観察を通してブリコラージュ的に作り上げてきたモデルなのかもしれない。例えば、曲線の曲がり方は植物が自然

に作るかたちと類似している。

② 絵を鑑賞する経験と、パンフレットの絵を見る経験の違いを感じた。美術館での絵画の鑑賞は、身体を介した経験であるように思われる（絵の具の質感や、実際の大きさなどを感じる）。一方で、パンフレットに印刷された絵画は、どこか遠くにあるものとして感じられる。これは、ビジュアルを研究する際に、実際の絵を見て分析することと、電子化したデータを PC 上で分析することとの違いにも関係すると思われる。

③ シスコさんの絵は、「美術館で収蔵している芸術作品を相対化」していると感じた。滋賀県立美術館では、事業方針として「すでにあるコレクションを相対化するための（中略）作品の収集」をおこなっている（滋賀県立美術館, 2022）。シスコさんの絵を見た後に他の収蔵作品を見ると、“伝統的な”絵から距離をとることができた。

シスコさんの絵は、一見すると誰でも描けるように見えるが、決してそうではない。ビジュアルで語り続ける中で生み出されるモデルとでもいうべきものが、シスコさんの絵を芸術たらしめているのではないだろうか。

ふるさと絵屏風

第二に、滋賀県甲賀市にて見学した「ふるさと絵屏風」を取り上げたい。これは、コーディネートをしてくださった上田洋平先生が中心的に取り組んでいる地域主体の活動である（上田, 2014 を参照）。こちらも箇条書きとなるが、ビジュアル・ナラティブとの関係について素描したい。

① 「ふるさと絵屏風」には、地域の人びとが子ども時分に経験した出来事が描かれている。地域の方々は、この絵屏風を介して生き生きとコミュニケーションをしていた。このように、ビジュアルには、ビジュアルを媒介とした「三項関係」をつくることで、語りを促す機能がある（やまだ, 2018b）。一方で、この時代を知らない子どもたちや、他の地域の人がふるさと絵屏風を見ても、そのような生き生きとした語りは生成されづらいだろう。しかしながら、「ふるさと絵屏風」について、地域の方が重要であると考えているのは、絵屏風それ自体を残すことというよりも、「絵屏風に向き合う姿勢」の継承であった。つまり、将来、子どもたちに、絵屏風を見て話に花を咲かせる自分たち（地域の方々）の姿を思い出してほしいということである。この点は、「ビジュアルが他のビジュアルを生成する」という意味で興味深い。上田（2014）は、この「ふるさと絵屏風」を作成する一連のプロセス（心象図法）について、次のように述べている。

> （心象図法の）その本質は、地域で経験された個々の事実かが絵画の中に正しく記録・復元・保存されることにあるのではなく、地域に暮らしあるいは地域に関わる一人ひとりの記憶や経験を持ち寄って、その意味や確からしさを語り合い高め合いながら、まさ

にそのように共に語り合える過去を制作しようとする 共同創造行為であること、そのように語り合える時と場の実現であることにある。手法の工程のところどころにそうした場や語りを触発する機会が組み込まれている。（上田, 2014, p.6）

② ビジュアルを語る中で、特定の絵についてのエピソードが、パフォーマンス化され、ドラマ化されるプロセスは、私たちが日常的に研究紹介をしたり、詩を書いたり、論文を書いたり、オートエスノグラフィーを書く際にも通ずるプロセスであると考えられる。「ふるさと絵屏風」の語り手は、聴衆を意識しながら、共有できたり笑い合えるようなビジュアルの「むすび」方を探っていく（ビジュアルの裏側にある二重のストーリーも含めて）。このような、ナラティブのパフォーマンス化、ドラマ化は、自己物語を構築していくことにも関係すると考えられる。

以上、本稿では、ビジュアル・ナラティブに関連する 2 つの研修を取り上げたが、研修全体を通して、人々のライフ（生活・生きること）とビジュアルとの深い結びつきを改めて実感した。また、「ふるさと絵屏風」のように他者とビジュアルを「共同生成」（やまだ, 2021）することの重要さを再認識した。「ビジュアル・ナラティブ研修」では、琵琶湖上で漁師の方からお話を伺ったことも印象に残っている（図 2）。そこで感じたのは、琵琶湖は私たちにとっての「庭」である、ということであった。つまり、琵琶湖は、人によって耕された（cultivated）自然であり、HOME と PUBLIC のあいだにあり、様々なアクティビティがおこなわれ、自己との対話の場でもあり、大切に「手入れ」「お世話」し続ける必要がある場所であった。こう考えた理由の一つは、筆者自身が庭の研究に取り組んでいるから、ということもあるが、それでも「庭」というイメージが腑に落ちたのであった。シスコさんの作品「自由の女神達」（1994）にも「塔本シスコはキャンバスを耕す」と書かれていた。「庭」は、芸術の営みを理解するメタファーの一つとして重要なのかもしれない。



図 2　琵琶湖上（竹生島近く）にて漁師さんのお話を伺う

謝辞

現地に精通している上田洋平先生のコーディネートがあってこそ、深く味わいのある経験をすることができました。1つ1つの経験に心から感動しました。記して感謝申し上げます。

引用文献

滋賀県立美術館. (2022)　ミッション　https://www.shigamuseum.jp/about/mission/

上田洋平. (2014)　絵画制作を通じた地域生活誌の創発：心象図法による実践とその展開　滋賀大学環境総合研究センター研究年報, 11(1), 3-22.

やまだようこ. (2017)　ビジュアル・ナラティヴ：時間概念を問う　こころの科学とエピステモロジー　創刊準備号, 9-15.

やまだようこ. (2018a)　ビジュアル・ナラティブ　能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦　質的心理学辞典（p.262）　新曜社.

やまだようこ編（2018b）　N：ナラティヴとケア　第9号　特集：ビジュアル・ナラティヴ――視覚イメージで語る　遠見書房.

やまだようこ（2021）　ナラティヴ研究：語りの共同生成（やまだようこ著作集　第5巻）　新曜社.

バックナンバー

- 土元哲平. (2022). 転機と偶有性（キャリアと文化の心理学（8））. 対人援助学マガジン. 49. pp. 259-263. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol49/43.pdf
- 土元哲平. (2022). 「よいリハビリテーション」メタファーとキャリア教育（キャリアと文化の心理学（7））. 対人援助学マガジン. 48. pp. 267-275. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol48/51.pdf
- 土元哲平. (2021). へき地小規模校で学ぶ意義について考える：「オートエスノグラフィックな発達」概念を手がかりに（キャリアと文化の心理学（6））. 対人援助学マガジン. 47. pp. 273-275. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol47/51.pdf
- 土元哲平. （2021）. 職業指導からキャリア教育へ（キャリアと文化の心理学（5））. 対人援助学マガジン. 46. pp. 278-281. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/45.pdf
- 土元哲平. （2021）. 小学校におけるキャリア教育：「役割」を介したオートエスノグラフィックな発達（キャリアと文化の心理学（4））. 対人援助学マガジン. 45. pp.318-322. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol45/52.pdf
- 土元哲平. （2021）. オートエスノグラフィーの特徴と主流の方法論（キャリアと文化の心理学（3））. 対人援助学マガジン. 44. pp.261-263. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol44/51.pdf
- 土元哲平. （2020）. 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー（キャリアと文化の心理学（2））. 対人援助学マガジン. 43. pp.287-299. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/52.pdf
- 土元哲平・サトウタツヤ. （2020）. 教育・発達心理学とキャリア教育の接合（キャリアと文化の心理学（1））. 対人援助学マガジン. 42. pp.288-303. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol42/51.pdf

新潟水俣病概論Ⅱ（症候と認定基準の変遷）

退院支援研究会　本間　毅（新潟市）

＜はじめに「診断」について＞

例えば、お子さんの運動会の帰り、家族でファミレスへ寄って夕食をとった男性Aさんが、帰宅後に体がだるくて鼻水が止まらない。炎天下の応援のあと、冷房が効いたファミレスに長居して風邪でもひいたのかと思い、市販の風邪薬をのんで早めに床についた。しかし翌朝も体がだるく、のどに違和感があり、食べたヨーグルトの味がいつもと違うので、かかりつけのクリニックを受診した。Aさんが感じた、体がだるくて鼻水が出る、のどがイガイガして物を飲み込むときに少し痛みがある、食べ物の味がよく分らない、の点線部は、**「自覚症状・自覚所見」**である。体温38.5℃、咽頭部の発赤と扁桃腺の腫れ、インフルエンザの検査は陰性だが、新型コロナウイルスの抗原検査とPCR検査は陽性。初診時の胸部レントゲンには異常が無かったが、自宅待機3日後から喘鳴(ぜいめい；聴診器を使わなくとも聞こえる異常な呼吸音)が聞かれ、パルスオキシメータの目盛りは90%を下回り、かかりつけ医から紹介された病院で撮影した胸部CTにスリガラス状の陰影が認められた。アンダーライン部は、男性が新型コロナウイルスに感染したと診断するために有用な**「他覚症状・他覚所見」**である。

このように、病気の時に現れる心身の自・他覚的変化の総称を「症候」といい、病歴と症候、その他の参考情報をまとめ、医師は病気や怪我の「診断」をする。疾患によっては、医師の診断書を参考に、一定の基準に基づいた社会的サービスの受給や制限の必要性を行政の会議などで「認定」や「判定」をする。新型コロナウイルス感染症なら、症候や検査データは揃っていないが、発症の可能性が疑われる人や濃厚接触者に自宅待機と経過観察を求めるのは、保健所と行政である。

かかりつけ医が保健所と連絡をとり、Aさんの家族全員の検査を行なったところ、無症状のお子さんと奥さんも抗原検査・PCR検査が陽性（**家族集積性あり**）だった。運動会の参加者と、ファミレスにいた人たちに検査を呼びかけ、学校やファミレスはクラスターになっていないことが判明したが、Aさんが住む某町3丁目の4家族に複数の感染者（**地域集積性あり**）が見つかった。この**家族及び地域集積性**は、同じ地域で似通った生活を営んでいた人に多発した**水俣病（メチル水銀中毒症）の特徴**のひとつである。

熊本の水俣病被害者たちは、漁業者(以下、漁民)とその家族が圧倒的に多く、農家や勤め人たちも、親戚や知人の漁民から水俣湾でとれた新鮮な魚を貰ったり、購入したりして、動物性タンパク質は主に魚介類から取っていた。新潟も状況は同じで、

川船の船頭は家族で舟に乗り込み、女性や子供達が漁業を手伝い、木材や砂利の運搬を生業にする人も、仕事の傍ら捕った魚介類を舟上で食卓に供することは珍しくなかった。彼らは手足のしびれやふらつきなどの体調不良を自覚すると、栄養をとるため頑張って魚を食べ、病人や妊産婦にはさらに魚を与えた。(土本典明；「水俣―患者さんとその世界」.2006　佐藤真；「阿賀に生きる」.2012 ともに株式会社シグロ制作)

「新潟水俣病未認定患者統計調査」（1966）によれば、1965（昭和 40）年 6 月に新潟水俣病が公表されてからも「川魚を継続的に食べていた」人は、調査対象の 100 名中 16 名、「途中まで食べていた」は 38 名、「一時期食べなかったが、調査時には食べている」は 20 名で、「ずっと食べなかった」は 26 名であった。下流域では「水俣病について知らなかった」、「魚を食べてはいけない、危険だとは知らなかった」、「農薬説などがあり原因が分らなかった」、中・上流域では「中・上流の魚は安全」、「皆が大丈夫だと思っていた」などが理由としてあげられていた。阿賀野川の魚介類を食べるのは昔からの習慣で、情報を発信したものと受け手側の認識の差により、水俣病と自分たちの食生活との関係がうまく結びつかなかったようだ。(関礼子 2003 pp33-35)

内科診断学の成書には、確実に「病歴」を聴取すれば疾患の 60～70%は診断可能と記されているが、病歴を聴取するということは、患者の訴えを「聞く」ことだけではなく、適切に「問う」ことでもある。患者の性・年齢・職業、発病の様式(急に、ゆっくり、気がついたら)、症状発現の順序と経過(悪化、停滞、反復、寛解・増悪)は勿論のこと、家族性・遺伝性を疑わせるエピソード、既往症 （罹患したことがある疾患)や基礎疾患（治療や経過観察を受けている疾患）に加え、生活歴も無視できない。(田崎義昭 1987 pp1-7)

熊本の水俣病は、個々の病歴を聞けば「病因物質」（メチル水銀）が究明されていない段階でも、「原因施設」（チッソ）の工場排水で汚染された「原因食品」（水俣湾の魚介類）を食べた人たちに起きた「食中毒」であると診断できた。熊本大学研究班と熊本県衛生部は水俣病発生から半年で、水俣湾での漁獲禁止と食品衛生法の適用が必要と判断したが、食品衛生法は知事の権限で執行できるにも拘らず、水俣市長と熊本県副知事が「水俣湾内特定地域の魚介類がすべて汚染されているという根拠がないのに、漁獲を禁止したら補償問題にかかわる」と考えて厚生省に可否を諮り、食品衛生法は適用されなかった。これが、最初の医学的な対応の誤りである。(津田敏秀 2014 p5,pp19-23)(齋藤恒 2018 p60-61)

＜熊本と新潟、初期の様子＞

熊本ではじめて公式発表された患者

5 歳 11 ヶ月の女児は、1956（昭和 31）年 3 月下旬から箸が使えなくなり、食べ物をよくこぼし、靴が上手に履けず半月後にはフラフラ歩きが目立つようになった。その数日後から言葉がもつれ、食べ物がのどにつかえ、夜は不機嫌になり不眠・狂躁状態を呈した。同 4 月 21 日にチッソ付属病院小児科　野田医師の診察を受けて 2 日後

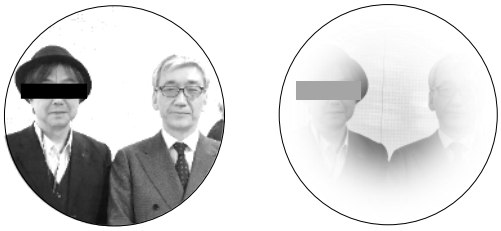
に入院、3 歳下の妹も同じ症状で同日入院した。女児の母親から、近所に同じ症状の 5 歳の女児がいると聞いた医師たちが調査した結果、さらに 8 名の患者が見つかった。同院の細川院長は、昭和 31 年 5 月 1 日、「原因不明の中枢神経疾患が多発」と水俣保健所に報告した。女児の家がある入江の奥の集落には、一家全員がこの奇病に罹患した家もあった。

女児の初診時の所見は、体格（身体的な印象)は中等度だが、栄養状態（筋肉量や内臓・血液の状態）は不良で、痴ほう様顔貌(表情に乏しく、間の抜けたような顔つき)を呈し、常に狂声を発した。瞳孔は散大(光に対する反応が低下)しているが、胸部・腹部臓器の異常は認めず。発症 1 か月後に四肢の運動障害が増強、上下肢の腱反射が亢進して病的反射が認められた（脳や脊髄など中枢神経の異常を示唆)。さらに不眠と、全身に強直性のけいれんがあり、出血するほど強く舌を噛んだ。2 ヶ月目には失明し、全身けいれんが頻発、手足は屈曲し変形が見られた(けいれん・舌を強くかむ・手足の屈曲と変形は、中枢神経の障害による筋緊張亢進を示唆)。

（原田正純 2018 pp2-4）

水俣市医師会と保健所、チッソ附属病院、水俣市立病院、市役所で「水俣奇病対策委員会」を発足。患者がある地域に限局して発生していることから、伝染病を疑い、患者の隔離と消毒を始めた。最初のころ発見されたのは小児ばかりであったので、何らかの脳性小児麻痺（単一な疾患ではなく、原因が違っても、脳における障害の広がりや程度によって同じような症状が出現する）が考えられたが、次第に大人の患者も確認された。細川院長はここ 2〜3 年、原因不明の神経疾患の患者を診察しており、2 人の患者が入院し死亡していたことを憶えていた。

ひとりは、チッソ水俣工場の倉庫係の 49 歳男性で、1954（昭和 29）年 6 月から、手や腕全体にしびれが出現、頭重感とめまいがあり、2 週間で唇までしびれが上行・増強した。四肢の運動障害、とりわけ歩行は小脳失調を疑わせ、筋力は保たれているが歩行に要する複数の筋肉の調和をとれなかった。ひと月後には言語障害、全身のしびれと聴力障害もあらわれ、眼科的には**求心性視野狭窄（図-1）**が見られ、徐々に症状は増強、激しく泣き笑う狂躁状態と嚥下障害ならびに発熱を呈し、発症 2 か月弱で死亡した。



正常視野　　図 1 求心性視野狭窄

正常視野では円のほぼ全体が見える。求心性視野狭窄は、視野の周辺から見え難くなり、実際は両側対称性に出現する。

他のひとりは、42 歳の農家の女性で、1955（昭和 30）年 8 月に、四肢のしびれで発症、前例と同様の経過をたどり、2 か月後に入院した時には歩行ができず、3 か月目に死亡した。熊本の初期は小児・成人ともに重症例が多かった。（原田正純 2021 pp5-6,p83）

※**原田正純**は 1959 年に熊本大学医学部

を卒業後、神経精神医学を専攻した胎児性水俣病の世界的権威である。1999 年 3 月に熊本大学を退職、1999 年～2010 年熊本学園大学で「水俣学」創設に尽力し、2012 年永眠。

新潟ではじめて公式発表された患者

成人男性の I さんは、1964（昭和 39）年頃から腰痛があり、1 ヶ月で両手足のしびれが出現、続く 2 週間でしびれは口囲から全身へ拡大した。下肢の脱力感とふらつきで歩行は定まらず、視界がぼやけ、言語も不明瞭になった。新潟大学脳外科へ入院した時には視野狭窄、運動失調、聴力障害が認められた。

1965(昭和 40)年 1 月、神経内科を開設する打ち合わせのため、新潟大学を訪れていた東京大学助教授の椿忠雄医師（以下、椿）は、脳外科の植木幸明教授から I さんの診断について相談された。I さんの症状と、東京へ持ち帰り検査をした毛髪の水銀値が 320ppm（日本人の平均値 1～2ppm）（高岡滋 2019 p53）と高値を示したことから、椿は I さんが水俣病（メチル水銀中毒症）であると確信した。椿は以前、熊本大学の徳臣教授に付き添い、水俣病の患者を直接診察した経験があった。

1965（昭和 40）年 6 月 12 日、新潟大学神経内科教授となった椿と、同脳外科植木両教授、県衛生部北野博一部長は、「阿賀野川流域に水俣病患者が 7 名発生、うち 2 名死亡」と正式に新潟水俣病の発生を公表した。（齋藤恒 2018 pp25-26）

公表から 2 日後の 6 月 14 日から新潟大学神経内科並びに脳外科を中心になり、医局員・インターン・医学生も戸別訪問にかり出され、患者発生地区 421 戸の全住民 2,813 名の第一次一斉調査が行なわれた。自覚症状や神経症候の有無、川魚の摂取状況、農薬の使用状況、飲料水の種類、職業、1964（昭和 39）年からの死亡した家族の有無とその状況、飼猫・家畜の異常の有無などを調べ、メチル水銀中毒症が疑われるものについては診察し、毛髪の水銀値を測定した。

この調査を補うため、6 月 21 日から阿賀野川の上流地域及び阿賀野川北側沿岸地域の患者発生地区周辺 3849 戸の 1 万 9,888 人を対象に、保健師による第二次一斉調査が実施された。また潜在患者発見と汚染の範囲を知るために、医療機関への訪問調査や過去のカルテ調査も行なわれた。

結果、26 名のメチル水銀中毒症患者が発見された。そのうちわけは、死亡者 5 名、重症 2 名（自覚症状に加え、他覚症状があるもの)、中等症 3 名（自覚症状に加え、他覚症状が証明されるもの)、軽症 16 名（自覚症状のみで、他覚症状が少ないもの）であった。熊本と異なり、多くが中等～軽症例である。新潟では公表から早い段階で可能な範囲の調査を進めたが、疫学調査の重要性を知る椿は、「非曝露地域との比較調査をしなかったのが心残りだ」と述べていた。これが、次の医学的対応の誤りである。（齋藤恒 2018 pp30-34）

＜ハンター・ラッセル症候群＞

ハンター・ラッセル症候群は、1937(昭和 12)年にイギリスの種子処理工場でメチル水銀中毒症が発生し、1940(昭和 15)年にハンター・ラッセル(・ボンフォード)らが

報告した、**「四肢のしびれと痛み、言語障害、運動失調、難聴、求心性視野狭窄」**を5大主徴とする症候群（同時にいくつかの症候を有する病態）である。（高岡滋 2019 pp2-3,p59）

1958（昭和33）年3月、英国の神経学者マッカルパインが多発性硬化症の研究のため熊本大学を訪れていた際に、15人の「水俣奇病」患者をみて、「視野狭窄、難聴、運動失調などの症状がハンター・ラッセルの報告に極めて類似している」と指摘した。これが熊本大学の医師たちが病因物質としてメチル水銀を疑うきっかけになった。（原田正純 2021 p50）

＜新潟と熊本の差異＞

新潟では、1970（昭和45）年秋の第2回一斉検診と補助検診の結果、阿賀野川の全流域から234名の有所見者が発見され、その殆どが患者として認定された。この検診以降に認定申請者が増加しており、一斉検診が潜在患者の掘り起しに重要な役割を果たしたことが分る。この時期の新潟の認定基準は、典型的なハンター・ラッセル症候群を重要視した熊本とは異なっていた。

椿は、「①阿賀野川の魚を症状発現前に大量に摂取していたことの客観的証明は困難なので患者や家族の証言にも依拠する、②新たに発生した患者の過去の頭髪・血液・尿などの水銀値は不明なことが多く状況証拠を参考にする、状況証拠とは水銀多量摂取の反証になる事実が無く、ほかの毒物中毒ではないこと、③ハンター・ラッセル症候群の感覚障害・求心性視野狭窄・聴力障害・小脳症候（言語や歩行の障害、運動失調、平衡障害）が揃わなくてもよい、④ほかの疾患があっても水俣病と診断できる」と説明している。

この頃に新潟を訪れ、椿の検診をみた熊本の原田正純（以下、原田）は、「新潟では、きめの細かい診察をしてその症状を把握し、患者の訴えの中から症状を確認している。中毒症は全身性の疾患という立場から、合併症があるからといって水俣病から除外していない。半身麻痺や糖尿病があっても水俣病と認定された人もいる。熊本では軽症や不全型の水俣病は除外されている」と、熊本との差異を記している。（関礼子 2003 pp46-47）

熊本においては、原因が究明されないうちは対策を立てようとしない行政や、責任をとろうとしないチッソに対抗するべく、原因究明が至上命令となり、結果として汚染を受けた住民の健康被害の実態を明らかにすることは後手に回った。熊本県は、現場からの一斉検診の要求を1969（昭和44）年まで本格的に取り上げられなかった。患者や家族が自分は水俣病ではないかと思っても、具体的な申請の窓口や手続きの方法さえ知らされずに病院、市役所、保健所を探し歩いた。父親の申請をしようとした川本輝夫氏は、「寝たきりでも本人以外には申請書類は渡せない」と言われた。（原田正純 2021p50,pp180-186,p192）

アセトアルデヒド生成工程における水俣湾への水銀の排出は戦前から続いており、何度か漁業被害に対する補償も行なわれていた。実は、長い間「水俣奇病」の存在は公然たる事実であった。（津田敏秀 2014 p59）熊本と新潟では、令和の今も対照地域を設けた本格的な住民検診（どの地域ま

でが被曝露地域で、いつ曝露の危険が全く無くなるのか）が行なわれておらず、これも医学的対応の誤りと言える。

＜水俣病の病因＞

1960（昭和 35）年 2 月、熊本大生化学の内田教授は、水俣湾産の 2 枚貝「ヒバリガイモドキ」の中の水俣病の病因物質「有機水銀」の分離に成功した。内田はその物質が硫化メチル水銀であることを突き止め、これを使って熊本大の徳臣、武内両教授は猫とマウスに水俣病を発症させ、入鹿山教授も水俣湾産アサリ貝から塩化メチル水銀を抽出・結晶化させた。この段階で、**水俣病はメチル水銀中毒症である**ことは決定的な事実であったが、チッソ側は権威ある学者を擁立し、さまざまな反論を提示した。(原田正純 2011 p65-67)

現在もメチル水銀中毒症の臨床と研究の第一線で活躍する高岡滋医師の文献から引用する。「熊本の水俣病はチッソ水俣工場の排水による環境汚染の結果、発生したメチル水銀中毒症である。その汚染は、八代海産の魚介類を摂取した沿岸住民のほとんどすべてに及び、被害者は胎児、幼児、小児から大人、高齢者まで広い範囲にわたっている。このように水俣病は歴史的にみても、あるいは世界的にも他に類をみない、広範囲かつ長期に及ぶ環境破壊によってもたらされた健康被害である。メチル水銀の曝露と健康障害との関係は、曝露量が多ければ多いほど、全体として健康への影響が大きくなるのであるが、その具体的な現れ方は曝露の濃度、期間、総量などの曝露のあり方のみならず、被曝露量が少なくなるほど、曝露された人のもともとの個体差とも係わってくる面がある。水俣病が過去のほかのメチル水銀被曝露事例と異なるのは、①地域の汚染が長期にわたり、②曝露を受けた人が広範囲に広がり、③汚染地域の殆どの住民が集積的に、④さまざまな期間、さまざまな程度、さまざまなパターンで、メチル水銀の曝露を受けてきたという点である。水俣病は軽症から重症まで多彩であり、曝露が大きいほど重症になる。また加齢により症候が悪化する例、変化のない例、軽度改善する例など、さまざまな経過を示す。重症度や経過には、曝露量、曝露期間、曝露方法、曝露時年齢などとの関係が推定される。体性感覚障害が最も基盤をなす症状とされてきたが、体性感覚障害が明確ではない症例でも、他の自覚症状が水俣病と同一の症例も存在する。時間経過の中で神経症候が変動する症例、感覚障害の範囲が一定しない症例が多いという事象は、水俣病の病態の主座が大脳皮質等の中枢神経系にあり、この神経系が一定の機能を維持しつつ障害されている※ことに関係すると考えられている」

(高岡滋 2019 p1,p3)

※一度傷害された中枢神経細胞は回復しないが、メチル水銀により完全な細胞死に至っていない神経細胞が、シナプス障害(神経細胞間あるいは、神経細胞と他種細胞間の信号伝達に携わる接合部位の障害)を生じた時に、残った細胞の樹状突起が増すことにより失われた神経細胞の機能が補われるためと想定される。

(高岡滋 2022 gkbn.kumagaku.ac.jp)

環境中の水銀レベルは産業革命以降、化石燃料の消費とともに増加している。水銀は一旦土壌に堆積すると、無機水銀から微生物の影響などで毒性が強いメチル水銀へと変化し、食物連鎖を通じて魚介類に蓄積する。肉食魚類は非肉食魚類より高レベルのメチル水銀を含有する。喜田村は、阿賀野川中流域で捕獲した淡水魚（ウグイ、オイカワなど）から高濃度の（総水銀平均5.59ppm、メチル水銀平均 4.04ppm）水銀を検出したが、これは阿賀野川河川水の水銀濃度と比較し、約 10 万倍以上の濃縮と推定できる。魚の摂取を通じて人体に取り込まれたメチル水銀は、**胎盤や血液脳関門**（人体に有害な物質の通過を阻止するが、人類との関わりが短いメチル水銀に侵入を許す結果となった：原田）を通過してヒトの脳に極めて強い毒性を発揮する。メチル水銀は活発に活動している神経細胞ほど、非可逆的な損傷を引き起こすため、胎児の脳には広範に強い影響を及ぼす。

経口摂取されたメチル水銀の 90%以上は腸管から血液中に吸収され、SH 基（スルファニル基）を持つ蛋白質や、システイン・グルタチオンなどの SH 基を持つアミノ酸やペプタイドに結合する。アミノ酸と結合したメチル水銀は、さらに親和性の高いリボゾーム（蛋白質合成に関与）の SH 基と結合する。メチル水銀は血流に乗ってほぼ 4 日以内に全組織へ分布し、その時点で脳内には体内負荷量のおよそ 10%程度が存在する。脳内に取り込まれたメチル水銀は生体内変化を生じにくく、小さい割にリボゾームを多く含む顆粒細胞が神経細胞の中で最もメチル水銀によって障害を受け蛋白合成が阻害される。

メチル水銀の排泄は 90%以上が糞便経路だが、毛髪もメチル水銀を排出し、毛髪水銀値はメチル水銀に曝露されたときに生じる機能障害を引き起こす中毒量を示す指標として役立つ。新潟水俣病に関する研究結果では、血液からのメチル水銀の半減期は 35～137 日（中央値 55 日）、毛髪での生物学的半減期は 50～108 日（平均 70 日、中央値 66 日）であった。

（横田憲一 2017 pp299-302 ）（齋藤恒 2018 pp252-254）

＜水俣病の症候＞

「水俣病」という言葉から、激しい痙攣や手足の変形、長期間の臥床生活を強いられ、暗い表情を浮かべる被害者たちの悲惨なイメージを想起する人も多いだろう。しかし、多くの水俣病被害者は一見して普通の人たちであり、その症状は他者には分かり難く、認定患者と未認定患者の症状には大差が無いように思われてしまい、「にせ患者」問題や差別・偏見の原因になった。（ユージン＆アイリーン・スミス;『MINAMATA』pp112-113,pp138-139,pp148-149）（関礼子 2003 pp10-11）

以下に、水俣病（メチル水銀中毒症）の症候に関連する用語の説明をおこなう。

体内外の刺激によって即座に惹き起こされる意識変化を「感覚」といい、意識された内容が経験や学習に基づき、意味あるものとして解釈される場合に「知覚」という。熱したフライパンに触れた瞬間、アッと思うや否や、熱さと痛さを感じる。感覚は知覚より認知過程の前段階であり、受動

的-外因的であるのに対し、知覚は能動的-内因的である。(才藤栄一 1991 p753) ただし、臨床上は「知覚≒感覚」と考えて問題はない。

「感覚」を①～③に分けるが、眼や耳など特定の感覚器がある特殊感覚、体性感覚、内臓感覚という分け方もある。

① **表在感覚**：皮膚や粘膜の感覚で、触覚、痛覚、温冷覚などがある。

② **深部感覚**：皮下の筋肉、骨の周囲の骨膜、関節などから伝わる感覚で、振動覚（足首・手首などに音叉を当て振動を自覚できるか)、位置覚（手指・足趾がどんな位置をとっているか)、運動覚（指などがどちらの方向に動いたか)、深部圧覚（筋や腱などに強い圧迫を加えられた感じ）などがある。

③ **複合感覚**：2 点識別覚、皮膚書字感覚、立体認知(手の検索・識別に関連)は水俣病の主な病巣、大脳皮質の「体性感覚野」に関連する。

また、水俣病独特の運動失調（ぎこちなく不安定な動き）には④と⑤がある。

④ **協調運動障害**（幾つかの筋肉が、力の方向や強弱を互いに調節し遂行される、滑らかで正確な運動の障害）をみる「舌振り試験」は、舌をまっすぐ口の外に出させて、大きく速く左右に振るように指示することで、運動の規則性、速度、持続性をみる。**「回内・回外試験」**は上腕を前方ほぼ水平に伸ばし、肘関節を直角に屈曲して上方に立て、手関節中間位で前腕をクルクルと早く内・外返しをして上肢機能の巧緻性をみる。**(図-2)**

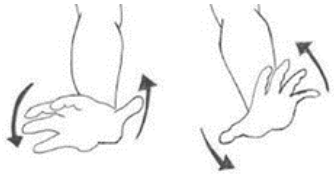


図-2 回内・回外試験（田崎義昭）

「指鼻試験」は、腕をまっすぐ伸ばした位置から、人さし指を鼻に向けて動かす動作を数回繰り返し、運動の経路と速度、指の鼻へのつきかた、振戦（ふるえ）の有無を観察する。**「膝踵試験」**は、目をつむって踵を対側の膝蓋骨につけてまたもとに戻す。**(図-3)**



図-3 踵膝試験（田崎義昭）

⑤ **平衡障害(体のバランスがとりにくく不安定な状態)**をみる「ロンベルグ試験」は、両足の内側を接するように揃えて直立させ、「マン試験」は片足のつま先と反対の踵を一直線上に揃えた立位で、「単脚直立試験」は左右それぞれの片足立ちを開眼と閉眼で調べる。
バランスを崩せば陽性と考える。

深部腱反射：膝の皿の正面下にある腱を打腱器で叩くと（急激な伸展強制）刺激が末梢神経から脊髄に伝わり、反射的に大腿全面の筋肉が収縮して膝がぴょんと伸びる。この回路「反射弓」には脳からの抑制経路があり、膝の伸展を適切に調節する。

中枢神経が障害されると腱反射は正常~亢進し、末梢神経が障害されると減弱する。水俣病では四肢の腱反射は正常～亢進するので中枢神経の障害が示唆される。

「錐体路」は中枢神経が司る運動のうち随意（意図した動き）運動に、**「錐体外路」**は不随意運動（意思とは無関係な異常な動き）と筋肉の緊張の程度に関係する。

（齋藤恒 2018 pp32-37）（田崎義昭 1987 pp126-139）

次に水俣病(メチル水銀中毒症)の主病巣、**脳の構造と機能**の概略を述べる。大脳は 4 つの葉、**「前頭葉、側頭葉、頭頂葉、後頭葉」**と葉に近い構造の「島、辺縁葉」に分けられる。脳を左側から見ると、ほぼ真ん中で中心溝（ローランド溝；中心後回の前縁）が脳を前後に分け、**(図-4)**

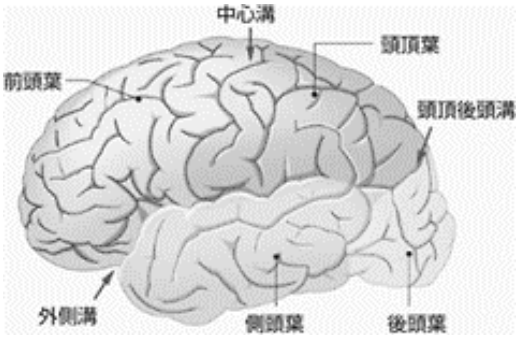


図-4 大脳皮質の左側面（Q-life）

後頭葉の後下部に小脳がある。様々な感覚信号は、この中心溝の後部の大脳皮質(大脳の表層を覆う灰白色の薄い層)に届く。また頭頂葉の前頭葉に接する帯状の部分は体性感覚（触・圧・痛・温冷覚などの表在感覚と、運動・位置・振動覚の深部感覚からなり、目や耳などの特定の感覚器とは異なる筋肉・腱・関節などで感知する）の信号を受け、それが何であるか了解する。頭頂葉後半部は、より高次の認知（形や手触り、色や光の強度、線の向きや角度、音調や音色の意味解釈）に関与し、視覚信号は後頭葉に、聴覚信号は側頭葉に終止する。

次に脳を前から見て中心後回と呼ばれる部位で**前後に半分割した断面の感覚野**を見てみる。身体部位の局在は、**(図-5)**

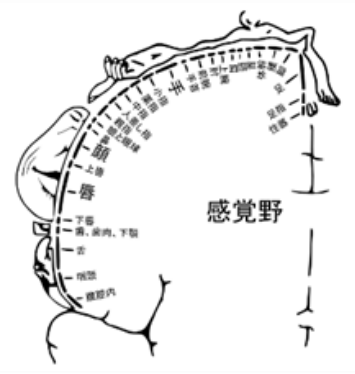


図-5 大脳皮質ホムンクルス
(Homunculus-ja.png)

手と顔、特に口を表現する皮質領域が他の部位より広いのが分る。広く表現されているところは、末梢ニューロンの受容器が多いこと(感覚が鋭敏)を意味している。（ホムンクルスは、錬金術師が作り出す小さな人造人間の意味, Penfield,W.1968）

大脳皮質は垂直方向にⅠ～Ⅵまでの 6 層の神経構築（Ⅰ分子層、Ⅱ外顆粒層、Ⅲ外錐体層、Ⅳ内顆粒層、Ⅴ内錐体層、Ⅵ多形層）と、小型の顆粒細胞と大型の錐体細胞の比率により 5 つの基本形（1 無顆粒型、2 前頭葉型、3 頭頂葉型、4 極型、5 顆粒型）に類型され、**メチル水銀が標的にしやすい顆粒細胞が多く、ダメージを受けやすい場所は 5 顆粒型の大脳皮質で体性感覚**

野、一次視覚野、一次聴覚野がこれに相当する。(図-6 に楕円でマーク)

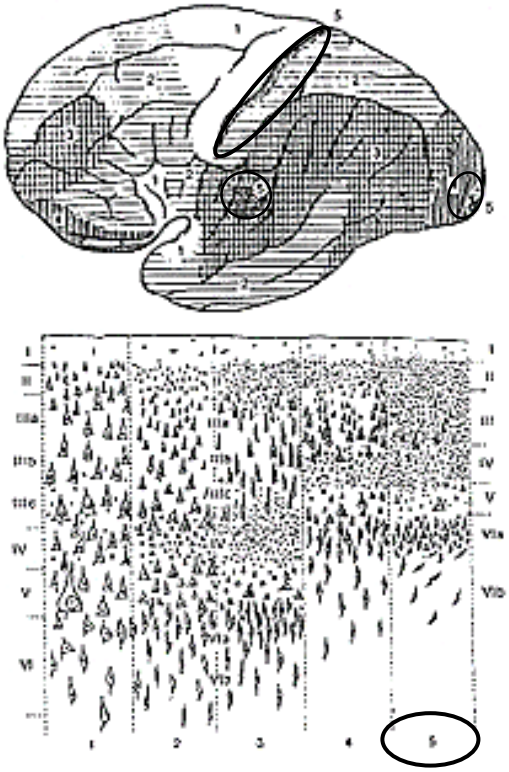


図-6 大脳皮質のⅥ層(縦)・5 型(横)構造(自治医科大：福田哲也　改)

メチル水銀によって視覚野の顆粒細胞が傷害されると細胞数が少ない視野の周辺部分から視力が低下するので、前述の図-1 のような求心性視野狭窄を生じる。これは眼球自体や視神経の異常ではなく、後頭葉の視覚中枢が損傷されているためで、両側性の聴力障害では、側頭葉の皮質神経細胞の脱落や変性が認められる。
(横田憲一 2017 p339-340,pp385-392)(浴野成生 2009 pp47-48)(齋藤恒 2018 p253-254)

水俣病の感覚障害の範囲と特徴；感覚障害の軽い者は手足の先から傷害されることが多く、重症になるにつれ、範囲は上行して体の中心頭側に及び、最重症例では全身が障害されることがある。慢性水俣病では、感覚障害は緩徐に、多くの場合潜行性に進行し、発症時期が明確でないことがある。内野・荒木によれば、表在感覚に異常がある 77 名の水俣病患者のうち、診察のたびに感覚障害の場所や程度が変動したものは 63 例 82%で、変化しないものは 15.4%であった。「水俣病の患者は診察の度に言うことが違う、いい加減だ、心因性なのでは」と誤解される所以である。
(高岡滋 2019 pp19-20)(浴野成生 2007 pp420-423)

高濃度のメチル水銀に汚染された魚介類を摂取して、短期間に発症した**急性水俣病**(メチル水銀中毒症　脳内水銀値：数 10ppm)の成人では、視覚障害、聴覚障害、嗅覚・味覚障害、失調性歩行、手先の不自由さ、構音障害、変換運動障害、言語障害、書字障害、歩行障害、体性感覚障害(特に四肢遠位部と口囲の感覚障害)などがみられるが、**複合感覚である 2 点識別覚や立体覚の障害は長期間残存**し、腱反射は低下しなかった。立津は急性例における重篤な精神障害を**「狂躁状態」**と呼んだ。
(浴野成生 2007 p424)

低濃度のメチル水銀に汚染された魚介類を、長期間摂取し発症した者が**慢性水俣病**(メチル水銀中毒症　脳内水銀値：2～3 ppm)」で、昭和 30～40 年代の高濃度汚染時期から症候が存在したものもあれば、平成 20 年代に症候が出現または顕在化したものもある。原田は、慢性水俣病の特徴として、「①経過が非常に緩やかであるこ

と、②初期の急性発症例に比べて症状が極めて多彩であり、③症状が不揃いで一定の症候群を示さないことがある」と述べている。居住歴や職歴などの生活歴、病歴、症候をみることで診断は可能である。
（高岡滋 2019 p11）

曝露が止まれば、血液や脳からメチル水銀は、急速に消退することがサルの実験で報告されている。しかし 30 年以上経過しても多くの慢性水俣病患者が感覚障害を訴えたのは、体性感覚野が瀰漫性（びまん性；病変が特定の場所だけでなく広範囲に拡がる様子）に損傷されたためと思われる。体性感覚野が損傷されると、異なる形を触って識別したり、2 点を識別したりする複合感覚が侵されるので、**生活の場面では、ボタンを留める、背中でひもを結ぶ、閉眼で同じ径・長さの断面の形状が異なるものを識別する**ことなどが困難になる。
（浴野成生 2007 pp425-433）

Berlin は、メチル水銀曝露によりネズミでは末梢神経あるいは脊髄後根神経節、ネコでは小脳、霊長類やヒトでは大脳皮質が主に損傷されると、**「動物の種による損傷局在の違い」**を明らかにした。動物の研究成果をヒトに適用するときは系統発生学的考慮が必要である。また水俣病患者では感覚系の障害と運動失調は顕著であるが、随意運動を担う錐体路の障害は少なく、運動麻痺や筋力低下、筋萎縮はあまりみられなかった。（浴野成生 2007 p428-429）

胎児性水俣病の症候の特徴

（原田（1966，1968）。

A） 全症例で乳児期初期に臨床症状が出現し、この疾患は先天性であるとみなされた。症状は一過性でも進行性でもない。（註：二次的変化はある）

B） 身体発育の遅延が観察された。

C） 精神症状は全症例において顕著であった。

D） 自発的運動能力の障害と筋緊張の異常は、自発的運動障害と協調運動障害として存在し、これらの症状は両側性であった。

E） 精神障害は運動障害と密接な関係を持っていた。

F） 毛髪水銀含有量は、患者において著しく増加していた。

G） 患者らは気脳造影と脳波において特定の異常な特徴を示した。

これらの症状は、胎児期あるいは誕生時に確認されていた脳の「びまん性病巣」によって引き起こされる。調査対象の初診時年齢は、生後 1 年 1 か月～7 年 6 か月で、母親の妊娠中及び乳児誕生当時の水銀濃度のデータは入手されていない。（横田憲一 2017 pp323-324）

＜診断基準、認定・判断条件の変遷＞

前述のように、初期の熊本では重症例・典型例を対象にして、主に原因究明に力が注がれたが、新潟は熊本の経験から軽症～中等症の患者を拾い上げ、阿賀野川流域住民の健康被害の把握に努めることに主眼を置いた。従って、両地において当初は統一した診断基準が用いられていなかった。

以下に、年代順に**診断基準、認定・判断条件の**一部を紹介する。水俣病（メチル水銀中毒症）の定義が地域によって異なるの

は困るので、疑わしい人は認定しようという考え方（昭和 46 年環境事務次官通知）が、国と企業への忖度から、間口が狭まり敷居が高くなってゆく様子が分る。(太字・アンダーラインは筆者)

Ⅰ．1970(昭和 45)年 2 月 20 日、水俣病審査判定基準（熊本県公害被害者認定審査会)。ハンター・ラッセル症候群を重視

1　疫学的事項

（1） 水俣病発生当時、指定地域及びその周辺に居住していた。

（2） 有機水銀摂取の機会があった。

（3） 過去に毛髪・尿中に水銀が多量に証明された。

2　臨床所見

A　**求心性視野狭窄、聴力障害、知覚障害、運動失調**

B　知能障害、性格障害

C　構音障害、書字障害、歩行障害、企図振戦

D　不随意運動、流涎、病的反射、痙攣

3　臨床診断

（4） **A の 4 項目と疫学的条件がそろえば水俣病と診断する。**

（5） A の 4 項目のない症例の判定は慎重を期する。

（6） B は A に伴っていることが多いので、実際的には問題はないが、B のみの症状（A を欠く）では、水俣病と診断するのは慎重を期する。

（7） C は主として脳の症状であり、C のみを呈する場合には一応可能性ありとして再検とする。

（8） D のみの症例は他の疾患の可能性が高い。

（9） 類似疾患を鑑別する必要がある。

例えば、糖尿病等代謝性疾患に伴う神経障害、動脈硬化症、頚椎変性（加齢）等に伴う神経障害、心因性症状等を除外する。

4　特殊検査

要検査の症例については、協議の上必要があれば次の検査を行なう。

(1) 末梢神経伝導速度（神経の A 点から B 点までの距離÷電気的刺激が A 点から B 点に伝わる時間)

(2) 神経生検（患者の末梢神経の一部を採取し肉眼・顕微鏡で観察）

（横田憲一 2017 pp281-282）

Ⅱ．1970(昭和 45)年 3 月「公害の影響による疾病の指定に関する検討委員会の記録（佐々委員会)」「後天性」で**ハンター・ラッセル症候群が重視。**

A 胎児性または先天性水俣病について

(ア) 臨床上は、いわゆる先天性脳性小児麻痺の症状を呈する。

(イ) 成人及び小児水俣病多発地区並びに多発期間における出生である。

(ウ) 家族内に水俣病患者が発生しており脳性小児麻痺の発生頻度が他の地区に比し特に異常に高率である。

(エ) 一般の脳性小児麻痺に認められるような原因が認められない。

(オ) 脳性小児麻痺の症状は、乳児期に発症し特に知能、発育遅延、言語発育障害、咀嚼嚥下障害、運動機

能の発育遅延、協調運動障害、流涎（りゅうぜん；よだれを沢山流す）等の症状を呈する。

（カ）妊娠中に母体に著明な自覚症状はない。水俣地区の脳性小児麻痺の臨床症状と小児水俣病の臨床症状には類似性が極めて高い。

（キ）一般に小児麻痺の臨床症状はきわめて多彩でばらつきが著しいが、水俣地区の脳性小児麻痺は、相互間に類似性が高い。

（ク）水俣地区脳性小児麻痺の剖検例（解剖を受けた患者の肉眼・顕微鏡所見）は小児水俣病の特異的剖検所見を備える。

（ケ）水俣地区脳性小児麻痺の小児の毛髪水銀量は高値を示した。

B 後天性水俣病について

（ア） 有毒魚介類摂取の機会があったこと。

（イ） 臨床所見

通常初期に四肢末端、口囲のしびれ感に始まり、漸次拡大するとともに、言語障害、歩行障害、求心性視野狭窄、難聴等をきたす。また、精神障害、振戦、痙攣その他の不随意運動、筋強直等をきたす例もある。**主要症状は、求心性視野狭窄、運動失調（言語障害、歩行障害を含む）、難聴、知覚障害であるから、特にこれらに留意する。**

（ウ）検査

必須の検査

視野（Goldman 視野計検査）

眼底検査

精密聴力検査

必要に応じて行なう検査

水銀量測定（毛髪、血液、尿）

筋電図（電気生理学検査；安静・随意筋収縮時の波形を観察）末梢神経生検

（エ）類似疾患の鑑別

糖尿病等による末梢神経障害

動脈硬化症、頚部脊椎（頚椎の加齢変形）症による脊髄末梢神経障害、心因性症状等を除外しなければならない。このために必要に応じて次の諸検査を行なう。

頚部 X 線検査、脳波、検尿、肝機能検査、腎機能検査、髄液検査、CRP（炎症や臓器・組織細胞に障害が起こると上昇）等

（横田憲一 2017 pp279-281）

Ⅲ．昭和 46 年判断条件；「公害に係わる健康被害の救済に関する特別措置法（昭和 44 年交付） 第一認定について」いわゆる**「疑わしきは救済」**を骨子にした**「1971（昭和 46）年環境事務次官通知」**

第一 水俣病認定の要件

（1） 水俣病は、魚介類に蓄積された有機水銀を経口摂取することにより起こる神経系疾患であって、次のような症状を呈する。

（イ）**後天性水俣病**

四肢末端、口囲のしびれ感にはじまり、言語障害、歩行障害、求心性視野狭窄、難聴などをきたす。また、精神障害、振戦、痙攣その

他の不随意運動、筋硬直などをきたすこともある。
主要症状は求心性視野狭窄、運動失調（言語障害、歩行障害を含む)、難聴、知覚障害である。

（ロ）**胎児性または先天性水俣病**
知能発育遅延、言語発育遅延、咀嚼嚥下障害、運動機能の発育遅延、協調運動障害、流涎などの脳性小児麻痺の症状である。

（2） 上記（1）の症状のうちいずれかの症状がある場合において、当該症状のすべてが明らかに他の原因によるものであると認められる場合には水俣病の範囲に含まないが、当該症状の発現または経過に関し、**魚介類に蓄積された有機水銀の経口摂取の影響が認められる場合には、ほかの原因がある場合でも、これを水俣病の範囲に含む。**
なお、この場合において「影響」とは、当該症状の発現または経過に、経口摂取した有機水銀が原因の全部または一部として関与していることである。

（3）（2）に関し、認定申請人の示す現在の臨床症状、既往歴、その者の生活史および家族における同種疾患の有無等から判断して、**当該症状が経口摂取した有機水銀の影響によるものであることを否定し得ない場合においては、法の趣旨に照らし、これを当該影響が認められる場合に含む**ものであること。

（4）法第三条の規定に基づく認定に係わる処分に関し、都道府県知事等は、関係公害被害者認定審査会の意見において、認定申請人の当該申請に係わる水俣病が、当該指定地域に係わる水質汚濁の影響によるものであると認められる場合は勿論、**認定申請人の現在に至るまでの生活史、その他当該疾病についての疫学的資料等から判断して当該地域に係わる水質汚濁の影響によるものであることを否定し得ない場合においては、その者の水俣病は、当該影響であると認めすみやかに認定を行なうこと。**
（津田敏秀 2014 pp116-118）

Ⅳ．1972（昭和 47）年の椿による新潟での「水俣病診断要項」。

症候として**知覚障害、求心性視野狭窄、聴力障害、小脳症候を基本とするが、それらをすべて具備しなければならないわけではなく、感覚障害のみで水俣病と診断された例もあった。**また、類似の症候を呈する他の疾患を鑑別することを求めたが、「糖尿病などによる末梢神経障害、脳血管障害、頚椎症、心因疾患は特に注意を要するが、**上記の疾患を持っていても、患者の症候がそれのみで説明しがたい場合は水俣病と診断できる。**その要点は、

(a)神経症状発現以前に阿賀野川の川魚を多量に摂取していたこと、

(b)頭髪（または血液、尿）中の水銀量が高値を示したこと、(その時の水銀量が不明なときは、例えば同一家族で食生活をともにしていたものの中に水俣病患者がいて、頭髪などの水銀

値が高値を示したものがあれば重視する)、

(c)下記の臨床症状を基本とすること、①知覚障害（しびれ、感覚鈍磨は最も頻度が高く、特に四肢末端、口囲、舌に著明で軽快しがたい)、②求心性視野狭窄、③聴力障害、④小脳症候（言語障害、歩行障害、運動失調、平衡障害)、

(d)類似の症候を呈する他の疾患を鑑別できること。**症候が不安定な例などについても安易に「心因性」やヒステリーなどと決めつけずに、医学的見地から経過を見るべきである。**

（関礼子 2003 pp46-47）

1973（昭和 48）年 5 月、朝日新聞は「有明海に第 3 水俣病」という記事をスクープした。熊本大学研究班による「10 年後の水俣病に関する疫学的、臨床医学的並びに病理学的研究」の調査で、水銀汚染がほとんどない対照地区と想定していた有明海の赤崎地区などで水俣病患者がいる可能性が示されたという内容であった。この記事が以降の「水銀パニック」(当時、チッソと昭和電工のアセトアルデヒド生産工程は既に廃棄・変更されていたが、急遽、通産省が過去にアセトアルデヒドを生産していた工場の未回収水銀量を調査したことが火に油を注ぐ結果になった）につながり、水俣病認定の大きな潮目となった。しかし、国の政治的な力が働き、第 3 の水俣病とそれに続く「関川病」はさまざまな出来事の中に忘れ去られていった。(関礼子 2003 pp71-103)

この頃、齋藤恒医師（以下、齋藤）は、椿に会い、尋ねてみた。「汚染の事実がはっきりして、四肢の感覚障害があれば水俣病と認定してよいのではないでしょうか？」椿は、「齋藤君、君の言うことは分る。それは今まで認定されているより、もっとピラミッドの底辺まで認定しろと言うことだろう。しかしそうなったら昭和電工や国はやっていけるだろうか」。尊敬する椿の発言に驚いた齋藤は、「椿先生ともあろう人からそんな言葉を聞くとは思いませんでした。それは政治的に医学をゆがめることではないですか？」と反論すると、「でもね～」と椿は黙り込んでしまった。(齋藤恒 2018 p180-181)

Ⅴ．1977（昭和 52）年判断条件；「後天性水俣病の判断条件について」環境庁企画調整局環境保健部長通知（国は**あやふやだった基準・条件を正確にした**として現在も運用）

一　水俣病は、魚介類に蓄積された有機水銀を経口摂取することにより起こる神経系疾患であって、次のような症候を呈するものであること。

四肢末端の感覚障害に始まり、運動失調、平衡機能障害、求心性視野狭窄、歩行障害、構音障害、筋力低下、振戦、眼球運動障害、聴力障害などをきたすこと

また、味覚障害、嗅覚障害、精神症状をきたす例もあること。

これらの症候と水俣病との関連を検討するに当たって考慮すべき事項はつぎのとおりであること。

（１）　水俣病にみられる症候の組み合わせの中に共通してみられる症候

は、四肢末端ほど強い両側性感覚障害であり、特に口囲でも出現する。

（２） (1) の感覚障害に合わせてよく見られる症候は、主として小脳性と考えられる運動失調である。また小脳、脳幹障害によると考えられる平衡機能障害も多くみられる症候である。

（３） 両側性の求心性視野狭窄は、比較的重要な症候と考えられる。

（４） 歩行障害および構音障害は、水俣病による場合には小脳障害を示す他の症候を伴うものである。

（５） 筋力低下、振戦、眼球の活動性追従運動異常、中枢性聴力障害、精神症状などの症候は、(1) の症候および（２）又は（３）の症候がみられる場合には、それらの症候と合わせて考慮される症例である。

二　一に掲げた症候は、それぞれ単独では一般に非特異的（その疾患だけでなく、ほかの疾患にもみられる症候）であると考えられるので、水俣病であることを判断するに当たっては、**高度の学識と豊富な経験**に基づき総合的に検討する必要があるが、次の（１）に掲げる曝露歴を有する者であって、次の**（２）に掲げる症候の組み合わせのあるもの**については、通常、その者の症候は、水俣病の範囲に含めて考えられるものである。

（１） 魚介類に蓄積された有機水銀に対する曝露歴

なお、認定申請者の有機水銀に対する曝露状況を判断するに当たっては、次の**アからエまでの事項に留意**すること。

ア 体内の有機水銀濃度（**汚染当時の頭髪、血液、尿、臍帯などにおける濃度**）（個人でこれらの値を記録している人はまずない）

イ 有機水銀に汚染された魚介類の摂取状況（魚介類の種類、量、摂取時期等）（同上）

ウ 居住歴、家族歴及び職業歴

エ 発病の時期及び経過

（２） 次のいずれかに該当する**症候の組み合わせ**

ア **感覚障害があり、かつ運動失調が認められる**

イ **感覚障害があり、運動失調が疑われ、かつ、平衡機能障害あるいは両側性の求心性視野狭窄がみとめられる。**

ウ **感覚障害があり、両側性の求心性視野狭窄が認められ、かつ、中枢性障害を示す他の眼科または耳鼻科の症候が認められる。**

エ **感覚障害があり、運動失調が疑われ、かつ、その他の症候の組み合わせがあることから、有機水銀の影響による者と判断される場合**である。

三　他疾患との鑑別を行なうに当たっては、認定申請者に他疾患の症候のほかに水俣病にみられる症候の組み合わせが認められる場合は、水俣病であると判断することが妥当であること。また認定申請者の症候が他疾患によるものと医学的に判断される場合には、水俣

病の範囲に含まないものであること。なお、認定申請者の症候が他疾患の症候でもあり、また水俣病の症候とも一致する場合は、個々の事例について曝露状況などを慎重に検討のうえ、判断すべきであること。

四　認定申請後、審査に必要な検診が未了のうち死亡し、剖検（解剖し肉眼的・顕微鏡的異常を確認する）も実施されなかった場合などは、水俣病であるか否かの判断は困難であるが、それらの場合も曝露状況、既往歴、原疾患の経過及びその他の臨床医学的知見についての資料を広く集めることとし、総合的な判断を行なうこと。（津田敏秀 2014 pp118-121）

1971（昭和 46）年、環境庁事務次官通知で「疑わしきは認定・救済」という方針を打ち出した医師出身の大石武一環境庁長官は、「教科書に記載されている病気に特有な症状は何十とある。これは長年月、全世界にわたってその病気の患者に現れた病状が網羅されているからである。だから、どの患者にも教科書と同じような症状が全部出揃うということはあり得ない。医師は、いくつかの重要な症状を拾い上げて診断を下している。中にはどうしてもこの病気に違いないと思うが、症状の揃い方がまだ足りないという言う患者もいる。このような場合には『〇病の疑い』と診断して、症状が出そろうまで様子を見たり、その線に沿って治療したりすることもある。したがって、医学で言う『疑い』は世間でいう臭いとか怪しいと違って、科学的な根拠を持った一つの診断の段階であると言える」と述べている。（関礼子 2003 pp53-54）

さらに、1972（昭和 47）年 3 月大石は、衆議院公害対策並びに環境保全特別委員会において、「疑わしいというのは、50%、60%、70%ぐらい」と答弁した。これに対し椿は、新潟県及び新潟市審査会で、「①水俣病である、②有機水銀の影響が認められる、③有機水銀の影響が否定できない、④分らない、⑤水俣病ではない、⑥再検査」のいずれかのランクに分類し、現実には③ランク以上の者が認定されていると紹介した上で、「大石長官の発言の 50・60・70%は、自分の立場と同じになるので、医学的にも診断する根拠と一致する。私の③ランクを水俣病が 50%以上考えられる疾患に合わせておけば合理的である」と述べている。（横田憲一 2017 p43）

1977（昭和 52）年の「後天性水俣病の判断条件」の矛盾について、斎藤は、「①判断条件の根拠は「末梢性神経障害＋小脳性運動失調」だが、四肢の感覚障害は中枢由来であると 1987（昭和 62）年 3 月に椿自身が述べており、②代表的な末梢神経障害である糖尿病性神経炎は、2006（平成 18）年の報告で 198,353 例の糖尿病患者の 47%に末梢神経障害を認めたが上肢の神経障害はほぼ皆無で、四肢末端に強い教科書的な「手袋・靴下型」の神経障害は稀であることが分かった。③水俣病認定審査会で棄却されるか否かの判断は小脳失調の有無に係わっているが、水俣病患者の協調運動障害は小脳性の運動失調ではなく、動作が緩慢で一定以上のスピードで行えないことが原因であり、（椿忠雄・白川健一 1978）④熊本大学解剖学の浴野成生教授は、Berlin らの類人猿を使った研究でメチル水

銀中毒症の軽症～中等症では小脳障害はないと報告している」と最近の講演でも解説し、1977（昭和 52）年以降、水俣病審査会の認定率が激減していることに警鐘を鳴らしている。（齋藤恒 2022 講演）

VI. 2006（平成 18）年 4 月、これまで水俣病の診療に携わってきた医師によって、水俣病と診断するための「共通診断書」が決定された。

A） 魚介類を介したメチル水銀の曝露歴があり、四肢末梢優位の表在感覚障害を認める。

B） 魚介類を介したメチル水銀の曝露歴があり、全身性の表在感覚障害がある。

C） 魚介類を介したメチル水銀の曝露歴があり、舌の識別覚の障害を認める。

D） 魚介類を介したメチルの水銀曝露があり、口周囲の感覚障害を認めるもの。

E） 魚介類を介したメチル水銀の曝露歴があり、求心性視野狭窄があるもの。

F） 上記 A~E に示す身体的な異常所見を認めないが、魚介類を介したメチル水銀の濃厚な曝露歴があり、メチル水銀によるもの以外に原因が考えられない、大脳皮質障害と考えられる知的障害、精神障害、運動障害を認めるもの。

一般人口の中で A～E それぞれの症候を示すものの割合は非常に低く、それぞれの症候を示すほかの疾患も少ない。たとえ存在したとしても、発症・進行速度や他の随伴症状から鑑別は可能であろう。

（高岡滋 2019 p64）

＜あとがき＞

熊本で住民の健康調査が後回しになったのは、被害者たちが置かれていた立場にも原因がある。チッソの影響が強い地域の中でも、とりわけ水俣の住民は、自分や家族が病気であることを隠そうとする動きがあり、最後まで「絶対に自分は水俣病ではない」と言い張る重症患者もいた。少なくとも漁民に限って言えば、チッソには依存しておらず、チッソから何ら恩恵を被っていなかったはずなのに、「チッソは水俣の殿様」という認識を払拭できなかったのは何故だろう。新興の支配者チッソが、水俣の住民を塩田の地主たちから解放してくれた救世主に思えたのだろうか。遠藤によれば、水俣病の被害を訴えた人たちは、チッソを害するものとして親戚や隣人から排撃されることもあったようだ。

（遠藤邦夫 2021 pp235-236）

新潟の阿賀野川流域においても、水俣のチッソほど昭和電工には依存していなかったとはいえ、前号で紹介した「木崎小作争議」や「与茂七事件」のように、「長いものには巻かれろ」という住民に深く根付いた感情が、患者の発掘を妨げたことは容易に理解できる。その点から言っても、患者や支援者たちが敬意を寄せてやまない齋藤が議長となり、「民主団体水俣病対策会議」（民水対）が、公表から 2 ヶ月後の昭和 40 年 8 月 25 日に結成された意義は極めて大きい。県や昭和電工との話し合いで埒があかないのであれば、裁判に打って出よ

うという発想は当時の被害者たちにはなかっただろう。

水俣病患者の娘さんは、認定審査会の医師に、「貴方のご家族にメチル水銀が原因で健康障害が生じているのは否定しませんが、私たちがやっているのは（補償の対象になる）水俣病の要件を満たしているかどうかの判定なのです」と言われたそうだ。病歴や症候などの事実は事実として吟味し、その結果が患者さんの利益につながるように心がけるのが医師に与えられた役割である。よく、「医師は中立であらねばならない」と言われるが、公害の原因企業と被害者個人の力は圧倒的に違う。医師が両者の中間にいたら、真の意味で中立とは言えないだろう。だが、齋藤や原田のように行動することが望ましいと分っていても、実行に移すのは容易ではない。

1998（平成 10）年の精神神経学会総会や、2012（平成 12）年の水俣病認定義務付け請求最高裁判決で批判された「昭和 52 年判断基準」に基づいて、国が判定を続けるのは、これからもハンター・ラッセル症候群の典型例しか認定されないことを意味する。症状が軽い被害者の割合が増えるほど、認定審査会の診断は、水俣病の診断ではなく、補償協定に対応する症状を持つ被害者を選別する作業に変わってゆく。現実に、メチル水銀に曝露された生活歴があり、同じような四肢の感覚障害を有する人が同一家族内に複数人いて、そのうちの誰かがすでに認定されていても、認定審査会では認定を棄却される人があとを絶たなかった。

4 人家族のうち 3 人がインフルエンザに罹患しており、残る 1 人から「夕方から寒気がして熱がでてきました」という電話をもらったら、「多分、あなたもインフルエンザだと思いますので、明日は仕事を休んで検査（発熱してからウイルスが増えて検査で判定できるのは 12〜24 時間後）を受けに来て下さい。インフルエンザ治療薬もお渡しします」と医師はアドバイスすべきであり、感染症治療の「高い学識と豊富な経験」は不要である。

屋上屋を架すことになるが、1956（昭和 31）年 11 月の段階で熊本大の研究班は、「水俣病は汚染された水俣湾の魚介類摂取により発生した食中毒である」と結論し、翌年の 2 月に、「水俣湾の漁獲を禁止して食品衛生法を適用すべきである」と判断した。半年を待たず、県水俣病対策連絡会議も食品衛生法の適用を決定したが、企業と通産省への阿ねりによって食品衛生法は施行されなかった。新潟でも県衛生部と新潟県警は法を犯した企業に対して捜査や強制的な措置をとらず、熊本と同じ悲劇が繰り返された。仮に汚染源が工場排水ではなく、「戦時中の爆薬」や「地震で流出した農薬」だったとしても、魚介類の汚染が判明したら捕獲禁止をただちに実施しない理由はない。その後、国や県は企業とともに漁業関係者への保証を速やかに進めつつ、力を合わせ原因究明に取り組むべきであった。

齋藤は、白木博次元東京大学医学部長が新潟水俣病第 2 次訴訟で、憲法 25 条の「国民の生存権と国の責任」に基づいて、「認定患者のみならず未認定患者、棄却された患者も健康ではなく、文化的な生活を営んでいるとは言い難い。国はすべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び

公衆衛生の向上と増進に努めなければならない」と証言したことは極めて重要であると言う。また、経済学者の宇沢弘文氏は、「第二の水俣病が起きた経緯をみると、中央官僚と大企業が人間の尊厳を否定するようなことをしており、解決を阻害しているのも同じプロセスだ。水俣病の被害者が救済され、心休まる日が来るまで、日本経済は依然として貧しいままだ」と述べている。(齋藤恒 2018 pp305-310)

熊本の原田は、裁判での証言で精神的にも肉体的にも大きな負担を感じたそうだ。「これは病気ではない、(加害者が特定された)殺人です、犯罪です」と叫びたくなるような衝動にかられそうになりながら、冷静さを保つことができなくなり、医師としての公正さを欠く発言をしかねない自分を恐れた。患者と一緒になって怒ったり、泣いたりすることが医学者として失格であるならば、「医学者でなくたっていい」とさえ思ったことがあると記している。さらに、原田が証言で述べた事実が、まさしく事実であるのに事実ではなくなるようなとられ方をするのはなぜか。自他共に認める専門家意識が災いし、私たち医師は、悪意はなくとも全体的な動きを知らずに物事の一局面だけしか見ずに自らの矛盾を深めてゆくこともあるのだろう。(原田正純 2021 p90, p247-248)

私は、医師が患者やその家族に代わって苦しみを物語ることがあってもよいと考える。自身の病について語る多くの患者たちは、疾病という運命の不条理さに向けられるのと同じくらい、医療者による「物象化」(人格のある人間ではなく、ヒトあるいはモノとして扱われること)を被る。熊本や新潟で、認定審査会に必要な検査や専門医受診のために医療機関を訪れた際に、水俣病被害者たちが悔しく、不当な扱いを受けたという学術的な記録もある。原田のような葛藤や精神的負担を抱える必要がなくなるので、患者の「物象化」は医療者に感情的な保護をもたらすのだろう。(関礼子 2003 pp222-225)(キャサリン・モンゴメリー 2016 p95, p244-246)

赴任したばかりの病院の職員食堂で、私は、たまたま同席した初対面の齋藤恒名誉院長と昼食をとりながら「社会共通資本」について話しあった。医療は単なるビジネスではなく、むしろ水や空気、インフラ、教育や文化と同じ社会共通資本であるというのがその主旨である。翌日、齋藤から「現代思想」誌に掲載された、自著「メチル水銀中毒問題と宇沢弘文氏の考え方」(齋藤恒 2015)を頂戴した。

私には、もともと『新潟水俣病と私たち〜医療者(齋藤のこと)の語り〜』というテーマがあったので、対人援助学会新潟大会の大会委員長を引き受けた。齋藤に、「対人援助学会と退院支援研究会のメンバーたちに向けたメッセージを賜りたい」と依頼したところ、「メチル水銀中毒症という食中毒事件では、漁民に補償の無い自主規制を課し、高度経済成長政策のために国際的に理解をされないほど漁民を長期にわたり犠牲にして、数万人の患者を出してその対策が医学的にも誤りであったことを訴えたいが、それは可能であろうか」と齋藤は即座に答えてくれた。令和4年2月のことである。

みぞれ混じりの雨が沛然と降る中、私は

齋藤邸をはじめて訪れた。その後は手紙やメール、電話のやりとりを重ね、5 月 7 日に、齋藤と「新潟水俣病訴訟を支援する会」の萩野直路氏に 3 時間に及ぶインタビューを敢行した。そして、医学生時代の恩師三上美樹先生からの課題「唯物弁証法の実践」こそが、齋藤の臨床と研究の原動力であることを知った。インタビュー会場にしたホテルのエントランス前で、帰りのタクシーを待つあいだ、信濃川に臨む齋藤の頬を川風が撫でる。学生時代、刑事に寝込みを襲われ、参考物件と称して持ち去られた自分の日記を取り返えそうと、齋藤は警察署に乗り込んだ。30 年後の 1978 年、その跡地にこのホテルが建ち、新潟県は阿賀野川の「安全宣言」を出して大型魚の食用抑制を解禁した。

動物行動学者のコンラート・ローレンツは、「我々は歴史から学ばなければならないが、歴史から学べるのは、我々は歴史から何も学べないということだ」と言ったそうだが（関礼子 2003 p322)、それは皮肉な冗談であって欲しい。

今回は言及できなかった「水俣病の社会学的問題」を、改めて学んでみたいという気持ちに、私は今駆り立てられている。

“Mr. Saito, Is it never too late to learn?”

【引用文献】

1. 原田正純：いのちの旅　「水俣学」への軌跡.岩波現代文庫,2016
2. 斎藤恒：新潟のメチル水銀中毒症　その教訓と今後の課題.文芸社,2018
3. 原田正純：水俣病.岩波新書,2021
4. キャサリン・モンゴメリー著　齋藤清二・岸本寛史・齋藤正太郎訳；ドクターズ・ストーリーズ　医学の知の物語的研究.新曜社,2016
5. 津田敏秀：医学者は公害事件で何をしてきたのか.岩波現代文庫,2014
6. 関礼子；新潟水俣病をめぐる制度・表象・地域.東信堂,2003
7. 横田憲一；水俣病の病態に迫る　チッソ水俣病関西訴訟資料に基づいて.随想社,2017
8. 齋藤恒；新潟メチル水銀中毒症への取り組みと課題.講演,2022.3.18
9. 高岡滋；水俣病診断総論.2016 年 12 月 7 日発行,2019 年 6 月 29 日改訂.
10. 浴野成生ら；メチル水銀による大脳皮質損傷－水俣病を診断するために－.「精神神経学雑誌」.109 巻 5 号,2007
11. 浴野成生ら；水俣病における科学と社会.「保健医療社会学 論集 第 20 巻 2 号,2009
12. W.ユージン・スミス,アイリーン・美緒子・スミス；MINAMATA.CREVIS,2021
13. 才藤栄一；総合リハビリテーション.19 巻 7 号,1991
14. 齋藤恒；メチル水銀中毒問題と宇沢弘文氏の考え方.「現代思想 3 月特別号」.青土社,p171-181 2015

川下の風景⑦
～人生は川の流れのように～

米津　達也

【山と思考】

対人援助マガジンの締め切りが近づくにつれて、さぁ、今回は何を書こうかと考えながら山を歩いている。折角、気持ちよく自然の中を歩いているのだから、もっと自然を愛でても良いのだが、ジョギング、登山、自転車など有酸素運動中は頭もクリアになるのか、自己対話が割に進んで、いろいろ面白いことが思い浮かんで来る。しかし、大概は下山すると忘れてしまうか、あの時思った以上の熱量を帯びていないかで、結局、あの時に思ったことは書かないままでいることが多い。いっそ、歩きながらスマホに喋り続けてやろうか、と思ったりもするが、周囲に迷惑になるからやめておくし、おそらく後から聞いてもまともな文章になっていまい。

世間がお盆休み、という期間はおおそよ通常通り仕事をこなした。世間が休みだと、どこに行っても混んでるし、子どもをどこかに連れて行ってやろう、という年齢も過ぎたので、特段ここで休みを取る必要もない。遅れて休みを取得し、天気が良ければ立山でテント泊を、と思って準備もしていたが、生憎、天気に恵まれない。せめて、最終日ぐらいは日帰りで西穂高へ、とじっと天気と睨めっこしたが、気持ちよく登れる天候ではないらしい。アクセスだけで往復８時間、山行も８時間、労力はいとわないが、財力に限りがあるので、次の機会とした。そんな夜にこれを書いている。1,000ｍであろうが、3,000ｍであろうが、山は山なのだが、高さよりも、行ったことのない場所への冒険心が魅力である気がする。天気と都合が合致していれば、今頃は床の中にいて、眠れぬ夜を過ごしながら、夜明け前の深夜に出発。深夜ラジオを聴きながら、コンビニ珈琲とパンをかじり、郡上八幡あたりで夜明けを迎える。ポツポツと上空に浮かぶ雲を見ながら歩く山々の稜線。標高2,000ｍ以上で酸素も下界の８割程度。寝不足の感覚は無く、クライマーズハイになった頭で描く物語はどんなものだろうか、と少し想像してみる。

その玄関はいつもオープンで、鍵が掛かることは無い。家主は鍵の在り処を忘れてしまっている。朝日は明々と玄関と廊下を照らし出すが、西日はその奥のリビング・ダイニングの窓から燦燦と降り注ぐ。だから、西側のリビングに面する窓はいつもカーテンが閉じられて、室内は薄暗い。８月のお盆。暑い日々が続く。団地の中に人の気配は薄い。人々はそれぞれの故郷に帰省するのか、どこそこの観光地に出掛けているのか、それとも高齢者の多い団地だから、こんな暑い日は表に出ないのか、遠くの山で蝉の鳴く声がこだまする。いつもと違って少し嫌な雰囲気を感じるのは、玄関奥のダイニングに通じる扉が閉まっていることだ。家主は鍵の在り処も忘れているが、エアコンのリモコンも無くしており、あそこの扉が閉まっていると風が通らない。西側の窓は日差しも強いが、裏手は田園風景が広がり、気持ちの良い風が玄関に向かって抜けていく。風の通らない室内。いっそ、家主は留守ということにして、このまま引き返そうか。インターホンを一度鳴らして応答が無ければ引き返そう。やがて扉を開けて、少し険しい表情の高齢の女性が現れる。やはり今日は外れだ。表情が険しい。３分前の記憶が保てない女性であるから、当然、私の顔は覚えていない。「いや～お兄さんに頼まれましてね」と毎回同じ文句で始まり、なんとか彼女の警戒心を解くべく、表情と会話は何度も積み重ねてきた役場の人間を装う。薄暗いリビング・ダイニング。リビングには炬燵

が一式。炬燵テーブルの上には冷凍から揚げが袋のままひとつ。30 代半ばの女性の遺影がキャビネットにひとつ。普段は無いが、遺影の前に湯飲みの水が供えられ、その前に犬の置物が列をなしている。
不思議だな、と思う。家主は、遺影の娘を亡くして以降、広いこの団地に独りで暮らしている。娘を亡くして 20 年余り、認知機能の低下に伴う物忘れは進み、 4 人いた子どもたちの存在を彼女は覚えていない。遺影が置いてあるキャビネット以外は実に殺風景な部屋で、テレビひとつ置いていないが、唯一、壁に一枚の年賀状が貼ってある。雪遊びの写真だろうか、小さい子どもが 3 人。「これはお子さん？」と毎回聞いているが、結局、誰なのか分からない。彼女の中では、自身の子ども 4 人は既に独立して暮らしている。それがこうして弔う仕草を見せるのだから不思議だと思う。

家主である彼女のジェノグラムを整理した時、亡くなった家族の多さに違和感を覚えた。親や兄弟が亡くなるのは、彼女の年齢からすれば必然だが、子どもが亡くなるのが早すぎる。最初の子は幼少期で亡くなった。年齢からして、事故か病気か。幼い子どもを突然失った夫婦は、その関係性を維持できずに別れた。彼女は 3 人の子を連れて、この団地に流れてきた。別れた夫からの養育費はあったが、3 人の子を育てる為に、母親は働かざるを得なかった。何かと助けてくれたのは兄弟唯一の男である兄だった。一番上の子は学校を出てから早々に家を離れていった。もともと母親と折り合いも悪かった。末っ子は就職氷河期世代で、学校を出ても希望の職に就くことが叶わなかった。そんな末っ子が、20 代で亡くなった。この家に残されたのは、母と娘のみ。二人は家族の死を背負って生きたが、やがて娘は仕事にも行けなくなった。20 数年前、その娘も母親よりも先に逝ってしまった。この家には子どもたちの思い出の影が見えない。殺伐としていて、当時の生活の面影が見えない。家主である彼女は、この 20 年でそれらの思い出を片付けてしまっているのかも知れない。押し入れの中に、それとも物置部屋の中に。そして、そのまま彼女は記憶を亡くしているのだろう。今は風呂場の場所も忘れているのだから。

彼女の言動が地域で問題になっているらしい。暴言、暴力、勝手に物を取っていく。団地内の共同生活ルールが守れない。何度か支援者が介入の糸口を掴もうと四苦八苦したようだが、興奮した彼女の返り討ちにあった。我々の社会に押し込めようとする、時に引っ張りだそうとする支援者たち。家族と支援者の間で理解の度合いがズレている。一方、これからますます機能低下は避けて通れない。炬燵の上の冷凍食品。あれは解凍していたのではないか。電子レンジが使えなくて困っているのかも知れない。玄関前の廊下に鉢植えの花がいくつか飾ってある。オレンジのマリーゴールド。金銭管理も出来ないからお金も持っていない。どこから手に入れたのかは分からない。そういえば、今日はいつもと印象が違った。髪が短く切ってある。繰り返すが、お金を持っていない。連れていく家族もいないのだ。
ちゃんと栄養ある食事をしなければ。熱中症で倒れたら大変だから。お風呂に入ってないなんて。物忘れがあるなら、医師にちゃんと診てもらわないと。いろいろ手段は思いつくのだろうが、私は必要最低限以外の部分で動こうとは思わない。彼女の生活を、支援者がああだ、こうだとこねくりまわしても仕方がないのだから。

2022.8.25　米津達也



miho Hatanaka,

若い頃には歌を、雰囲気や流行りということでまるっと、聞いていたのかもしれない。あるいは好きな歌詞の一部だけを聴いていたり。同じ歌を久々に聴いて、当時とは異なる聴こえ方がすることもある。まるっと聞くのも良し、違う聴こえ方に出会うも良し。今回は、ラジオから聞こえてきた歌の話と、一枚の写真を。

✽ ⁎ ⁎ ✽ ⁎ ⁎ ✽ ⁎ ⁎ ✽ ⁎ ⁎ ✽

【第７話　こころのなかで、願う】

　看護学校での前期の心理学の講義最終日、行きがけの車の中でラジオをかけているとTHE BLUE HEARTSの歌が流れてきた。『人にやさしく』だ。懐かしい。若い頃、よく聞いていたが、耳を澄ましていてふと、初めて聞いたような感じがしてびっくりした。“えぇ！　この歌、こんな歌やったんか”。
　歌のなかに、「がんばれ」という言葉が何度か出てくる。昭和ではない令和の時代、一般にこの言葉を使うのはちょっと難しく、「人の気持ちもわからずに勝手なことを言うな」とか「これ以上がんばれと言わないでくれ」という思いを持つ人がいることは理解できる。だからそういう意図はないにせよ人に対して用いることはしないが、自分に対して「がんばれ」と思うことはあって、好きな言葉のひとつでもある。ただそのときというのは、鼓舞するのではなく労いの気持ちがあるとき。「あぁ、あんたほんまによう、がんばっているよねぇ」というときかな、と思う。私が、私のたったひとりの応援団として。

「わかるで。わかってるで。そのこと、私がほんまに、ようわかってるさかいにな」
　この歌が歌われた時代との違いだけではなく、私自身が歳を重ねるなかで、「がんばる」ことも「がんばろうとする」ことも「がんばれない」ことも「がんばらない」ことも、たくさんの「がんばる」に関する経験が増えて、がんばる、は、成績や評価のためだけではなく、また「もっとやれ」でもなく、「踏ん張る」とか「耐える」とか「遣り過ごす」とか、いろいろなニュアンスを含むものとしても感じられるようになってきているからかなと気づく。だから今、聴くこの歌は、何か響くのかもしれない。
　またがんばれと人に言うことはなくてもこころの中で思うことはあって、それは「思う」というよりは「願い」のようなものかもしれないと思う場面がある。
『人にやさしく』の歌詞のなかに、次のような言葉がある。

♪　期待はずれの　言葉を言う時に
　　心の中では　がんばれ　って言っている
　　聞こえてほしい　あなたにも

　これに続いて、甲本ヒロトさんは「がんばれ」と叫ぶ。
　人に何か言葉がかけられたらと思うとき、それが真剣に伝えねばと思えば思うほど難しく感じることがある。相手との関係がどのようであるかも、どの言葉を選ぶかに関係する。そうするとますますいろいろと考えすぎて、本当に何も言えなくなってしまう。ただ一方ではだんだんと“え一加減”な自分も増えてきて、「どうもこれは省エネでいったほうがいいぞ」という、逆説的ではあるけれども智慧のようなものも働いてくるようになった。言葉が、どうもうまく出てこなければただ、傍にじっといて、その人が言葉を紡ぐのを黙って“見届ける”のも、ひとつの誠実の形だろうか、という気がしてくるのである。そもそもその時の相手に合うかどうか以前に、自分のこころにぴったりと沿う言葉がみつかりきらないのに口にすることの、借り物のような感じで胡散臭いではないか。でも。こころのなかでただ「がんばれ」と願うことはできる。このときのがんばれは「あなたが何かをすること」を望んでいるわけではなく、そこに居る“あなた”に、「そんなあなたが居ることを、私が、知ってるよ」という、連なりの想いからくる願いなのだ。
　個人に対するカウンセリングの場ではなく、講義や、小学校や中学校での性教育などの場で出会う子どもたちには、もっと大きな「がんばれ」を“発する”こともある。
『人にやさしく』の、もう一か所。

♪　僕はいつでも　歌を歌う時は
　　マイクロフォンの中から　がんばれ　って言っている
　　聞こえてほしい　あなたにも

　そして、「がんばれ」。

私は授業では子どもたちの授業中の発言を拾うだけではなく、アンケートやレポートやワークなどいろいろな形で書いてもらう機会を設け、そこに書かれた言葉を用いて授業を進めている。なかには個人的な開示や悩みを書く子どももいて、その子に対してどうにかして返事をしたいときや、その内容が誰にとっても重要だと思える場合には、やはりきちんと言葉で伝えたいと思う。ただ授業のなかでほかの子どもたちの前で名指しで答えるわけにはいかないので、個人的な部分は伏せて「これを書いてくれた人に、あなたへの返事だよとわかってくれたらいいんだけど、どうかな、届いてるかな？　気づいて聴いてくれていますように」と付け加える。すると、授業の後で必ず、「畑中先生、あれを書いたのは私です」と言いに来たり、感想文に「答えてくれてありがとう」と書いたりする子がいるのである。よかった！　聞こえてた。スクールカウンセリングの仕事で全校配布のおたよりを出す時にも、“あの子”や、“あの子”や、“あの子”に、「聞こえてほしい」言葉を込める。だから…。多分、その時、私はひとりの rocker になっていて、♪聞こえてほしい　あなたにも♪ と、“うたって”いるのだ。そしてその声は問いかけた本人に対してだけではなくきっと、ほかの子どもたちにも「なんか伝えたいことがあるんやろうなぁ」と感じ取られ、なかには自分のこととして受け取ってくれることもあるのではないかなと思う。

ラジオからこの歌が流れてきた日、私は看護学校に着いて講義を始める前にいつものように何か少し、この歌のことも話したくなった。「今日、ここに来る車のなかで、私がみなさんと同じくらいの歳の頃によく聴いていたロックがかかっていてね…」。懐かしかったわぁ、では講義に入りましょう、と、なんとも中途半端な話になってしまった。まだ言葉がまとまらず、なんとなく自分でも滑稽な感じがしたが、まぁいい、その日、たくさんいる学生の誰かに、その子にとっての別の何か「がんばれ」が聞こえていたらいいな、と思う。



【　「まぁ 飲みなはれ」　】

福祉教育への挑戦(7)

3 コマ連続授業、できる工夫は？

髙井裕二

非常勤講師として勤務している高等専修学校にて、今年度は 3 年生の「生活支援技術」を３コマ連続で担当しています。50 分授業とはいえ、介護の実務経験を持たない私としては、どうすれば生徒たちに具体的なイメージを持ってもらえることができるのか、
そのため、私の中での今年のテーマは、「飽きさせない」に設定して、2 つの取り組みを始めました。
今日は 1 学期で実践してみて気づいたことを言葉にしてみたいと思います。

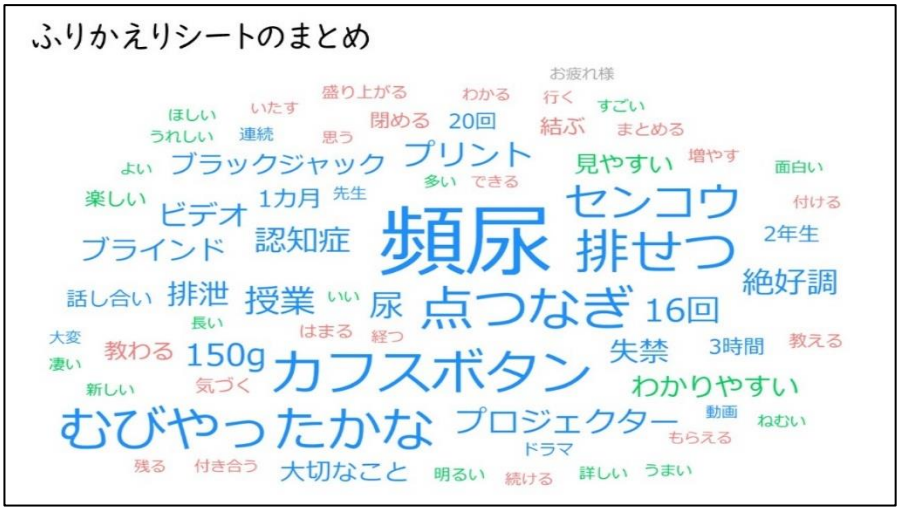
その１ ふりかえりシートの導入

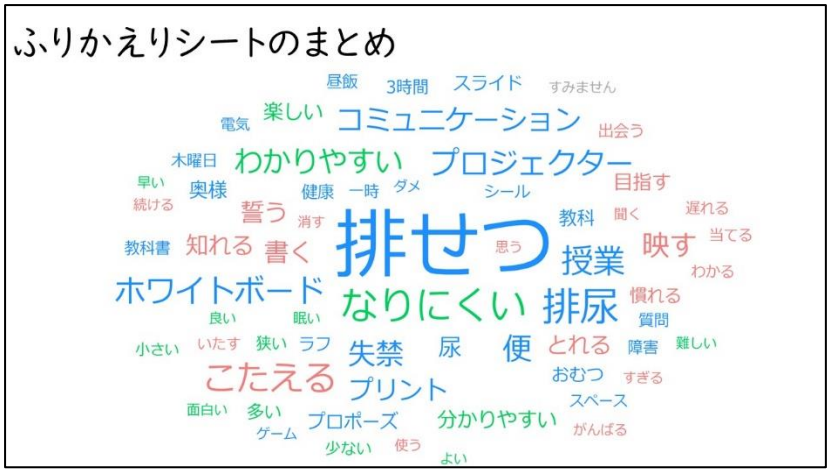
今年から 3 コマ目の最後の 10 分間で、今日の授業で学んだこと、質問などを書くふりかえりシートを記入し、提出してもらうようにしています。Ａ４用紙を 1/4 程度に切った 4 行ほど書けるシートです。大学の演習系科目ではよく行っていますが、高等専修学校の生徒たちが毎回書いてくれるのか不安でしたが、思いのほかたくさん書いてくれています。例えば、「排泄の介護」を扱った授業の時は「自分が下痢気味だったので、お腹の状態を考えるきっかけになった」、「祖母の介護で今日学んだことを実践してみます」といった自分の経験に結び付けて整理する生徒がいました。「睡眠」の時は「最近、不眠症なので、熟睡できる方法を教えてください」のように個人的な悩みなども拾うことができ、授業内で取り扱わなくても、休憩時間に個別で話を聞いて悩みの解消方法を一緒に考えることができています。
シートの記載内容はそこまで厳格に指定していませんので、中には教員へのプライベートな質問や生徒自身の近況など、コミュニケーションを目的として記載している生徒もいます。次回授業の導入時に、ふりかえりシート内容をフィードバックする時間を設けていますので、関係作りとしても役に立てることができています。また、直接言いにくいような教員への要望も書いてくれます。例えば、「プロジェクターが見えづらいので、カーテンは全部閉めるようにしてほしいです。指示があれば、私も手伝います」とか「プリントの空欄が少な過ぎて、今日の授業は眠たかった」のように教員の授業に対するフィードバックを得ることができ、授業改善にも役に立てることができています。

その2 プロジェクターを使った授業展開

PowerPoint のスライドや画像を必要に応じて用いるようにしていることです。幸いなことに勤務校が黒板ではなく、ホワイトボードなので、パソコンとプロジェクターを持っていけば、すぐに実施できる環境です。大学で使っている授業素材を用いることもできますし、何よりも具体的にイメージを持ってもらいたい時に助かっています。私は絵が不得意なので、人体のイラストを描くよりも、人体の画像を映して、説明に力を入れるほうが教員・生徒ともに有益です。排泄の仕組みなども画像やイラストを用いることができるので、ふりかえりシートでも「具体的にイメージができて、面白い」と書いてくれていて、興味・関心を引き立てることに繋がっているように思います。新型コロナウイルスの感染拡大状況により、生活支援技術について実演をする機会を十分に設ける

ことができないため、2 学期でも取り入れていきます。
　この項の書き始めに「必要に応じて用いる」と書きましたが、全てを PowerPoint で授業してしまうと集中力も落ちてきますので、プロジェクターの電源はオンにしたまま教科書の内容確認や板書などの授業を中心に組み立て、「ここは具体的に考えてもらいたいので、プロジェクター使います」のような声かけとともに、使用するようにしています。
　また、授業に入る前の導入時に、ふりかえりシートで書いてもらった内容をユーザーローカルの「AI テキストマイニング」にかけて作成したワードクラウドの画像を映しながらフィードバックをしています(1)。他の生徒がどんなことを書いているのか、単語レベルですが共有する時間となり、先週の授業を想起するのに役立っています。





関係性を築きながらの授業展開

　ワードクラウドのようなフィードバックは、大人数を対象としたオンライン研修にて、ZOOM などのビデオ通話サービスを利用した際のチャットからヒントを得ました。意見を募集した際、チャットを通して参加者全員の意見が視覚化され、「他者の意見を多く目にすることができて、勉強になった」というアンケートが多かったので、「自分以外の参加者がどのように感じているか」に触れる機会があるのは、面白いと思いました。ワードクラウドで出すと、「この単語書いたん誰やねん？」と会話も盛り上がりますし、生徒同士の関わりも生まれています。
　またプロジェクターを使った授業については、「大学の授業の多くもこんな授業スタイルです

よ」と大学に関する話も織り交ぜやすく、生徒にとっても大学の雰囲気を感じられて面白いようです。とはいえ、「介護経験未経験の教員は介護職員の動画教材に教育効果として勝てるのか？」という問いも頭に浮かびます。勝ち負けよりも利用方法だとは思いますが、「対面で授業をすることで伝えやすい福祉教育とはどういうものか？」と意識しながら、これからも授業の工夫を続けていきます。

　今回は授業内の工夫にウェイトを置きましたので、福祉教育の内容を真正面から扱うようなことも、これから考えていきます。

注)
(1)ユーザーローカル　AI テキストマイニングは、無料版でも授業で活用できるワードクラウドを使用できるので、重宝しています。
（URL） https://textmining.userlocal.jp/ （情報取得日：2022 年 8 月 10 日）

第 8 回：第 2 章–その 1–

単一症例による仮説検証型“日常生活”実験の報告

—そこでひらめきは増すのか？—

著　：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

そんなところで読みふける

中国の北宋時代に活躍された欧陽脩（おうようしゅう）曰く、ひらめきの三上（さんじょう）は馬上（ばじょう）・枕上（ちんじょう）・厠上（しじょう）となります。すなわち、どのような時に人はひらめきを得やすいのかというと、馬にのって移動している時、布団で横になっている時、トイレで排泄している時ということなのです。

このような指摘をいつ学んだのかを、とんと思い出せませんが、時々、「欧陽脩は間違えていないなぁ」と、つくづく感じます。

馬にのることはありませんが、車で移動中、特に出勤時退勤時においては、あれこれアイデアがでやすいと感じています。

ベッドにはいってしばらくすると、やるべきことがあれこれと、ふっと浮かぶことがあるので、枕元にいつも、メモ帳やスマートフォンを置くようにしています。寝付く前にメモるのです（メモらないと高い確率で忘れてしまう。あるいは、高い確率で寝付きにくくなるのです)。

トイレでもそうです。なんというか、思考が研ぎ澄まされる気がします。従って、トイレというのは、複数の意味でスッキリする場所だと思っております（笑)。

きっと、このような私の感覚は、私個人にとどまらず、多くの方にもご賛同していただけるのではないでしょうか？



欧陽脩　Ouyang Xiu　（1007～1072）



中国北宋の政治家・文学者・歴史学者。唐宋八大家の一人。4 歳で父を失い、苦学の末 24 歳で進士に合格した。直言の士で敵も多く、中央と地方を行き来している。蘇軾を見出し、王安石や司馬光を登用した人物であるが、実際に王安石の新法が実施された後は青苗法に反対して、政界を引退した。歴史学者としては「新唐書」、「新五代史」を著述・編纂し、評価されている。古文復興運動に尽力し、滁州の自然や人々の生活を描いた「醉翁亭記」は紀行文の最高水準と言われている。

人名辞典から抜粋　https://www.jinmei.info/data/20110221000.html

移動中、ベッドの中、トイレの中というのは、「ある種の“手持ち無沙汰”を感じる」という意味で、共通していると思います。つまり、乗っているだけ・寝ているだけ・座ったり立ったりしているだけ、という状況で、そのことに集中するために他にしようがない、やることがない、もしくはやりようがない、ということです。

もちろん、そのことをしながら音楽を聞くなど、同時並行的に実施可能なアクティビティは意外と少なくないのですが、そういったことは事前に準備しておかないと、なかなかできるものではないでしょう。

そう、事前準備が必要なのです。

そう、事前準備すれば、そのことがちょっと変わるのです。

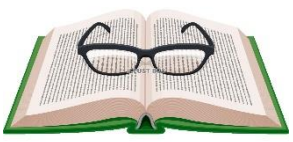
そんなわけで、私はある時、事前準備をして、「馬上・枕上・厠上タイム」の改善（？）に取り組むことにしました。すなわち、本の準備、本の設置、本の携帯です。三上における読書の導入です。

「三上に読書を導入するならば、ひらめきが増すかもしれない」、という、子供みたいな発想をもって、子供みたいにちょっと工夫（？）してみたのです。

きっと読者の多くは、「まともな大人がすることではない」とご指摘されるかもしれません。そして、私はそのようなご指摘に、全く反論する気などございません（最初から白旗をあげます！ฅฅฅ)。

ただ、「仮にひらめきが増さなくても、“知的刺激の獲得・勉強時間の確保”という意味で、より有意義な時間になるのではないか」という好奇心が大人としての良識を上回っただけです、と、言い訳するだけです。

どうかこんな大人を、反面教師にしてくださいませ。



仮説検証：三上読書はひらめきを増幅させるのか？

さて、その事前準備とは、具体的には以下の通りとなります。すなわち、「自家用車の助手席に本を置く、ベッドの枕元に本を置く、トイレ内に本を置く・持ち込む」です。

それぞれに、「異なる本を置く・持ち込む」のがポイントとなります。そうすれば、労力コストが最小限となるからです。すなわち、いちいち本を持ち歩く・持ち運ぶ必要性が最小限に抑えられるのです。

また、特定の場所で特定の本を読むようにすると、その都度、その本にあった読む準備ができるようになります。つまるところ、その本を読む心構え（気持ち？動機？）が自然と創られるのです。例えば、助手席に英語の本を置くと、すっかり英語を読む気持ちになってから、本を手に取れるようになります。

ベッドの枕元に哲学書を置いておくと、自分の人生をどう生きるべきかという視点を感じながら、本を手に取れるようになります。

トイレ内にビジネス書を置くと、ビジネスマナーや仕事の効率化を考えるような気持ちになってから、実際に本を手に取れるようになります。

実際に本を手に取って開く前から、すっかりその本の世界（？）に入ったり、本の影響を感じられたりするのは、1つ「先行条件づけ」（😁）ですね。これによって、読書がより容易になります。



ただ、このような取り組みは、家族の反対を受けました。

「運転中に本を読むとか、ありえない。」

「枕元に本があるのは、非常識だ。」

「トイレ内に本があるのは、不衛生だ。」

「子どもが真似をする。よくない。」

・・・などなどです。

至極当たり前で、反論できない反対意見です（汗）。

私の家族は、まともな感性を持っております（誇）。

ちなみに、運転中は（当然）、本を読みません。読めません。渋滞中、赤信号中などに本を手に取るだけです。数ページどころか、数行だけ目を通したらすぐ戻す、という手続きになります。・・・ただ、それでも、危険であることには変わらないので、家族の指摘は正しいです。恩師にも注意されました。よって、自家用車運転以外の移動時にのみの読書となります。

というわけで、三上読書は、家庭環境由来の理由で、継続不可となりました。

おかげで、安全運転ができるようになり、寝つきが早くなり、トイレ滞在時間が短くなりました。家族どころか、私自身にとってみても、よりハッピーになった気がします。

さて、肝心の仮説検証のほうは、どうだったのでしょうか？すなわち、三上読書は本当

に、ひらめきを増幅させたのでしょうか？

結論が申し上げるならば、私の乏しい経験に基づけば、ひらめき増幅は「ありませんでした」。ひらめきに満ち溢れるといったことは、ほぼ、なかったのです。むしろ、ひらめきが減ったような気がいたします。おそらく、本を読むための意識や、本を読んで理解することにエネルギーが費やされるようになったことによって、ひらめきが出にくくなったのではないかと思います。よって、仮説は棄却されたと申し上げます。

従いまして、「電車・飛行機などでの移動中の読書」を除くと、私が皆さんに三上読書をおすすめする理由は、１つもありません（涙）。

もう１度いいます。

どうか皆様、こんな大人を、反面教師にしてくださいませ。



。･ﾟ･(*ノД`*)･ﾟ･。ｼｸｼｸ

余談

ちなみに、三上にとどまらず、入浴にも読書を導入したことがあります。サウナにも読書を導入したこともあります。どんな工夫をすれば「お風呂読書」が楽しめるか、「サウナ読書」が楽しめるか、家庭で、そして公衆浴場*（スーパー銭湯等）において、あれこれ試した時期もありました。新聞を持ち込んで、「濡れる前に読み切る、そして読み捨てる」なんてことに挑戦したこともありました。上手に新聞を読むために、前もって読みきりサイズにはさみでカットしたこともありました。

…最終的に、いろいろな理由によって、そういった活動はやめましたけど（笑）。



＊公衆浴場内・更衣室内での読書活動は、一般的にマナー違反とされます。
あと、お子様に悪い影響がでる可能性が高いです。どうか真似をしないでください。
私ももう（もちろん）、やっていません。やりません。

読書は続くよどこまでも

今回は赤裸々に、私の読書アクティビティの実態の片鱗を告白いたしました。どうか、ご一笑の上、すべてお忘れいただけると幸いです。

さて、本連載も第２章に突入しました。

実は私たちの企画、「対人援助実践をリブートするこの一冊」は、対人援助学会年次大会の企画ワークショップ「1 回こっきり」にとどまらず、さらなる活動を展開しているのです。会員様・非会員様のご好評とご批判、あるいは無関心があってもなくても、懲りずに、そして地味に、本を介して対人援助と向き合い、自分たちを語り合っているのです。そのあたりの実態について、次回以降、気持ち新たに、お話しさせて頂ければと思います。どうぞよろしくお願い致します。

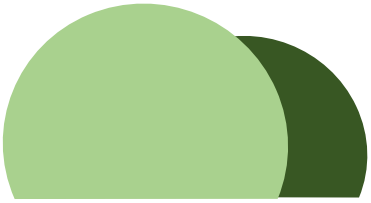
－つづく－

島根の中山間地から Work as Life

第6回

幕を閉じる

野中 浩一





ものごとを閉じる

「閉じる」ことは難しい。思いきれないから難しいと思い込んでいるだけかもしれない。とにかく閉じるイメージを持つことは、何かを始めることやより良くすることに比べて、エネルギーの向けどころがわかりにくいと私は感じている。

今の家に 16 年住んでいる。わが娘 2 人が生まれ育った持ち家だ。田んぼに囲まれた農道沿いの平屋の一戸建て。景色も空気も居心地も良い。地域の方にもお世話になってきた。14 年間可愛がってきた飼い猫も眠っている。しかし車がないと生活できず、最寄り駅やスーパー・コンビニ・病院まで歩いて 30〜40 分かかる。およそ 5 年後、子どもたちが独立した後も住み続けるのか。それとも家を閉じるのか。果たしてそんなことが可能なのか。

28 歳時から 44 歳になる現在までフリースクールを運営してきた。何事も生徒と一緒に考え、一緒に行っていくことを実践してきた。しかし近年は老眼と白内障治療の結果、勉強を教える際や小論文の添削をする際などに困ることが多い。普段使いの眼鏡ではまず文字が読めないという状態からスタートするため、教える瞬発力が著しく低下した。動体視力にも影響があり、高校生とキャッチボールしていると速い球がふと消える。眼だけでなく足首や腰の痛みがクセになっており、一緒にバドミントンやフットサルをしてきたが、対等にプレイできるとは言い難くなってきた。20 代や 30 代の頃と比べて同じ質で生徒たちと関わり続けることが難しい中で、どこで何を転換するのか、いつどのようにスクールを閉じるのか。

ボリュームゾーンの老化

こう書くと中年男性が子育て後の人生（俗にいう第二の人生）や老化の悩みに直面して当惑し愚痴を言っているように感じられるかもしれない。確かにそうした側面もある。一方でこの事象を日本全体に拡大して考えた時、歴史上初めてとも言える少子高齢化の大波の中で、人口ボリュームが大きい 40 代〜50 代前半の団塊ジュニア・ポスト団塊ジュニア世代の老化が社会の構造に及ぼす影響は少なくないように思う。

この世代と話をしていると、認知症の家族・介護が必要な家族を抱えながら仕事や生活を支えていること、家族の大病や死による家族資源の低下を抱えてそれでも日々が続くことなど、出口の見えない話を聞くことがしばしばある。こうした話自体は今に始まったことではなく多くの家庭が直面してきた困難であるが、これまでにない日本全体の高齢化の中、経年の変化によりじわじわと苦境に追い込まれている人の割合が次第に増加していることを感じている。

人生を閉じる

人生を閉じることもまた難しいなと感じる。ついこの間のこと。祖父、母、叔父、妻、娘 2 人と一緒に過ごすお盆。96 歳になる私の祖父は、日頃お世話になっているデイサービス施設の事情により、しばらく通う場のない夏を過ごしていた。不意に「おらぁ、いつ死んでもいいと思ってる。いつ死んでもいいと思っているようだけれども、それでも薬を飲んでるし、なにか調子が悪くなれば病院に行って看てもらってる。結局は死にたくないということだわなあ。だから薬も飲むし病院にも行く。」と笑う。

家族以外の誰かに対して、死にまつわる話しをする機会は少ない。私はそう感じている。私がはじめて死の輪郭を感じたのは 4〜5 歳の頃だった。母の田舎に帰省した際、それまで元気だった大祖母が寝たきりになっていた。当時小さかった私は大祖母が臥せている部屋に行き、枕元で話をした。そのときの常夜灯の茶色く薄暗い光が記憶に焼きついている。ほどなくして大祖母は亡くなった。

それから 40 年。いくつかの印象的な死があった。10 代のとき、私の友人と親しかった高

校の同級生がバイク事故で亡くなった。20 代のとき、高校の友人が突然倒れて亡くなった。くも膜下出血だった。弔問のため自宅に伺い、お母さんの話を聞いたときの部屋の光景は今も鮮明だ。30 代のとき、大学時代の部活の 3 つ下の後輩が急逝したと同じ部活の友人から聞き、同期で弔電を送った。40 代では、高校の同級生で一緒に登下校し何度もカラオケに行った友人の訃報を聞き、1000km 近く離れた地元に戻り、ひとり弔問した。誰もかれも予測した死でもなければ、思い描いていたような結末でもなかったであろう。

自分にかぎって死ぬことはありえない

「死とその過程」に関しての実践と研究を数多く残す精神科医エリザベス・キューブラー・ロスは『私たちは無意識のうちに「自分にかぎって死ぬことは絶対にありえない」という基本認識をもっている』と述べている。そのため人はいよいよ自らの死が近づいていることが分かると、否認し、怒り、なんとかできないかともがく（もちろん人によって心境や過程に違いがある）。しかし、いよいよどうにもならず鬱鬱とした日々を過ごし、次第に死を受け入れていく。ロスは、多くの末期がん患者とのインタビューを経て『患者にとって死そのものは問題ではなく、死ぬことを恐れるのは、それに伴う絶望感や無力感、孤独感のためであるということがわかった』と考察している。

私が「死」の理解に前のめりになったのは昨年度のこと。コロナ禍の 2 年間で祖母、飼い猫、父が相次いで亡くなったことによる。とりわけ父の死によって、次は私の番だという自覚が急に高まった。『今まで死というものを考えたことがなかったのに、父親が死んだら、死と自分との間に父親が立ち塞がっていたのがわかった、死と自分が直面するようになった』との遠藤周作の著書にある記述は、今の私の感覚そのものだ。

前述のロスによれば、重大な疾患などで死に直面した際の絶望、無力、孤独を和らげるものがあると言う。自分に関心をもってくれる人と話し合えること、その人自身の必要感や困難感に寄り添う人がいること、（死にまつわる話題等について）遠回りな聞き方でなく素直に質問してくれる人がいること、自分に意味があり誰かの役に立つと思えること。そうした 1 つ 1 つが死の間際の絶望、無力、孤独を和らげてくれる。また、『ほとんどの患者が自分の不安を他のだれかと分かち合いたいと願っていて』『一人残らずいくばくかの希望を持ち続け、とりわけつらい時期の心の糧としていた』とも述べている。こうした疾患による絶望、

無力、孤独の緩和と、学校や職場や社会集団で適応できない（自分が自分でいられない）絶望、無力、孤独の緩和。状況は違えども、不登校やひきこもりで心身の状態が弱り切っている子どもたちと共通するものを感じる。

死ぬことの意味

そんなあれこれ、閉じることや死ぬことに思いを巡らせているとき、書店で平積みされている本の帯に目が留まった。そこには『私たちが死ななければならない「重要な意味」とは？』と書かれていた。生物学から見た死の仕組みが書かれた小林武彦著『生物はなぜ死ぬのか』。その理由はここでは割愛させていただくが、読み進める中で、やはりというか衝撃を受けた記述がある。生物学的には 55 歳くらいから『ゲノムの傷の蓄積量が限界値を超えはじめ』『異常な細胞の発生数が急増し』『そこからは病気との闘い』になるとのこと。つまり、多少の個人差はあれ、人の機能を維持する分岐点が 55 歳頃であるという。繁殖の時期を終えると死を迎える生き物が多い中、哺乳類は子どもが未熟な状態で生まれるため、子が育つ程度の年数を生かされているということだろうか。

生きること自体に意味があるわけではないと何かの本で読んだことがあるように記憶している。しかし人間は考える生き物であるから、生きることに意味を見出し発展の原動力としてきた。それと同じく意味を見出さずに死ぬことは難しいのかもしれない。歴史上では僧や武士や庶民や軍人が、飢饉や戦乱や病気や感染症など死に直面する中で、多様な死ぬ意味を見出し支えにしてきた。一例として『浄土へと往生するには、南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）と申すだけ。阿弥陀仏の願いを疑わずに念仏申す、その他には何もない』という法然思想がある。この思想的発明とこうした思想が普及するに至った苦難多き時代背景は興味深い。死に直面した人は、その絶望感、無力感、孤独感を受け入れて死に向かうために、分かち合える人、未来への希望、そして支えとなる意味を欲する。

ここまであれこれと書いて思うことは、成長や発展の上り坂は人の考えや意図が及ぶ余地があるが、老化や衰退の下り坂はただ世情の在り様に任せて（支えとなる杖を求めながら）転がり下るよりほかないのではないかということである。山本周五郎の小説「ながい坂」の登場人物たちの人生の浮き沈みがふと思い出される。閉じることも、死ぬことも、考えてもどうしようもない。むしろその時が訪れたときに初めてどうなるかが分かるといった具合

なのかもしれない。私はカトリック系の幼稚園を卒業し、浄土真宗で葬儀を行い、地域の行事では神道のお祈りに頭を垂れるような、悪く言えば曖昧模糊とした無信仰者、良く言えば異種混合の宗教観を持つ雑学者である。これまで当たり前にできていたことや享受してきたことが当たり前ではなくなる高齢化社会にあって、対人援助職者としての在処、衰退する中での希望、死ぬことの意味を模索している。他方、そんな個人の小さな感傷をよそに、世界の人口は増え続け、社会は絶えず揺れ続けている。

引用・参考文献

Ｅ・キューブラー・ロス著，鈴木晶訳（2001）『死ぬ瞬間　死とその過程について』中央公論新社

遠藤周作（1996）『死について考える』光文社

小林武彦（2021）『生物はなぜ死ぬのか』講談社

ニュートン別冊（2019）『死とは何か　死ぬとき、私たちの体に何が起きているのか』ニュートンプレス

釈徹宗（2011）『法然親鸞一遍』新潮社

かぞくのはなし
きむら　あきこ

第四話　発熱

復活連載４回目も（前回に引き続き）、ジェノグラムからは少し逸れてしまうのですが、病をテーマにして記してみようと思います。

コロナ禍も３年目に入り、ワクチンも進みつつある中、依然として、発熱すれば、発熱外来へのアクセスへのハードルが高いことは全国的に同じような現象なのではないかと思います。電話がつながらない、ようやく電話がつながっても、発熱外来の受付枠は埋まってしまい、診療してもらえない。不安を抱え、自宅療養している人も多くいるというニュースが流れています。

お盆の後でした。めったに熱を出すことのなかった私は、もう数年ぶりに 39 度を超える発熱がありました。翌日には、一旦熱は下がったものの、その状態で出勤することはできません。すぐに職場に指示を仰ぎ、職場での、コロナ抗原検査と PCR をすることとなりました。抗原検査は、15 分程度で陰性判定となりましたが、翌日の PCR の結果が出るまでは自宅待機です。熱は、37 度代から 38 度程度を行き来し、咳や喉の痛みが増してきました。PCR の結果も陰性となりましたが、今度は症状が悪化していて出勤できません。

念のため、発熱外来へ電話をかけたところ、前述の通りの状況に置かれました。仕方がないので、受診は諦め、ひたすら布団の中に横たわっていました。静かな部屋で寝ていると、子どもの頃を思い出しました。

布団の中の思い出

やんちゃだった幼少期の私は、常に手足に生傷はあったものの、風邪で熱を出すとか、お腹を壊すなどということがほとんどありませんでした。

そのため、病院へ行くという機会がほとんどありません。それでも、稀に、熱を出した時には、寒かろうが、暑かろうが、布団をたくさん重ねられた中に寝

かせられ、その後たくさんの汗をかいて、熱が下がるという方法で対処されていました。

お腹が痛い時には、富山の置き薬「赤玉」というものを飲まされ、歯が痛いと言えば、痛い歯に、「味の素」を付けられました。火傷をすると、キャベツの葉を患部に張り付けられたものです。

今となっては、そのどれもが、根拠のある対応には思われません。せいぜい、良くて、リンゴのすりおろしが出てくると、「病気冥利に尽きる。」と感じたものです。

私が育った時代は、そんな時代だったのか、と言うと、決してそうではないのです。同じ年頃の友人たちは、熱が出た、お腹が痛いというと病院に行き、薬をもらってきていました。私は、友人が、自分の名前が記入された薬袋を持っているのをうらやましく感じたりしました。病院というところが、何か特別な場所のような気がしたのです。

私が病院に行かなかったのは、おそらく、母には具合が悪い子どもの体を医者に診せるという意識がなかったのでしょう。「様子をみていれば治る。」という感覚のような気がします。それは満更はずれではありませんでした。

人には、そもそも自然治癒力というものが備わっているので、体に異変が起こったからと言ってすぐに科学的な対応が必要になるわけではないのです。自然治癒力を十分発揮させるのが、ナイチンゲールのいうところの「看護」だと、その昔、習いました。

布団に横たわっていると、そんな思い出が次々と頭の中に巡ってきました。結局、私の熱は五日目に下がりました。熱が下がると体はらくになりましたが、ゾッとしたことがありました。5 日間も寝たきりで過ごしていたせいで、左の五十肩が悪化。肩の動きが悪くなりました。これは、いわゆる「廃用症候群」というものです。また、リハビリが必要です。

感染症、生活習慣病、老化による変化などなど、家族の中には「病」はつきものです。自分の身や家族の身に起こる「病」をどのように捉え、対応していくか、そこにもまた、家族らしさが見える気がします。

おわり

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（2）

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことだと思います。技能と技術を心で繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

祝ヨミトリ君誕生

意思疎通支援装置「ヨミトリ君」が誕生して 1 年になります。厳密には、装置（試作）として形になったのは昨 2021 年の 10 月なので今まだ 10 ヶ月ですが、ヨミトリ君生みの親の、一般社団法人愛知情報教育支援協会代表でシステムエンジニアの岡田浩氏（以下、岡田さん。他、敬称を付ける場合は「さん」を使用）を、岡田さんと私の共通の友人であるマギーが紹介してくれたのが 8 月だったので、今年の 8 月で丸 1 年。私がライフワークとしている介助付きコミュニケーション「ヨミトリ」の方法を説明した最初の時に、「聞きながら頭の中で、どの素材でどのように作るかが思い浮かんだ」そうなので、やはり起点はそこになりそうです。

今号から、ヨミトリ君の誕生とその節目ごとにヨミトリでお聞きした当事者の方々、ご家族の思い、そして私自身の心情を併せて少しずつ振り返ってみたいと思います。

2021 年 8 月

マギーと私は音楽バンドの仲間です。同じくバンド仲間の星さん宅の工房兼スタジオ（星さんは木工の匠でもあります）で久しぶりに集まろうということになり、視覚に障害のあるマギーがガイドを依頼して同行して来たのが前述の岡田さんでした。そしてマギーが岡田さんに「高木さんはすごいことをしているから話を聞いて」と言いました。

私のヨミトリは、病気や事故の後遺症でいわゆるロックトインの状態にある人が字を書く手の微細な動きをキャッチして線を読み取り、その組み合わせで文字を判断し、そしてその連続で言葉としてとらえて対話をするものなので、ヨミトリをしているところを傍から見ると、はっきり言って怪しいのです。まったく動きも発話もないように見える人の手を取って何やら自分の手のひらに書きながら、「そうなんですか」とか「それはたいへんでしたね」とか「あはは」と笑ったりしているので、見た人はみな驚くし、それを通り越して時には「気味が悪い」と言われてしまうこともありました（今は「ありました」と過去形で書けるところが、ヨミトリ君のおかげです）。さらにそれを口頭で説明しようとすると、本当にわけがわかない印象になってしまうので、たいがいは話してもまともに聞いてもらえません（でした）。でも、岡田さんは私が言おうとすることをよくわかっ

てくれているように感じたので、私はついうれしくて、要領を得ない説明だと自覚しながらも、長々と一人で喋り続けてしまいました。同席していたマギーと星さんは、仲間としてのよしみで最初は面白そうに聞いてくれましたが、ほどなく顔に強い疲労の色を滲ませていました。星さん、マギー、ごめんなさい。でもありがとう。マギーはいわばヨミトリ君の生みの、生みの親です！

2021 年 10 月

前述の 8 月に 4 人で集まった際に岡田さんはヨミトリのデバイス化のことを「少し考えてみます」と言ってくれましたが、たとえそれが何か形にならなくても、ご自身が代表を務める団体で「ボランティアの支援をするボランティア」を活動の一つとして行っている一人のシステムエンジニアの人が興味深そうにヨミトリの話を聞いてくれただけで私は満足でした。

あれ、そういえば、NPO法人ドリームの事務局長の伊藤さんから、「脳卒中後遺症者支援のネットワークづくりにも意義があると思うので」と、作業療法士でBrain Computer Interfaceの研究をしている名古屋工業大学の増尾さんを紹介され、伊藤さんも交えてとても有意義なディスカッションができたのも 8 月だったなと、ちょうどその 1 年前の 2020 年の夏を思い出しながら、細々ながらも信ずるところを持って続けている活動に関心を寄せて応援してくれる人がいることの有難さをあらためて思っていたところに、岡田さんから「ヨミトリの試作機ができたので一度見てほしい」という連絡が入りました。本当に手掛けてくれていたのだと驚き、涙したのは前号で書いたところですが、それにしても早い…。

私は 2012 年に東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県名取市にある特別支援学校の生徒さんの応援活動をきっかけに、2013 年に重度の障害のある人のための介助付きコミュニケーション（指筆談）を勉強し始め、なんとなく手応えを感じ始めたのがようやく 2016 年でしたから、みんなに不思議がられ自分でも希少性があると思っているこの技能が、システムエンジニアの人の手にかかるとたった 2 ヶ月でデバイス化できてしまうものなのかと、試作機完成はうれしいような、でもこの短期間はちょっと悔しいような。なんとも器量の小さい自分でした。

2021 年 11 月

星さんの工房に再び集合し、ヨミトリデバイスのお披露目会が行われました。この時は、まだ「ヨミトリ用の機器」、「デバイス化したもの」、「ヨミトリデバイス」など、なんとなくイメージで呼んでいました。

透明のパネルと、AD コンバータのシンプルだけど美しい作品。促され、パネルに設置されたスイッチ（入力）部分をそっと押してみました。いつもロックトインの状態の人が私の掌に書く時に伝わってくるような、触れるか触れないかぐらいの微かな力を思い出しながら。

本当に軽い力で触ったつもりだったのに、コンバータのディスプレイの表示がしっかり上下して、力の伝わり具合がよくわかりました。「その人の押す力の強さ・弱さに応じて、スイッチとして反応する閾値をプログラミングで設定します。手の形状に応じてパネルの向きを変えることでセンサーに一番力の伝わりやすい位置を柔軟に設定することもできるので、この一つの装置で、手のほ

とんど動かない人がその人それぞれの力のかけ具合に応じて負荷なく操作することが可能です」。うーん、手作りなのに、あっという間にできたのに（早さにやけに突っかかる）、とてもすごい物の気がする。星さんは木工の匠らしく、装置のエッジの部分や部品の接合部の仕上がりのきれいさをほめていました。あー、早く神経難病のAさんや、交通外傷のBさんに試してみていただきたいな！

そして早速Aさんの奥様と試作機トライの日程をご相談しました。私が事前にヨミトリで伺った際に試作機の説明をして、Aさんの意向を聞いてみました。Aさんはヨミトリで「とてもたのしみ。いいとおもうことはなんでもやってみたい」と書いてくださいました。

岡田さんがまだAさんに会っていないので、Aさんの言葉をヨミトリでお聞きしている動画を事前に見てもらうよう、送りました。「おかださん　よろしくおねがいします」とAさんが書いたのを私が読み取って代書した様子の動画です。岡田さんがヨミトリを初めて見た感想は、「思っていたより指先の動きがすごく小さくて速いので驚きました」というものでした。

ここのところは、少し説明が必要です。個人的見解ですが、ロックトインの状態の人が書いた文字を読み取ってキャンバス代わりの自身の手のひらに代書する際の字の大きさは、ロックトイン状態の書き手の人の字の大きさを忠実に再現するというよりは、キャッチする側の実践者の癖や文字をキャッチする速度等の影響を受けているように思います。実際、2013 年に國學院大學の柴田先生が主宰する重度障害者が語る会「きんこんの会」に勉強に行って初めて指筆談を見た時、先行実践者の人が字をキャッチして自身のもう一方の掌に再現する大きさは人によりまちまちでした。人差し指の腹をキャンバスにして代書するぐらい小さな文字で書いている人もいたし、掌の真ん中に 4 ㎝角相当程度の大きさで 1 文字を書く人を見たこともあります。

いよいよヨミトリデバイス試作機のお試し開始です。ちょうどタイミング良く神経難病の A さんと交通外傷の B さんのところに続けて訪問できることになりました。A さん、B さん、よろしくお願いします！

＜次号に続く＞

＊前号の修正と、それに係る今の思い＊

前号（49号）で投稿した内容で、「4. ヨミトリのデバイス化（ヨミトリ君開発）」の中に「披露された試作機はヨミトリの技法の基本である、一方向の選択（タテかヨコ、上か下、イエスかノー）を可視化できる仕組みとなっており、これでヨミトリ支援をしている当事者の方々が他者の介助を受けずに自力で意思表出する一歩を踏み出せるという大きな希望を抱きました。」（p.311 l.23）と書きました。この記述にについて、ヨミトリと今回の試作機の関係と位置づけに留意するよう、増尾さんからアドバイスを受けました。

つまり、人的な介助付きコミュニケーションであるヨミトリの科学的検証がまだできていないので、意思疎通支援という目的は同じだけれども、ヨミトリとデバイス（ヨミトリ君）のメカニズムは

別のジャンルのものとして捉えなければならないということです。

直近の理解として、意思疎通支援の装置もスイッチ類も、市販の製品で精度の高い物や多機能の物等、現在はいろいろ出ているものの、在宅や施設療養中のロックトインの状態の人が意思疎通が困難な中で、またご家族や支援者が、その当事者にどんな装置が使いやすいのかなどを検討することは決して易しいことではなく、また意識レベルの状態もなかなか判断がしにくい場合、その当事者が絶対にわかっているという、ご家族の信念だけで、幾つもの意思疎通支援装置を使い比べる環境を自力で用意するということも現実にはとてもハードルが高いと思われます。

そういった中で、名古屋を中心とした東海地区という限られた地域の活動ではあっても、非営利の支援活動として、介助付きコミュニケーション・ヨミトリの技能とヨミトリ君（技術）の連携により、特にロックトインの状態の障害当事者の意思表出の取り組みに多角的かつ継続的なアプローチができる点で、本支援活動が一定の貢献ができるのではという思いがあります。

ただし、あくまでもヨミトリ君は、障害のある上肢に機能として残存する微細な身体動作を独自のセンサーとプログラムでキャッチする岡田さんオリジナルのデバイスであり、私が行っているヨミトリは、それをする際のメカニズムは未だ科学的検証を受けておらず、実際には、ヨミトリをする際に障害当事者のどのような電気信号をいつキャッチして言語化しているのか等は明らかになっていません。

少なくとも今は、ヨミトリの方がロックトインの状態の人から表出された言葉を文体としてキャッチ、代書できていますが、ロックトインの状態の方の発信を広く多くの方に科学的に届けるための学会発表や論文執筆には、ヨミトリによる障害当事者のコメント・評価等はそのアプローチとしては排除せざるを得ません。この辺りが、今後の活動をどこに軸を置いて進めていくかといった課題でもあります。

そうはいっても、ロックトインの状態で、自身の思いを届けたいと切に願っている当事者の方、その思いをなんとかして知りたいと思って日々奮闘されているご家族、ご支援者の方がいる以上、今できる実践と検証の積み重ねから、今後できそうなこと、やってみたいことの発想が湧き、またその実現に向けてひたすら努力する、その思いを旨として、これからも引き続き取り組んでいきたいと思います。

ご一緒しましょ！

*****

＜プロフィール＞

インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。コミュニケーション支援の任意団体ご一緒しましょ代表。NPO 法人ドリーム理事。東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」会員。第 52 回 NHK 障害福祉賞優秀賞。

ご一緒しましょHP https://www.goisshoshimasho.com/

先生のための16のことば

第１回　「迷ったときは、する」

スクールアドバイザー　原田　孝

学校現場ではよくあることですが、子どもたちが怪我をしたり、クラスの他の子どもたちと言い合ったりもめたりします。大きな怪我でしたら先生方は病院へ連れて行き、保護者さんに必ず連絡を取り病院に来てもらうことでしょう。このようにクラスでケンカやもめ事があり、それがとても大きな出来事でしたら、担任教諭は保護者さんの職場にまで電話をかけ、また、大きな怪我でしたら夜に家庭訪問までされるでしょう。

しかし、出来事が重大ではないという場合が問題なのです。この「重大ではない」という判断は教師が経験からするものですが、いつも他の子どもたちの間で頻繁に起こっていることから、比較しながら相対的に考えて、判断をするのではないでしょうか。その結果、学校ではいつもよくあるという認識から「まあ大丈夫だろう」という判断が起こります。その気持ちがケースの判断の根底にあります。

例えば放課後に今日のある出来事について、ご家庭に電話をします。いまの時代、固定電話のご家庭は減っています。スマホに電話してもつながらないことはよくありますので、固定電話の留守番電話やスマホにメッセージで、「~さんの担任の・・です。また、後ほど電話します」とメッセージを入れて終わります。その後３０分ほどたちまた電話します。やはり留守番電話でした。そして他の仕事、クラブ活動や教材作りをして、電話に件が頭から遠のきます。気が付い

たら時計は夜の 8 時を回っていました。先ほどの電話を思い出すのですが、8 時を回っているので、これぐらいのことなら「まあいいか。大丈夫だろう」という気になります。そこでご家庭にも失礼になるので、明日にしようと思います。

多くのご家庭では、留守番電話を聞いたあと、子どもに聞きます。「先生から電話があったんだけど、今日、学校で何かあったの？」お子さんは「わたしの筆箱が無くなったので、誰かが廊下の机の上に置いていてくれたの。それを誰かが見つけてくれて先生に届けてくれたの。」このように聞くと、多くの保護者さんは、「そう戻ってきてよかったね。」で終わりますが、そうならない場合がたまにあるのです。

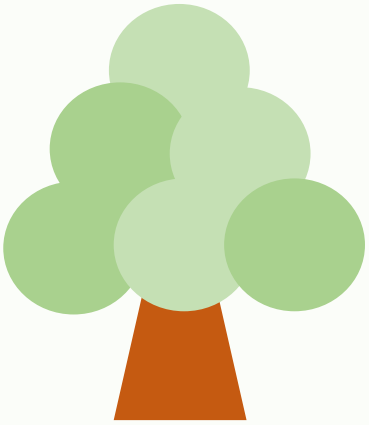
普段からご自分のお子さんと他の子どもたちとの関係性がよくないと思ってらっしゃる保護者の方など、すぐに連想されることは「いじめ」です。多分、「その件の電話だな」と思われます。保護者さんの頭の中は？？？です。親切で廊下の机に置いたというように、好意的には取られる方もいらっしゃいますが、このようにお子さん同士の関係性がいいものとは思ってらっしゃらない保護者さんは、善意でという想像は難しいのではないでしょうか。その気持ちを抱きながら、保護者さんは朝まで不安な時間を過ごされることになるのです。

教師は、そのような保護者の気持ちの変化を想像もできないまま、朝に電話をします。教師からの昨日の電話がなかったという不信が大きくなっている保護者さんと、大したことはないという気持ちの教師の会話が始まります。保護者さんの第一声が「うちの子の筆箱が隠されたらしいですけど、それっていじめではないのですか！」のように、不安から生じた極端な言葉になる可能性もあるのです。

留守番電話に連絡を入れると、必ずその日のうちに連絡を取ることです。3 回、4 回でもつながらない時は、簡潔に内容を留守電に伝えて保護者に安心をしていただくことです。１２時間で信頼が崩れることがあるということを知っておいた方がいいと思います。

「明日でもいいか」ではなく、

迷ったときは、今、することです。



こかげのにちじょう①

～夏休み中に、「トラウマ治療」をして欲しい～

鳴海　明敏

８月某日　夏休み中の高校生佳寿子さんが、園長室にやってきて訴えた。自分は、実母や継父との生活の中で虐待されていた。それでトラウマを抱えている。学園に入所する前には、地域の精神科病院に入院して、主治医から「トラウマ治療」を受けていた。その先生は、とてもできる先生だった。しかし、自分が抱えている一番大きなトラウマの治療をしてもらう前に、学園に入所してしまった。入所してからの主治医は、トラウマに焦点を絞った治療をしてくれない。それに、今の主治医のことを自分は信頼できない。信頼できない医師からトラウマの治療をしてもらうことは出来ない。だから、夏休みの期間を利用して、以前入院していた病院の先生の「トラウマ治療」を受けたい。高校を卒業して、進学や就職するまえに、自分の一番大きなトラウマをなんとかしたい、ということでした。

園長は、彼女の言い分ももっともだと思ったので、彼女の担当職員にお願いして、その病院に連絡をとって貰うことにしました。このように、子どもが園長室に直談判に来ることは、珍しいことではありません。直談判を受けての園長の独断専行は出来るだけ避けるようにしていますが、子どもの話を聞いて、なるほどと思えば、その子の担当職員に、何とかできないだろうかとお願いすることもあります。

担当の職員に話してみると、なんと佳寿子さんのこのお願いは、２回目だということでした。彼女は現在高校３年生なのですが、高校１年生の夏にも同じお願いを園長にして、それを受けて園長が私に、同じような依頼をしました、ということでした。なんということでしょう。職員からそう言われて、ようやくなるほどそんなことがあったような気もするボケボケ園長です。彼女から言われた時には、すっかり忘れていました。

職員によると、２年前にその病院に当たってみたところ、医師の多忙もあるし、「ト

ラウマ治療」にはそれなりに時間もかかるので、夏休みのような短い時間ではなんともできないということと、さらに、医師は多忙なので、いちいち昔の患者からの希望には応じてはいられないとで、お断りされましたとのことでした。なるほど職員からそう言われてみると、そうだったかなあとおぼろげに思い出したのですが、その後何か状況に変化があるかも知れないので、打診だけでもしてくれるようにと、お願いしました。その結果は、以前と状況は変わらず、夏休み中に治療を受けることも無理だし、彼女が外来受診して、主治医に近況報告をすることも無理だとのことでした。

施設であれば、退所した子どもからの連絡は大歓迎で、状況によっては相談にも乗るのになぁ、医療と福祉は違うなぁと思った次第でした。彼女には、その先生のような「トラウマ治療」は出来ないけれど、トラウマ・インフォームド・ケアといって、トラウマを抱えているあなたへの治療はそれだけではないと思うので、学園で出来ることを探していこうと提案することにしました。　（了）



はじめに

人生は選択の連続である，とはシェイクスピアの言葉。2011年3月11日の行動について選択肢はなかった。あったのは判断だけだった。数えきれない判断の繰り返しで出会った方々に導かれるようにして，いまこれを書いている奇跡。あったものがなくなり，予定していたものがなくなるということがあたりまえに起きたとき，驚くほど私たちが都合のいい「将来」を設定し，中途半端な「過去」を引きずって生きていたことが分かった。あるのは「いま」だけであった。選択したというよりもその方向に自ら身体が動いた，という方がしっくりくる。現在，私は発達支援や教育福祉分野のコーディネートなどを行いながら，書道塾taneという場を開いている。対人援助の仕事を行う中で大事にしてきたことが書道塾とどう関わっているのか，そこで起きる様々なできごと，変化，発達，対話，気づき，それらについて書き綴ってみたいと思った。

表現するということ

小学校２年生から習っていた書道が，自分の仕事につながっていくとは考えてもいなかった。あたりまえのように疑問を持たずお手本をお手本通りに再現することで「上手ね」と言われ，疑問すら感じなかった幼少期から，作品を作って出展するたびに重なっていく違和感をもち，自分の作品を作ることがなくなった。なぜ書くのか，ということが分からなくなっていたところに，自閉症のある青年の保護者から書道を教えてほしいと声がかかったのがはじまりだった。「書きたい」という動機さえあればいい。彼らと書いていく中で，書道は自分自身で世界を作り出すことにも似ていると感じるようになった。しかもそれが書くという一瞬で起きていく。自分の引いた線に影響され，次の線を決める。集中すればするほど目と手が自然に動き出し，世界が次々と作られていく。手本があって，それに近づけようとしてきた書道とは違う何か。それぞれの身体が作り出していく空間や，世界がそこに広がっていく。メルロ＝ポンティは「世界とわたしは互いに互いのうちにある」と言った。それらの表現は見る人を魅了し，技術や技法ではなく「その線がそこにあるべくしてある」まさに「わたしはここにいる」という存在感を持つ。

自己決定を引き出す

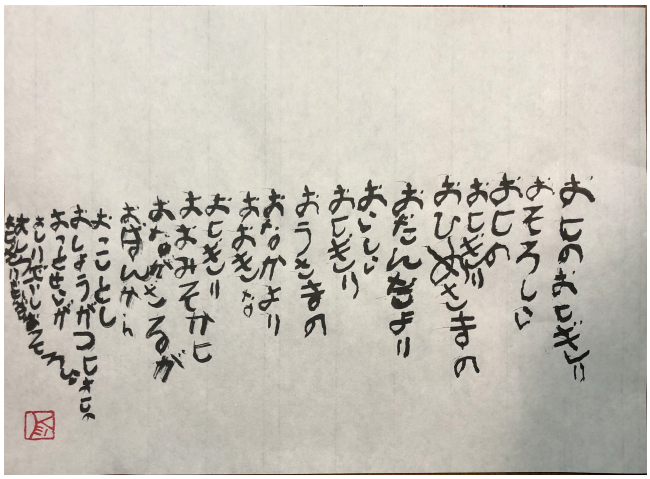
白い紙に向き合う中でどこから書き出すのか，どの字を選ぶのか，どのように紙の中に収めるのか，筆の動かす向きはどうか，どこで墨を付け直すのか，実は書道をやってみると瞬時にそれらの判断をしていることが分かる。文字見本や手本，文章などを見て書いている場合には，目の動き，それを認識して形をとらえ，そしてどのくらいの空間を考えて線をひくのか，など実にさまざまな判断をしなければならない。まさにそれは，瞬時に「自己決定」していることになる。

慣れない筆という筆記用具で，制限のない白い紙に何かを書く，という行為自体，実は「構造化」や「見通し」などを重視した自閉症への支援の中で出会うことのない機会である。ともすれば学校という場では表現活動である美術や図画工作ですら，「手順」にこだわらせ，どの子も同じような作品になってしまうということが起きる。それは彼らが，見通しを持てないと活動できない（もしくは混乱してしまう）と，支援者が（勝手に）想像しているからである。

①黒い墨が容器に入っている，②穂先のある筆を手に持つ，③目の前には白い紙が置かれている，という「状況」ができあがることによって，とくに言語的な指示がなくても，誰しもが自然に「墨を筆につけて紙に書く」という動作が導かれる。さらには，鉛筆やペンのように力を必要としないために，「書く」というよりも「紙の上に置く」という行為だけで，書けてしまう。これが書道の偶然性である。自分が力を入れなくても，するすると書けてしまうので，まだ文字を知らない子どもたちはもっと自由である。そのうち，紙との接点にどれくらい力を入れればどれくらいの細さや太さになるのか，などという高度な力のコントロールができるようになってくる。まさにこれは，道具を通して身体感覚が拡張されている状態である。

Kくんの場合

自閉症のKくんは音声言語がなく，意思表示は笑ったり，声を出したり，拒否したり，などの表現はあるが，なかなか自発的な行動がなかった。18歳から書道にきて現在５年目。演劇の題字などの仕事のオファーも来るようになり，何よりこれまで関心のなかった文字に意味があることを知り，スマホで好きな音楽を入力したり，情報を文字で読み取ることも増えたという。最近では好きな詩を選んで書いているが，かなり細かい漢字も書けるようになっている。さらに，毎回終わった後に自分の書き上げた作品をじっくりと見て，「にやり」とするようになった。まさかの「ドヤ顔」。表情も行動も，変化が多いこの5年間である。「お」という文字の並び方，上段の空間に対し，下は踊るような文字列のあそびが楽しさを強調する。Kくんの作品を見て，「ひらがなっておもしろい！」と思った方も多い。ちなみにKくんの筆はとても穂先が長く実はとても書きにくい。それをここまで使いこなすのだ。書きやすさ，書きにくさというものも，まさに自分だけの感覚である。自分がいいと思ったらよし。これが「誰でも調子に乗れる書道塾」の真髄でもある。



櫻 井 育 子（生涯発達支援塾TANE 代表）
宮城県在住，1979年生まれ。水瓶座。
「違いは魅力」をテーマに発達・心理・文化芸術・教育・福祉のつなぎめをコーディネート。
「つなぎめを学ぶ講座」，「旅する書道塾tane」も開催中。http://ikuko-sakurai.com

対人援助学＆心理学の縦横無尽（34）

サトウタツヤ

1　はじめに

1年前に、本誌『対人援助学マガジン』第46号において、うわさに関する取材対応をまとめる記事を書かせてもらった。その1年後にあたるこの第50号（2022）では、選挙に関する記事について取り上げておきたい。その時「対人援助学＆心理学の縦横無尽（31）」において、最近の私が新聞記者の求めに応じてコメントするときの心構えのようなものを書いておいた。

新聞取材に応じた時、その取材内容が紙面に反映されていないという不満が出る場合が多い。しかし、基本的には報道には報道の自由ということがあるので、どのような文章で記事を構成するか、ということは任せるしかない。それが嫌で多くの人は取材に応じないわけですが、そこは任せる前提でやらないといけない。

サトウタツヤ　2021　対人援助学＆心理学の縦横無尽（31）

この心構えは一年たってもほとんど変わっていない。

なお、今回紹介する記事は、いずれも2022年に行われた参議院選挙に関するものである。一つは候補者のコロナ禍における選挙活動の変化に関するもので、もう一つは若者の選挙離れ（投票率低迷）に関するものであった。この二つの話題はいずれも、候補者の行為選択（握手かグータッチか）と有権者の行為選択（投票するかしないか）に関わるものであるから、分岐点分析を適用できる。分岐点分析とはTEA（複線径路等至性アプローチ）の中のTEM（複線径路等至性モデリング）における分析方法の一つである。分岐点とは複数の選択肢が現れることに他ならない。実現された選択肢と実現されなかった選択肢、というようにカテゴリー化すれば、選択肢が二つあるときの選択を描くことができる（図1）。たとえば、コロナ禍の選挙活動において、グータッチを行う候補者にとって「実現したこと＝グータッチ」であり、「実現しなかったこと＝握手」である。

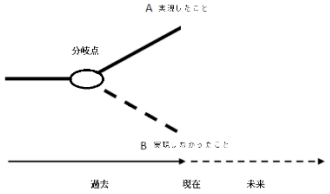


図1　分岐点

ただし、この分岐点における選択は単なる確率事象ではない。候補者がその都度サイコロを振って奇数だったらグータッチ、偶数だったら握手というように決めるものではない（なお、この場合の確率は 1／2 であるが確率を変えたければ 4 以下はグータッチ、5 以上は握手、というような設定もできる）。

分岐点における実際の選択においては、ある選択肢を選ぶのを促進したり抑制したりする様々な力が働くし、選択にあたって選択者が自問自答したり結果の予測をしたりする。それを TEA（複線径路等至性アプローチ）では以下の図のように表す。TEA（複線径路等至性アプローチ）については様々な専門書が出版されているが、最新刊として『TEA による対人援助プロセスと分岐の記述』（安田・サトウ、2022）を紹介しておく。

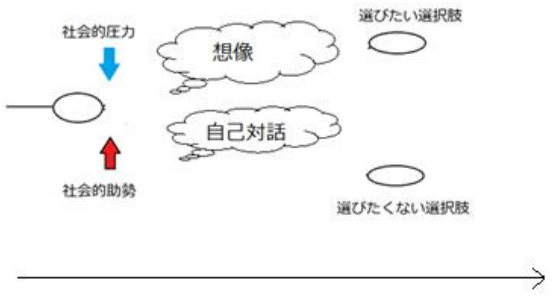


図 2　分岐点に働く様々な力

分岐点では、ある選択肢を促進する力としての社会的助勢、それを妨害する力としての社会的圧力が働く。また、自分の選択の結果を想像することもある。さらにはある選択肢を選ぶこと自体について自問自答する場合もあるだろう。自分自身が自分と対話する「対話的自己」が喚起されるのである。

以下では二つの例について新聞取材に対するコメントを交えながら検討していく。

2　コロナ禍における選挙活動の変化

「手を握った数しか票は出ない」。そんな格言がある“ニッポン”の選挙。参院選（１０日投開票）は、新型コロナウイルス禍から日常を取り戻しつつある中で行われているが、候補者は握手解禁には慎重で、接触の少ない「グータッチ」が主流だ。この新たな様式は、コロナ後も選挙の風景として定着するか。

『京都新聞』2022 年 7 月 6 日付　握手自粛「グータッチ」で票はつかめる？　京都・滋賀の候補者の受け止めは

この記事の問題意識は、これまでの選挙では普通に行われていた「握手」にかわって「グータッチ」が行われるようになっているが、それはなぜなのか？ということである。たとえコロナ禍であっても、握手の効果は捨てがたいように思われるのに、実際にはグータッチが行われている。そのことについて考察したいというのが取材している記者の問題意識である。

新聞記事によれば、コロナ禍前の選挙においては「握手した人の数しか票は出ない」というフレーズに象徴されるように、ひとりでも多くの人の目をみて握手をしてお願いをするのが「どぶ板選挙」の象徴的な選挙活動であったという。さらに、握手をする有権者一人一人の握り方で自分への支持の強さもわかる、という候補者の声もあながち嘘ではないだろう。

この記事に対する私のコメントは

「価値・記号・行為（新聞記事では行動となっていたが正しくは行為である）で考える文化心理学的に見れば、人々は信頼を得るための手段を状況に応じて選んでいる。選挙の候補者は「衛生的に無防備な人」「強引に握手する人」と思われると信頼を失いかねないので、状況に応じた最小限の「ふれあい」を自ら選択しているのだろう。グータッチはこの２年間で築き上げてきたあいさつ様式で、プロ野球・巨人の原辰徳監督が長年選手とグータッチしている姿から、ねっとりしておらず、爽やかというイメージが世間に広がっている。人間の心理としては適応より再適応の方が難しい。コロナの感染がやや落ち着いてきたとはいえ、日本人がなかなかマスクを外さないのと同じように、２年間していない握手のスタイルはそう簡単には戻らないのではないか」

というものであった。

なお、ここで言う文化心理学とは、より専門的に述べれば記号論的文化心理学である。記号論的文化心理学は、ヴィゴーツキーの心理学に由来し、ヴァルシナーによって形成されたものであり、不肖・私サトウタツヤもその活動に加わっている知的な流れである（木戸・サトウ、2019 を参照)。

立候補者が目の前にいる有権者に対して取れる行動はグータッチか握手しか無い、と少し単純化して考えてみよう。この時、グータッチを促進するような力や考え方と、握手を促進するような力や考え方が存在する。そして、握手を促進する力はグータッチを抑制する力として働くことになる。

グータッチを促進する力としては「コロナ禍で衛生に配慮する人のイメージ」「プロ野球・巨人の原辰徳監督が行ってきたので爽やかなイメージ」などがあるだろう。また、握手をすることが「衛生観念がなく強引に握手する人」に見えるということもグータッチを促進することにつながったであろう。一方で握手を促進する力としては、「長年の習慣」、「手を握ることによって得られる効果」などがあるだろう。

立候補者が有権者と向き合った時に自身を売り込むために取りうる行動の選択肢のうち、グータッチなのか握手なのか、はそれぞれの立候補者が判断してそれぞれの行動を起こすものであって、決して確率的な事象なのではない（結果的に確率を計算することは可能だが、それはその行為が選択時に確率的に選ばれたことを意味するものではない）。

さて、ここまでは分岐点における選択をプロセス（過程）の観点から扱ってきたが、次にストラクチャー（構造）の問題として考えていきたい。ここで TEA（複線径路等至性アプローチ）の構成要素として自己モデルを表す発生の三層モデル(Three Layers Model of Genesis；TLMG)が有用である。TLMG は、開放系としての人間が記号を媒介として外界と相互作用する際のメカニズムを 3 つの層として仮説的に考えるもの（図 3）であり、層と層の境目は細胞膜のようなものであると仮定する。中心の第 3 層は価値、第 2 層は記号（促進的記号が発生すると考える）、第 1 層は行為の層を意味する（なお、新聞記事には行動、となっていたが理論上は行為である）。

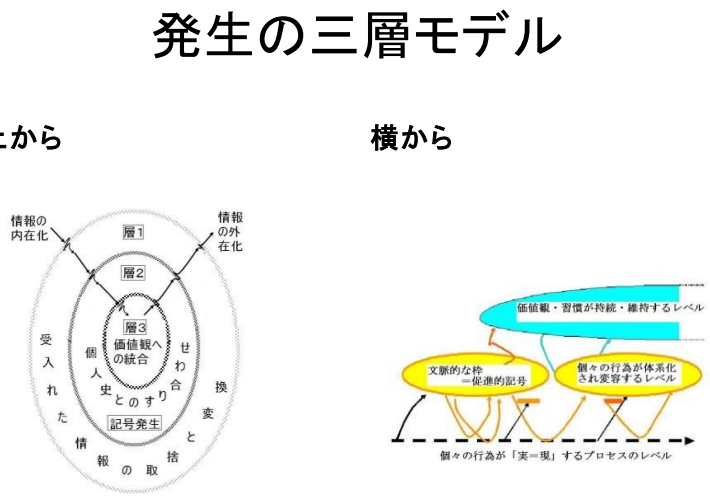


図３　TLMG(発生の三層モデル)

もともと問題になっていた立候補者の二つの行為は、有権者に対して（1）グータッチをするか、それとも、（2）握手をするか、という問題であった。こうした行為は、風が吹いたら目をつぶるというような古典的条件づけにおける無条件反応ではないし、たまたまいくつかの行動レパートリーの中から偶発的に行われるものでもない。立候補者には何らかの価値や信念があり（自身の人柄や政策を立候補者に知ってもらい投票につなげる）、そのために何をするのか、ということにそって行為が選択されるのである。価値が行為に直結して何らかの行為が選ばれるという考え方もありうるが（価値－行為直結

説）、記号論的文化心理学においては、価値と行為を結びつける中間レベルとして記号のレベルを置くのが価値・行為の記号媒介説である。

人はある価値に基づいて何らかの行為をする際、文脈的な枠付けを勘案して記号が発生し（促進的記号）、行為が行われる。ここで文脈とはその時その場の１回性を持つものである。コロナ禍前の選挙運動であれば、迷わず握手をするというのが文脈的枠付けであったが、コロナ禍における文脈的な枠付けは、グータッチということになる。候補者にとって握手することは目的ではない。自分の人柄をアピールして信頼を得、願わくば自身への投票に結びつけたいということなのだから、握手をすることで衛生観念が無いと思われるようでは本末転倒になってしまう。ここで価値・記号・行為の三層構造において、記号の果たす役割がある程度明確になる。図３の一般的なモデルを選挙候補者の「握手」「グータッチ」選択に特化したTLMG(発生の三層モデル)が図４である。

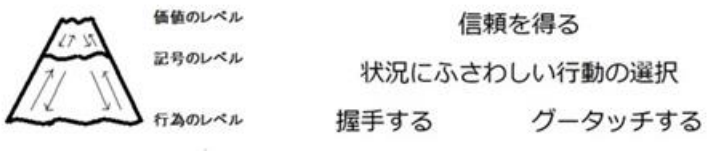


図４　「握手」「グータッチ」選択に特化したTLMG(発生の三層モデル)

コロナ禍における立候補者は、信頼を得るという価値を実現するために、コロナ禍という文脈の枠付けのもとで、何らかの記号を発生させ、具体的な行為を選んでいたということになる。具体的にはグータッチを選んだ候補者が多かった、ということになる。

3　若者の選挙離れを食い止めるには　候補者の不実が問題ではないか？

選挙結果とともに議論の対象となる投票率は、１０日投開票の参院選でも注視されている。なぜ選挙で投票しないのか。昨秋の衆院選を棄権した有権者の声に耳を傾けてみると、候補者に対する期待の低さや政治への不信感などが投票所に足の向かない要因となっているようだ。投票率向上に向け、識者は投票に至るまでの「負担」を減らすよう提案する。

これが当該記事の冒頭部分（インターネット公開）である。

『京都新聞』　参院選　選挙の現場　　2022年7月10日

参院選、なぜ投票しない？京都の有権者の声に耳を傾けてみると　10日投開票
https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/832742

この記事に対する私のコメントは、

投票しない人の心理状況について、立命館大のサトウタツヤ教授（社会心理学）は「新しいことを始めるのは何事もおっくうになるのと同じで、投票が習慣化していない人は投票行動とそのための時間調整、投票先を一つに決めるという『負担』がある」という。

投票行動につなげるには、電子投票の導入や、選択を支援する施策などで「負担」を減らし、投票結果の「効果」を上げることが必要だとした上で、「政党や候補者が、年金問題など高齢者ら投票に行く人向けの公約を重視し、結果的に悪循環になっているのでは。マスコミは投票率の是非だけではなく、投票先をフラットに決められる支援にも力を入れてほしい」と語る。

というものであった。図１，図２を有権者の投票行動について当てはめて考察したものになる。有権者の行動は、投票するかしないか、であり、どちらかが実現することになる。今、投票する、を「実現しないこと」にして考えて見れば、何が投票行動を抑制したのか、何が投票しないことを促進したのか、を考えることになる。

妨害する力が強く促進する力は弱い。自分の行動（＝投票）効果の予期も弱い。こういう状況であるから投票に行かないという行動を取る人が多いことは分かるであろう（ここで、「行かない」が行動であることを訝(いぶか)る人がいるかもしれないが、行動することもしないこともいずれも行動だと考えるのが徹底的行動主義の考え方である）。

アメリカ初期の有名な心理学者であるウィリアム・ジェームズは、私たちの生活において習慣が果たす役割について述べている。彼曰く、日常行為１０００のうち９９９までが習慣であるが、それは生得的なものではなく身につけるものである。ある行為を行う時、最初は困難であっても、次第に習熟し、習慣化される。そして、習慣は天性の１０倍であるとも言っている。天性・天与の稟質(ひんしつ)・生得的なもの、どのような言葉でもいいが、私たちは生まれつきが大事だと思いがちなのであるが、ジェームズは、実際的習慣、情緒的習慣、知的習慣などが、略、我々を運命の方へ導いていく、と延べ、優れた習慣を身につけることが重要だとしているのである。

投票がそこまで重要なのか、ということは議論の余地があるものの、現在の日本のような民主主義国家・法治国家にとって、法律を作る国会議員を自分たちの手で選ぶことは極めて重要であるから、投票行動も重要だということになる。

現在の日本のような若者の投票離れという現象がある状態で、世間やマスコミは若者叩きをしがちであるが、ここで大事なのは投票行動を促進することである。発達心理学の言葉で言えばスキャフールディング（Scaffolding；足場かけ）、行動経済学の言葉で言えばナッジ（nudge）、記号論的文化心理学の言葉でいえば促進的記号が必要な状況となる。たとえば、決められた時間に決められた場所に行かなければ投票できないというのは極めて負荷がかかった状態であるから、それを和らげるような試みがあってもいいだろう。また、各種の投票にスタンプラリーを導入するのも良いかもしれない。 市の選挙、県の選挙、国の選

挙を３つやったら、何かもらえる、的なものである。何ももらえなくてもコンプリート自体が楽しいということがあるかもしれない。

もし、投票行動が本当に大事だと思うのであれば、関係者は効果的なスキャフォールディングやナッジや促進的記号については、若者自身の声を聞いて様々な政策として実行していく必要がある。

さらに、投票を抑制する候補者側の要因についても考えてみたい。まず、多数の中から一つを選ぶという選択自体が難しい。これは商品やサービスの選択にも言えることであるが、複数要素を比較して総合的に１つを選ぶことは、それが家や車のように楽しみであればともかくそうで無い場合には認知的負荷が高くなり選択自体が苦痛になると言える。選挙の場合は、争点という形で考慮すべきポイントがメディア等によってわかりやすく示されている。たとえば、2022 年の参議院選挙は、公示日の『京都新聞』2022 年 6 月 22 日付によれば、「物価高や安保、改憲が争点に」とのことであった。もちろんこのほかにもコロナ禍対策や社会保障や教育の問題もあるから、実に多くの論点を総合的に考えて誰か一人を選ぶ必要がでてくる。

これを候補者の視点から考えるなら、他の候補者との政策上の差異を出しながら自分への投票を促す必要がある。しかし、図５を見てほしい。『東京新聞』７月５日付に掲載された東京選挙区の二人の自民党候補者の「新型コロナ」に関する政策アンケートへの回答である。



図５　二人の自民党候補者の政策アンケートへの回答
https://lifesimplelive88.com/talent/7236/

これをコピペと言わずして何というのか？おそらくは自民党関係者が作ったひな形を流用したため二人の回答が似てしまったのだろうが、このようなことを大学のレポートでやったら大変なことになる。このようなコピペ回答をみた大学生の有権者がしらけてしまうのは当然のことであろう。

このほか、以下では候補者の政策表明の不誠実さとして「無回答」問題を取り上げてみたい。具体的には、選択的夫婦別姓、同性婚への態度について見ていこう。サイボウズ社長の青野慶久氏が運営する「夫婦別姓・ヤシノミ作戦；https://yashino.me/s2022/」にこの二つについての賛否の回答がまとめられているので参考になる。地方区 49 名の自民党候補者のうち、選択的夫婦別姓及び同性婚に対する質問に無回答だった者が 32.7%、前者のみ無回答が 14.3%、後者のみ無回答が 22.4%であった。つまり、少なくともどちらかの問いに無回答だった候補者が約 7 割という驚愕の結果であった。どのような論点であっても意見は賛否あって良いし、それを選挙の有権者に訴えることについて現状の日本での問題点はない。夫婦の姓について言えば、現行法の制度を残したいという人（夫婦同姓）がいること自体に問題はないし、現行法を変えたいという人（選択的夫婦別姓もしくは夫婦別姓）がいることにも問題はない。その政策について有権者が判断すれば良いのである。しかし、今回の集計からは、政権を担う政党の立候補者のうち 7 割の候補者が態度を明らかにしていなかったことが明らかになっている。こうしたことは大きな問題であろう。

さて、これらの問いに対して無回答である理由は、「本来、選択的夫婦別姓、同性婚に反対だが、それを表明すると問題になる」から無回答にしていると考えられがちであったが（上記、ヤシノミ作戦ではこの立場を取っているようだ）、分析をしてみると必ずしもそうではなく、「本来、選択的夫婦別姓、同性婚に賛成だが、それを表明すると問題になる」から無回答にしている候補者が少なからずいることが推定された。いずれにせよ、不誠実であることには変わりがない。若者の関心が高いこの手の話題について、無回答を許すようなことで良いのか、考え直す必要がある。若者に関心の高い論点への意見を表明しない候補者が多いことは、若者の関心をそぐ結果になっていることは明かであろう。

若者が投票に行かないことが問題なのか、若者が投票に行かない環境を作っていることが問題なのか、筆者は前者だけということはあり得ないと考える。メディアは後者の可能性についてもしっかりと考えて報道してほしい。

付記・長らく連載を続けてきたが、50 号を区切りに『対人援助学マガジン』を卒業します。ご愛読、ありがとうございました（本誌本号の近況報告を参照）。

文献

木戸彩恵・サトウタツヤ　2019　文化心理学　ちとせプレス
サトウタツヤ　2021　対人援助学＆心理学の縦横無尽（31）　対人援助学マガジン, 46, 97-99.
https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/14.pdf
安田裕子・サトウタツヤ　2022　TEA による対人援助プロセスと分岐の記述　誠信書房

新聞記事等

『京都新聞』　参院選　選挙の現場　2022 年 7 月 6 日
握手自粛「グータッチ」で票はつかめる？　京都・滋賀の候補者の受け止めは
https://www.kyoto-np.co.jp/articles/gallery/829474

『京都新聞』　参院選　選挙の現場　　2022 年 7 月 10 日
参院選、なぜ投票しない？京都の有権者の声に耳を傾けてみると　10 日投開票
https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/832742
夫婦別姓・ヤシノミ作戦　https://yashino.me/s2022/

対人援助学マガジン

第４回　執筆者トークライブ実施報告



2022 年 8 月 19 日（金）の 21 時から 23 時、「対人援助学マガジン第 4 回トークライブ」が開催されました。第 4 回の話者は「きもちは、言葉をさがしている」を連載中の水野スウさんです。

前半は水野スウさんのトークライブで、連載のテーマでもある「紅茶の時間」のはじまりからお話頂きました。「紅茶の時間」が水野さんの暮らしのあり方とともに少しずつ変化しながら、出会った人たちとの対話・交流を積み重ね、“個人（Be）として尊重される”ことの土台としての「けんぽう」も含みこんでいく過程について、ひとりひとりの実感に届く形で丁寧にお話頂きました。後半は水野さんのお話を受けて、参加者全員がひとことコメント（感想、質問、意見など、何でも一言、チャット機能を使って共有）を出し、そのコメントをめぐって話者もフロアも一緒になって話し合う時間となりました。まさに、水野さんがいつも行っておられる対話と平話が実現する場になりました。参加者の方からたくさんの感想を頂きましたので、いくつか取り上げさせて頂きます。たくさんのご参加、本当にありがとうございました！

- ✧　とても染みいるお話でした。紅茶の時間の雰囲気が伝わってきました。憲法のお話、語りを変えると全然違うものに感じます。
- ✧　紅茶の時間が元気じゃないときに行ける場所　ということがとてもすきで、わたしは　元気じゃないときに会えるひと　になりたいな　そんなふうに思いました
- ✧　Do の前に Be があると言うこと、とても大切な中身を持っているように思います。また、今そのことがどれほどにないがしろにされているのかと、強く思います。

執筆者トークライブは年 2 回の開催を予定にしており、第 5 回のトークライブは 2023 年 2 月頃に企画する予定です。引き続きよろしくお願いいたします。読書会やトークライブの開催情報については、Facebook や Twitter などの SNS でもお知らせ致します。

◆マガジン公式 Facebook　https://www.facebook.com/taijinenjyogakumagazine
◆マガジン公式 Twitter　https://twitter.com/taimagahenshubu

◆第 6 回読書会のご案内◆

対人援助学マガジン第 6 回読書会を下記の要領にて開催いたします。

読書会では、指定図書を事前に読んだ参加者が集まり、読書を通して得た気づきや感想、意見を共有することで、より深く、より広く、マガジンを楽しむことができればと考えています。

期日：2022 年 11 月 24 日（木）　21 時から 23 時

定員：10 名程度（先着順）

指定図書：「応援、母ちゃん！ -はたらく母親たちの日常-」　（最新 50 号　10 回連載中）

※当日までに指定図書の最新号を読んでおいてください。

※可能な範囲でバックナンバーおよび前の連載も読んでみてください。

執筆者：玉村　文 氏

地域若者サポートステーションを経て、現在、南青少年活動センター勤務、アフターケア担当。33 歳で初めて出産し一児の母。母親業と対人援助の仕事をしながら生きる日常を書いていこうと思います。趣味は、ヨガとイラスト描き（対人援助学マガジン 41 号執筆者短信より抜粋)。

ご自身の子育てを題材に、子育て場面の「あるある」を描きながらも、連載のテーマでもある「応援」や、他者の助けを受け止める力「受援力」など、援助職の視点も交わり、まさに援助職者の子育てのリアルがあふれる連載となっています。今回は玉村さんの連載をきっかけに、読んだ感想や意見、質問などを通して交流する機会になればと思います。

申込方法：

お申込みはメール：takashi_otani7929@yahoo.co.jp まで、件名を「読書会参加希望」としてお送りください。開催期日が近づきましたら、Zoom ミーティングの情報をお送りします。

（編集部）

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

酷暑から逃れ、コロナ禍を避け、台風をすり抜けながら、今（9/8）までのところを過ごしています。皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

対人援助学マガジンが第５０号を迎えました。創刊時にこんなに続くとも、続かないとも思いませんでした。自分が飽きなければ、継続に無理のないシステムを構築してスタートしたので､結果的によくぞ１３年もと思うだけです。

最近も、「読者から声をかけられて･･･」なんて喜びの声を執筆者から聞きました。私は　「そうでしょう・・・」、と心の中で一人充たされた気分でいます。このようにセッティングしておけば、時間はかかりますが、そうなるに決まっていると思っているからです。

少し一般化してみると、多くの人が一生懸命なのに、なかなか報われません。入れ込みすぎて結果的に傷ついたり、二度とあんな無駄な労力を費やすことはしないなんて呟いていたりします。それを私は、確かなことばかり集めようとしすぎた結果だったり、失敗する方法を選んで頑張っているのではないかと思っています。

何かを成功させたいなら、選択には注意を払うことです。その方法の一つが、正しいことではなく、役に立つことを始めることだと思います。言い換えると、客観的根拠に依存しすぎず、自己責任の主観でスタートしようということです。達成の可能性はどちらにしてもたかがしれています。ならば自分起点が一番ではないかと思うのです。

＊

今号からも３人の新連載があります。５０号を数えるのをきっかけにお声かけしてみました。執筆卒業の方、休載の方、復帰の方と様々です。長期連載中の「幼稚園の現場から」には、動画を組み込んだ新たな紙面が展開されています。

マガジンを読んでいただく機会のあった方達を、何らかの意味で応援できていたら、それに勝る喜びはないと思います。

編集員（チバ　アキオ）

出身地である秋田の文学資料館で名誉館長と１時間ぐらいお話をする機会に恵まれた。伺うと住井すゑや、雑誌『種蒔く人』を創刊した秋田生まれの小牧近江（こまきおうみ）の研究をされてきた方だった。「橋のない川」の話から始まり、私が関西に居る中で住井さんが出したテーマで感じていることがあるか？など様々な話題に広がった。

雑誌『種蒔く人』は反戦、半階級社会をテーマにプロレタリア文学を形成していく契機にもなったと理解している。同じく秋田出身で『蟹工船』著者、小林多喜二の獄中死に象徴されるよう厳しい弾圧も受けた。雑誌『種蒔く人』は発禁処分も 4 回、資金難もあり休止、再刊を繰り返しながらも、関東大震災時の人権侵害・迫害事件に抗議し、文字通り、様々な種を蒔く活動に終始した。その後の世界を私たちは今生きている。

対人援助学マガジン創刊以来編集長を務める団士郎先生は講演や紙面や作品を通じて「木を植えた男」という作品を紹介してくださった。1953 年発表フランスの作家ジャン・ジオノの短編小説で、1987 年にはフレデリック・バックの監督・脚本でアニメ化。アカデミー短編アニメ賞受賞他多数受賞している。先生のお話で私もこの作品がとても好きになった。

木を植えた男も、種を蒔く人も、未来を見ながら、そして今を見て、自分ができることをしている。５０号となった対人援助学マガジンも、編集長の京都にある事務所で創刊号の編集会議から始まった。そこでは団編集長がいつも話してくださる言葉も私の頭によぎっていた。「しておくべきことをしておくこと」「あの時こうしておいたら…は成り立たない」という言葉である。そして、もう一つ。費用対効果のようなもの、「リターンのようなものを短い期間で求めすぎない」という言葉も繰り返し、説いてくださっていた。「やったら面白そうだからやる」「必ずこうなるはない」そんな中でのスタートだった。

未来に目を向けて、木を植え、種を蒔く、それを続ける。そんな活動は、身のまわりにはいくつかあるだろう。参加したり利用したりするのはもちろん、時には木を植える、種を蒔く側になるのもいい。そ

の一つ対人援助学マガジンは今のところ、発禁も弾圧も受けていない。できる時代にしておくこと、できるめぐり合わせでしておくこと、そんな価値も強く感じた名誉館長とのお話でした。

編集員(オオタニ　タカシ)

対人援助学マガジンの記念すべき 50 号を、いつもと変わらない編集会議を経て発行できることを心から喜んでいます。技術革新が速まった現代、流行りも廃りもあっという間にやってきます。そのような時代にあっても 10 年以上の間、同じスタイルで、しかし発展も遂げながら今日を迎えることができたのは、驚くべきことです。発刊時点での構想が的確であったのは事実でしょうが、とは言え、新たに執筆者に加わってくださった皆さんや、読書会・トークライブなどの新しい試みを面白がって参加してくださる方々もあって実現できている現在だと思います。そう考えると、マガジンは執筆者だけではなく読者の方も含めて作られている場であるとも言えます。執筆者と読者とで、立場や権威に違いがあるわけでもなく、何かの既得権が生じているわけでもなく、ただ人が育っていくためのプラットフォームとしてマガジンが機能し、自身もその一部に関われていることが嬉しいです。

　コロナによる移動規制もなくなってきたので、また執筆者訪問記も再開したいですし、読書会やトークライブでお目にかかった人たちと直接お会いする機会も持ちたいなと、楽しみが膨らんでいます。

対人援助学マガジン

通巻50号

第13巻　第2号

２０２２年９月１５日発行

http://humanservices.jp/

■ご意見･ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第51号は2022年12月15日
発刊の予定です。
原稿締切2022年11月25日！

執筆者募集

　本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

　自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

　ページ制限なしの連載誌です。必要な回数も、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

　執筆資格は学会員であること。　現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021
大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL&fAX学会専用　06-6910-0103

表紙の言葉

　夏が違ってしまったのは歳をとったせいだなぁと思った。昔だって暑かった。でも、息子達とキャンプに行こうとか、四万十川をゴムボートで下ろうとか、当たり前に思っていた。自分がそんな風に育ってきたからだろう。

　この絵は不登校の子達を琵琶湖一周サイクリング（四泊五日）に連れだしていた頃のヒトコマ。キャンプファイアーを囲みながら、ダベったりカラオケしたりして夏を満喫していた彼ら。

　それを見てると嬉しくなったのは、自分もそうだったし、わが子達もそうだったから、きっと彼らもというものだった。

　病気ではないのだから何かを取り除くより、体力同様、これからの人生のステージを、より豊かにする体験を今積ませておいてやることだと思っていた。

団士郎　(2022/9/15)